東方凶鳥記

白と黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方凶鳥記

【Ｎコード】
Ｎ１６２３Ｕ

【作者名】
白と黒

【あらすじ】
気が付けば死んでて・・・。しかも、その理由が神様のミス。
なんだかんだあって転生させてもらえるらしい。
種族は化け物。おもしろそうだからこれにしてみた。
自分で選んでおいてなんだが、化け物ってなんだ？
とりあえず、頑張るか。（全員のご意見や要望をお待ちしております）
ＰＶ２００万　ユニーク１５万突破！！とうとうここまで来た！

ちょっと長いプロローグ：どうやら俺は死んだらしい（前書き）

この小説は「こんなキャラがいたらおもしろいんじゃね？」という感じで作られてます。
それと、作者は東方キャラのことをよく知りません。その辺を承知してください。

ちょっと長いプロローグ：どうやら俺は死んだらしい

「すいませんでした！！！」
「……幼女？」

急に何を訳のわからないことを、と思ってる人達のために説明しよう。
これは数時間前のことだ……。

俺はしがない高校生だ、名前はまだない……いや、嘘だからな？ちゃんとあるぞ？
ちなみに、名前は凶道　進という。
……親につけてもらっておいてなんだが、あまり好きな名じゃない。
まぁ、家は色々とやばい家系らしいから仕方ないらしい。

「あ～、今日も平和だな～」

今、俺の横で話しているのは友人だ。名前？そんなもの友人Ａでいい。

「……そうだな、だがそれでいいと思うぞ？」（↑俺）

「そういってもな～、こう平和だと暇じゃね？
なんていうか、こう……刺激が欲しいんだよ！」

「そんなものはいらん。俺は平穏な日々が続くのが一番だ。」
「でもよぉ～……ん？」
「どうした？」

俺の友人Ａは何かに気づいたようで車道のかなり前のほうを見る。

「なぁ、あれヤバクね？」といいながら俺の友人Ａは車道のかなり前のほうに指をさしながら俺に聞いてくる。
俺も前のほうを見ると……
なんと、ボールを拾おうとしてる子供（たぶん５．６歳くらい）に車が突っ込んできてるのだ。
しかも、突っ込んできてるのは霊柩車。
縁起でもない。しかも速い！？おかしいだろ！？
ここからあそこまで大体３０メートルくらい。俺なら助けられるが……

１・助ける

２・放っておく

３・そんなことより寝る

……いや待て。３番だけおかしいぞ！？
２番は……見殺しにするのもなぁ……じゃあ、１？
でもなぁ……今日の荷物多いんだよなぁ。
下手したらあの子供助けて俺も死ぬ、なんて事も……
とか悩んでる間に２０メートル。
ちなみに、１０メートルしか進んでないのは俺の考える速さが異常じゃないからだ。ええい！もういい、助ける！
ダッ！という音と一緒に俺が走る、もう少し……よし、間に合った！

俺は幼女を抱え横に投げた。（ちなみに、幼女は混乱していた）
そして、俺も逃げようとしたが、残念！何故か霊柩車の速度が速くなって間に合わなかった。
ドゴッ！という音が聞こえて俺の視界は暗くなっていく……。
最後に見たのは俺の所まで走ってくる友人Ａと、やっと現状を理解して泣いている俺が助けた幼女だった……。

で、目が覚めたら土下座している幼女がいた。
髪の色は茶色。目もそんな感じだ。
ちなみにかなり可愛い。抱き枕にしたいくらいだ。

「あの～……。」
「……なんだ？それとここは何処で君は誰だ？迷子か？」
「えっと、まずここは、わたしはの部屋です。
それで、わたしは迷子ではなくてですね……、あなた方のところで言う神です。」

Ｗｈａｔ？なんでこんなところにいるかわからない上にこの幼女、自分が神だと言いはじめたぞ？大丈夫なのか？頭が？

「……そんな痛い子を見るような目で見ないで下さい。」
「まぁ、１００歩譲って君が神だとしよう。何故俺は君の部屋にいるんだ？」
「それはですね、わたしのミスであなたが死んでしまったので……。」
「……ああ、そういえば死んだな。……ん？ちょっと待った、ミス

？」

「はい、実はですね勤務中に名簿にお茶をこぼしてしまいまして・・その名簿が

「わたしが担当している人間の皆さんのものでして……。運悪く、あなたの名前のところだけにお茶がこぼれてしまいました。」

「つまり、俺はお茶に殺されたのか。」

少しショックだ。

「うぅ……すいません……。それでですね、もし貴方さえよければ他の世界に転生させようかと思うのですが……。」

「……なに？生き返れるのか？」

「はい、ただし元の世界には帰せません。元の世界でのあなたは死んでしまったので……。だから、人生を一からやり直す感じです。」

まぁ、そう上手くいかないわな。

「別に構わんさ、じゃ、すぐにやってくれ、場所は君に任せるよ。あ、ただ、必要最低限のことはできるようにしてくれ。あと、可能なら俺が今まで習った技や術が使えるようにしてくれ。」

「わかりました。種族は人間・妖怪・神・化け物・とありますがどれにしますか？」

人間は飽きたからなぁ。妖怪は見た目が気持ち悪くなりそうだし……。

神はいやだなぁ。だって目の前に幼女神というある意味とんでもない神がいるからな。
俺もこんな感じにされそうだ。
化け物……おもしろそうだな。これにしよう。

「化け物にしてくれ、性別は男にしてくれ。」
「わかりました。では、いってらっしゃいませ」

幼女神がそういうと、扉が現れる。

「いってくる」

こうして俺はまだ見ぬ世界に旅立った……。

ちょっと長いプロローグ：どうやら俺は死んだらしい（後書き）

発投稿！頑張ったぜ！結構つかれた。
次は凶はじめての世界でが頑張る話

第1話：転生先は東方（前書き）

ども～、やっと転生しましたね～。
まぁ、前書きも面倒なのでどうぞ読んでください。

第1話：転生先は東方

「ん……。」

目を覚ますと、知らない天井だった。……いや違う、天井でさえなかった。目の前に広がるのは満点の星。

自分は寝ているようだ、だったら早く起きるかな。

「どっこいしょと……。」年寄りくさい声とともに立ち上がる。

「ん～……ここはどこだ？確か幼女を助けてを死んで……ん？死んだ？」

と、俺は思い出す。

「そういえば死んだから転生させてもらったんだ。

えっと、確か死ぬ前に種族を選んだ気が……そうだ、化け物。」

……いまさらだけど化け物ってなんだ？妖怪とたいして変わんなくね？

「ハックシュ！……う～……寒。」

今気づいたけど下しかはいてねぇ。

上は？なんで着てないんだよ……夜だぞ？風邪引くじゃねぇか……

「文句言ってもしょうがない。洞窟かなんか探すか。ある程度なら風も防げるだろ。」

そんなわけでレッツ，ゴー！

……ただいま捜索中……

なんだかんだあって見つけた。よかった～。

「やっぱり外よりはマシだな。とりあえず、朝まで過ごすか。少し疲れたし。」

そして俺はまぶたを再び閉じる……

ーーーーSide幼女神ーーーー

「はぁ……」

あの方が行ったあと私はまだ悩んでいた。
自分のミスで死んでしまったのだ、つまり、殺したのは自分になる。
転生させてもらうことにしたが不安になる。

「大丈夫でしょうか……。」

一応、彼の要望どうり、種族は化け物にした。
…個人的には、化け物って何?というツッコミがほしかった……。
化け物の容姿は性別以外はランダムで決まる。さらに言ってしまうと中途半端に不老不死なのだ。
自分で本気で死を望まないかぎり死なない。そして……

「神様!」
「ッ!?どうしました!」

考えていると自分の部下がドアをおもいっきり開けて叫ぶ。

「以前神様が暇つぶしでやってた人間のゲームの世界が完成しました!
名前は……東方でしたっけ?それがついに完成しました!」
「そうですか……はぁ〜……」
「どうしたんですか。あの時は「頑張って創って幸せな世界にする!」と、はりきっていたのに……」
「今はそんな気分じゃないんです。それに、どうせ生命はまだ誕生していないんでしょう?」
「いや、実はもういるんです、一匹だけ。あ、他にも植物とかがありました。」
「エッ!?」

わたしはその時驚きました。なぜなら世界ができて生命が誕生するのはすくなくても千年は必要なのです。
しかも、神の力を借りて千年です。完成してからまだ一日もたってないのに、そんな……

「ん？少しまってください。その誕生した生命はどんな容姿でしたか？
それと、前世ははどんな風に育ったかわかりますか？あとは死因を。」
「容姿は……ニワトリですかね。ただ、人間の男の体ですが……。」
わたしはその時少し妙だと感じた。あの方がいったあとどんな容姿になるか気になってみたのである。
そしたら、人間の男と、ニワトリが合体したような容姿だったからだ。

「……前世は、裏の家系のようですね。あまり人間の社会で目立たないようにしていたようです。
ついでに死因は――――。」

わたしは少し焦った、あの方の家系などは知らなかったが、もしかして……

「――――霊柩車に轢かれそうな子供を助けて自分は死んだようです。」

やってしまった……ｏｒｚ
どうやら世界はだいぶ前に完成していたらしい。
それに気が付かないで、適当に世界を選んだら東方というゲームを

もとにした世界に飛ばしてしまったらしい。

「少し用事が出来ました。紙とペンを用意してください。それと、小さな鏡と大きな封筒とナイフ、最後に……その世界に交渉する準備を。」

「……わかりました。すぐ準備してきます。」

そういってわたしの部下は扉を閉めて出て行った。

「せめてこれぐらいはしないと……。」

そういって幼女は準備が出来るまで待った。

ーーーSide凶ーーー

「ん……。」

目が覚めたので外に出てみると朝日が気持ちよかった。少し寒いが、昨日の夜よりはマシだ。

「さて、これからどうするかな……ん?」

なんとなく空を見上げながらつぶやくと上からなにか落ちてきている事に気が付いた。……風呂敷か?

「おっと……。」

ナイスキャッチだ。俺。

「……開けて見るか。」

中身が気になったので開けてみることにした。開けてみると中には手紙が入っていた。ご丁寧に封筒つきで。

「これは……あの幼女神か？なになに――――。」

「　　わたしのミスで死んでしまった人へ
本来ならこちらから出向いてそちらに行きたいのですが、神が世界に入ることは禁じられています。だから、世界に頼んで、そちら側にこの手紙を送ってもらうことにしました。
まずは言わせてください。すいません。
その世界はわたしがあなた方人間たちが作ったゲームをもとにして創った世界です。本来はそこではなく、別の場所へ転生させるのですが、わたしの手違いでそこに送ってしまいました。
さすがに、気づいているかもしれませんが、その世界は創ったばかりなので生命は殆ど誕生していません。
精々植物があるくらいです。
わたしがなんとか世界に頼んで植物以外の生命が誕生する時間を千年から五百年にしてもらいました。五百年たったあと、人間が誕生するのは五十年後にしてもらいます、あと、もしもの時のために、手紙と一緒にナイフを五本入れてもらいました。
そのナイフは感情によって形が変わります。わたしが力を込めたので折れません。

あと、そこが東方の世界であるなら、あなたは何か能力があるはずです。自分の意識を集中させてみてください。そうすれば、なんとなく頭に浮かぶはずです。運がよければ2つ能力があるかもしれません。
そして、その世界では霊力・妖力・魔力・神力の4つがあります。
あなたは、神ではないので神力だけありません。
霊力は人間が持ってる力です。使い方は様々ですので自分でお考えください。
妖力は妖怪が持ってる力です。主に化けるのに使ったりされています。攻撃もできます。
魔力は……魔法が使えると考えてください。妖力より少しだけ威力が高いですが、少々使いづらいです。
神力は他の3つより使いやすいです。でも、信仰をされなければいけません。
神力以外は年月を重ねるごとに上ります。
あなたは中途半端に不老不死です。心のそこから死にたいと思わないかぎり死にません。死ねません。
最後に、鏡を入れておきました。それで、自分の姿を確認してください。

神より」

……なんと言うか……まじめで優しいな。ここまでやらなくても俺は構わんが……

「……まぁ、とりあえず手紙に書いてあったものを見てみよう。」

まずはナイフ。

普通のナイフだ。特にこれといった力も感じられない。確か感情を込めると変化するらしい。戦う時がきたらやってみよう。
次は鏡。
シンプルな鏡だ、大きさは少し小さいくらい。
さて、俺はどんな面になってるかな？……え？なにこれ？にわとり？
そこに映っていたのはどこかで見たことがあるニワトリだった。確かこれは……

「……クックル……。」

そう、あの有名（？）なＡＡキャラの内の一匹、クックルである。
……気のせいか、かなりかっこいい気がする。

「まさかあいつになるとは……。まぁ、いい、気づかなかったが足も鳥の足になってるし。これでキックとかされたら痛いだろうな。」

改めて自分の姿を見てみたが男としてはかなりいい感じである。まず体、それなりに筋肉が付いてる。
そして穿いているのは袴のようなものだ。足はにわとりの足だ。ただし、デカイ。人の頭を足で鷲掴みにできるくらの大きさだ。

「こんなもんか……。」

とりあえず今日は食料と水の確保だな。サバイバルの基本だからな。

「……行くか。」

そう言っておれはナイフと鏡をポケットに入れた。ポケットかどうかわからないが、たぶんポケット。

ーーーーただいま捜索中ーーーーー

嬉しいことに水は見つかった。すぐ近くに湖があったのだ。
食料は木の実やらキノコがあった。肉はなかった、当然なのだが…
…。

そのあと洞窟に戻って採ってきた物を食べて寝た。

第1話：転生先は東方（後書き）

自分で書いておいてなんだけどよくわからない。
そのうち、主人公の家系や育ちを書きたいと思う。
次回は主人公が修行する。

第2話：自分の能力と修行（前書き）

修行しよう
今回は俺も出るぜ！（すこしだけ）

第2話：自分の能力と修行

「そうだ、修行しよう」

何を言っているんだ、お前は。

「いや、五百年ちかく話し相手を待たなければいけないのだから、その間修行でもしようかなと……」

なるほど、暇つぶしか。

「その通り、昔やったゲームでクックルはかなり強かったからな。それくらい強くなりたい。」

ああ、あれか。個人的にはモララーが好きだったかな。一撃必殺があったし。

「たしかにあれは強かった。しかし、溜めが長かったじゃないか。」

その辺は相手が倒れてるとき何とかする。

「なるほど、しかし――――」

「……俺は誰と話していたんだ？」

朝から電波を受信していたようだ。次から気をつけよう。

「さて、修行だ。クックルなら主に肉弾戦を中心に修行しよう。……そういえば、まだ自分の能力を確認していなかったな。今から確認してみるか。」

そう言って俺は意識を頭に集中させる。……出た！しかも、運がいいことに二つ。

一つ目は……　　ーーーー『潜るか浮く程度の能力』

ーーーー

……Ｗｈａｔ？わけがわからん。潜る？地面にか？・・試してみよう。「潜れ」と頭で念じてみる。

「出来た！」

潜っているのだ。地面に。

「これはなかなか便利だ。敵に攻撃されそうになったらその辺に潜るか。」

実に面白い能力だ。どんどん潜っていく。もう一度言おう。潜っていく。現在進行形なのだ。さらに俺は気づいた。

「どうやって出ればいいんだ？」

まずい！このままだと生まれ変わったばかりなにに死ぬ！どうすればいい！？

ん？待てよ？浮くことも出来るじゃないか。焦って損した。

「ふ～、さて次はもう一つの能力を確認するか。」

二つ目は……　　ーーーー『想像したものを創造する程度の能力』ーーーー

……うん、これはなんとなくわかる。試してみるか。

頭で創造したいものを思い浮かべる。

「……なんだこれ？」

確かに創ったのだ、だがしかし、出来たのはふにゃふにゃの剣だった。

……大剣を想像したのだが……。おそらく……

「想像力が足りなかったか？」

たぶんそうだろう。家では大剣なんてでかいものは仕事に使わないからな。ワイヤーとかなら使うのだが……。

「そうだ、普段使ってるものを創ろう。」

頭に想い描くのは千切れない丈夫なワイヤー……

「出来た……。」

長年使っていたワイヤーが創造できた。試しに近くの木にくくりつけて引っ張ってみたら、木が真っ二つになった。

……いい切れ味だな。とりあえず、ワイヤーが消えるように念じてみるとすぐ消えた。

「……こんなものか。さて、こんどこそ修行だ、修行。」

ーーーーーただいま移動中ーーーーー

と、いうわけでやってきた。目の前には6メートルはありそうな大岩がある。これを殴って拳を鍛えるのだ。
ではさっそく……

「ハッ！」

ボゴーン！！……えっ？

「なん……だと！？」

大岩が砕けたのだ。本気で殴るとこちらの拳が痛いと思いある程度加減をしたのだが……。

「まさに化け物。これでは修行にならない。」

仕方ないので何もないとこに正拳突きをすることにした。本気でやったら数メートル先の木が粉々になった。

しばらく修行をしていたが霊力などがあるのをおもいだした。
霊力などがあるのならそちらも上手く扱いたい。そこでおれは現段階で一番扱いやすい霊力を人差し指の先にため、
先ほど能力で創った針を地面に刺し、その上に人差し指で乗った。

指先に意識を集中しないとグサリである。
しかし、それだけではつまらないので、もう片方の空いている手から霊力でできた弾を発射しながら修行することにした。

『……チ～ン……』
あれから何時間もやり続け霊力がスッカラカンになってしまったのだ。霊力の変わりに妖力でやってみたがなかなか扱いが難しく、大量に放出してしまったため、魔力でやったが集めた途端爆発してしまった。

「……今日はもう帰ろう。」

そう思い洞窟に帰ってキノコを焼いて食べて寝た。

第2話：自分の能力と修行（後書き）

うん・・・もういいや。
何か感想やアドバイスを下さい。
次はいまさらですが、主人公について紹介します

今さらだけど主人公について（前書き）

凶「いまさらだな」
作「そんなこというなよ」

今さらだけど主人公について

名前：凶道（きょうどう）　進（しん）
年齢：元１６歳　現在数週間
職業：化け物
一人称「俺」
呼び方「お前」「君」

幼女を助けようとして死んだが、実は神様の手違い。
代々裏の家系で育ってきており、徹底的に戦い方、暗器などの使い方を教わっていた。
本来は人を殺す事をためらわない。だが、神様のミスとは言え人を助けるとは自分でも思わなかったらしい。
成績はかなりいい。顔もいいのだが常に無表情。あまり心のそこから笑うことはない。しかもビックリするくらい鈍感。
彼が微笑んだのをみた女性は倒れるという。そのあとに「ああ……もっと微笑んで……」といいながら幸せそうな顔で病院に運ばれる。
しかし、彼の目はまったく笑っていない。微笑むのも仕事をやりやすくするためである。あくまでターゲットを殺しやすくするためである。
また、彼の仕事のあとの一服はゲームやネットなどである。
よってそれなりにゲームの知識はある。ちなみに、彼は未成年なので、あっち系のゲームはしない。性欲もわいた事がない。転生して少しづつだが彼は変わっていく。

今さらだけど主人公について（後書き）

作「こんな感じでどうよ」

凶「……微妙だな。」

第3話チャレンジ精神は大事（前書き）

今回から少し書き方を変えようかと思います。

第3話チャレンジ精神は大事

「ふっ！はっ！せいっ！」

湖で槍を振り回している鳥がいる。もちろん俺だ。拳での修行もある程度やったので、しばらくは色々な武器の修行したいと思った。ちなみに今は、『剣』・『槍』・『ナイフ』・『斧』ついでに『刀』も練習している。

「ふぅ～……。」

ある程度やり終えたので少し休憩する事にし、湖の水で顔を洗う。

「……。」

やはりというかなんというか……クックルだなぁ～、と思う。しかしゲームで出てきたクックルはもっと格好悪かったぞ？だが、このクックルはやたらかっこいい。まぁ、どうでもいいか、そんなことは。そう思いバシャバシャと顔を洗う。あれだ、顔を洗うときにクチバシが邪魔だな。

「さて、次は妖力の修行だ。」

ちなみに、なぜ、妖力の修行かというと、この前幼女神から妖力は使い方によっては人間の容姿になれる、と手紙で教えてもらい、だったら修行の時に人間になっておこうと思ったからだ。やはりと言うか何というか……まだ人間だった頃の名残があるようなのだ。

だから妖力で人間の容姿になろうという結論に至ったのだ。
あと、霊力と妖力と魔力が同時に出せるようになった。
これは嬉しい事だ。何故なら、霊力で針の上に乗りながら、妖力で別のことができるからだ。
例えば、前は針の上に乗りつつ妖力で色々な形を作って制御できるようにした。
その前は足から妖力、手から魔力、体から霊力を出して空に浮かんでいた。
……と、まぁ色々できるようになったわけだ。
そんなこんなで大量の針を準備できた。
今回は、この針を魔力で空中に浮かばせつつ人差し指に妖力を込めて、針から針に移動する修行だ。

「ふ～……はっ！」

俺の掛け声とともに大量の針が空中に浮かぶ。そして、ジャンプして人差し指で針の上に着地する。
……思っていたよりずっときつい。魔力だけは扱いが苦手だからな～、余計な事を考えながらも人差し指でジャンプして他の針に移動する。
これを何回も繰り返すと言うそれだけで、魔力と妖力がすこしづつ上手く扱えるようになるのだ。
しかし・・もし魔力を乱して出す量を増やすと……

『ズドーン！』

……このように針が爆発してしまう。そして焦って気が散った俺は

「痛っ！？」

妖力が一瞬散ってしまい指に針が刺さる。
そのまま魔力も散ってしまい、『ズドドーン！！』と、いった感じで次々と爆発していく。
ちなみに、針は３０本くらい作った。それが全て爆破するから

「げはっ！」

それは、爆風に巻き込まれて近くの木に叩きつけられてしまう。正直言って結構痛い。

「……くっ、失敗か……」

そのまま視界が暗くなっていった……

「ん……」

目が覚めたたら夜になってた。結構気絶してたんだなと、思った。

「夜か。飯は・・どうするかな・・。」

実を言うとこの体になってからは、腹が減ったりしない。
しかも、トイレにいかなくてもいい。……ってかトイレねーや。
そんな便利な体なのになぜ食事をするかというと、理由は簡単。な

んとなくである。
人間だった頃となるべく同じ感じで過ごしたかったから、それっぽい生活をしている。
そんなこんなで洞窟についたが、今回は食事をしないでそのまま寝ることにした。
ちなみに、敷布団がおいてあったりする。凶が能力で作ったのだ。

「……もうどれくらい時間がたったかな……。時間の感覚が鈍ってきた……。」

もう４００年はたっているのだが、凶は修行しているので、そんなことはほとんど関係なかった。

「たぶん、あと数百年はこのままだろうし、しばらく寝るか。そうだな……３００年くらい？」

凶にとっては寝るということ自体必要ないのだが、これも人だったからなんとなくそうしよう、ということだ。
それと、３００年寝るのはたやすい、凶の『潜るか浮く程度の能力』で自分の魂だけを３００年ほど眠りというものに潜らせるのだ、そして体は今までの日常に潜らせるのだ。
そうすれば、勝手に修行する。つまり、人形や機械のような感じになるのだ。

「そうしよう。たまには休もう。３００年もたてば動物とかも生まれてるだろう。」

そういって凶は眠りにつく、３００年という長い長い眠りに……。

第3話チャレンジ精神は大事（後書き）

と、いうわけで、凶は眠りにつきました。
次回は番外編で神（幼女）がでます

番外編：今回は幼女神が主役（前書き）

作「よかったですね～。」

神「そうですね。出番がもらえるのは嬉しい事です。」

番外編：今回は幼女神が主役

「はぁ～……」

一人の幼女が悩んでいた。正確には神なのだが。で、悩んでいる理由は……

「凶さんは大丈夫でしょうか……」

これである。自分のミスで死んでしまった人間の事を考えていたのだ。

この神は今まで仕事の合間に凶のことを見ていたのだが、世界が「これ以上交渉したくない。」と、言いはじめたのだ。

「凶さん……。」

なんというかまぁ、どこぞの悩める乙女のようだ。

ちなみに、神が凶の名前を知ったのは独自で彼について調べたからである。

「神様、仕事してください……。」

ドアを開けて入ってきた部下が、神を見てそう言う。

神は現在、可愛らしい熊の絵がプリントされたパジャマで椅子にすわり、クッションを抱いていた。

……実は寝ぼけていたりする。寝ぼけてまで凶のことを考えるか……。

「うみゅ……、もう少し……あと1年……。」

「長いです。とっとと起きてください。」

そう言いながら部下は神のパジャマを脱がしはじめる。
……部下の性別は女だ。容姿はメガネに白い神、パッ、と見は２０前半くらいだ。
着ているのはＯＬなどが仕事場で着ているあれだ。

「ホラ、よだれ拭いて。何幸せそうな顔してるんですか。」

そう言いつつ、神のよだれをハンカチで拭く。
テキパキとパジャマを脱がして服を着せる。そしてそのまま顔を洗う。

「目が覚めましたか？」
「……えぇそれはもう。」
「それはよかったです。……で、あちらの神の提案でですね……」
「う～ん、却下です。それはこの案で通してみてください。
それと前の資料は間違えなのでこの新しい資料を渡しておいて下さい。
……ところで、少しいいですか？。」
「なんでしょう？」
「わたし、ご飯まだです。」
「……忘れてました。すぐ作ってきます。」
そう言ってドアから出て行く部下。

ーーーーただいま食事中ーーーー

「ごちそうさまでした」
「では片付けますね。……あぁ、そうでした。」
「なんですか？」

食器を片付けながら部下は神に聞いた。

「前の間違った世界に送った人間はどうするのですか？」
「凶さんですか？そうですね……こちらはあまり交渉できないので、なんとも言えませんが、おそらくあの世界にとっては重要な人物になるでしょう。
よってあちらが問題を起こさないかぎりこちらは手出ししません。」
「そうですか。それとあの人間、昨日からずっとおかしかったですよ？」
「おかしかった？」
「はい。なんていうか、機械のような……こう……決められたことを忠実に守ってる感じでした。」
「……おそらく彼の能力なのでしょう。
あそこはゲームをもとに創った世界なのですから。
と、いうかあなたはわたしに内緒で勝手に見たのですか。」

ぷく～、とほっぺたを膨らませて拗ねる神。……本当に神かコイツは。
そんな神を見つつ、

「大丈夫ですよ。別にとろうなんて思っていません。……かなり好みですけど。」
「なっ！取るって！別にそんなんじゃないです！。」

顔を赤くしながら手をぶんぶんと振り回し否定する。
ちなみにこの後自分の部下に散々ひやかされて仕事がてに付かなか

った。

番外編：今回は幼女神が主役（後書き）

次は３００年後の時が過ぎて凶が起きる。
原作キャラ出るかもね。

第４話：初戦闘は妖怪と（前書き）

原作キャラ出すかな～。

第４話：初戦闘は妖怪と

「ん……。」

凶が目覚めた。つまりは３００年たったのだ。目が覚めた凶は回りを見渡す。
少しほこりが溜まってるので掃除をしなくてはいけない、と思いつつ着替えて外に出る。
凶は、自分の着替えがなかった事に気が付き作っておいたのだ。４着くらい。
今回は長い黒のズボンに黒のコートを着ている。……わりと似合ってる。

「さて、３００年たった世界はどうなったかな。……できればイノシシとかいるといいなぁ。」

そんなことを期待しつつも洞窟の外に出て森を歩く。
３００年も過ぎたからだろうか、道が歩きやすくなっている。
回りの木を見ると見たことのない木の実があった。
一つもぎ取ってみると……ちなみに、凶はくちばしに小さなギザギザの歯が並んでいるので、ちゃんと咀嚼出来る。

「……うまい。」

かなりうまいのだ。味を例えるとマンゴーをさらに甘くして、レモンの酸味とくっつけた感じだ。
そのあともう一個とってそのまま湖にむかった……

「なん……だと……。」

湖に来た凶は驚いた。なんと、魚がいるのだ。大きさはメダカくらいの小さなやつからマグロくらいの大きなやつまで様々だ。そんな魚たちを見ながら凶が思ったことそれは――――

「……捕獲する！」

――――食う事だけだった。湖の中に飛び込み大きいやつを狙う。狙うはあのマグロ並みの大きさの奴だ！そう思いつつ捕獲しようとしていたが……

「バゴゴッ！？（速い！？）」

速いのだ。チーターもビックリの速さだ。

「……ッ！（だが、負けんぞ！！）」

……こちらもこちらで変な火がついてしまったようだ……。凶は能力で槍を作る。

そしてもう一つの能力で槍を水に潜り込ませ見えないようにする。つまりトラップだ。

それをマグロもどきを追いかけながら繰り返す。そして……

「……ッ！（かかった！）」

予め隠しておいた槍を浮かせ操ってマグロもどきに突き刺す。ちなみに、凶は妖力で操った。

「（勝った……）」

そのままマグロもどきの尾びれをもって水面まで行く。
途中、他のマグロもどきがこちらに突っ込んできたりしたが、自慢の足で蹴り飛ばした。

「ふぅ～……疲れた。」

そういいながらマグロもどきを手刀で切っていく。もう一度言おう、手刀だ。
手刀でマグロもどきをスパスパ切っているのだ。切ったマグロもどきを火で焼いて食べる。
……うん、悪くないそれなりにいける。そう思いながら黙々とマグロもどきを完食して行った……

「うっぷ……」

で、こうなったのだ。
それもそのはず、あのマグロもどきを火で焼いたがいくつか生焼けのとこがあり、それを気付かないで食べていたのだ。
凶は少々生の魚が苦手なのである。

「うっぷ……吐きそう……」

やめてくれ……今にも倒れそうな足取りでふらふらしながら我が家（洞窟）に戻ろうとしたが……

『ガサガサ……』
「!?」

バッ!と、勢いよく音がした方を振り向く。そこには……

「……ウサギ?」

そう、ウサギだ。それもたくさん。１０羽はいるだろうか。もこもこしている。
そのうちの1羽が凶の足元にやってきて、凶のズボンを噛んで引っ張った。

「付いて来てと言いたいのか?」

ウサギは頭を、肯定だ、とでも言うかのように振る。

「……わかった」

そう言いながら凶は、もこもこのウサギ集団についていった。……シュールだな。

ウサギについていったら人間の少女がいた。それはいい。
しかし、その人間の少女は血を流しながら何かから逃げていたのだ。
それは……

「……妖怪？」

そう、妖怪だ。
いかにも「僕たち妖怪ですよ～」という感じに妖力と殺気を出している。
まさかあの人間を助けろと？……めんどくさいな……
そう思っているとウサギが蹴りを入れてきた。……何故わかった。
そんな下らないやり取りをしていると、少女が躓いてしまった。
……顔から行ったか、あれは痛いな。その躓いた少女に向かって一匹の妖怪が

「ニンゲン……食ウ……ウマー……」

と言いながら爪で切り裂こうと手を振り上げていた。仕方ない、助けるか。
そう思いながら俺はウサギたちに離れていろと言い、自慢の足で少女に飛び掛ろうとした妖怪にとび蹴りを入れてやった。

「ッ！？」
「ナンダ！？」

驚く少女と妖怪たち、さっきとび蹴りを入れた妖怪は潰れたトマトみたいになってた。
やはり恐るべし、クックルの力。

「ナンダ!?オマエハ!」
「お前たちに名前なんぞ名乗る必要はない。」
「クソッ!ヤレ!オマエタチ!」

と、一匹の妖怪が言ったあと他の妖怪が襲い掛かってきた。数は大将みたいのを入れると13……多くね?
とりあえず、一番手前にいた一匹に回し蹴りを入れて、次にやってきた二匹の内の一匹を足でつかんでアイアンクロー、もう一匹は左手で殴ってやった。
……しばらく赤は見たくない……。自慢の足が真っ赤になってしまった……
そう思っていると横から二匹ずつやってきたので瞬時に能力地面に潜る。
横から来た四匹の内一匹を一緒に引きずり込んで、後の三匹は槍を三つ創って下から突き刺してやった。
潜り込んだ地面から浮いて出てきて、焦っている五匹の雑魚妖怪の上に剣やら槍やらを創って雨のように降らす。
五匹とも串刺しになって死んだようだ。さて……

「……残るはお前だけだな?」
「ヒッ!?」

俺は力を半分解放して脅してやる。……少女には当たらないようにコントロールしているから大丈夫。

「頼ム!助ケテクレっ!」
「……今更命乞いか……醜いな。」

そう言って俺は妖怪にかかと落しをくれてやった。……チッ、足が汚れちまった……。

俺はそのまま少女の方に向かって歩く、目の前まで来て気付いたが結構おびえてるようだ。
その少女に向かって俺は……

「君は迷子か？」

と、聞いた……

ーーーSide永琳ーーーー

私は今日、森に行こうと思った。
この森はまだまだ見たことのない薬草があるので、実験に使えそうな薬草を探すのだ。
森には妖怪がいるので危険だが、私は弓をある程度使えるので問題はないと思っていた。
そして、森に入り進んでいると……

「あら、これは見たことないわね……」

見たことのない草花があったのだ。奥に行けばもっとあるかもしれないと思って進んでいると……

「人間ガ、コンナ所デ何ヲシテイル？」

妖怪に出会ってしまったのだ。一匹ならまだいい。しかし、二十匹

はいるのだ。
マズイ……私はそう思い逃げた。途中、追いつかれそうになったが弓で少しづつ数を減らしていった。
しかし、当然無傷では済まず、こちらもダメージを受けてしまう。
何とか逃げなくては……

あれから私まだ走っている。数は頑張って13まで減らした。
しかし、私の肌は妖怪たちの爪で所々傷を負ってしまい、そこから血がでていた。
妖怪たちとの距離を見ようと後ろをみたら、目の前の小石につまずいてしまい、顔から転んだ。
うぅ……痛い……
そして一匹の妖怪が私の法に近づいてきて……

「ニンゲン……食ウ……ウマー……」

と、言ってきた。私は思った。こんなことなら家で大人しくしていんだったなぁ……、と。
妖怪が私を切り裂こうと手を振り上げたとき、私は目をグッ、と目をつぶった。
するといきなりグチャッ、という音が聞こえた。私は驚いて目を開けた。

「ッ!?」
「ナンダ!?」

妖怪も驚いていた。どうやら自分の仲間が殺されたらしい。……誰に？そう思い私は顔を上げた……。
そこにいたのはニワトリ。だが、その顔はニワトリっぽくなかった。体は人間の男のものだった。黒いズボンを穿いて、黒いコートを着ていた。
足は鳥の足だった。ただしデカイ。

「ナンダ！？オマエハ！」
「お前たちに名前なんぞ名乗る必要はない。」
「クソッ！ヤレ！オマエタチ！」

妖怪はそういいながら自分の手下で攻撃させる。
その内の一匹がニワトリを攻撃しようとしたが回し蹴りで木っ端微塵にした。
次に二匹の妖怪が飛び掛ったが、ニワトリはその足で妖怪の頭をつかみ、力を入れた。
すると、妖怪の頭が砕けた。そして襲い掛かって来たもう一匹を左手で殴った。
今度は左右から二匹ずつ飛び出した。危ない！そう思ったが、ニワトリは地面に沈んだ。
そして沈む直前に襲い掛かってきた一匹を引きずり込んだ。
襲い掛かった４匹の内３匹はニワトリを探そうとしたが、下から槍が三本出てきて三匹の妖怪に刺さった。
そして、ニワトリは何事もなかったかのように地面から出てきた。
ニワトリは残りの襲い掛かってきた妖怪を見ていると、その妖怪たちの頭上からたくさんの剣や槍が降ってきた。そのまま妖怪たちに刺さり、手下の妖怪を全て倒した。
そのニワトリはゆっくりと指揮をしていた妖怪に近づき……

「……残るはお前だけだな？」

と言った

「ヒッ！？」

そう言われた途端妖怪は震えだした。

「頼ム！？助ケテクレっ！」

「……今更命乞いか……醜いな。」

ニワトリは命乞いをする妖怪に容赦なくかかと落しをした。

すると妖怪の頭がグチャッ、と潰れた。

そのニワトリはチッ、と舌打ちをしたあと私のほう向かって歩いて来る。

……そうだ、きっとこのニワトリも妖怪なんだ。だから私も殺すんだ。

そう考えた途端に私は恐怖した。あの圧倒的な強さを見たのだ、普通に恐ろしくなった。

ニワトリは私の方まで歩いてくる、一歩一歩がさらに恐怖と言う感情を高める。

私の前まで来てニワトリはこう言った。

「君は迷子か？」

第４話：初戦闘は妖怪と（後書き）

結構書いた。次は凶と永琳のお話

第5話：（ ﾟ∀ﾟ ）ｏ彡 ぇーりん！ぇーりん！（前書き）

ネタが尽きそう。助けてぇーりん！

第5話：（ ﾟ∀ ﾟ）ｏ彡 ﾟえーりん！えーりん！

「君は迷子か？」

俺の目の前には現在、少女がいる。年は１０歳か１３歳くらいだろうか？

赤と青のナース服のようなものを着ており、頭にはこれまたナースキャップもどきを被っている。

髪の色はキレイなは銀色。俺の問いかけに対して少女は、

「え？」

と言った。

まぁ、さっきまで妖怪をボコボコ（いや、グチャグチャか？）にしていたニワトリ目の前まできたと思ったら、行き成り「迷子か？」なんて聞いてきたのだ。そりゃ「え？」となるだろう。

「もう一度聞こう。君は迷子か？」

「……違うわ、私はこの森に実験で使う薬草を取りに来たの。」

「ふむ……そうか。なら早く帰るといい。なんなら送っていこう。」

「いや、それよりも貴方なによ？妖怪？」

「む、すまん。俺は凶道　進と言う。君は？」

「名前が聞きたいんじゃないんだけど……。

まぁ、いいわ。私は八意（やごころ）　永琳（えいりん）。よろしくね。

あと、起こすの手伝って頂戴」

そう言いながら手を差し伸べてくる永淋。

「よろしく頼む。」

そう言いながら永淋を起こす。

「自己紹介も終わった事だしもう一度聞くけど、あなたはなに？妖怪なの？」

「いや、妖怪ではない。種族とは言えないが化け物だ。」

「……聞いた事ないわね。それじゃ、どうして助けてくれたの？」

「ああ、それはウサギに頼まれたからだ。あそこにいるだろう？」

と言って俺はウサギがいる場所を指差す。……相変わらずもこもこしているな……。

「……あのウサギたちが？」

「そうだ、お前たちも早く来い、捕って食べたりはしないだろう。……たぶん。」

「たぶんもなにも、食べたりなんかしないわよ。」

永淋がそう言うとウサギたちが寄ってくる。……俺の後ろに隠れるな。

「ほら、行け。」

そう言いながらウサギを前に押し出す。足で。

俺に押し出されたウサギは若干怯えながらも永淋に近寄る。すると永淋はウサギに手を伸ばし抱きかかえる。

……なぜだろう？一瞬だけ羨ましく感じた。

「どうかしたの？」

「……いや、なんでもない。それより、どうする？俺が送ろうか？」

「そうね、お願い……と、言いたいけどあなたを連れて行ったら色

々聞かれそうだわ。人になれないの？」
「……やってみる。」
俺はその場で妖力を込めてみる。すると……
「出来た……」
できたのだ、幼女神に貰った鏡で確認してみたところ顔は人間だったころと同じだった。
ただ、髪が白くなり、目のが色がキレイな紅色になっていた。……トサカの代わりだろうか？
「では行くとしようか。……どうした？」
「……えっ、な、なんでもないわよ？行きましょう。」
「……？」
少し気になったが、そのまま永淋を家に送ることにした……
ーーーSide永淋ーーー
「君は迷子なのか？」
そう聞かれたとき、私は呆然としてしまった。
殺されると思ったのに、むしろ心配されたからだ。だから私は
「え？」

と言ってしまった。

「もう一度聞こう。君は迷子か？」

「……違うわ、私はこの森に実験で使う薬草を取りに来たの。」

「ふむ……そうか。なら早く帰るといい。なんなら送っていこう。」

「いや、それよりも貴方なによ？妖怪？」

「む、すまん。俺は凶道　進と言う。君は？」

「名前が聞きたいんじゃないんだけど……。

まぁ、いいわ。私は八意（やごころ）　永琳（えいりん）。よろしくね。

あと、起こすの手伝って頂戴」

なんだかよくわからないが、悪い奴ではないようだ。だから私は体を起こすのを手伝ってもらう事にした。

「よろしく頼む。」

そう言いながらソイツ……いや、凶は身体を起こしてくれた。

「自己紹介も終わった事だしもう一度聞くけど、あなたはなに？妖怪なの？」

「いや、妖怪ではない。種族とは言えないが化け物だ。」

どうやら凶は妖怪ではないらしい。しかし化け物……妖怪と何か違うのだろうか？

「……聞いた事ないわね。それじゃ、どうして助けてくれたの？」

「ああ、それはウサギに頼まれたからだ。あそこにいるだろう？」

そう言いながら凶は茂みの近くを指差す。

……なるほど、今まで気付かばかったがそこにはウサギが十羽ほどいる。

「……あのウサギたちが？」

「そうだ、お前たちも早く来い、捕って食べたりはしないだろう。・・たぶん。」

「たぶんもなにも、食べやりなんかしないわよ。」

失礼な。私はウサギなんか食べたりしない。精精実験に使うくらいだ。

そう思っているとウサギたちが近づいてくる。・・凶の後ろに。

「ほら、行け。」

凶がそう言うとウサギが渋々私の前にやってくる。……可愛い……。

そう思いながらウサギに手を伸ばして抱きかかえ、そのまま頭を撫でてやる。

……なぜか凶が私の抱きかかえているウサギをじっと見ていた

「どうかしたの？」

「……いや、なんでもない。それより、どうする？俺が送ろうか？」

「そうね、お願い……と、言いたいけどあなたを連れて行ったら色々聞かれそうだわ。人になれないの？」

本人は妖怪ではないと言っているが、間違いなく妖怪と間違われるだろう。

「……やってみる。」

そう言いながら目をつぶる。すると――――

「出来た……。」

凶が人間の姿になったのだ。髪は白く、目の色はキレイな紅色だ。背は変わらないで、だいたい１９０ｃｍくらいのままだ。顔立ちはかなり良い。

「では行くとしようか。……どうした？」

「……えっ、な、なんでもないわよ？行きましょう。」

「……？」

まさか見惚れていたなどと言えまい。そのまま私は凶の横を通り過ぎて自分の顔がみえないように隠した。

……たぶん赤くなってる。凶は不思議そうな顔をしたがそのままついてきた。

そして、私は途中までドキドキしたままだった。

ーーーーＳｉｄｅ凶ーーーー

途中まで永淋が俯いていたが今は俺と普通に話しをしている。

何でも、永淋の親はすでに亡くなっており、今は使用人たちと暮らしているらしい。

しかも、あまり外に出してもらえず、友達もいないとか。……苦労しているんだな。

俺はそう思い、同情の意味も込めて永淋の頭を撫でてやる。

「……どうして頭を撫でているのかしら？」
「気にするな。」
と、そんなくだらないやり取りをしているとウサギが俺の頭の上に飛び乗ってきた。
ちなみに、ウサギは3匹ついてきた。他のやつらは森に戻っていった。
今ウサギは俺の頭に一匹、俺の右肩に一匹、そして永淋が一匹抱きかかえている。
「どうした？」
俺がそう聞くとウサギは鼻で前の方を指した。
そこには大きな門と門番っぽいのが二人いた。大きな門だ……
「！？貴様！何者だ！」
と、門番が俺に問いかける、答えようとしたら永淋が変わりに
「安心して、彼は私の恩人よ。だから通してあげて。」
「ッ！？永淋様！どうしたのですか、そのお姿は！」
と答えてくれた。
今更だが説明しよう。永淋は妖怪に攻撃されて服のところどころが破けているのだ。
「妖怪に襲われたの。そこを、彼が助けてくれたのよ。」
「そうでしたか、申し訳ありませんでした。どうぞお通り下さい。」
そう言って門番は門を開けた。俺たちはそのまま門のなかに入って

いった・・

「……未来都市？」

門を通り過ぎての俺の一言はそれだった。
正直、人間が生まれてから時間もあまりたっていない思っていたのだ。
巨大なビルなどの建物がいくつも建っているのだ。
……まさか、あの有名な青いネコ型ロボットもいるのではないだろうか？

「さて、行きましょうか。……何をしているの？」
「ん、いやなんでもない。」

青いネコ型ロボットを探そうとキョロキョロしていたら、永淋がジト目こちらを見てそう聞いてきた。
……そんな目で見ないでくれ。

「……まぁいいわ。行きましょう。」
「ああ。」

そのまま未来都市を進んでいった。

で、ついたのが永淋の家。
……はて？なぜ俺は永淋の家に来ているのだろうか？確か送っていくだけのはずだったが……。

「おい。」
「なに？」
「どうして俺は君の家に来ているんだ？」
「私があなたに御礼をしたいからよ。」
「……そうか。」

ウサギはピョンピョンと俺の周りを跳ねている。コラ、体当たりをするな。
そんなことはいい。今俺は、永淋の家のソファーに座ってる。恐らく客室かなにかなのであろう。
使用人が持ってきたお茶を飲みつつ考えていると・・

「ねぇ、あなた、私の家に住まない？」

……Ｗｈａｔ？どうしたんだ永淋、冗談はその服だけに「ヒュン！」
「パシッ！」

「殺す気か？」
「なぜだか馬鹿にされた気がしたから。」

恐ろしいな。

「別に嫌なら嫌でもいいのよ？
でも、私はあなたに興味が湧いたの。それに、あなたは森に暮らしてるんでしょ？
最近あの森は妖怪が増え始めたの。ここにいれば妖怪も入ってこないし、もし私が森に入るときとかにボディガードをしてもらいたいしね。
もちろん、寝るところや食事も出すわよ？」

……最後らへんに、物で釣っている気がするが気にしないでおこう。
しかしどうする……。おそらく、永淋の言うとおりあの森は妖怪でいっぱいであろう。
しかも、俺は妖怪の大将っぽいのを殺したから、その俺を殺して名を上げようなんて考えてるやつもいるかもしれない。
別に何匹出てこようがこのクックルボディーの敵ではない。
だがしかし、戦うのが面倒だ。修行だってここにいても出来るしな・・・

「……そうだな。ここに住ませてもらおう。」
「ふふふ……そう。
じゃあ一緒に住むのだからこれから私のことを永淋と呼んで頂戴。
私もあなたのことを凶と呼ばせてもらうから。」
「……わかった。これからよろしく頼む、永淋。」
「ええ、よろしく。」

「ところでウサギたちはどうするんだ？」

「一緒に住んでもらいましょう。……もちろん、拒否権はなしよ。」

第5話：（ﾟ∀ﾟ）ｏ彡ﾟえーりん！えーりん！（後書き）

主人公が原作キャラと一緒に住む事になった。

第6話：幼女神　降臨（前書き）

感想で凶と幼女神をくっつけられないかと聞かれたのでここで答えます。
たぶん主人公はよっぽどの事がないかぎりくっつかないと思います。
こいつは超が付くほどの鈍感という設定なので……。

第6話：幼女神　降臨

俺の前には何故か目からバチバチッ、と言う感じにいまにも火花が散りそうな勢いで睨みあってる幼女神と永淋がいる。
何故こうなった……。

ーーーー数時間前ーーーー

俺は永淋の庭で修行していた。
しかし、修行してから少し経つと永淋が買い物に付き合って欲しいと言ったのだ。
まぁ、居候させてもらっている身だから、付いて行く事にしたのだ。

「ねぇ、これはどうかしら？」
「まぁ、似合ってるんじゃないか？」

こんな感じで買い物している。ちなみに今買っているのはウサギの首輪だ。
何でも、「逃げてもすぐ見つけられるように発信機が付いた首輪を付けさせたい。」だそうだ。
……この時、少し怖いと思った。

「じゃ、これとこれを買いましょう。その後あなたにも何か買ってあげる。」
「……別に俺はいらないんだがな……。」

能力で創ればいいし。

「いいの。私が買ってあげたいんだから。」

「そうか。……金の無駄だぞ？」

そんな会話をしながら俺も何か買ってもらうことになった。

俺はブラブラしながら欲しい物を探していると……

「ん？」

ふと目に入ったのは首飾り、色は黒で、先端は黒い羽が付いてる。

……なんとなく興味をそそられたので、これにしようと思って永淋のところにいったら幼女神がいたのだ。

「そして今に至る。」

「なにを言っているんですか？凶さん？」

幼女神にジト目で言われてしまった……

「凶、あなたの知り合い？」

「ああ、知り合いと言えば知り合いだ。出会ってまだ一回だがな。しかし、何故君がここにいるんだ？」

「えっとですね、お休みをもらったので会いにきたんです。一応不自由してないか見にきたんですけど……大丈夫みたいですね。

」
「そうか。で、何で永淋と睨み合ってるんだ。」
「その子が「凶さんはどこです？」って急に聞いてきたから知らないって答えたら睨み付けてきたのよ。だから睨み返してたの。」
くだらねぇ！何だその理由は！
「……あのな永淋、なんでお前も嘘つくんだ？それと君も、そんな事で怒らない。」
「「だって……」」
「だってじゃない。とりあえず家に帰るぞ。君もとりあえず来るんだ。いいね？」
「はい……。」
「……わかったわ、それはそうとあなた買いたいものは見つかった？」
「ああ、これだ」
「黒い首飾りね。しかも黒い羽の。」
「ああ、なんとなくこれに興味をそそられたんだ。」
「わかったわ。とりあえず買ってるから二人とも外に出てて。」
「わかった」
「……わかりました。」
……なんだか幼女神が不満そうな顔をしているが別に気にしないでいいだろう。
外に出ようとしたら、幼女神が服の裾を引っ張っていた。
「……どうした？」
「あの……手をつないでください。」
「……わかった」

見た目同様に心も子供っぽいんだな。……レジのようなものがある場所のから殺気を感じる……
幼女神を見ると、顔を輝かせてとても嬉しそうにしていた。
手をつないでもらうのがそんなに嬉しいのだろうか？
そう思いながらも、そのまま店から出た。
……歩いている間にもレジの方から殺気がずっと飛んできていた。

「……。」
「（ニコニコ）」

言わなくてもわかるだろうが、上が永淋・下が幼女神である。
何故だか永淋が店から出てからずっとご機嫌斜めなのだ。
しかも、たまに俺に殺気を飛ばすのだ。……俺、何かしたのか？
幼女神は手をつないでもらったのが相当嬉しかったようでずっとニコニコしている。
……小さいな……。

「……永淋、どうした？なぜそんなに機嫌が悪いんだ？
俺が何かしたか？何かしたのなら謝る。だから機嫌を直してくれ。」
「……。」

何故か、プイッ、といった感じにそっぽを向いてしまった。
……小動物みたいでちょっと可愛いな。
そんなこんなで永淋の家に着く。そのまま家に入ろうとしたのだが……

「あなたも憑いてくるの？（誤字であらず）」
「ええ、凶さんに言われたので。」

永淋、そこで俺に殺気を飛ばすな。
それと幼女神、俺の方を見てニコニコしないでくれ。
君が俺に笑いかける度に永淋の殺気が強くなるんだ……。

「……まぁ、いいわ。」

永淋はそういいながら家に入っていった。

「俺たちも入ろう。」
「はいっ！」

笑顔が眩しい。あ、また殺気が……俺は重い足取りで家に入った。

ーーーSide幼女神ーーー

「神様、しばらく休んだらどうですか？」

私の部下が急にそう言い出した。

「……なぜですか？」
「あなたは最近、ミスをしすぎです。まるで何か嫌な事があったかのように……。
どうしたのですか？」

「それは……」

部下の言う事は正しかった。私は最近よく仕事でミスをするのだ。例えば書き途中の書類に、飲みかけのお茶をこぼしたり、頼まれた書類を運ぼうとしたらつまずいてしまい、書類をバラバラにして何枚か失くしてしまったり・・

「はぁ～……、どうせあの人間のことでも考えてるのでしょう？」

「えっ！？あ、いえ！そんなことは……。」

「……誰がどう見ても「はい、そうです」って言ってるようなものじゃないですか。」

「うぅ～……。」

そう、私は凶さんの事を考えているのだ。実は数日前に久しぶりに見たら知らない少女と歩いていたのだ。

しかも、とても楽しそうに。それを見てから何故か夜もろくに寝付けず、仕事中にも彼のことを考えてしまうのだ。

凶さんは、あの少女と付き合っているのだろうか？

確かにあの少女のほうが私よりも胸があるし、背も高いし、髪も長くて奇麗だし・・

「うぅ……ひっく……えっぐ……。」

「ちょ、ちょっとちょっと！！なに急に泣き出してるんですか！私が悪いみたいでしょう！？」

悲しくなった……女として、あの少女にすべて負けているのだ……。

「……そんなに気になるなら、あの人間がいる世界に行ってきたらどうですか？」

「ふぇ・・。でも上に頼まないと行けないです・・・。」

どこの世界に行くにも、まずは上の神達に頼まないといけないのだ。
しかし、上の神達は私の階級ではまだ会えないのだ。

「私がお願いしておきましたよ。」
「え、でもどうやって……」
「少し脅し……お話しただけです。」

……この部下、今とんでもないようなことを言ったような気がする。

「3日ならどの世界に行ってもいいそうです。だから、そこで楽しんできてください。
……ついでにあの男とくっ付いてきたらどうですか？」
「へっ！？そんなの、無理ですよ……。」
「認めてるし……。まぁ、あの男かなり鈍感らしいですからね。
でも、女は度胸です。当って砕けろ！ですよ。」
「砕ける前提なんですね……。」

私は嬉しかった。私の部下は、私のことしっかり考えていたのだ。
だからわたしは……

「ありがとう……」
「え？何か言いましたか？」
「ふふふ……いいえ。何でもありません。」
「そうですか、では今日は寝ましょう。」

かなり話し込んでいたようだ。本来なら、もう寝る時間だった。

「そうですね、おやすみなさい。」

そう言って、わたしは自分のベッドに潜り込んだ……

ーーーSide永淋ーーー

私の前に現れた女の子はいきなりこう言い出した。

「凶さんはどこですか？」

少し、ムッ、としてしまった。
行き成り名前も名乗らずに、しかも凶の名前を出されたからだ。だから私は……

「さぁ、知らないわね。」

こう言った。すると女の子は「嘘付けコノヤロウ」と、いった目で私を睨んできた。
だから私も睨み返した。
数分たってから凶がやってきて理由を聞いてきたので、素直に答えたら……

「……あのな永淋、なんでお前も嘘つくんだ？それと君も、そんな事で怒らない。」

と、言った。それに反論しようと声を出したら

「「だって……」」

女の子と同じタイミングで言っていた。

「だってじゃない。とりあえず家に帰るぞ。君もとりあえず来るんだ。いいね？」

「はい……。」

「……わかったわ、それはそうとあなた買いたいものは見つかった？」

「ああ、これだ」

「黒い首飾りね。しかも黒い羽の。」

「ああ、なんとなくこれに興味をそそられたんだ。」

この時、私は凶のことが知れたと思って少し嬉しかった

「わかったわ。とりあえず買ってるから二人とも外に出てて。」

「わかった」

「……わかりました。」

正直、あまりこの子といたくない。

凶を店の外に出してしまうのは惜しいが仕方ない。

そう思いながらレジへと向かうと……

「あの……手をつないでください。」

「……わかった」

……は？

今あの子はなんて言った？手をつないで欲しい？

……許せない……私だってつないだ事ないのに……

しかし、許せないのは凶だ。手をつないだだけでデレデレして……

（※実際はデレデレしてません）

私は、凶が店を出るまで殺気を送り続けた……

店を出ても凶は女の子と手をつないだままだった。
……おもしろくない。

「……永淋、どうした？なぜそんなに機嫌が悪いんだ？
俺が何かしたか？何かしたのなら謝る。だから機嫌を直してくれ。」
「……。」

凶は本当にわかっていないようだ。それに腹が立ち、そっぽを向いてしまう。
……改めて思った。凶と手をつないでる女の子を見ると何故かモヤモヤしてしまう。
何故だろう？今更だが、どうしてそう思うのかわからない。
そんなことを考えながら家に帰った・・・

ーーーSide凶ーーー

どうやら幼女神は最近仕事が上手くいかないから休みを取って、俺に会いに来たらしい。
永淋はどっか行った。なんだか仕事が急に入ったらしい。ご苦労様です。

「さて、ずいぶん話し込んだな。もう寝るか。……君はどうするんだ？」
「あ、私も今日は泊まらせてもらえるように頼んでおいたので問題ないです。」
「そうか、じゃあ。おやすみ」
「はい、おやすみなさい。」

寝る前にそう挨拶しながら、俺は寝室にいってベッドでぐっすり寝た……。

第6話：幼女神　降臨（後書き）

え～、読者の皆さんにお願いがあります。
それは……幼女神の名前を考えてください！
今まで「君」で誤魔化してきたけどもう限界です。
そんなわけで、考えたら感想と一緒に載せてください。
……出来れば読み方も一緒に。

第7話：幼女神のお願いと名前（前書き）

名前、考えたぜ！
友人に「幼女の名前付けるなら何がいい？」と聞きまわりました。
聞いた後で「もう話しかけるな」と言われました。・・・ｏｒｚ

第7話：幼女神のお願いと名前

……ここはどこだ？
目の前には男の子と白髪のジジィがいる。あの男の子は……あぁ、俺だな。ってことは俺の過去か？これ。
じゃあ、ジジィは親父だな。俺の親父は６０のころに１６歳の女と結婚して俺を生んだらしい。
……世に言うロリコンと言う奴か？

「進よ。」
「……なんですか？父さん。」
「今回の仕事はお前にやってもらう。」
「……でも、僕はまだ６歳ですよ？……暗殺なんて……。」
「進、わしはお前の意見を聞いているんじゃない。
『やれ』と言っているんだ。よってお前に拒否権はない。」
「……」

あぁ、これは始めての暗殺の仕事だな。
この時はものすごく嫌な気分だったなぁ……。

「今回の狙いはこの子どもだ。」

そう言って親父は写真を見せる。
そこには俺と同じくらいの年の女の子が写っていた。

「……この子ですか？」
「そうだ、この娘はある会社の社長の子どもでな。
この娘の体には『魔法石』というものが埋め込まれている。
それはとってこい。」

「……なぜこの子にその『魔法石』が埋め込まれているのですか？」
「この子供の父親がこの子供の体に魔力があると気付いてな。
それを増幅させて何かの実験にするらしい。」
「……魔力？そんなものあるんですか？」
「ある。その証拠に今回のターゲットの娘は、自分の体から電撃を
出したりしている。
その娘の父親が自分の娘を兵器にするかもしれんからな。」
「……兵器？政府にケンかでも売るんですか？」
「たぶんそうだろう。
もし家に目を付けたら面倒だ。
不安の芽は早い内に摘み取っておかなければいかん。」
「……わかりました。行ってきます。」
「いや、今日はやらなくていい。期限は明日から一ヶ月だ。」
「一ヶ月？ずいぶんと時間をくれるのですね？」
「ああ、お前は今回が初めてだからな。
そのその娘について調べる時間も入れておいた。
明日、その娘のところへお前を一ヶ月の間遊び相手として紹介する。
」
「……よく父親が承知しましたね？」
「……一応、娘の事を考えているのだろう。今日はもう寝ろ。」
「はい……、おやすみなさい」
「あぁ。」

そこで俺の意識が途絶えた……

「ん……。」

朝、目が覚めるが、まだ少し寝ていたい気持ちになった。
このまま二度寝してしまおうか？そう思い寝返りをうったが……

「ひゃん！？」
「……ん？」

なんだか柔らかいものに手が当っている。枕ではない。毛布でもないな……なんだ？
そんなことを考えながらその柔らかいものを触ってみる。

「やっ！駄目です凶さん！起きてください！」

俺はそう言われて目が覚めた。
そして自分が今なにを触っているか気付いてしまった。
俺の手は現在進行形で幼女神の胸を触っていたのだ。

「……すまない。」

そう言いながら幼女神の胸からてをどかす。
……女性は胸を触られるのが嫌いと聞いた。悪い事をしてしまったな……。

「ハァ……ハァ……いえ、大丈夫です……。」

そう言っている幼女神の顔は赤くなっている。……どうしたんだ？

「……ところで、何故俺の部屋にいるんだ？」

「はい……あの、お越しに来たんですけど……そしたら……」

と、言いながら両手を頬に当てながら顔を赤くしているする。

……きっと顔を赤くするほど嫌だったんだろう。

本当に悪い事をしてしまった……。（※マジでそう思ってます）

「まぁいい。とりあえず食事を取ろう」

「あ、はい。そうですね、行きましょう。」

そう言いながら俺たちは部屋を出た……

「あら、おはよう。」

「……おはよう。」

「おはようございます。」

食事をするためのテーブルには、既に永淋がニコニコしながら座っていた。

……はて、なぜか笑顔が怖いぞ？

「……永淋、何かあったのか？……笑顔が怖いぞ？」

「失礼ね、あなたは。

……そうね、実は今日やるはずだった仕事を研究員の一人がやってくれたのよ。」

「……ちなみにどんな研究だ？」

「普通の人間が１００匹の妖怪を相手に３０分逃げ切れるか。」

「……。」

……それに何の意味があるんだ？名も無き研究員よ、生き残るんだぞ。

「さて、とりあえず食べましょう？」
「ああ。」
「そうですね。」

ちなみに朝食はクロワッサンとベーコンエッグだ。
……テーブルの真ん中に虹色の液体がある。ジャムだろうか？

「そうです。凶さん、私のあげたナイフ使ってくれてますか？」
「……いや、まったく使ってない。能力で武器は作れるからな。」
「……」
「……そんな目で見ないでくれ……」

瑠璃が頬を膨らませながら上目遣いで睨んでくる。……そうだ。

「……このナイフ、別のものに出来ないか？」
「……出来ますよ。何か別のものに変えて欲しいんですか？」
「あぁ、力を抑える腕輪か何かにしてくれ。」
「いいですけど……どうしてですか？」
「修行には持って来いだろう？」

そう言いながら残ったクロワッサンを口に放り込む。

「わかりました。やってみます。だから後でナイフを貸してください。」
「わかった。……永淋、どうした？」

さっきから、まったく会話に入ってこない……と言うかいつの間に

か食べ終わって何か機械のような物を弄っている。

「なんでもないわ。……ねぇ、凶。後で森に行きましょう。見せたい場所があるの。」

「？わかった。」

そんなこんなで朝食を食べ終わった。

で、いま俺は永淋と森にいる。途中で妖怪が襲ってきたがみんな倒してやった。

ちなみに、本気で戦わないときは、クックルではなく普通の人の姿である。

「永淋、まだか？」

「もう少しよ。」

「そうか……「ガサガサ」ん？」

またか……もう疲れたよ、パトラッシュ……

「永淋。」

「えぇ、お願い。」

さぁ、こうなったら何匹でも来い。

「「キシャー！」」

……うん、やっぱり来て欲しくなかった……

「多すぎじゃないか？」

「そうね・・・。」

多いのだ。３０匹はいるんじゃないか？どこから湧いてきたんだ。

……茂みか。

後ろで永淋が「凶～頑張って～！」と言っている。いつの間にそんなに離れたんだ？

「仕方ない……。」

溜息を吐きつつも、妖怪集団に突っ込んで行く俺。手始めに……

「はっ！」

目の前にいた１匹を殴り飛ばす。

そのまま左手を前に突き出し、魔力で作った赤い電撃を浴びせる。

……６匹死んだな。

次に手刀で何匹か斬っていく。そして能力で槍や剣を真上から落とす。

これで敵は残り５匹だ。

そして、地面に潜って相手の真下まで移動する。

「フィニッシュは華麗に飾ってやる。」

そう言い、下からやりを突き刺す。

……ウヘェ……顔に少し血が付いた……

「お疲れ様。」

俺は顔に付いた血をどうしようか悩んでいると永淋がハンカチを差し出してきた。グッジョブ、永淋。

「……すまない。恩に着る。」

「構わないわ、むしろお礼を言うのは私のほうだしね。」

「そうか、とりあえず進もう。」

「そうね、早く行きましょう。」

そのまま永淋の行きたい場所まで進むことにした……

ーーーSide永淋ーーーー

私は、凶に見せたい場所があった。

だから一緒に森まで来てもらうことにしたのだ。

途中、何度も妖怪が襲ってきたが凶が全部倒した。

本人は「人の姿だとあまり力が出ない」と言っていたが、人の姿でも充分強いと思う。

もう少しで着きそうだと言う頃に、妖怪の集団に襲われた。３０匹近くはいるだろうか？

「多すぎじゃないか？」

「そうね……」

さすがに焦った。

私も戦おうと思ったが、考えてみたら私がいても凶の足手まといにしかならないので、遠くまで離れて見守る事にした。

「凶～、頑張って～。」

そんなふうに応援していたら、凶が妖怪の集団に突撃した。
凶は目の前にいた妖怪を殴り飛ばして左手を突き出した。
すると、赤色の電撃が相手を襲う。そのまま6匹が黒焦げになった。
次に右手をかざすと、妖怪たちの真上に槍や剣が降ってくる。
すると、逃げ遅れた妖怪はみんな串刺しにされてしまった。凶は一息つくと、地面に潜り込んだ。

「フィニッシュは華麗に飾ってやる。」

凶がそう言った途端、妖怪たちの真下から槍が出てきて、刺し貫いた。
地面から出てきた凶の顔には少しだけ血が付いていた。
なんだか少し嫌そうな顔をしていたので、

「お疲れ様。」

そう言いながら持っていたハンカチを渡した。
すると凶は

「……すまない。恩に着る。」
「構わないわ、むしろお礼を言うのは私のほうだしね。」

実際、凶のお陰で毎日が楽しい。

「そうか、とりあえず進もう。」
「そうね、早く行きましょう。」

そう言って私たちは森の中を進んだ

ーーーSide幼女神ーーー

「はぁ～……」

凶さんにナイフを使っているか聞いたら、「使ってない」と、言われた。

ちょっと悲しい。しかし、変わりに、力を抑える腕輪が欲しいと言われた。

これはわたしが頼りにされてると思っていいのだろうか？

そう思うと少し嬉しかった。ただ、やっぱりナイフは使って欲しかった。

「いつまでもウジウジしてても仕方ないですよね……とりあえず作りましょう。」

まずは色ですね。凶さんに合う色を考えなくてはならない。

……銀かな？うん、そうしよう。

次はデザイン。凶さんには失礼かもしれないけど、あの人には派手なのはあまり似合わない。

だから、シンプルに、ただの丸い形にしようと思う。……でも地味すぎるなぁ……

そうだ、鳥の羽の模様を付けよう。

うん、そうしよう。そう思って作ろうとしたら……

「あら？」

ウサギさんが膝の上に乗っていました。
いつの間にいたのでしょう?

「どうかしたんですか?」

そう聞くとウサギは耳をピクピクさせて、凶さんにあげたナイフを咥えて渡してきた。

「手伝ってくれるんですか?ありがとうございます。」

さて、頑張らなくては……

ーーーー数時間後ーーーー

「出来ました……」

結構つかれてしまいました。でも、その分出来はとてもよかったです。
ウサギさんたちも手伝ってくれました。今は向こうででピョンピョン跳ねて喜んでいます。
そうだ、これを作ったご褒美に何かしてもらいましょう。何にしましょうか?
そう考えていると神は……

「うふふふふ……」

自分でも気付かずに、黒い笑みを浮かべて笑っていた……

ーーーSide凶ーーーー

――――ゾクリ――――

……なんだ、今一瞬だけ悪寒がした。

「……どうかしたの？」

「いや……なんでもない……」

「そう。あ、ほら、着いたわよ？」

そう言って永淋は前のほうを指差した。そこには……

「これは……すごいな……」

そこには奇麗な湖があった。

……俺が昔修行で行っていた湖よりも奇麗で大きい。

「うふふ……」

「……どうかしたのか？」

「いえ、あなたでもそんな顔するのね。」

「？」

「あら、気付いていないの？　じゃあ、教えない。」

「気になるが……まぁいい。」

そんなやり取りをしながら時間が過ぎていった……

「……そろそろ帰りましょうか。」
「そう、だな」

あのあと湖に入って魚を取ったり、水を掛け合ったりして遊んだ。
さすがに暗くなっていたので帰ることにした。あの子が心配しているだろうしな。
……そう言えばあの子の名前はなんだろうか?帰ったら聞いてみよう。
そんなことを考えながら家に帰った。

「ただいま」
「……ただいま」
「おかえりなさい、凶さん、永淋さん。」

家に帰ると幼女神ウサギが出迎えてくれた。
どうやら頼んでいた腕輪も出来たらしい。

「これは……中々いいな。」
「そうですか、それはよかったです。」

腕輪はかなりいい出来だった。

付けてみると、確かに力が出しずらくなった感じがした。

「……何か礼がしたいな。」

「……そうですか？じゃあ夕食の後にお願いしますね？」

「わかった」

俺は今、幼女神と一緒に風呂に入っている。

……どうしてこうなった……

夕食の後、何のお礼が言いか聞いてみたところ……

「今日はわたしと一緒にお風呂に入ってください。

そして、わたしと一緒に寝てください。」

と、言われたのだ。さすがに駄目だろうと思った。

子供のころ聞いたが、女性はあまり男性に自分の肌を見せてはいけないらしい。

だから断ろうとしたら……

「……（ジワ～）」

……今にも泣き出しそうになったのだ。仕方ないので一緒に入るこ

とにした。
途中、永淋が弓を攻撃してきたが、全部打ち落としてやった。

「……」
「♪（ニコニコ」

言わずもがな、上が俺で下が幼女神である。
ちなみに、当たり前だが二人とも隠すところは隠している。
そういえばこの子の名前を聞こうとしていたのを忘れていた。

「……一つ訪ねてもいいか？」
「なんですか？」
「君の名前はなんていうんだ？」
「わたしの名前ですか？……ありません。」
「……なに？」
「わたしのように階級が高くない神には、まだ名前がないんです……」
「不便だな……よし、俺がつけよう。」
「え？」
「そうだな……君は今から瑠璃（るり）だ。」
「瑠璃……はい、わたしは今日から瑠璃と名乗ります！」

とても嬉しそうだ。よかったよかった。
……そろそろのぼせてきたな。出よう。

「そろそろ出よう。」

「はい。」

そう言って二人して湯船から出た。ちなみに着替えは自分の部屋で済ませた。

ーーーSide瑠璃ーーー

「瑠璃(るり)……わたしの名前……」

わたしはお風呂から出た後も自分の名前のことを考えていた。
凶さんがつけてくれた名前。とても嬉しかった。
わたしはパジャマに着替えて布団に潜り込んだ。
しばらくすると……

「入ってもいいか?」
「あ、どうぞ……」

そう言って凶さんが部屋に入ってきた。
暗くてよく見えなかったが、目を凝らすと黒のパジャマを着ているのがわかった。
そのままわたしのほうまで近づいてきて、

「失礼するぞ。」

そう言いながら布団に入ってきた。
わたしは、自分でもわかるくらいドキドキしていた……

ーーーSide凶ーーーー

俺は瑠璃の断った後布団に入らせてもらった。
しばらくすると、瑠璃が話し始めた。

「……今日、あなたに名前を付けてもらってとても嬉しかったです。
わたしは今まで『神様』としか言われませんでした。
だから、名前というものに憧れていました。
でも、付け方がわからなくて、ずっと『神様』で通ってきました。」
「そうか、それなら君は俺が付けた名前を使うといい。
途中で変えようが、変えまいが君の自由だ。」
「はい。……あの、もっとそっちにいってもいいですか？」
「ああ、構わない。」
「ありがとうございます……」

そして瑠璃の体が俺に近づく。
そのまま俺の胸元に顔をくっつける。

「あったかいです……」
「それはよかった。……もう寝るといい。」
「はい。……あの、寝る前にお願いが……」
「……何だ？」
「もう一回、瑠璃って呼んでください……」
「……あぁ……お休み、瑠璃。」
「……お休みなさい、凶さん……」

最後にそう言い俺たちは眠りについた……

次の日の朝、永淋の機嫌が悪かったのは言うまでもない。

第7話：幼女神のお願いと名前（後書き）

で、できた……！

途中でなにを書いてるかわからなくなったけど、何とか終わった……

さて、幼女神の名前が決まりました。

瑠璃（るり）です。

なんとなく響きが良かったのでこれにしました。

センスがなかろうとこれにしました。

第8話：マジで死ぬかと思った（前書き）

今回の話が終わったら、瑠璃を帰らせます。

第8話：マジで死ぬかと思った

チュンチュンと鳥の鳴く声が聞こえる。
鳥よ、俺にはお前たちが何を言っているかわかるぞ……

『凶さん、凶さん。から揚げにしてくださいでチュン。』

よしわかった、今度から上げにしてやろう。
鳥達とそんな事を約束しながら俺はゆっくりと目を開ける。
……ああ、そういえば瑠璃と一緒に寝たんだ。

「……瑠璃、朝だ起きろ。」
「ん～……凶さ～ん……えへへ～……」

……どんな夢を見てるんだ？とにかく起きてもらわなければ。
俺は瑠璃の事を揺らす。

「ん～……？……あ……凶さん……おはようございます……」
「……おはよう。」

眠い目をこすりながらも何とか起きてくれた。寝癖がすごいな……

「瑠璃、とりあえず顔を洗って来い。そして着替えるんだ。俺は自分の部屋に戻る。」
「……は～い……」

若干寝ぼけている瑠璃を置いて、自分の部屋に戻って着替えをすませる。
そして部屋を出ようとしてドアを開けたら、永淋が待っていた。

「……おはよう。どうかしたか？」
「……おはよう凶。あなた昨日あの子と寝たわよね？」
「ああ、一緒のベッドで寝たが……どうかしたのか？」
「……凶、昨日ね、上の連中が私のボディガードをしているあなたの実力が知りたいって言ったのよ。」
「？」

急の話を変える永淋。……なんだか目が怖い。

「それでね、あなたの実力を知るために、今日は私とある場所に行ってもらおうと思ってるの。」
「そうなのか？」
「えぇ。……でも、またあとで説明するわ。まずは食事をとりに行きましょう？」
「ああ。」
「楽しみにしててね？……うふふ……。」

永淋が怖い。そんなことを思いながら、俺は食事をとりにいった。
今日の飯はなにかな……

朝食をとった俺は、永淋に案内されてとても大きな建物の前に立っている。
永淋曰く、「この中であなたの実力を測るテストを行うわ」らしい。

「何をしているの？行くわよ？」
「ん？ああ、すまない。あまりにも大きな建物だからな。」
「そう？でも中はもっとすごいわよ？」

なんだと？これよりも凄いと言うのか？
それは楽しみだ。そんな事を期待をしながら中に入った……

「思っていたよりすごくないな。」
「すごいのは貴方の実力を見るを場所よ。」
「そうなのか？」

そう言って受付のような場所に進む。そこには若い女性がいた。

「おや、永淋様。本日はどういったご用件で？」
「ええ、横にいる彼。『凶道　進』についてよ。上のほうから聞いてない？」
「そういえば……申し訳ありません。ではお通り下さい。」
「ありがとう。」

そう言われて進む。途中「ご愁傷様です」と聞こえたが気のせいだろう。
気のせいであってほしい。

「ここよ。」

そんなことを願っていると、やたら大きな扉の前まで来ていた。
いつの間にか着いていたらしい。
その扉は、鉄の扉。手で軽く小突いてみるとかなりの厚さだということがわかる。
その扉が重い音を立てて開く、そこには

「……ジャングル？」

まさにそうとしか表現できない。
気が辺り一面を埋め尽くしており、あっちにもこっちにも見たことのない生き物がいる。
……キマイラのようなものまでいる。

「ここはね、この都市で作られた人工生物の失敗作を破棄するところなの。」
「……ここで俺に何をしろと？」
「ここで失敗作から逃げ回ってもらうは。５時間くらい。」

５時間！？冗談じゃない！俺を殺す気なのか！？

「永淋、さすがにおｒ「拒否権はないわよ？」……」

ですよねー。

「じゃ、頑張ってね。……さようなら……」

そう言って、永淋が消える。というか最後にさよならって言ったぞ？

後ろを見たら、ドアが消えてた。……永淋め……帰ったらお仕置きをしてやる。

「仕方ない、進もう。」

ーーーーSide永淋ーーーー

「ふぅ……」

あの場所に凶を置いてきた後、私はモニタールームから凶の様子を見ていた。

本当は上の連中には凶のことは言ってない。

これは凶へのお仕置きだ。この前からずっとあの女の子の相手ばかりしていて。

ちっとも私の相手をしてくれない。あの『失敗作』というのも嘘だ。

あれは私が様々な妖怪をもとに独自に作り上げた妖怪なのだ。つまりは「人工妖怪」だ。

あの「人工妖怪」は中級妖怪よりも強い。中には上級妖怪並の強さのやつもいる。

あそこで凶が泣きながら許しを請えば、すぐに助けるつもりだ。

……請わなければ5時間頑張ってもらう。

「ふふふ……」

私は気づかぬ内に笑っていた。

ーーーSide凶ーーー

「はぁ……」

思わず溜息を吐いてしまう。何故ならば……

「「「がぅ！」」」

俺の目の前には狼もどきがいるからだ。五匹くらい。実はさっきも出てきた。

弱いのならまだ我慢できる。しかし強いのだ。一匹一匹が中級妖怪並みの力を持ってる。

鬱だ……帰ったら寝よう……

「「「「がぅ！」」」」

そんなことを考えていると　狼もどきが襲い掛かってきた。

ここに来るまでも色々な奴と戦ったがこの狼もどきが一番弱かった。

ちなみに一番強かったのはキマイらもどきだ。中の上くらいの強さ

があった。

「消えろ！」

そういいながら右手からレーザーを出す。すると3匹倒せた。後二匹だ。

ちなみに、俺はこの未来都市に来てからずっと人になっている。永淋の護衛で森に入っても人のままだ。

クックルになって戦うと地形が変わりかねん。

「オギャーウ！」

下らないことを考えてると、狼もどきが変な声をあげて突っ込んできた。

俺は攻撃を交わすと、すぐさま突っ込んできた狼もどきの頭をつかんで握りつぶした。

メキャッ、と嫌な音を立てるとすぐさまケチャップになった。……グロイ。

さて、あと一匹……

「……ん？」

……いなくなってる……逃げたか？まぁいいか。

でてきても、どうとでもなるしな。

「……進むか。」

俺はどんどん奥へと入っていく……

ーーーSide永淋ーーーー
あれから1時間くらいたった。
ずっとモニターを見ているが、凶は弱音をはかない。
たまに嫌そうな顔をするくらいだ。

「中々しぶといわねぇ……」

まだ凶に襲い掛かってるのはそこまで強くないやつらだったが、このまま進めば間違いなく上級の妖怪が出るだろ。
そうすると私では助けにいけない。その辺のやつらだって私にとっては危険なのだ。
まぁ、さすがの凶も、やられそうになったら本気を出すだろう。

ーーーSide凶ーーーー

ときおりやってくる妖怪を倒しながら進む。
別に、全部殺す必要はない。めんどくさいし。力加減を間違えないかぎりは半殺しですむ。
しかしだいぶ進んだな～……

「ん？あれは……」

俺が見つけたのは湖。助かった。ちょうど水が飲みたかったんだ。

「行く「キシャー！」……頼むから水を飲ませてくれ。」

そんなに俺に不幸を背負って欲しいのか？
声が聞こえたほうを見てみると……はて？何もいないぞ。
そう思ったら下にいた。……小さいな。
猫っぽいのがいたのだ。体の毛は紫。耳の穴から牛の角のようなものが生えていた。
そして背中にはこうもりの羽が。ヨワソー。

「はぁ……ほら、あっちに行っていろ。」

そう言って俺は湖に向かおうとする。
すると猫っぽいのは俺が何もしないのを知ると、トコトコと後を付いてきた。
俺はそれに構わず湖に行き、水を手ですくって飲んだ。……美味い。
猫っぽいのを見るとこちらを見ていた。

「……お前も飲むか？」
「キシャ！」

変な声を出しながら頷く。……なんだか情けない鳴き声だな。
俺は猫っぽいものを手招きし、片手で水をすくって猫っぽい生き物の前に差し出す。
猫っぽいのは警戒もせずにピチャピチャと音を立てて飲む。

「お前は迷子になったのか？」
「キシャー……」

そう聞くと耳が下にさがる。なるほど、迷子か。

「親はいるか？」

「キシャー。」

首を横に振る。いないのか。それは危険だな。ここじゃ殺されかねんぞ。

どうするか……

「・・一緒に来るか？」

「キシャー！」

首を縦に振る。

「そうか、俺は凶道　進だ。お前には名前があるか？」

「キシャー」

首を横に振る。ないのか。なら付けてやろう。

「なら、お前は今日から……そうだな。俺の名前からとって道進（どうしん）だ。」

「……キシャー？」

「そうだ、俺の凶と言う文字以外をやる。俺は……今からただの凶だ。」

「キシャー！」

「ああ、よろしく」

俺がそう挨拶すると、肩に飛び乗ってきた。……軽いな。そして小さい。

しかし・・

「キシャー。」

「……」

キシャーしか言わないのは会話が不便だな。まぁ、何となくわかるからいいがな。

そんなことを考えていると……

「ッ！？」

ものすごい妖力を感じ、振り返ると……

「グオオォォォっ！！！」

そこには5メートルはある巨大な怪物がいた……

ーーーSide永淋ーーー

モニターを見ると私は焦った。

そこにはこの私でさえ見たことのない巨大な人工妖怪がいたのだ。

おかしい。あんなのは作っていない。まさか他の人工妖怪を取り込んで巨大化したのか？

そう考えると、なぜ凶の目の前に上級の人工妖怪がいないのかわかった。あいつが食ったのだ。

「凶……貴方でも厳しいわよ？」

そう言いながら、私はやりすぎてしまったという罪悪感でいっぱいになった……

ーーーSide凶ーーー

「キシャー！！」

「……まずいな。」

道進が威嚇しているがそんなものは意味がない。

あちらの妖力はかなりのものだ。

……しかし少し妙でもあった。妖力にバラつきがあるのだ。

まるで様々な妖怪を取り込んだかのような……まさか……

「……ここら一帯の強い妖怪を食ったのか？」

おそらくそうだろう。それならばあの怪物・・妖怪であろう。

あの妖怪があれほどの妖力を持ってるのも頷ける。

少し戦いづらい。クックルになればすぐに倒せるだろう。

しかし、こちらには道進がいる。道進の妖力は小さい。

そんな状態で俺が力を全開にしたら、それだけで死んでしまうだろう。

「ルオオォォォォォォッ！！！」

どうするか悩んでいると妖怪が前足で攻撃してくる。
この妖怪の容姿は獣と龍を合体させた感じだ。
前足の攻撃を後ろに下がってかわし、槍を作って投げる。
ガキン！と、いう音が響くが、あの妖怪の体を覆ってる

龍のような鱗には効かない。そして妖怪が口から炎の息吹を出す。
熱っ！ものすごい熱さだ。一瞬の油断が命取りになった。
妖怪は巨大な尻尾で俺をなぎ払ったのだ。メキメキッ！と、いう音が聞こえる。
そのまま木に叩きつけられてしまった。

「キシャー……」
「……心配ない。」

道進は攻撃される前に抱きかかえたので無傷だ。若干体が痛いがまだまだ戦える。
俺は仕返しとばかりに丸太ほどある巨大な鉄の槍を作り出し、片手で相手に思いっきり投げる。
すると妖怪の右前足に突き刺さる。

「ガアァァァァァッ！！！」

そう叫びながら妖怪はのた打ち回り始めた。
俺はさらに右手を突き出し、そこから赤と青のプラズマ弾を発射する。
すると刺さった鉄の槍に吸い込まれるように進んでいく。

「グルァアアアァァァッ！！！」

鉄の槍に当ったプラズマ弾は、槍を通って傷口に侵入する。
内側からやってしまえばこちらのものだ。
案の定、妖怪はかなりダメージを受けたようだ。
ちなみに、槍は解けてしまった。
妖怪は全力とばかりにこちらに突っ込んでくる。
こちらは先ほど同様、巨大な槍を作って今度は両手で持つ。
そして、そのまま妖怪に突っ込む。

「ルオォォォォォォォツ！！！」
「ぬおおおおおおおおっ！！」

――――ブシュッ！！――――

「ウォォォォン……ッ！」

数十秒だったかもしれない。
それくらいの時間が経つと、妖怪は最後に低く唸ってドサリと倒れた。

「……」

俺は無言で自分の右腕を見る。
そして、何とか右腕を見るとそのまま倒れた。

……最後に見たのは肩から先が無くなった右腕と、俺の無くなった右腕を見ながら騒いでる道進だった……

ーーーーSide永淋ーーーー

私はすぐに凶のところまで走った。
モニターで凶が妖怪に巨大な槍を投げてるところから見るのをやめて、すぐにモニタールームを飛び出してきたのだ。
湖までひたすら走る、途中、木の枝などで服が少し破けたようだが気にしない。
湖に着いた私は目を見開いた。妖怪が胸に穴を開けて倒れていたのだ。きっと凶が倒したのだろう。
あわてて凶を探す。すると凶が倒れていた。近くには凶を心配そうにしている小さな妖怪がいた。

「凶っ！！」

そう叫びながら急いで凶に近づく。一瞬、妖怪が毛を逆立てて威嚇して来たがそれを放って置いて凶に近づく。
……凶の右腕が無くなっていた。私は泣きながら凶の左腕を肩に回し走った。はやく治療しなければ！
小さな妖怪も付いてきた。私は走りながらひたすら謝り続けた……

ーーーSide瑠璃ーーーー

「凶さんと永淋さんはまだでしょうか……」

わたしは永淋さんの家でお留守番をしていた。
二人とも用事があると言って出かけてしまったのだ。
現在、わたしはソファーでゴロゴロしている。
そこへ、もこもこなウサギさんたち寄ってきた。

「暇ですねえ～……」

そう言いながらウサギたちの頭を撫でていく。もふもふ～……
そんな感じでまったりしていると、突然『バーン！』と、ドアを強く開ける音が響いた。
それに驚き、急いで玄関まで向かうとそこには……

「凶さん!?永淋さん!?」

何故か右腕を失っている凶さんと、泣きながらその凶さんに肩を貸しながら泣いている永淋さんが……

ーーーSide凶ーーーー

知ってる天井だ……

「ん……」

どうやら俺の部屋らしい。……そういえば、俺は妖怪と戦っていて倒れたのだった。
あの時、右腕が食われたが……そう思いながらチラリと自分の右腕を見る。
……新しい腕が生えていた。便利だな。
しかし、新しく生えた右腕は何故か黒く染まっていた。
はて、何故だろうか？そんなことを考えているとドアが開いた。

「……きょ……う……？」

ドアを開けたのは永淋だった。俺を見て驚いた表情をしている。そして……

「凶ッ！！」

そう叫びながら俺に飛びついてきた。しかも泣いてる。

「ごめんなさい……！私のせいで……！」
「……」

とりあえず、どうしたらいいかわからなかったので、永淋の頭を撫でてやる。
しばらく泣き続けたあと、ゆっくりと俺から離れる。

「……落ち着いたか？」
「……うん……」

なんか知らんが永淋が子供っぽくなってる。

「……それで、どうなったんだ俺は？」

「それは……「凶さん！！」

永淋が何か言おうとした時、瑠璃が肩に道進を乗せ、俺の名前を叫びながら入ってきた。
瑠璃の後を続くようにウサギたちも入ってきた。
そして瑠璃は、そのまま俺に飛びついて来た。……瑠璃、君もか。

「……凶さん……えっぐ……本当に……ひっく……よかったです……。」

泣きながら俺にそういう瑠璃。気がつけばウサギたちは俺の布団によじ登ってピョンピョン跳ねていた。
……道進、お前は跳ねなくていい。俺は瑠璃を抱きしめながら泣くのを待った……

あのあと、泣き止んだ瑠璃を離して永淋にいろいろ聞いたところ、どうやらあそこにいた妖怪たちは永淋が作ったらしい。
で、最近俺が構ってくれないから少し懲らしめようとしたらしい。
……はぁ……

「永淋。」
「っ！」

ビクッ！と、驚く永淋。俺は永淋に手を伸ばす。
永淋は、殴られると思っているのか目を瞑っている。
俺は、目をつぶっている永淋をそのまま……

「……え……？」

抱きしめた。

永淋は、俺の予期せぬ行動に驚いてる。

「……馬鹿だな、お前は。言ってくれれば相手くらいしてやるのに。」

「……う……ぐす……」

俺がそう言うと、永淋は『ごめんなさい』と言いながら再び泣き出した……

ちなみに、このあと永淋は瑠璃に怒られた。

俺は今、自分の部屋にいる。まだ心配なので、安静にしてるよう言

われた。
瑠璃は自分の部屋に戻り、道進はウサギたちと寝るらしい。永淋は……

「スゥ……スゥ……」

俺と寝てる。
瑠璃に怒られたあと、瑠璃が「何かあった時心配なので、今日はあなたが凶さんと一緒に寝てください。」と言ったらしい。
俺は、永淋の頭を撫でながら、寝顔を見ている。……さすがに寝る時なので帽子は取っているようだ。

「……おやすみ、永淋。」

そう言って、俺は眠りについた……

第8話：マジで死ぬかと思った（後書き）

瑠璃、出番なし。
ついでに新キャラ登場。猫っぽい妖怪、「道進」
次は、瑠璃が帰ったあとの、日常の一コマを書きます。
そろそろ物語りを進めよう。

第9話：神が帰って戻った日常（前書き）

瑠璃は今回の話にはほとんど出ません。

第9話：神が帰って戻った日常

俺は今、ソファーで道進と一緒にゴロゴロしてる。瑠璃は今朝方帰ってしまい、永淋は仕事でどこかに行ってしまった。
そんなわけで、今、家にいるのは、ウサギと、使用人たちと、俺と道進だ。
暇だから使用人の手伝いをしようとしたら、「もう終わります」と言われてやらせてもらえなかった。
あ、そうそう。腕は完璧に治った。

「暇だな……。」
「キシャ」
「どっか行ってくるか。」

俺はそう言うと、道進を置いて廊下に出た。道進は、俺を追ってトコトコ付いてくる。
道進は家から出てはいけないらしい。人工のものとはいえ妖怪だからだそうだ。

「じゃあ、行ってくる。ちゃんと留守番していろよ？」
「キシャ！」

任せろと言わんばかりに道進が左前足を前に出す。それを見た俺は、外に出た。

都市は今日も賑やかだ。あっちでは買い物、こっちではおばちゃん達が雑談しており、向こうでは若い男たちがケンカしている。……そういえば最近知ったが、永淋たちは長生きらしい。穢れがどうのこうの言っていた。

「さて、どこに行くかな……」

とりあえず近くにあるそこの店に行ってみよう。
そう思い近くの店まで来る。名前は……

『ムハァ店』

……入るのやめようかな。怪しい匂いがしてしょうがない。
うん、やめよう。そのまま回れ右をして戻ろうとすると……

「お客さん、店の前まできておいてそれはないんじゃない？」

「……」

前におかしなおっさんがいた。おかしいなんてもんじゃない。
まずアヒルの帽子を頭に被り、服装はバレリーナ着るあれだ。しかも股間の部分からアヒルの首が伸びている。
右手には鞭を持っていて、左手には蝋燭。…絶対に危ない奴だ。

「……何よ、その目は？」

不審者として警察に通報しようか？

「私の格好はともかく、この店はおかしな店じゃないわよ？」

「……その格好で言われても説得力がないぞ？」
「いいから！寄って行きなさい！」

そう言いながら俺の背中を押して店に入れる。…おや、思っていたより普通だ。
店の中には普通の歯ブラシやタオルといったものから、お菓子などもある。
全体的に明るい感じの店だ。しいて言えば、周りの同じような格好をした男たちがいるのが邪魔なくらいだ。

「どう、そこまで辺じゃないでしょ？」
「ああ。だがこの周りのお前と同じ格好をした男たちが邪魔だ。」
「失礼ね。彼はこの店のマスコット的存在なのよ？」
「……苦情がくるぞ。」

そんな会話をしつつ俺は店の品物を見る。…ん？あれは……

「煮干……」
「？そうよ。」

そういえば道進は魚が好きだったな。留守番で暇だろうし。買って行ってやろう。

「これをくれ。」
「えぇ、袋に包んでおくわね。買ってくれてありがとう。」

金を払って店から出る。あそこは好きにはなれないが、店の品揃いはいいらしいのでまた行こう。

「ふぅ～……」

なんだかんだで暗くなってきた。そろそろ帰らないとまずいな……

「もし、そこのお方。」

声のしたほうを振り向くと、占い師っぽいおばあさんがいた。

「何かようか？」

「いえ、少し貴方を占いたくなったもので……代金は要らないので占わせてもらえませんかのぉ……？」

「……まぁ、別にかまわんが。」

「ふぉっふぉっふぉっ。では始めましょうかの。」

そう言うと懐から水晶玉をとりだした。

そしてぶつぶつと何か唱え始めた。……ちなみに、俺は占いは信じないタイプだ。

「出ましたじゃ。」

不意に占い師がそう俺に言う。

そしてしばらく神妙な顔つきになり……

「……あなたはいつの日か戦いで大切な友、又は家族を失くしますじゃ。

あなたはそのせいで自分の大切なものをなくしますのぉ。そして、しばらくの間、力を求めますじゃ。

ですが、またしばらく立つとまた自分の失くしたものが戻りますじゃ。ただし、前者は戻りませぬ。」

「……そうか。」
「まぁ、所詮占いですからのぉ。あまり問題ないじゃろうて。では、これで」
そう言いながら占い師は闇に消えていった。
俺もいい加減に帰った方がいいと思い、そのまま家に帰った。

家に帰ったら永淋が遅くまで外に出てたことを説教した。煮干は道進にあげた。喜んで食べてくれた。

第9話：神が帰って戻った日常（後書き）

はい、というわけで9話おわります。
次は占い師のいった通り、凶が大切なものを二つ失くします。

第１０話：守ッテ・失クシテ・壊レタ『凶鳥』（前書き）

そろそろ物語りが進みます。

第１０話：守ッテ・失クシテ・壊レタ『凶鳥』

なんやかんやあって１００年立った。何？適当？気にするな。
ここ１００年あったことをさらりと説明しよう。まず、永淋だが、立派になった。あの少女がよくもまぁ、立派になってくれたものだ。１００年立ったのに、見た目は２０歳前半の感じの女性になってからそのままだ。
次に瑠璃、彼女はたまに遊びに来る、１年に一回か二回くらい。
ちなみに、よく永淋を見て「私だって本当はもっと……」と言いながら自分の体をみてる。
ウサギはみんな死んでしまった。寿命だそうだ……。
道進はあいかわず小さいままだ。１００年もたったのに、下級妖怪の上くらいの力しかもっていない。
俺は１００年たっても変わらない。
そんなある日……

「ねぇ、凶。私たち、月に移住することになったの。」
「……月？」

永淋が月に行くと言い出したのだ。……冗談か？だったらその服のセン「ヒュン！」「パシッ！」
……。

「……永淋、お前の弓は簡単に人を殺せるんだからむやみやたらに撃ってくるな。」
「あなたが変なこと考えてる気がしたから……」
「……」

恐ろしいな。そう思いながら、掴んだ弓矢を永淋に返す。

「ありがとう。それで、月に行くことになったのよ。」
「……何故だ？」
「最近妖怪が強くなっているでしょ？そのせいで穢れがどんどん酷くなってるのよ。
私たちは穢れの多い場所では長く生きられないのよ。」
「なるほど……で、いつ行くんだ？」
「三日後よ。ただ……」

永淋が急に暗い顔になる。どうしたんだ？

「……半数の人間を地上に残すの……」
「……何？見捨てるのか？」
「そうね……実はもうすぐ妖怪がこの都市に攻めてくるの。
ロケットを作ったんだけど、全員を乗せることは不可能。
だから、半分は月に、半分は地上にと言った感じよ。……ちなみにこの事は上層部と私以外はしらないわ。」
「……そうか。」
「凶、他人事みたいに言ってるけど、あなたと道進も行くのよ？」
「なんだと？」
「だって私のボディガードよ？」
「……そうだな。」

どうやら勝手に決められていたようだ。

「とりあえず、もうすぐ妖怪が来てしまうの。妖怪が来るのが四日後。
だから大丈夫よ。」
「……永淋、脳ある鷹は爪を隠すんだぞ？」
「なんのこと？」

「…なんでもない。」

永淋はまだまだ甘いな、妖怪が絶対に四日後に来るなんてわからないのだ。運が悪ければ明日かもしれない。

「……もう夜も晩(おそ)い。そろそろ寝よう。」

「そうね、おやすみ。凶。」

挨拶を交わしたあと、俺は自室に戻った……

ーーーーSide永淋ーーーー

凶が部屋に戻った後、私は考えた。

『…永淋、脳ある鷹は爪を隠すんだぞ?』

彼は私にそう言ったのだ。そもそも鷹とはなんだろうか?(※この時、まだ鷹は存在していません。それっぽいのはいましたが。)あいかわらず凶は不思議だ。例えば、凶は私に、「離れた所でも話が出来る機械を作ろう』と、言い私にその機械の作り方を教えた。それは「電話」と名づけられ、一般家庭にも配られた。なぜ作りかたを知っていたんだろう?

そんなことを考えていると……

『トゥルルル、トゥルルル』

と、電話の音が聞こえたので、受話器をとって電話に出る

「もしもし」

『もしもし、永淋君かね。』

「はい、上層部のかたですね？」

『ああ、例の計画だが……』

「はい……はい……わかりました。ではこれで。」

そう言い受話器を元に戻す。どうやらロケットを作る人手がたりないらしい。

だから、ロケットが出来るまで、私も手伝うように言われたのだ。

明日から大変だ……。

「はぁ、もう寝ましょう……」

そう言い私は自室に戻った……

ーーーSide凶ーーー

次の日から、永淋が朝早くに家を出て夜遅くまで仕事をして帰ってくるようになった。

俺は朝から晩まで暇だ。そして二日後……

「ただいま……」

「キシャー。」

「おかえり、永淋。」

今日も永淋がクタクタになって帰ってきた。そんな永淋に俺と道進はおかえりと言う。

俺は、永淋を座らせると、すぐに茶を入れてやる。永淋はその茶を飲んで落ち着くと口を開いた。

「今日、やっとロケットが作り終わったの。」

「……そうか。よかったな。」

「ええ、本当よ。それで明日、ロケットで月に行くの。時間は、昼の1時ごろよ、忘れないでね？」

「あぁ、わかった。」

「……ねぇ、凶。あなたなんだか顔が優れないようだけど、どうかしたの？」

「……いや、問題ない。今日は寝るよ。おやすみ、永淋。」

「？おやすみなさい。」

俺は自室に戻り、ベッドに潜り込んだあと、一人で考えていた。

……胸騒ぎがするのだ。なんだか嫌な予感しかしない。俺はなんとなく窓のほうを見てみた。

そこには明日行くはずの月があった。ただし赤い、血のように赤く染まっていた……

次の日、俺は永淋に叩き起こされた。文字通り、叩き起こされたのだ。しかもハンマーで。
痛い腹をさすりながらロケットの所へと向かう。朝食はとってない。……俺が寝坊したから。
ちなみに、永淋は食べた。そんなことにガッカリしていると……

「あそこよ。」

そこには、以前に見た人工妖怪の建物よりさらに巨大なロケットがあった。……こんなに大きいのに、なぜ気づかなかった？俺。

「これは……でかいな。」
「本当にね。私もそう思うわ。じゃあ、凶は少しまってて、最後に点検をしてくるから。」
「ああ、わかった。」

そう言い、俺は近くにあった椅子に座った。
ああ～、楽だわ～……そんな感じに羽を休めていると――――
バタンっ！

「大変です！永淋様！」

いきなり作業員の男が入ってきてそう叫んだ。椅子から落ちてしまったではないか。

「何があったの？」
「そ……それが……」

男は震えながら静かに、こう答えた。

「妖怪の大群が現れましたッ……！」

その場にいた俺以外の全員が固まった。無論、永淋もだ。

「そんな……だってまだ一日あるのよ！？どうして……」

めっちゃ焦ってるな。永淋。普段は冷静なだけあっておもしろい。

「それが……やつらはどこからか情報を手に入れたようで……」

「そんな……」

いきなりその場の全員が騒ぎ出した。「死にたくない！」や、「助けてくれ！」と言いながら神に祈りをささげているもの、「ママー！」とかいってる奴もいる。……スネチャマ、ママはここよ～、ってな。

「みんな、おちついて！」

そう永淋が言うと、みんな落ち着いた。

「とりあえず、妖怪は全部で何匹くらいいるの？」

「報告によると、１０００以上だそうです……」

「そんなに……」

１０００か……

「…俺が行こう。」

「!?　凶、あなた何を言っているの!?いくらなんでも無茶よっ!」

「そう言うな。すぐ終わる。」

俺はそう言い、扉に向かう。すると道進が肩に飛び乗ってきた。

「お前も来るか?」

「キシャー!」

「凶、待ちなさい!」

「……」

永淋の静止の言葉を無視しその場を離れた……

ーーーSide永淋ーーー

「凶、待ちなさい!」

私の静止の言葉を無視し、凶は扉を出て行く。私はその場にへたり込んだ。

なぜ、ちゃんと凶を止めなかったのだろう?凶が行かなくても地上

に残る人間たちが妖怪を倒すだろうに……

「凶、どうして？」

私は小さな声でそう言った。

「永淋さま、ロケットの整備を終わらせましょう。そしてすぐにあの方の所へ向かいに行きましょう。」

研究員の一人がそう言う。

「そうね……みんなすぐに自分の場所に戻って！」

すぐに終わらせて向かいに行こう。

そう思いながら、私はもとの作業に戻った……

ーーーSide凶ーーー

うわー……こなきゃ良かった。

今更ながら後悔する俺、あっちもこっちも妖怪だらけだ。

人間の皆様は都市に閉じこもってる。しかも全員武装した状態で。

ついでに道進も預けた。

「……本気を出すか。」

そう言い、俺は自分の腕輪をはずす。
外した途端に全ての力を解放する。いくら数が多くても、ほとんどは下級妖怪と中級妖怪だ。たまに上級妖怪も混じってるが、大丈夫だろ。クックル状態だし。

「殺るか……」

そう言い、俺は敵の真上から武器を大量に落とす。さすがに全滅はしないが、軽く５０は死んだだろう。
俺の攻撃で味方が死んだのを理解すると一斉に突っ込んできた。さて、もういっちょ行くか……そう思った途端――――

「「「うぉぉぉぉ！！！」」」

後ろからそんな叫び声が聞こえたので振り返ると……
引き篭もってた住民たちが未来銃のようなものを撃ちながら妖怪に突っ込んでいるのだ。

「凶ちゃーん！！！たぁぁぁすうぅぅぅけぇぇにぃぃぃきぃぃたぁぁわぁぁぁよぉぉぉぉ！！！」
「キシャーー！！」

変態なおっさんまでいる。なぜ俺の名前を知っている?そして道進、お前も来たのか。
まぁ、いい。俺は妖怪の大群に振り返りこう言った。

「死ぬ覚悟は出来ているだろうな?」

そのまま、妖怪たちに向かって突っ込んだ。

ーーーSide永淋ーーーー

「どうしてですか！！？」

私は机を思いっきり叩いてそう叫んだ。

「落ち着きたまえよ。考えても見ろ？あの中に突っ込んで勝つ見込みは？そんな勇気、君には無いだろう？たとえ出来たとしても、勝てんよ。それにあんな屑たちは月には必要ない。無論、君のボディガードもだ。」

私は冷静になった、確かに私が行ってもたいした戦力にはならないだろうしかし……

「それでも私は行きます。」

私ははっきりそう行った。きっと役に立たないかもしれない。足手纏いになるかもしてない。

最悪死んでしまうかもしれない。でも、かれは私のはじめての友であり、家族だからだ。それを侮辱されて黙ってるわけにはいかない。

そして他にも理由がある。しかし、私はそれがなんなのかわからない。

助けに行こうと思い扉まで歩くと……

「仕方ない、やれ。」

男がそういった途端、意識が途絶えた……

ーーーSide妖怪たちーーー

はじめは余裕だと思った。人間たちに戦争を仕掛けようと攻めたら、男が一人しかいなかったから。

おそらく、他の人間たちは街の中にいるのだろう。そんなことを考えていると……

「……本気を出すか。」

男がそう言いながら、腕輪を外す。

すると、男の体からありえないほどの量の妖力や霊力、魔力が出る。

そして男の容姿が変わった。それは鳥。足は大きく、鋭いクチバシ、そしてその目は死をもたらす目だった。

森にいた頃ある噂を聞いたことがある。

そのものをみつけたら決して手を出すな――

そのものを決して敵にまわすな――――

そのものと決して戦うな――――

そのものの目を決して見るな――――

そのものは凶暴で凶悪で、死という凶を敵に与え、絶望という凶を敵に与える鳥――――

――――『凶鳥』――――

「あ……あああ……ッ！」

こんな化け物に勝てるわけがない！そう思い逃げようとしたら――

――

『ズシュ！！』

何かが体に刺さる音。

それを聞いた後……俺の意識は途絶えていった……

ーーーーSide変態なおっさんーーーー

ちょっと！変態なおっさんじゃないわよ！ちゃんと名前を使ってちょうだい！

ーーーーSideネネメテロアルティミアバレリールグレシアムーーーー

それでいいのよ。

さて……

「ハッ！！」

凄いわね～、凶ちゃん。助けなんて要らないんじゃないかしら。

「死ネェ！人間！」
「どっせえええい！！」
「ガハッ！？」

後ろからなんて危ないわね。あら、凶ちゃんのところに妖怪が集まってるわ。
あら、すごいわねぇ、凶ちゃん。どこからあんなもの出したのかしら？
でも、まずいわねぇ……この戦い、人間が勝っても妖怪が勝っても凶ちゃんには良いことが無いかもしれないわね。
そうおもいながら、私は妖怪を倒していった……

ーーーSide凶ーーー

「残るは……お前たちだけだ。」

俺は目の前にいる妖怪たちを見ながらそう言った。ちなみに腕を組んでいる。クックルっていったらこれでしょ。

「くそ、凶鳥め！！」

凶鳥？たしかにクックルは凶鳥だが……まさか俺にもそんなものが付いたのか？
ただ……まぁ、

「凶鳥か……今の俺にはピッタリだな。……死ね。」

そう言い放つと、鳥足キックをお見舞いした、残り三匹。すでに戦意はなくなってる。

俺はそれに容赦なく武器を降らして全員切り刻んだ。……おわったな。

そう思い後ろを振り返ると……

「死ねぇ！化け物！」

そう言いながらレーザー銃を放ってきた。クッ！マズイ！そう思い目をつぶってしまう。……おかしい。痛みがこない。恐る恐る目を開けると……

「……ッ！？」

目の前には胸に穴をを開けて立っているおっさんがいた。

そして口から血を吐くと、おっさんは仰向けに倒れた。

「……なぜ……俺を助けたんだ？」

「……あなたは…昔の私に、すごく似てるのよ・・。」

「……俺はそんなに気色の悪い格好をしているのか？」

「あら……ゴフッ！……酷いわね……」

喋りながら血を何度も吐く、悲しいはずなのに涙が出てこない。道進も近くによってくる。

「最後に……人を……憎んじゃ……ダメ……よ……」

おっさんはそう言いながらゆっくりと目を閉じた。しばらくみていると道進が「キシャ～」、と鳴く。

「……邪魔が入ったか。ふん！まぁいい。おい！お前ら来い。」

目の前の男がそう言うと生きている人間たちがやってくる。

「……どういうことだ？」

「ハンッ！俺たち全員でお前を殺すんだよ。お前みたいな化け物、生かしたら何しでかすかわかったもんじゃない。だから殺すんだ。抵抗なんてするなよ？こっちにはこいつがいるんだ。」

男がそういうと、近くの男が何か見せる。

「道進ッ……！？」

道進だ。首輪のようなものがつけられている。おそらく、その首輪のせいで力が出ないのだろう。

「一歩でも動いてみろ。こいつが死ぬぜ？」

そう言い、男は銃をこちらに向ける。他のやつらもこちらに銃を向けていた。

「あばよ。」

男がそう言うとレーザーがこちらに飛んでくる。

気づいたときには体中に穴が開いていた。気づいたときには倒れていた。気づいたときには体が動かなかった。

「ククククク……アーハッハッハッハッ！馬鹿だなぁ、おい！俺がこの妖怪を生かすわけ無いだろ！？」

笑いながらそう言い、レーザー銃を向ける。……やめろ。

「クックックック、あばよ！」

やめろ！！！

――――ヒュン！――――

そんな音とともにレーザー銃が発射される。するとドサリと聞こえたので、なんとかその方向を見ると額に穴が開いた道進がいた。

――――ドクン――――

他の男たちが何かを言いながら笑っている。どうでもいい。

――――ドクン――――

なぜ殺した？俺たちがなにかしたのか？

――――ドクン――――

ゆっくりと立ち上がる。男たちが驚いている。どうでもいい。

――――ドクン――――

――――殺してやる！

「ウァァァァァッ！！！」

ーーーーSide永淋ーーーー

気が付いたら、ベッドに寝かされていた。……そうだ、私は気を失ったんだ

「気が付いたようですね。」

声のしたほうを見ると医者のような格好をした男が立っていた。

「あなたは？」

「あなたの治療を任された専門医です。」
「そう……」

……そうだ、凶だ。凶はどうしたのだろう？
まだ、戦っているのだろうか？生きているだろうか？
心配になって泣きそうになった。だから私は……

「ねぇ……少し席を空けてくれないかしら……？」
「……わかりました。」

男がそう言い出て行ったあと私は声を押し殺し泣いた。
しばらく泣いた後、

「……きっと、凶は生きているわ。あんなに強いのだから……。
だから、凶、いつかあなたに会いに行くわ……絶対に……。
でも、その前に、凶を侮辱したあいつらを……」

ある日、月で上層部の何人かが弓で殺された。弓矢には指紋はついていなかったが、目撃者の証言によると

「暗くてよく見えなかったが、頭に変な帽子を被っていた……。髪はかなり長く、編んでいた気がする。」
と証言したそうだ。

ーーーーSide凶ーーーー

「すまないな……約束は守れそうにないよ。」

あのあと、ひたすら殺戮を繰り返した。周りには誰もいない、いるのは俺一人だ。
俺は、道進とおっさんの墓を作った。
あの時、力があればこうならなかったのではないか?親しい友を作らなければ悲しむ必要はなかったのではないか?
……なら力を求めよう。すべてを壊せる力を。守る力なんて必要ない。

すべて壊してしまえば、失くす必要も無い。

「じゃあな……」

そう言い凶は去った。後に残ったのは二つの墓だけだった……

ある洞窟で化け物が眠りについた。
誰も寄せ付けず、誰も信用しない化け物は、眠りながら力をたくわえる。
今日も眠ったままだ。

第１０話：守ッテ・失クシテ・壊レタ『凶鳥』（後書き）

まずは一言。道進が好きだった人達、すいません。
いないとおもいますが、おっさんが好きだった人達、すいません。
今回は長かった。
次は、あの神様に出会うかも？

第１１話：洩矢神に起こされた凶鳥（前書き）

どっちの神にしようか迷った。
ちなみに瑠璃の出番はまだ先。

第１１話：洩矢神に起こされた凶鳥

地上にいる全てのものが死んだわけではなかった。少しの人間が生き残り、そこからまた神が人を創り、人間が復活した。そしてあの戦争をした人間たちは、あの戦争を「人妖大戦」として後に語り継がれた。
そしてこれはそれから３０００年たった後の物語・・

「まったく・・・。なんで私が・・。」

ぶつぶつと文句を言いながら歩いてる少女もとい、幼女。
髪は金色でショートボブ、紫のスカートと服を着ている。ぶっちゃけ壺装束みたいな服装だ。
服の至る所にかえるが描かれている。
白のニーソックスのようなものをしており、そして頭には目玉の付いた帽子を被っている。

「だいたい、なんで洩矢神のわたしが洞窟になんかに・・。」

そう、彼女はミジャクジ様を操れる土着神の頂点「洩矢（もりや）　諏訪子（すわこ）」である。
そんな彼女がなぜこんな場所にいるかというと、神社にお願いしにきた人間の願いを叶えるためである。
なんでも、村の近くに洞窟があり、その洞窟に村人が近づこうとすると倒れてしまうらしい。
このままでは村にまで被害が出かねない、助けてください。だそうだ。それを諏訪子は信仰のためにしぶしぶ行く事にしたのだ。・・・
ミジャクジを操れるならそちらを使えばいいものを・・・。

「あ、見つけた。」

遠目からではあるが目的の洞窟に付いたようだ。おめでとう、諏訪子。もといロリ神。

その洞窟に諏訪子が近づこうとした途端・・・

「っ！？」

ありえないほどの力を肌に感じたのだ。

それは大妖怪以上の妖力。そしてありえないほどの霊力。もう一つはわからない。

・・なるほど、と諏訪子は理解した。村人はこれに当てられたのだ。

諏訪子などの強い神とかならともかく、普通の人間がこんなものに当てられたら倒れるに決まってる。そういえば、ここへ来るまで妖怪もみなかった。

「・・これはちょっと真面目になったほうがいいかな？」

諏訪子はそう言いながら目つきを鋭くし、洞窟に入った。

凶は眠っていた。自身の体を鎖でグルグル巻きにしながら深い眠りについていた。

別に、凶は変な趣味をしている訳ではない。こうしないと力が少しだけ出てしまうのだ。

力が出れば妖怪が襲ってくる。だから、凶は力を封印して眠りにつ

いていた。だが、それももうむずかしくなった。
凶の力があまりにも大きくなりすぎたのだ。だから妖怪は恐れて入ってこないし、人間は近づけなくて入ってこない。
そんな、ある日・・

「ここでおわりか・・・？」

一人の少女が現れた・・・

ーーーーSide諏訪子ーーーー

洞窟を進んでいくと、すこしずつだが力をより強く感じるようになった。
なんだろう？まるで全てを拒絶するように感じる。そんなことを考えながら進んでいくと最終部までついた。

「ここでおわりか・・？」

そう思い、目の前をよく見ると男がいた。真っ白な髪をしている。
そしてなぜか、体中に鎖を巻きつけている。
どうやらこの男が力を出しているようだ。

「・・とりあえず、この鎖を壊して話を聞こう。」

わたしはそう言いながら「鉄の輪」を出す。神力を籠めたので、もはや神器と同じだ。

わたしはその鉄の輪を操って鎖に向かって投げた。

『ガキン！！』

え？なんで？わたしの鉄の輪が鎖によって弾かれた。ありえない。

確かにあの鎖からはなにか感じる。

しかし、神器と同等のわたしの鉄の輪は弾かれたのだ。

わたしはその男に近づき、鎖のどこかに仕掛けがないか調べた。

すると、鎖の垂れ下がってる先端部分に、丸い鉄玉がくっついていた。それに触れてみると・・

「えっ！？」

その鉄の玉が光だしたのだ。鉄の玉は光ながらピシピシとひびが入っていき、最後には粉々に割れてしまった。

その途端、鎖がジャラジャラと音をたてて落ちる。そして男の目がゆっくり開かれた。

・・ゾクリ・・・その目を見た途端、恐怖した。紅い深紅の美しい目、しかし、その目からは何も感じない。

悲しみも喜びも感じず、ただそこに「ある」だけの目。男はゆっくりと口を開き、こう聞いた。

「・・君は、迷子か？」

ーーーSide凶ーーーー

「・・君は、迷子か？」

つい昔の癖でそう聞いてしまった。永淋とあった時もそうやって聞いてたな。

まぁ、今はそんなことどうでもいい。目の前の少女だ。少女はかなり唖然としている。

だがすぐに現状を理解したようだ。なかなかおもしろい少女だ。

「・・・貴様はなんだ？」

「なんだ、と聞かれてもな・・・。生き物だ。」

「わたしのことなめてるだろ！？」

「少女を舐める趣味などはないぞ？」

「そう言う意味じゃない！」

何が不満なのだろうか？ひょっとして名前が知りたいのか？

「名前は凶だ。」

「・・・まぁ、いいや。わたしは洩矢（もりや）諏訪子（すわこ）だ。

さて、聞こう。なぜ貴様はこんなところにいる？」

「・・・初めて会った君には関係ない。」

「そうもいかない、貴様が力を流しているせいで、わたしの村の者たちがこの近くを通るだけで倒れてしまう。

わたしにとっては困る。信仰が減るからな。お前がここを出て行けば村人が被害にあう事はない。出て行かなければ・・・」

そう言いながら何処からか鉄の輪を何処からか出す。

そうそう今言う事じゃないが、さっき少女と話しているときに、俺の能力が変わっていたのを気が付いた。

前までは、『潜るか浮く程度の能力』という感じだった。だが確認してみたところ

『潜と浮を司る程度の能力』

になっていた。・・・何か変わったのか?もう一つの『想像したものを創造する程度の能力』はそのままだ。

「ていっ!!」

そんなことを考えていると少女・・もとい諏訪子が鉄の輪を投げてきた。俺はそれを右手で受け止める。

「なっ!?」

「これは・・・、神力が籠められてるな。しかもかなりの量だ。すごいな・・。」

神力は初めて見たな・・・。キレイな濃い黄色をしてる。

ちなみに、霊力は白、妖力は青、魔力は赤だ。

「くっ!このっ!」

俺が鉄の輪を受け止めて観察していると、諏訪子は鉄の輪を持ち、突っ込んできた。

・・近頃の若いもんは待つ事も出来んのか?

そう思いつつ、俺は諏訪子の攻撃をかわす。・・かわす度にヒュン

ヒュン音がなってるぞ?危なくないか?

「・・まだまだだな。」

そう言い、諏訪子の腕をつかむ。諏訪子はジタバタ暴れてる。暴れた拍子に諏訪子の鉄の輪が俺の足に落ちる。

・・なんだと?俺の足が奇麗に切れてしまった。・・また生えてくるよな?

「くっ!はなせ!この!」

「少し黙っててもらおうか。見ろ、君があんなものを持って暴れるから足が切れてしまったぞ?」

「知るかっ!」

「・・・仕方ない・・・。」

俺はそう言うと能力で鎖を作り、諏訪子をグルグル巻きにする。・・これでよし。

「さて、では聞こう。君はなんだ?神か?ん?」

「・・・・」

諏訪子は俺の質問に答えない。むしろそっぽを向いている。

・・・少し、脅すか。

そう思い俺は、自分の腕輪を外し、人の姿のまま全力を出す。

「なっ!?」

諏訪子がかなり驚いてる。・・・クックルの時ほどの力は出ないな。

今は3割くらいか?

「もう一度聞こう。君はなん「ゴスっ！」グハっ！」

聞き終わる前に上から大きな石が落ちてくる。なんだ！こんなときに！

そう思っていると、洞窟全体がグラグラ揺れる。どうやら俺の力に耐え切れず洞窟が崩れるようだ。

・・・やっぱ人の姿でも本気出すんじゃなかったなぁ・・。

「仕方ない。出るとするか。」

俺が回れ右をして洞窟を出ようとすると、

「こら、まて！わたしを置いていくきか！？」

チッ！めんどくさい。

俺は渋々と諏訪子の方へ戻り、方に担ぐ。

「ええぃ！降ろせ！鎖を解けばいいだろう！？」

「時間がかかる。めんどくさい。こっちの方が速い。以上だ。」

そう言い、俺は洞窟を全力で走る。

ーーーーSide諏訪子ーーーー

「・・君は迷子か？」

はい？何を言ってるんだ。こいつは？

・・いやいや、落ち着け私。とりあえず・・・

「・・・貴様はなんだ？」

うん、これだ。まずはこいつの正体を知ろう。
そもそも、コイツが何者なのか、私にはわからない。

「なんだ、と聞かれてもな・・・。生き物だ。」
「わたしのことなめてるだろ！？」
「少女を舐める趣味などはないぞ？」
「そう言う意味じゃない！」

確実にバカにしている！本当になんなんだ！？コイツは！？

「名前は凶だ。」

いや、名前じゃなくて種族が知りたいんだけど・・

「・・・まぁ、いいや。わたしは洩矢（もりや）　諏訪子（すわこ）だ。
さて、聞こう。なぜ貴様はこんなところにいる？」
「・・・初めて会った君には関係ない。」

む。なんなんだその態度は。少し脅してやろうか。

「そうもいかない、貴様が力を流しているせいで、わたしの村の者たちがこの近くを通るだけで倒れてしまう。
わたしにとっては困る。信仰が減るからな。お前がここを出て行けば村人が被害にあう事はない。出て行かなければ・・・」

わたしはそう言いながら鉄の輪を空中に作り出す。男は一瞬だけ驚いたような表情をする。

わたしは鉄の輪を操り、相手に投げつける。
当った！そう思ったが・・

「なっ！？」
「これは・・・、神力が籠められてるな。しかもかなりの量だ。すごいな・・。」

信じられなかった。あろうことか男は鉄の輪を手でつかんだのだ。
そして関心したように見ていた。

「くっ！このっ！」

そう言いながらわたしは鉄の輪を持って突っ込む。私の触っている部分以外は岩をも切ることができる。
わたしはそれで男を攻撃する。しかし何度やっても当らない。男はめんどくさそうにわたしの攻撃をかわすばかりだ。

「・・まだまだだな。」

男がそう言いながら、私の腕をつかむ。わたしはその手から逃れようと暴れるが、その拍子に手から鉄の輪を落としてしまった。すると男の足に落ち奇麗に足が切れた。・・中から覗く骨が怖い。

「くっ！はなせ！この！」
「少し黙っててもらおうか。見ろ、君があんなものを持って暴れるから足が切れてしまったぞ？」
「知るかっ！」

全然余裕そうじゃないか！？

「・・・仕方ない・・・。」

男がそう言うと、どこからもなく鎖が出てきて、私の体に巻きついた。
完全に巻き終わると、男が「やりきったぜ」といった顔をする。
そしてわたしに向かって

「さて、では聞こう。君はなんだ?神か?ん?」
「・・・・・」

と、質問してきたが、わたしは答えなかった。むしろこたえてやるもんか。
男はわたしが答えないのを知ると、少し考える素振りをみせた。
そして自分の腕についている腕輪を外した。

「なっ!?」

わたしは驚いた。なぜなら男の力が先ほどとは比べ物にならないほど出ていたからだ。
その時わたしは思った。「ああ、こいつを相手にしてはいけなかったんだ・・」と、
男がこちらを見てまた質問した。

「もう一度聞こう。君はなん「ゴスっ!」グハっ!」

話している途中で頭に大きな岩が落ちてきて、最後まで言えなかった。
・・・ん?岩?周りを見てみると、洞窟全体がグラグラ揺れていた。
・・・間違いなく、この洞窟は崩れるな。うん。

「仕方ない。出るとするか。」

男がそう言い、私に背を向ける。って、待て待て!!

「こら、まて!わたしを置いていくきか!?」

薄情にもほどがある。

わたしがそう言うと、男はさもめんどくさそうにわたしに近づき、担いだ。

・・・恥ずかしい・・。わたしはジタバタと暴れて言う。

「ええぃ!降ろせ!鎖を解けばいいだろう!?」

「時間がかかる。めんどくさい。こっちの方が速い。以上だ。」

本当になんなんだーーーーー!!

ーーーSide凶ーーーー

「と、いうわけで助かった。よかったな。」

「やかましい!!」

なんだ、助かったというのに。もしかして、岩を防ぐ盾にしたのを怒ってるのか?いいじゃないか。神だろう?

俺はそう思いながら諏訪子を降ろして鎖を外してやる。

すると諏訪子がこちらを見ていた

「なんだ?」

「・・・どうしてわたしを助けたんだ？わたしはお前を殺そうとしたんだぞ？」
「・・・別に、もうなれてしまったよ。」
どうせ死なないし。命ならしょっちゅうねらわれてたし。
さて、今日からどこに住もうかな・・。そんなことを考えていると・
・
「・・・凶とかいったな。」
「ん？なんだ？」
「凶はこれからどうするんだ？」
「・・・そうだな、まずは寝る場所を探すさ。」
「・・・あの、さ。じゃあさ。わたしの神社にきなよ。」
「・・・なぜだ？」
「だって凶の住んでたところ、わたしが壊しちゃったし・・。嫌？」
「そうではないが・・。」
キャラが変わってるぞ？さっきまでの威厳ある口調はどこにいった？
だが、まぁ・・
「・・・わかった。君の神社にお邪魔させてもらおう。」
「本当かい！？」
「あ、ああ。」
「じゃあ、早く行こう！こっちだよ！」
「・・それはそうと、君、さっきまでの威厳ある口調はどこにいったんだ？」
「あれ、疲れるからいいよ。一応、こっちが普段の喋り方だもん。」
そう言いながら嫌そうな顔をする諏訪子。きっと容姿が子供っぽいから苦労してるのだろ。

俺は、同情の意味も込めて諏訪子の頭を撫でてやる。
すると、諏訪子が気持ち良さそうな顔をする。・・・帽子も目を細めてるぞ？

「行くか・・。」
「うん！」

そう言い、諏訪子の住んでるという神社に向かった・・・

ーーーSide諏訪子ーーー

あの後、なんとか洞窟を抜け出せた。

「と、いうわけで助かった。よかったな。」
「やかましい！！」

抜け出せたが、何度も頭に岩が落ちてきたのだ。しかも、なぜかこいつは無傷。絶対に私を盾にしていた。
そんなことを考えていると、地面に降ろされた。そして体に巻きついていた鎖を外してくれた。
・・どうしてこいつはこんなに優しくするのだろう？わたしはさっきまでこいつを殺そうとしたのに・・・
わたしはじっとそいつを見た。

「なんだ？」
「・・・どうしてわたしを助けたんだ？わたしはお前を殺そうとしたんだぞ？」
「・・・別に、もうなれてしまったよ。」

そういったそいつの顔はとても寂しそうだった。
それをみてわたしはそいつがどんな男か知りたくなった。
だからわたしは・・・

「・・・凶とかいったな。」
「ん?なんだ?」
「凶はこれからどうするんだ?」
「・・・そうだな、まずは寝る場所を探すさ。」
「・・・あの、さ。じゃあさ。わたしの神社にきなよ。」
「・・・なぜだ?」
「だって凶の住んでたところ、わたしが壊しちゃったし・・。嫌?」
「そうではないが・・。」

わたしはそいつ・・・、凶に神社に来ないか誘った。みたところ、
こいつは妖怪ではないし、
あまり人に危害を加えるようには見えない。
それに、一人というのは寂しいのだ。祟り神であるわたしは皆に恐れられている。
故に一人だ。・・・ミジャクジはいるけど。
こいつの目は少しだけわたしに似ていた。

「・・・わかった。君の神社にお邪魔させてもらおう。」
「本当かい!?」
「あ、ああ。」

なぜかとても嬉しかった。

「じゃあ、早く行こう！こっちだよ！」
「・・それはそうと、君、さっきまでの威厳ある口調はどこにいったんだ？」
「あれ、疲れるからいいよ。一応、こっちが普段の喋り方だもん。」

あれは他の妖怪や神になめられないようにするためだ、わたしは容姿が子供だから、ああでもしないとなめられてしまう。
すると、凶が頭を帽子越し撫でてくれた。すごく気持ちが良かった。
帽子、お前も嬉しいか。

「行くか・・。」
「うん！」

わたしは神社に戻った。一人ではなく、二人で・・・・

第１１話：洩矢神に起こされた凶鳥（後書き）

書き終わった。
という訳で皆大好き諏訪子さまです。ケロちゃんです。
次回からは諏訪子の神社で凶が生活をします。

第１２話：土着神の頂点とお風呂。・・デジャヴ？（前書き）

諏訪子はどういうキャラかよくわからない。

第１２話：土着神の頂点とお風呂。・・デジャヴ？

目が覚めると知らない天井だ。・・・ああ、諏訪子の神社にいるんだった。
俺は寝ぼけつつも、黒いパジャマからいつもの黒いコートに着替える。
ちなみに、諏訪子の神社はでかい。それはもう、ビックリするくらいに。
あと、諏訪子は神であるとともに、一国の王でもあるらしい。最初は嘘だと思ったが、本当だった。
まったく、あんなのが王なんて、よく国が滅びないな。そんなことを考えつつ、障子を開けて部屋から出る。
すると、ちっこい蛇みたいな・・・ミジャクジだっけ？それが、俺の前までやってくる。ふむ、どうやら諏訪子を起こしてくれといっているようだ。言葉は喋れないが、言っている事はなんとなくわかる。便利だな。さすが神だ。
そんなことを考えながらミジャクジに「わかった」、と返事をし諏訪子を起こしに行く。

「・・・これは酷い。」

諏訪子の部屋に入った俺の第一声はこれだ。なにが酷いかというと、部屋が汚い。
脱ぎ散らかされた服があっちにもこっちにもあるのだ。しかも、全部同じデザインの。

とりあえず、寝てる諏訪子のもとへ近づき、体を揺する。

「起きろ、諏訪子。」
「ん～、あと1時間・・・。」
「そんなに待っていられん。それに、今日は村人からなにか贈り物があるんだろ？」
「・・・そうだった。」

そう言い、モゾモゾと布団からでる。まだ若干眠いようだ。口からよだれが垂れてるぞ？
仕方ない・・。そう思いつつ、服の裾でよだれを拭ってやる。

「うにゅ～・・・。」
「いい加減に目を覚ませ。」

そう言うと、目をゴシゴシさすりながら、あくびをする。

「・・おはよう・・。」
「おはよう、はやく来い。先に言ってるぞ。」
「・・・うん・・・・・」

いまだに寝ぼけて諏訪子にそう言い、部屋を出る。

いまさらだが、いまがどんな時代だか説明しておこう。
俺の住んでいた世界でいうと弥生時代みたいな感じだ。なぜ、こんな曖昧な答えかというと、ここは俺の住んでいた世界ではないので、自信が無いのだ。もしかしたらこの弥生時代っぽいのがあと３０００年近く続くかもしれないし、１００年でおわるかもしれないからな。
まぁ、そうなっても俺の何かが変わるわけではないがな。・・・は

て？ここは何処だ？

あのあと、やっと道に迷ってる事がわかり、途中でみつけたミジャクジに道を聞いた。・・・言っておくが、俺は悪くない。やたらと広い、この神社が悪いのだ。そう思いつつも、座布団に座る。ちなみに、ここは完全に和風の感じだ。
ちゃぶ台には、玉子焼き、米、味噌汁、魚、といった感じのものがある。・・・ちゃぶ台でかくないか？

「あ、そうだ。凶」
「なんだ？」

玉子焼きをつついていると諏訪子が話しかけてきた。

「今日の村人からの供物さ、あんたが受け取りにいってくれない？」
「・・・そんなことを言われてもな・・・。だいたい、なぜ俺が行くる必要がある？」
「なんとなく。」
「・・・・。」
「いいんだよ。どうせ、穀物を実りやすくしてるのはわたしなんだから。来年の準備もしておきたいのさ。」
「・・・まぁ、いいだろう。俺が行こう。」
「ん、ありがとう。」

そのあと、くだらないことを話しながら朝食が終わった。・・どうでもいいが、玉子焼きをたべた時、共食いだと思ってしまった。

「今年も穀物がたくさん実りました。これは、その感謝と報告です。」

そんなことを言いながら目の前の村長らしきものが、祭壇に米俵や野菜のようなものをおく。ちなみに洞窟のなかである。
そして、村長らしい老人と、後ろにいる村人たちが祈りをささげた。
・・暇だな。
今は、妖力で姿を隠しているが、なにもしないで見ているのは実に暇だ。なるほど、諏訪子が俺を寄こした理由がわかった。諏訪子は、これを神力で最後まで見届けてから村人の贈り物を持って帰るらしい。

「・・・で、あるからして、来年の豊作もおねがいします。」

ん、終わったか。
村長っぽいのは村人をつれて帰っていった。
さて、もって帰るか。・・・しかし、すごい量だな。

「よ・・っと。重いな・・。」

そんなことを思いながらおれは帰った・・・

やっと神社に帰ってこれた・・。あの後、かえる途中で妖怪に襲わ

れたりした。

「ただいま。」

俺はそう言いながら神社に入る。

「おかえり～、凶～。」

諏訪子がそう言いながらトテトテと走ってくる。・・・和むな・・・。

ちなみに、諏訪子は今５００歳くらいだ。

「・・今すごく失礼なこと考えなかった？」

「気のせいだ。」

「ならいいけど・・。それで、どうだった？」

「ああ、重い。」

「つまりは大量だと。」

「ああ、これはどこにおけばいい？」

「ん～、とりあえず神社の倉庫に運んでおいて。あと、少しお願いがあるから、運び終わったらわたしの部屋に来て。」

「わかった。」

お願いか・・。めんどくさいことじゃなければいいんだけどな・・・。

で、運び終わった俺は現在、諏訪子の部屋の前にいる。

「諏訪子、入るぞ。」

「ん～、凶？いいよ～。」

諏訪子の許可を得て部屋に入ると驚いた。部屋が奇麗になってるのだ。掃除したのか？

えらいぞ。

俺は諏訪子に近づき頭を撫でる。無論、帽子越しに。

「・・いきなりどうしたのさ？」

「気にするな。」

諏訪子が怪訝そうな目で見てきたので、軽く流した。

とりあえず、近くの座布団に諏訪子と向かい合うように座る。

「それで、頼みとはなんだ？」

「うん、わたしの修行に付き合ってほしいんだ。」

「・・なぜだ？」

「いや、わたし昨日あんたと戦って負けちゃったからさ、すこし鍛えてもらおうかなっておもって・・。」

「・・まぁ、そのくらいならいいだろう。」

どうせ年がら年中暇人だしな。それでいいのかと自分でも思ってしまう。

「じゃあ、すぐにはじめようよ。」

「わかった。」

「さて、でははじめよう。まずは俺から一本とってみろ。」
「いや無理だから。」

修行内容はいたって簡単、俺から一本とること。一応、神社の前で修行することにした。
しかし無理だと?最近の若いのはいかんな。・・そうだ。

「・・俺から一本とったら1つだけなんでも言うことを聞いてやるぞ?」
「よしやろう!すぐやろう!」
「・・・現金なやつだな・・。」
「行くよ!」

そう言いながら、諏訪子は鉄の輪をいくつも空中に浮かべる。一応、手加減してやろう。
俺は殴る構えをした。何?女を殴るなんて最低?知るか。顔を殴らなければいいだけだ。
先手を取ったのは諏訪子だ。鉄の輪を二個飛ばしてきた。俺は、それを簡単にかわす。
かわした後、俺は諏訪子に向かって能力で作った弓矢を投げる。諏訪子はそれを鉄の輪で弾く。

「いや、なんで矢を素手で飛ばしてるの!?」
「気分だ」

そんなやり取りをしながらも、諏訪子は反撃しようとする。

鉄の輪を両手に持って突っ込んできた。・・あれ、よく切れるからなぁ・・。
諏訪子は俺の前まで来ると右手の鉄の輪で横に切った。俺はそれをかわす。しかし、左手の鉄の輪を、投げつけてきた。
俺は、能力で地面にすばやく潜り込む。

「能力つかうなんて聞いてないんですけど!?」
「言ってないからな。」
「うぅ～、そっちがその気なら・・。」

そう言うと、諏訪子は地面に手をついた。すると、俺がもぐっていた地面がグニャグニャと動き始めた。
俺はすばやく地面から出て、その場を移動する。そしてさっきまで潜っていたところを見ると、何故か土で出来た柱が出てきていた。
しかも、先っちょがとがってる。・・あのままあそこにいたらグサリだったな。

「・・俺を殺す気なのか?」
「どうせ死なないでしょ!」

諏訪子は、地面に手をついたまま、さっきのような土の柱を俺の下から次々と出す。
さらに、それだけではなく、俺の足元を揺らし始めた。

「グッ・・・!」
「それっ!」

諏訪子は、俺の下から土の柱を出す。俺はそれをなんとかかわすが・・

「もらったよ！」
「！？」

目の前に鉄の輪を両手にもってる諏訪子が来ていた。そして、鉄の輪で攻撃してくる。
俺はそれも後ろに下がってなんとかかわすが、諏訪子は鉄の輪をいくつも操って投げてきた。

ーーーブシューーー

「ふふーん、わたしの勝ちだね！」
「まさか、諏訪子も能力を持っているとは・・。」

あの後、鉄の輪をかわしきれず、少しかすってしまった。
しかし、油断していた。諏訪子が能力持ちだったとは・・。こんなのでも持ってるんだな。

「・・今すごく失礼なこと考えたでしょ？」
「気のせいだ。ところでお前の能力はなんだ？」
「なんか話をそらされた気がするけど・・・。わたしの能力は『坤を創造する程度の能力』だよ。」

「・・坤?地面を操るのか?」
「うん、そんな感じ。」
なかなか便利な能力だな。羨ましい。
「凶は能力を持ってないの?」
「持っているには持っているが・・。秘密だ。」
「え~。なんでさ~、教えてよ~。」
「だめだ。いつか気が向いたら教えてやる。」
「ぶ~、ケチ。」

そんなことを言いながらほっぺたを、ぷく~、といった感じに膨らませる。そんな諏訪子の頭を撫でてやる。
・・別に俺は、諏訪子が嫌いじゃない。ただ、はっきり言ってまだ信用するに値しないのだ。
昨日あったばかりのやつを信用するのは、「今」の俺には無理だ。
前までの俺なら信用できたかもしれないがな。
それに、どこで誰が俺たちの会話を聞いているかわからんからな。
自分の能力は隠しておきたい。

「・・わかったよ。でも、約束はちゃんと守ってもらうからね!」
「むろんだ。で、もう決まったか?」
「うん!あのね~・・・」

諏訪子の神社の風呂は巨大な風呂桶である。人が4~5人までなら余裕ではいる。本来なら、一人でのんびりと入っているだろ。だが・・・

「♪~」

「・・・・。」

諏訪子がいるのだ。あの後、お願いの内容を聞いたら、「凶と一緒にお風呂に入りたい！」と、言い出したのだ。

デジャヴである。二人とも隠すところは隠してる。ちなみに、まだ湯船には浸かってない。

「凶~、背中流してあげるね~。」

「・・・わかった。頼もう。」

そう言い、俺は小さな椅子に腰掛ける。すると、諏訪子が手ぬぐいで背中を流し始める。

・・・ちょっといいな。

「んしょ、んしょ・・。凶の背中は大きいね。洗うのが大変だよ。」
「まぁ、男だからな。」
「へ～。」
「・・もう十分だ。」
「そう?じゃあ今度は前のほう洗うね。」
「結構だ。」

これ以上やってもらうのは悪いしな。俺の体は諏訪子よりも大きいから洗うのも大変だろう。
(※マジでそう思ってますよ。バカだろ?凶)

「そう?じゃあ入ろう?」
「ああ、わかった。・・いや、待て。お前は体を流してないぞ?」
「・・忘れてた。じゃあ。凶、お願い。」
「・・わかった。」

そして、俺と諏訪子は場所を交代する。諏訪子は、前だけを隠して、後ろは背中だけを見せている。
俺は、手ぬぐいをお湯で洗い、諏訪子の背中をできるだけ優しく洗ってやる。

「はふぅ～・・・。凶、上手だね～・・。」
「そうか。それはよかった。」
「あぁ～・・・。これいいな～。また今度やってもらおう・・・。」
「また俺から一本取れればな。・・よし、終わったぞ。」
「ありがと～。」
「さて、冷めない内に入るぞ。」

俺はそう言い、湯船に入る。諏訪子は、体にタオルを巻きなおし、俺のあとに湯に浸かる。
ちなみにこのタオル、俺が作った。最初、布を渡されたのだが、薄すぎた。

「いい湯だな・・。」
「だねぇ～・・。」

二人並んでそんなことを言う。どうでもいいが、少し近いぞ?諏訪子よ。

「ねぇ・・。凶はさ、わたしが祟り神だって知った時さ、怖くなかった?」

しばらくすると諏訪子がそんなことを聞いてきた。だから俺は正直に答えてやる事にした。

「別に。君は祟り神なのだろうが、俺にとっては諏訪子という少女だ。
君は君だ。それだけのことだろう?・・それに、君より恐ろしいものだっているさ。」
「そっか・・・」

そう言って諏訪子は黙った。ただ、風呂を出るまでその顔は、どこか嬉しそうだった。

そのあと、何事もなく俺は晩御飯を食べて寝た。

ーーーSide諏訪子ーーー

お風呂に入った後、わたしは少し嬉しかった。

「わたしはわたし・・か。」

わたしは今まで、ミジャクジを操ることの出来る事から『土着神の頂点』として恐れられてきた。
故に、わたしは孤独だった。
しかし、凶はわたしはわたしだと言ってくれた。初めてわたしのことを『洩矢諏訪子』として見てくれたのだ。
それがとても嬉しかった。そしてさらに凶という男に興味がわいた。
もっとあの男のことを知りたい。そう思った。

わたしは、そんな気持ちのまま、眠りについた・・・

第１２話：土着神の頂点とお風呂。・・デジャヴ？（後書き）

主人公がまたフラグを立てそうだ。
最近、話が長いな・・・。もっと短くしようかな？
まぁ、コメントを下されば改善していきます。

第１３話：頑張ればなんとかなる。・・・時にはあきらめも肝心だけど。（前書き）

今回は前書きなし。

第13話：頑張ればなんとかなる。・・・時にはあきらめも肝心だけど。

この神社に住んでから約3ヶ月たった。そんな神社は今日も平和だ。
俺は縁側で茶を啜りながらまったりしていた。
空をみると、鳥が気持ち良さそうに飛んでいる。・・・羨ましい。
俺は飛べないのだ。能力で浮くことが出来ても、自由に飛び回ることが出来ない。そもそも、クックルはニワトリだしな。
でも、空を飛び回ることができれば戦う時とか便利だな。逃げるときとか。・・潜ればいいか。
しかし、何故か無性に空を飛びたくなった。仕方ない、なんとか飛べるようになろう。それに飛べるようになれば空の散歩とか出来そうだし。

「そんなわけでいい案をもらいに来た。」
「いきなりだね」

空を飛ぼうにも、いい案がなかったので、諏訪子に相談しにきたのだ。
むろん、自分の能力は教えてない。

「そうだね・・。浮く事はできるんでしょ？」
「ああ、というか、それしかできん。」
「じゃあさ、浮きながら進みたい方向とは逆の方向に霊力とかを出

しながら飛んだら？」

鉄腕ア〇ムみたいな感じか？

「ふむ・・。他には？」

「他？そうだね～・・。飛ぶんじゃなくて歩くとか。」

「歩く？」

「うん、浮かんだ後、自分の場所に足場を作って進むとかさ。」

「それもいいな。」

なるほど、そんな考えもあったか。

しかしな、足場を作るとなるとやたら消費しそうだな。あ、でも必要最低限だけ使えるようにすればいいか。

「さて、じゃあ試してくる。手間をかけたな。」

「別にいいよ。頑張ってね。」

「ああ」

俺はそう返事をし、部屋を出る。特訓場所は神社の裏にある森にしよう。

ーーーSide諏訪子ーーーー

凶が空を飛びたいからいい案をくれと言ってきたので、それに協力してあげた。
でも意外だった。凶ほどの力の持ち主が空を飛べないとは・・。

「凶ってどんな風に修行するのかな?」

何故か知らないが、急に凶の修行を見たくなった。
・・あとでこっそり見に行こう。ついでに何か食べ物も持っていこう。

ーーーSide凶ーーー

俺は神社の裏手にある森に来ると、まず能力で空に浮いた。
とりあえず、諏訪子に言われた内の一つ、『進みたい方向とは逆のほうから霊力を噴出する。』それをやってみる事にした。
格好で言えば、愛と勇気だけが友達の悲しいあんぱんのヒーローと同じだ。つまり足の裏から出してる。
・・結構むずかしいな。そんなことを思っていると、木におもいっきりぶつかった。

「いつつ・・。」

こぶが出来てしまった。これはやめよう。危険すぎる。下手したら神社にぶつかる。
頭をさすりながら俺は次の方法を試す。次は『足場を作る』だ。
とりあえず、もう一度空に浮く。そして、頭の中で霊力で作った足場を想像する。
そのまま俺は前に一歩踏み込んだ。

「成功か?」

たぶん成功。普段なら踏み込んでもほとんど進むまない。精々3センチくらいだ。
だが今の俺は間違いなく地上と同じ一歩を進んでいる。俺はさらに踏み込む。するとまた進む。何度か繰り替えいていて気がついたこ

とがある。俺の想像した足場は、俺が踏んで、離れた後は消えてしまうと言う事だ。
それと、思ったより霊力を消費しなかった。試しに妖力でやったらこれも成功した。魔力でやったら、乗った途端に爆発した。・・・やはり魔力は苦手だな・・。
そんな風に何度も足場を作っていると諏訪子がやってきた。
俺は一度おりて、諏訪子に近づく。

「どうかしたか？」
「ううん、別に。ただ、どんな風に練習してるのかな～、って。あとコレ。おなか空いてると思って。」
「ん、すまない。」

正直、何も食わなくてもいいけど、せっかく持ってきてくれたんだから食べなきゃいかんだろ。
俺は諏訪子から握り飯の乗った皿を受け取り、一つ食べてみた。

「・・うまいな。」

いい感じに塩味がきいていて上手い。

「そう？えへへ～。頑張って作ってよかったよ。」
「・・君が作ったのか。意外だな。」
「・・・それ、どういう意味さ。」
「いや、神でも何か作るのだと思ってな。」
「そりゃ作るよ。」

そんなことを話しながらも、全部たいらげた。

「ご馳走様。」

「お粗末さまでした。」
「さてと、じゃあもう少し練習しておくよ。君はどうする？」
「ん～、わたしはもう少しここにいるよ。」
「そうかい。」
俺はそう言い、また特訓をはじめた・・・

ーーーー　Ｓｉｄｅ諏訪子ーーーー

わたしは今、厨房にいる。特訓している凶への差し入れになにか作ろうと思ったのだ。
「・・おにぎりでいいかな？」
わたしはとりあえずおにぎりを作ることにした。ミジャクジたちは休んでいるので一人で作る。
お米は炊いてあった。だから中に入れる具を考えていたのだけど・・・
「あれ？凶ってなにが好きなのかな？」
わたしは凶の好きなものを知らない。
考えてみたらわたしはあいつのことをまったく知らない。そもそも、凶が何も教えてくれないからだ。
前に好きなものを聞いてみたら、「さぁ？なんだろうね。」と、言われてはぐらかされてしまった。
凶は自分のことをまったく話さない。年齢も種族も教えてくれない。

ひょっとして凶はわたしのことが嫌いなのだろうか?そんなことを考えてしまう。自分でもそれは無いだろうと、思う。しかし、そう思ってしまうのだ。

「・・考えても仕方ないよね。」

わたしはそう言って作る。具はなにが好きなのかわからないから、塩にしてしまおう。

さすがに塩が嫌いということはないだろう。・・たぶん。

わたしは作りおわったから凶を探してた。

そして見つけた。凶は神社の裏にある森にいたのだ。しかも、空中に。

わたしは凶をしばらく見ていることにした。凶は無言で空を歩いている。どうやら足場を作るほうにしたらしい。

時々、使う力を変えていた。赤い力、確か魔力だって凶は言ってた。

それに変えて足場を踏んだ途端、足場が爆発していた。

・・大丈夫なの?

そんなふうに見てたら、しばらくして凶がわたしに気づいた。凶は空から降りて、わたしに近づいた。

「どうかしたか?」

「ううん、別に。ただ、どんな風に練習してるのかな~、って。あとコレ。おなか空いてると思って。」

「ん、すまない。」

凶はそう言ったあと皿を受け取り、わたしの作ったおにぎりを口に入れた。

「・・うまいな。」

すごく嬉しかった。

「そう?えへへ〜。頑張って作ってよかったよ。」

「・・君が作ったのか。意外だな。」

「・・・それ、どういう意味さ。」

嬉しかったのに、少しムッとしてしまった。

なにか?わたしが作れないとでも思ったの?

「いや、神でも何か作るのだと思ってな。」

「そりゃ作るよ。」

だって夜遅くに起きてお腹すいたら自分で作るしかないもん。

「ご馳走様。」

「お粗末さまでした。」

「さてと、じゃあもう少し練習しておくよ。君はどうする?」

「ん〜、わたしはもう少しここにいるよ。」

戻ってもやることがないしね。

最近は平和だから妖怪退治もしなくていいし。

「そうかい。」

凶はそう言うとわたしに背を向けて、また空に浮かんだ。そして足場を作りながら進む。
わたしはそれをただずっと見ていた・・・

ーーーSide凶ーーー

「さて、そろそろやめよう。」

あたりが暗くなったので、そろそろやめることにした。
帰ると伝えようとして諏訪子のほうを見る。

「zzz・・・・。」

・・・寝てた。まぁ、空中で歩く修行なんて見てても暇だしな。
これって、俺が悪いよな?

「諏訪子、起きろ。」
「ん〜・・。」

諏訪子を起こそうと肩を揺さぶると腰のあたりにしがみついてきた。
・・・そう来たか。
仕方がないのでそのまま神社に戻る。
そして諏訪子の部屋に行き、布団を敷いてやる。・・よく起きないな。
俺は諏訪子を腰から剥がそうとしたが・・・。

「剥がれんな・・。」

こいつ、意地でも離れない気だ。
はぁ～・・。仕方ない、今日は一緒に寝るか。
俺は諏訪子の布団に潜り込んで一緒に寝ることにした。

「・・おやすみ。諏訪子。」

俺はそう言いながら諏訪子の頭を撫でる。
そして眠りについた・・・

翌日、目を覚ました諏訪子は「あ～う～。」とか言いながら顔を赤くしていた。

第１３話：頑張ればなんとかなる。・・・時にはあきらめも肝心だけど。（後書

主人公は空を歩けるようになった。
そろそろ神奈子を出すとしよう。

改めて、主人公を紹介（前書き）

「改めて紹介です」
「またか。」
「だってお前のことよくわかんない読者が多いと思うから。」
「それはお前が表現するのが下手なだけだろ？」
「・・言うなよ。」

改めて、主人公を紹介

名前：凶（凶道　進）
年齢：４０００歳くらい（たぶん３８００歳）
職業：化け物
一人称：「俺」
呼び方：「君」「お前」切れた場合は「貴様」

なんだかんだで４０００年くらい生きた化け物。長く生きているので、考えてる事と話している口調が一致しない。
相変わらずの鈍感。
本気になればかなり強いが、本人はそんな気はほとんどない。
前までは簡単に他人を信用するようなことをしていたが、今ではそんなことはない。
人間の時の容姿は、白い髪、鋭い目をしている。ちなみに、瞳の色は深紅。
よく着ている服は黒いコートに黒いズボン。
クックルになると体が羽毛で白くなる。目はかなり鋭くなり、足が鳥の足になる。
大抵の妖怪はぶん殴っただけで粉々にできる。また、自分の認めた者は全力で助ける。
もう少し先では笑うことが出来るようになる。
しかし、戦いでの彼の笑みは・・。
近々改名するらしい。

改めて、主人公を紹介（後書き）

「終わり。」
「まて、改名なんぞ聞いてないぞ?」
「今、決めた。」
「・・・・」
「そんな訳で凶の新しい名前を募集します。」
「お前が決めるんじゃないのか・・・」
「作者にネーミングセンスを求めるな。」
「・・まぁ、なんだ。そんな訳だから俺の新しい名前を考えてくれ。頼む。」
「作者からもお願いします。感想と一緒に書いてください、では、これで。」
「またな。」

第１４話：送られてきた手紙（前書き）

そのまんまです。

第１４話：送られてきた手紙

「大和の神がさ、交渉したいって、言ってきた。」
「交渉？」
「うん」

朝食の途中で諏訪子がそう言ってきた。

「なんか今朝さ、手紙が来てね、それを読んでたらそう書いてあった。」
「ほう・・。どれ、見せてくれ。」
「はい、これ。」

俺は諏訪子から手紙を受け取り読んでみる。

『　　土着神の頂点　洩矢諏訪子へ

まずはこの手紙を連絡もなしに送ったことを詫びよう。
さて、こちらの用件を言おう。そちらの国と交渉したい。
なお、内容はこちらで既に決めてあるので、一週間後に
そちらの使者を送って内容を確かめてもらいたい。

大和の
国の神より

』

「・・・諏訪子。」
「うん？」
「大和の国に行く使者は決まったか？」
「まだだよ。みんなあんまり行きたがらないんだ。」
「・・・そうか、それなら俺に行かせてくれないか？」
「うん、いいけど・・。なんか怖いよ？」
「いやいや気のせいだろう。」

ふざけている、何がふざけてるかって？まず手紙の書き方だ。最初に非礼を詫びることはいい。しかし、差出人の名前がちゃんと書かれてない！なんだ、大和の国の神って！？名前ないのか！？しかも、交渉とかほざきながら既にその内容を決めて変える気がないのも許せない。

「さて、一週間後に備えて特訓だ。」
「いやいや何する気なのさ？」
「なに、別に大したことはしないさ。それと諏訪子、もしもの時のための戦力を。」
「本当に何する気！？」
「断ったときのためさ。」

騒いでる諏訪子を置いて俺は神社の裏の森に行く。
交渉だのなんだの言っていたが向こうは無理難題をふっかけるに違いない。
その場合は間違いなく断らなければいけないだろう。そうすればあちらさんは力尽くの手段に出るはずだ。
そしたら戦争だろう。まぁ、そうなっても俺は負けんがな。いざとなったらクックルだ。

さて、特訓だ。まずは自分の今までの戦闘の方法をおさらいしよう。
俺は基本的に接近戦だ、唯一の遠距離攻撃は槍などを投擲するくらいだ。あとは相手の真上に大量の武器を創って降らすくらいだ。
そう言えば武器を操って飛ばすことも出来たな。でもあれメチャクチャ霊力とか消耗するんだよな。・・ん？

「なら消費を減らす工夫をすればいいのか。」

あの技は能力で見えないようにに潜り込ませて、浮かばせることで見えるようにして敵がそこに近づいたら操って敵に刺す。
ぶっちゃけ、罠だ。ばれないように攻撃もできるから、割りと便利だ。。
しかし、欠点もある。まずさっきも言ったとおり消耗が激しい。上手く力の調整が出来ないのだ。
次に数だ。頑張っても最大3個しか操れない。なぜなら、操るのが大変だから。霊力などで糸を作ってそれで操る方法もあったが、あれは駄目だ。絡まる。
最後に、操ってる間は俺はほとんど動けない。集中しないと途中で落ちてしまうのだ。能力で潜らせたり浮かしたりするのは、俺にとっては呼吸に等しいので問題ない。

「さて、どうする・・？」

考えた結果、次の案が出た。
1・まず消耗のことだが、これは練習するしかない。
2・次に操る事だが、考えてみたら敵に突き刺せばいいという結論になった。
剣の場合は柄の部分に霊力などを込めて、それを噴出させることで真っ直ぐ飛ばすことにした。
槍の場合は一番後ろの部分に変えるだけだ。
3・これは2が成功すれば問題なし。

「さて、ものは試しだ。やってみよう。」

まずは能力で剣を創る。
そして柄の部分になんとか必要最低限の霊力を込める。
次に浮かせて、剣の先をなにもないところに向ける。そして霊力を噴出させる。

「・・・失敗？いや、成功か・・。」

成功っぽい。一応真っ直ぐ飛んだ。少しばかり霊力が足りなかったようで、5メートルくらいで落ちた。
なんとなくわかったので、次は二つで試してみた。
これも成功、妖力でも試してみたが特に問題なかった。奇跡的に魔力でも成功した。
どうやら、媒介があれば爆発しないらしい。・・・でも前に針が爆発したぞ？小さいものは駄目なのか？
なんにしても、魔力が一番飛んだ。いままでそんなの出番がなかっ

たので、魔力中心で練習しよう。
目指すはゲート・オブ・バ○ロンと同じ量だ。無理だろうがな。

ーーーSide諏訪子ーーー

わたしは凶が交渉を申し出た時、正直驚いた。いやだってあの凶だよ？
大抵の事は「めんどくさい」の一言で終わらせるあの凶が自分から交渉したいなんて言うとは思わないでしょ？

「でもなぁ～・・。大丈夫かな？」

もしものための戦力なんて、戦争でも起こす気だろうか？それはこちらも困る。
あいかわらず凶の考えることはわからない。
凶はあまり表情を変えない。なんとな～く雰囲気で察するしかないのだ。

「そういえば・・・、凶ってわたしの前で笑った事ないよね・・・。」

普段表情を変えない彼が笑うとどんな感じだろうか？
見てみたいなぁ・・・。

「・・・仕事しよう。」

わたしは凶に言われたとおり戦力の強化と増加をすることにした・・・。

ーーーSide凶ーーーー

「疲れた・・」

そう言いながら俺はその場に座る。あの後、頑張って３０本までなら一気に飛ばすことが出来るようになった。
人間やれば出来るものだ。あ、今は人間じゃないのか。とにかくメチャクチャ疲れた。

「眠いな・・・。今日はもう寝るとするか・・・。」

俺はそう言い神社に戻る。
神社にの中に入ると、諏訪子がやってきた。

「凶～、おかえり～。」
「ああ、ただいま・・。」
「フラフラだね。大丈夫?」
「なんとかな・・。それで、もしもの時の戦力はどうなってるんだ?」
「うん、順調だよ。・・ねぇ、なんで戦力なんて必要なの?」
「まぁ、その時がきたら教えよう。今は戦力の増加と強化を頑張ってくれ。」
「う～ん・・。まぁ、いいか。わかったよ。晩ご飯食べる?」
「そうだな。」
「ん、じゃあ行こう。」

諏訪子はそう言い、歩く。俺はそれを追いかける。

歩きながら諏訪子と話をしていたが、いつの間にか食卓についていた。
さらに言うと、いつに間に座ってた。不思議だ・・。
そんなことを思ってると食事が運ばれてきた。
今日は味噌汁に米に漬物だ。ついでに野菜炒めもどき。
俺はそれを普通に食べる。うん、うまし。

「凶ってさ、今まで笑ったことある?」
「ん?」

しばらく食べてると諏訪子がそんな質問をしてきた。おかげで漬物をのどに詰まらせるところだった。
笑ったことか・・

「・・そういえばないな。」
「なんで?」
「なんで・・と、言われてもな面白いこともないしな・・。」
「ふ~ん。じゃあ凶にとってのおもしろいことって何?」
「俺にとってのおもしろいこと・・?」
「うん」

俺は考えてみた。・・俺の面白いと感じるもの・・。なんだ?そんなものあるのか?

「なにもないな・・。」
「そうなの?」
「ああ。」
「そっか。」

そのあと、何事もなく食事は終わった。

ーーーー諏訪子ーーーー

食事の時、凶に笑ったことがあるか聞いてみた。
返却は

「・・そういえばないな。」

そう言った。ありえない、そう思った。

「なんで?」

わたしは疑問に思ったので素直に聞いてみた。

「なんで・・と、言われてもな面白いこともないしな・・。」

凶はそう言った。凶にとっては楽しいことがないのだろうか?
なにかおもしろいと感じるものはないのだろうか?

「ふ~ん。じゃあ凶にとってのおもしろいことって何?」
「俺にとってのおもしろいこと・・?」
「うん」

凶はしばらく考えてた。そんなに考える事だろうか?
しばらくそれが続いたが・・

「なにもないな・・。」
「そうなの?」
「ああ。」
「そっか。」

わたしはそれ以上なにも聞かなかった。
あとは普通に他愛ない話をして、食事は終わった・・

ーーーSide凶ーーー

俺は布団に潜りながら諏訪子に聞かれたことを考えてた。
俺はなにを楽しいと感じるんだ?前の世界では仕事のあとにゲームをしていたが、別におもしろいとは感じなかった。
あれは大人で言う、酒やタバコと同じだ。別段、おもしろいとは思わなかった。

「・・寝よう。」

こんなことを考えても仕方ない、そう思い俺は眠りについた・・

第１４話：送られてきた手紙（後書き）

次は、瑠璃も話を書こうと思ってます。
凶の新しい名前の件、よろしくお願いします。

番外編：久しぶりの幼女神（前書き）

「久しぶりの幼女神、もとい瑠璃さんです」
「どうも、瑠璃です。」
「よかったですね～、久しぶりの出番が出来て。」
「そうですね。でもまだ凶さんにはしばらく会えないんですよね？」
「まぁ、出すタイミングがね・・。」
「わたし、一応ヒロインですよね？」
「うん。・・たぶん。」
「たぶん・・。」
「まぁ、いいじゃないか。さて、本編いきまーす。」

番外編：久しぶりの幼女神

今日も今日とて仕事に勤しむわたし、瑠璃です。
仕事が忙しいせいで凶さんに３０００年近く会ってません。前に会おうとしたら、「行ってはいけません」って部下に止められちゃいました。酷いと思いませんか？

「酷くありません。」
「心を読まないで下さい。」

心臓に悪いです。あ、そうそうこの３０００年間であったことをお話します。
まずは凶さんが上層部の神たちに少し目をつけられてしまったことです。
「人妖大戦」で、地上のほとんどの生物を亡き者にしたからだそうです。
だから、上層部の神たちは、また人間を作り出して東方の世界に送りました。
今ではたくさんの人間が生きています。凶さんに関しては、今のところ保留だそうです。
次に、わたしについてです。わたしはこの３０００年でかなり階級が上りました。つまりは出世したのです。
自分の意思で世界に交渉するくらいまでは自由にできるようになりました。まぁ、仕事が忙しくていけないですけど・・。

「ほら、瑠璃様、とっとと終わらせてください。」
「はい・・。」

部下には瑠璃と呼んでもらってます。なんせ凶さんに貰った名前で

すから。
さて、じゃあとっとと終わらせちゃいましょう。
わたしの仕事は部下たちからの意見や質問、要望を答えたりすることです。むろん、紙に書いてもらってます。
一枚目は・・

『この前の失敗の件についてはどうなるのでしょうか？」

この前・・。ああ、あれですか。確か部下が仕事に使う書類に水をこぼした事ですね。
あれは予備がありましたから、特に問題なし。
次。

『それぞれの個室を用意してください。」

ん～、無理ですね。予算が足りません。いままでと同じように相部屋で我慢してください。
次。

『スリーサイズを教えてください。』

あとでとっちめてやりましょう。
次。

「結婚してください！！」

お断りしましょう。

そんな感じで進めてると・・・

『凶についてはどうするのですか？」

・・・。凶さんですか・・。とりあえず、一つ気に食わない事が・・・。

凶さんを呼び捨てにしない！（そこですか・・）

とりあえず、この子はあとでお仕置きですね。

あと、これは保留。

「おわりました～・・・。」

「おつかれさまです。はい、お茶。」

「ありがとうございます・・。」

とりあえず、終わりました。

さて、もう仕事はだいぶ片付きましたけど・・・

「・・・久しぶりに休みがほしいですね・・・。」

「は？」

「だってもう疲れました。」

「いやいや、なにを言ってるんですか。まだ、午後の仕事が残ってますよ？」

「え～・・・・。」

はぁー・・・。いつになったら凶さんに会えるのでしょうか？

「・・・あきらめてください。」

「ううー・・」

そんな感じでわたしは今日も忙しい。

番外編：久しぶりの幼女神（後書き）

「おわりました～。」
「お仕事のことばかりですね。」
「まぁ、なんとなく。」
「そうですか。」
「そうですよ。あと、あなたの出番はもっと先ですね。」
「どれくらい先ですか？」
「・・・さぁ？たぶん、あと３００年は凶に会えませんよ？」
「そんな・・・。」
「まぁ、どんまい。さて、これで終わります。次回は凶に交渉させにいきます。・・やっぱり無理かな？あと、凶の新しい名前、まだ応募してます。
ではまた。」
「凶さん・・・。」

第１５話：夢と月と酒と（前書き）

そのまんまです。
今回は諏訪子が少し壊れます。

第１５話：夢と月と酒と

大和の国と交渉するのは明日。つまり6日たった。
この6日間、俺はひたすら特訓した。
例えば接近戦をひたすら磨いたり、苦手な魔力で魔法が使えないか頑張って特訓した。
ちなみに、いま使えるのは紅と蒼の雷撃だ。これは何故か最初から使えた。
何度も爆発した末に出来るようになったのは、人差し指から小さい火が出せるようになった。
他には、三つの力で自身の身体の強化ができるかやってみた。ラウザ○クみたいな感じだ。
これは成功した。霊力だと速さ、妖力だと防御が上がり、魔力は力が上った。ただし、３０分だけだ。それ以上やると爆発する。
ただ、使ったあと5分休めば、また使えるようになる。
そんな感じでずっと特訓してた。そして今日も特訓を・・・しない！明日は交渉の日だぞ？怪我でもしたらどうするんだ。
そんな訳で、俺は神社の縁側で茶をすすりながらまったりしている。

「ああ～・・・。なんだか眠くなってくるな・・・。」

猫が日向ぼっこをよくする理由がわかる。
あ、なんか段々意識が・・・・・。

・・・ここはどこだ?目の前には幼い頃の俺と、親父がいる。ってことは、これは俺の夢の中だな。
久しぶりに見たな・・・。幼い俺と親父の前には大きなビルが建ってる。
幼い俺は黒一色の服を着ている。このころは黒い服ばかり着ていたな。あ、今も黒ばっかりか。
親父は袴だ。いや、確実に浮いてるだろ。

「いいか、進。あまり目立つことはするなよ?」
「はい、父さん。・・・あの、今の父さんの格好は充分目立ってると思うのですが・・・。」
「問題ない。いざとなったら脱ぐ。」
「やめてください。さらに目立ちます。」

うん、まったくだ。自分の親父が民衆の前で服を脱ぎ捨てるなんて、嫌だな。・・今の俺にはあんまり関係ないけど。

「・・・さて、、行くか。」
「・・はい。」

そう言い、二人は中に入っていった。俺も行くか。

中に入ると、かなり広かった。親父は真っ直ぐに受付の女性のところに行く。

「本日はどのようなご用件でしょうか？」
「ああ、この会社の社長に会わせてくれ。」
「失礼ですが、アポはありますか？」
「アポ・・？ああ、りんごか。社長はあれが好きなのか？」
「・・・父さん、アップルじゃなくてアポです。アポとは事前の面会の予約や約束などのことです。」
「む、そうなのか。お嬢さん、すまないが社長に連絡してくれるかね？凶夜が来たと言えばわかると思う。」
「かしこまりました。少々お待ち下さい。」

そう言い、電話に手をかける。ちなみに、俺の親父の名前は『凶夜陣』だ。

「・・確認しました。どうぞ、お通りください。」
「うむ、いくぞ、進。」
「はい、父さん。」

そう言い、奥へ進む親父と幼い俺。もちろん、俺もついていく。
そして、エレベーターで上の階へ進む。その間、二人とも一言も話さなかった。
しばらくすると目的地についた。
エレベーターから降りて「応接室」と書かれた部屋の前までくると、親父が話しかけてきた。

「・・進、今回の目的はあくまでターゲットを殺して魔法石を奪うことだ。だから必要以上に親しくなるな。
そうしないと、あとで悲しむのはお前だ。」

「・・・大丈夫です。相手がなんであろうと所詮は獲物です。僕はその獲物を狩るだけです。」
「・・そうか。」
そう言う親父はどこか悲しそうな目をしていた。そして親父は目の前の扉を開く。
そこにはちょび髭の３０前半くらいの男と、幼い俺と同じ年くらいの女の子がいた。
「来てくれましたかね。とりあえず、座ってください。」
男がそう言いながらソファーに座らせる
俺は女の子と向かい合うように座った。たぶん、この子がターゲットなのだろう。
その子は長い奇麗な金髪で、白いワンピースを着ている。瞳の色は青だ。なぜか、方耳の千切れたウサギの人形を抱きしめてる。女の子は幼い俺を見て微笑みかけてる。
「さて、改めて自己紹介をしましょう。わたしはこの会社の社長の『岸島（きしじま）　灰（かい）』です。
こっちはわたしの娘の『岸島（きしじま）　蒼華（あおか）』です。」
そう言い、男はお辞儀をする。男の容姿は普通の体形で、髪の色は灰色だ。めずらしい。瞳は青だ。
「わたしは凶夜　陣と言う。こちらがわたしの息子の凶道　進だ。」
「凶道　進です。好きに呼んでください。」
「では、凶夜さん。今回のわたしの娘の一ヶ月の遊び相手ですね？後悔しないようにもう一回聞きますが、本当によろしいのですね？」
「ああ、構わん。」

「ではこちらの契約書にサインを・・。」
「わかった。」

そう言い、勝手に話を進める親父たち。幼い俺は何もせず黙ってる。
すると女の子が幼い俺に近寄ってきた。

「ねぇねぇ、あなたがわたしの新しい友達?」
「・・そうだ。」
「ふ~ん、じゃあじゃあ凶ちゃんって呼ぶね。そのかわり、わたしのことも蒼華って呼んでいいよ。」
「・・・・」

おそらく幼い俺は鬱陶(うっとう)しいと思ってるだろう。
そんな時、蒼華が聞いてきた。

「ねぇ、凶ちゃん。」
「・・なんだ?」

「凶ちゃんはどうしてそんなに悲しそうな目をしてるの?」

「・・・ん」

中途半端なところで夢が終わったな。
俺は伸びをし、首をポキポキ鳴らす。どれくらい寝てた？あたりが大分暗くなっていた。
そろそろ飯だろうし、戻るか。その前に顔を洗おう。
そう思い、神社の中に入って廊下を進むと、キョロキョロしてる諏訪子を見つけた。

「・・・なにをしているんだ？」
「あ、凶。わたしのお酒知らない？」
「酒？君も飲むのか？」
「うん、どこに置いたか忘れちゃって・・・。」
「なら、俺も探そう。案外厨房にあるかもしれないぞ？」
「ん、わかった。」

そう言い、俺たちは厨房に向かった。酒は本当に厨房にあった。晩飯の肉じゃがに使おうと思ってたらしい。

俺たちは飯を食べ終わったあと、縁側に座り、酒を飲む事にした。

「はい。」
「ああ、すまない。」

諏訪子が俺の杯に酒を注ぐ。俺はそれに礼を言い、口に含む。

「どう？」
「それなりに美味いな。」
「そう？じゃあ、わたしも飲む。」

諏訪子は自分の杯についで一気飲みする。いい飲みっぷりだ。
そんな感じで俺たちは酒を飲んだ。
・・今日は満月だな・・。

「えへへ～、凶～♪」
「・・・・」

あの後、何事もなく終わると思った。しかし、しばらく飲んでると諏訪子の様子がおかしくなったのだ。
俺が酒を飲むのをやめるように言うと「まだまだ大丈夫だよ」とか言いながら、酒瓶ごと飲み始めたのだ。
すると、たちまち諏訪子は顔を真っ赤にし、俺に絡んできた。
具体的に言うと、口移しで酒を飲ませようとしたり、「熱い」と言いながらその場で服を脱ごうとしたりした。
もちろん、口移しで飲む気はないし、服も脱がせなかった。

「諏訪子、飲むのをやめろ。酔っ払いの相手はめんどうだ。」
「え～、わらしまらよっれらいよ～？」（※え～、わたしまだ酔ってないよ～？）

呂律が回ってない。完全に酔ってるぞ、これは。

「もう寝ろ。俺も明日は忙しくなるんだ。」
「ぶ～、じゃあ、一緒に寝よ～。」

そう言いながら俺に抱きついてくる。こら、引っ張るな。

「わかった、わかったから引っ張るな。」
「えへへ～♪」

俺は諏訪子に抱きつかれたまま、諏訪子の部屋に行く。自分の部屋でもいいのだが、こっちのほうが近い。
そして俺は、布団を敷き、（もちろん、諏訪子は抱きついたまま。）その上に寝る。

「ほら、寝るぞ。少しは離れろ。」

「や～、このまま寝るの～。」

なんか壊れてないか？いっつもよりあきらかにおかしい。
仕方ないので、そのままにしておく事にした。しかし、早く寝てもらわないと困る。
俺は、そう思い諏訪子の方を見てみると・・

「すぅ～・・すぅ～・・」

もう寝てた。いや早いな。まだ二分も立ってないぞ。
まぁいい、俺も寝よう。俺は寝る前に諏訪子の頭を撫で、「おやすみ」といって寝た。
明日は忙しくなりそうだ・・・・

第１５話：夢と月と酒と（後書き）

はい、終わりました。次こそは交渉に行かせてみせる。
あと、まいどのことながら、凶の新しい名前、お願いします。

第１６話：交渉決裂？（前書き）

今回は神奈子さんが出てきます。

第１６話：交渉決裂？

「・・・頭が痛いな・・。」

朝、目が覚めた俺は二日酔いになってた。横では諏訪子がまだ寝てる。いい加減、抱きつくのをやめろ。

「諏訪子、起きろ。今日は交渉の日なんだぞ？」

「ん～・・。まだ寝てたいよ・・。」

「駄目だ。起きないと首を絞めるぞ？」

そう言った途端、シュバっ！と起き上がる諏訪子。冗談だったのだがな。

「おはよう。」

「お、おはよう・・。」

ガタガタと小動物のように怯える諏訪子。・・・ちょっと可愛いと思ってしまった。

言っておくが、俺はロリコンじゃない。そしてＳでもない。・・たぶん。

「さて、とりあえず、食事をとろう。」

「う、うん・・。」

ガタガタと怯えてる諏訪子にそう言い、部屋をでる。

いつまで怯えてるんだ、お前は。

「・・諏訪子、いい加減に怯えるのをやめてくれ。俺がそんなこと

するわけないだろう？」
「・・うん、わかった。」

そう言いトコトコあとを付いてくる諏訪子。
そのまま食卓まで移動した。
食卓につくと、すでに朝食の準備がされてた。
俺たちはそれを食べる。しばらく食べてると、諏訪子がいつもの調子で話しかけてきた。

「ねぇ、凶。今日の交渉さ、どんなふうにするの？」
「ああ、それか。そうだな、向こうさんはたぶん交渉する気はほとんどないだろう。
だからまずは様子見だ。」
「ふ～ん。」

まぁ、いざとなったら大和の神を脅すのもいいだろう。そのあと、俺たちは他愛ない話をした。
そんな感じで食べ終わる。俺は立ち上がり、さっそく玄関に向かう。

「行ってくる。」
「逝ってらっしゃい。」

字が違うぞ。諏訪子。
俺は口では出さないで、心の中で突っ込み、そのまま玄関を出た。

「ほぅ・・。」

途中、妖怪に襲われたりしたが、なんとか着いた。
とりあえず、門がでかい。冗談抜きで。門の前にはお約束の門番がいる。
俺は門番に事情を伝えた。すると門番は「少し、まっててくれ。」と言い、門を開けてくれた。
中に入ると、おそらく神であろう人物が立っていた。紫色の変わった髪に、注連縄を背中に背負ってる。
そして服の胸元には鏡が付いてる。
ちなみに、俺は腕を組んでいる。いや、クックルって腕組んでるだろ?
なんとなく、そうしたほうがいいかなって・・。
ついでに言うと、力も隠してる。こんなところで出す必要もない。

「お前が洩矢神の使いの使者か?」
「その通りだ。」
「そうか。私は八坂神奈子だ。」
「そうか。俺は・・・、名乗る必要もないな。なによりめんどくさい。」

すると神奈子は少し眉をピクリとさせた。まぁ、そりゃそうだな。
でも、こちらも名乗る気はない。

ーーーSide神奈子ーーーー

私は門のほうまで向かった。そろそろ洩矢神のところの使者が来るかもしれないので、迎えにきたのだ。
少しすると、門が開けられた。
そこにいたのは腕を組んだ男。白い髪、変わった黒い服を着ていた。
そして深紅の目。
でも、それだけだ。私にとってはどうでもいい。
私は男に話しかけた。すると、

「お前が洩矢神の使いの使者か？」
「その通りだ。」

男は腕を組んだまま、そう言った

「そうか。私は八坂神奈子だ。」
「そうか。俺は・・・、名乗る必要もないな。なによりめんどくさい。」

一瞬、私はこの男に苛立ちを覚えた。神を前にしてのふてぶてしさにだ。

「・・・お前は私が神であることを理解しているか？」
「ああ、神力が見えるからな。それがどうかしたのか？」

信じられなかった。正直、この男からは何も感じない。

それなのに、私を普通に見ているのだ。

「・・・まぁ、いい。ついてこい。」

「了解した。」

私は、この男を神々のところに連れて行く。

今回出席するのは、私の他に、アマテラス、スサノオ、八咫烏、トヨウケビメである。

神の中でも上位の神たちだ。そこに連れて行けば、この男も少しは神を恐れるだろう。

ただ、トヨウケビメの性格が余りにもわるすぎるので、それはどうにかしなくては・・・。

ーーーSide凶ーーー

めちゃくちゃ長い廊下を歩かされて、やっとたどり着いた会議室っぽい場所。

「いいか、あまり出しゃばるなよ?じゃないと目をつけられる。」

神奈子がそう忠告する。

「ずいぶん優しいな。その忠告に感謝しよう。ありがとう。」

「なっ!?・・・行くぞ!!」

どうした?なんだか顔が赤いぞ?

そんなことを考えてると、神奈子が扉を開ける。
そこには、女が二人に男が二人いた。全員神だな。
俺は、神奈子に言われて、一番手前の椅子に腰掛けた。
すると、黒い服をきた男が話し始めた。

「さて、では洩矢神の使者。わたしは八咫烏（やたがらす）。よろしくお願いします。」

そう言い、微笑みかけてくる。イケ面だな。

「わしはスサノオだ。よろしく頼む。」

白髪のじいさんが威厳を漂わせて話す。年長者だろうか？

「私はアマテラス。以後、お見知りおきを・・。」

そう言いながら、何故か俺にウィンクをしてくる。

「私はトヨウケビメ。覚えておきなさい。」

この女は嫌いだ。なんかムカツク。

「私はさっきも言ったとおり、　八坂神奈子だ。」

神奈子も自己紹介する。

「洩矢神の使者だ。それ以外に語ることはない。」

俺はそう言う。スサノオとアマテラス以外の二人は若干驚いた顔をする。

まぁ、使者の癖に生意気だ、とでも思ってるのだろう。だが、敵に情報を与えたくない。
そんなことを考えてると、トヨウケビメが口を開いた。

「礼儀がなっていませんね。これだから、あそこの国の人間は・・・。」

・・こいつ、馬鹿だ。おそらく他の奴は俺がただの人間ではないことはわかってるだろう。
神力をビシビシ当てられてるのに、平然としているのだから。
まぁ、こんなやつの話に付き合いたくない。

「・・・そんなことより、早く本題に入って欲しいのだが？」
「そうじゃな、トヨウケビメ、お前が考えた交渉の内容を見せてやってくれ。」
「ええ、さぁ、見なさい。」

そう言い、俺に紙を渡す。・・・あ？
そこに書かれてたことを見て、俺はおかしいだろと思った。
内容はこうだ。

・そちらの国の信仰を8割こちらに受け渡す。
・年に一回の貢物は半分をこちらに渡す。

めんどくさいから以下略

ぶっちゃけ、こちらに利益がまったくない。
トヨウケビメは、顔をニヤニヤさせている。・・・まさか、あいつは他の神に見せてないのか？

「・・・これはふざけていると受け取っていいのか？」
「あら、そんなことはありませんよ？それでも優しくしたほうですもの。」

・・なめている。他の神々は何を言っているのかまったくわかっていないようだ。
トヨウケビメは馬鹿にした口調で言った。

「どうします、嫌なら戦争ですよ？」

このアマぁ・・！！
俺は諏訪子が築き上げたものを馬鹿にされたような気がした。
だから俺は、この女に少し自分の立場をわからせることにした。
俺は霊力も何も使わず高速でトヨウケビメの前まで来て、その頭をおもいっきり机に叩きつけた。

「ガッ！？」
「！？なにをしている！」

スサノオが何か言っている。どうでもいい。
俺はその女の耳元でこう言ってやった。

「馬鹿にするのも大概にしろよ？俺が本気になればここにいるやつらを全員皆殺しにできるんだぞ？」
「！？」

トヨウケビメがコチラを睨みつける。他の神たちは下手に手出しできないようだ。
俺は、睨みつけてくるトヨウケビメがうざく感じたので、空いてる手でトヨウケビメの

右手首をつかんで思いっきり

引き千切った

その途端、トヨウケビメがあまりの痛さに暴れる。他の神たちは唖然としている。
一番はやく動いたのはスサノオだった。俺を腰につけた剣で斬りつけようとする。
だが、俺はそれより速く空いた手でスサノオの首を絞める。

「ぐ・・ガっ・・！」
「お前たち全員に言っておいてやろう。お前たちが交渉だの言っていたことは、
こちらの利益になることが一つもない。これは俺たちの国を馬鹿にしてると受け取ってもいいんだな？」
「まて、何を言っている！？」

神奈子がわけがわからないと言った感じで聞いてくる。

「・・その紙を読んでみろ。」

俺がそう言うと、神奈子は紙を急いで読み始める。次第にその顔が驚きに染まっていく。

まぁ、この女が言わなかったんだから、知ってるわけないよな。
・・・アマテラスがこちらを真剣な目をしながら見ている。

「理解できたか？俺のこの行為はお前たちに対する宣戦布告だ。文句はあるまい。
そちらから仕掛けてきたようなものなのだからなぁ？」

俺は、死ぬ一歩手前のスサノオを放り投げ、トヨウケビメに殺気を飛ばした。
トヨウケビメが怯えながらこちらを見ている。

「俺は帰ってこのことを伝える。ではな・・。」

そう言い、地面に潜る。最後に神奈子が静止の声を掛けていたようだが、無視した。

ーーーSide神奈子ーーー

「いいか、あまり出しゃばるなよ？じゃないと目をつけられる。」

扉の前まで来たとき、私はこの男に脅しの意味も兼ねて忠告してやった。

「ずいぶん優しいな。その忠告に感謝しよう。ありがとう。」
「なっ！？・・・行くぞ！！」

優しい？この私が？ありえない。
頭では否定するものの、私は自分の顔が恥ずかしさで赤くなってるのを気づいた。

私は、誤魔化すように扉を開けた。
そこには、私と同じ位の神々がいた。私はこの男に座るように言うと、自分も座った。

「さて、では洩矢神の使者。わたしは八咫烏（やたがらす）。よろしくお願いします。」

一番初めに口を開いたのは八咫烏だった。こいつは力は私に劣るが、頭がいいので戦略を立てるのが上手い。
さらに言うと、女にもてる。私は別にどうでもいいのだがな。

「わしはスサノオだ。よろしく頼む。」

次に口を開いたのはスサノオ。威厳を漂わせながら話した。
この方は、私でも勝てない。それだけ強い。そして、非常に仲間思いだ。だから部下からの信頼も厚い。

「私はアマテラス。以後、お見知りおきを・・。」

アマテラスは八咫烏同様、かなり男にもてる。
一日に3回は付き合ってくれと言われてるほどだ。容姿は白い髪を腰まで伸ばしていて、着物を着ている。
心なしか、使者の男を見ながら時々笑みをこぼしてる。

「私はトヨウケビメ。覚えておきなさい。」

トヨウケビメは非常に性格が悪い。部下にもあまり好かれていない。
しかし、実力だけはあるので、それは認められている。
さらに言うと自分が全てという考えを持ってる。だから自分と同じ位の実力のないものは全て下だと思ってる。

「私はさっきも言ったとおり、　八坂神奈子だ。」

私は威厳をだしてそう言う。
これでこの男も少しは自分の立場がわかるだろう。そう思っていたが・・・

「洩矢神の使者だ。それ以外に語ることはない。」

男はなんでもないようにそう言った。
この言葉で、スサノオ、それにアマテラス以外の二人が驚く。もとろん、私も驚いた。
これだけの上位の神を目の前にしても平然としていられるのだから、この男はただものではない。

「礼儀がなっていませんね。これだから、あそこの国の人間は・・・。」

違う。ただの人間ではない。他の者は気づいているが、トヨウケビメだけが気づいていないようだ。

「・・・そんなことより、早く本題に入って欲しいのだが？」

男はめんどくさそうにそう言った。

「そうだな、トヨウケビメ、お前が考えた交渉の内容を見せてやってくれ。」
「ええ、さぁ、見なさい。」

スサノオがそう言うと、トヨウケビメが男に交渉の内容が書かれた

紙を渡す。
トヨウケビメ以外は書かれていることはわからない。
本人曰く「そのほうがおもしろいでしょう？」らしい。
しかし、不安だ。トヨウケビメが無理難題を書いていなければいいのだが・・・。なぜかニヤニヤと笑っている。

「・・・これはふざけていると受け取っていいのか？」
「あら、そんなことはありませんよ？それでも優しくしたほうですもの。」

男がそう言うのに対し、トヨウケビメは馬鹿にしたようにそう言う。
なんだ、何が書かれていたんだ？
私以外の全員もそう思ってるだろう。

「どうします、嫌なら戦争ですよ？」

トヨウケビメがより一層馬鹿にしたような口調でこう言った。
その途端、男の姿が消えた。

「ガッ！？」

トヨウケビメがそんな声を出すので、私たち全員はそちらを見た。
すると、男がトヨウケビメの頭をつかんで机に叩きつけているのだ。

「！？なにをしている！」

スサノオが叫ぶ。しかし、下手に手を出せない。男はそれを無視してトヨウケビメの耳元で何か言っている。
こちらには聞こえない。それを聞いているトヨウケビメは男を睨みつけている。

男はトヨウケビメを見たまま、空いてる手でトヨウケビメの右の手首を掴むと・・

引き千切った

その途端、トヨウケビメがあまりの痛さに暴れる。しかし、それも無駄な抵抗だった。

一番最初に動いたのはスサノオだった。腰につけた剣で斬りかかったのだ。

彼の剣は私ですら見切るのはむずかしい。おそらく、彼の剣を見切れる者は少ないだろう。それだけ速いのだ。

そのはずなのだ。なのに・・・

「ぐ・・ガっ・・！」

なぜ、スサノオは首を絞められている？

「お前たち全員に言っておいてやろう。

お前たちが交渉だの言っていたことは、こちらの利益になることが一つもない。」

「まて、何を言っている！？」

一体なんだと言うんだ。なにか気に食わないことでも書かれていたのか？

「・・その紙を読んでみろ。」

私は言われたとおりに紙を読んだ。読んで理解した。

そこには、いかにも相手の国を馬鹿にしたような内容が書かれていたのだ。

「理解できたか？俺のこの行為はお前たちに対する宣戦布告だ。文句はあるまい。
そちらから仕掛けてきたようなものなのだからなぁ？」

男はそう言うと、死にかけていたスサノオを放り投げ、掴んでいるトヨウケビメに殺気を飛ばし始めた。
それは恐ろしいほどに鋭い殺気だった。至近距離で受けたら戦意喪失は間違いないだろう。
その証拠に、トヨウケビメは今にも泣き出しそうに怯えていた。

「俺は帰ってこのことを伝える。ではな・・。」
「待て！」

私の言葉を聞かずに、男はそう言うと、トヨウケビメの頭から手を離し、地面に潜って消えた。

「誰か！トヨウケビメが怪我をしました！はやく医務室へ！」

八咫烏がそう言うと、部下が何人かきてトヨウケビメを運んだ。
私はスサノオのところへ行った。

「大丈夫か？」
「ぐっ・・。問題・・ない。」

そう言い、呼吸を整えるスサノオ。かなりの力で絞められたようだ、首に手跡が残ってる。
アマテラスと八咫烏が近づいてきた。そして、八咫烏が口を開いた。

「彼はなんなのでしょうか？ただの人間ではないことはわかりますが・・。」

八咫烏がそう言うと場のものは全員が考えた。あいつは何だ？人ではない、かと言って妖怪でもなければ神でもなかった。しばらく考えているとアマテラスが口を開いた。

「どちらにせよ、戦争は免れないですね。」

「・・そうだな、あの男があんなに恐ろしい奴とはな。」

「あら、それは違うと思いますよ？」

私の言ったことにアマテラスが違うと言った。

なぜだ？あいつはトヨウケビメの手首を千切ったのだぞ？

「なぜだ？」

「だって彼、あの紙を書いたトヨウケビメと襲い掛かったスサノオ以外は攻撃しませんでしたよ？

ねぇ、スサノオ？」

「・・・うむ。あの男はおそらく私に対しても、トヨウケビメに対しても手を抜いていただろう。

本気になれば皆殺しにできたのかも知れぬ。」

信じられなかった。スサノオほどの力を持つものに対して手加減していた？

八咫烏も驚いていた。

「アマテラスよ。お前は随分とあの男に肩入れしておるな？なぜだ？」

スサノオがアマテラスに聞いた。するとアマテラスは一瞬クスクスと笑い、こう言った。

「だって私、あのお方が好きになってしまいましたから。」

「「「は？」」」

その答えを聞いて、三人とも同じ反応をしてしまう。
今の今まで男を避けてきたあのアマテラスが、どこの馬の骨ともわからない男に惚れたというのだ。
私たちは疲れたように各自の部屋に戻った・・・

ーーーーSide凶ーーーー

俺は夜遅くに神社についた。そして諏訪子に説明は明日にしてくれ、と言い、自室に戻り、
布団を敷いてその上に倒れこんだ。
おそらく、戦争は間違えないだろう。と、言うか自分で宣戦布告したし。
さすがに、諏訪子の戦力だけに頼れない。でも、まぁ、負けても考えがある。
今日は寝てしまおう。
そう思い、俺は寝た・・・

第１６話：交渉決裂？（後書き）

はい、終わりました。神奈子のフラグじゃなくてアマテラスのフラグ立てちまった・・。

あと、凶の名前は、最低５個は候補が見つからないと、やめます。

第17話：小さな兵士　カカシ（前書き）

内容は見てからのお楽しみ。

第17話：小さな兵士　カカシ

さて、俺は今、神社の裏手の森にいる。
実は今朝、交渉のことを諏訪子に話したら「凶も悪いんだから戦力増強手伝って。」
と言われた。
まぁ、確かにそうなのだが、まだやってたのか？
そんなことを思いつつも、なんとかして戦力になりそうなものを考えてた結果、
あるゲームでカカシと言われてた小さい機械の兵隊のようなものがあり、それを真似てみようと思ったのだ。
ただ、試しに想像すると、これがむずかしく、変な形のやつしか出てこないのだ。

「どうすればいい・・・。」

そんな感じで悩んでいると、それなら体のパーツを一つ一つ想像すればいいと言う結果になった。
そうすれば、あとは組み立てるだけですむ。それに、一度構造がわかればあとは簡単に想像して創造できるからな。
そう思い、創造した。想像したとおり、角が少し丸い大きさの違う三角が二つ。これは頭と足になる部分だ。こいつら宙に浮く。
体はのパーツはこれまた角を丸くした台形のような形だ。これも小さいのと大きいので二つある。腕の部分はラピ○タのあのロボットである。
しかし、ここで俺は重大なことに気が付いた。・・・中身は？
そう、中身がなければ動かない。なんせ機械なのだから。

「そうだ、魔力などで動かそう。」

魔力を中に込めれば動くだろう。込める物は水晶の玉でいいだろう。
俺はそう思い水晶の玉を創った。そして組み立てていく。

「こんなものだな。」

形は、大きい台形の下の部分を上にし、小さい台形は大きい台形の逆にし、大きいほうの台形に小さい三角の平面をくっつける。で、大きい台形の横のほうに腕のパーツをつけて完成。あ、大きい三角形は小さいほうにつけたぞ？
ちなみに、水晶は魔力を込めて、大きい台形、もとい胴体の部分に潜り込ませて埋め込んだ。人間で言う、胸の部分だ。
俺が水晶を埋め込むと、カカシがゆっくりと宙に浮く。そして、そのまま俺の目の前までやってきた。
意外と小さい、２０センチくらいだ。目のところには丁度穴が開いている。

「成功か。どれ、命令してみるか。あの木を攻撃してみろ。」

俺がそう命令すると、カカシは両手を前に突き出す。（指はちゃんと５本ある）
すると、魔力が集まり小さな魔弾を大量に出した。
そしてそれが木に当たり木っ端微塵になった。いや、強いな。オイ。
しかし、これだけではどれくらいの強さかよくわからんな。・・・
そうだ。
俺はカカシの強さがどれだけか、すぐにわかる方法を思いついたので、いったん神社に戻る。
そして諏訪子を呼び、経緯を話す。

「うん、いいよ。その子が戦力になるか、試してあげる。」

「ああ、頼む。だが少し待っててくれ。」

俺はそう言い、カカシの魔力が少なくなってないか確かめる。・・・まったく減ってない。長持ちするタイプか。

諏訪子に何処でやるか聞くと、お決まりの神社の前でやる事になった。

「じゃあ、行くよ～！」

そう言い、鉄の輪を出す諏訪子。ちなみに、カカシがどんな技を持ってるか確認していない。めんどくさいから。

カカシは、地面すれすれで浮いている。

さぁ、始めてもらおうか・・・・

ーーーSide諏訪子ーーーー

凶が、戦力になりそうなものを作ったから、試しに戦ってくれと頼んできた。
それは小さな人形のようなものだった。地面すれすれに浮かんでいて、変わった形をしているなぁ、と思った。
別に断る必要もないので、受ける事にした。

「うん、いいよ。その子が戦力になるか、試してあげる。」
「ああ、頼む。だが少し待っててくれ。」

そう言うと凶は、人形に手を当てて、何かしていた。
それが終わると凶は何処でやるか聞いてきたので、神社の前でやることにした。
神社の前まで来ると凶は人形に何か指示していた。
やがてそれも終わったのを確認したわたしは開始の合図をした。

「じゃあ、行くよ～！」

そう言うとわたしは鉄の輪を浮かばせて、相手に投げた。これは小手調べだ。
人形は、向かってくる鉄の輪をその手で弾く。ガキィンっ！と言う音がする。
全て弾き終わると、人形はわたしのほうに突っ込んできた。速い！
そして人形はわたしの前まで来ると、右手を横一文字に薙ぎ払った。
わたしはそれをかろうじてかわす。

「く・・！」

しかし、少しだけ当ってしまい、顔に傷がつく。人形は、今度は自身の腕を伸ばした。
わたしは向かってくるそれを鉄の輪で弾く。そして、人形に向かって鉄の輪を投げる。
人形は後ろに跳んでかわす。そして右手を前に出して、そこから大量の弾を出す。小さいが全てが速い。
わたしは能力で大地を操り盾をを作る。そして、その盾をそのまま人形に向かって投げる。
人形はそれを今度は宙に飛んでかわす。それを見てわたしも宙に飛ぶ。
人形は両手を前に出す。すると、そこには凶が言っていた魔力が集まる。おそらく、向こうはこれで決める気なのだ。
わたしは浮かんでいる鉄の輪にありったけの神力をつぎ込む。そしてそれを全て相手に投げる。
人形は両手から光線のようなものを出す。わたしの鉄の輪と人形の光線がぶつかる。
わたしの鉄の輪のいくつかにヒビが入った。しかし、それでもわたしは負けない。
わたしはさらに神力を込める。すると、少しずつだがわたしの鉄の

輪は進んでいく。
そして、鉄の輪は人形に辿りついて真っ二つにした。勝った。
わたしは地面に降りると、その場にへたり込んでしまった。それを見た凶が近づいてくる。
そして凶はこう言った

「ご苦労様だ。」

ーーーSide凶ーーー

「ご苦労様だ。」

疲れているであろう諏訪子にそう言った。
しかし、すごいな。カカシ。とくに最後に撃ったあのレーザー、かなり力を縮小して撃っていた。
だからあんなに細かったんだな。

「ねぇ、凶。あれなにさ?あんなものどうしたの?」
「ああ、作った。」

いつの間にか回復していた諏訪子の質問に答える。さすが神だな。もう回復しているとは。

「作ったって・・・。あのね、普通ならあんなの簡単に作れないよ?」
「ああ、そうだな。正直、自分でも驚いてる。まさかあんなに強い

なんてな。」
「・・・まぁ、いいや。ところであれ名前はなん言うの？」
「ない。」
「は？」
「名前なんぞ決めてない。カカシと俺は読んでいるがな。」
「じゃあ、カカシでいいよ。あれの使った技ってすごいね。よくあんなの考え付いたね、凶も。」
「いや、俺はあいつを作っただけで、技は知らなかった。」
「・・・・・」

諏訪子が一瞬驚いたが、すぐにジト目で見てきた。やめろ、俺をそんな目で見るな。

「・・まぁ、なんだ。戦力になりそうか？」
「うん、充分だよ。もっと作れる？」
「ああ、だが結構疲れるからな。それに置く場所もない。だから、戦う前に作るのが一番だ。」
「じゃあ、その時作ってよ。」
「わかった。」

俺はそう言いながら、壊れたカカシのほうに近づき、拾った。おお、真っ二つにされてしまった・・。

「諏訪子、君も容赦がないな・・。俺の試作品第一号を・・・。」
「う、悪かったてば。だってソイツすごく強かったんだもん。」

まぁ、いいか。とりあえずもう暗くなったから戻ろう。
腹減ったし。

「諏訪子、戻って飯だ。腹が減っては戦は出来ん。」

「いや、まだしないからね？」

ふざけ合いながらも神社に入る俺。もちろん、カカシをもったまま。

さて、今日の飯はなにかな・・・

第17話：小さな兵士　カカシ（後書き）

今回は少し短いかな？
そんなわけでカカシ君です。分かる人には分かるかと思いますよ？

第１８話：よろしい、ならば戦争だ（前書き）

最近更新が遅くなってきた・・・

第１８話：よろしい、ならば戦争だ

俺は今、カカシ兵を生産している。理由は簡単、戦争だ。
今朝、寝ている俺を諏訪子が叩き起こし、「大和の軍が攻めてくる！」と言ったのだ。
だから俺は急いで着替えておそらく大和の軍が来るであろう場所に来たのだ。
ちなみに、諏訪子に壊されたカカシ一号は直っていた。自己修復機能でもついていたのだろう。
そんなわけで俺は創造したカカシ兵に霊力や魔力などを込めた水晶を埋め込んでいるのだ。

「・・よし、終わった。」

そう言う俺の目にはカカシ兵が約３０体ほどいる。霊力、魔力、妖力を平等に１０匹ずつ作った。
なぜ分けたかというと、効率がいいから。以上
俺は、とりあえず一号に任せて諏訪子に報告することにした・・・

報告しにきたら、諏訪子が俯きながら石に腰掛けていた。

「諏訪子。終わったぞ。」
「・・・凶？うん、ありがとう・・。」

そう言いこちらを見る諏訪子は若干元気がない。

「・・・不安か？」
「うん・・。この戦に負けたら下手したらわたし死ぬかもしれないから・・。」

諏訪子、それは死亡フラグだ。
俺は諏訪子に近づき、頭を撫でる。

「・・いざとなったら俺が助けてやろう。
まぁ、お前がよっぽどピンチにならん限りは助けんがな。お前の国の問題だし。」
「・・・勝手だね。自分が宣戦布告したみたいなものなのに。」

そう言う諏訪子は少し笑った。幾分かまともになったみたいだな。
そんなやり取りをしていると、一号がやってきた。・・・来たか。

「諏訪子、行くぞ。迎え撃つ。」
「うん。」

そう言い。俺たちは戦場に行く。

「・・・これはないんじゃないの？」
「・・俺もそう思う。」

戦場にきた俺たちはそう思った。大和の軍の数が多い。
具体的に言うと、こちらのミジャクジ軍は４に対し、あっちの大和の軍は６だ。・・負け戦？
すると、向こうから神奈子が声が聞こえた。何か叫んでいる。

「洩矢神よ！今ならまだ間に合う！だから我々の要求を聞き入れろ！！」

「抜かせ！！貴様らの要求なんぞ聞く耳持たぬ！！」

おお、久しぶりの威厳モード諏訪子。

「ならば仕方ない・・。行け！！」

神奈子がそう言うと、『オォォォォォォォォォォッ！！』と叫びながら大和兵が突っ込んでくる。

「この戦、絶対に勝つ！行け！！」

諏訪子がそう言うと『キュキューー！！』と叫びながら突っ込むミジャクジ軍。・・・これ、絶対勝てないよ・・・。
俺はそう思いながらも「行け」とカカシ兵に命令する。すると、スィー、といった感じで前に進むカカシ兵。
指揮は一号に取らせてる。さぁ、戦争開始だ・・・！

ーーーSide神奈子ーーーー

兵の数はこちらが圧倒的だった。あちらのミジャクジ軍は質がいいが数が少ない。
しかし、私の軍はおかしな人形に苦戦させられていた。
兵が剣で斬りかかれば手で受け止められ、そして折られた。弓を討てば光の弾で打ち落とされる。
厄介な・・・。おそらくはあの男が作ったのだろう。やはりあの男は危険だ。
私はそう思いながら自ら戦場を進んだ・・・

ーーーSide諏訪子ーーーー

最初は大和の軍を見たとき、負けるかと思った。
しかし、凶の作ったカカシ兵が大和の兵をことごとく倒していく。
わたしのミジャクジ軍も頑張っている。
ちなみに、凶は「あとは頑張れ。俺は見てる」と言って何処かに行ってしまった。・・・薄情者。
そんなことを思いながらも、わたしは戦場を眺める・・・

ーーーSide凶ーーーー

「頑張ってるな・・。」

俺は戦場を見てそう呟いた。ちなみに、近くに会った丘で見ている。
しかし、諏訪子のミジャクジ軍と大和の軍がかなり減ってきたな。
俺のカカシ兵は無傷だ。
お、神奈子が自分から出陣したぞ。さすが大将だけあって強いな。
ミジャクジがバッサバッサやられていく。
なんということだ、カカシ兵が一体だが神奈子にやられてしまった。
作るの大変だったんだぞ。

「・・・なぁ、いい加減出てきたらどうだ?」
「あら、やっぱりわかりますか?」

さっきからずっと誰か見てるなと思って声を掛けてみると
アマテラスが現れた。もう一度言おう。現れたのだ。なにもないところから。

「能力か・・。」
「正解。私の能力は『あらゆるものを隠す程度の能力』です。」
「なるほど。暗殺を行う時には便利だな。」
「しませんけどね。それより、いいのですか?」
「何がだ?」
「私があなたがここにいることを伝えれば、大勢の兵が来てあなたは殺されますよ?」
「殺すか・・。無駄だよ。俺は死なん。それに、兵が来れば全員殺すだけだ。」

俺は静かにそう言う。するとアマテラス俺の後ろに回り、俺の背中から抱きついてきた。
白い髪が顔を撫でる。

「・・・なんのつもりだ?」

「別にいいでしょう?減るものじゃありませんよ?」

そう言い、アマテラスはさらに強く抱いてきた。なにか背中に当っているのだが・・・。

アマテラスの顔が赤い。どうした?

「この戦、どちらが勝つと思いますか?」

「さぁ、な。わからんよ。仮に負けても俺にはまだ考えがある。」

「そうですか。・・それより、あなたは鈍いのですね。」

そう言いながら離れるアマテラス。若干拗ねている様子だ。俺が何かしたのか?

「はぁ・・、こんなに男の人に近づいた事もないのに・・・。」

「なにか言ったか?」

「なんでもありません!」

「・・そうか。」

「・・私はもう帰りますね。どうせ戦には出ませんし。」

「そうか。じゃあな。」

「えぇ、それでは。」

そう言い消えるアマテラス。何しに来たんだろうか?

俺はそう思いつつも、再び戦場を見る。どうやら神奈子が諏訪子の元までたどり着いたようだ。

俺のカカシ兵も一号しか残っていない。ちなみに、一号には背中の部分に『一号機』と書いている。

だからすぐにわかる。いつか名前を考えてやろう。

何故かアイツは壊れても自己修復機能がついてるからすぐ直る。それに量産型よりも何倍も強い。

まぁ、そんなことはどうでもいい。今は神奈子と諏訪子だ。

どうやら神奈子が諏訪子に一騎打ちを申し込んだらしい。その証拠に、周りの兵たちは戦うのをやめて二人を囲むように座っている。
そこのミジャクジ、どこからそんな酒を取り出した。
こらカカシ、お前も器を配るな。大和兵、少しは警戒しろ。酒を飲むな！
ここ、戦場だよな？もういい、めんどくさい。俺ももう少し近くで見よう。

ーーーーSide諏訪子ーーーー

「洩矢神よ！私と一騎打ちで戦え！！」

わたしの所に来た大和の神はそんなことを言った。

「何故だ？」

もちろん、こう聞く。すると大和の神は・・・

「私はこれ以上自分の部下が減るのはあまりいい気がしない。そちらも同じはずだ。そこで、一騎打ちを申し込んだ。負けたら素直に引こう。
しかし、こちらが勝ったら要求を呑んでもらう。」

この誘いは正直言って嬉しい。一騎打ちで勝てばあちらは手を引いてくれる。
しかし、負ければ要求を聞き入れなければいけない。
どうする・・？

「いいだろう。その一騎打ちを聞き入れよう。」
「そうか。ならさっそく始めるぞ。」

そう言い、大和の神は剣を構える。そして背中に御柱がいくつか現れた。
わたしは鉄の輪を両手に持ち、そしていくつかの鉄の輪を宙に浮かべる。

「私は大和の神、八坂神奈子！この戦、絶対に勝つ！！」
「わたしは土着神の頂点、洩矢諏訪子！！大和の神に後れは取らぬ！！行くぞ！！」

そう言い、わたしは鉄の輪を飛ばす。神奈子はそれを剣で弾く。甘い！
わたしの鉄の輪はそのままこちらに戻ってくる。さらに、わたしは鉄の輪を飛ばして投げる。
しかし、神奈子は回転して全て剣で叩き落した。

「くっ！当らなかったか・・！」
「次はこちらの番だ！」

そう言うと神奈子は御柱を飛ばしてきた。デカっ！？
あんなもの当ったら骨が砕けてしまう。わたしは能力で堅い土の盾を作って、防ぐ。
少し、ヒビが入ってるが何とか防げたようだ。わたしは盾をただの

土に戻した。
すると目の前神奈子がいて、剣を振り上げていた。わたしは何とか鉄の輪で受け止める。
重いっ・・！

「くっ・・。なかなかやるな。洩矢諏訪子！！」
「そちらこそ、八坂神奈子！！」

わたしの鉄の輪は今の時代では一番技術が発展した武器だ。凶ほどではないが・・。
そんなことを考えていると、上から御柱が降ってくる。わたしはその場から後ろに跳んで離れる。
そして鉄の輪で御柱を砕き、そのまま神奈子にむかって走ったが・・
・

「いない！？」
「ここだ！！」

上から声がしたので振り向くと御柱をこちらに向けて投げてくる神奈子がいた。
わたしは急いで地面を操り、自分の盾にした。そしてそのまま、土の盾を神奈子に投げた。
神奈子の御柱はわたしの盾とぶつかる。わたしの盾は粉々に砕けたが、御柱の向かう先にわたしはいない。
なぜならわたしは・・・

「覚悟！！」
「なっ！？」

飛んでいる神奈子の後ろにいるのだから。

勝った！わたしはそう思っていた。しかし、神奈子の口がニヤリという感じにつり上がる。
その途端、神奈子の後ろからたくさんの細い蔓が出てきて、わたしの鉄の輪にまき付いた。
そして、鉄の輪がそれを切ると鉄の輪は錆びてしまった。

そう言えば凶が言っていた・・・

『敵が生きているなら、決して勝ったと思うな。そう思った途端、お前は負けるぞ。』

神奈子が御柱を投げつける。鉄の輪は錆びてしまったので、土以外の攻撃手段がない。
しかし、あの速さでは間に合わないだろう。

「・・ああ・・。そうか・・」

御柱がさらに速くなり、こちらに向かってくる。間に合わない。

「わたしは・・・。」

ーーーー負けたんだーーーー

そう思った途端、強い衝撃と激痛が走りわたしは気を失った・・・・

ーーーSide凶ーーーー

「・・だから言ったのだ。人の忠告を聞かないから・・・。」

諏訪子は負けてしまった。最後に油断なんてするからだ。馬鹿め！

でも、まぁ・・・

「敵ぐらい取ってやるか・・・。」

俺はそう言い、先ほど創った龍笛を取り出す。演出くらいは大事にしないとな。

俺はそう思い、地面に潜る・・。さて、久しぶりだから上手く吹けるかどうか・・・。

やっぱフルートのほうがいいかなぁ・・。まぁ、いい。

さぁ、始めようじゃないか・・・・。

ーーーSide神奈子ーーーー

「勝った・・・！」

ついに勝った。手強かった。やはり王を語るだけはある。
だが、私は勝ったのだ。さぁ、後は報告しに行くだけだ。

「～～～♪」
「なんだ？」

何故か聞こえた不思議な音色。戦場には相応しくない優しい笛の音が聞こえた。
どこから聞こえる？
そう思ってると不意に悪寒がした。こんなにも美しい音色なのに、聞いていると恐怖が湧いてくる。
気が付くと、ミジャクジも私の兵も全員倒れていた。

「くっ！誰だ！！」

私はそう叫ぶ。すると目の前の地面から『あの男』が出てきた。
ゆっくりと、ゆっくりと、笛を吹きながら地面から出てきた男は笛から口を離した。

「・・・なんのようだ？戦は私たちの勝ちだ。」
「・・・・そんなのは知った事ではない。」

男はそう言い、笛を消した。そして男は静かに、しかしはっきりと聞こえる声でこう言った。

「・・・俺はお前を殺しに来たんだからな。」

男がそう言った途端、殺気が溢れる。その殺気だけでも気絶してしまいそうだ。

そして男は、ゆっくり近づいてきた。その足音はまるで死の宣告。

私はなんとか御柱を作り、男に向かって投げた。しかし、男はそれを手で払いのける。

それだけで私の御柱は砕け散ってしまった。男はそのままコチラに進む。

「・・・さぁ、死ぬ準備はできたか?神でも祈りくらいは捧げろよ?」

「く・・そっ・・!お前は・・何が目的なんだ・・?」

私は男にそう問い掛けた。すると、男はいつの間にか私の前に来て、かがみ込んだ。

そして私の顎を指で持ち上げた。

私は男の顔を見た時、恐怖した。男の紅い目は濁っていたのだ。

ただ目の前のものを見ているだけ、そんな目だった。

男は静かにこう言った。

「言っただろ?俺は・・・・。」

そう言いながら私の首に手をかける。

「・・お前を殺しに来ただけだ、と。」

その途端、私は目の前が暗くなった・・・

ーーーSide凶ーーーー

「少しやり過ぎたな・・・。」

目の前には倒れてる神奈子。ぶっちゃけ、殺してない。後で諏訪子に何を言われるかわかったもんじゃない。
俺はとりあえず、一号機を呼んだ。あいつは他の兵が倒れても見てるだけだった。
ちなみに、なぜ兵が倒れたかというと、さっきの笛の音色に妖力を流し込んだのだ。
ある程度力があれば耐えられるが、弱い兵にはこれで充分だ。
カカシに諏訪子を運ぶように指示し、俺は神奈子を運ぶ。お姫様抱っこだ。

「ん？」

神奈子を見ると一筋の涙が流れていた。・・起きたら謝ろう。
俺はそう思い神奈子の涙を指で拭って神社に戻った・・・

第１８話：よろしい、ならば戦争だ（後書き）

終わった～。
アマテラスが積極的だということがわかりましたね。
次は戦争後のお話です。

第１９話：戦争終了。打ち解けて宴会（前書き）

そのまんまですね。今回は凶が久しぶりにクックルになります。

第１９話：戦争終了。打ち解けて宴会

俺は神社に戻って諏訪子と神奈子を同じ部屋で寝かせた。
そして看病を一号に任せて、二人が起きたときのために何か作ってやることにした。一応料理は出来る。
何故かって？永淋がいない時暇つぶしで作っていたからだ。
ちなみに、エプロンはちゃんと着けてる。真っ黒の絵柄がないやつ。
とりあえず、お粥でいいよな。消化にもいいし。さて、たまごたまご・・・・

「ふむ・・なかなかの出来だ。」

俺、満足♪
俺は、お粥の鍋とお椀を持って諏訪子のいる部屋に向かう。
部屋に入ると、諏訪子はもう起きてた。神奈子は寝てた。

「凶、なんでこいつがいるの？」

俺が部屋に入るのを確認した諏訪子は神奈子を指差しながらそう聞いてきた。
なんでそんな不機嫌そうなんだ？

「まぁ、なんだ。まずはこれでも食え。」

俺はお粥をお椀によそい、諏訪子に差し出す。
諏訪子はそれを、やはり不機嫌そうな顔で受け取り、
一口食べた。すると諏訪子の顔がぱぁ、といった感じに明るくなる。

諏訪子はすぐに食べ終わり、おかわりを要求してくる。
俺はとりあえずよそう。まだまだ大丈夫だ、たくさんある。・・作っておいてなんだが、こんなに食えるのか？
まぁ、いざとなったら俺が食うか。俺の腹はブラックホールだ。
なんだかんだあって、諏訪子はようやく食べるのをやめた。かなり食べたな、三分の一くらい食べたんじゃないか？

「さて、凶。なんでこいつがいるの？」
「ああ、それはな「ん・・んぅ・・。」と、起きたようだ。」

話す前に神奈子が起きたので近くに行く。

「・・お腹すいた・・。」

神奈子がそう言うので、俺は諏訪子と同じようにお粥をよそいで渡す。
神奈子は首をカックンカックンと揺らしている。眠いのか？お椀を落としそうだな・・。
とりあえず、神奈子からお椀を取り上げる。俺が食わせるか。
俺はさじ・・ようはスプーンだ。それでお粥をすくい、神奈子の口の前に持っていく。

「神奈子、口を開けろ。」
「あ～、ん・・・。むぐむぐ・・。」

よし、ちゃんと食べたな。首も揺れなくなった。・・・諏訪子、なぜ睨んでるんだ？
俺はもう一回スプーンですくい、神奈子の口の前に持っていき食べさせる。
そんなことを何回も繰り返してると、鍋のお粥も無くなった。よく

食べきれたな・・。

「神奈子、もう終わりだ。いい加減に目を覚ませ。」
「ん～・・。ん？えっ！？ここ何処！？」

起きたら起きたで騒ぎ出す神奈子。とりあえず、頭を軽く引っ叩いてやる。

「いつ～・・。あ、お前は！！」
「落ち着け。とりあえず、ここは諏訪子の神社だ。
そして俺がお前を連れてきた。」
「なぜ？」
「ああ～、なんだ・・。その・・すまん。」
「は？」

俺は神奈子から少し離れ素直に謝罪する。・・諏訪子、なぜお前は俺を睨むんだ？

「実はだな・・。諏訪子がやられた時に、少し敵をとってやろうかと思ったんだ。
で、お前の前に現れて殺気を飛ばしたんだが・・。ものの見事にお前が気絶してしまってだな・・。」

俺がそう言うと顔を真っ赤にする神奈子。

「で、さっきお前が起きてだな・・、お粥を食わせたんだが・・。」
「なっ！？私はそんなもの食べてない！！」
「いや、食べたぞ？」
「食べてない！！」

そんなやり取りをすると、さっきまでいなかった一号が俺の服を引っ張ってきた。俺がそちらをみると、
一号は壁のほうを向き、手を突き出す。すると壁になにか映った。

「なっ！？／／／」
「便利だな。お前にはこんな機能もついていたのか。」

そこには寝ぼけてる神奈子にお粥を食べさせてる俺の姿が映されてた。

「う・・・。」
「う？」
「うわぁぁぁぁん！！！」

そう叫びながら、俺に向かって御柱を飛ばしてくる神奈子。諏訪子、見てないで助けてくれ。
なんだその『ざまぁみろ』みたいな顔は。

「神奈子、落ち着け。」
「うるさい！！」

仕方ない・・・。
俺は神奈子の後ろに回りこんで妖力で作った鎖を巻きつかせた。
神奈子は何回か解こうと試したが、無理だとわかってあきらめた。

「諏訪子、話をするから来い。」
「はいはい・・」

俺は諏訪子を呼び、その場に座る。なぜか諏訪子が俺の膝の上に座る。まぁいい。

「さて、神奈子、この戦は君の勝ちだ。おめでとう。
よって俺たちは君の要求を聞き入れなければいけない訳だが、一つ問題がある。」
「・・・問題？」
「問題って何さ。凶。」
「それはな、諏訪子の国の民が君たちの信仰をまずしないだろうと言うことだ。」
「！？なぜだ！」
「諏訪子はミジャクジを操れる祟り神だ。民はミジャクジの祟りを恐れてきた。それなのに、急に信仰する神を変えろなんて言われても、祟り神の祟りが恐ろしくてできんだろう。」
「・・・・・」
「・・・・・」

諏訪子も神奈子も黙って聞いている。

「まぁ、あとは自分たちでなんとかしろ。行くぞ、一号。」

俺は一号にそう言い、部屋を出る。おっと、鍋とお椀を忘れるところだった。
とりあえず、使った物を全て洗い、縁側に行って茶をする。

「・・和むなぁ～・・・。」

我ながら爺くさい。あ、茶菓子忘れた。
そう思っていると、一号が持ってきてくれた。本当に気が効くな。
一号がもってきたのは羊羹だった。はて？この時代に羊羹なんてあったか？
すると俺の考えてることに気づいたのか、一号は『作った』と地面

に書いた。・・なんと言うか、すごいな。
俺は羊羹を食べつつ茶を飲む。

「・・・・ん？」

なんだろう。神社の裏の森になかなかの妖力が・・・見に行くか。

神社の裏の森に行くと、変な狼みたいのがいた。いや、妖怪だけどな？
すると妖怪が俺に気付く。

「・・何だ、貴様は？」
「ほぅ・・すごいな。最近の狼は喋れるのか。」
「なめているのか人間？」

狼をそう言い、俺に飛び掛ってくる。ちなみに、今の俺は力をまったく出してない。
つまりは普通の人間と同じだ。
まぁ、たまには全力を出して戦ってみるか。
俺は腕輪をはずし、クックルになる。おお、力が上がってる。

「お・・お前は・・。『凶鳥』！？」
「・・懐かしいな。まだそんな呼び方をするやつがいたなんてな。
全員殺したと思ったのだがな・・。」

俺は一瞬で狼の前に行き、森の奥深くまでぶっ飛ばす。なんとな～く、諏訪子や神奈子にこの姿を見られたくない。
俺は、見えなくなるくらい飛んでいった妖怪に高速で走って向かう。

お、いたいた。森の奥で木に叩きつけられていた。頑張って立ち上がろうとしているな。

「ぐっ！！この、化物め・・。」

「いや、お前も妖怪なんだから化物だろう？」

俺はそう言いつつ、狼まで近づき、上に蹴り飛ばす。

そして思いっきり跳んで、空中で狼を掴む。

そのまま狼を地面に向ける。

食らえ、昔みたＡＡのバトル系動画の技！あ、でも名前少し変えとこう。

「破壊の烙印押し！」

地面に思いっきり叩きつける！・・うん、パクった。本当は「破壊の」じゃなくて「暗黒」なんだよ。

しかし、狼はまだ生きてる。妖力で体を守ったな？それなら・・

「終わりだ。」

俺は叩きつけたまま相手を・・殴る殴る殴る！これぞクックル！！

俺は妖怪を倒すと、手についた血を近くの湖で洗う。

破壊の格印押しはなにも力を込めないで打ったが、結構効くものだな。

さて、戻ろう。そろそろあの二人も何か案が出ただろう・・・

で、戻ってきて二人の案を聞いたらちゃんと出てた。

めんどくさいので、簡単に言うと、表では諏訪子が信仰されてるけど、
神奈子にも信仰が届くようにして、二人で一緒に分けるってことだ。
んで、諏訪子はなんとなく神社の場所を変えたいらしい。理由を聞いたところ、
小さいほうがなんとなくいいから、だそうだ。よくわからん。

「まぁ、俺はお前の決めたことには文句は言わない。」
「うん、それでさ、神社って言ったらやっぱり巫女が必要じゃない？だからさ、使えそうな人間に神力を流し込んで、人間と神の子を作ろうと思うんだ。」
「まぁ。頑張れ。それと、神社の引越しはいつだ？」
「ん～、三日後くらい？」
「そうか。」

そう言うと、諏訪子は何か思い出したように部屋を出て行った。
俺は、神奈子を二人きりになってしまった。

「・・お前、凶と言うのかい？」
「ああ。」
「じゃあ、凶、お前どっかで妖怪か何かを殺したね？」
「・・よくわかったな。さっき神社の裏の森にいたからな。軽くひねった。」
「軽く・・ね。本当に、何者なのかね。お前は。」
「何、ただの一般市民だよ。ただ、少し強いだけだ。」
「いや、お前が一般市民だったら間違いなく世界が滅ぶよ。」

そんな会話をしていると、諏訪子が戻ってきた。・・・両脇に酒を抱えて。
一号、お前も手伝ったのか。一号のも合わせると４本だ。

「諏訪子、その酒は何だ？」
「ん？飲むんだよ。みんなでね。どうせ一緒に暮らすんだ。これくらいはしないと。」
そう言い、杯を配る。
「神奈子、お前は酒が飲めるか？」
「ああ、飲めるよ。」
俺はそれを確認すると一号につまみになるものを頼み、杯に酒をついでやる。
もちろん諏訪子にもついでやった。
「さて、戦が終わったことと、神奈子が一緒に暮らすことに乾杯だ。」
そう言い、俺たちは酒を飲む。
さて、諏訪子がよったら神奈子になんとかしてもらうとしよう・・・
そう思っていた時期も俺にはあったさ。でもな、これはないと思う

んだ。

「凶～、お酒ついで～。」
「聞いてるのか。凶、私はな・・」

ウザイ。二人とも酔っ払いやがった。俺は諏訪子に酒をついでやる。

「・・それにしても暑いね～・・・。」

突然、神奈子がそう言いだす。おい・・まさか。

「脱ぐか！」

馬鹿ヤロー！！脱ぐな。俺は服に手をかける神奈子にチョップを入れてとめる。
ええぃ、諏訪子も抱きつくな！
一号！どこにいった！
見ると一号はかなり離れた位置で「無理無理」という感じに手を振ってる。
裏切ったな！

「ねぇ～、凶？」
「・・・なんだ？」
「凶は大切な人いる？」

膝の上に乗っている諏訪子がそう聞いてきた。大切な人・・・。

「さぁ、な。」
「そうやってまたはぐらかす～。」

俺は頬を膨らませる諏訪子の頭を撫でる。
すると、神奈子が肩に寄りかかってきた。・・・寝たか。

「諏訪子、俺は神奈子を運ぶからどいてくれ。・・諏訪子?」

・・・寝てる。俺はどうしたらいい?仕方ない・・。

「一号、毛布を二枚くれ。今日はここで寝る。」

そう一号に頼むと、一号は毛布も持ってくる。
俺はお前も自由にしていい、と言うとその場で停止した。一号も疲れたのか?まぁいい。
俺は毛布を神奈子に掛ける。諏訪子は膝の上で寝てるので、一緒に使う。
俺はいつもどおり、「おやすみ」と言い、眠りについた・・・・

翌朝、神奈子が顔を真っ赤にしながら御柱を投げてきたのは言うまでもない。
ちなみに、諏訪子も「あ~う~。」とか言いながら頭を抱えてた。

第１９話：戦争終了。打ち解けて宴会（後書き）

はい、終わりました。神奈子さんがこんな感じになった。
今回は「破壊の格印押し」を使いました。
元ネタはあるＡＡのガチンコバトルのフラッシュ。三月ウサギがかっこよかった。ちなみに、狼は人妖大戦に出てない生き残りです。

第２０話：え、なんでこんなとこにいんの？（前書き）

今回は久しぶりの永淋が。

第２０話：え、なんでこんなとこにいんの？

さて、皆のもの。俺はまずこの言葉を叫びたい。

「ここは何処だ！？」

俺は知らない森にいる。いや、まじでどこ？
実は今朝、どこか一瞬で移動できる方法を考えていて、それである動画を参考に、『異界門』なるものを作ったのだ。
で、とりあえず、適当な場所でいいな、と思いながら入ったらここにいた。
わけわからん。諏訪子は？神奈子は？

「一号・・。」

そう呟いた途端、一号が飛んできた。いや、よく聞こえたな？
とりあえず、一号を肩に乗せて森からでることにした。

「なん・・・だと・・？」

森から出て目の前の光景を見て呟いたのはそれだった。
微妙に白と黒と灰色の混じったデコボコの地面。
その先には大きな門がそびえ立っていた。

はっきり言おう。でこぼこの地面はともかく、あの門は見覚えがある。
そう、かなり前に俺が住んでたあの未来都市の門とまったく同じなのだ。

「とりあえず、行くか・・・。」

俺は門の前まで高速でダッシュして、止まった。
あ、いけね、門番が驚いた顔でこっち見てる。

「なんだ!お前は!!」
「む、ああ、すまんな。ところで中に入れてくれないだろうか?」
「いや、怪しい奴は通さん。」
「いいじゃないか。入れてくれ。」
「駄目だ。」
「頼む。」
「駄目だと言ってるだろう!」
「入れろ。」
「命令形!?」

俺は門番があまりにも頑固なので、手刀で眠ってもらった。働きすぎはよくないぞ?

「さぁ、通るか。」

俺は門番を踏みながら門を通った。なに?鬼畜?知った事か。
門を通ると、案の定、未来都市だった。ただ、少し科学が発展したかな。
俺がしばらく進んでいると、これまた懐かしいものを見つけた。

「・・・道進・・・。」

道進のいた、あの建物だ。中に入ろうと思ったが、やめた。
立ち入り禁止って書いてあるから。
そこで立ち止まってると、研究員のような二人組みがやってきて、
何か話していた。

「いや～、それにしても月の賢者様はすごいな。」
「そうですね。この前は一瞬でお湯が熱くなる風呂を作ってましたからね。」

月の賢者か・・。興味があるな。

「あ～、そこの二人。少しいいか？」
「ん、なんですか？」
「ああ、月の賢者とやらは何処に住んでいるんだ？」
「ああ、それならあそこだぜ。ほら、あの結構でかい家だ。」
「感謝する。」
「でも、たぶん会えないぞ？一応、身分が高いから・・。」
「そうですよ。下手したら『死刑じゃ！』なんて言われますよ？」
「まぁ、その時はその時だ。じゃあな。」

俺はそう言い、月の賢者とやらに会いに行くことにした・・・。

で、着いたわけだ。いや、でかいなぁ～。諏訪子の神社よりでかいぞ。
俺は門の前にあったベルを鳴らす。するとメイドっぽいのが出てきた。

「何か御用でしょうか？」
「ああ、月の賢者に会いたい。」
「それは・・・。ちょっと・・。」
「何故だ？」
「月の賢者様はあまり男性のお客様は近づけたくないので・・。」
「まぁ、別に構わないだろう。それに、少し見てもらいたいものがあるしな。」

俺はそう言い、肩に乗せた一号に目をやる。

「・・・わかりました。どうぞお通りください。」
「すまないな。」

俺はメイドに案内されながら屋敷を進んだ。
しばらくすると、リビングっぽいとこに着いた。

「ここでしばらくお待ち下さい。」

「ああ、わかった。」

俺は近くのソファーに腰を下ろした。メイドがすぐに戻ってきて、紅茶を持ってきてくれた。

さて、月の賢者とやらに会うわけだが・・・。

どんな奴だろうか?俺的には、長いヒゲのじいさんを想像しているのだが・・・

その時、扉がガチャっ、と開いた。

さて、どんな面かな、と思い見てみると・・・

「「え?」」

そこにいたのは永淋だった・・・

ーーーーSide永淋ーーーー

私はこの薬3000年間でかなり階級が高くなった。様々物を作り、月の文化を繁栄させた。

そして『月の賢者』とまで言われるようになった。

「永淋様、お客様です。」

「あら、そう。後で行くわ。」

メイドが来た。私は外では月の賢者と呼ばれてるが、家の中では名前で呼ばせてる。

「で、誰?上層部?」
「いえ、男性です。なんでも見せたいものがあるとかで・・・」
見せたいもの・・・。なんだろうか?
私はそう思いつつ、メイドの後に続いて歩いた。
そして客を待たせてるであろう部屋の前まで来た。私はその扉を開ける。そこには・・・
「「え」」
その男性は私を見て驚いた。私も驚いた。
そこには本来いないはずの男がいたのだ。私は一歩一歩その男に近づいた。
「凶・・・?」
恐る恐る聞いてみた。すると・・
「・・・久しぶりだな・・・。永淋。」
私はそう言われた途端に凶に飛びついた。
この3000年間ずっと後悔していた。なぜあの時止めなかったのだろう?と。
凶は何も言わず私を抱きしめてくれた。私はそれが嬉しくて・・・
「ふぇ・・・。」
涙を流した・・・

ーーーSide凶ーーーー

「ふぇ・・・。」

急に永淋が泣き出してしまった。なんだ、そんなに俺に抱きしめられるのが嫌だったのか!?
おいメイド、なんだその目は。え、オイ。ってか帰れよ!

「おい、永淋、泣くな。俺が泣かしてるみたいだ。」
「あなたが泣かしてるのよぉ・・。馬鹿ぁ・・。」

なん・・だと・・?
とりあえず、永淋は俺が泣かしてるという結論になった。まだいたのか、メイド。
こっち見てにやけんな。

「ずっと・・ずっと心配で・・・。あの戦争から3000年も経って・・。
もう会えないんじゃないのかと思って・・。」

・・・3000年?え、何。つまり3000年も寝てたの?うわ~、俺もうじじぃじゃねーか。
俺は泣き続ける永淋を強く抱きしめた・・・

「で、落ち着いたか？」
「・・ええ・・。」
若干顔を赤くする永淋。メイドは出て行った。と言うか俺が追い出した。
「・・・それで？どうしてあなたがここにいるの？」
俺は経緯を話した。
「その異界門で帰らないの？」
「何処かに行ってしまった。あいつも生きてるからな・・。」
そう、どこかに行ってしまったのだ。と、言うか起きたとき既にいなかったからな。
ちなみに、異界門の容姿は、カバの口の上顎を大きく開けているみたいな感じだ。色は黒だ。
上下に鋭い大きな長い歯が並んでいる。そして口の中で目玉が１つ浮かんでいる。
口の中に入ると閉じて、移動できると言うわけだ。
まぁ、本来なら移動時し終わったあとに口から出すから、近くにいるはずなんだがな・・・。
パクリ？いいじゃないか。色違いなんだぞ？完璧なパクリではないはずだ。
「そう・・・、あなたこれからどうするの？ここで住む？」

「そうだな・・。そうしよう。行く当てもないしな。」
「そう、じゃあ部屋へ案内させるは。もう夜だし。」
「む、本当だ。頼む。」

ずっと空が暗いからわからなかった。いや、月だし当たり前だけどね？
時計なかったら不便な生活だな。
俺は永淋におやすみと言ってメイドに部屋に案内してもらった。
そしてぐっすり寝た・・・。
明日は色々話でもしよう・・・・あ、諏訪子と神奈子は大丈夫だろうか？

そのころの二人

「うえぇぇぇん・・・。」

「きっとすぐ帰ってくるから泣きやみなって、ね？」

諏訪子がめちゃくちゃ泣いて、それを神奈子が慰めていた・・・

第２０話：え、なんでこんなとこにいんの？（後書き）

今回は短いな～。
そんなわけで月にきました。次回は誰を出そうかな～。

第２１話：新しい名前と異界門（前書き）

そのままです。

第２１話：新しい名前と異界門

真っ暗だ。何も見えない。ここは何処だ？

『やぁ、聞こえるかい？』

誰だ？

『うん、まぁ、名無しだよ。僕は。』

・・なんのようだ？

『うん、冷たいな。まぁ、用件って言うのは、君の名前についてだよ』

名前？

『うん、君は『凶鳥』って呼ばれてるよね？
それでさ、名乗るときに「俺は凶鳥の凶だ！」って言うのも変でしょ？だからさ、君に名前を持ってきたんだよ。』

まぁ、確かに。しかし名乗る機会なんてないと思うがな・・・

『気にしないでよ。んじゃ、君の名前を言うね。
君は今から紅鎖華（あかさかかい）　壊だよ。
苗字はトサカから取って、名前は全てを破壊する凶鳥からだよ。拒否権はないからね？
もう瑠璃には伝えたし。』

・・・まぁ、いい。俺は今から　紅鎖華　壊　だ。
そうだ、俺の異界門はどこにいったか知らないか？

『あ～、あれね。うん、たぶんすぐ会えるよ。
後、たぶんこれからも勝手にどこかに行っちゃうかもしれないし、
何かに閉じ込めて持ち歩いたらどうだい？』

・・そうするか。適当に小さな石でも作って閉じ込めておく。まぁ、
大抵は自由にさせておくさ。
害はないだろうしな。

『うん。そうしなよ。じゃ、もう行くよ。あ、そうだ。異界門の名
前はゲートとかにしておくと
覚えやすいよ。』

それじゃあな。

「・・ん。」

変な夢だった。しかし、紅鎖華　壊　か。どうせ前の名前も好きじゃなかったんだから、これからはそう名乗ろう。
俺はそう思い起き上がる。するとベッドの横にはなぜか異界門、もといゲートがいた。

「・・・何をしているんだ。と、言うか何処に行っていた？」

俺がそう聞くと異界門は何か口から出した。
それは石だった。黒い小さな石。

「・・・まさかだとは思うが、お前をこれに？」

俺がそう聞くと、ゲートの口の中の目玉が頷いた。

「わかった。とりあえず、用がある時は外に出すぞ？それと定期的に外に出して自由にするからな？」

ゲートは頷いた。もちろん、目玉が。
俺は石に魔力を込めて、ゲートに向ける。すると石が少し動き、ゲートが中に吸い込まれた。
ゲート仕舞った後、ちゃんと出てくるか心配だったので、出て来いと念じてみるとすぐに出てきた。

便利だな・・・・。

第２１話：新しい名前と異界門（後書き）

はい、終わり。
今回はこれだけ。いや、名前を出した後にやることも大してなかったから・・。次は知ってる人は知ってるキャラがでます。
それと名前を考えて下さった方々、ありがとうございます

第２２話：二人の教え子（前書き）

ん、このキャラはよくわからない。

第２２話：二人の教え子

とりあえず、変な夢を見たがなんとなくその夢で言われたように紅鎖華　壊　を名乗る事にした。
別に昔の名前を語りたいとも思わんしな。
俺は起きた後に、永淋のところに行き、改名したことを伝えることにした。永淋はテーブルで待っていた。

「ふ～ん・・。じゃあ壊って呼ぶわね。で、壊。食事が終わったら一緒に来て欲しいところがあるの。」
「・・・来て欲しいところ？」
「ええ。まぁ、終わってから行きましょう。」

俺は頷いて、椅子に座った。今回の朝食は和食だ。魚に米に味噌汁。その他もろもろ。
俺は食事が終わると、永淋に言われたとおりに行くことになった。
さて、一応ゲートと一号も連れて行こう。

道中、一号のことをかなり聞かれた。「どうやって作ったの？」とか、「材料は？」とか、色々聞かれた。その質問を答えていると、いつの間にか目的地のついてた。

「ここよ。」

「・・・なんだ、ここは？」

永淋が連れて来たのは大きな屋敷だった。屋敷は永淋の家よりデカイ。

掃除が大変だろうな。永淋は門番みたいなのと話をしている。

俺はいざと言う時のために一号の点検をすることにした。

ついでに、霊力も込めた。だって強化しておけばこの後色々と便利そうじゃないか。

「終わったわよ。入りましょう？」

「ん？ああ。」

いつの間にか永淋が門番みたいなのと話おわってた。

俺たちは門の中に入った。・・・これはマタずいぶんと広いな。

いかにも昔の家って感じがする日本屋敷だ。貴族みたいのでも住んでいるのだろう。

とりあえず、屋敷の中に入る。

するとメイドっぽいのが出てきた。いや、和風にそれは合わないぞ？

「いらっしゃいませ、永淋様。」

「ええ、二人はいる？」

「はい、今日も待ってますよ。・・・ところでそちらの方は・・・？」

「ええ、気にしないで。私の友人よ。」
「!そうですか。ではどうぞ、お通りください。」

メイドがなんか驚いてどっかに行った。
なんか「今夜は赤飯です!!」とか聞こえるぞ?
俺は気にしないで進む。しばらくすると、永淋が話し始めた。

「今回あなたをここにつれてきた理由は、ある二人に会ってもらいたいの。」
「・・ある二人?」
「ええ。私の教え子みたいなものよ。」
「・・そうか。まぁ、構わんさ、どうせ暇だしな。」
「ふふ・・。ありがとう。」

何を笑ってるんだ?そんな事を考えてると永淋が一つの障子の前に立った。
永淋はそこを何の断りもなく入った。・・・失礼します、とか言わないのか?
襖を開けると、そこには二人の少女がいた。一人は長い金髪の少女だ。
もう一人は紫のような髪のポニーテールの少女だ。

「二人とも、元気にしてたかしら?」
「あれ、永淋。久しぶり~。」
「永淋さん。お久しぶりです。」

金髪の少女は友達感覚で、ポニーテールの少女は大人への対応のような感じであいさつする。
・・・なぜか金髪の少女が俺をものすごい目で見てる。

「永淋、その人誰？」
「ええ、彼はきょ・・・紅鎖華　壊　と言うの。」
「ふ～ん。永淋の彼氏？」
「違うぞ。俺は永淋の彼氏ではない。」

俺は素直にそう答える。・・・永淋、なんで睨むんだ？

「お初目にかかります。私は綿月依姫（わたつきの）と言います。
ほら、姉さんも自己紹介して。」
「はいはい・・。私は綿月豊姫（わたつきの）よ。よろしくね。」
「紅鎖華壊だ。で、永淋、なぜ俺を連れてきた？」
「別に意味はないわ。」
「・・・・・・」

なんだそれは？確かに俺は暇人だ。認めよう。
だが何の意味もなしに連れてこられるのはあまりいい気がしない。

「・・・まぁ、いい。俺は見てる。」

俺はそう言い、部屋の少し隅あたりに移動する。ちなみに、座らない。
腕を組んで立っている。いかにもクックルっぽくないか？

「じゃ、始めましょう。」
「はい。」
「は～い。」

俺はしばらく見ていたが、やはり見るというのは暇なので、一号を投げて遊ぶ事にした。
危険？大丈夫だ。当たらなければな。

「・・壊、危ないからやめてくれないかしら？」
「いや、暇だしな。」
「壊さん、とりあえずやめてください。」

むぅ、仕方ない。
俺は一号を投げるのをやめた。すると、豊姫が何か思いついたように質問をしてきた。

「ねぇ、壊ってどうやって永淋に会ったの？」
「姉さん、急に何を言い出すの・・。」
「だって壊すごく暇そうだし、永淋のことが少し分かるかもしれないわよ？」
「聞きましょう。」

豊姫がそう言うと依姫はすぐに賛成した。

「だ、そうだ。どうする、永淋？」

「そうね・・・。まぁ、いいんじゃないのかしら。」

「そうか、そうだな。まずはどこから話すかな・・。」

「壊さんと永淋さんの最初の出会いを。」

「ん、ああ・・・。あれはもうかなり前の・・・。」

しばらくすると、昼食の時間になった。

帰ろうかと思ったが、依姫が食べていけと言うので、ここでご馳走

になることになった。
出てきたのは予想通り和食。しかもなぜか赤飯。運んできたメイドがニヤニヤしてる。
まぁ、気にすることでもない。俺は箸をを持って食べる。普通に上手いな。
食事が何事もなく終わると、依姫が「それでは」とか言ってどこかに行ってしまった。

「永淋、依姫はどこに行ったんだ?」
「刀の稽古よ。気になるなら見てきたらどうかしら?」

どうするかな・・。どうせ暇だしな。行くか。
それに他の奴がどんなふうに稽古してるのか気になるしな。

「行ってくる。」

俺はそう言い、依姫を探しに行く。どこにいるのか・・・。
その辺をぶらぶらしてると、「ハッ!」とか言う声が聞こえたのでそちらに向かう。案の定、依姫が庭のような場所で刀を振り回していた。
俺は縁側に座る。まったく気づいていないな。それだけ集中しているのか?
依姫の刀捌きは美しい。・・・少し、興味が湧いたな。

「精が出るな。」
「あ、壊さん。いつからいましたか?」
「さっきからずっとだ。」
「え、そうなんですか?すいません、まったく気づきませんでした・・。」
「まぁ、気にするな。それより、どうだ。俺と一回試合してみるか

？」
「え、いいんですか？じゃあ、お願いします。」
「ああ・・・いや、待て。」
俺はそう言うと懐からゲートの石を出す。
丁度いい、こいつの力を見てみよう。

「さて、始めるか。ただし、今回は俺は戦わない。」
「え？」
俺は石に出て来いと念じる。すると石からゲートが出てきた。
依姫が驚いている。まぁ、こんなのが出てきたらびびるよな、普通は。

「あの、なんですか、それは・・」
「気にするな。」
俺はそう言い、コインを取り出す。そして投げた。

チャリーン

「さて、試合開始だ」

ーーーSide依姫ーーーー

壊さんが黒い石を取り出すとその中から何かが出てきた。
そう、何かだ。大きな口のような中に鋭い歯が並んでいて、
口の中の中央には目が浮いている。黒い何か。
壊さんはコインを出すと、それを空に向かって弾いた。
おそらく、これが試合に合図なんだと思う。
私はコインが落ちるのを待つ。

チャリーン

その途端、黒い何かがこちらに向かって突っ込んできた。私はそれを右に跳んで避ける。
そして私はその黒い何かに斬りかかった。
しかし、黒い何かは一瞬で後ろに下がって、口から黒い弾を吐き出す。それもたくさん。
私はそれを刀を使いながらかわす。すると、黒い何かは一瞬で私の前に来た。
・・嘘・・まったく見えなかった・・。
黒い何かはその大きな口で私を噛み付こうとする。私は目をつぶった・・・・。
？いつまで待っても痛みが来ない。私は恐る恐る目を開けてみる。
黒い何かは止まっていた。口の中の目玉が私を見ている。

「試合終了だな。依姫。」

ーーーSide壊ーーー

「試合終了だな。依姫。」

俺はそう言った。どうやらゲートは手加減していたようだ。
これがただの試合だとわかっていたのだろう。しかし、気になる。
ゲートが最後に依姫に近づいたときだ。あれは俺でも見えなかった。
あれはいつの間にか依姫の前にいたように見えた。・・・能力か？
だったらどんな能力だろうか？まぁ、それは後でいいな。

「で、実際戦ってみてどうだった？」
「・・・完敗です。強いですね。この子は。名前はなんて言うんですか？」
「異界門、ゲートだ。」
「ゲートちゃんですか・・・。」

ちゃん付けは似合わないだろ・・。
まぁ、いい。

「今回はこれで終わりだ。ゲート、戻れ。」

俺がそう言うと、ゲートは石に吸い込まれるように戻っていった。

「行くぞ。依姫。二人のところに戻る。」

「はい。」

俺たちは二人のいる場所に戻った。
で、戻った俺たちが見た光景は、りんごを齧って何か話している二人だった。

「あら、戻ってきたの？壊。」
「ああ、少しだけ稽古に付き合ってやった。戦ったのは俺じゃないがな。」
「あなたが戦ったらこの屋敷が崩壊するんじゃないかしら？」

永淋が笑いながらそう言う。そして俺を恐ろしい者を見るような目で見てる二人。
まぁ、否定できない。本気で戦えば壊れそうだな。

「別にいいだろう？それに、俺は力を抑えてるんだから壊れはしないと思うぞ？」
「そう言えばそうね。じゃ、帰りましょうか。」

永淋がそう言って立ち上がる。
すると、依姫が俺の前まで来た。

「あの、壊さん。今日は泊まっていきませんか？明日も稽古に付き合ってほしいので・・。」
「・・・しかし・・。」
「あら、いいじゃない。壊、そうしなさいよ。私は何も言わないから。」

・・・永淋、そう言いつつ俺に弓を向けるのをやめてくれないか？
しかしどうする？

もし断れば、依姫はガッカリするだろう。しかし、承知すれば間違いなく俺に矢が飛んでくる。
よし、決めた。

「・・わかった。今日は泊まらせてもらう。」

そう言った途端、俺の頭に何かが刺さった。
俺はそれを乱暴に抜く。永淋め・・。頭を狙ってくるとは・・。

「永淋、君は俺を殺す気なんだな？」
「あら、そんなことはないわよ？仕方ないから私は帰るわ。」

そう言い、出て行く永淋。見送ったほうがいいよな？

あの後、永淋を見送り晩飯を食い終わり風呂に入った俺は、案内された敷布団を敷いた部屋に戻って寝ようと思った。しかし・・・

「・・何をしているんだ。二人とも。」

なぜか俺の敷いた布団でゴロゴロしている豊姫。
そして正座をして刀を磨いている依姫。

「あ、壊さん。勝手に上らせてもらいました。
私は今日の試合での悪かった点を指摘してもらいにきました。」

「私は邪魔しにきたわ～。」
「わかった、とりあえずそれは話しておこう。豊姫、君は帰れ。」
「ひどいわ！私だけ除け者にする気なのね！？ハッ！もしかして私の妹の体が目当てなの！？」
「何を言っているんだ。君は。ほら、出て行け。」
「ぶ～、ケチ～」
「明日いくらでも相手をしてやる。それでいいだろう？」
「しょうがないわね・・。」

そう言い、出て行く豊姫。まったく、なんだ体が目当てって。意味が分からん。
（※マジで意味がわかってません。）

「さて、では・・・、何をしているんだ。君は」
「え？」

何故か顔を赤くしながら服を脱ごうとしている依姫。
俺はとりあえず、服をちゃんと着るように言って、
今回の戦いを一号に壁に映させ悪かった点を夜遅くまで指摘した・・
・

第２２話：二人の教え子（後書き）

終わった。
この姉妹のキャラはよくわからない。
と、言うか東方自体あんまりよくわかってない。

第２３話：油断大敵（前書き）

油断大敵ですよ

第２３話：油断大敵

「・・・ん。」

・・眠い。昨日は依姫と夜遅くまで話してたせいであんまり眠れなかった。

俺は布団からもぞもぞと出ていつもの格好に着替える。そしてそのまま庭に行く。

朝の稽古だ。俺は朝起きたら大抵はこれをやる。今回は槍でやろう。

俺は能力で槍を創りそれを持つ。そしてまずは一本突きをし、そこから払いなどに入る。

・・・ん？なんか視線を感じる・・。

「・・・誰だ？」

「あら、気付いちゃった？」

「豊姫か。」

見てたのは豊姫だったようだ。まだ少し眠そうだ。

「ずいぶん早起きだな。」

「なんか目が覚めちゃったのよ。壊こそ早起きね。」

「俺はいつもこの時間帯に起きてる。」

「ふ～ん。ねぇ、昨日の約束覚えてる？」

「・・・ああ、一日付き合ってやると言うあれか。」

「そうそう。約束したんだから付き合ってね。」

「ああ、ただ依姫の稽古の相手をしてからだ。その後はお前に付き合ってやる。」

「はいはい。・・ふぁ～・・、まだ眠いわねぇ～・・。」

そう言いながら、自室に戻っていく豊姫。
俺はそれを大して気にせずに、稽古の続きをした・・・

朝食をとった後、依姫の稽古に付き合うことになった。
今回はどうするかな・・・。

「壊さん、よろしくお願いします。」
「ああ。さて、依姫、今日お前がやりたい稽古はあるか?」
「やりたい稽古ですか?・・・それじゃ、壊さん、私と試合をしてください。」
「・・・まぁ、いいだろう。それじゃあ昨日と同じでこのコインが落ちたら試合開始だ。いいな?」
「はい。」

俺はポケットからコインを取り出す。ちなみに、これは拾った。
俺はそのコインを親指で弾く。コインがゆっくりと地面に落ちる・・・。

チャリン。

その途端、俺は走った。いくらクックル状態じゃないとは言え、か

なり速い。
その辺の奴では見切れないだろう。俺はそのまま依姫を殴る。
だが、刀の刃によって遮られる。だが、その程度では俺は斬れない。
俺はさらに回し蹴りを入れるが、依姫はそれをかわす。

「ほぅ・・。若いのにやるな。」
「はぁはぁ・・・壊さんこそ、全然余裕そうですね。」

手を抜いてるからな。そもそも、本気でやったら依姫が潰れたトマトになる。
そうだな、あれを試してみよう。
俺は依姫に向かって走る。そしてそのまま依姫が見える速さで殴る。
依姫は刀で防御をするが・・・

「無駄だ。」
「ガッ!?」

俺の拳は依姫の脇腹に入っていた。

「・・俺の勝ちだな。」
「っ・・!少しは・・手加減してくださいよ・・。」
「いや、かなり手加減したぞ?」

依姫は随分と痛がっている。
やがて少しずつ痛みが引いたようで立ち上がる。

「・・・どうやって私に拳を入れたんですか?」
「なに簡単なことだ。お前にわざと見える速さで殴って、
防御された時に自分の肘と手首の間接を意図的に外し、軌道をずらしたんだ。

そしてそれを脇腹に当てる。それだけだ。」
「・・普通はそんなこと出来ませんよ？」

まぁ、クックルだからな。最初の時は酷かった。間接を外そうと思ったら誤って筋肉を切ったりしたからなぁ・・。

「はぁ、結局勝てませんでした・・。」
「まぁ、その若さでそれだけ強いんだ。充分だろう。」
「そう・・なんですかね？」
「そうだ。さて、今日はこれで終わりだ。俺は豊姫に呼ばれてるからな。」
「あ、はい。ありがとうございました。」

俺は礼を言う依姫の頭を一回撫でると豊姫の場所に向かった・・・

ーーーーSide依姫ーーーー

私は壊さんが行ったあと、少し考えていた。
あの人の戦い方についてだ。あの人は私の刀を殴った。
普通ならそんなことはしない。斬れるかもしれないからだ。でもあの人の拳は斬れなかった。
あの人が私に拳を入れるとき、私の刀が壊さんの首に当りそうだっ

たのだ。
私はそのまま刀を引かなかったが、もしあのまま私に拳が入らず、前に進んでいたら・・・
そして壊さんの戦い方はただ目の前にあるものを破壊するような、守るものを失ったような、そんな戦い方だった。
なぜだろ?私は彼のことを知りたい。そう思ってしまった。

「壊さん・・・。」

私は撫でられた頭を触りながら彼の壊さんの名前を呟いた・・

ーーーSide壊ーーー

「ここか・・。」

屋敷の中を歩き回って、やっと豊姫の部屋を見つけた。
まったく、何度か迷子になりかけたぞ。俺は障子の前でため息をついた。

「豊姫、俺だ。入るぞ。」
「え?あぁ、はいはい、いいわよ。」

俺は許可をもらい障子を開けた。
中は意外と普通だった。本棚があり、小さな机がある。

その上には色々な果物が入った籠が乗ってる。
そしてお茶の入った湯飲みも乗っている。俺は近くにあった座布団に座る。

「・・・君の家は日本屋敷だな。」
「父様が好きなのよ。私たちや母様はどうでもいいのだけれどね。」
「そうか。で、俺は何をして君の相手をすればいいんだ?」
「ん~・・。考えてなかったわ。とりあえず、お話しましょう?」
「・・・まぁ、別に構わんがな・・。」

俺はそう言いつつ、茶を飲む。・・そう言えば一号がどこかに行ってしまったな。
俺と豊姫はそんな感じでまったりと話をしていたが・・・

「失礼します。」

そう言いながら障子を開ける若い男。俺と豊姫はそちらのほうを見た。

「あら、どうかしたの?」
「はい、頭領様がそちらの男性とお話がしたいと・・。」
「俺か?わかった、じゃあな。豊姫。」
「そうね・・。父様なら仕方ないわ。」
「ではこちらに・・。」

俺は立ち上がり、男の後を付いていく。男は移動中は何も話さなかった。
やがて一つの部屋の前に着いた。その部屋は他の部屋よりもデカイ。

「頭領さま、連れて参りました。」

「うむ、入れ。」

中から野太い声が聞こえた。男は、「失礼します」と言いながら中に入る。

そこには少し白髪の混じった男が奥に座っていた。

そして周りに刀を腰に差した男たちが約６人。俺は白髪の男の前に座った。

「お主が紅鎖華　壊か？」

「そうだ、何か用か？」

「貴様！頭領様になんと言う口の聞き方を！！」

横にいた男が刀を持って突っ込んできた。俺は立ち上がらずに霊力の弾で吹っ飛ばす。

・・・弱いな。依姫のほうがまだマシだ。

俺が男を吹っ飛ばすのを見ると、全員が立ち上がって刀を構える。

しかし、それは頭領によって止められる。

「お前たち、やめろ。」

「しかし！」

「やめろと言っておるだろう？」

「・・・承知しました。」

渋々と言った感じに座る家来たち。

「失礼したな。」

「気にする事はない。これくらいの奴らなら何人集まろうが倒せる。」

「カッカッカッカ！月の中でも指折りの力を持つやつらをそんな風に申すか！カッカッカッカ！」

うわ～、何この笑い方。始めてみたよ。あ、でも悪役を演じる時とかいいかも知れないな。

「気に入った！お主、こいつらを鍛えてくれ！」
「・・・なんだと？」
「頭領さま、理解できませぬ！！」

さすがに他のやつらも賛成できないのか、講義し始めた。
まぁ、そりゃそうだ。俺だってそんなめんどくさい事はやりたくない。

「まぁ、そう言うな。」
「しかし、こんな奴に頼らなくても！」
「そこまで言うなら屋敷中にいるお主ら全員とこの男とで戦って見てはどうだ？
お主らが勝てばわしはあきらめる、しかし、この男が勝てば、主ら全員の中から何人か選んでもらい、選んだ者たちの部隊長を勤めてもらう。」
「おい、勝手に決めるな。」
「まぁ、そう言うな。お主が居ればわしの娘も喜ぶ。・・たぶんの。」

今たぶんって言ったよな？絶対言ったよな？どうしてもやらせる気か？
それならこちらにも考えがあるぞ・・・

「・・・いいだろう。ただし、条件がある。」
「なんだ？」
「殺しても・・・文句は言うなよ？」

俺はそう言いながら少しだけ殺気を飛ばす。他のやつらは全員後ろに下がった。

「カッカッカッカ！やれるものならやってみろ！」

男は何でもないように言う。なるほど、ある程度の修羅場はくぐっているようだな。

「なら、屋敷のやつらを全員庭に集めろ。あそこなら広いから大丈夫だろう。」

俺はそう言い、立ち上がる。さて、俺の気に入るやつはいるかな・・・

ーーーーSide豊姫ーーーー

壊が部屋を出て行った後、私は暇でしょうがなかった。

だから部屋でお茶を飲みながら、いつの間にかいた壊の持っていた

人形と遊んでいた。
壊は父様とどんな話をしているのだろうか？
そんなことを気にしているとなんだか外が騒がしいことに気が付いた。なんだろうか？
私は部屋から出て、近くに居た家来に聞いてみた。（ちなみに、人形は頭に乗っている）

「これは何の騒ぎ？」
「ええ、なんでも壊様とこの屋敷を守る従者が戦うそうです。」

私は家来に場所を聞くと、すぐに壊のところに向かった。この屋敷では約３００人の
従者がいる。その中で、この屋敷を守るものは約２００人だ。さすがの壊でもマズイ。
私は確実のこの屋敷の全員が居てもまだ大丈夫であろう庭に向かった・・・

ーーーSide壊ーーー

俺の前には約２００人の従者が刀を持って殺気を飛ばしてる。
て、言うかなんで科学が進歩してるのに全員刀なんだよ。銃使えよ。
そんなことを考えていると、一番手前の男がニヤニヤした目つきでこう言った。

「なんだ、大したことなさそうじゃねぇか。こりゃ余裕だなぁ！」

・・・うぜぇ。こいつは殺してしまおうか？
まぁ、いい。今回は助けてやる。命拾いしたな。

「・・とっとと始めろ。こっちはめんどくさいのにお前らみたいな雑魚を相手にしてるんだ。
それとも、尻尾を巻いて逃げるか？そしたら負け犬だな。」
「テメェ！！」

俺が軽く挑発すると、雑魚はこっに斬りかかってきた。俺は刀身の部分を蹴り上げて、
男にアッパーを入れた。もちろん、手加減はしたから死んでない・・・と思う。
それを見ていた他のやつらは唖然としていた。俺はそいつらに向けてこう言った。

「さぁ、行くぞ・・・絶望を叩き込んでやる。」

俺はそう言うと敵に向かって走る。手始めに、近くにいた奴を蹴り飛ばす。
それに反応して、二十歳くらいの若い男が横から斬りかかって来た。
向かってきた刀を折る。そして霊力の弾を四方八方に撒き散らす。
それに当ったやつらは皆気絶した。まぁ、威力はそんなにないだろう。手加減するのは大変だ。

「でゃぁぁぁぁ！！」

そんなことを考えてると、後ろから何人か斬りかかってきた。そこは声だしちゃいかんだろう・・。
俺はそのまま右足を前にだし、左足を軸にして回転する。

すると、飛び掛ってきた奴は吹っ飛んでいった。
回転をやめると、俺は残ってる奴らを数えた。・・・・２０人くらいか？
その内の五人がこちらに向かって突っ込んできた。一人は「きぇぇぇぇ！！」とか叫びながら。
なんとなく、叫んでた奴が気持ち悪かったのでそいつを一番に殴った。
「ヒデブッ！」とか変な声で叫んでいる。
突っ込んできた４人を手刀で全員気絶させる。さて、残りを片付けるか。
俺は自ら敵陣に突っ込んだ。すると何人かが刀で斬りかかって来た。
・・ん？
斬りかかってきたうちの一人が二刀流だった。しかも、動きが素早い。
俺はそいつに攻撃を当てないようにしながら他の奴を攻撃する。
なぜかって？なんとなく最後に戦いたかったからだ。
ん～っと・・残りは・・・さっきのも入れて６人か？どいつもそれなりにやれそうなやつらだ。
なるほど、隊長か副隊長くらいの実力のやつらか。俺はそいつらに向かって走る。
すると、６人のうち一人が、刀を投げてきた。・・・は？
俺はその刀を弾く。そして、投げてきた奴に攻撃しようとしたが・・
・
ブシュッ

・・・なんだこれは？刀？
俺の腹から刀が突き出ている。俺は後ろを首を回して見る。
そこには、大量の汗を流しながら刀を俺に突き刺している小娘が居た・・・

ーーーSide豊姫ーーー

私は庭に来て驚いた。壊がほとんどの従者を倒していたのだ。
敵はざっと２０人くらいいた。壊を囲むようして刀を構えていた。
後ろの何人かが壊に斬りかかった。しかし、一人が叫び声を上げながら斬りかかっていたので、壊はすぐに気が付いた、そして叫んでいた男を殴り飛ばした。
壊は次に手刀で斬りかかった何人かを気絶させる。そして壊は、残りの敵に向かって走った。
壊は何かに注意しながら敵を倒し、そして従者は６人になった。
確か、あの従者たちは屋敷でも評判が良かった。
その内の一人がなぜか壊に向かって刀を投げた。壊はそれを拳で弾

くと、
刀を投げた敵に突っ込んだ。そして攻撃しようとしたが・・

「え？」

壊の腹から刀が突き出ていた。おかしい、確かに6人だった。その6人はちゃんと壊の目の前にいる。
おそらく、倒れていた一人が起き上がったのだろう。
刀が壊から抜かれて、壊はゆっくりと後ろに向かって倒れた。
・・・壊は倒れてピクリとも動かない。壊を刺したのは少女だった。
少女は汗をかきながら震える手で刀を握っていた。私は壊の名前を叫んだ。

「壊！！」

そう叫んだ途端、空気が重くなった。すべてを押しつぶすような・・
そんな空気になった。
すると、壊が起き上がった。手を使わずに、倒れたままの体制で起き上がったのだ。
起き上がった壊ははっきりと聞こえる声でこう言った。

「油断も手加減もするもんじゃないな。」

そう言った途端、少女が壊に首を絞められた。

ーーーSide壊ーーー

俺は少女の首を絞める。普通の少女にはまず解けないだろ。
少女の首を絞めたまま、俺はこう言った。

「・・・倒れたらそこで試合終了だぞ?ここは戦場ではないのだからな。
もっとも・・」

俺は少女の首をさらに絞めた。

「お前が俺を殺したいのなら話は別だ。俺もお前を殺す。」
「く・・!貴様、その手を離せ!!」

後ろにいたやつらがそう言いながら俺に斬りかかってくる。
俺はそいつらに背を向けたまま、霊力を背中から放出して吹き飛ばす。

「さて、もう一度問おう。お前は死にたいのか?」
「あ・・・ぅ・・、死に・・た・・くな・・い。」
「ならば何故あのまま倒れなかった?今回は俺を殺す事が目的ではないだろう?
他のやつらも、気絶したままではないか。」

俺がそう言うと、倒れてる何人かがピクっ、と動いた。

「お・・ねがい・・はな・・し・・て・・。」

少女がそう言うので俺は仕方なく手を離してやった。
地面に落ちると、「ゲホっ!ゲホッ!」と咳き込んでいた。

ようやく落ち着いたようなので、俺は少女に今出せる最大の殺気を出した。

「ヒッ！」

少女は逃げようとするが、腰を抜かして逃げられないようだ。
俺はこんな奴に刺されたのか？・・情けない。

「なぜ、こんな事をした？」
「と・・頭領さまがあなたを倒せば階級を上げるって・・。」
「殺せ、と？」
「い、いいえ。ただ倒せと・・。」

ふむ、少しＯＨＡＮＡＳＩしに行くか。

「壊！」
「ん？なんだ豊姫か。どうした、そんなに慌てて。」
「どうした、じゃないわよ！あなた大丈夫なの？」
「問題ない。」
「問題ないわけないでしょ！まだ穴が開いてるじゃないのよ！」
「問題ない。その証拠に・・。」

俺はそう言いながら自分の腹に手を突っ込んだ。そして抜いた。

「な？」
「馬鹿！何してるのよ！？」

叩かれる俺。

「まぁ、気にするな。それより、君の父親に会いに行くぞ」

そう言い、真っ直ぐと頭領のところへ向かう俺。
豊姫も「待ってよ」とか言いながら付いてきた。

俺は頭領のところへ行き、今回のことを話した。
（ちなみに、豊姫の頭に乗っていた一号の手をずっと頭領の頭にロックオンさせてた）
たしかに倒せとは言ったが、まさか殺しに行くとは思わなかったそうだ。

「すまんな・・・。」
「まぁ、これからは気をつけろ。もう遅いようだから俺は寝させてもらう。」

そう言い、立ち上がる俺。
すると頭領が俺に向かってこう言ってきた。

「鍛える件はどうする？」
「やめさせてもらう。それにこちらも色々とあるのでな。」

俺はそう言い、部屋を出た。・・・なんだか障子の向こうから豊姫

の騒いでる声が聞こえる。
とりあえず、部屋に戻るって包帯でも巻こう。

で、部屋に戻ったら何故か依姫がいた。

「どうした。何か用か？」
「あ、はい・・って壊さん怪我してるじゃないですか。
少し待っててください。包帯を持ってきますから。」

そう言い、包帯を取りに行く依姫。そしてすぐに戻ってきた。

「どうぞ。」
「ああ、すまない。できれば巻いてくれないか？」
「え！？／／／」

おいなんだ、その反応は。そんなに嫌か。

「・・嫌なら仕方ない。自分でしよう。」
「え！？いえやります！ぜひやらせて下さい！」
「あ、ああ。頼む。」

俺はコートを脱ぎ、後ろを向く。すると、依姫がぎこちなく包帯を巻いてくれる。
・・なんか前の世界でもこんなことがあった気がするな・・・。

「壊さん、おわりましたよ。・・壊さん?」
「ん?ああ、すまない。そうだな・・・まだ眠くないし、庭に行ってくる。」
「え?」

俺はそう言い、庭に向かう。
そこの縁側で座る。しばらくすると依姫が小走りで近寄ってきた。

「壊さん、急に行かないで下さいよ・・。」
「ん?ああ、すまんな。」

依姫は俺の横に座る。俺はそれに何も言わず、黙ってる。
・・きれいな星だ。月でもやっぱり星は見えるんだな・・・。
俺は能力で今回はフルートを出す。なぜか吹きたくなった。
そしてゆっくりと音を出す。
横にいる依姫は目をつぶって静かに聴いている。
俺はフルートを吹き、依姫がそれを静かに聴く。・・・ああ・・・
星がきれいだ・・・

その頃の諏訪子

「凶・・・。」

諏訪子は寝ながら凶・・もとい壊の夢を見ていた。
ちなみに、神社の移動は壊が帰ってきてからするらしい。

第２３話：油断大敵（後書き）

おわった～。そろそろ地上に戻そうかな・・

第２４話：帰ってきた凶鳥（前書き）

うん、まぁそのままですね

第２４話：帰ってきた凶鳥

俺は今、永淋の家に来ている。理由？
もう地上に帰るからだ。もう少しここにいてもいいと思ったんだ。
最初は。
でもあまり遅く帰ると諏訪子が怒らないか心配になった。いや、諏訪子自体は倒せるぞ？
ただあいつ、怒ると容赦なく俺の首に鉄の輪を投げたり、ミジャクジで祟ろうとするんだ。
それにもし神奈子と組んだりしたらめんどうだ。
御柱と鉄の輪のコンビネーション技が飛んでくる。
そんな訳で、永淋に地上に戻る前に挨拶をしに来た。

「そう・・もう帰るのね・・。」
「ああ、世話になったな。（一日だけだけど。）」

永淋はかなり残念そうな顔をしている。そんな顔をしないでくれ。
ちなみに、依姫と豊姫にも挨拶はした。
依姫は「そうですか・・」と言って素直に引き下がってくれたが、豊姫はバシバシと俺の頭を叩いて止めようとしていた。

「向こうにいっても元気でね？」
「ああ、お前もな。永淋。」

そう言い、俺はゲートを召喚する。この石、召喚石と呼ぶ事にした。
俺はゲートの口の中に入る。じゃあな、永淋・・・また会おう・・・

ーーーSide永淋ーーーー

「はぁ～・・・」

壊が行ったあと、私はため息をついた。
もっと色々話をすればよかった、と思っている。
私は壊に３０００年間思い続けた気持ちを伝えようかと思っていた。
しかし、壊は鈍い。驚くほど鈍感だった。
私が色気で迫っても、まったくと言っていいほど反応しなかった。
でも、それでも私はあきらめる気はない。

「壊、いつかは気づいてくれるわよね・・？」

私はそう呟き、仕事に戻った・・・

ーーーSide壊ーーーー

ゲートの口の中は広い空間だ。それはもう、ビックリするくらい広い。
俺が１０００人入ってもまだ入れるんじゃないかと言うくらいに広い。
まぁ、そんなことはどうでもいい。俺は・・・

「・・帰ってきたか・・。」

俺は帰ってきた、。諏訪子の神社の前に。しかし、問題がある。
それは諏訪子たちが住む場所を変えてないか、ということだ。
もう４日は経っているので、住む場所は変えてるのではないか？
まぁ、そうなったらそうなったでいいだろう。俺はゲートを石に戻し、神社に入る。
すると入った途端、御柱が顔に飛んできた。俺はそれを真正面から受け止めることになった。
・・・予想はしてたさ。でも、入っていきなりは予想してなかった。

「・・・ただいま。神奈子。」
「おかえり。さて、何か言う事は？」

気のせいか、神奈子の神力が黒く見える・・。いや気のせいだろうがな？

「すまない・・。」
「まぁ、わかればいい。それより、早く諏訪子に会いに行け。
お前が居なくなってからずっと変な空気を出してるんだ。」
「ああ、わかった。」

俺はそう言い、諏訪子の部屋に向かう。そして部屋の前に行き、障

子を開ける。

「・・・・・」

「・・ずっとこの調子なんだよ・・。」

そこには布団が敷いてあり、その布団から変なオーラが出てた。
しかも部屋全体に広がってる。さらに言うと、布団からぶつぶつ聞こえる。
そして何故か、帽子が部屋の片隅でこちらを見ていた。
俺は布団に近づき、声を掛ける。

「諏訪子。」

「・・・なに?神奈子?」

どこをどうしたら俺の声が神奈子に聞こえるんだ?
これは重症なんてものじゃないぞ。

「違う、神奈子じゃない。俺だ。凶だ。」

そう言った途端、布団がバサッ!と上に跳ばされた。そして諏訪子がこちらを見ていた。
諏訪子は俺を見た途端、飛び付いて来た。・・・頭ぶつけた。

「凶・・。心配したんだよぉ・・・。」

「いや、そこまで心配・・・すまない、諏訪子・・。」

そこまで心配することでもない、と言おうとしたら、神奈子が御柱を出す気配がしたので、
言い直した。

「何にも言わないで・・えっぐ・・勝手に何処かに行って・・うぅ・・ひっく・・。」

・・やべぇ。めちゃくちゃ泣いてるじゃないか。ってか一号は?どこに行った・・。

探してみると、諏訪子の帽子と何か話しているようだった。

いや、帽子、お前は一号と話せるのか?

「ひっく・・もう勝手に・・ぐす・・どっか行っちゃ・・・やだよぉ・・。」

・・・これは、やっぱり俺が悪いのか?

仕方ない・・・。

「・・・すまなかったな・・。」

そう言いながら諏訪子の頭を出来るだけ優しく撫でる。

その後もこの状態が続いた・・・

「で、気は済んだか?」

「・・うん・・」

そう言う諏訪子は俺に抱きついたまま離れない。なぜか神奈子が御柱を構えてる。

「とりあえず、諏訪子、退いてくれ。あと神奈子、危ないからこちらに向けるな。」

「うん・・。」
「・・チッ・・。」

舌打ちしたぞこの野郎。そんなに俺が嫌いか？ん？

「・・ねぇ。凶。何処行ってたの？」
「ああ、月だ。」
「は？何を言っているんだ、お前は？」
「いや、冗談じゃないからな？」

俺はそう言い、ゲートを召喚する。
ゲートを見た二人はかなり驚いていた。

「こいつで月に行った。これ以上の説明はめんどくさい。」
「「・・・・・」」

なんだその目は？
そのあとは月で改名したことなどを話した・・。

「凶、もっと飲みな。」
「いまは壊だ。あと、君は飲みすぎだ。神奈子。」

現在酒を飲んでいる。なんでも俺が帰ってきたお祝いらしい。
一号はつまみを作りに行っていて、ゲートは適当に離しておいた。
ただし、朝までには石に戻るように行っておいた。

「そうだったねぇ。じゃあ、壊。飲め！」

そう言いながら俺に酒を飲まそうとする神奈子。というか命令形か？
諏訪子は俺の膝の上で寝ている。あれ？デジャヴ？
あ、そうそう初めて知ったがこの神社は周りが湖だった。
なんせあまり神社から離れなかったからな。
名前もあった、「諏訪大社」らしい。まぁ、そんなことはどうでもいい。

「神奈子、あまり騒がないでくれ。諏訪子が起きる。」
「まぁ、いいじゃないか。別に。」

そう言い、酒をまた飲み始める。
しばらくすると神奈子が口を開いた。

「・・実を言うと私も心配だったんだよ。あんたがいなくなって。」
「・・意外だな。君の口からそのような言葉が出るとは。」
「まぁ、酔ってるからかもしれないね。」

そんなに酔ってるのか？だったらマズイ、俺の仕事が増えるのは間違いない。
そう思ってると神奈子が再び口を開いた。

「私は壊、あんたが気に入ってるんだよ。私を前にしても動じないあんたがね・・。」
「・・別に、君は君だ。それ以上に何かあるのか？」

俺がそう言うと、神奈子が少し微笑んだ。そしてまた酒を飲み始めた。

しばらくすると神奈子も眠ってしまったようで、俺の肩に頭を乗せている。

「やれやれ・・あまり飲むなと言っただろうが・・。」

俺はそう言いながら、一号に頼んで毛布を貰い、
神奈子にかけ、諏訪子と一緒に自分にかけた。
そして一号に自由にしていいと言い

「・・おやすみ。」

二人と一匹?にそう言い。俺は目を閉じた・・・

第２４話：帰ってきた凶鳥（後書き）

微妙に神奈子フラグが立った。
次はどうしよう・・。

第２５話：新しい神社（前書き）

新しい神社。諏訪子たちは最近よくわからなくなってきた・・

第２５話：新しい神社

チュンチュンと鳥の鳴き声で目を覚ます。

「壊さん、壊さん、ローストチキンにしてくださいでチュン。」

ふむ、出来なくもないが大きさが足りんな。やはりこの前言われた焼き鳥にしよう。

まぁ、そんなことはいい。

「神奈子、諏訪子、起きろ。」

俺がそう言いながら二人に声を掛ける。

「・・壊か、おはよう。」

「ん・・・凶・・だめだよ・・。こんなところで・・。」

神奈子は起きた。しかし、諏訪子、お前はどんな夢を見てるんだ？

俺はなかなか起きない諏訪子の肩を揺すった。

「・・あ、凶。おはよ～・・。」

「おはよう、あと今は凶じゃない。」

そんなやり取りをしながらも、膝の上から降りる諏訪子。

・・ん？今回は神奈子の御柱が飛んでこなかったな。

「さて、気分はどうだ？二人とも。」

「私は頭が痛いな・・。」

「わたしは別になんともないよ。」

「そうか、なら朝食だ。今日は俺が何か作ってくる。」

俺はそう言い立ち上がる。

まぁ、別に俺が作らなくてもいいんだけど、ただ何となく作りたくなった。

で、作り終った。今日は普通に和食だ。

俺はそれを食卓に並べる。・・・既に神奈子と諏訪子がスタンバイOKなのが少し気になるな。

「「「いただきます」」」

ちゃんとこの挨拶はしなくちゃいかんよな。

前に諏訪子が「いいじゃん、わたし神なんだし」とかふざけたことを抜かしたことがったから、

その時は正座させて漬物石を膝に乗せた。ちなみに、1時間だ。

しばらく箸を動かしていたがふと気になった事があった。

「諏訪子、神社の移動の件はどうなったんだ?」

「ん?うん。もう準備できてるよ。ほら、湖の少し奥に新しいの作

ったんだ。」
「そうか、巫女の件はどうなった？」
「それは、もう終わったよ。あと数年したら力に目覚めるんじゃないかな？
まぁ、実際には巫女じゃないけどね。」
微妙に含みのある言葉。まぁ、俺は気にしない。めんどくさいから。
俺はそんな感じで完食した。ふたりはまだ食べてる。
「壊、早いね～。わたしはまだ食べてるのに。」
「まぁ、俺は男だからな。」
「確かに男ならこれくらいは早くてもいいかもしれないな。」
そんなことを言いながらも神奈子も食べ終わった。それに続いて諏訪子も急いで食べる。
そんなに早く食べると喉に詰まらせｒ「ん！？」遅かったか・・。
俺は諏訪子に水を与えた。それを一気に飲み干す諏訪子。
「ぷは～・・。苦しかった～・・。」
「急いで食べるからだ。」
俺がそう言うと、諏訪子はゆっくり食べる。やがて食べ終わった。
食べ終わったのを確認すると一号を呼んで片付けてもらう。ご苦労、一号。
「さて、いつ移動する？」
「う～ん、もう少しあとで行こうよ。」
「私はそれでも構わない。」
あとで行くという結論に達する。

「それなら俺は暇つぶしをしてくる。」
「うん、いってらっしゃい。」
「ちゃんと帰ってきなよ？」
「わかってる。」

そう言い、神社から出る俺。いつの間にかやってきた一号を肩に乗せ裏にある森に行く。
そこで何か暇つぶしを探してみるが・・

「何もないな・・・。」

そう、何もない。見事に回りには木、木、木、木・・・
これは参った、せめて妖怪でもいれば暇を潰せるのだが・・

「・・仕方ない、奥に進んで何か探すか・・・。」

俺はそう言い、森の奥に進む。もちろん一号と一緒に。

「オマエ、ナンダ！！」

で、こうなった。目の前にはいかにもリーダーらしき妖怪とその他おまけ。

まぁ、確かに暇つぶしにはなるな。

「まぁ、そんなことはどうでもいいだろう？お前らには俺の暇つぶしに付き合ってもらうぞ？」

俺はそう言いながら能力でランダムに武器を取り出す。さて、何がでるかな・・・。

「・・・はずれだ。」

俺が取り出したのはなんとハリセンだ。
いや、確かに頭の中でランダムで武器が出るように想像したぞ？
でもハリセンが出るなんて誰が思うよ？まぁ、仕方ないか。
俺はハリセンを妖力で包んで硬くし、それを持って敵に向かって走る。
・・・ちくしょう、あの野郎ども笑ってやがる。見てろよ、ハリセンだって・・

「立派な武器だ。」
「グェ！！？」

俺は近くにいた妖怪の腹を思いっきりハリセンで殴った。
どうだ、こんなんでも武器になるんだぞ。
それをみた妖怪たちは俺に飛び掛る。俺はハリセンを持ったまま思いっきり回転する。
すると妖怪が吹っ飛んでいった。俺はさらにハリセンを霊力でつなぎ、
それを敵に向かって投げた。そしてそのまま振り回す。逃がさんぞ！
周りでグチャグチャと潰れる妖怪たち。
・・・なんというか、ハリセンにやられる妖怪集団ってシュールだ

な。
そんなこんなで残り一匹になった。

「オ・・オ前ハナンナンダ!?」
「・・いいだろう。死ぬ前に教えてやる。俺はな・・・『凶鳥』と言う化け物だよ。」

そう言った途端、妖怪の頭を吹き飛ばす。
周りを見ると俺以外には誰も立っていなかった。頭を失くした者や、体が失くした者がいる。
・・・なんだろう・・・普通なら何も感じないのに・・・身体が疼く・・・。

「・・・とりあえず、体を洗おう。そして神社に戻ろう。」

俺はそう言い、湖で体を洗う。そして妖怪の死骸をゲートに吸い込ませる。
ゲートはなんでも吸い込む時空獣だ。ピンクの桃みたいなやつと似たような感じだ。
俺はゲートを戻し、神社に戻った。神社に戻ると、二人が出迎えてくれた。

「壊、お帰り。」
「ああ、ただいま。」

ニコニコしながら出迎える諏訪子。それとは対象的に神奈子は神妙な顔つきだ。

「諏訪子、準備は終わったのかい?私や壊はもう終わったよ?」
「うん、終わったよ。・・あ・・、ちょっと待ってて。」

そう言いながらトテトテと走って消える諏訪子。
諏訪子が居なくなると、神奈子が改めてこちらを向いた。

「壊、あんたいい加減にしないと妖怪たちに目をつけられるぞ？」
「・・・なんのことだ？」
「とぼけるんじゃないよ。私は軍神だからなんとなくわかるんだ。」
「・・・軍神だからわかると言うのも変な話だがな・・。」
「どうでもいいんだよ。そんなことは。」
「確かに暇つぶしはしてきたがな、別に目をつけられようが構わんよ。
向かってくるなら全員殺すまでだ。」

俺は素直にそう言った。神奈子はさらに神妙な顔つきをした。

「・・まぁ、今後は控えよう。」

俺がそう言うと神奈子はどこか安心したような顔になった。
しばらくすると諏訪子が戻ってきたので、新しい神社に向かう事になった。
さて、一体どんな場所なのだろか・・・

ーーーSide神奈子ーーーー

「壊、お帰り。」
「ああ、ただいま。」

諏訪子が壊におかえりと言って、壊がただいまと言う。
帰ってきた壊の体から血の匂いが微かにだがした。・・・また殺ってきたのか・・。

「諏訪子、準備は終わったのかい?私や壊はもう終わったよ?」
「うん、終わったよ。・・あ・・、ちょっと待ってて。」

諏訪子は私の言ったことを心配して確認しに行った。さて・・・

「壊、あんたいい加減にしないと妖怪たちに目をつけられるぞ?」
「・・・なんのことだ?」
「とぼけるんじゃないよ。私は軍神だからなんとなくわかるんだ。」
「・・・軍神だからわかると言うのも変な話だがな・・。」
「どうでもいいんだよ。そんなことは。」
「確かに暇つぶしはしてきたがな、別に目をつけられようが構わんよ。
向かってくるなら全員殺すまでだ。」

・・この男はどこか狂っている・・。私は直感でそう思った。
おそらく、壊は戦うことを心のどこかで楽しんでいるのだろう。
それも純粋な戦いではなく、ただ殺す、または壊す戦いを。しかも、無意識のうちにだ。

「・・まぁ、今後は控えよう。」

それを聞いた私は少し安心した。これならまだ大丈夫だろう、そう思った。
その後、諏訪子が戻ってきたので神社に向かう事にした・・

ーーーSide壊ーーー

俺たちは諏訪子の新しい神社に着いた。なんというか・・

「普通だな。」

俺はそう言った。別に大きくもなく、小さくもない神社だった。
横には『守矢神社』と書かれた看板がおいてある。・・達筆な字だな。

「うん？そうなの？まぁ、入ろうよ。」

そう言いながら神社にズカズカと入り込む諏訪子。俺たちもその後に続いて中に入った。
中も至って普通だった。
別段広くもなく、狭くもない。居間のような場所に来て座布団に座る俺たち。

「そんな訳で飲もう！」
「いや、どう言う意味だ？」

そもそも何処から出したんだ、その酒は。隣にいる神奈子も唖然としているぞ？
俺が聞くと諏訪子は「はぁ～、やれやれ」といった感じに首を振る。

・・・うぜぇ・・。

「お祝いに決まってるでしょ?引越し祝いだよ。」
「いや、まだ早いだろ?昼だぞ。」
「そんなことはどうでもいいの~。」

そう言いながらこれまた何処からか取り出した杯を俺たちに配る。
そして全員に酒を注ぐ。・・・なんだかんだで飲む俺も俺だな。
そんな感じで俺たちは酒を飲んだ・・・

「・・ん。」

気が付いたらいつの間にか寝てたようだ。諏訪子と神奈子は二人とも酔いつぶれて寝た。
俺は二人にそっと布団を掛け、縁側に向かう。と、言ってもすぐ近くだが・・。
そこに座り龍笛を出し、それを吹く。

――今宵の美しい夜は、キレイな笛の音が鳴り響く――

第２５話：新しい神社（後書き）

壊が少しずつヤバイ方向に行き始めた気がする。
そろそろ物語りも進めたほうがいいかな・・・

第２６話：暇を潰すための旅立ち（前書き）

説明するより見たほうが早いです。

第２６話：暇を潰すための旅立ち

「旅に出ようと思ってる。」

俺は朝食の時にそう言った。それを聞いた二人は唖然としていた。
しばらくそれが続いたが、諏訪子が口を開いた。

「え、なんで？」
「暇だから。」
「・・・・・」

諏訪子の質問に素直に答える。そう、暇なのだ。
この神社に住んでから約２年過ぎた。その間、特になにも起こらなかった。
妖怪で暇を潰そうにも何故か神奈子が止めに入るし。
神奈子の目を盗んで暇を潰しに行っても、倒した後はどうしようもない虚無感（きょうむかん）に襲われる。
だから旅に出て暇を潰そうと思ったのだ。

「・・・いつ行くんだい？」
「そうだな・・・、できればすぐにでも行きたい。」

神奈子がそう聞くので、俺はすぐに答えた。・・・諏訪子が俯いてる。

「・・・ご馳走様・・。」

俯いていた諏訪子がそう言い立ち上がる。

「おい、まだ全部食べてないぞ？」
「・・もういい・・。」

そう言い、スタスタと何処かに行く諏訪子。
どうしたと言うのだろうか？

「・・壊、あんたは本当に鈍いねぇ・・。」
「・・？」

訳がわからない。俺はそう思いながらも食べ終える。
そして食器を片付けた。後で諏訪子の様子でも見に行くか・・・

「おい、諏訪子、入るぞ。」

そう言いながら俺は諏訪子の部屋に入る。ちなみに、諏訪子と神奈子は一緒の部屋だ。
諏訪子は部屋の隅っこで体育座りをしながら俯いていた。
・・・なんかまた変なオーラが出てるぞ？

「諏訪子、どうした。元気がないな。」
「・・・・・・・」
「おい諏訪子。少しは何か言え。」

「・・・・・・・」

俺の質問にまったく答えない諏訪子。どうしたんだ本当に。

・・・・・ん？

「・・もしかして、俺が旅に出るのが嫌なのか？」

俺がそう聞くと、ピクリ、と一瞬だけ動く諏訪子。・・やはりか。

俺は諏訪子に近づき、背中越しに話す。

「・・諏訪子、こっちを向け。」

「・・・・・・」

俺がそう言っても聞かないので仕方なく無理やり向かせる。

すると諏訪子は泣いていた。

「・・・諏訪子、なぜ泣く？」

「・・・・・・」

俺がそう聞いても、ただ涙を流す諏訪子。・・・こんな時はどうすればいい？

諏訪子の場合は・・・・そうだな。

俺は諏訪子を自分の膝の上に座らせる。諏訪子はこれをやると喜ぶ。

すると諏訪子が観念したように話し始めた。既に泣き止んでいる。

「・・・壊はわたしのこと嫌いになった？」

「・・・何故だ？」

「だって・・ここを出て行くって言うから

わたしや神奈子に嫌気が差したんじゃないかって思ったんだもん。」

「・・・違うぞ、諏訪子。俺は別にお前たちに嫌気が差したんじゃ

ない。
単にこの神社が暇になったんだ。
それにな、旅に出ても俺はお前たちを忘れないぞ？」
いや、むしろ忘れられないだろ。御柱とか。
「・・・本当に？」
「ああ。」
「・・・また会いに来てくれる？」
「お前も俺もそう簡単には死なないだろう？だったらまた会えるさ。」
たぶんな。すると諏訪子はゆっくりと首を動かし、こちらを見た。
その目は何だか吹っ切れたような目だった。・・・どうやら落ち着いたようだ。
そして俺の膝の上から降りて、急に話をしてきた。
「それにしてもさ、」
「ん？」
「わたしは壊の膝の上に座れるのに、壊ってわたしの膝の上に座れないんだね。」
「いや、無理だろう。身長がまったく違う。」
「む～・・・。」
俺の身長は１９０ｃｍくらいで、それに対し、諏訪子は１４５ｃｍ（もう少し小さいかもしれない）くらいだ。あまりにも小さい。
「・・壊が小さくなれば座れるのに・・。」
「ふむ・・。」

なぜかは知らないが、諏訪子は俺を自分の膝の上に座らせたいらしい。
少し・・頑張ってみるか。
俺は妖力を出して姿を変えようとする・・・・・

「え?壊?」
「・・・・・」

できた、確かに姿は変わった。だが・・・

「これは・・・にわとりか?」

ニワトリだ。まぁ、クックルだし?こんなこともあるんじゃないかなとは思ったさ。
ってか小さいな・・・。諏訪子を見上げるくらい小さくなった。
諏訪子はしばらく呆然としていたが、

「えい!」
「なッ!?」

座りなおし、俺を持ち上げて膝の上に乗せた。・・・爪を食い込ませないように注意しよう。
俺はにわとりが寝るときなどにする姿勢で諏訪子の膝の上でさらに小さくなった。
諏訪子はニコニコしながら頭を撫でる。あ、あまり強く撫でないでくれ。トサカが・・。
そんな感じで俺は諏訪子の膝の上に座って?いた。

「へぇ〜・・これが壊ねぇ・・。」

何故かあの後、神奈子もやってきて俺を膝の上に乗せたりし始めた。

「結構触り心地いいじゃないか。」

「・・・もう戻ってもいいだろうか?」

「だめだよ、神奈子の次はわたしなんだからさぁ〜。」

くそ、こうなったら・・・

「とぉっ!!」

俺はそう叫びながら神奈子の膝の上から跳んで脱出、そして地面に降りた瞬間に人に戻った。

「まったく・・人をなんだと思ってるんだ、君たちは。」

「あ〜ぅ〜・・、戻っちゃった・・。」

「残念だね・・」

お前らなんだその反応は?

まぁいい。とりあえずは・・

「さて、そろそろ行かせてもらう。」

「・・・もう行っちゃうの?」

「ああ、あまり遅くに出ると暗くて見えなくなるからな。」

「そうかい。じゃあ、行ってきな。」

「ああ。」

そう言いながら俺は神社から出るために玄関?に行く。
そこで二人に見送ってもらいながら神社を出て行った・・・

ーーーSide諏訪子ーーー

「はぁ・・・行っちゃったね・・」

壊が見えなくなるまでわたしたちは見送っていた。

「そうだねぇ・・。」

そう言いながらどこか寂しそうな顔で遠くを見ている神奈子。

「ねぇ、神奈子は壊のこと好き?」
「なっ!?／／／」

わたしがそんな質問をすると顔を真っ赤にする神奈子。
わかりやすい・・・。

「好きなんだね?」

「そ、そんなことは！」
「もし、神奈子が好きならわたし負けないからね？」
「・・・・私だって負けないさ。」
「認めた。」
「ハッ！？」
「ふふーん。じゃ、戻ろっか。」
「あ、こら待て諏訪子！」

わたしたちは神社に戻った。壊、またね・・・

ーーーーSide神奈子ーーーー

いきなりあんなことを聞かれるとは思わなかった。
しかも、どうしてあそこまで動揺したのかもわからなかった。
ただ・・

「壊・・・あんたは私のお気に入りだから簡単にくたばるなよ？」

私は誰にも聞こえないほど小さな声でそう言った。
いつかまた会える日に期待をして。

「神奈子、はやくー。」
「ああ、今行く！」

私はそのまま神社に戻った・・・

第２６話：暇を潰すための旅立ち（後書き）

はい、途中からよくわからなくなったけど終わりました。
よんでくれてありがとうございます。

第２７話：旅ってこんな感じ（前書き）

今回は短いです。

第27話：旅ってこんな感じ

旅に出てからもう一週間が過ぎた。食事はめんどくさい時は取らなかった。
寝るときは野宿したり、村に泊めて貰ったりした。
それと、もう時代的に言うと古墳時代くらいだった。
時代の流れは早いな。初めて見たときは少し驚いた。
そんな俺はいま森の中を歩いている。実は迷ったのだ。一号ともはぐれてしまった。

「・・・弱ったな・・・。」

俺はそう呟く。

「とりあえず、村か何かを探すか。一号ならその辺の妖怪には負けないだろう。」

それに妖怪と戦うのはめんどくさい。まぁ、運が悪くなければ会わないだろう。

そう思っていた時もありました。でもさ、どう思うよ。これは？

「人間ガァァァ！！」

そう叫びながら突っ込んでくる妖怪をデコピンで吹っ飛ばす。
俺が森を彷徨い続けていたら、妖怪集団に出会った。なんというか、もうお約束だな。
もうあきたよ。今回は・・ざっと５０くらいだな。弱いくせに襲い掛かってきやがって・・・。
俺は突っ立っている妖怪に向けて創造した槍を飛ばす。５本くらい？魔力で速くなっているのでかわせるはずがない。（※飛ばし方は１４話参照。）
飛ばした槍は１本に３匹ずつ妖怪が刺さった。俺は能力で地面に潜って敵の真下に向かった。
そして、下から霊力と魔力、それに妖力で作った弾を大量に撃った。
しばらく撃ったあと地面から浮いて地上に出る。

「ふぅ～、終わったか。まったくもってめんどくさかった。」

俺はそう言い、溜息をつく。・・・はて、一号、いつの間に俺の上に頭に乗った？
まぁ、いい。一号も見つかったことだし、少し休憩しよう。

首をポキポキと鳴らし、その場に座りながらその辺にあった枝を集めて魔力で火を出す。
ちなみに、魔力を使った火は全力だと林を燃やせるくらいまで上達した。
前までは、ライター並みの火しか出せなかったのになぁ・・・。
さて、少し寝よう。一号に見張りを頼み、
近くに木に座ったまま持たれかかって腕を組んで寝る。
おやすみ・・・

第27話：旅ってこんな感じ（後書き）

短かったですね。次は誰か出そうかな・・・

第２８話：胡散臭いスキマ妖怪（前書き）

これは東方やってる人はわかると思いますよ？

第２８話：胡散臭いスキマ妖怪

俺が旅を始めてからなんだかんだで３５０年ほど立った。時が流れるの速いな。
もう俺も４０００歳以上だ。時代もだいぶ変わってきたと思う。
・・・そう言えば瑠璃は何をしているだろうか・・・。
そんな感じで森の石に座って考えていると不意に視線を感じた。

・・・アマテラス？いや違うな・・これは妖力だ。
俺は妖力のするほうに向けて右手を向けた。
そして、そこに向かって空間が歪むほどの妖力を込めたレーザーを出す。
するとそこから視線が消え、今度は俺の座ってる横から気配を感じた。

「いい加減出てきてくれないか？見られるにはあまりいい気分じゃない。」
「あら、やはり気づいていらっしゃったのね。」

俺がそう言うと、横に変な穴が開いて中から女性が出てきた。上半身だけ。
女性の容姿は長い金髪の髪で、前だけ二つ縛っている。後ろ髪は縛っていなかった。
頭に帽子をかぶり、服装は白のフリルがついた紫色のドレスを着ている。
今思ったがドアノブカバーのような帽子だな。
そして出てきた空間をよく見ると、目が至る所にある。

「・・・何か用かな？」

「あら、特に理由はありませんわよ？ただおもしろそうだったからスキマから覗いていただけですし。」

そう言い、スキマから取り出した扇子で口元を隠している。・・・こいつ。

「・・・その敬語をやめたらどうだ？」

「あら、何故でしょうか？」

「胡散臭いからな。仮にも長年生きてきたんだ。それくらいはわかる。」

「あら、そんなに長く生きてるのかしら？私はあなたのことを知らなくてよ？」

「知ってるはずもない。なぜなら・・・」

ーーーーあった奴らはほとんど殺してるからな。ーーーー

俺はそう言いながら殺気を飛ばす。さすがに驚いてるようだな。

「俺の名前は紅鎖華　壊だ。君は？」

「・・・私は八雲（やくも）　紫（ゆかり）　よ。」

女の口調が素になったようだ。さて、こいつはどうするかな・・・こいつはその辺の妖怪より強そうだ・・・

ーーーSide紫ーーーー

私はその日、暇だった。だからスキマから色々なものを覗いていた。
遊んでいる子供たちだったり、喧嘩している男たちだったり、
そんな感じスキマから覗いていた。
しばらく覗いていると、ある男を見つけた。
その男は白い髪に紅い目をしており、そして黒い変わった服を着て
いた。
さらにおかしな人形が肩に乗っていた。私はその男が気になり、し
ばらく見ていた。

しばらくすると男が突然こちらに右手を向けてきた。何をしている
のだろうか？
私がそう思っていると男の手からもの凄い妖力の光線が飛んできた。
私はそれをスキマの場所を移動し、なんとかかわす。
・・まさか私の居場所に気が付いた？いや、きっとまぐれだろう。
私はそう思い、その男の腰掛けている石の横に近づいた。
男はめんどくさそうに

「いい加減出てきてくれないか？見られるのはあまりいい気分じゃ
ない。」

と言った。まさか本当に気が付いていたとは・・・

「あら、やはり気づいていらっしゃったのね。」

私はできるだけ丁寧な言葉で話しかけた。

相手を観察するためだ。そして何よりこの男がおもしろそうだったから。
からかったらどんな反応をするか見てみたかった。

「・・・何か用かな?」
「あら、特に理由はありませんわよ?ただおもしろそうだったからスキマから覗いていただけですし。」

男が聞いてきたので素直に答える。すると男はこちらをダルそうに見ると

「・・・その敬語をやめたらどうだ?」

と言った。

「あら、何故でしょうか?」
「胡散臭いからな。仮にも長年生きてきたんだ。それくらいはわかる。」
「あら、そんなに長く生きてるのかしら?私はあなたのことを知らなくてよ?」

その通りなのだ。もし長く生きているならば、私が気づかないはずがない。
私はそれなりに長く生きている。間違いなく３００年は生きているだろう。それなのに、
この男の噂を聞いた事さえもないのだ。私がそんなことを考えていると

「知ってるはずもない。なぜなら・・・」

男がゆっくりと話す。それははっきりと聞こえた。

ーーーーあった奴らはほとんど殺してるからな。ーーーー

男がそう言った途端、男から押しつぶされそうなほどの殺気を感じた。

この男は危険だ・・！

「俺の名前は紅鎖華　壊だ。君は？」

「・・・私は八雲（やくも）　紫　よ。」

男がそう自己紹介をしてきたので私も名前を名乗る。

おもわず素の口調に戻ってしまった。

私が名前を名乗ると男はなにか考え始めた。そして静かにこう言った。

「君も死んでみないか？」

男がそう言った途端、恐ろしいほどの妖力が溢れ出した・・・

ーーーーSide壊ーーーー

「君も死んでみないか？」

俺はそう言いながら妖力を今の姿の全力を出す。
紫はさっきまでの胡散臭い笑みではなく、真剣な表情をしていた。
退屈しのぎくらいにはなってもらいたいな・・・。

「なるほど、それだけの妖力があればその辺の妖怪なんて簡単に倒せるわね。」
「まぁな、それより、さっきの胡散臭い喋り方より素のほうがずっといいぞ？」
「あら、それは嬉しいわね。」

紫はお礼を言いながらも、スキマに潜って俺から離れる。
そして傘を取り出し広げた。それを肩に乗せる。

「さて、始めようか。君に絶望と言う凶を与えてあげよう・・・・。」

俺はそう言った途端、紫に妖力の弾を大量に撃つ。
紫はそれをかわさずに、新たに作ったスキマに入れる。・・便利な能力だ。
そんな風に感心していると、後ろから妖力を感じたので思いっきり跳んでかわす。
俺は地面に着地するとさっき居た場所を見た。そこから俺の妖力が感じられた。
まさか俺の妖力弾を俺に返したのか？

「・・どういうことだ？」

俺がそう言うと紫はクスクスと笑いながらこちらの目を見ていった。

「私の能力よ。」

「なに?君は能力持ちか?」

「えぇ、私の能力は『境界を操る程度の能力』。空間の境界を操って裂け目を作ることで
あなたの妖力弾をスキマに入れて後ろにスキマを作って返したの。」

「羨ましい能力だな。俺の能力より強いんじゃないのか?」

俺はてっきりスキマは一つしか作れないのかと思っていたよ・・。

「あなたの能力は何かしら。」

「教えるわけないだろう?」

「あら、冷たいのね?私は教えてあげたのに。」

「敵に自分の情報を与えるのは好きじゃないんだよ。」

俺はそう言いながら紫向かって走る。現在紫はスキマから出ている。
そして俺に向かって妖力弾を撃ってくる。
その一つ一つにかなりの妖力が込められているのがわかる。
ちなみに、俺は身体強化はまったくしていない。
それをしたらすぐに戦いが終わってしまうだろう?
俺は紫の前まで来るとその拳を振り上げた。しかし・・

「ぐっ!?」

俺はその拳を振り切る事ができなかった、そして背中に強い衝撃が走る。
さらに、紫が俺から離れ大量の妖力弾を放ってきた。これはかわせないな・・・
俺はそれに真正面から当った・・・・

ーーーSide紫ーーーー

「やったのかしら・・・？」

私はモクモクと煙の出る場所をみて呟いた。
強かった・・。おそらく今までで一番強い相手だっただろう。
でも、私は勝ったのだ。

「・・・さて、行きましょうか。」

私はそう言い、彼がいた場所を振り向かずにスキマを作り中に入ろうとした。

「マテ。」

後ろから彼の声が聞こえた。ありえない、確かに倒したはずだ・・・。
私はそう思いながら後ろを振り返った。そこには・・・

「もう少し、俺の退屈しのぎに付き合ってもらうぞ？」

そう言いながら腕をダランと下げて立ち上がり、
無傷の姿でこちらを見る彼の姿があった・・・

ーーーSide壊ーーー

「もう少し、俺の退屈しのぎに付き合ってもらうぞ？」

俺は静かにそう言った。こちらを見る紫はかなり動揺している。

まぁ、倒したと思ったら無傷だったもんな。

「どうして・・。」

「あの程度の攻撃じゃあやられんよ。それよりも、少し本気を出すぞ？」

俺はそう言い、腕輪をはずす。そしてさっきよりも少しだけ力を出す。

もちろんクックルにはなってない。そんなことをしたら秒殺だ。退屈しのぎ出来ないだろう？

俺はゆっくりと紫に向かって歩く。紫は手当たり次第に妖力弾を撃っている。

だが、無駄だ。俺には効かない。確かに、腕輪を付けている俺には多少はダメージを

与えられるだろう。だが、腕輪を外した俺はこの程度では痛くもない。

たとえクックルの状態じゃなくてもだ。紫はスキマを作り、移動しようとしていた。

「移動するならもっと早くするんだな。」
「なっ！？」

俺はスキマに入ろうとしている紫まで一瞬で近づき、その手首を握った。
そして最後にこう言った。

「俺の勝ちだな。」

そう言うと俺は紫の首に手刀を入れる。すると紫はゆっくりと俺のほうに倒れてきた。
それをそっと受け止める。

「なかなかいい退屈しのぎになったぞ？」

そう言い、俺は紫を抱きかかえ森の奥に入った。

で、現在夜である。俺は適当な小屋を見つけてそこで紫を休ませた。
俺も眠いな・・・。しかし、布団は紫の寝ているやつしかない。能力で作ろうにも、
ここは狭い。布団は敷けないだろう。二人で寝ることも考えたが、紫が暑苦しくなる。
・・立ったまま寝ることにしよう。
俺はそう思い、紫の布団の近くで腕を組んで立ちそのまま眠った・・
・

第２８話：胡散臭いスキマ妖怪（後書き）

はい、紫さんでした。
そして壊の特技、立ったまま寝ること。
次はどうしようかな～。・・・そろそろ瑠璃を出したい・・。

第２９話：幼女神と凶鳥とスキマ妖怪（前書き）

やっと瑠璃の出番が・・・
最初は紫からです。

第２９話：幼女神と凶鳥とスキマ妖怪

「・・ん・・んぅ・・。」

私は目を覚ました。いや、まだ目は開けてない。なんだか開けたら酷く後悔する気がするからだ。

しかし、いつまでも目を閉じているわけにもいかないので、仕方なく目を開く。

目を開いて最初に見えたのは自分の寝ている布団。そして次に見たのは・・・

「!?」

あの男だ。私の枕元で腕を前に組んで立っている。私は素早く起き上がって身構えた。

・・・?男がまったく動かない。私は恐る恐る顔を覗き込んだ。

「・・・寝てる?」

なんと立ったまま寝ていた。それはもう気持ち良さそうに。

私はこの男・・名前は壊だっただろうか?壊の寝顔を見てなんとなく微笑んでしまった。

「・・・ん・・。」

「!?」

まずい!起きてしまった。

彼はゆっくりと目を開くと私の事を見ながらこう言った。

「おはよう。」

え？

ーーーーSite壊ーーーー

「おはよう。」

俺は紫に向かって挨拶をする。やはり朝の挨拶は大事だ。
紫は何故か驚いた顔をしていた。・・・どうかしたのだろうか？

「どうかしたか？」

俺がそう聞くと、紫は俺を睨みつけてきた。

「あなた・・、どうして私を助けてのかしら？
あなたは私を殺そうとしたし、私もあなたを殺そうとしたのよ？」
「なんだ、そんなことか。簡単だ。俺にとって、君との戦いはただの退屈しのぎ、

暇つぶしなんだよ。だから別に殺そうとも思って・・なかったわけでもないが少なくとも
今は殺さないさ。いい退屈しのぎになっからな。それに・・。」
「？」
「君はもっと強くなりそうだ。」

俺はそう言い、床に座る。・・考えてみたら地面に寝ればよかったな・・。
とりあえず、一号を呼び小屋の中に何か食べるものがないか探してもらうことにした。
一号が見つけて物は、米俵と野菜と味噌だった。少し前まで誰か住んでいたようだ。野菜はまだ食える。
俺は能力で調理器具と水を創り、その場で適当に考えたものを作った。

「食うか？」
「え、えぇ、頂くわ。」

俺はこれまた能力で創った椀に炊いた米をよそい、味噌汁を別の椀に入れて渡した。

「ねぇ、あなた何者なの？私は少なくとも３００年は生きてきたけれど、
あなたの事はまったく知らないわよ？」
「だから言っているだろう。俺のことを知っているやつなんてほとんどいない。
それと、人にものを尋ねるならまずは自分からだ。」
「・・まぁいいわ。私は妖怪の八雲　紫。
能力は『境界を操る程度の能力』よ。境界の付くものならある程度操れるわ。」

「そうかい。俺は紅鎖華　壊だ。」
「・・・それだけ?もっと他にないの?どれくらい生きたのかとか、能力はなんだとか。」
「自分で調べるんだな。」

俺がそう言うと不満そうな顔をする紫。
まぁ、自分のことを簡単にペラペラ話すやつなんぞいないだろうよ。
そんな感じ食べ終わって空になった椀を消す。
さて、そろそろ行くか。
そう思い立ち上がると・・・

「壊さん!」

そう叫びなが何故か瑠璃が扉を開けて入ってきた・・・

ーーーSite瑠璃ーーー

わたしは昨日たまたま仕事が空いたので久しぶりに凶さん・・今は壊さんでしたっけ?
なんだか夢でそんなことを言われました。
まぁ、壊さんの様子を見ようと思いました。そこで、壊さんが奇麗な女の人と戦ってるのを偶然見ました。あ、世界には行ってないですよ?水晶のようなもので見てますから・・。
もちろん、世界の許可を得て。ただ、話している内容がわからなかったり、
壊さんが建物に入ったりすると見えなくなってしまいます。

壊さんは女の人に手加減をしているようでした。女の人はおかしな空間を開け、
中に入ろうとしていましたが、壊さんが一瞬で近づいて何か言った後に手刀で首を攻撃しました。
すると女の人が壊さんのほうに倒れました。壊さんはそれを受け止めて抱きかかえたまま
森の奥の小さな小屋に入っていってしまったのです。
まさか・・・

「・・ちょっと行ってきます。」
「いやいや、どこに行こうとしてるんですか!?待ってくださいよ!」
「離してください!!このままでは壊さんが!壊さんが!!」

わたしはしがみついてくる部下を何とか引き離そうとしながら出口に向かおうとしました。

「!そうだ!では一日待ちましょうよ!それで出てこなかったら何か良からぬ事をしている
と思っていいでしょう。」
「・・わかりました。一日だけ待ちます。」

わたしはそう言い、一日待つ事にした。もし出てこなかったらその時は・・・

ーーーーSite壊ーーーー

「・・・すいませんでした。」

目の前には土下座する瑠璃。どうやら俺が紫をこの小屋に運び込んだときに
何かよからぬことをしようとしていると思ったらしい。そもそもよからぬ事ってなんだ？

「はぁ、もういい。頭を上げてくれ。」
「はい・・・。」

返事をしながら頭を上げて土下座をやめる瑠璃。かなりションボリしてる。

「あのな、瑠璃。そもそも人のことを勝手に見るのもどうかと思うぞ？」
「う・・言い返す言葉もありません・・。」

そう言いながらさらにションボリする瑠璃。まるで小動物のようだな。

「ねぇ、もうその辺にしてあげたらどうかしら?」

それを見ていた紫が止めに入る。

「・・・まぁ、いいさ。でも瑠璃、これからはもうやるなよ?。」

俺がそう言うと、黙って頷く瑠璃。あまり言い過ぎてもいかんしな。そう思い、俺は瑠璃の頭に手を置く。そして撫でる。

「あ・・・。」

「まぁ、これから気をつけてくれればいいさ。」

瑠璃は気持ち良さそうに目を細める。・・はて?紫が睨んでいる・・。

「どうかしたか?紫。」

「・・別になんでもないわよ。それと、馴れ馴れしく下の名前で呼ばないで頂戴。」

「別に構わんだろう。俺のことも壊と呼んでくれていいから。」

「・・・まぁ、それならいいわ。」

そう言い、スキマから扇子を取り出し、口元を隠す。なんだか目が嬉しそうだ。

俺は瑠璃の頭から手を離「あ・・・・。」・・なんだ瑠璃、まだ撫でて欲しいのか?

しかし、俺は甘くない。瑠璃がそんな声を出そうがもう撫でない。・・今度また撫でてやろう。

「さて、瑠璃。君はこれからどうする?戻るかね?」

「・・いいえ、1週間なら休んでも構わないと言われたので、壊さ

んについて行きます。」
「・・俺の名前をいつ知ったんだ?」
「かなり前に、夢で壊さんが改名したことを教えてもらいました。」
「そうか。(もう突っ込まんぞ)では紫、君はどうする?」
「私はそろそろ行くわ。」
「そうか。またな。」
「えぇ、またいつか。」

紫はそう言いながらスキマを作り、中に入っていった。

「俺たちも行くか。」
「はい。」

そう言い俺と瑠璃は小屋を後にした・・・

ーーーーSite紫ーーーー

私は壊と分かれた後、スキマで考えていた。お茶を啜りながら。
なぜ、あの少女が頭を撫でられたときに嫉妬してしまったのだろう?
なぜ名前を呼ばれたときに嬉しかったのだろう?

「・・・わからないわね。」

こんな気持ちは初めてだ。
いつかまた会うときには、この気持ちに気づいておこう。

私はそう思いながら再びスキマの中でお茶を啜った・・・

第２９話：幼女神と凶鳥とスキマ妖怪（後書き）

はい、瑠璃です。とうとう出番が来ました。
次の回からは瑠璃が旅に同行します。

第３０話：幼女神との旅はこんな感じ（前書き）

うん、こんな感じ。

第３０話：幼女神との旅はこんな感じ

俺は瑠璃と森の中を歩いている。瑠璃が旅に付いてきてからまだ三日しか立っていない。
いや、もうなのか？一応風呂とかは俺の能力で作ったりしている。
もちろん水も。
食事は瑠璃の場合は俺と同様に取らなくてもいいらしいが、ちゃんと食ってる。その辺の動物とか狩ったりして。

「壊さん、今日はどこに行きますか？」
「そうだな・・、流れに任せるか。」

何故か一号を頭に乗せながら聞いてくる瑠璃。と、言うか一号の足はヤジロベー見たいな感じだ。
痛くないのか？

「瑠璃、頭に乗せているソイツは痛くないのか？」
「はい、思ってたよりも痛くないです。」
「そうか。」

そう会話しながら歩く。
ぶっちゃけ、旅の時って話し相手がいないから退屈でしょうがない。
今回は瑠璃がいるからいいけど、そのうち帰るんだよな・・。
今度新しい仲間でも創造して創ろう。喋れる奴をな。

「あ、壊さん。あそこに川がありますよ？」
「ん？ああ、行くか。」
「はい。」

俺はそう返事をして瑠璃を見る。なんだろう、笑顔が眩しすぎる。
そう思いながらも川に着いた俺たち。

「壊さん、少し待っててくださいね。」
「？ああ、わかった。」

瑠璃は俺にそう言うと、トテトテと何処かに走っていく。
なんだか少し嬉しそうな顔をしていたな。ちなみに、一号は瑠璃の頭から降りて
俺の頭に乗ってる。瑠璃の言う通り痛くない。

「壊さ～ん！」

ん、戻ってきたか。俺は瑠璃のほうへ振り向いた・・・途端に固まってしまった。
なぜかって？それはな・・

「瑠璃、なんだその水着は？」
「スクール水着です。」

そう、スクール水着だ。まてまて、なんでそんなもの持ってるんだ？
確かに、スクール水着は俺も知ってる。と、言うか友人Ａに熱く語ってもらった。

「瑠璃、なぜそんなものを持っているんだ？」
「部下にもらいました。これを着れば男の人はこれでイチコロだって・・・」

純粋な少女に何を教えているんだ。今度その部下を締めてやろう。

「あの・・・嫌ですか？こういうの・・・。」

そんな泣きそうな目で見ないでくれ・・・
いや、嫌いではないのだ。別に好きでもないがな。

「いや、べつに・・。」
「！そうですか。じゃあわたし、川に入ってきますね！」

そう言いながら笑顔で川に入っていく瑠璃。・・・なんか、かなり合ってるな。
俺はそんな瑠璃を眺める。・・本当に、子供のようだな・・。

「・・ん？」

横から身に覚えがある気配を感じた。これは・・・

「八雲　紫、何か用か？」
「あら、やっぱり気づいた？」

ずるり、といった感じでスキマから出てくる。・・少し怖い。

「で、何か用か？」
「ちょっと報告に来たのよ。」
「報告？」
「えぇ、私あなたに負けたでしょ？それでね、私ほんの少しあなたの事を調べたのよ。
でも全然あなたのことがわからなかったの。」

そんなことを報告しに来たのか？わけがわからん。

「そんなことを伝えに来たのか？」
「えぇ、まったくわからないのよ。」
「・・・・・・」

くだらね～。そんなこと報告しに来たとかショボすぎる。と、言うかお前はそんなに暇なのか？

「君はものすごい暇人なのだな。」
「まぁ、否定はできないわね。」

そう言いながら欠伸をする紫。ふむ、駄目人間のいい例だな。いや、駄目妖怪か。

「じゃ、もう行くわ。眠いし。」
「ああ、もう行け。そして二度と来るな。」
「あら、酷いわね。」

そう言いながらスキマに潜る紫。本当に何しにきたんだか・・・。

「壊さ～ん！」
「ん？あぁ、お帰り。・・・ほら、タオル。」
「ありがとうございます。わたし、着替えてきますね。」

そう言い、また去っていく瑠璃。
さて、今のうちに新しい仲間のことでも考えておこう。
まずは話ができる奴、これは譲れない。後は・・・どうでもいいな。
うん。
話しさえできれば、気色悪い怪物だろうが構わない。それと・・・あぁ、そうだ。ゲートの色を変えよう。
黒は合わない気がする。本来は紫色だが、藍色にするのもいいだろ

う。
容姿があれだから出来るだけ濃い色や禍々しい色にしよう。そうすれば似合うかもしれない。
そのうちやっておこう。そんなことを考えていると気がつけばあたりも夕暮れ時になっていた。

「壊さん、何か考え事ですか？」
「・・瑠璃か。いや別に大したことではないさ。それより、今日はここで野宿しよう。
だいぶ暗くなってきたしな。」
「あ、はい。そうですね。」

俺は能力でテントを創る。ただのテントではなく、５人は寝れるであろう大きさのテントだ。
一号に適当に落ちている枝を集めてもらい火を起こす。先ほど瑠璃が取ってきたであろう魚の
中身を取り除き、枝で刺す。味付けに能力で創った醤油と塩を使う。
俺の能力はかなり便利だ。
調味料も食材も創れる。しかし、食材だけはあまり創らない。
自分で取ってきたほうが美味しく感じたりするだろう？
俺と瑠璃は火で焼いた魚を食べながら色々な話をし、その後に眠りについた・・・

第３０話：幼女神との旅はこんな感じ（後書き）

もう少しだけ瑠璃を出します。・・・やっぱりやめようかな。

第３１話：剛と柔（前書き）

瑠璃がさらわれちゃいます。

第３１話：剛と柔

「暇だな～・・・。」
「暇ですね・・・。」

旅の途中で見つけた小屋に居る俺たち二人。特にやる事もなかったので、ここで少し休憩することになった。
しかし、暇なのだ。どれくらい暇かと言うと、授業中に消しゴムのカスで一時間潰せるくらい暇なのだ。

「あれ、一号さんはどこに行ったんですか？」
「ん？そう言えば居ないな・・。」
「わたし、心配なので探してきますね。」
「わかった、気をつけろよ？」
「はい、行って来ます」

そう言いながら小屋を出て行く瑠璃。
しばらくは帰って来ないと思うのでこの小屋について説明しよう。
ここは旅の途中にたまたま見つけた小屋である。
中はそこまで汚くなく、ホコリが散っていた程度だ。
そこを瑠璃と掃除し、まったりしていた。ちなみに、掃除の時は一号もいた。
まったく、どこに行ったのやら・・・

「ん？一号いつの間に帰って来たんだ？」

いつの間にか一号が果物のようなものを抱えて横にいた。

「果物を取ってきたのか。ところで瑠璃がお前を探しにいったんだが

途中で会わなかったか？」

俺がそう聞くと、右手を顔の前で振って「知らない」と表現する。
ふむ、今度は瑠璃が迷子になったか・・。

「一号、瑠璃を探しに行くぞ。」

俺はそう言いながら一号を肩に乗せて小屋を出る。
なんだか嫌な予感がする・・・

ーーーーSide瑠璃ーーーー

「一号さ～ん、何処ですか～！」

わたしは一号さんを探して森の中を歩いています。あの子は小さいから中々見つからないんですよね・・・。
何度も一号さんを呼んでいると、もしかして戻ってるのではないかと思い、小屋に戻ろうと思いました。

「おい。」
「はい、なんでしょう「ドスッ！」。」

声を掛けれたので振り返ろうとしたら、首に手刀を入れられたようでした。
わたしは薄れいく景色の中で話しかけてきたものの正体を確かめよ

うとしました。
それは・・・・

ーーーSide壊ーーー

「これは・・・妖力か・・？」

瑠璃を探しにきた俺はなんだかやけに大きな妖力を感じた。
この妖力は昔に感じた気がする。いや、正確には似ているだが・・。

「・・・あっちか。」

俺は妖力が強く感じられるほうに進んだ。
もし、もしもだ。この妖力の強い妖怪のところに瑠璃がいるのなら非常にまずい。
俺一人ならこのくらいは倒せる。それこそ本気で戦えば消し去る事も可能だ。
しかし、瑠璃が人質に取られたとすれば話は別だ。相手は間違いなく俺に無理難題を吹っかけてくる。
そこに他の妖怪がいればさらに最悪だ。そして何より、瑠璃を人質に取ったなら頭がかなり切れると思われる。
そんな事を考えていると、妖力の強く感じたところに着いた。そこには・・・

「うはははははは!!」
「・・・・」
・・・え?何あれ?
その妖怪は森の中心にいた。確かに妖力は強い。さらに言うと、縛られてる瑠璃もいた。
でもその妖怪があまりにもふざけ過ぎている。何がって?格好が。
うははははとか笑ってたやつは赤いふんどしに頭をすっぽり隠せる穴の二つ開いた布袋を被っていた。
なんかやけにムキムキだ。
もう一人はムキムキとは対照で、かなり細い奴だ。細い身体に細い腕が4本。
服は村人が着るような服だった。アンバランスだな。
「剛(ごう)よ・・」
ひょろい妖怪がごつい妖怪に話しかけた。
「おぉ、なんだ柔(じゅう)よ!」
するとごつい妖怪が返事をする。ネーミングセンスねぇな。
「この少女はどうするのだ・・・」
「ふむ、俺はあまり人間は好きではないが妖力を手っ取り早く上げるためには
食うしかあるまいと思ってる。よって食う!!」
そう言いながら、倒れてる瑠璃にごついのが手を伸ばす。
・・・やっぱり助けに行かなければいけないんだろうか?すごい近

づきたくない。
でも、瑠璃には色々世話になったしな。仕方ない、助けに行くか・・
・

「待ってもらおうか。」
「何奴!?」
「俺はその少女の保護者のようなものだ。返してもらえないだろうか?」
「それは出来ん!我々とて妖怪の端くれだ!だから人間を食って妖力を上げねばならん!」
「その通りだ・・・。それに我々はこの森の妖怪たちの頭だ・・・。強く有らねばならん・・。」

こいつら頭だったのか。こんなのでもなれるんなら、俺にもなれそうだな。

「・・それなら俺と勝負しよう。俺が勝ったらその少女を解放しろ。俺が負けたらお前等の言う事をおとなしく聞こう。」
「それはまことか!?ならばそうしよう!!」
「我々が勝ったら素直にこの娘を食わせてもらうぞ・・。」
「構わん。」

いざとなったらクックルにでもなるさ。

「では始めよう!まずはこの剛がお相手いたす!!」

そう言いながら突っ込んでくるごつい妖怪、剛。速いな。下手したら諏訪子よりも速いんじゃないのか?
そしてその腕で思いっきり殴ろうとしてくる。俺はそれをかわし、空いた脇腹に蹴りを入れてやった。

「ぐっ・・！！ぐわはははは、やるではないか！！
まさかただの人間に反撃されるとは思わなかったぞ！！」
「ふん・・・ただの人間、ね。」

どうやら相手は俺をただの人間と思ってるらしい。まぁ、何の力も出してないからな。
俺は剛に向かって走る。そして顔面に向かって蹴りを入れる。・・・が、

「チッ・・！」
「なめるでないぞ、ぐわはははは！！」

俺の蹴りは剛の腕によって防がれてしまう。思ってたよりも強いな。
俺はもう片方の足で剛の腕を蹴り、その場から離れる。くそ、一号を肩に乗せておけばよかった。そうすれば投げつける事ができたのに！
ちなみに、一号は柔とか言う奴の頭に乗っている。何をしているんだお前は。

「戦いの途中に余所見とはずいぶん余裕だなぁ！！」
「な・・！？」

そう言いながら突っ込んでくる剛はさっきよりも速い。
俺はその攻撃を横に飛び回避する。しかし、これは剛も読んでいたようで、
その腕を思いっきり振り回した。俺はそれを上に跳んでかわし、去り際に剛の頭を踏んだ。少し、挑発するかな・・・

「ふん、少しは頭を使って戦うんだな。筋肉ダルマ。」

「ヌッ!?なんだと!!」

ものすごい勢いで乗ってくれた剛。何故か柔はクスクスと笑っている。

剛は俺に再び突っ込んできた。しかし、さっきよりも遅い。頭に血が上ったようだ。

俺に何度も拳で殴りかかるが、それをかわす。さて、反撃だ。

俺は前にも依姫に使ったあの奇妙な攻撃をすることにした。

こいつは頭が悪そうだからすぐに掛かりそうだ。

俺は前に依姫にやったように、相手が見える速さで殴る。剛はそれをガードした。

・・掛かった!

「ぐ・・・!?ガハッ!!」

俺は拳の軌道をずらし、剛の心臓部分、つまり左胸近くに拳を入れた。

殴る瞬間に魔力で攻撃力をあげたからかなり効くはずだ。

「・・・俺の勝ちでいいな?」

「ゴフッ・・!ぐ、わははは!よかろう、お前の勝ちだ!」

血を吐きながらそう言う剛。柔が剛の所に近づき、肩を貸し立ち上がらせる。

そしてさっきまで自分が座っていた場所に今度は剛を座らせた。

剛を座らせると俺のところまで近づいた。

「さて、始めるか・・・。」

「まて、その前に頭に乗ってる一号を降ろさせろ」

「ああ、わかった・・・。」

俺は一号に瑠璃の近くに行くように言った。

「さて、始まるか・・。俺は『技能の柔』だ・・。」

「・・『技能の柔』？」

「あぁ、俺はそう呼ばれている・・。ちなみに剛は『鉄拳の剛』だ」

「そうか。俺も言ったほうがいいのか？」

「頼む・・。もし死んだりした時のために、相手の名前を知っておきたい・・」

「わかった。俺は紅鎖華壊。別名・・・」

『凶鳥』だ・・。さぁ、始めようか・・・

ーーーSide柔ーーー

凶鳥・・・。どこかで聞いた気がする・・。

「どうした？余所見をするとやられるぞ？」

そう言いながら紅鎖華　壊はこちらに走ってくる。速いっ・・！
俺は余所見をしていたせいもあって紅鎖華にそのまま蹴りを入れられる。
しかし、腕でなんとか防御できた。

「・・重いな・・。これは油断していたらすぐにやられてしまう・・。」

「まぁ、頑張れ。」

そう言いながら蹴りをやめて速い拳で殴ってくる。
・・・勝てるか？この戦い・・・。

ーーーーSide壊ーーーー

俺は蹴りからすぐに拳で殴りかかる。しかし、剛にやった軌道ずらしをする気だ。
柔がガードしたので軌道を顔から腹部にずらして殴った。

「・・・よく防ぎきれたな。」
「あまりなめるな・・・。剛に2本だから通用できたかもしれんが、俺の腕は4本あるんだぞ・・。」

柔は残りの腕で腹部、俺が狙っていたのはど真ん中だが、そこを防いだのだ。

「だが、甘いな。」

「な！？ガっ！！」

別にこの技にそこまで期待してるわけじゃない。俺は純粋に力で敵を叩き潰す。
クックルもそんな感じだろう？
今俺がやったことはただの力押しだ。いかに力を抑えていてクックルになれなくても、
今の状態でもその辺の奴らに負ける気はない。
まぁ、さっきの剛とかいう奴には今の状態では若干負けるがな。

「くっ！そちらこそあまりなめるなぁ！」

そう言いながら2本の腕で俺に殴りかかってくる柔、俺はそれをかわした。
が、しかし残りの腕が横に薙ぎ払われた。それは俺の脇腹に見事命中した。

「っ・・！細いくせに中々の力じゃないか。」

俺はそう言いながら後ろに跳んで柔から離れる。
柔は俺が跳んだ方向に走ってくる。俺は着地したと同時に回転蹴りを放つ。
あらかじめ言っておこう。回し蹴りではない。回転蹴りだ。
柔が回転蹴りしている俺の脚を掴んだ。そしてそれを・・

「せいっ！」
「ぐ・・！」

へし折ったのだ。俺は柔を脚から引き離し、思いっきり殴って吹っ飛ばした。

「ぐ・・痛いな。」

痛い・・・・、これは冗談にならない・・。間接ではなく骨をやられた・・。

でも・・何故だろうか。わからないが何故かとても・・

胸が疼く

あの妖怪をバラバラにしたらどんな風に死んでいくのだろうか？

それとも死なずに生きているだろうか？いや、それよりも頭を砕いたほうが良さそうだ。

「・・・何を考えているんだ。俺は・・・。」

一瞬危ないことを考えていた気がする。俺は自分の有りえない方向に向いた脚を

無理やりもとに戻す。そして戻した途端に柔に向かって走る。まだ

少し痛いがこれくらいは
いいだろう。
柔のところまで来るとまずは殴った。そして次に蹴りを入れる。さらに残った片方の腕を柔の顔に向ける。

「死ぬなよ?」
「なんだと・・・?」

俺はその手にありったけの妖力を込めて柔の顔に向けて撃つ。
柔は成すすべなく俺の妖力弾を顔面に受けた。
そして後ろ向きに倒れた。

「・・俺の勝ちだ。じゃあな。」

俺はそう言い、瑠璃のところに向かう。そして瑠璃を縛っていた縄を解き、
太ももの部分と肩の辺りに手を入れて持ち上げる。まぁ、要するにお姫様抱っこだ。
その間、剛はまったく俺に手を出さなかった。

「じゃあな、また会えたら会おう。」
「ぐわはははは!敵にまた会おうと申すか!気に入った!
いつでも来い!その時は持て成しでもしてやる!」

俺はそう言う剛に「ああ。」と言いながら瑠璃を小屋に連れて行った・・・

ーーーSide剛ーーーー

「くくくっ、中々おもしろいやつだったな・・・。」

わしはそう言いながら柔のところへ向かう。
そして肩に担ぎ、自分の住処たちの住処に連れて行く。

「今度はもっと真剣に戦いたいのぉ。」

あの者は間違いなく手を抜いていた。いや、もしかしたら我輩の見間違いかもしれない。
しかし、そう見えた。
次会ったときは共に酒でも飲みたいものだ・・・

あるところに二匹の妖怪の頭がいた。しかし、ある日その二匹は妖怪たちの頭をやめた。
子分の妖怪が理由を聞いたところ「もっと強い奴に負けてしまった。」と言いながら
笑っていたそうだ・・・・

第３１話：剛と柔（後書き）

はい、終わりました。
今回は新しいオリ妖怪、「剛」と「柔」が出てきました。
ちなみに、この二匹はまた出すか出さないか迷ってます。

第３２話：平穏な日は訪れないのか・・・（前書き）

原作キャラが一人出ます。

第３２話：平穏な日は訪れないのか・・・

俺は再び一人旅に出ている。瑠璃はもう帰った。なんでも仕事が忙しくなるから
部下に帰ってきてくれと泣きながら頼まれたそうだ。それで渋々と言った感じで帰っていった。
まぁ、仕事はちゃんとしなきゃな。
しかし、瑠璃が帰ったから話し相手がいなくて暇だ。

「・・・あれは・・村か？」

そんなことを考えていると村を発見した。ちょうどいい、今日はあの村に泊めてもらうか。
俺はそう思い、村の中に入る。そこで通行人Ａ（男）に話しかけた。

「すまない、今晩泊めてもらえないだろうか？」
「ん、あぁ、あんた旅人かい？こんな何もないところでいいなら泊めるよ。」
「恩に着る。」

俺は通行人Ａに礼を言って、家まで案内してもらうことにした。
途中村の子供たちに一号のことを色々聞かれたが、適当にあしらった。

「ここだ。まぁ、入ってくれや。」

通行人Ａに言われて家に入る。ちなみに、今の時代の家は古い昔の家だ。
わからなかったら日本〇話の家を想像してほしい。あれを少し古く

した感じだ。
家の中に入ると、小さな小娘が「お父さん」とか言いながら通行人A・・・もとい男に
飛び掛った。男はその子供を抱きしめて「ただいま」と言った。
そして女房らしき女も出てきた。

「あら、お客さんかい？」
「あぁ、客だ。今日家に泊めようと思う。」
「よろしく頼む。」

俺は出てきた女房らしき女にそう言う。すると子供が俺の服の裾を引っ張ってきた。

「・・なんだ？」
「お兄ちゃん、どうしてここに来たの～？」
「たまたまだ。旅をしていてな。それでこの村を見つけたんだ。」
「ふ～ん。ねぇ、旅のお話聞かせてよ！」
「こらこら、旅人さんは疲れてるんだぞ？」
「え～、いいでしょ？」
「・・・まぁ、別に構わんさ。聞いても面白くないと思うがな。」
「やった～！」
「すまんねぇ、家の娘は外に興味を持っていてな。ただ妖怪だらけだから遠くに行けないんだよ・・。」
「気にするな。こちらは泊めてもらうんだからな。」
「ねぇねぇ、あっちでお話しよ～！」

そう言いながら俺のことをグイグイ引っ張る小娘、もとい少女。
俺は少女に引っ張られ、家の奥に進んだ・・・

「へぇ～、お兄ちゃんは妖怪も倒せるんだ。」
「あぁ、そうしないと旅なんてやってられんからな。」

俺は夕食が出来るまで少女と話をすることになった。ちなみに、少女の父親は
外に出かけたそうだ。

「晩御飯の準備ができましたよ～！」
「あ、お兄ちゃん、ご飯だって！」
「あぁ、行くか。」

俺はそう言いながら立ち上がる。そして食卓へと向かい座る。少女は俺の横に座り、
少女の母は自分の娘の横に座った。そしていつの間にか帰ってきた父親は俺の横に座っている。
いただきます、と言いそれぞれが箸を進める。・・・うん、普通に美味い。

「どうですか、お味のほうは？」
「あぁ、普通に美味い。」
「そうですか、それはよかったです。」

少女の母が聞いてきたので素直に答える。少女の父が俺を見て何故か嬉しそうな顔をしてきた。
その後は何事もなく、食事が済んだ・・

で、俺は今布団の中だ。あの後食事を済ませ、そのまま風呂に入って少女の母が用意してくれた布団に寝ている。
ちなみに、他の三人も同じ部屋だ。はぁ～、こんな平和な一日は久しぶりだなぁ～。少し感動してしまった。
と、思っていたのに・・・

「・・・やっぱり俺に平和は来ないのだろうか・・。」

やたらめったら強い妖力を感じた。一日くらい平和をくれ。
俺は立ち上がり、家から出た。念のために「世話になった」という置手紙と、この時代の金を少し置いていった。
ちなみに金は襲ってきた妖怪を殺して奪った金だ。世の中奇麗事だけでは生きていけんぞ。
俺は妖力の強い森まで場所まで進んだ。どうやら向こうもこの村に近づいてきている。・・・？
妖力が二つになった？しかもこれは・・・

「・・・八雲　紫か？」

どうやら紫も一緒にいるようだ。・・まぁ、いいか。紫ならおかしなことはしな「ドカーン！」・・・。
すぐに行くとしよう・・・

ーーーーSide紫ーーーー

「あなた、強いわね。」

私は対峙している妖怪へとそう言った。
その妖怪は美しい金色の髪をしており、黒い服を身にまとっていた。
そして紅い目をしており、その手には大きな剣を持っている。ちなみに、髪はそこまで長くない。

「あら、あなたも強いわよ？」

その妖怪は私にそう言う。そして大きな剣で私を斬り付けようとした。私はそれをスキマでかわす。
なぜ、私が戦っているかというと、理由は簡単。村の取り合いだ。
あの村は私が前から目を付けていたのだが、
この妖怪が村人を食そうと言うのだ。私は食べる気はない。ただ村がどう発展するか見ようと思っただけだ。

「危ないわね。気が短いと嫌われるわよ？」
「あなたも胡散臭い笑みを浮かべてると友人が減るわよ？」

ピクッ、この女・・・。私は妖怪の目を見て殺気を飛ばす。相手も私と同じことをしている。
絶対に倒す・・・！

ーーーーSide壊ーーーー

うわぁ、入りずれぇ・・・。
現場に来た俺はそう思ってしまった。紫ともう一匹のショートボブのような髪型の
妖怪が殺気を飛ばしながら睨み合っているのだ。止めに来ておいてなんだが、勝手にやらせておこうかなぁ・・。
そうすればどっちも勝手に死ぬだろうし。別に紫がどうなろうが知ったこっちゃないしなぁ～・・・。

「そこのあなた、出てきなさい。」

あ、ばれた。
金髪のショートボブっぽい髪型の妖怪にばれてしまったので、渋々出て行く俺。

「・・壊、あなた何やってるのよ・・。」
「あら、知り合い？」

「あぁ、ただの知り合いだ。」

俺がそう言うと、ガシャーンという鏡の割れる感じの効果音が紫から聞こえてきた。

紫はスキマから出て、地面に座り込み、「の」の字を書き始めた。・・何をやっているんだ。

「・・あなた、あれはどうにかしなくてもいいの？」

「まぁ、別にいいだろう。」

俺は改めて妖怪を見る。

容姿を説明すると、髪は金髪でショートボブっぽい感じだ。瞳は俺と同じ紅だ。

身に着けているものは白黒の服に赤いネクタイ、ロングスカートのようなもの。

そして左側頭部に赤いリボンをつけている。右手には剣を持っている。

紫にも負けないくらいの大人の女性と言った感じの体付きだ。たぶん、あぁ言うのを美人というのだな。

「さて、この先の村に用があるのかな？」

「えぇそうよ。ただ、そこの女が邪魔をしてきたのよ。」

そう言いながら、妖怪は紫のほうを指差す。・・なんかブツブツ言ってるぞ。

「まぁ、なんだ、この先の村はあきらめてもらえないだろうか？少しだけ恩があってな。」

「あら、嫌よ。どうしても、って言うなら力ずくで止めれば？」

そう言いながら、剣を構える妖怪。なんで俺の知り合いにはろくな奴がいないんだろう・・。
（※お前がろくでもない奴だからだ。）
仕方なく俺は一号に紫を離れさせるように指示させて構える。

「あらやる気？言っておくけど手加減しないわよ？」
「そうか。俺は手加減しよう。」

俺がそう言うと、妖怪の眉がピクリと動いた。そして静かに笑い出す。

「ふふふふ・・・いいわ。見せてあげる。私はルーミア、あなたを消してあげるわ！」

そう言いながら俺に向かって突っ込んでくるルーミア。
そしてルーミアは剣を両手で持ち、俺を斬りつけてくる。俺はそれを軽くかわす。・・・速いな・・。
かわしたと同時にルーミアに廻し蹴りを放つ。ルーミアはそれをかわし、後ろに跳ぶ。

「危ないわね。もう少しで当るところだったじゃないの。」
「当てる気だったのだから当たり前だろう？さて・・・退屈しのぎにはなってくれよ？」

俺はそう言いながら、全ての妖力を出す。
簡単にやられなければいいがな・・・・・。

第３２話：平穏な日は訪れないのか・・・（後書き）

はい、今回はここまで！
そんなわけでＥＸルーミアでした。紫とかとキャラが被るなぁ・・。
その内幽香も出すけど、喋り方かぶりそうだし・・・。

第３３話：闇の女王（前書き）

タイトル通りです。

第３３話：闇の女王

男の雰囲気がかわり、さらにありえないほど妖力が溢れ出した。

「・・！すごい力ね・・。震えが止まらないわ・・。」

「そうか、なら君も本気を出せばいいだろう？そうすれば震えも収まるんじゃないのか？」

「・・気づいていたのね。いいわ、私の本気、見せてあげる！」

私はそう言いながら妖力を全開する。すると背中に黒い「闇」の翼が生えてきた。

「ほぅ、素晴らしいほどの妖力だ。その若さでそれはすごいぞ。」

男はそう言いながら私の妖力に感心の言葉を漏らす。こう見えても３００年は生きているのだからこれくらいは出る。

私は男の言葉を無視して「闇」の剣で斬り付ける。しかし、男はそれを蹴り上げた。

「なっ・・！？」

「戦いとは頭も使わなければいかんぞ？」

男は蹴り上げた脚で廻し蹴りをしてきた。私はそれを脇腹に受けてしまった。

骨がミシミシと言った音を出す。私はそのまま横に吹き飛ばされて木に突っ込んでしまった。

何とか立ち上がった私は男を睨みつける。

「ぐ・・！！この・・！」

「敵を睨むくらいなら攻撃をしたらどうだ？」

男はそう言いながら、腕を前に組んで私を見ている。

そこまで言うなら・・・！

私は能力で闇を操り、小さな短刀をを幾つも作り、それを男に向かって投げる。

男はそれをかわす。私はさらに短刀を作り飛ばしながら男に向かって飛ぶ。

そして男に自ら斬りかかる。私の剣は見事に男の胸を斜めに切り裂いた。勝った・・！

そう思った。しかし、男は私の剣を素手で掴み、砕いた。そしてそのまま私の腹を拳で殴った。

「ガ・・ハッ・・！」

今までで一番の激痛が走る。息が出来ない。男は拳を離した途端、蹴りを入れてきた。

私は後方に吹っ飛ぶ。しかし、何とか翼で体勢を立て直す。

「敵が生きていたら勝ったと思うな。じゃなきゃ殺されるぞ？」

「あなた・・・なんなのよ。私にそんなこと言って。」

私がそう言うと、男は静かにこう言った。

「退屈しのぎになってもらわなきゃ困るんだよ。」

その言葉を聞いて、私は怒りが湧いてきた。
退屈しのぎ?この私が?今まで多くの生き物を殺してきた私がただの退屈しのぎ?
ふざけるな・・・。絶対に・・・絶対に・・

「殺す・・!!」

ーーーSide壊ーーー

「殺す・・!!」

いきなりなんだ。そんな恐ろしい事言い出して。
俺がそう思っていると、ルーミアは剣を作り出し、さっきよりも速く俺に突っ込んできた。
いや、マジで速い。俺はそれをなんとかかわし、拳を入れようとしたが剣で防がれる。
そしてルーミアは短刀やらナイフやらを大量に作り出し、俺に飛ばしてきた。ちなみに、黒色だ。
俺はそれを腕に妖力で強化し、弾く。なぜ妖力しか使わないかというと、
他の力を使ったら紫に怪しまれる可能性があるからだ。俺は化け物だとあまりばれたくない。
だから、妖怪っぽくしているのだ。そうすれば少なくともばれることはないだろう。

「なんだ、急に強くなったじゃないか？」
「うるさい！早く死ね！」

そう言いながら剣で連続で斬り付けてくるルーミア。何を怒っているんだ？
俺はそう思いながらもルーミアに能力で創り出した剣を飛ばす。久しぶりに妖怪に使ったな・・・。
ルーミアはそれを剣で弾きながら俺を斬り付けようとする。ふむ。

「さて、そろそろ決めるぞ？」

俺はそう言いながら四方八方に槍やら剣やらを創り、ルーミアに飛ばす。
ルーミアは剣で弾いたりしたが、かなりの数が掠ったりした。
俺はさらに追い討ちを掛けるためにルーミアに向かって走り、跳び蹴りをする。
それは見事にルーミアに命中した。さらに俺は跳び蹴りを終えたすぐに、
ルーミアを思いっきり蹴り上げた。そして上に跳んでいったルーミアの所へジャンプし
首を掴み、腹に手を添え、そのまま地面に向かって落ちた。

「破壊の烙印押し。」

そう言いながら妖力を込め、地面に叩き付ける。
ルーミアは一瞬目を見開いたが、すぐに目を閉じた。・・気絶してるだけだな。
俺は気絶したルーミアを抱きかかえた。

「おい、紫。・・・まだそんなことをしているのか・・。」

紫のほうを向き話しかけたが未だに地面に「の」の字を書いていた。

一号は紫の

肩を「まぁ、元気出せよ。」みたいな感じで叩いていた。

俺が話しかけると紫はこちらをジト目で振り向いた。

「・・・なにかしら?」

「少し、君のスキマに入れてくれ。この妖怪を治療する。」

「嫌よ。」

「・・・わかった。君が嫌というなら、俺はどこか小屋でも見つけてくる。じゃあな。」

俺はそう言い、どこか小屋を探しに行く。あるといいがな・・・・

ーーーSide紫ーーー

壊が小屋を探しに森の奥に進んだ後も、私はそこでいじけていた。

ただの知り合いはヒドイ。せめて友人と言って欲しかった・・。

「・・壊の馬鹿・・。」

私がそう言うと、壊の後を付いて行かなかった人形が肩を叩き励ましてくれる。

「あなたは壊に付いて行かなくてもよかったのかしら?」

私がそう聞くと、人形は手を顔の前に持って行き、横に振った。
そして宙に浮き、私の頭を帽子越し撫でた。

「ふふ・・ありがとう。もういいわ。」

私はそう言い、スキマを作った。人形は私から離れて手を振りながら壊が歩いて行った方向に
進んでいった。
とりあえず、今度壊に会ったら少し、意地悪をしましょう・・・
私はそう思い、スキマに入っていった・・・

第３３話：闇の女王（後書き）

終わり。意外にも一号は優しかった。
もう当分他の原作キャラは出ないと思います。

第３４話：旅の道連れ（前書き）

まぁ、分かると思います

第３４話：旅の道連れ

「・・・朝か・・。」

ルーミアと戦った後、治療するために小屋を探してなんとか見つかった。
中に入った後に、すぐに能力で布団を創り、その上にルーミアを寝かせて、妖力をひたすら
注ぎ込んだ。ちなみに、小屋は結構広かった。
それが終わったあとに俺もルーミアの隣に布団を敷いて、一緒に寝た。
で、今は朝だ。いや～、よく寝た。

「・・・まだ寝てるな。」

横を見るとルーミアはまだ寝ていた。ってか服が所々切れてる。あとで直させてもらうか。
とりあえず、飯の準備だ。腹が減っては戦は出来ぬ、ってな。・・・しないからな？
俺はそんな馬鹿なことを考えながらも一号を呼んで森で獣を狩って来るように頼む。
一号にやらせると奇麗なまま持ってきてくれるからな。俺はとりあえず、米の準備だ。
小屋には大抵は米と野菜が置いてある。俺はそれで何か作ることにした・・・

ーーーーSideルーミアーーーー

約３００年間、私は自分の妖力と能力で生き延びてきた。
私の能力は『闇を操る程度の能力』。この能力で妖怪や人間を片っ端から殺した。
他の妖怪に負けないように、妖力を上げた。人間を食らってだ。
それのおかげで、私の妖力はかなり上った。そしてその辺の妖怪には負けなくなった。
そして私は戦い続けた結果、「闇の女王」とまで言われるようになった。
私はそれに少なからず誇りを持っていた。私に勝てるものなど居ない、そう思っていた。
しかし、そう思っていた私はある男にその気持ちを粉々に砕かれた。
昨晩、有名なスキマ妖怪と戦っている最中だった。あの男が現れたのは。
最初見たときは大したことはないと思っていた。なんの力も感じず、ましてや何かをする素振りも見せなかった。
しかし、それは間違いだった。その男は先ほどまで戦っていたスキマ妖怪よりもよっぽど強い妖力を持っていた。
私はそれに恐怖した。しかし、それでも負けられなかった。私はその男に立ち向かった。
だが、結果は負けだった。悔しかった。同時に別の感情が芽生えた。
それがなんなのかわからない。ただ、最後の一撃を受けたときに、一瞬だけ思った。

この男が欲しい・・・

私がそう思ったと同時に、意識を失った。
その後は何かに抱きかかえられる感じがした。
それはとても心地よく、ずっとそうしてもらいたいほどだった。

「ん・・。」

いつの間にか意識が戻っていた。ここはどこだろう？
どうやら自分は布団に寝かされているようだ。誰が寝かせたのだろうか？

「目が覚めたか？」

そう思っていたら、目の前に男が立っていた・・・・。

ーーーーSide壊ーーーー

「目が覚めたか？」

俺は目が覚めたであろうルーミアの所へ向かい、話しかける。エプロン姿で。

「・・・ここはどこ？」
「知らん。どこかの小屋だ。」

何故かジト目で俺に聞いてくるルーミア。・・・おい、涎を拭け。
俺はエプロンの端で涎を拭いてやる。

「んぎゅ・・・。何するのよ？」
「口から出ていたものを拭いた。それだけだが？」

そう言いながら俺は出来上がった味噌汁と炊き上がった米をお椀に

よそう。
それと、一号が持ってきた肉と小屋にあった野菜で作った野菜炒めを皿に乗せる。各3つずつだ。
何故かって?それはな・・・

「おい、紫、出て来い。」
「あら、やっぱり気づいていたの?」

そう言いながら俺の真上にスキマを開いて出てくる紫。そしてそのまま俺に向かって落ちてきた。
俺はそれをキャッチ。ナイスだ、俺。

「危ないな。」
「たまにはいいでしょう?」

俺は紫を降ろして朝食を配る。配るったら配る。
配り終えると食事開始だ。ちゃんと「いただきます」は言ったぞ?

「で、どういうことかしら?これは?」
「・・・何がだ?」
「何がだ?じゃないわよ。どうして私を助けたのか聞いてるのよ。」
「あぁ、それか。まぁ、理由は「どうせ将来に期待して、とかでしょう?」・・紫の言うとおりだ。」

俺がそう言うと、ポカーンという表情をするルーミア。

「うふふ・・あはははは!あなたみたいな男初めてよ!決めた、私あなたに付いて行くわ。」

そんなことを言いながら笑っているルーミア。

「まぁ、それは構わんがな。俺の名前は紅鎖華　壊だ。」
「えぇ、よろしく。壊って呼ばせてもらうわよ。私はルーミア。」

そう言いながらも、箸を進める俺たち。
ちなみに、紫はすでに野菜炒めを食べ終わり、俺のを狙っていた。
仕方ないので俺のも上げる事にした。
そんな感じで朝食が終わった・・・・

「さて、行くか。」

俺はそう言いながら立ち上がる。あのあと、ルーミアと色々話をしていた。
紫はすでに帰った。

「わかったわ。行きましょう。」

ルーミアも立ち上がる。そのまま小屋を出ようとしたが・・

「・・・ルーミア、これはなんだ?」
「・・ごめんなさい。これたぶん私のせいだわ・・。」

小屋をで出た途端にそういう会話をした。目の前には妖怪妖怪妖怪・・

お前らなんだ?隣の晩御飯か?ふざけんな、他所でやれ。
そんな事を考えていると、一番前のやつが俺に襲い掛かった。
俺はそいつに上段蹴りをかます。仕方ない・・

「とりあえず、片付けるか。」
「そうね。」

そう言いながら俺たちは妖怪集団に突っ込んだ。
ルーミアといればそこまで退屈しなさそうだ・・・・。

第３４話：旅の道連れ（後書き）

そんな訳でルーミアが仲間になりました。
そろそろ番外編でも書こうかなって思ってるんですよ。
友人Ａとかあれ以来ほとんど出てないですし・・。
まぁ、これは読者の意見で決めます。

第３５話：本当におかしいのは誰？（前書き）

今回はほとんど戦闘シーンがありません。

第35話：本当におかしいのは誰？

俺は今、ものすごい疲れてる。主に精神面で。
確かにルーミアとの旅は、妖怪が襲ってくる回数が多くなって退屈しのぎにはなる。
しかし、本気で戦えないのだ。まぁ、ぶっちゃけ、クックルになれないのだ。
久しぶりに本気で戦いたい・・・。

「壊、どうかしたの？何時にも増して変じゃない？」
「あぁ・・・、なんでもない・・・。」
「・・本当に大丈夫？」

ルーミアはそう言い、俺の顔を覗き込む。
ちなみに、ルーミアと旅をしてから大体2週間たった。
それぐらいすると以前よりも砕けた話し方になってくれて、俺としては非常に助かった。

「問題ない・・・。ただ、少し疲れただけだ・・。」

俺はそう言いながら手をヒラヒラと振る。
あぁ・・・本気で戦いたい・・・。
紫に頼むか？いやだめだ。まだ弱い・・・。ルーミアも大して変わらないしな・・。

「壊、もう暗くなってきたから休まない？」
「ん・・？あぁ、そうだな。今日は野宿だ。少し待ってろ・・。」

俺はそう言いながら能力で毎度お馴染みのテントを創る。

そして一号に頼んで獲ってきてもらった猪っぽい動物の肉を味付けし、
焚き火で焼いて食べる。・・うん、美味い。

「ねぇ、壊。本当に元気がないわよ？大丈夫なの？」

そう言いながら向かい側に座っていたルーミアが俺に近寄って来る。
俺は近寄ってきたルーミアの頭に手を乗せる。

「大丈夫だ。問題ない。だから気にするな。」

ルーミアの頭を優しく撫でる。・・・何か俯いてる。そんなに嫌だったか？
俺は手を頭から退かし、ルーミアに元の場所に戻るように言った。
そして再び肉を
食べた・・・

「・・・ん？」

肉を食べてテントで寝ていたら目が覚めた。なぜかって？妖力を感じたからだ。
しかも間違いなく上級妖怪だ。・・・５匹か？
これはめずらしいな。上級妖怪が群れているなんて。

あいつらは大抵自分の縄張りのようなものをもって、
下級妖怪などのリーダーをやっているのにな。まぁ、いい。

「久々に本気で戦えそうだ・・・。」

俺は横に寝ているルーミアを起こさないように起き上がる。念のために、一号に
ルーミアが起きた時はなんとかするように伝えた。
そして妖力が感じられるほうへと進んだ・・・

俺はあの後、しばらく進んでいるとやっと五匹の妖怪を見つけた。
なるほど、近くまでくるとよくわかる。中々の妖力だ。
さて・・・

「こんな夜遅くまで何をやっているんだ?」
「!?・・誰だ?」

五匹のうち一匹が冷静に話しかけてきた。

「なに、通りすがりの一般人だ。それより・・・。」

俺はそう言いながら腕輪を外す。

「・・俺の退屈しのぎになってはくれないだろうか？」
「「！！？」」

そしてその場でクックルになり、全力で力を出した。
ちなみに、わかっているとは思うが、腕輪を付けている間はクックルにはなれない。
妖怪たちが立ち上がり、素早く身構える。なるほど、それなりの修羅場はくぐっているらしいな。

「貴様はなんだ！」
「・・・さっきも言っただろう？通りすがりの一般人だってな・・。」

さぁ、始めようか・・・。

「・・・意外と呆気なかったな。」

俺はそう言いながら右手に持っている妖怪の首を投げ捨てる。
すぐに戦いが終わってしまった。あぁ、つまらない。
改めて自分の周りを見てみた。近くにあった木は全て倒れ、
植物は何故か枯れていた。俺の力に中てられたのだろう。
目の前に転がっている妖怪の死骸はほとんどが原型を留めておらず、
さっき俺が投げた首なしの妖怪が一番まともだった事がわかる。
俺はゲートを召喚し、妖怪の死骸を吸い込ませる。
そして吸い込ませ終わると、ゲートを石に戻す。

「・・・本当に呆気なかったな・・・。」

誰にも聞こえない声でそう呟く。あぁ・・実に弱い。
そして、やはり自分は化け物なんだと改めて認識した

「クク・・・。」

それがなんだか、とてもおかしく感じてしまい、つい笑い出す。

「クククク・・・。」

あぁ、そうか。他のやつがおかしいんじゃないんだ。
どいつもコイツも大抵はまともなんだ。じゃあおかしいのは・・

「クハハハハハハッ！」

――俺がおかしいんだな――

ある日、ある森の上級妖怪たちがやられた。その妖怪たちは五匹おり、
全てが強大な力を持っていた。しかし、その妖怪たちは一夜でいなくなった。
その妖怪たちはどこに行ったのか？それぞれが疑問を持ち、探したが結局は見つからなかった・・

第３５話：本当におかしいのは誰？（後書き）

はい、終わり。少し無理やりですけど、
壊が笑いました。おめでとう！・・・まぁ、主に負の方向でですけどね。
次回はどうしようかな・・・。

第３６話：凶鳥が語る（前書き）

まぁ、壊が旅の動機について少し語ります。

第３６話：凶鳥が語る

「ルーミアは・・まだ寝てるか・・。」

結局、テントに帰ったのは夜が明けてからだった。
なんでそんなに遅いのかって?道に迷ったからだ。
とりあえず、帰って来てすぐルーミアが起きない内に水で体に付いた血を洗い、
朝食の準備をしておいた。

「ルーミア、起きろ。飯だ。それと一号、お前もいい加減起きろ。」

俺はルーミアと一号を起こす。ちなみに、一号は眠っているときは目を閉じている。

「・・壊・・・おはよう・・。」
「おはよう、ルーミア。一号もおはようだ。」

起き上がって目をゴシゴシやっているルーミアと微妙に半目の一号に挨拶をする。

「もう朝食の準備は終わった。すぐに来い。」

俺はそう言いながらテントから出た・・・

ーーーSideルーミアーーーー

壊が昨日よりも元気になっていた。
自分のことじゃないのに何故か嬉しい。
ただ、壊の身体から少しだけ血の匂いがしていた。そしてわずかにだが
他の妖怪の妖力も感じられた。壊は何をしてきたのだろうか？

「・・・後で聞いてみよう。」

私はそう思いながら、意識を無理やり覚醒させて、壊の人形の一号とテントというものから出た・・

ーーーSide壊ーーーー

俺は朝食をルーミアに渡す。ちなみに、今日はお粥だ。
受け取ったルーミアはそれを食べる。自分の分をお椀についで、俺も食う。
・・・うん、まぁそこそこだな。

「ねぇ、壊。何かいい事でもあったの？」
「・・なんだ、いきなり。」
「いや、だって昨日よりも調子良いみたいだし、何かあったのかと思ったのよ。」
「・・まぁ、良いことはあったぞ。」

意外と鋭いな。いや、俺がわかりやすいのか？
まぁ、久々に本気で戦えたからな。気分もよくなる。

（※壊は昨日、自分が笑った事をなぜか忘れています。）

「へ～、何があったの？」
「まぁ・・秘密だ。別に知る必要もないしな。」
「・・・ケチね。」

そう言い。再びお粥を口に運ぶルーミア。俺も再び口に運ぶ。
・・・やっぱり塩加減薄かったかな・・。

「さて、行くか。」
「そうね。行きましょう。」

食べ終わった後に、お椀を消し、火を消す。ちゃんと消さないと木に燃え移るからな。
立ち上がった俺たちはそのまま歩き出す。
しばらく歩いていると、ルーミアが話しかけてきた。

「ねぇ、壊。あなたの旅って、何か目的でもある？」
「目的？そんなものはないぞ。」
「じゃあなんで旅なんかしてるのよ。」
「・・暇だったからだな。」
「・・・暇だった？」
「あぁ、俺は前にある神社に住んでいてな。いつも何事もなく暮ら

していたんだ。」

まぁ、戦争とかもあったけど、この辺は別にいいだろう。

「暇つぶしになったのは、その辺の迷い込んだ妖怪を潰したりすることくらいだった。

戦っている間はいい。何もかも忘れる事が出来る。

でもな、それが終わると、とてつもない虚無感に襲われる。

幾百の生き物の血を浴びても、幾千の者の命を奪っても同じだ。さらに大きい虚無感に襲われる。

だったら旅でもして退屈しのぎでもしようと思ってな。そうすれば少しは紛れると思った。」

俺の中の何かがどうしようもなく渇く。それは戦いで敵の血を浴びれば浴びるほど増す。

しかし、戦えば戦うほど虚無感も増していく。

・・・そういえば諏訪子と神奈子は元気だろうか？数百年ほど会っていないな・・。

「・・・壊、あなたは今までどうやって生きてきたの？」

「なんだ、急に。さっきも言っただろう。神社で暮らしていた。」

「その前よ。まさかずっと神社で暮らしてたわけじゃないでしょ？」

あぁ、そう言う事か。神社に暮らす前は・・・・

「寝てたな。」

「は？」

「いや、寝てた。洞窟の中でな。」

「・・ずっと？」

「ずっとだ。」

まぁ、その前は永淋と一緒に暮らしていたが、別に言う必要もないだろう。
何よりも、自分が４０００年近く生きているなんて信じないだろうしな。

「・・・まぁ、いいわ。あなたのことが少し分かったしね・・。」

そう言いながら、ルーミアは「ふふふ」と笑う。
何かいいことでもあったのだろうか？

「さて、いつまでも話してないで進むぞ。こんな速さじゃすぐに暗くなる。」
「そうね。」

そう言って、俺たちは少し速く歩いた・・・

彼は語った。自らの旅の動機を。

彼は思い出す。自分の出会った者たちを。

彼は『凶鳥』。全てを破壊し、絶望を与え、否定される存在。

凶鳥は今日も何かを壊す。それが彼という存在だから・・・

第３６話：凶鳥が語る（後書き）

最後のは、意味が分からないとは思いますが、
そのうちそれっぽい話を書きますので、それで分かると思います。

第３７話：思い立ったが吉日（前書き）

今回はルーミアが出てきません。
と、いうかしばらく出てきません。

第37話：思い立ったが吉日

ルーミアと旅をしてからもう1ヶ月近くたった。さて、ここで皆に聞いて欲しい。
俺は旅をしてから諏訪子と神奈子に会っていない。よって会いに行く事にする。
ちなみに、ルーミアは一週間くらいどこかで修行に行くらしい。だから連れて行く必要もない。

「さて、行くか。ゲート。」

俺はそう言い、ゲートを出す。色は黒から藍色に変えた。
ゲートに行き先を告げ、口の中に入る。あとは勝手に連れて行ってくれるだろう。

で、目的地に到着だ。懐かしいな・・・。

俺はとりあえず、鳥居をくぐり中に入る。ん?あれは巫女か何かか?

「すまない、少し聞きたいんだが・・。」

俺が話しかけると巫女っぽいのは少し驚きながらも返事をしてくれた。

「君はこの神社の巫女か?神力を持っているようだが・・。」

「あ、微妙に違います。私は巫女ではありません。それよりも、神社に何か用ですか?」

・・・何かはぐらかされた気がしないでもないな。まぁ、いい。

・・・そうだな、普通に会いにいってもつまらない。

「そうだ・・・すまないが少しだけ頼みがあるのだが・・。」

ーーーー諏訪子ーーーー

「神奈子〜、暇〜。」

わたしはそう言いながらゴロゴロと転がりまわる。

「あのねぇ、暇なら信者の願いでも叶えてきなよ。」

「だって今日は神奈子の仕事でしょ？」

「そうだけど・・・。」

壊がいなくなってから３５０年くらいたった。最初はすぐに会いに来てくれると思ったけど、

まったく会いに来てくれない。そもそも連絡さえ取れない。

「壊、何してるかな・・・。」

「まぁ、あいつなら死んだりはしてないと思うよ？」

「それはそうですよ。」

「そうだね・・・。ん？」

いま何かおかしくなかっただろうか？

そんなことを考えていると、いつの間にか横にアマテラスが居た。

「なにしてるの。」

「暇だから来ました。」

「・・アマテラス、あんた仕事はどうした？」

神奈子が呆れながら言う。

アマテラスは壊が旅に出てからちょくちょく遊びに来るようになった。

「まぁ、いいけどね。どうせわたしも神奈子も暇なんだし。」

「いや、まぁそうなんだけどさ。信者の願いを聞いたりするからそこまで暇じゃないぞ？」

「今日は来てないでしょう。」
「貴方たちは本当に仲がいいですね。」

そう言いながらクスクス笑うアマテラス。
・・ん？

「神奈子・・・。」
「わかってる。」

神社の前にやけに強大な妖力が感じられる。

「これは中々すごい妖力ですね。」

そう言いながら笑うのをやめるアマテラス。
あの子の霊力が感じられないけど、たぶん買出しか何かに行ったのだろう。
（※あの子とは巫女っぽい人のことです）

「・・・行こっか。」
「そうだな。」
「ええ。」

そう言いながら、妖力の強いところへ向かうわたしたち。
妖力は鳥居のあたりから感じられる。
そこへ行くと、顔をおかしな仮面で隠している男の妖怪？が居た。

「・・・お前は誰だ？ここがわたしたちの神社だと知って入り込んだのか？」

わたしは神力を出してそう言う。

神奈子とアマテラスも殺気と神力を出している。

「・・・知っているさ。だから来たんだ。」

妖怪はそう言いながら大きな鎌を取り出す。・・そっちがその気なら・・。

わたしは鉄の輪を取り出す。神奈子は御柱をいくつか構え、アマテラスは短刀を逆手に持つ。

妖怪は大鎌を背中から両脇に挟むように構える。

手がブラブラしていて、ほとんど使い物になっていない。あれじゃ使いずらいと思う。

そう思っていると、妖怪は大鎌が落ちないように肘を曲げる。

「・・・始めようか・・・、死の洗礼を・・。」

妖怪はそう言いながらさっきよりも妖力を出す。

「・・行くぞ!」

殺気を出し、さらに神力を出す。

わたしたちはそのまま妖怪に向かって走った。

ーーーーSide壊ーーーー

俺は今、神社の鳥居にいる。巫女っぽいのは少しの間だけ神社を離れるように頼んだ。

ちなみに、今の俺は道化師が着けるような仮面。具体的には目のところに穴が開いていて、

口のところは三日月のようになっている。そしてその口は赤で塗られている。

服装は執事服に似たようなものを着ていて、首に着けているのはリボンではなく、ネクタイだ。
ついでに帽子も被っている。１３日の金曜日の人が被っているような奴だ。あれはなんというのだろうか？
俺は鳥居の下で、諏訪子たちが気づくくらいの妖力を出す。なぜ妖力しか出さないかって？
神に逆らう妖怪というのをやりたかったからだ。つまりは何となくだ。
そんな事を考えていると、諏訪子たちがやって来た。・・・おい、なぜアマテラスがいるんだ？

「・・・お前は誰だ？ここがわたしたちの神社だと知って入り込んだのか？」

諏訪子が神力と威厳をだして聞いてくる。
おい、なんで他のやつらは殺気も一緒に出してるんだ？
まぁ、いいか。

「・・・知っているさ。だから来たんだ。」

俺はそう言いながら大鎌を創り、両脇に通す。そして落ちないように肘を曲げる。
昔やったアドベンチャーゲームの道化師のような敵役がやっていた構えだ。
結構使えるんだぞ。これ。
俺が構えると、諏訪子は鉄の輪を出し、神奈子は御柱をいくつか浮べる。
アマテラスは短刀を逆手に持って構えている。・・・そう言えば諏訪子の鉄の輪は
神奈子のせいで錆びたんだったな。

まぁ、いいや。

「・・・始めようか・・・・、死の洗礼を・・・。」

俺はそう言いながら、妖力をさらに出す。諏訪子たちは一瞬だけ驚いたが
すぐに俺を睨みつけて、殺気と神力をさらに出してきた。・・中々だな。

「・・・行くぞ!」

そう言いながら諏訪子たちはこちらに向かって走ってきた。
さて・・・・

三人もいるんだから負けるなよ?

第３７話：思い立ったが吉日（後書き）

そんなわけで諏訪子と神奈子にアマテラスです。
アマテラスをだしたのはなんとなくです。
それと、壊の格好についてですが、ほとんどは脳内で考えたことなので、
あまり期待とかしないで下さい。
１３日の金曜日の人の被ってる帽子ってなんていうんだろうなぁ・・・

・

第３８話：三神ｖｓ凶鳥（変装）（前書き）

今回は勝ちません。でも負けません。

第３８話：三神ｖｓ凶鳥（変装）

「まずは小手調べだ。」

俺はそう言いながら、相手に向かって走る。もちろん、構えは変えていない。
奇妙な構えのまま、俺は大鎌の刃を諏訪子に向ける。諏訪子は鉄の輪で受け止めた。
そして後ろからアマテラスが短刀で切り付けようとする。・・ただの短刀だな。それなら・・

「せめて神力を込めるんだな。」
「なっ！？」

俺は靴の底に妖力を込めてアマテラスの短刀を止める。まぁ、ちょろいな。
そのままもう片方の足を軸にして回転する。すると二人はバランスを崩した。
俺はさらに追い討ちを掛けようとしたが神奈子が御柱をブン投げてきたので、
ジャンプしてその場から離れる。・・・諏訪子たちの手前に落ちたみたいだな。

「・・・三人もいてその程度か？情けないな。」
「うるさい！食らえ！」

俺が挑発すると諏訪子は何かモヤモヤした黒い霧を出してきた。・・
なんだ、アレ？
向かってきた黒い霧を手で払う。

「!?・・・なるほど・・。これは・・。」

諏訪子は勝ち誇った顔をしている。あいつめ、ミジャクジの祟りを飛ばしてきたんだな?

身体に力が入らない。・・・少しマズイな・・・。

そんな事を思っていると諏訪子と神奈子が鉄の輪と御柱を投げてくる。

二人とも勝ち誇ったような顔をしている。やれやれ・・・、もう忘れたか。

俺は大鎌をさらに五つ創造し、御柱と鉄の輪に投げる。ただの大鎌ではない。

投げる事を目的としたから、ブーメランのように曲がっている。そしておまけ付きだ。

それが鉄の輪と御柱に当る。その途端、大鎌が爆発した。大鎌に大量の妖力を込めて

何かに当ると爆発するようにした。向こうは爆発の煙でよく見えないだろう。

だがしかし、俺は違う。見えなくても殺気と神力をビシビシと感じれるからな。

しかも、この煙自体にも妖力が込められており、そう簡単には晴れない。

「さて・・・、俺の攻撃にどれだけ耐えられるかな・・・。」

さぁ・・・・、始めようか・・・・・。

ーーーSide諏訪子ーーー

「く・・!」

男が投げてきたおかしな大鎌が爆発したせいで前が見えない。
アマテラスと神奈子は無事だろうか?

「神奈子・・・、アマテラス・・・。」
「他人の心配なんてしている場合じゃないだろう?」
「なッ・・?!」

声のしたほうを振り向いた途端、頬に痛みが走った。
手で触ってみると、そこから血が少し出ていた。

「出て来い!卑怯だぞ!」
「卑怯?戦いに卑怯なんぞあるか。だいたい、そちらは三人もいるんだぞ?」

いや、まぁそうなんだけどね?ホラ、女の子には優しくしなきゃ駄目じゃん?

「どうした?攻めてこないならこちらから行くぞ?」

そう言われたと同時に右腕に掠り傷が出来た。煙のせいで視界が悪い。むしろ見えない。
わたしの身体に次々と掠り傷が出来ていく。おかしい、あちらはいつでもわたしを
殺せるのに、まったくそんな素振りを見せない。・・いや、見えないけど。
手加減してる?でもなんで?

「・・・そろそろ飽きたな。これで終わりにしよう。」

妖怪がそう言ったあとすぐに、わたしの意識が途絶えた・・・

ーーーSide神奈子ーーー

・・おかしい。この煙、まったく晴れる様子がない。

それに諏訪子の神力が少ししか感じれなくなった。

まさか負けたか?いや、それはないと思う。諏訪子の実力は

戦った私がよく知っている。あの程度の妖怪には負けないとは思うが・・

「次は君だ・・・。」

「!?」

不意に後ろから声が聞こえたので振り返る。しかし、誰もいない。

「無駄だよ。君たちには俺は見つけられない。」

「く・・!いいだろう。そちらが姿を見せないのならこちらにも考えがある。」

私はそういい、能力で風を集める。

私の能力は『乾を創造する程度の能力』だ。雨や風などといったものを操る事が出来る。

「ほぅ・・・。」

妖怪が何か感心したような声を出す。私は集めた風をその場で突風にして煙を飛ばした。

「凄いな。まさかこうなるとは思わなかった。」

「ふん、たかが妖怪如きに倒されるほど弱くはない。」

私はそう言い、御柱を作って相手に飛ばす。

妖怪は構えていた奇妙な体勢をやめ、大鎌を上に上げる。

そしてそれを振り下ろした。それだけなのに私の御柱は粉々に砕け散った。

「威力は申し分ないな。さて、一つ教えておいてやろう。まずは後ろにいる味方を助けるんだな。・・・でないと死ぬかもしれないぞ?」

「・・・なに?」

私は自分の後ろを恐る恐る見た。そこには・・・

「諏訪子!!」

諏訪子が体中に傷を負って倒れていた・・・

ーーーーSide壊ーーーー

「諏訪子!!」

神奈子がそう言いながら諏訪子に向かって走る。

そしてしゃがんで抱きかかえた。・・・駄目だな。

「敵に背を向けるなんて駄目じゃないか。」

「なッ！？」

俺は諏訪子を抱きかかえている神奈子の額を人差し指でちょん、と突いてから

後ろに跳んだ。さて・・、まだ試作段階だから上手く調節できるかどうか・・・

「・・何をした？」

「すぐにわかるさ。それと・・・壊れるなよ？」

俺がそう言った途端、神奈子が諏訪子を抱きかかえたままワナワナと震えだした。

そして顔を恐怖に染め始める。・・・成功か。

やった事は、まぁ、幻術を見せている。前に思い付いたのを神奈子に試してみたのだ。

神奈子は何を見ているかな・・・

「いや・・・くるな・・・」

そう言いながら諏訪子を地面に落とす神奈子。・・まぁ、しゃがんでたから

大した高さではないのでそこまで痛くなかっただろう。・・たぶん。

神奈子は立ち上がって後退し始めた。さて、さらに試してみるか。

俺は右手の指をパチンッ、と鳴らす。この幻術は、ある程度操る事も出来る。

「・・！？」

神奈子が下を見てさらに恐怖する。何を見せているかというと、まぁ、ありきたりなやつだ。
亡者の上半身が地面から這い出て、神奈子の足を掴んでいるのだ。
ちなみに、そこらじゅうから出てくるようにした。
そして今度は、神奈子に一瞬で近づき、大鎌でほんの少しだけ腕に傷を付けてやる。俺よりも幻術のほうを気にしてるから、バレナイだろう。

俺はその傷口から「蛆（ウジ）」が湧いてくる幻術を見せる。上乗せ出来るんだから便利だな。
神奈子は俺が傷を付けた場所を一生懸命手で払う。・・・なんか泣き始めた。
そろそろやめるか。
俺は神奈子の首に手刀を入れ、同時に幻術も解いてやる。神奈子はゆっくりと倒れた。
さて・・・

「近づくならもっと早くするんだな。」
「・・・そうですね。次からそうさせていただきます。」

俺の斜め前にアマテラスが現れる。
こいつ、神奈子が俺と戦っている間ずっと隙を窺っていた。

「いい加減にそのお面を取ってくれてもいいんじゃなくて？」
「君が勝てたら取ってあげよう。」
「なら意地でも勝ちます。」

アマテラスはそう言うと、その場から居なくなった。いや、いるのだろうが見えない。

少しだけ厄介だな・・・。とりあえず、相手を捕まえる事が出来れば・・・

「戦いの最中に考え事なんて、随分と余裕ですね！」

アマテラスがそう言った途端、俺の左腕が切り落とされた。・・・容赦ねぇ・・。

俺は切られた部分に手を当て、妖力を込める。すると新しい腕がメキメキという感じに生えてきた。

自然に生えてくるのを待つのもいいが、なるべく早く元に戻って欲しいからな。

「痛いな。少しは手加減をしてくれないか？」

「すぐに元に戻るなら大丈夫でしょう？ねぇ、御二人とも。」

アマテラスがそう言うと、倒れてた二人が起き上がった。諏訪子は別になんともなさそうだが、

神奈子が上目遣いで睨んでいる。しかも若干涙が出ていた。

「・・・・まぁ、いいさ。どうせ・・・」

俺は大鎌の刃を一つから三つに変える。まぁ、鎌自体はあんまり変わってないがな。

「・・すぐに終わるからな・・。」

そう言いながらアマテラスに向かって走る。アマテラスは短刀を俺に向かって投げる。

俺はそれを空いている左手で文字通り弾く。そしてアマテラスに攻撃しようとしたが・・

「・・いない？」

アマテラスが消えた。能力か・・。
仕方ないのでアマテラスの攻撃を警戒しつつも諏訪子たちに向かう。
諏訪子は鉄の輪を投げながら、能力で地面を揺れさせて俺のバランスを崩す。
そして神奈子は何故か今までのよりも何倍も大きい御柱を俺に向かって落とす。
俺は大鎌を思いっきり振り回し、鉄の輪を弾き、落ちてくる御柱を攻撃した。
が、御柱は壊れずに俺に当った。

「ぐ・・」

俺に当った御柱は骨を砕き、大鎌を砕いた。俺は無理やり立ち上がり、
神奈子に反撃しようとしたが、神奈子も諏訪子も居なくなっていた。
どこだ・・？

「ここだよ！」
「なッ・・！？」

諏訪子たち三人が俺の後ろから現れて、飛び掛ってきた。クソ！アマテラスの能力か！
俺は諏訪子の鉄の輪で腕を両方とも切り落とされ、神奈子の御柱を腹にぶつけられた。
そしてアマテラスが止めとばかりに俺の胸に短刀を突き刺す。・・・
予備あったのか。

「・・どうだ・・？」

諏訪子がそう呟く。・・・残念だなぁ・・まだ負けんよ。
俺は無理やり妖力で腕を元に戻し、御柱を砕き、アマテラスの手首を掴んで短刀を抜く。
（戻したばかりだと上手く動かない）
そしてアマテラスを諏訪子たちに向かって投げる。
さて・・

「まぁ、合格だな。」
「「は？」」

俺の言葉に三人が同じ反応をした。

「合格だといったんだ。しばらく会っていなかったが、そこまで弱くなっていないみたいだな。」
「いや、あんた誰さ？」
「・・・なんだ、まだわからんのか。仕方ない・・・」

俺は仮面をゆっくりと外す。そして・・・

「ただいまだ。」

ーーーーSide諏訪子ーーーー

妖怪がゆっくりと面を外した。
わたしはその顔を見て、一瞬だけ混乱した。
え？なんでここにいるの？なんでさっきまで戦ってたの？
混乱しているわたしを気にしないように、「男」はゆっくりと言った。

「ただいまだ。」

男がそう言った途端、わたしは男に跳びついた。
そして男に向かってこう言った。

「・・・おかえり、壊・・・。」

ーーーーSide壊ーーーー

「まぁ、そんなわけだ。」

俺は神社の中で三人に今回やったことの説明をした。
諏訪子は俺の膝の上に座り、神奈子は俺と向かい合うように座っている。
そしてアマテラスは何故か俺の背中から抱きついてる。・・離れろ。
暑苦しい。
ちなみに、服はいつものやつに着替えた。

「・・で、それで私にあんなものを見せたわけだな？」
「なんだ、まだ根に持っているのか？」

俺がそう言うと、そっぽを向く神奈子。俺の使った幻術のことで未だに怒っているらしい。
・・・そんなに怖かったのか？

「まぁ、神奈子のことは後にしよう。二人とも、いい加減離れろ。」
「え～、いいじゃん。久しぶりなんだからさ～。」
「そうですよ。どうせどこも悪くないでしょう？」
「俺はお前らにやられた傷がまだ癒えてないんだ。見ろ、諏訪子が切り落とした腕だって、まだ完全には治ってないんだぞ？」

俺はそう言いながら諏訪子が切った部分を見せる。微妙に線が残っている。

「いや、それくらいなら大丈夫でしょ。」

諏訪子はそう言いながら俺の腕をペチペチと叩く。
そういえば巫女っぽいのはどこにいったんだ？

「みなさ～ん。ご飯ですよ～。」

そう言いながら巫女っぽいのが部屋に入ってくる。その手には晩飯と盆が乗っている。
なるほど。巫女っぽいのが飯を作ってるのか。
俺は巫女っぽいのが作った飯を食べた。そしてその後は風呂に入ってすぐに寝た。
いや、寝ようと思ってた。

「なぜ君たちがいるのかな？」

何故か神三人＋巫女っぽいのがいた。

いや、確かにここは諏訪子たちの神社だ。でもな、ここは本来は俺の部屋なんだぞ？

「いいじゃん、一緒に寝ようよ。」

そう言いながら諏訪子が俺のために敷いてある布団をボフボフと叩く。

まぁ、いいか。

俺はそう思い、自分の布団に潜り込む。そして眠った・・・

「ねぇ、壊は旅でどんなことしてたの？」

「それは私も気になるね。」

・・・寝かせろよ。

俺は結局、旅の話を聞かせて４人が寝た後にやっと眠れた。

第３８話：三神ｖｓ凶鳥（変装）（後書き）

はい、微妙にハレームですね。
アマテラスは積極的です。設定上は恥ずかしがりやなんです。

第３９話：平穏な日常（前書き）

今回は中途半端に終わります

第３９話：平穏な日常

まだ目を閉じている俺は自分の身体に違和感を感じた。胸が苦しい。
さらに言うと、両腕が動かない。右腕を動かしてみるが、動かそうとすればするほど、
何かが強く締め付けてくる。さらに言うと、俺の寝間着が少しべっとりとしている。
俺はゆっくりと目を開けた。そこには・・・

「・・・何をやっているのだか・・。」

諏訪子が俺の上で寝ていた。ご丁寧に涎を垂らしながらだ。
そして腕を見ると、左にアマテラス、右に神奈子がしがみ付いていた。
・・なんでそんなに幸せそうな顔をしているんだ？

「さて・・・どうするか・・。」

さすがにこんな顔をしている三人を起こすのも気が引ける。かと言って、このまま
諏訪子に寝間着を涎だらけにされるのも困る。・・・あれ、巫女っぽいのは何処に行ったんだ？
そんなことを考えながらも、俺は三人が起きるまで待った・・・

「あはは～・・・ごめん。」

諏訪子が俺に謝る。

結局、あの後三人が起きたのは３０分ほど経ってからだった。

そのせいで俺の寝間着は諏訪子によってベトベトにされてしまった。

「・・・次からは気をつけろよ？特に諏訪子。」

「あ～う～・・・。」

俺がそう言うと、諏訪子がかなり落ち込む。

神奈子は顔を真っ赤にして、アマテラスは若干顔を赤くするが、どこか嬉しそうだ。

そもそもどうやったら俺の上に寝れるんだ？そんなに寝相が悪いのか？

「まぁ、いいさ。それより飯だ。」

俺がそう言うと、一号が朝食を運んでくる。巫女っぽいのは自分の家に戻ったらしい。

てっきりここに住んでいるのかと思った。まぁ、一応料理に使う材料はあったので、俺が作った。

一号はお椀と皿を並べる。・・・一号のほかにも、家事ができる奴を創ろう。

俺はそう思いながらも、箸を持ち、食べ始める。ちなみに、諏訪子は既に新しいご飯を要求していた。おかわりだ。

早いな・・・。ん？

「諏訪子、こちらを向け。」
「ん？なに？」

俺は諏訪子の口元に付いていたご飯粒を取る。

「よし、いいぞ。」
「え？・・あ、ありがとう。」

そう言いながら顔を赤くする諏訪子。・・どうかしたのか？
なんかチマチマと食べ始めた。他の二人を見ると、「やれやれ」みたいな顔をしている。
なんなんだ・・・。
俺は疑問に思いながらも、全て平らげた。ちなみに食べ終わった後の「ごちそうさま」は
忘れない。
一号と一緒に皿を洗い終えたあと、縁側でまたったりと茶を啜る。・・・ふぃ～。

「なんか年寄りくさいね。」
「実際そうだからな。」

何故か蛙跳びで俺のところへやってきた諏訪子にそう答える。

「他の二人はどうした？」
「アマテラスは帰ったよ。神奈子は昼寝してる。」
「・・・情けない神だな・・・。」

俺がそう言うと、少し苦笑いする諏訪子。

そして俺の横に座った。俺は黙って能力で創った湯のみに、茶を注いでやる。
諏訪子はそれを受け取ると、ズズー、と音を発てて飲んだ。そして湯のみを置く。
しばらく何も話さずに静寂が続いていたが・・

「ねぇ、壊。」

諏訪子が俺の名前を呼んだ。しかも、若干声が震えていた。
顔を赤くし、両手の人差し指でツンツンとやっている。

「わたしね・・・、壊のことが・「抜駆けは許しませんよ?」

諏訪子が何かを言おうとしたとき、どこからかアマテラスの声が聞こえた。

「・・・アマテラス、出てきてもらおうか。」
「はいはい・・。」

俺がそう言うと、投げやりな声で返事をし、アマテラスが出てくる。
いや、そもそも帰ったんじゃなかったのか?

「で、なぜ君がここにいるのかな?」
「あなたに会いに来ました。」

そう言いながら、俺に真正面から抱きついてくるアマテラス。・・・苦しい。
俺に抱きつくアマテラスを、諏訪子がなんとか引き離す。気のせいか、諏訪子の目の端に涙が溜まっている。

「むぅ～・・・、なんで来たのさ・・。」

そう言いながら、後ろを向いてしまう諏訪子。まぁ、なんだ。何があったのかわからんが、ドンマイ。いつかイイコトあるさ。俺は諏訪子の帽子を取り、頭を撫でてやる。

すると諏訪子はこちらに向き、ニコニコとした表情になった。・・・機嫌直るの早いな。

アマテラスから「単純・・・」という声が聞こえたが、気にしないでおこう。

「さて、昼飯にしよう。諏訪子、神奈子を起こしてきてくれ。」

「うん！」

元気一杯に返事をして、その場からトテトテと去っていく諏訪子。

とりあえず、準備だけでもしておくか・・・。

「・・・アマテラス、君は一体何がしたいんだ？」

なぜかアマテラスが俺に後ろから抱き付いてくる。・・・てか顔近い。

「ふふう・・・、嫌ですか？」

「あぁ、暑苦しい。」

俺がそう言うと、残念そうな顔をしながら離れるアマテラス。

大体、今から昼食の準備をするのにアマテラスなんかに構っていられない。

「君の分も用意しておくから、早く行け。」

「・・・それじゃあご馳走になります。」

そう言いながら。消えるアマテラス。・・・普通に行けよ。

「・・・ここもある意味では飽きないな・・・。」

俺はそう呟きながら昼食の準備をすることにした。

「こら、諏訪子。そんなにいそいで食べるな。」

俺は諏訪子にそう言う。前にも急いで食べて喉に詰まらせた事があった。

その時は、俺が諏訪子の背中を思いっきり叩いてやった。

俺は諏訪子にそう言いながらも、自分の分を口に運ぶ。・・・まぁ、今回は普通だな。

「壊、あんた本当に料理を創るのが上手いね・・・。」

そう言いながら、神奈子がナスの漬物を口に運ぶ。一瞬、共食いと思った俺は

間違っていないはずだ。

「・・・今すごく失礼なことを考えただろう?」

「気のせいだ。」

俺は誤魔化すように米を口にかっ込む。
すると、不意に口の横に柔らかい感触が・・・。
そちらのほうを向くと、アマテラスが米粒を指に付けていた。
そしてそれを自分の口に入れた。

「ふふふ・・、ご馳走様です。」

・・・俺の口に付いてたやつか？
何故か神奈子と諏訪子が顔を真っ赤にしながらアマテラスを睨んでいる。
そして諏訪子が鉄の輪を取り出し、神奈子が御柱を構えた。
アマテラスは勝ち誇ったような顔をして、短刀を取り出した。
そして三人が一瞬で外に向かって走った。・・・まぁ・・・

「ここもある意味ではあきないな・・・。」

俺はそう思いながら、何故か戦い始めた三人を止めに行った・・・

第３９話：平穏な日常（後書き）

はい、終わりました。
それと、更新が遅れてしまい、誠に申し訳ありません。
次からはもう少しだけ早くします

第４０話：新しい使い魔。もとい式神（前書き）

新しい使い魔、もとい式神。・・ちゃんとした呼び方を考えたほうがいいかな・・・。

第４０話：新しい使い魔。もとい式神

俺は今、神社の縁側で新しい仲間を創ろうとしていた。以前にも言ったが、出来れば喋れるやつがいい。
しかし、ゲートや一号のように、またパクリキャラのようなものを出したくはない。
・・・そうだ、今回は話せる話せない関係なしに創ろう。
話せればよし、話せなければ次に別のを創る時に頑張ろう。

「さて、創るか・・・。」

ここで説明しよう。俺の『想像したものを創造する程度の能力』の能力で創ったものは、
大体が二種類あるのだ。まずは、俺が頭でしっかりと想像したものが創造されること。
ちなみに、俺の意思でどこに出すか決めることが出来る。
ただし、俺の目が見える範囲だけだがな。
もう一つは、俺の今まで見てきたものをランダムで合体させて創る事だ。
例えば、刀を創るとして、今まで見た刀の記憶をくっ付けて、より強力な刀を創ったりする。
ただし、これは俺の見てきたもの、それをランダムでくっつけるので、
どんなものが出来るかわからない。前に槍をこれで創ってみたら、やたらめったらデカイのが出来た。
だから、たまに遊び半分で雑魚妖怪に対して使うくらいだ。
ゲートと一号はちゃんと想像して創ったから、今回はランダムにしてみよう。
俺はよくゲームで出てくる、式神や使い魔と言ったものから、ラン

ダムで自分の仲間を創る。
さて、何がでるかな・・・

・・・結果、成功した。
容姿は地面に水溜りのような黒い影のようなものが出来ており、
そこから下半身がほぼないと言ってもいい、人型の何かが生えてきている感じだ。色は黒い。
さらに、下半身は無いくせに、上半身がしっかりとあった。そして、目の部分は赤い丸が二つ付いていた。
まぁ、ここまで容姿を説明しておいてなんだが、
ようは男性のシルエットのようなものだ。とりあえず、色々確認しておくか・・・。

「俺の言葉が分かるか？わかるなら右手を上げろ。」

俺がそう言うと、右手を上げるシルエット。形が不安定だから、たまにグニョっとなったりしている。

「お前は俺が創造した。だから俺の言う事にはある程度従ってもらうぞ。」

俺がそう言うと、頷くシルエット。
そして自分の身体に手を突っ込み、黒い小さなビー玉くらいの玉を渡してきた。

ゲートと同じパターンか・・・。

「・・・ここにお前を仕舞えばいいんだな?」

俺がそう聞くと、コクンと頷くシルエット。しかし、この玉はゲートの石と同じ色なのか・・・。

後でゲートの石の色を変えよう。いや、いっそうの事、ゲートもこんな感じの玉に仕舞おう。

そう思いながらも、俺は玉に力を込め、シルエットを仕舞った。ついでに、

ゲートを召喚し、石の色を変えると言った。さらに、仕舞うための物も別のものにすると言った。

ゲートは特になにも言わず、（そもそも話せない。）目玉を上下に動かした。俺はとりあえず、

能力で藍色のビー玉を創り、そこにゲートを仕舞った。さらに、ビー玉を強化し、簡単に壊れないようにしておく。

さて、とりあえず、新しいやつの力でも見せてもらうとするか・・・。

「いつでもいいよ。」

俺は今回は諏訪子ではなく、神奈子に戦ってもらう事にした。なぜ

神奈子なのかって？
諏訪子が寝ていたからだ。
俺は黒いビー玉を取り出し、シルエットを出す。・・・その内ちゃんとした名前を考えておこう。

「・・・行け。」

俺がそう言うと、シルエットは凄い速さで神奈子に向かって進む。
走るではない、進むだ。まるで氷の上を滑るかのように神奈子に進んでいるのだ。
神奈子はシルエットに向かって毎度お馴染みの御柱を飛ばしてくる。
シルエットは身体を捻る。
そして飛んできた御柱を思いっきり殴った。すると御柱は粉々に砕けた。
・・・パワーもスピードも申し分ないな。
シルエットは、殴った後に、すぐにペシャンコになりながら神奈子に再び向かう。スライムみたいだな。
神奈子は宙に飛んで、シルエットから離れる。
するとシルエットは、神奈子に向かって、文字通り身体を伸ばした。
それはもう、ビョーンと言う効果音が付くのでは？という感じにだ。
シルエットは神奈子の前まで伸びると、身体を思いっきりゴムのように捻る。・・捻りすぎじゃないか？
そのまま両手を広げて、身体を元に戻す。シルエットはまるで扇風機のようにグルグルと回りだした。
広げた手が、神奈子に向かって当る。あれは痛いだろうな。
すると神奈子はそのまま吹っ飛んでしまった・・・そろそろ止めるか。
俺はシルエットに止まるように言うと、神奈子に向かって近づく。
神奈子は地面に仰向けになって倒れていた。・・微妙に埋まってるな。

「さて、どうだった？」
「あぁ、すごく強かったよ。」
「そうか。」

俺はそう言いながら、神奈子に手を貸し、立ち上がらせる。
しかし、神奈子は立たないで座ったままだ。・・・まさか足をやったか？
たぶんそうだろう。俺は神奈子を抱きかかえる。

「ヘッ！？ち、ちょっと壊！！何してるんだ！」
「騒ぐな。」

俺は騒ぐ神奈子に向かってそう言い放つ。ちなみに、お姫さま抱っこと言うやつだ。
あれ、そういえば今日は一号を見てないな。まぁ。いいか。
俺は神奈子を抱きかかえたまま神社の中に入る。とりあえず、治療しないとな。
ちなみに、神奈子は俺に抱きかかえられてる間はずっと赤面していた。・・そんなに嫌だったか？

「さて、終わりだ。」
「あ、あぁ。ありがとう。」

俺は神奈子の足の治療をし終えた。まぁ、包帯を巻いた程度だがな。
何故か神奈子の顔が赤い。・・風邪でも引いたか？

「神奈子、少し頭を近づけろ。」

「・・・？こうか。」

神奈子は俺に向かって頭を近づける。俺は神奈子の額に自分の額を重ねた。

すると神奈子は物凄い勢いで顔を赤くし始めた。・・・む、これは熱いな。

「熱があるようだな。少し寝ろ。」

「へ？うわぁ！」

俺は正座をし、神奈子の頭を無理やり膝に乗せた。膝枕だ。

神奈子は最初こそジタバタと暴れていたが、その内諦めて大人しくなった。

俺は神奈子の頭をゆっくりと撫でる。意外に撫で心地がいいな。しかし、この髪飾りは邪魔だ。

「神奈子、少し髪飾りを外すぞ？」

「・・別に構わない。ただし、後でちゃんと元に戻してよ？」

なんか神奈子の話し方が変わった気がするが気のせいだろう。

俺は神奈子の髪飾りを外した。髪飾りを外した神奈子の髪はそれなりの長さだった。

撫で心地も、さっきより断然いい。俺はしばらく、神奈子の髪を撫でていた・・・

この後、諏訪子がやって来て、俺に向かって鉄の輪を投げてきた時は焦った。

第４０話：新しい使い魔。もとい式神（後書き）

はい、終わりました。今回は新しい式神、シルエットの登場です。
それと、一号とシルエットの名前を募集します。
あと、これら全てをどんな風に呼んだら言いかも出来れば教えてください。ずっと式神や使い魔と言うのもなんだかなぁ、って思うので。

第４１話：夢（前書き）

今回は、壊の口調が変わります。
まぁ、元には戻りますけど。

第４１話：夢

俺の目の前には幼き頃の俺、そして蒼華がいた。・・つまりは夢か・・・。
蒼華は片耳の千切れたウサギの人形で遊び、
俺はそれを少し離れた所から、ただ見つめる。

「凶ちゃんも一緒に遊ぼうよ！」

元気な声で、捨てたはずの名前を呼ばれる。俺は返事をせずに、ゆっくりと蒼華に向かって歩く。
そして蒼華から片耳ウサギの人形を取り上げる。その片耳ウサギの手で蒼華をポカポカと殴る。
中身は綿だから痛くは無い。
蒼華は「アハハ！」と笑いながら別の人形で反撃をしてくる。

「ねぇ、凶ちゃんはわたしと遊んでて楽しい？」
「・・・そこそこ、かな。」
「ぶ～、楽しいって言ってよ～。もう３週間くらい経ってるのにずっと同じ事言ってる！」

そう言いながら、蒼華はそっぽを向く。俺はなんとか機嫌を取ろうとする。
それを見ると、どう見ても仲のいい友達に見えるだろう。実際にその通りだった。
３週間も経つと初めこそはあまり相手にしなかった俺だったが、蒼華がしつこく話しかけたり
遊びに誘ったりするので、それに仕方なく付き合っていたら自分も楽しむようになった。

もともと、俺も蒼華も友人が少ない。いや、この時の俺にはいなかった。

「まぁ、そう言わないでくれないかな？」

俺は蒼華の機嫌を取るようにそう言う。この時の俺は、少し砕けた口調だった。

「だって・・・。「食らえ！ウサギキック」ぐぴゃ！」

俺は回答無用で蒼華の顔に片耳ウサギで蹴りを入れる。蒼華は変な声を上げながら後ろに倒れた。
すると蒼華は起き上がり、反撃とばかりに俺に人形を投げつけてきた。それもたくさん。
しかし、俺は投げられた人形を受け止めて投げる。
俺たちはしばらく、そんな馬鹿みたいな遊びをしていた・・・

「進よ。話がある。」
「なんですか。父さん。」

家に帰った次の日、俺は親父に呼ばれた。
理由は簡単だ。『仲良くなりすぎている』ということだった。
そして、蒼華暗殺の期限を明日までにする、と言う事も言われた。
もちろん、俺は反論した。しかし、親父は「早ければ早いほうがい

い。」
と言い、俺の言葉に耳を傾けなかった。おそらく、親父は俺が何を言おうと聞かないだろう。
そして、この頃の俺はガキでも、この家がどれだけ恐ろしいかわかっていた。
もしも蒼華を殺さなければ、間違いなくこの家の者が俺の代わりに殺しに行くだろう。
そして俺も当主に逆らったとかで殺されるかもしれない。この家はそういう家系だ。殺す相手には容赦せず、逆らう者は身内でも殺す。
俺は最後に、親父を睨みつけながら、その場を後にし、蒼華の所へ向かった・・・

「ねぇ、凶ちゃん。どうしたの？なんだか元気ないよ？」
俺の顔を覗き込むようにして心配する蒼華。
「・・なんでもないよ。さて、今日はなにをする？」
「そう？じゃあね・・・・鬼ごっこ！」
「いや、ここでは無理だろ・・・。」
「え～、じゃあいつもみたいに遊ぶ。」
「まぁ、それが一番だな。」
俺がそう言うと、蒼華は人形を取りに行く。・・・あぁ、もうすぐ終わりだな・・。

俺は考えた。どうすれば蒼華を助けられるか？一つは親父たちに逆らう。
これは無理だ。他の奴ならまだしも、親父が出てきたら終わる。
そもそも、あの家のやつら全員を相手にして勝てるかわからない。
もう一つは蒼華と一緒に逃げる。これも無理だろう。むしろコチラのほうがリスクが高い。
間違いなく、蒼華の父親が絡むはずだ。

「凶ちゃん、お人形さんいっぱい持ってきたよ！」

蒼華を助ける方法について考えていると、笑顔で人形をたくさん抱えた蒼華がやってきた。
はぁ・・・、人が心配してやってんのに・・・。
俺は心で苦笑いしながらも、蒼華と人形で遊ぶことにした。

「失礼するよ。」

しばらく蒼華と遊んでいると、蒼華の父である岸島　灰が部屋に入ってきた。

「進くん、少し話がしたいんだ。来てくれないかね？」
「・・わかりました。蒼華、少し待ってるんだぞ？」
「え～・・・、早く帰ってきてね。」

俺は蒼華に返事をし、灰の後を付いていく。
そして一つの部屋に案内された。そこは殺風景な部屋だった。
俺はそこのソファーに腰掛けるように言われた。・・・周りのガードマンみたいなやつらが気になる。

「君たち、少し出て行ってくれたまえ。」

灰がそう言うと、ガードマンみたいなのは全員出て行く。気を遣ってくれたらしい。

「さて、進くん。君が来てからもう3週間は経った。契約上は、1ヶ月だけとなっている。
しかし、蒼華は君がとても気に入っている。」
「・・そうですか。」
「今まで蒼華の遊び相手を務めた者たちは皆死んでしまった。」
「・・なぜですか？」
「君は知らないかもしれないが、蒼華は特殊な能力を持っている。
それは魔法のようなものだ。私がそれに気付いた時、私は心の底から欲望が湧いてきた。
それは蒼華を兵器にしようとすることだ。」

俺は灰の言っていることを黙って聞く。

「私は蒼華を強化することから始めた。本来やってはいけないと言われている
人体実験を繰り返し、一つの石を完成させた。私はそれを『魔法石』と呼ぶことにした。
そして私はそれを蒼華の胸に埋め込み、蒼華の魔法を強化した。」

灰は少し疲れたように溜息をついた。

「しかし、それは大きな間違いだった。蒼華は時々、心が不安定になり、
魔法で私の雇った遊び相手を殺してしまった。
蒼華の魔法は非常に強力で、それこそ塵も残さず相手を殺す事が出来た。
私は蒼華の心が不安定にならない策を考えた。しかし、それは思いつかなかったのだ。」

俺は口を挟まずに黙って聞く。それが一番いいと思ったから。
それに、蒼華のことにも多少は興味があったしな。

「そしてある日、君の父親に出会ったのだ。彼は私に自分の息子を蒼華の
遊び相手にして欲しいと言ってきた。
私はもちろん反対した。自分の息子がどうなってもいいのかとも聞いた。
彼はこう言ったよ『どうせなら、一度身の程をわからせてやりたい』とね。
私も、初めこそは反対したが、とうとう首を縦に振ってしまったよ。
そしてここに来たのが君だ。」
「・・・・・」
「君が来てから蒼華は変わった。精神は不安定にならなくなり、
心の底から笑うようになった。もはや今の蒼華にとって君は必要不可欠だ。」

そう言った後、灰は俺に対して頭を下げた。そして・・

「・・だから頼む。これからも蒼華の友人で居てくれ。今の私はあの子の幸せを願っているんだ。

この通りだ・・。」
「・・・頭を上げてください。俺はこれからも蒼華の友人で居ます。」
「！・・ありがとう・・。」
頭を上げて顔を見せた灰は泣いていた。
俺は灰が泣き止むまで黙って見続け、そして泣き止んだ後に
蒼華にお別れをいい、家に帰った・・・。

次の日、俺は殺しのための武器をポケットに入れて家を出た。
俺の武器はワイヤーだ。本当はナイフでもいいのだが、あれは下手をするとすぐにバレル。
しかし、ワイヤーならばれても、「釣りのため」とかなんとか言っておけば誤魔化せる。
しかもこのワイヤー、頑張れば銅も切れてしまうというすぐれもの！
っと、そんなことを考えていたら蒼華の家に着いてしまった。
蒼華の家は西洋の屋敷みたいな家だ。もちろん、使用人もたくさんいる。
俺はいつも通り門番のような人に話をし、中に入れてもらう。そして屋敷に入るために
扉を開けた。
「凶ちゃ～ん！」

「ゴハッ！？」

入った途端に蒼華に跳びつかれた。そしてそのまま後ろに倒れる。

・・・頭を地面に打っちまったぜ・・・

「・・蒼華、重い。どいてくれないかな？」

「重くないもん！！」

そう言いながら俺のことをポカポカと殴ってくる蒼華。・・いいからどけよ。

俺は蒼華を無理やりどかし、立ち上がる。

そしてそのまま蒼華の部屋に向かう。後ろから「まってよ～！」とか聞こえるが無視。

今日で蒼華と遊べるのも最後か・・・・

俺はそう思いながらも、蒼華と部屋に向かった・・・

第４１話：夢（後書き）

はい、終わり。次に続きます。
どうでもいいけど、蒼華って出番あんまりないよね。

第４２話：最後の鬼ごっこと約束（前書き）

はい、前回の夢の続きです。

第４２話：最後の鬼ごっこと約束

「凶ちゃん。何して遊ぶの？」
「まぁ、任せるよ。」

俺は蒼華の部屋に着くまでずっと蒼華と話をしていた。
あ、言い忘れていたが、子供の頃の俺の髪の色は黒色だ。

「ねぇ、凶ちゃん。凶ちゃんはどうしていつもわたしと遊んでくれるの？」
「・・・友人だから、かな。俺はそう思ってる。蒼華は違うのかい？」
「ううん、私もそう思ってるよ。お揃いだね！」
「まぁ・・そうだね。」

何が嬉しいのか、蒼華はウサギの人形を抱きしめながらグルグルと回っている。
そして目の前の柱にぶつかって、仰向けに倒れた。・・馬鹿だな。
俺は蒼華を立ち上がらせると、そのまま蒼華の着ているゴスロリ見たいな服をパンパンと叩いてやった。

「ほら、行くよ。」
「あ、待ってってば～！」

俺たちはそのまま蒼華の部屋に向かって走った。
そして蒼華の部屋に着くと、俺はそのドアを開けた。開けた先には、かわいらしい人形がズラーリと並んでおり、小さなテーブルがある。
その上には紅茶の入った

ティーカップが乗っている。

「凶ちゃん、今日は何して遊ぼうか？」
「・・君に任せるよ。今日はなんでもいいよ。」
「本当！？じゃあね～・・・鬼ごっこ！」
「・・二人じゃつまらないから使用人を呼んでやろう。」
「うん！待っててね！」

そう言いながら、部屋を飛び出していく蒼華。
俺は蒼華が来るまで自分で紅茶を淹れて待つ事にした。・・うん、美味い。

俺たちは今、蒼華の屋敷の庭にいる。ここにいる使用人は全員で１１人。俺と蒼華を足して１３人だ。
・・・結構縁起でもない数字だな。
俺たちは円になるように集まり、ジャンケンをする。そして鬼になったのは、
銀髪のメイドだった。・・・まぁ、メイドでもいいや。そのメイドは髪はそこまで長くなく、
両方のもみあげ辺りから、先端に緑色のリボンをつけたみつあみを結っていた。
鬼になったメイドは俺たちに「１０数えますから逃げてくださいね」と言い、両手で顔を隠して

数を数え始めた。
蒼華は俺の手を引き、その場から逃げる。・・・転びそうだな、蒼華が。
そしてそのまま庭の端っこまで逃げた。メイドのほうを見てみると、何故か小さな鉄の棒を持っていた。
長さは5？くらいで、幅が２ｃｍくらいだろうか。そしてそれを、逃げている使用人に投げた。
すると使用人Ａはその場にうつ伏せに倒れてしまった。・・・うわぁ・・。

「・・蒼華、あのメイドはなに？」
「う～ん、確かね。使用人をまとめてる人。」

いや、じゃあ遊んでないで仕事しろよ。なに？メイド長か何かなの？そんなことを思っている間にも、メイド長は次々と鉄の棒・・・でいいよな？
それを投げる投げる投げる。しかも命中率のいい事。家に来たら絶対に位の高いやつになるぞ。
まぁ、雇わないし来させないけどな。そんなことを思っていたらメイド長がこちらに気づいて走ってきた。
・・・うそぉ・・・。速い・・・。
俺は蒼華の手を引いてなんとかメイド長から逃げる。メイド長はそんな俺たちに向かってミニ棒を投げてきた。
それをかわす。あんなのに当ったら堪ったもんじゃない。俺は蒼華の手を引いたまま、落ちている木の枝を投げる。
それは簡単に折られてしまった。まぁ、そりゃそうだわな。時間稼ぎくらいにしか思ってなかったし。
俺はそのまま蒼華を抱きかかえ、全力疾走して逃げた。そして木の裏に隠れた。

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・。あ、蒼華。大丈夫かい？」
「うん。でも・・あの・・・降ろして？」
「あ、ごめん。よっ・・・・と。」
俺は蒼華を地面に降ろす。・・思っていたよりも軽かったな。
「凶ちゃんすごいね。あの人、屋敷じゃ一番速いんだよ？
それなのに逃げ切るなんて。」
「・・まぁ、根性で。」
俺がそう言うと、蒼華はくすくすと笑い出す。・・何か面白い事でもあったのだろうか？
でも、その笑顔を見たらなんだか嬉しくなった。・・・あぁ、俺はこの笑顔を壊すのか・・・。
「凶ちゃん、どうかしたの？」
「いや・・・なんでもないよ。さて逃げようか。」
「どこに逃げると言うのですか？」
「「・・・・・」」
俺たちは恐る恐る声のしたほうを振り向く。そしてそれを見て固まった。
そこには笑顔で、まるでナイフでも構えるようにして、ミニ棒を持ったメイド長がいた。
・・・やばい・・。
「お嬢様、タッチです。」
「あ！・・ごめんね、凶ちゃん。捕まっちゃった・・。」
余所見をしていたせいで、蒼華が捕まってしまった。

そして蒼華をタッチしたメイド長は、今度は俺に向かって手を伸ばす。
俺はその場から素早く後ろに跳んで離れた。そして、さっきよりも速く走る。
蒼華がいなくなったから、本気で走ればなんとか撒けるだろう。そう思っていた。
しかし、後ろからもの凄い速さでメイド長がやってきたのだ。しかも、ミニ棒を投げながら。
もう鬼ごっこじゃねぇ！俺はたまたま倒れていた使用人を盾にして、ミニ棒を防いだ。
その時使用人が「ぎゃぁぁぁ！！」と叫んでいた気がするが、気のせいだろう。・・たぶん。
くそっ！捕まって堪るか！俺はそう思い、メイド長との鬼ごっこを続けた・・・

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・。」
「は・・速いですね・・。」

現在、俺とメイド長は仰向けで寝転がっている。俺はあの後も逃げ続け、なんとか捕まらずに済んだ。
途中から、屋敷の使用人たちが野次馬の如く集まってきたが、メイド長がミニ棒で全員気絶させた。

「凶ちゃ～ん。大丈夫～？」

そんな声を出しながら、蒼華が俺とメイド長に水を渡す。

俺とメイド長は礼をいい、それを受け取り、グビグビと飲んだ。・・・くはぁ～・・・。

「・・・さて、蒼華。もう一回やるかい？」
「うん！次は捕まらないようにするもん！」

そう意気込む蒼華。メイド長はそれを見てクスクスと笑っている。
・・・いい加減に俺も始めよう。

「じゃあ、今度の鬼は俺だぞ。頑張って逃げろよ？」
「うん！みんなにも伝えてくるね！」

そう言いながら去っていく蒼華。・・・やっぱり嫌だなぁ・・・。

「・・・何か企んでますね？」
「・・・さぁ、何のことかな？俺にはわからないよ。
それより、あなたも行ったらどうですか？俺は３０秒経ったら始めますよ。」

俺はそう言い、数を数える。メイド長は俺を疑いの目で見ていたが、すぐに逃げ始める。
・・・行ったか。俺は３０秒経つと、ポケットにワイヤーがあるか確認し、鬼ごっこを始めた。
一生懸命逃げなよ？じゃないとみんな殺すからさ・・・

最初に見つけたのは使用人Ａだった。
使用人Ａは俺に見つかったのを気づくと、すぐに逃げようとした。
その顔は純粋に遊びを楽しんでいる顔。俺は使用人Ａだ逃げる前に、ワイヤー首に掛ける。
そして思いっきり引っ張った。すると使用人Ａの頭がこちら側に転がった。
あぁ・・・本当に・・・

「俺はだめなやつだなぁ・・。」

俺はそう言いながらも、次々と殺していく。鬼ごっこに参加している者、俺の姿を見た者も
全員殺していった。・・・どこだ、蒼華。
なるべく早く探して帰りたかった。出来れば、このまま見つからないで居て欲しかった。

「・・やっぱりね。」
「・・・・・。」

俺がそう思っていると、後ろからメイド長の声が聞こえた。
どうせ、少し様子を見てくるから待ってて欲しい、とでも言ったんだろう。

「あなた、自分が何をしているかわかっているの？」
「・・わからなきゃこんなことしませんよ。
それに、俺だって好きでやってるんじゃないんですから。」
「・・あなたみたいな子供は初めてよ。まだ１０にもなっていないでしょう？」
「えぇ、６歳ですよ。でもね・・・。」

俺はそう言いながら、ワイヤーを右手に束ねてメイド長のほうを向いた。

「・・あなただって、人のこと言えないでしょう？」
「・・・そうね。」

メイド長の手にはミニ棒ではなく、銀製のナイフだあった。
間違いない、こいつは俺と同類の存在だ。『こちら側』の人間だ。

「キレイなナイフですね・・・。」
「あら、ありがとう。お世辞が上手ね。」
「・・まぁ、でも・・・。」
「？」
「どうせすぐに死ぬんだからどうでもいいですよね。」

俺はそう言った途端、ワイヤーを持ってメイド長に向かって走る。
メイド長はナイフを８本投げてきた。・・甘いな。
俺はワイヤーでナイフを絡めとり、それをメイド長に向かって投げ返す。
そして再びメイド長に向かって走った。メイド長もさらにナイフを俺に投げつけた。
しかも、今度は連続でだ。視界いっぱいに飛んでくるナイフ。
さすがに、俺もこれを全て返す事は出来ないので、横に向かって跳んで避ける。
するとメイド長は、ナイフを持って切りかかって来た。・・・馬鹿だね。
俺は向かってきたメイド長の左手首にワイヤーを巻き付けて、思いっきり引っ張った。
すると、メイド長の左手首が無くなった。

「・・!?あぁ・・!!」

自分の手首がワイヤーによって切られたことを瞬時に理解し、その場で手首を押さえてうずくまった。俺はメイド長に近づき、そしてそのその首にワイヤーを掛けた。

「最後に何か言いたい事はありますか?」

「・・・あなた、絶対に後悔するわよ・・。」

「そうですね。たぶん俺は後悔します。そして絶望するでしょう。しかし、構いませんよ。それが俺なんですから。それじゃ・・。」

――――さようなら――――

「・・・・・・」

俺は自分の足元に転がっているソレを持ち、元の場所に戻した。

「・・・それでは、もう行かせてもらいますよ。」

最後にそう告げて。再び蒼華を探す。おっと、ナイフを貰っておこう。

改めて自分のことを見てみた。服に付着している血、そしてその血は全て返り血である。

周りには自分の身体とさよならをした頭。

俺はそれを別になんとも思わずに見る。・・・さて、そろそろ探そう。

手始めに、あの時に居た場所に行ってみることにした。

案の定、蒼華はそこにいた。俺は蒼華に声を掛けた。

「蒼華。」

「!?凶ちゃん・・?どうして真っ赤なの!?」

蒼華はそう言い、俺に近づいてくる。そして俺の服を触ってきた。

俺は蒼華の手を掴み、それをやめさせる。

「蒼華・・。」

「凶ちゃん?どうして止めるの?こんなに血が出てるのに・・。」

「俺の血じゃない。・・全部使用人の血だよ。」

「え・・?」

「蒼華、俺はな、お前を殺さなきゃいけない。」

俺がそう言うと、蒼華は一瞬唖然とした。しかし、すぐに元に戻った。

「どうしてそんな嘘言うの？」

「嘘じゃない。俺がお前の遊び相手になったのは、お前を殺すために近づいただけなんだ。」

「・・・・・」

「俺はもともとお前を殺すように言われている。そして、今日がお前を殺す日になった。」

「ねぇ、凶ちゃんはわたしを殺すの？」

「・・・あぁ。」

「じゃあ凶ちゃん。最後に聞いていい？」

「・・・なんだ？」

どうせ、『わたしを殺してもなんとも思わないの？』とかそんな下らないことだろう。

俺はそう思っていた。

――――凶ちゃんはわたしと居て楽しかった？――――

・・・え？

なんでだ、どうして死ぬ前なのにそんなことを聞くんだ？

どうして・・・

「・・どうして・・笑ってるんだよ・・。」

その顔はいつもの笑顔。いつも俺に見せてくれる、あのキラキラし

た笑顔。

「ねぇ、楽しかった？」

「・・・・・・」

「わたしね、凶ちゃんとお友達になれてすごく良かったと思ってるよ？

凶ちゃんと遊ぶといつも楽しかった。」

「・・・・・」

「もう一度聞くよ？凶ちゃんはわたしなんかと居て楽しかった？」

「・・・たの・・し・・かった・・・。」

「・・そっか。うん、そっか。」

そう言う蒼華は嬉しそうな顔をしていた。そしてそっと俺を抱きしめた。

「凶ちゃんになら、わたし殺されちゃってもいいよ？」

やめてくれ・・・

「だって凶ちゃはわたしの・・」

お願いだ・・。その先を言わないでくれ・・・

「大切な友達だもん。」

蒼華がそう言った途端、胸にナイフを突き刺していた。蒼華はそれでも俺を抱きしめたままだった。

なんで・・・

「・・・凶・・ちゃ・・ん。わた・・し・・の・・最後の・・お願

い・・聞いてくれ・・る？」
「・・・あぁ・・・なんでも言ってくれ。」
「じゃ・・ね・・・、わたしのこと・・忘れない・・で・・ね？」
「あぁ・・絶対に・・絶対に・・忘れ・・ないよ。」

俺がそう言うと、蒼華は「ありがとう」と言い、その場に倒れた。
・・・蒼華・・。

「ごめんな・・・本当にごめんな・・・。」

俺はそう言いながら倒れてる蒼華を抱きしめて、初めて泣いた。
声を押し殺し、涙だけを流して、ただただ泣いた。

泣き止んだ後、俺は家に帰った。蒼華の死体をそのままにしてだ。
もちろん、魔法石は忘れていない

本当は蒼華のために墓でも作ってやりたかった。でも、だめだ。
そんなことをすれば、親父に「やはり情が移ったか。貴様のような半端者はいらん」とかなんとか言われて、
殺されるに決まってる。
俺は重い足取りで親父のところへ向かい、そして魔法石を渡した。

「・・・これが魔法石か・・・。」
「たぶんそうです。」
「・・進。お前はもう寝ろ。」
「・・・わかりました。失礼します。」

俺がそう言うと、親父は「うむ・・」と言った。
その後に、俺は布団にもぐりこみ、蒼華との約束のことを思い出していた。

「・・・絶対に、忘れないよ・・・。」

誰に聞こえるわけでもなく、そう呟いた・・・

「・・か・・はや・・・おき・・・・よ。」

・・・なんだ?体に違和感が・・・

「壊、早く起きてってば!」

「ゴフッ!?」

違和感を感じた途端、諏訪子の声とともに、俺の腹へもの凄い衝撃が来た。

「あ、やっと起きた。遅いよ!」

「・・諏訪子、とりあえず降りてくれ。」

現在進行形で俺の上に座っている諏訪子にそう言う。

そして諏訪子が起きると、改めて今までのことが自分の夢だと気づかされる。

「・・壊、どうしたの?具合でも悪いの?」

「・・なんでもないさ。さて、飯にしよう。今日は俺が作る。」

「本当!?じゃあ準備してくるね!」

そう言いながらバビューンといった感じに飛び出していく諏訪子。・

・・早いな・・。

俺はそう思いながらも、料理を作りに行った・・・

第４２話：最後の鬼ごっこと約束（後書き）

はい、そんなわけでおわりました。
今回は少し、シリアスでしたね。次からは普段どおりに戻ります。
それと、一号とシルエットの名前、お願いします。

第４３話：ちょいと特訓（前書き）

時間がない・・・

第４３話：ちょいと特訓

諏訪子の神社に泊まりにきてからもう5日経った。つまり、後二日でルーミアと会うのだ。
まぁ、別にどうでもいいのだがな。俺は今、諏訪子と神奈子と戦おうとしている。
理由は簡単、俺の腕が鈍らないために付き合ってもらってるのだ。
ちなみに、腕輪を外していないが、
勝ったら言う事を一つだけ聞く事になっている。まぁ、二人なら無理な要求はしないだろ。・・・たぶん。

「さて、行くぞ。覚悟はいいな？二人とも。」
「うん、いつでもいいよ。」
「私もいいぞ。」
「では・・・・。」

俺はそう言い。二人に向かって走った。・・・武器でも創ろう。
そう思い、あの時と同じように大鎌を創りだす。そして二人の所に近づいた途端、思いっきり横に振るう。
しかし、諏訪子たちは後ろに下がり俺の攻撃をかわす。俺はさらに、魔力で手のひらに火炎球を作り、
二人に向けて撃った。それを神奈子が御柱で思いっきり打ち返してくる。野球かよ。それを横に跳びかわす。
しかし、諏訪子がいつの間にか鉄の輪を持ち切りかかろうとしていた。それを大鎌で防ぐ。・・・なんか・・

「・・・気合が入っているな？」
「え！そ、そんなことないよ！ねぇ、神奈子？」

「あ、あぁ。ただ壊の力になりたいだけさ！」

・・・なんでそんなに焦ってるんだ？まぁ、いいか。

俺は大鎌を持ったまま思いっきり二人に向かって跳んだ。そして空中で回転する。

まるで丸ノコのように二人に向かって攻撃する。諏訪子たちは俺の攻撃をそれぞれ逆の方向に跳んでかわす。

俺はそのまま地面に向かって突撃した。すると、ズガガガガ、と地面が削れた。いい切れ味だな。

「壊・・・私たちを殺す気なのかい？」

「いや、そんなつもりはない。・・・たぶん。」

「今たぶんって言ったよね！？絶対に言ったよね！？」

無視だ無視。

俺は大鎌を諏訪子に投げつけた。なんで諏訪子なのかって？近くに居たから。

すると諏訪子はかわそうとする。・・・甘いな。

俺は自分の左手の人差し指をクイッ、と動かした。すると、大鎌が再び諏訪子に襲い掛かる。

大鎌にワイヤーをつけておいたのだ。俺はそのままワイヤーを操って、大鎌を横に振るう。

しかし、それは神奈子の御柱によって防がれてしまう。まぁ、予想内だ。俺は御柱に向かって走り、

そのまま御柱を殴って壊す。さらに、大鎌を消し、両手を二人に向けて魔力弾をひたすら撃ちまくる。

「・・・しぶといな・・・。」

二人はまだそこに立っていた。服は多少切れているが、そこまで問

題はないだろう。
あぁ・・・、あまり手間を取らせないでくれ。じゃないと・・・・

「本気を出してしまいそうだよ。」

身体から妖力や霊力が溢れているのがわかる。
しかし、俺はすぐに力を引っ込めた。だめだ、まだ本気を出し切れない。
こんなお遊びでは本気を出すに値しない。そもそも、腕輪を外していない時点でお遊び同然なんだ。
俺は身体全体に力を纏い、二人に向かって走る。霊力は速力、妖力は防御力、魔力は力。
それが俺の肉体強化の基本だ。
俺はまず、神奈子の腹に拳を入れる。一応手加減はしているから大丈夫だろう。・・たぶん。
そして神奈子が倒れたのを確認すると後ろを向く。そこには鉄の輪を俺に向けて飛ばしている諏訪子の姿があった。
俺はそれをかわす。しかし、後ろから御柱が飛んできた。・・・ちっ。

「・・・俺の負けだ。」
「「え？」」

顔に少し傷が出来てしまった。だから俺の負けだ。
もともと、諏訪子たちと戦うときは俺が傷付いたことを認めたら負けという事にしている。

「諏訪子、神奈子。神社に戻るぞ。願い事は二人とも叶えてやる。」
「あ、待ってよ～！」
「こら、私を置いていくな！」

俺はそんな二人を無視して神社の中に入った・・・

「・・・なぁ。」

「ん？なに？」

「・・・どうして俺はこんなところにいるんだ？」

「私たちに負けたからだろう？」

「そうじゃない。どうして俺はお前たちと風呂場に来ているんだ？」

そう、風呂場だ。大きくも小さくもない風呂だ。

ちなみに、毎度の事だが隠すところは隠している。諏訪子が「いいじゃん」とか言ったから、額にチョップしてやった。

そりゃ負けたさ。でもな、誰が予想したよ。こんなことを。

「いいのいいの。これはわたしのお願いだから。」

そう言い、俺を腕を引っ張って早く行こう、みたいな雰囲気を出している諏訪子。・・・まぁ、いい。

俺はそう思いながら、風呂に入る・・・前に体を洗う。常識だ。

諏訪子と神奈子も自分の体を洗う。俺の後ろでだ。すると、不意に背中に何か当った。

「・・・なにをしているんだ？」
「背中を流してあげるよ。私がね。」
そう言い、俺の背中をゴシゴシとやり始める神奈子。・・・うん、まぁ、いいや。
そして洗い終わると、そのまま風呂、もとい湯船に浸かる。・・・ふぃ～・・。
「なんかお爺ちゃんみたいだよ。」
「まぁ、実際俺はお前たちより長く生きてるからな。」
「なぁ、壊。あんたは一体どれくらい生きてるんだ？」
そんなことを聞いてくる神奈子。ちなみに、神奈子は今は髪を縛ってない。
えっと、永淋と会ったまでには、たぶん７００年くらい経っているだろう。で、そこで少し生活して１００年。
で、諏訪子に起こされたのが３０００年後。旅に出てたぶん３５０年くらい。
と、言う事は・・・
「・・・・」
「ど、どうかしたのかい？急に暗くなって・・・。」
「いや・・・本当に俺は歳をとったなぁと思ってな・・。」
「・・・なんか悪いね・・・。」
少し、ブルーになってしまった。俺。たぶんこの世界じゃ一番歳を取ってるな。
「・・まぁ、いいさ。言えるのは、間違いなくお前たちよりも年上

だってことだ。」

「ふ～ん。そっか。壊はそんなに歳をとってるんだ。」

そう言いながら何故か納得したような顔をする諏訪子。

この野郎・・・。

俺はその後、諏訪子の頭を掴み、湯の中に沈ませる。

そしてそんな風にして、風呂を終わらせた・・・

俺は今、自分の部屋で寝ている。

神奈子の願いを聞いたら「明日言うよ。」と言って、自分の部屋に戻ってしまった。

ロクデモないことじゃないといいんだが・・・・
そう思いながらも、俺は眠りについた・・・

第４３話：ちょいと特訓（後書き）

最近更新するのが遅くなってすいません。
たぶん、今週の金曜日は絶対に二つは話を書くと思います。

第４４話：こんな一日もいいだろう（前書き）

今回は、主に神奈子と壊の話

第４４話：こんな一日もいいだろう

「ふぃ～・・・。」
「爺だな。」

実際そうだしな。俺は今、神奈子と一緒に縁側でまったりしている。諏訪子は・・・まぁ、昼寝だ。いまごろ夢の中でいい気分になってるだろう。

「しかしなぁ、神奈子。俺を膝の上に乗せて暑くないのか？」
「ん、大丈夫だよ。これくらいなら。」

そう、俺は今、神奈子の膝の上にいる。もちろん、にわとりの姿だ。
実は昨日は神奈子が願いを言わなかったので、今日の朝、聞いたら
「じゃあ、今日は私とずっと一緒に居て。」
と、言われたのだ。
正直、驚いた。まさか神奈子が諏訪子が言いそうなことを言うとは思わなかったからだ。
それで、とりあえず縁側でのんびりしようという話になって、
何故か神奈子が俺を膝に乗せたいと言うからにわとりになった。・・・結構居心地がよかったりする。

「・・・平和だな・・・。」
「そうだねぇ・・。」

そう言いながらお茶を・・・啜れないな。
仕方ないので目を細めながら日向ぼっこをする。・・・眠くなるな・・・。
そう思っていると、不意に頭に何かが触れる感触。見上げると、神

奈子が俺の頭を撫でようとしていた。
俺はそれを気にせず、また目を細めて日向ぼっこをする。すると、神奈子が俺の頭を撫でた。
神奈子、あんまりトサカを強く撫でないでくれ。・・・なんとなく、神奈子に聞いてみたいことがある。

「なぁ、神奈子。」
「？」
「お前は今の生活に満足してるか？」
「してるよ。それがどうした？」
「・・・そうか。」
「？」

神奈子は今の生活で満足しているようだ。俺も、神奈子たちと暮らすのはそこまで嫌じゃない。
むしろ充実している。しかし、駄目だ。この平和な生活では俺の渇きは癒せない。
もっと刺激が欲しいな。・・・俺って、結構危険人物なのかもな。

「ん？・・神奈子、少し離れるぞ。」
「別に構わないけど・・、どこに行くんだ？」
「まぁ、ちょっとな。」

俺はそう言いながら神奈子の膝の上から降りる。そして、近くの茂みを覗く。
そこには足を怪我した小鳥が居た。

「おい、大丈夫か？」

俺は小鳥に話しかけたが、ぴーぴー鳴くだけだった。とりあえず、

小鳥の足をくちばしで挟み、
そこから霊力を込める。実は怪我を治したりするのは霊力が一番なのだ。
すると小鳥はピーピー鳴きながら空に飛んだ。俺は神奈子のところに戻り、膝の上に飛び乗る。
そしてまた体を小さくして蹲(うずくま)るようにして休む。

「壊、あんたよくあんな小さな鳥に気づいたね・・・。」
「ん?そうだな。それに、何故助けたんだろうな・・・。」

俺はそう言いながら少し首を伸ばす。そして元に戻し、眠りに付いた・・・

「・・・ん・・・。」

俺は起きたあと、少し周りを見渡した。・・・あぁ、そう言えばにわとりだった。
そう思い、神奈子のほうを見る。そこには、目を閉じて静かに寝息を立てている神奈子がいた。
・・・さすがにもう降りたほうがいいな。そう思い、俺は神奈子か

ら降り、人の姿に戻る。
そして神奈子の隣に座り、神奈子の頭を自分の膝の上に乗せて、膝枕をする。
自分もしてもらったんだから、これくらいはしないとな。そして神奈子の頭を撫でる。
ずいぶんとまぁ、幸せそうな顔で寝ているな。

「・・・それにしても・・・、これだけ平和なのはいい事なのだろうな・・。」

俺はそう思った。別に、この世界でも争いごとはあるだろうが、少なくともこの辺は平和だと思う。

「・・ん・・む・・。」
「起きたか?」

そんなことを考えてると神奈子が目を開けた。まだ眠いようで、半目だ。

「ん・・・壊・・。」
「こら、抱きつくな。」

神奈子は俺に抱きついてきた。諏訪子とキャラが被ってるぞ。
俺は神奈子を引き剥がそうとするが、なかなか離れない。
そして神奈子は俺に抱きついたまま寝息を立て始めた。おい、コラ。

「・・仕方ないな・・。」

そう思い、抱きついてる神奈子を持ち上げる。
そして部屋に向かう。途中、諏訪子が口をパクパクさせていたが、

どうかしたのだろうか？
部屋に着いたら、布団を敷き、その上に神奈子を寝かせ・・・ようとしたのだが、
バランスが崩れて布団の上に背中から倒れ込む。そして俺の上に神奈子が一緒になって倒れた。
・・・顔が近い。
どうする？このまま寝てしまうか？いや、だがおそらく、起きたら神奈子の御柱が飛んでくるだろう。

「・・まぁ、その時はその時だな。」

俺はそのまま寝る事にした・・

第４４話：こんな一日もいいだろう（後書き）

途中からわけがわからなくなった。一号とシルエット（略

第４５話：また今度（前書き）

まぁ、説明するよりも見たほうが早いです

第４５話：また今度

「・・・ん・・。」

目が覚める俺。自分の体が重く感じるので見てみると、神奈子が上に乗って寝ながらしがみ付いていた。
・・・まさか昨日の夜からずっとこの体勢で寝ていたのか？

「ずいぶんと幸せそうに寝ているな。」

涎を垂らしながら寝ていてさぞかしいい気分だろう。俺の服はすでにベトベトだ。

「神奈子、起きろ。」

とりあえず、これ以上涎塗れされるのも嫌だから起こすことにする。俺は神奈子の頭を撫でながら呼びかける。実はこれ、諏訪子にはよく効くんだ。

「・・ん・・。・・おはよう・・。」

そう言いながら目を開ける神奈子。もちろん半目で、しかも涎を垂らしたまま。
本当に君は神なのか？

「おはよう。とりあえず、退いてくれ。」
「ん・・・。」

そう言いながらノソノソと起き上がる神奈子。・・まだ寝惚けてい

るな。
俺も起き上がり、そしてまだ寝惚けている神奈子を置いて、着替えに行く。
さすがに涎塗れの服で過ごしたくない。ついでだし、風呂にも入っておこう。

「ふぅ～・・・。」

カポーン、といった感じの効果音が似合うであろう状況。
やはり風呂はいい。

「・・・そう言えば、今日ルーミアと会うんだったな。」

すかっり忘れていた。あれだな、確か修行をしているらしいな。御苦労なことだ。
・・・あれ、そういえば一号は何処に行ったんだ？
俺はそう思いながらも風呂から出た。

その頃の一号

「わたしだってさ、本当は壊と一緒に居たかったのにさ・・。」

諏訪子の背中をポンポン叩きながら慰めていた

風呂から出た俺は、とりあえず朝飯を作ることにした。

本来ならあの二人が作るんだろうが、今日出て行くんだから俺が作るのもいいだろう。

何を作ろうか・・・。

俺は米を炊き、味噌汁を作る。和食ならこれは欠かせない。

次に、肉じゃがを作る準備をする。多めに作っておけば昼食にも出せるだろう。

あとは・・・・

そんなこんなで朝食が出来たので二人を呼んで食卓に並べる。

今日は、米、味噌汁、肉じゃが、玉子焼き、漬物、だ。玉子焼きの味付けは砂糖にしてみた。

ちなみに、砂糖は俺の能力で創った。今は砂糖は薬だのなんだの言われるくらいに苦いからな。

食卓に食卓の着いた諏訪子はなんだかすっきりした顔をしている。

その後ろにいる一号はなんかふらついている。

神奈子は顔を赤くしていた。

「さて、食うぞ。」
「うん！」

元気一杯の諏訪子。俺たちは「頂きます」と言い、食べる。
どれ、玉子焼きの出来は・・・、うん、美味い。ただ、少し子供向けだな。

「壊、この玉子焼き、おいしいね。」
「ん、そうか。それはよかった。」

そう言いながら目をキラキラと輝かせる諏訪子。人は見かけによらない、と言うが
諏訪子の場合は見かけ通りだな。今も玉子焼きをパクパクと食べている。
神奈子も満足そうな顔をしていた。俺も再び自分の玉子焼きを食べようとしたが、
諏訪子がじっ、と見てきた。なんだ？と思ったら諏訪子の玉子焼きがすでになくなっていた。
食べるの早いな・・・。

「・・・いるか？」
「え、いいの！？」

近い近い近い！
俺は自分の分の玉子焼きが乗った皿を諏訪子に渡す。
それを嬉しそうに受け取ると、諏訪子はまた食べ始める。・・・どんだけ気に入ったんだよ。
俺はそう思いながら肉じゃがを食べる。・・・うん、これも美味い。

自分で言っておいてなんだが、それなりに料理の腕が上達した気がする。
将来は、料理を作る仕事に就くのもいいな。
そんなことを思いながら再び肉じゃがを再び食べようとしたが、なぜか神奈子が俺のほうを見ていた。
・・・お前もか・・・。
俺は肉じゃがの皿を黙って神奈子に渡す。神奈子は顔を赤くしながらそれを受け取ると、
チビチビと食べ始めた。・・・まぁ、まだおかわりはあるしな。
そんな感じで俺たちの朝食は終わった・・・

「さて・・・、そろそろ行かせてもらう。」
「そう?もっとゆっくりして行けばいいのに。ね、神奈子?」
「まぁ、壊もいろいろあるんじゃないか?」
「・・・まぁ、な」

久しぶりに会うのに、遅れたら悪いしな。
俺は玄関まで歩く。その後ろを神奈子と諏訪子が付いてくる。
そして俺は靴を履き、立ち上がる。

「あ、そうだ。壊。」
「どうした?」
「壊ってさ、わたしたちと戦う時って、本気で戦ってる?」
「なんだ、急に。」
「いや、なんだか壊って、あんまり本気で戦ってる、って感じがしないから・・」

「それは私も思ったね。どうなんだい？」

まぁ、確かに本気ではないだろう。

ここで説明しておこう。俺が戦うときは大抵は本気じゃない。三段階に分けてる。

まず、今の状態。つまり腕輪を付けてる状態では、本気を出してもクックルの時の2割くらいしか力が出ない。

次に腕輪を外した状態。この時の本気は5割くらいだ。最後に、クックル状態。これが本当の全開だ。

今のところ、俺のクックル状態を知ってるのは永淋と瑠璃くらいだろう。永淋にも一回しか見せてないしな。

「一応、本気は出す時は出してる。ただ、この姿で本気を出しても大したことはないがな。」

「この姿？ってことは壊って本気を出すと姿が変わるの？」

「ん、まぁな。・・・見せないぞ。」

「ケチ、じゃあ見ないから本気出してみて。」

そう言いながら後ろを向く諏訪子。

「いや、どうせなら外に行ってからだ。」

俺はそう言いながら外に出る。そして神社の鳥居まで来ると、諏訪子たちに後ろを向くように言う。

別に、見られても構わないとは思っている。ただ、本気になった俺の姿を前に上級妖怪に見せたらそのまま上級妖怪が死んでしまった事があり、二人もそうならないか心配なのだ。

「・・・行くぞ？」

「うん。」

「いつでもいいよ。」

俺は腕輪を外す。

「一応、7割くらいの力を出す。」

そう言いながらクックルになる。さて、二人は倒れないかな。

俺は力を7割ほど出した・・・・

ーーーーSide諏訪子ーーーー

「一応、7割くらいの力を出す。」

え、本気じゃないの?そう聞こうとした途端、

「・・・!?」

ありえないほどの力を後ろから感じる。これが7割?

冗談じゃない。わたしと神奈子が束になっても絶対に勝てない。

「う・・ぁ・・」

わたしはその場で座り込む。足に力が入らない。息が苦しい。

そうか、壊は今まで本当に手加減していたんだ。本気を出したらわたしと神奈子は

一瞬でやられていたんだ・・・・

ーーーSide神奈子ーーーー

壊が7割の力を出すと言ったとき、反論しようとした。しかし、
それは出来なかった。なぜなら、壊から妖力や霊力などがありえない量で感じられたからだ。
とても重く、それでいて鋭い力が私を襲う。足が震える。息が止まりそうだ。
横を見ると、諏訪子が大量の冷や汗を掻きながら地面に座り込んでいる。
その顔はとてもつらそうだ。
おそらく、大和の神が全員で壊と戦っても勝てないだろう。
いや、傷を負わせることができるかどうかもわからない。

「・・・終わりだ。」

そんなことを考えていると、壊がそう言った。そしてさっきまでの壊が開放していた力が
嘘のように消える。
私はその場にへたり込んでしまった。
これが壊の力・・・・

ーーーSide壊ーーーー

「・・・終わりだ。」

俺はそう言いながら腕輪をつける。すると、クックル状態が解けてしまった。
改めて諏訪子たちを見た。二人とも、地面にへたり込んでいる。・・・そんなにつらかったか？
俺は二人の前へ回り込む。

「・・大丈夫か？」
「・・うん。まだ立てないけど・・。」
「まぁ、これからは興味本位で何かを聞く時は気をつけるんだな。」
「うん。そうする。ね、神奈子？」
「そうだね。私はもうこういうのはコリゴリだよ。
それにしてもあれで７割ねぇ・・。本当に７割なのかい？」
「あぁ、７割だ。なんなら、全力になろうか？
まぁ、その時はたぶんお前たちは俺の力に耐えられなくなって・・

――――死ぬだろうがな――――

自分でも驚くほど冷めた声で言った言葉。

「・・やめておくよ。まだ生きていたいしね・・・。」
「そうだね。神奈子の言うとおりだよ。」
「そうか、じゃあ俺はもう行くぞ？元気でな。」
「うん。壊も頑張ってね。」
「あぁ。」

俺はそのまま鳥居を潜って出て行く。さて、また今度会おう・・

ーーーSide神奈子ーーー

「・・壊って本当はもっと強いんだろうね・・・。」

諏訪子が私にそう言う。
私は壊が最後に言った言葉が気になっていた。

『死ぬだろうがな』

意味は分かる。おそらく、壊が全力で力を出せば私たちはそれだけで死ぬかもしれない。しかし、私が気になったのはそこじゃない。
壊があの言葉を言った時、壊の目がなんだかとても・・・
悲しそうだった

「・・・諏訪子、壊はなんだろうねぇ・・・」
「・・そんなの簡単だよ。」
「ん？」
「壊は壊だよ！」

笑顔でそう言いう諏訪子。そうだね。壊は壊だ。
私は諏訪子の言った事をその通りだと思い、なんとか立ち上がり、諏訪子と神社に戻った。
また会いたいと思いながら・・・

第４５話：また今度（後書き）

そんなわけで再び旅に出た壊でした。
一号とシルエットの名前をまだ募集しています

第４６話：闇の女王との再会（前書き）

そのまんまです

第４６話：闇の女王との再会

諏訪子の神社を出て、ゲートでルーミアと会う場所まで移動する。
着いたのはいいが、ルーミアはまだ来ていなかった。まぁ、少し俺が早かったのだろう。
そう思い、俺はルーミアが来るまで待つ事にした。しかし・・・

「・・遅いな・・。」

待ってからすでに1時間は経っている。俺も待つのがいい加減に飽きてきた。
あと1時間経っても来なかったら、もう放って置いて一人で旅に出ようか？
そんなことを考えていると後ろからガサガサという茂みの音が聞こえた。・・・来たか。

「遅いぞ？ルーミア。」
「壊が早いだけよ・・・」

俺は後ろを振り向く。そこには、呆れているルーミアがいた。
ただ、何故か髪が腰の辺りまで伸びている。妖力が上ったからか？
前よりも妖力が格段に上っている。・・・最初に目を付けてはいたが、
まさかこんなに早くに強くなるとはな。

「修行の成果はあったみたいだな。」
「えぇ。結構大変だったのよ？」
「大変じゃなきゃ修行じゃないだろうが。」

俺がそう言うと、クスクスと笑いながら「それもそうね」と言うルーミア。

「ところでルーミア。」
「なに？」
「その殺気を仕舞ってくれ。」
「いやよ！」

そう言いながら一瞬で闇の剣を作り、俺に切りかかってくるルーミア。
お前は俺に恨みでもあるのか？俺はそれを拳に妖力を込めて防ぐ。
すると「ガキィン！」という普通ならありえない音が周りに響いた。

「ずいぶんと強くなったな。ルーミア。」
「私の攻撃を簡単に防いだ貴方に言われたくないわよ！」

ルーミアはさらに俺に剣を振るう。俺はそれを受け流したり防いだりする。
俺は左手を手刀にし、ルーミアに向けて振るう。
ルーミアはそれを剣で防ぐが、俺はさらにサマーソルトで顎をねらう。
それを後ろに跳んでかわすルーミア。

「逃がさないぞ。」

俺は右手から紅い雷、左手から蒼い雷を出し、手に纏う。そしてそのままルーミアに向かって走る。
ルーミアに近づいた途端、右手の紅い雷を横に振るう。ルーミアは上に跳んでそれをかわす。

俺は左手の蒼い雷をルーミアに向けて撃った。命中！
ルーミアはドサリと落ちてきたが、すぐに起き上がった。

「・・っ、容赦ないのね。その変な雷は何？」
「ただの雷だ。紅と蒼にしたのはなんとなくだ。」
「壊らしいわね！」

ルーミアはそう言いながら、小さな闇のナイフをたくさん作り出し、俺に向けて飛ばしてきた。
俺は雷を出すのをやめ、地面に潜る。落とすのもいいが、めんどくさいしな。
ルーミアの後ろに移動し、地面から出る。そして、魔力で手を覆い、ルーミアの首に触れた。

「俺の勝ちだな。動いた途端に首と体がお別れするぞ？」
「・・そうね。私の負けよ。」

そう言い、殺気と妖力を消すルーミア。そういえば戦っている途中気になる点があったな。

「なぁ、ルーミア。君は俺と戦っている時に手を抜いていなかったか？」
「・・よくわかったわね。確かに手を抜いたわ。」
「なぜだ？」
「別に。私は貴方を殺そうだなんて思っていなかったからよ。」

いや、お前は俺と戦う前に殺気を飛ばしてきたよな？
まぁ、いいか。どうやらルーミアは手を抜いて俺と戦えるようになったらしい。
嬉しい事だ。・・・こっちも本気じゃないけどさ・・・。

とりあえず、頑張ったで賞の代わりに、頭を撫でてやることにしよう。

「・・・なに、この手は？」
「頑張ったご褒美だ。」
「・・・まぁ、いいけど・・。」

顔を赤くしながらそう言うルーミア。・・嫌だったのか？
俺はルーミアの頭から手を退かす。

「さて、お互い話したいこともあるだろう。
今日はここで野宿でもいいか？」
「・・・えぇ、いいわよ。（もっと撫でてくれても良かったのに・・）」

若干不機嫌そうなルーミアを放って置いて、近くに川か何かないか探す。
一号には肉を獲ってきてもらおう。ルーミアには・・まぁ、食えそうな茸とか採ってきてもらおう。
そんな感じでサバイバルを開始した・・・

「・・・ルーミア、これはないと思うぞ？」
「・・・ごめんなさい・・・。」

ルーミアが持ってきたのは確かに茸だった。それはいい。
でもほとんどが毒キノコだった。ん？何故わかるかって？旅をしている時に

色々な物を食べていたからな。茸も自分で採って食えるかどうかを試してたし。

「・・まぁ、いくつか食えるのもあるからいいさ。」

「うん・・・・。」

俺はとりあえず、食えない茸を片っ端から捨てる。

食えない茸を捨てる度に、横から変な空気がこちら側に流れているが気にしない。

「・・・こんなもんだな。おい、ルーミア、って何をしているんだ君は。」

横を見ると、ルーミアがこちらに背を向け、体育座りになりながら人差し指で地面に「の」の字を書いていた。

とりあえず、ルーミアはほうって置く事にした。飯が出来たら呼べばいいか。

「おい、ルーミア。もう出来たぞ。いい加減にその格好をやめろ。」

飯が出来たのでルーミアにそう言う。あれからずっとあの調子だ。

どうしというのだ。

ルーミアはこちらをジト目で見た後、ノソノソと歩いて俺の正面に

座った。俺は作った物を渡す。
ちなみに、今日は作るのがめんどくさかったから、お粥みたいなものだ。
ルーミアは何も言わずに食べていた。

「なぁ、ルーミア。どうしたんだ?」
「・・・私が採って来た物ほとんど捨てた・・。」
「いや、食えなかったからだぞ。それに、ちゃんとその中にも入ってるだろ?」
「でも・・・。」
「・・・わかった。明日から俺が基本的なことは教えてやる。だから機嫌を直せ。」

俺がそう言うと、ルーミアは頷いて再び食べ始める。
そんな感じで夕食を食べ終わり、テントを創ってその中で寝て一日は終わった・・

第４６話：闇の女王との再会（後書き）

そんなわけで終わりました。
ルーミアの髪が伸びた！次はどうしようかな・・。
（一号とシルエットの名前をまだ募集しています。）

第47話：ダークマターの恐ろしさ（前書き）

ある意味恐ろしい

第47話：ダークマターの恐ろしさ

「ねぇ壊。これは食べられる？」
「・・・あぁ、これなら大丈夫だ。」

今、俺はルーミアに食える茸や木の実を教えている。
最初の頃は酷かった。持って来るもの殆どが毒キノコとかだったからな。
最近はまともになってきた。割合で言うと　4：6　くらいになった。当然、割合4が食えるものだ。

「さて、ルーミア。突然だが今日は君が料理を作るんだ。」
「え！なんでよ！？」

ルーミア、顔が近い。あと、さり気無く剣を出すな。突きつけるな。

「あのなルーミア。食材が手に入ってもそれを調理できなくては意味がないだろう？」
「それは壊がすればいいでしょ？」
「俺が居なくなった時はどうする？」
「食べなければいいわ。」
「まぁ、そうなんだがな・・。それでも作れ。」
「言ってる事が目茶苦茶ね。」
「目茶苦茶で結構。それに、女なら料理くらい出来ないといかんぞ。」

俺はそう言いながらポンポン、とルーミアの肩を叩く。
ルーミアはまだ納得していない顔をしていたが、俺が「ちゃんと作れたらお願いを一つ聞いてやる」と言ったら「すぐにやるわよ！」

とか言いなが右肩を回す。単純だな。

なんだかんだあって、俺はルーミアが料理を作り終えるまで待つ事になった。
念のために、一号を見張り役として付けた。いや、だってルーミアが「料理は作ったことないけど何とかなるわよ」とか言うもんだからさ？
一号には「さすがに無理だろ。」みたいなものはすぐに捨てさせろと教えている。

「・・・暇だな。少し話し相手になってくれないか？紫。」
「・・本当に鋭いわね。」

真上から声が聞こえたので上を見ると、スキマが開き、扇子を持った紫が俺の横に降りてきた。

「まぁ、君より長く生きてるんだから勘もよくなるさ。」
「普通は気づかないわよ？」
「それではまるで俺が普通じゃないみたい言い方だな？」
「あら、そう言ってるつもりよ？」

そう言いながら、口元を扇子で隠し、クスクスと笑う紫。
普通じゃない、ねぇ・・・

「まぁ、否定はしないがな。」
「そこは否定するところじゃないの？」
「否定なんぞせんよ。俺が普通じゃないのはわかりきっている。
それに・・・、普通じゃ面白くないだろう？」

俺はそう言いながら紫を見る。紫は「それもそうね」
と言いながら再びクスクスと笑った。・・・そういえば・・・

「紫、君は俺の事について調べてると言ったな。何か分かったか？」
「・・まったく何にもわからなかったわ・・。」

そう言いながら今度はショボリする紫。いや、別にそこまで落ち
込まなくてもいいだろ？

「まぁ、なんだ。頑張れ。」

俺はそう言いながら紫の被っている帽子を取り、頭を撫でる。
ぶっちゃけ、自分の正体を教えてもいいのだが、それじゃあつまら
ない。
・・俺って、結構最悪な人間だったりするな。あ、今は人間じゃな
いのか。
しばらく紫の頭を撫でていたが、いい加減ルーミアが料理を作り終
わっているかもしれないので
撫でるのをやめる。それに、紫もいつまでも撫でられるのは嫌だろ
うしな。だって顔赤くしてるから。

「壊、出来たわよ～・・・、ってなんでそいつがいるのよ。」
「あら、そいつ、とは失礼ね。名前を覚える事も出来ないのかしら？」

出会い頭に睨みあう二人。すごいな、目から火花が散っているように見えるぞ。

「ルーミア。夕食は出来たんだな？」
「・・・出来たわよ。ほら。」

そう言いながら、持っている鍋を少し上に持ち上げ、俺に見せるルーミア。
ちなみに、この鍋は俺が能力で創った鍋だ。中々にいい出来だぞ？
俺はルーミアにお椀によそうように言う。ルーミアはお椀に出来たものをよそう。
後ろ向きだから見えないが、なんだか楽しそうだ。出来がよかったのか？
俺はルーミアからお椀をよそう。もちろん、紫の分もよそってもらった。
そして中身を見た。そこには・・・

「・・・ダークマター（暗黒物質）・・？」
「？何よそれ。」

中にあったのは紫だか黒だかよく分からない色をしたダークマター（暗黒物質）。
これを食えと？俺は一号を見る。そこには何故か手を振っている一号が居た。

「・・・じゃあ私はこれで失礼するわ・・。」

そう言いながらスキマに潜り、閉じようとする紫。
俺はお椀を一旦地面に置き、まだ閉じかけているスキマに手を突っ込んで無理やりこじ開ける。

「なっ!?壊、この手を退かしなさい!」
「断る!」

俺はそう言いながらスキマから紫を引っ張り出す。そして無理やり横に座らせ、
その手にダークマター(暗黒物質)の入ったお椀を持たせる。さらに、逃げられないように
シルエットを召喚し、見張らせる。

「・・何をしているの。貴方たちは・・・。」
「いや・・なんでもない。さて、食うぞ。紫。」
「・・・えぇ・・、そうね。壊、先に待ってるわ・・。」

そう言い、お椀を口に運び、中に入ってるダークマター(暗黒物質)を口の中に流し込む紫。
すると紫はお椀を置いて、俯いてしまった。

「・・おい、紫?」
「・・・・・・」
「ちょ、ちょっと。どうしたのよ?」

ルーミアが焦り始めた。俺は紫の肩に手を乗せる。すると・・・

「えへへ〜・・壊〜!」
「なっ!?」

紫が俺に向かって跳びついてきたのだ。俺はそのまま後ろに倒れる。

「壊～。あったか～い・・。」

そう言いながら俺の胸に顔を摺り寄せてくる紫。いや、誰だお前は。

「・・ハッ！こら、壊から離れなさい！」

「や～！」

必死に紫を俺から引き離そうとするルーミア。しかし、紫はさらに俺に強く抱きつき、
離れようとしない。・・苦しい・・。

「紫・・。苦しい。少し離れてくれ・・。」

「やだもん！離れたら壊どっか行っちゃうもん！」

「どこにも行かないから離れてくれ・・。」

「・・・本当？」

俺はその言葉に頷いた。すると紫は渋々と言った感じに俺から離れる。
紫が離れたのを確認すると、俺は起き上がる。・・・はて？

「なぁ、ルーミア。」

「なに？」

「俺の気のせいだとは思うが、紫が小さくなってないか？」

「奇遇ね。私もそう見えるわ。」

改めて紫を見ると、紫は背が縮んでいた。いや、幼くなっていた。
俺は立ち上がり、紫にも立ち上がるように言う。・・・ちっさ！
いや、俺から見たら大抵の奴は小さい。しかし、それを除いても紫

が小さくなっている事は分かった。
俺の身長が約１９０ｃｍだ。そして前の紫は約１６５ｃｍほどだった。しかし、今の紫は１３０ｃｍくらいになっている。
・・とりあえず、この後どうするか聞いておこう。

「なぁ、紫。君はこの後どうするんだ？」
「う～んとね・・。壊と一緒に寝る！」

いい笑顔でそう答える紫。・・うん・・、なんと言うか・・・。胡散臭くない。
なんかルーミアが睨んでいるが気にしない。

「ルーミア、とりあえずあの料理は無理だ。俺は紫みたいになりたくない。」
「・・わかったわよ・・。」

俺はゲートを召喚し、ダーク（暗黒物質）マターを処理させる。
そしてゲートと仕舞い忘れていたシルエットを戻し、能力で鍋を消す。

「さて、紫、ルーミア、寝るぞ。」

俺はそう言いながらテントを創り、中に入る。紫は嬉しそうに俺の後をトコトコと付いて来た。
ルーミアはなぜか不満そうな顔で中に入る。俺は布団を敷き（三つ）右の布団に寝ようと思ったが、
ルーミアが無理やり真ん中の布団に寝かせる。そして左から、紫・俺・ルーミア、といった感じで寝る。
・・二人とも、あんまりくっつかないでくれ・・。
そう思いながらも、俺は眠った・・・・。

ちなみに、一号は自分専用の小さい布団で寝た。

第４７話：ダークマターの恐ろしさ（後書き）

そんなわけでチビ紫でした。なんとなくこんな話を書きたかった！
反省はしてる。でも後悔はしてません。
最後に、一号とシルエットの名前を「まだ」募集しています。

第４８話：ちょっとしたお話（前書き）

うん、最近ネタが切れてきた

第４８話：ちょっとしたお話

「・・で、何も覚えていないと？」
「えぇ、何も覚えていないわ。」

俺は今、紫と話をしている。朝、紫は目を開けてすぐに、俺に抱き付きながら寝ていることに気がつき、俺に理由を聞くために叩き起こして来たのだ。
ちなみに、もういつもの紫に戻っている。

「・・まぁ、別に起こされた事は気にしていない。だがな、妖力の弾で叩き起こされたのに腹が立ったぞ？」
「・・・ごめんなさい・・。」

痛かった。いくら俺が起きなかったとは言え、妖力で作った弾を撃ち込まれるとは思わなかった。

「まぁ、いい。朝飯を作るから待っていろ。ルーミア、食材は？」
「これでいい？」
「十分だ。」

俺はそう言いながら朝食の準備を始める。さて、何を作ろうか・・・

なんだかんだで朝食終了。普通に美味かった。
ちなみに、紫は朝食が終わったらすぐに帰った。用事があるらしいが、たぶん嘘だな。

「さて、そろそろ行くか。」
「そうね。」

俺たちは立ち上がり、森の中を歩く。一号は俺の頭の上だ。
しばらくルーミアが俺に話しかけ、それを俺が適当に相槌を打ったりしていたが、

「ねぇ、壊。笑って。」
「は？」

何を言い出すんだコイツは。
急に訳の分からない事を言い出すルーミアを見る俺。
俺の瞳には「馬鹿じゃねーの？」という気持ちが込められていることだろう。

「・・そんな目で見ないでくれない？私はただ、壊の笑ったところを見たことがないから
見てみたいと思っただけよ？」
「そうか。しかしなぁ・・・。急に笑えと言われてもな・・・。」
「やっぱり出来ない？」
「あぁ、すまんな。」

俺はそう言いながらルーミアの頭を撫でる。・・しかし笑うか・・・。
ん？そう言えば前に笑った事があるような・・・・・。

「っ！？」
「・・・壊？壊！どうしたのよ！」

頭が痛い・・・。視界にノイズが走る・・・。ルーミアが何か言っているが聞こえない。
不意に頭に浮かんだ人物、それは俺。何もない野原で、顔の半分を右手で隠しながら笑っている俺。
瞳孔が開いており、口を三日月のようにして狂ったように笑っている俺。・・俺？あれが？
知らない・・。俺はあんなの知らない・・。じゃあ誰だ？やはり俺か？

「壊！！」
「！・・・ルーミアか・・。」

ルーミアの声が聞こえ、頭に浮かんでいた光景が消える。
自分でも何故あそこまで焦ったのか分からないが、とりあえず安心した。

「どうしたのよ。急に座り込んで頭を抑えて。具合でも悪いの？」
「・・・いや、問題ない。すまない・・。行こう・・。」

俺は何とか起き上がる。頭はまだ痛いが、歩けないほどではない。
頭を右手で抑えながら歩こうとすると、左肩に何かが乗せられたので振り向く。

「・・・どうした、ルーミア。早く行くぞ。」
「今にも倒れそうな癖に何を行っているの？少し休憩してから行くわよ。」

そう言いながら俺を地面に叩きつけるルーミア。いや、心配してくれるのは嬉しいけど
地面に叩きつけるってどうよ？しかも力入れすぎだろ。

「・・ルーミア、さすがにこれは酷いだろう？」
「うるさい。どうせ貴方は私の話を聞かないでそのまま進むでしょう？」

間違ってないがな。っというかよくわかったな。
そんなことを思っていると、ルーミアが横に座り、俺の頭を持ち上げて、自分の膝に乗せる。
・・・膝枕？俺は何も言わずに黙って目をつぶり、休む事にした。

「・・・・・」
「・・・・・」

俺もルーミアも何も言わずに無言になる。こういうのを気まずいと言うのだろうか？
・・・はて？なんだこれは？
目をつぶっていたら頬に何かが落ちてきた。雨か？
そう思い、目を開けてみると・・・・

「・・・ぐす・・・うぅ・・・。」
「お、おい。どうした、ルーミア？何故泣いているんだ？」

ルーミアが泣いていた。いや、なんで？
流石の俺もこれには焦る。俺はなんとか起き上がり「ゴハッ！」ろうとしたのだが
ルーミアに胸を思いっきり殴られ、再び膝の上に頭を乗せられる。

「っ・・！ルーミア、一瞬だけだが息が止まったぞ？」
「うるさい・・！」
なぜか泣き止まないルーミア。いや、本当にもう泣き止んでくれ。
「あなたは・・・、こんな時でも私に頼ってくれないの・・・？」
ルーミアがそう言う。まだ泣いているが、さっきよりは落ち着いたようだ。
「あなたは戦いの時・・・いつも私を庇う様に戦っていたわ・・。私があなたより弱いのは分かってるわよ・・、でも悔しいのよ・・・。強くなれば少しは私に頼ってくれるんじゃないかと思ったのに・・、それでも貴方は私を頼ってくれないじゃない！」
「・・・・・・」
まぁ、確かに戦ってるときにルーミアを庇いながら戦ったさ。これから強くなるかもしれないのに死なれたら困るだろう？金の卵は孵化するのが遅いんだ。
っというか気づいていたんだな。
俺は泣いているルーミアの頬に右手を添えた。
「・・・なぁ、ルーミア。」
「・・・なによ・・・。」
「俺はな、別に君を頼っていないわけじゃないんだぞ？確かに、戦っている時に君を庇ったりもした。
しかしな、それは君を失うのが惜しいからだ。君はまだまだ強くなる。
そのうち、きっと大妖怪と言われるほどになるはずだ。
君が強くなれば俺も嬉しいしな。

それに、食材集めとかでも結構頼ってると思うぞ？」

俺はそう言いながらルーミアの頬から頭に手を移動させる。
そしてなるべく優しく撫でた。
するとルーミアはさらに泣き出してしまった。俺がまずいと思い、今度こそ起き上がる。
起き上がった途端、ルーミアが俺に抱きつき、声を押し殺して泣いた。
次からは泣かせないように気をつけよう・・・

「で、泣き止んでくれたか？」
「・・・えぇ・・。」

そう言いながら離れるルーミア。物凄い顔が赤かった。

「さて、いつまでも止まっていられない。そろそろ行くぞ。」
「あ・・・。」
「どうした？」

俺とルーミアが二人で立ち上がり、俺が歩こうとするとルーミアが呼び止めた。
そして手をモジモジとさせて上目遣いでチラチラとこちらを見る。

「壊・・ありがとう・・。」

「・・・どういたしまして。行くぞ。」

俺はルーミアにそう言い、歩く。ルーミアは嬉しそうな顔をして俺の後に付いて来た。

さて、これから何が起こるかな・・・

第４８話：ちょっとしたお話（後書き）

そろそろ話を進めようかなと思っています

第４９話：闇の女王との別れ（前書き）

タイトル見ればわかりますよね？
（シルエットと一号の名前をまだ募集しています）

第４９話：闇の女王との別れ

俺がルーミアと旅をしてから３００年くらい経った。なに？適当？いいんだよ。そもそも３００年もあったことを説明するなんてめんどくさいじゃないか。
今日、ある村に泊めてもらったときにルーミアが

「そろそろ一人で旅をしようと思うの。」

と言い出した。ちなみに、もう夜だ。

「・・そうか。行って来い。」
「まだ早いわよ。っていうか、普通そこは理由とか聞くものでしょう？」
「それもそうだな。で？なぜ急に一人で旅に出ようと？」
「なんか納得いかないけど・・・まぁ、いいわ。」

そう言いながら「コホン」と咳払いをし、改めて俺の目を見るルーミア。

「あなた前に私に『いい加減ルーミアも俺から離れるべきだ』って言ったでしょ？」
「・・・あぁ、あれか。言ったな。５０年位前に。」

ルーミアが結構強くなったから、いい加減に俺がいなくても大丈夫だろう、と
思った時だな。ルーミアとの旅は退屈しないが、それのせいでルーミアが自分の力を上手く扱えなきゃ意味がない。

妖怪も、俺がほとんど潰してたしな。

「それで私、思ったのよ。壊の言うとおり、
いい加減に一人で旅でもして、強くなろう、ってね。」
「・・そうか。まぁ、なんだ。頑張れ。」
「適当ね。」

呆れた目で見てくるルーミア。いいじゃないか。
まぁ、強くなる事に関しては俺としても大歓迎だ。
どうせ死ぬまで暇人なんだから俺を相手に戦えるようになって貰わないとなぁ・・・
そんなことを思いながら、俺たちは眠りについた・・・

次の日、俺たちは村から出て、再び森の中に入った。
泊めてくれた主人には礼として金の入った袋を置いてきた。恩人に礼をするのは常識だ。

「さて、ルーミア。この辺でお別れだ。」
「・・そうね。それじゃあね。」
「まぁ、待て。」
「？」
「最後に何か願いはないか？俺が叶えられる範囲なら叶えるぞ？」
「・・・そうね。じゃあ最後に、本気で貴方と戦いたいわね。いい

かしら？」
「そんなことでいいなら構わないぞ。」
そう言いながら、俺は構える。まぁ、自然体なんだがな。
ルーミアは闇で剣を作り、右手に持つ。さて・・・
「始めようじゃないか・・・」
ーーーーSideルーミアーーーー
「始めようじゃないか・・・」
壊はそう言うと、私に向かって走ってきた。そして拳で殴りかかる。
私はそれを剣で受け流し、さらに切りかかる。しかし、壊はそれを
後ろに跳んでかわす。
そして私に跳び蹴りを放ってきた。私は上に跳んでかわし、空中か
ら壊に向かって思いっきり剣を
振り下ろす。壊はそれを両手で挟んで受け止めた。そのまま私を後
ろに投げた。
「ふむ・・・。ルーミア、少し戦略が単純すぎるんじゃないか？
そんな単純なのではなく、例えば・・・」
そう言いながら壊は片膝をつき、右手を地面に押し付けるように開
く。

「こんなのもやってみるといいぞ？」

壊がそういった途端、私の周りの地面から刀や槍が飛び出してきた。
大量の武器で囲まれて周りが見えない！
そう思っていると、突然武器が地面から出てこなくなった。かわりに・・・

「王手だ。」

目の前には壊がいた・・・

ーーーーSide壊ーーーー

「王手だ。」

俺はそう言い、拳を振るう。するとルーミアが横に吹き飛んだ。あ、木にぶつかった。
さすがにやりすぎたかなぁ・・・。一応手加減したんだぞ？

「ぐ・・、ゲホッゲホッ！」
「・・大丈夫か？」
「そう思うなら・・・手加減してよ・・ね！」

そう言いながら闇のナイフを飛ばして来るルーミア。
俺はそれを最低限の動きでかわす。かわし終わると、いつの間にか

ルーミアが剣を振りかぶっていた。
あ、これは当るな。
そんなことを思っていると、わき腹に凄い衝撃が走る。
そのまま真っ二つ♪なんてことは嫌だったので、当たる前に妖力で強化しておいた。

「・・っ。痛いな。殺す気か？」
「そうでもしないと貴方は倒せないでしょう？」

容赦ないなぁ・・・。
俺は剣を掴み、能力で創った鎖で剣から離れないようにルーミアの手を縛る。
そして剣を思いっきり振り、ルーミアを地面に叩きつける。

「ガ・・ハッ・・・！」
「まだ終わらせんよ。」

そう言いながらもう一度叩きつける。
するとルーミアは仰向けに倒れたまま「降参」と言った。
俺は鎖を消し、ルーミアの横に座る。

「で、どうだった？」
「改めて貴方の実力が恐ろしいとわかったわ。」
「まぁ、今の状態じゃあんなものさ。」
「今の状態？」
「あぁ、ほら。」

俺はそう言いながら自分の腕輪を着けている右手首を見せる。

「これを着けている時は全力を出しても精々2割くらいが限度なん

だ。」
「・・・化け物ね・・・。」
呆れながらそう言うルーミア。まぁ、本気で戦ったら退屈しのぎにならんだろう？
「さて、俺はもう行くぞ。じゃあな。」
「えぇ、また会いましょう。」
俺は立ち上がり、一号を肩に乗せ、そのままその場から去った・・・

ーーーーSideルーミアーーーー

「あれで本来の2割しか力が出てない・・ね・・。」
壊が去った後、私は静かに微笑んでしまう。
これは壊の本気を見てみたいと言う好奇心からだ。
彼の本気はどれほどのものだろうか？見てみたい。しかし・・・
「まずは今の壊よりも強くならなくては駄目ね・・・。」
壊は強い。その辺の妖怪が現れても、殴るだけで倒してしまう。
「ふふふ・・。絶対に貴方よりも強くなるわよ？」
本気を見るだけじゃ物足りない。どうせなら壊を私のものにしてしまいたい。
私はそう思いながら、壊が進んだ方向とは逆の方向に進んだ・・・

オマケ
その頃の瑠璃は・・

「瑠璃様、これとこれとこの書類にサインをしてください。」
「あ、わかりました。」
「あと、部下からの報告で・・・」

ひたすら仕事と闘っていた。

第４９話：闇の女王との別れ（後書き）

はい、そんなわけで終わりました。
次回は時間を少し飛ばして物語を進めます。

第５０話：決まった名前（前書き）

タラタラッタタ～～♪
一号とシルエットの名前が決まりました！

第５０話：決まった名前

『やぁ、元気にしてたかい？』
「またお前か・・・。名無しだったか？なんのようだ？」

いきなり人の夢に出てくるなんて、失礼極まりないな。

『冷たいな・・・。僕は悲しいよ。ほら見てどんどん涙が・・・。』
「いや、真っ暗だから何も見えないぞ？」

そう、ここは真っ暗なのだ。目を開けているのかどうかもわからないし、
右か左かもわからない。

『それもそうだね。まぁ、そんなことはどうでもいいんだよ。』
「・・・何故だろうか。お前の話し方が
ハンバーガーの赤白の道化師みたいだ・・・。」
『ラン☆ラン☆ルー☆』
「やめろ。」

ん・・・、そういえば・・・

「普通に喋れるな。」
『今頃気づいたの？』

前は喋る、というよりも頭の中で思ったことをコイツが読み取ってたからなぁ・・。

「なぁ、なんで俺は普通に話が出来るんだ？」
『うん？それはね、君の力が強くなったからだよ。』
「そうなのか？」
『うん。君の力が強くなって、僕の創り出した空間を上回ったんだよ。
凄いね～。パチパチパチ。』
うぜぇ・・・。馬鹿にしてるだろ？ん？

「・・・まぁ、いい。で、ここは俺の夢じゃないんだな？」
『うん？一応君の夢の中だよ。ただ、僕が君の夢の中に入って勝手に僕の空間を創っただけ。
そうしないと君と話が出来ないんだよ。僕ってそこまで強くないからさ。』
「・・そうか。それより、そろそろ本題に入って欲しいんだが？」
『冷たいね。僕としてはもう少し話したいんだけど・・・。
うん、じゃあ用件を言うよ？
君さ、前から一号君とシルエット君の名前を欲しがってたよね？』
「あぁ。というか何故知っているんだ？」
『気にしないで。それでね、なんと、一号君とシルエット君の名前が決まったんだよ。』
「いや、誰が決めたんだ？」
［俺だ。］（↑作者です。）

出てくんな。

『それでね、一号君の名前はね～・・パラパラ～、っと。
あったあった。ポチ』
「おい」
『嘘だからね？だからそんなに殺気を飛ばさないで。凄く怖いよ？

コホン・・、では改めまして。一号君の名前は『絶(ぜっ)』だって。』
「・・・『絶』？」
『うん。なんとなくこんな名前にしたかったんだって。』
何という下らない理由だ。
『シルエット君の方はね・・・『ナイア』だって。』
「ナイア・・・・。」
『うん。クトゥルー神話のナイアルラトホテップからだって。
名前を考えてくれた妖さんに感謝だね。』
いや、俺はそのような人物は知らないぞ?ただ、まぁ感謝だ。妖殿。
これは、俺もシルエットに合う名前だとは思う。シルエットは戦うとき、
地面に水溜りのように張り付いて移動する事が多い。ある意味『這い寄る混沌』だ。
『さてと。これで僕の君への用事は終わりだよ。』
「そうか・・。わざわざご苦労だったな。」
『別に構わないよ。それが僕の仕事なんだからさ。
それじゃ、そろそろお暇させてもらうよ。』
名無しがそう言った途端、俺の意識が途切れた・・・・

「・・・ん・・・朝か・・・。」

そう言い、俺は起き上がる。・・・あぁ、そういえばルーミアと別れたんだったな。

とりあえず、テントを消し、一号とシルエットを呼ぶ。

そして二人?に、夢で名前を決めたことを説明する。一号、もといい絶は普通に頷いていた。

しかし、シルエット、もといナイアは文字通り飛び跳ねて喜んでいた。それはもう、凄い勢いで。

周りにある木が木端微塵になるくらいだ。いい加減落ち着こうな。

「さて、と・・。行くか。」

俺は絶を肩に乗せ、ナイアを石に仕舞い、再び旅を始める。

いい退屈しのぎが見つかるといいな・・・

あ、朝飯まだだった。

第５０話：決まった名前（後書き）

はい、そんなわけで終わりました。
一号は絶。シルエットはナイアです。
一号は自分で名づけました
シルエットの名前を考えてくれた妖さん、
ありがとうございます。

第５１話：餓えた鬼（前書き）

新しい悪役キャラですぜ！

第５１話：餓えた鬼

そんなこんなでまた２００年ほど経った。人生適当一番～♪なんてのも少し嫌だので、
２００年の間にあった事を説明しよう。
まず俺は、旅をしながら絶たちにちょいと特訓に付き合ってもらう、ということをしていた。
具体的には、俺一人ｖｓ絶・ナイア・ゲート、見たいな感じで戦ってもらってた。
結果？死に掛けたさ。なんせ絶だけでも充分強いからな。上級妖怪が何匹かかっても、
絶には勝てないだろうな。
で、まぁ絶たちと特訓という名の死合をしていたので、かなり強くなった。・・・と思う。
そして、驚く事に今の時代を説明すると・・・まぁ、平安の一歩手前くらい？
ちなみに、今俺が何をしているかと言うと寺に来ている。
何故かって？それを話すには少し遡る必要がある・・・

俺は何事もなく普通に山を下っていた。本当に何事もなかった。
しいて言えば、途中で目の前でスキマが開き、
それに驚いて妖力弾をぶっ放したくらいだ。・・これくらいなら大丈夫だよな？

「・・・ん？あれは村か？」

下らないことを心配していると、山の麓あたりに村があった。今日はあそこに泊めてもらおう。
そう思い、村に近づく。すると村の見張りををしている男が・・・

「止まれ、この村になんのようだ?」

と言ってきた。

「ん?あぁ、実は今日この村で泊めてもらおうと思ったんだ。」
「・・・それは駄目だ。」
「?なぜ?」
「実はな・・・・」

見張りAが言う事には、最近この近くに妖怪が住み始め、週に一回この村の住民を食いに来ているそうだ。
村の皆で話し合った結果、妖怪が食いに来るときだけはどんなことがあっても旅人などは泊めないようにしているらしい。
なんでも、その妖怪は村に入って来たときに村人を二人食いに来るそうで、その内の一人は前の週に
誰を食うか伝えるらしい。そしてもう一人は村に入ってから決めるらしい。
残念なことに、この見張りAの娘が食われるそうだ。ドンマイ、いつかいい事あるさ。
ん?待てよ・・・

「その妖怪は強いのか?」
「あぁ、とてつもなく強い。」

なるほど・・・。退屈しのぎになりそうだ。

「その妖怪の居る場所を教えてくれないか？」

場所を聞いた後、何故そんなことを聞くのかと言われたので素直に
「退屈しのぎに行く」
と言ったら見張りAが「やめておけ」とか「行くな」とかうるさかったので、少し寝てもらった。
何人たりとも俺の退屈しのぎは邪魔させんぞ。

「ここか・・？」

そんなことを思っていると、いつの間にか目的地に着いた。
俺の目的地は寺。かなり古くボロッチくなっている寺だ。
まぁ、これで俺が寺に来た理由はわかっただろう？・・・それにしても・・

「いい退屈しのぎになりそうだな・・・。」

寺の中に入っていないが、かなりの妖力を感じる。・・・ルーミアの妖力より大きくないか？
俺は肩に乗っている絶に地面に降りるように言い、寺の中に入った。
寺に入ると、まず外に居たときよりも大きい妖力を感じた。そして中央には・・・

「・・・骨？」

そう、人骨が積んであった。それもかなりの量だ。軽く１００人は食ったんじゃないか？

「我に何用だ？」

しばらく骨の山を見ていたが、不意に横から声が聞こえた。見てみると、
そこにはおかめの面のような物を顔に着け、身体を布で隠している、どっかで見たことのある
妖怪が立っていた。ってかでかい。５m以上はある。

「・・お前が最近この近くの村の人間を食ってる妖怪か？」
「それがどうした。人間は妖怪に食われるためにいるのだ。」
「あぁ、いや。別に君が村の人間を食ってようが、俺にはどうだっていい。」
「なんだと？ならば何をしに来た？」
「あぁ、それはな・・・・。」

俺はそう言いながら少しだけしゃがむ。

「俺の退屈しのぎに付き合ってもらいたくてな。」

そう言いながら妖怪に向かって跳ぶ。そしておかめの面を蹴った。
すると妖怪は少し後ろに下がる。しかし、すぐにその鋭い爪で俺を引き裂こうとした。
俺は霊力で自分の前に壁を作り、それを蹴って後ろに跳んだ。着地したと同時に、
ズザザー、と後ろに下がり、埃が宙を舞う。

「貴様ぁ・・・。よくも我の顔にぃ・・！！」
「顔じゃなくて面だろう？」
「黙れぇ！！」

妖怪がそう言うと、おかめの面の口の部分が横に割れ、鋭い小さな歯がビッシリと見えた。
そしてドスン！ドスン！という音を出しながら俺に向かって突っ込んでくる。・・嘘ぉ、速い・・。
妖怪は俺の前まで来ると、その腕で俺を横に薙ぎ払った。俺は回避が間に合わないと悟り、
腕で防御する。しかし、相手の力が強く、俺は吹っ飛ばされた。
そのまま寺の壁をぶち破り、外に放り出され、木に叩きつけられた。
・・・痛いな。

「小僧が。調子に乗るからこうなるのだ。」

そんなことを思っていると、さっきの妖怪が現れた。寺の中はあまり明るくなかったから
細かいところは見えなかったが、月明かりのお陰でよく見える。まず第一印象、気色悪い。
おかめの面を着けているのはさっきも言った。髪はボサボサで長い。
そして細長い手足に鋭い爪、体の布もボロボロだった。・・・なんか見たことあるな・・。

「・・それにしても君はどんな妖怪だ?少なくとも今まで見たことがないぞ?」
「我は餓鬼だ。」
「餓鬼・・?」

あれか、いつも腹を空かしてる鬼か?こんなにでかいんだなぁ・・・。

「言っておくが、餓鬼が全員巨大なわけではない。我が人間を食らって妖力がでかくなったから巨大化したのだ。」
「・・餓鬼は自由に飲食を出来ないはずだぞ?」
「我の能力は『自由に食らう程度の能力』と『食らった数だけ強くなる程度の能力』だ。」

いや、もう程度じゃねーよ。じゃ何か?食ったら食った分だけ強くなるってか?
しかも自由に飲食できるってか?成長期か?

「一体どれだけ長く生きてきたんだ?」
「我は１５００年生きておる。」

長生きですねー。・・それにしても１５００年の間まったくこいつのことを知らなかった。
だからこんなに妖力がでかいのだな。納得だ。
俺はそんなことを思いながらも、腕輪を外す。さて・・・

始めようか・・・・・

第５１話：餓えた鬼（後書き）

はい、そんなわけで次に続きます。
この餓鬼のモデル、わかるかな？

第５２話：破壊の凶鳥（前書き）

風引いた・・・。

第５２話：破壊の凶鳥

前回のあらすじ。
大妖怪レベルの餓鬼と戦うことになった壊。しかし、思っていたよりも強かったので、
腕輪を外してパワーＵＰしたのだ。・・・それでも本気じゃないけどね。

腕輪を外した俺は餓鬼に向かって走る。おそらく、餓鬼には見えていないだろう。
そして最初に攻撃したように面に攻撃をした。すると、餓鬼は今度は後ろに吹っ飛んだ。
・・・４割くらいでも結構飛ぶんだな。今更ながら、自分のチートさが凄いと思う。
クックルになったらこの辺り一面は消し飛びそうだな。

「ぐぬぅ・・・。貴様ぁ！！」

下らないことを考えていたら、餓鬼が本気を出した。おぉ、凄い凄い。
今の４割の俺よりちょっと強いくらいだな？
ちなみに、俺は妖力しか開放していない。もう一層のこと、妖怪名乗ろうかなぁ・・・。

「死ねぇ！小僧がぁ！！」

そう言いながらおかめの面が横に割れ、そこから炎が出てくる。
ってか火、吹けるんだな。
俺はそれを真正面から妖力の盾で受け止める。しばらくそれが続いていたが・・・

『ピシッ！』

妖力の盾にヒビが入った。まぁ、そりゃそうだろうな。
手を抜いてればヒビくらい入るだろう。
俺はその場から横に跳んだ。すると妖力で作った盾が消え、そこを黒い炎が通る。
そして俺が改めて餓鬼のほうを見ると・・・

「死ねぇ！！」

目の前に腕を振り上げている餓鬼がいた。
かわす事は不可能。よって腕を交差させて防御をする。
餓鬼の腕が振り下ろされた。すると「ドスン！」という音がし、俺の足元が少しへこんだ。・・・重い・・。

「・・重い一撃だな。」
「そのまま潰れてしまえ！！」

そう言い、もう片方の腕を振り上げて俺に攻撃する餓鬼。
それをバックステップでかわし、再び餓鬼の目の前まで来てジェノサイドカッターもどきをする。すると、それが餓鬼の体に当たり、布が少し切れる。

「・・なんとも悪趣味だな・・。」

切れた布の間から見えたのは、骨、骨、骨骨骨骨・・・
ファッションか？ならやめておけ。

「これは我の非常食だ。我はよく腹が空くからな・・。」

そう言いながら、切れた布の部分に手を入れ、頭蓋骨を取り出す餓鬼。
そしてそれを食った。おかめの面が横に割れて、骨をガリガリと齧るとは・・。
なんともシュールだな。・・・何故か納豆を食いたくなくなった。
・・？まてよ？確か餓鬼の能力は・・・

「ふ～・・・満足だ。」

そう言うと、さっきよりも僅かだが妖力が増す餓鬼。しまったー！！！

『食らった数だけ強くなる程度の能力』を忘れてた！ん？でも強くなっていいのか。
俺がそんなことを考えていると、餓鬼が再び口から火を吹いた。
それを上に跳んでかわし、すぐに地面に着地する。
俺は餓鬼に能力で創った鉄の玉を１０個くらい飛ばす。
ちなみに、なぜ殺傷能力の高い武器を使わないかと言うと、退屈しのぎがすぐに終わってしまうからだ。
餓鬼はそれをかわさず、腕を振って全部落とした。・・今鉄の玉砕いたぞ？
俺はさらに、餓鬼向かって走る。そして思いっきり跳んでかかと落としをする。
かかと落としは見事命中し、餓鬼の顔は地面にぶつかる。

「ぐ・・がっ・・・！」

「気分はどうだ？」

俺がそう聞いても、餓鬼は何も言わない。
しばらく見ていると、餓鬼は起き上がり、骨を取り出す。
そしてそれを食った。何回も何回もそれを続け、やがて非常食＆強化のための
骨がなくなると、もの凄い速さで寺の中に入った。・・いや、見てる場合じゃないだろう。
俺は寺に入った餓鬼を追いかけようとした。すると・・・

「・・・！？」

寺の中からものすごい妖力を感じた。そして寺の入り口から餓鬼が出てくる。
餓鬼の妖力は先程とは比べ物にならないほど跳ね上がっていた。
俺は身構えた。が・・

「遅いわぁ！」
「っ！ガハッ！」

見えないほどの速さで餓鬼が俺を殴った。その攻撃をかわすことも、防御することも
出来なかった俺は、吹き飛んだ。そして何回かバウンドすると、やっと止まってくれた。
・・・骨が何本かやられたな・・・。

「・・ぐっ・・！持っていた骨と寺に有った骨を全部食ったのか・・。」
「その通り。教えてやろう。我がどれ程の大妖怪かを！」

いつの間にか俺の前に立っている餓鬼がそう言いながら、
俺を掴んで上に投げた。そして見えない爪の連撃。
引き裂かれて、骨が見えて、内臓がグチャグチャになる。痛い・・・。
やがて餓鬼は宙に浮いている俺を掴み、地面に叩きつける。
・・・いてぇ・・

ーーーSide餓鬼ーーーー

目の前には血塗れになった小僧。

「死んだか・・・。」

手強い小僧だった。まさか１５００年も生きた我が、ここまで苦戦するとは・・・。
しかも、蓄えていた骨まで無くなってしまった。

「やれやれ・・・。今日は行くのをやめて明日にするかの・・・。」

そう思い、寺に戻ろうとして、回れ右をした。

「待テ・・・。」
「なっ！？」

寺に戻ろうとした時、後ろから声が聞こえた。
馬鹿な・・・。やつは確かに倒したはずだ・・・。
そう思い、後ろを振り向く。そこには・・・・

「ッ！？」

濁ったような目をし、口を三日月のようにして笑っているあの小僧が居た・・・

ーーーーSｉｄｅ壊ーーーー

こちらを見ている餓鬼は驚いているようだった。
こんなところで死なないさ。それに・・

「ククック・・・。」
「小僧！何を笑っている！」
「なぜ笑うかだと？そんなこと決まっているだろう？」

こんな気分は久しぶりだ。そうこれこそが俺の求めるもの。

「楽しいからさ！この刹那の死線こそに身を委ねる価値があり！敵を殺し、殺し殺し殺し殺し殺し尽くす！
より強き強者と戦い、死線を潜り抜ける事！
それが俺の求めたものだ！さぁ、再び始めよう！絶望の舞台は整った！」

俺はそう言いながら、クックルになり、力を全開にする。
それだけで寺が木端微塵になった。そして驚いている餓鬼に向かって一瞬で近づき、
右腕を引き千切る。

「が・・がぁぁぁぁ！！」
「クッハッハッハッ！」
「ぐ・・・ぬ・・・。」

餓鬼は俺から後ろに跳んで離れる。そして黒い炎を口から出した。
俺はその炎の中に突っ込んだ。そして炎の中を進む。熱さ？そんなものはどうでもいい！
そして餓鬼のところまで辿り着くと、少し跳び、餓鬼の腹に手を突っ込んだ。

「ぐ・・小僧・・きさまぁ・・！」
「どうしたどうしたこんなものかぁ！！」

そう言いながら、中から内臓を引っ張り出し、それを掴んだまま餓鬼を
振り回す。地面に、木に叩き付けながら振り回す。

「その身に刻め、凶鳥の力を！
絶望し、恐怖し、そして朽ち果てろ！」

俺は餓鬼を振り回しながら叫ぶ。もはや餓鬼には聞こえていないだろう。
それでも振り回し続ける・・・・

「なんだ。もう終わってしまったのか？」

目の前には、餓鬼だったもの転がっている。
その体は骨が見え、内臓が飛び出ており、ズタズタになっている。
俺は餓鬼の頭をクックルの足で踏み。少しずつ力を込める。
すると「グチャッ」と潰れた。脆いなぁ・・・。
それがなんだかとてもおもしろく感じてしまい、色々なところを踏んでは潰す。あぁ、脆い・・・

「ククククク・・・アーハッハッハッ！」

彼は笑う。すべてが恐怖し、絶望する声で彼は笑い続ける・・・

一つの村があった。その村はある大妖怪に脅され、
週に一回だけ贄を要求されていた。
そして、大妖怪が贄を食らいに来る日、その大妖怪は来なかった。

次の日に来るのだろ、村人たちはそう思い、大妖怪が来なかった日に、
最後の宴会を開いた。そしてその日は終わった。
次の日、村の若い男がなぜ来なかったのか気になり、
大妖怪の住んでいる寺を見に行った。しかし、寺はなくなっており、
寺があった場所にはグチャグチャになった何かがあった。
男は理解した。きっとこれが大妖怪なんだと。そして死んだのだと。
男は村に帰り、大妖怪が死んだ事を伝えた。
村の住民は最初は疑っていたものの、屈強な男たちが
確認をしに行くと確かに大妖怪は死んでいた。村の住民は喜んだ。
そしてその村は平和に暮らせるようになった・・・。
しかし、村人は気づいていない。それは・・

――もしかしたら自分たちが凶鳥に殺されていたかもしれないという事を――

第５２話：破壊の凶鳥（後書き）

はい、終わりました。
途中から何を書いてるか分からなくなっちゃいました。

第５３話：恩人たち（前書き）

今回は、シリアル面あんまないです

第53話：恩人たち

俺は今、自分の体に包帯を巻いている。なぜかって？餓鬼にやられたからに決まってるだろう。
ちなみに、その餓鬼は気がついたらグチャグチャになっていた。誰かが助けてくれたのだろうか？
（※壊は自分が餓鬼を倒した事を覚えていません）

「壊さん。大丈夫ですか？」

そう言いながら部屋に入ってくる青年。名はコウと言うらしい。
俺が血塗れで歩いていたら、家に来て治療するといい、と言って招いてくれた。
ちなみに、この家に来てまだ1日しか経っていない。

「あぁ。問題ない。」
「そうですか。それじゃあ、僕はもう行かせてもらいます。」
「わかった。」

そう言い、部屋を出て行くコウ。
コウには親がいない。そして妹と弟が一人ずつ居る。二人はまだ幼いので、
一番上のコウが頑張って働いてなんとか生活しているらしい。苦労してるんだな・・・。

「壊兄ちゃん！遊ぼう！」

そんなことを思っていると、コウの弟、テツが勢いよく部屋に入っ

てきた。
テツは手に、木の棒を持っていた。しかも二本。
「・・・まぁ、いいがな。何をしてだ？」
「チャンバラ！」
わかってたさ。俺は木の棒をテツから受け取り、家の前に出た。
そして片手で木の棒を持つ。子供相手なんだ。手加減ぐらいするさ。
テツは両手でしっかりと木の棒を持って構えていた。
「行くぞ！僕だって強いんだから！」
そう言いながら俺に向かって走ってくるテツ。
そして木の棒を横一文字に薙ぎ払う。俺はそれを軽く受け止める。
「踏み込みはまぁまぁだな。力が足りん。」
俺はそう言い、テツの木の棒を自分の木の棒で絡めとり、引き寄せた。
すると木の棒はテツの手から離れる。
「俺の勝ちだな。」
「ちぇ～。僕これでもチャンバラで負けた事一度もないのに・・。」
「まぁ、才能はあるみたいだぞ。」
「本当！？」
「本当だ。それに、こんな嘘はつかんよ。」
すごい喜んでいるテツ。「やっほー！」とか言いながら向こうに走ってしまった。
・・・変な目で見られないといいな・・・。

そんなことを思っていると、服の裾を引っ張られる。

「ん？・・あぁ、ヒナか。どうした？」

俺の服の裾を引っ張ったのは、コウの妹のヒナだった。

「あの・・・、壊お兄ちゃんってお料理できるんだよね？」

「あぁ、一応な。それがどうかしたか？」

「その・・・、迷惑じゃなかったら教えてほしいの・・。ダメかな・・？」

そう言いながら上目遣いで俺を見てくるヒナ。ここでダメって言ったら、

絶対に泣くな。そしたら村の連中に変な目で見られる。

「別に構わんぞ。」

「本当に？ありがとう。」

「・・まぁ、なんだ。行くぞ。」

「うん。」

俺は家の中に入り、ヒナに今晩の晩飯の料理の作り方を教えた・・・

そんなこんなで晩飯だ。ちなみに、俺が作った。ヒナが作った奴は、ほとんどが黒く焦げていて、唯一成功したのは味噌汁だけだった。・・料理、作れなかったんだな。

ちなみに、テツとコウは風呂だ。そろそろ上るだろう。

「あぁ～、いいお湯だった。」

そう言いながらテツが食卓に着く。ちなみに、今日は米、味噌汁、漬物、卵焼きだ。
やがてコウも来て４人揃った。

「さて、いただきます。」
「「「いただきます」」」

そう言い、食べ始める。ちなみに、３人に料理を作ったのは今日が初めてだ。
口に合うか・・・。

「すごーい！これおいしい！壊兄ちゃんが作ったの？」
「あぁ。一応な。ヒナも頑張ったぞ。」
「へぇ～。これはすごいや。壊さんは料理が上手ですね・・。」

そう言いながら卵をひょいひょい口に運ぶ二人。
ヒナも満足そうに食べている。俺は味噌汁を啜る。ズズー。

「壊兄ちゃんって何でも出来るんだね。強いし、料理も出来るし。」
「なんでも・・は出来ないぞ？」
「でも、これだけ出来ればすごいと思いますよ？」
「そうだよ。壊お兄ちゃんってすごいよ。」

そんなもんか？俺はそう思い、再び味噌汁を啜る。ズｚ「大変だ！！」
味噌汁飲ませろ。
いきなり男が玄関の引き戸をガラガラと勢いよく開けた。

「どうしたんですか？」
「よ・・妖怪が現れた！」

男がそう言うと、コウの顔が青くなった。テツは「やってやるぜ！」みたいな顔をしており、
ヒナに至っては泣きそうになってる。まぁ、陰陽師とかがいないこんな場所じゃあなぁ・・・。
俺はそう思いながらも、卵焼きを口に入れる。・・うん、そこそこ美味い。

「ど・・どうしよう・・。壊お兄ちゃん・・。妖怪だって・・！」
「大丈夫だよ！僕が倒してくるさ！」

そう言い、外に飛び出そうとしたテツを片手で引き止める。

「壊兄ちゃん、何するんだよ！」
「お前が行っても食われるだけだ。妖怪をなめるな。」
「でも・・・！」
「テツ。壊さんの言うとおりだ。」

コウがそう言うとテツはションボリとする。仕方ない・・

「絶、来い。」

俺がそう言うと、部屋に居た絶がふよふよ～、みたいな感じで出てくる。

「壊お兄ちゃん・・。そのお人形さんなに？」
「俺の仲間だ。絶、少し出かけてくる。この家のことを頼んだぞ？」

俺がそう言うと「任せておけぃ！」という感じに胸を叩く絶。
俺はそのまま立ち上がり、玄関に向かった。

「壊さん、何処に行く気ですか！外はまだ危ないんですよ！？」
「なに、少し退屈しのぎをするだけさ。」

俺はそう言い、男に退くように言い外に出る。コウが俺を止めようとしたが、
絶に押さえつけさせる。さて・・行くか・・・

「これはまた・・ずいぶんと多いな。」

目の前には妖怪妖怪妖怪・・・
ざっと５０匹ほどいる。まぁ、こいつら全部下の上くらいだから、大したことはない。俺は右手から妖力弾を撃って一匹を粉々にする。
さて、と・・

「来い。雑魚ども。皆殺しにしてやる。」

俺がそう言うと、雑魚どもが一斉に飛び掛ってきた。
近くにいたやつらを殴り、蹴り、叩きつけたりして倒していく。
やがて数も減り、妖怪たちが焦り始めた。・・ふむ、少しは頭が回るようだな。

どうせ殺そうが殺すまいが大した差はないな。

「まぁ、なんだ。今なら見逃してやってもいいぞ？」

俺がそう言うと、残った妖怪たちが一斉に逃げ出した。

さて戻ろう。心配してるだろうしな。・・してるよな？

家に戻った俺は驚いた。なぜ驚いたかって？それはな・・

「なんみょ～ほう（以下略」

なんか村のやつらが集まって葬式を開いていたからだ。

俺は試しに、近くにいたちょっと年取った爺さんに聞いてみた。

「おい、これは誰の葬式なんだ？」

「あぁ・・・。コウの家に泊まっていた壊っちゅー人の葬式だ。

ワシ等のために命を掛けて戦ってくれたんじゃ。だがあの数じゃ生きとらんわい。」

そう言いながら南無阿弥陀仏と手を合わせながら呟く。

「おい。勝手に殺すな。俺は生きているぞ。」
「何を言っておｒ・・・ギャー！出たーー！！」

この後は大変だった。坊さんが、俺が化けて出たとか言って塩を投げつけたり、
それに混じって他のやつらも色々なものを投げたりした。
途中、絶を投げてきた奴がいたので、そいつだけは軽く殴った。
そんな騒動の後、やっと理解してもらい、俺は「疲れた」と言い部屋に戻って寝た・・

第５３話：恩人たち（後書き）

ギャー！出たーー！！
はい、そんなわけで終わりました。
次はどうしようかな～・・・

第５４話：仕事は道場の先生（前書き）

タイトルでわかりますね。

第５４話：仕事は道場の先生

葬式騒動から一週間が経った。俺はコウたちの家に泊めて貰っているのだが、
さすがに何もしないのは失礼だろう、と思った。そこで、仕事をすることにした。
その仕事とは・・・

「「「先生、よろしくお願いします！」」」
「あぁ、よろしく頼む。」

道場みたいなものを開いて、先生をやっている。
生徒たちが教えて欲しいと言って来たものを教えている。
基本は剣とか槍とか。弓なんかもいたなぁ・・。
ちなみに、テツも来ている。一緒に住んでるから金は取れん。

「よし、お前ら。今日はまず腕立て１０００回だ。」
「先生！無理です！」
「む？そうか・・。仕方ない。なら２０回だ。その後腹筋２０回。」

俺がそう言うと、一斉に腕立てふせを始める生徒たち。
だいたい３０人くらいが俺に教えを乞いに来ている。もちろん、男だけじゃない。

「せ・・先生・・。皆終わりました・・。」
「そうか、ご苦労。なら、各自練習をしろ。」

俺がそう言うと、全員が武器を取りに行く。武器といっても全部木で作られたものだ。

そこまで危険じゃない。槍に関しては、先を丸くしてあるしな。
武器を使わない者たちもいる。三人くらい。そいつらは拳だ。男なら拳で語れ！とか言ってたな。

「さて・・・。調子はどうかな・・・。」

刀チーム（もとい、剣チーム）

「あ、先生！」

そう言いながら生徒が一人やってくる。

「どうした？」
「少し、僕と組んでもらえませんか？」
「・・・まぁ、いいがな。おい、そこの生徒。少しそれを貸せ。」

俺がそう言うと、別の生徒が木で作られた刀を渡してくる。さて・・・

「来い」
「行きます！はぁっ！」

踏み込んで来る生徒。俺はそれは軽く受け流す。
それに負けじと連続で打ち込んでくる生徒。

「そこだ！頑張れー！光気（こうき）！」

テツが何やら応援している。こいつは光気と言うのか。

一瞬だけ光がテツの声に反応したので、そこで刀を弾く。

「うわー！先生汚ねぇー！」

やかましい。名前もない脇役キャラの癖に。

「まぁ、なんだ。踏み込みはそこそこだったな。後は努力次第でどうとでもなる。頑張れ。」

俺は最後に、光気の頭を撫でて他のところに行った・・・

槍術チーム（もとい矛チーム）

こっちは至って普通だった。精が出るな。

「はぁ！」

「うわわわ！ぷぎゃ！」

なんとも間抜けな声が聞こえたのでそちらを見る。

そこには、尻餅をついたであろう女子生徒と、木の槍を突きつけている女子生徒がいた。

あの槍を突きつけている女子生徒は知っている。氷華（ひょうか）だ。

二日くらい前にここに来たやつで、神童とか言われている。髪の色は灰色で、

それをまとめて縛っている。顔立ちも整っている・・・らしい。俺にはよくわからない。

「そこまでだ。氷華、君の勝ちだ。」

俺は尻餅をついている女子生徒に手を貸し、起こす。
確かこいつは・・・・

「雪だったかな？」
「あ、はい。そうです。」

雪は頷く。こいつはビックリするくらい戦うのを怖がっている。
それなのに、何故ここに来たのかと言うと、親に行けと言われたそうだ。
・・哀れだな。

「先生、何か用でしょうか？」
「ん？あぁ、別に用はない。ただ見に来ただけだ。」
「それなら私と一戦願えますか？」

氷華はそう言い構える。俺、まだやるなんて言ってないぞ？
まぁ、いいさ。

「雪、君のを借りるぞ。」
「どうぞ。」

俺は雪に木の槍を借りて、片手に持つ。あぁ、めんどくさい。
個人的には、氷華みたいなタイプは苦手だ。氷華は負けた事がない。
と、いうのも、氷華の家はそれなりに位が高い家だ。
氷華はそこで自分の父に槍での戦い方を習い、その父は娘に甘かっ

たらしく、
毎回氷華にわざと負けていた。そして家の家来にも、氷華にはわざと負けるように言い、
試合をさせていた。そんなわけで氷華は全勝無敗。まぁ何が言いたいかと言うと、
こいつはめんどくさい。色々と。

「先生の実力は見たことありませんが・・・。行きますよ?」

氷華はそう言うと槍を持ったままこちらに突っ込んできた。それをかわす。
氷華はそのまま横に薙ぎ払った。俺はそれを槍で受け止める。
・・・まぁまぁだな。才能はあるみたいだ。これならこの道場の生徒の中では
一番強いだろう。そう・・

「生徒の中ならだ。」
「なっ!?」

俺は槍を氷華の足に滑らせ、薙ぎ払う。氷華は「ふぎゃ!」と言う声を出して尻餅をついた。

「まぁ、こんなもんだ。」
「そんな・・私が負けたなんて・・・。」

ブルーになってる氷華。まぁ、俺からしたら、こんなものお遊びだが、
氷華にしてみたら真剣勝負だったんだしな。そりゃショックだな。

「雪、返すぞ。」

「あ・・ありがとうございます／／／」

雪の顔が何故か赤くなっている。風邪でも引いたか？
俺は雪の額に自分の額をくっ付けた。・・・少し熱いな・・。

「雪、今日はもう帰れ。少し熱いぞ？」
「あ・・はい。わかりました。それじゃ・・」

そう言いながらふらふら～と歩く雪。・・本当に大丈夫か？
俺はそう思い、絶に送らせる事にした。
さて・・行くか・・・

そんな感じで俺は今日も子供たちに教えていた・・・

しかし、壊は知らなかった。氷華に勝った事が、後に面倒な事になるということを・・・

第５４話：仕事は道場の先生（後書き）

そんなわけで終わりました。
オリジナルキャラが出ましたね。

第５５話：平穏な日常とスキマ妖怪（前書き）

今回は紫さんが出ます

第５５話：平穏な日常とスキマ妖怪

「そこまでだ。」

試合終了の合図を言い、止めに入る。ん？何をしてるかって？
生徒が組んで戦うあれだ。組手だ。戦っていたのはテツと光気で、
結果、テツの勝利。・・・まぁ、どんまい。

「次は私です！」

そう言いながら出てきたのは氷華。
ちなみに、氷華の相手になるのは、テツくらいしかいない。
他のやつだと３０秒くらいでダウンするんだよなぁ・・・。

「で、氷華は誰と戦いたいんだ？」
「テツさん・・・は駄目ですね。なら先生で。」

テツが戦えないのは分かる。今もぜぇぜぇ言って絶に水を貰ってるからな。
しかし、それで俺を選ぶ理由がわからない。

「なぜ俺なんだ？」
「え・・あの・・それは・・／／／」

何故か顔に手を当てもじもじとしている氷華。
周りのやつは俺をジト目で見ている。なんなんだ、お前らは。まぁ・・、いいか。
俺は近くにいた奴に木刀を借りて、右手で構える。まぁ、自然体な

んだけどな。

「・・・・行きます。」

俺が構えたのを見ると、氷華はもじもじするのをやめ、
腰を低くして木の槍を構える。その目は真剣そのものだ。

「・・ハッ！」

その掛け声とともに、氷華がこちらに向かってくる。
そして槍を横に薙ぎ払う。俺はそれを木刀で受け止める。
すると氷華は逆方向に回転し、槍を振り回す。それを上に跳んでかわす。

「っ・・！ちょこまかと！」
「誰だって、当たるのは嫌だからな。」

氷華は必死になって槍を俺に当てようとしているが、
俺はそれをかわす。さて・・・・

「そろそろ行くぞ？」
「なっ！？」

俺がやったのは足払いだ。せこい？勝てばいいのだ。
氷華を見ると、仰向けで涙目になりながら俺を睨んでいた。

「まぁ、俺の勝ちだな。」
「うぅ・・納得いきません・・。」
「時には頭も使わんと行かんぞ。」

俺はそう言いながら氷華を起こす。・・軽いな。

「さて、今から休憩時間だ。各自好きなように過ごせ。」

俺がそう言うと、「わ～い」とか言いながら生徒たちが道場を出て行く。

元気がいいなぁ・・・・。さて、俺も・・・

「頼もう！！」

「またか・・・・。」

道場破りだ。迷惑極まりない。今週でもう何回目だろうか・・・一日に一回は必ずどこかのやつがやってくる。

「貴様が紅鎖華　壊だな。ここでおｒ「帰れ。」ぐはっ！」

道場破りが何かを言う前に、前蹴りで気絶させる。何？卑怯？知った事か。そもそも、何故ここに来るのかわからない。

「絶、これを片付けておいてくれ。」

俺がそう言うと、絶がどこからともなくやって来て、道場破りを持ち上げて

外に運ぶ。・・・・はぁ～・・・

「紫、覗きは楽しいか？」

「えぇ、とっても。」

横にスキマが開き、そこから紫が出てくる。

「まぁ、なんだ。帰れ。」
「・・・ちょっと酷いんじゃないかしら?」

失敬な。こっちは君のためを思っていっているんだ。
こんな村の中に上級並みの妖怪がいたら、見つかった途端殺されるぞ?

「・・・で、何か用か?」
「５００年も会っていないのに、ずいぶんと冷たいわね。」
「そうか・・５００年か・・。君ももうばあｓ「何か言ったかしら」いや、何も言ってない。」

一瞬もの凄い殺気を紫から感じた。５００年と言うと・・・
紫は８００歳くらいか?俺からしたらまだ若いのか・・・。

「でも、正直驚いたわ。」
「何がだ?」
「あなたがこんな村で道場を開いて、子供たちに武術を教えている事よ。」
「まぁ・・・、色々有ったんだ・・・。」
「・・まぁ、いいわ。それよりも、つい最近に１５００年も生きた餓鬼を
倒した男がいるらしいのよ。何か知らないかしら?」

餓鬼・・・、あぁ。あれか。強かったな～・・・。
俺も戦ったけど、結局誰が倒したんだろうなぁ～・・・。

「さぁ、な。俺も知らんよ。」
「そう・・・。」
「まぁ、なんだ。そろそろ帰ったほうがいいぞ。

子供たちが帰ってくる。」
「そうね。じゃあ、また来るわ。」
「あぁ。」

俺がそう言うと、スキマの中に入る紫。
さて、そろそろ帰って来るだろう・・・・

ーーーSide紫ーーー

久しぶりに彼に会った。彼は変わっていなかった。
最初見たときは驚いてしまった。まさか子供たちに武術を教えているとは・・

「それにしても・・・。一体どこにいるのかしらね・・・。」

私が探しているのは、あの大妖怪を倒した者。
その辺の妖怪に聞いてみたところ、男性としか分からなかった。
そしてもう一つ。その大妖怪、餓鬼を倒したのは、人ではなかったということだった。
人ではない、と言う事は妖怪か神だろう。しかし、神がその辺を歩くわけがない。
というころは、妖怪だということだ。
なぜ、私が餓鬼を倒した男を探しているかと言うと、ある夢を実現させるためだ。
そのために、私にとってその男は必要不可欠。・・・ん?

「考えてみたら彼に協力してもらえばいいじゃない。」

彼にも協力してもらおう。私の夢を実現させるために・・・

第５５話：平穏な日常とスキマ妖怪（後書き）

まぁ、スキマ妖怪の紫の夢って言ったらわかるよね？
まだまだ先のことですけど・・・

第５６話：氷華の父（前書き）

あれだよね。オリキャラの名前考えるのって、大変だよね。

第５６話：氷華の父

俺は今日、いつも通り道場に行き、いつも通りそこで生徒たちに武術を教え、
いつも通りコウたちの家に帰って寝る。そう思っていた。それなのに・・・

「さぁ、掛かって来い！」
「なぜこうなった・・・。」

目の前には灰色の短髪の男。こいつは氷華の父親だ。
そして俺は、その氷華の父・・確か名前は氷樹と戦う事になった。
何故こうなったかと言うと、話は少し前に遡る・・・・

「「「先生！ありがとうございました！」」」
「あぁ、気をつけて帰れよ。」

その日は少し早めに道場を終わらせる事にした。なぜかって？なんとなく。
思えばここで早く終わらせるなんて考えなければ良かったな。
・・・いや、やっぱり結果は変わらなかったかもしれない。まぁ、そんなことはどうでもいい。

で、俺はそのまま家に帰ろうと思った。しかし、そこで・・

「あの、先生。お時間有りますか？」
「ん？氷華か。あぁ、構わんぞ。」

氷華は自分の家に来て欲しいと俺に言った。最初は断ろうと思った。
だが、俺が断ろうとすると氷華は何故か泣きそうな顔になる。仕方ないので
氷華の家に行くことにした。

「で、氷華の家に入ろうと思ったら攻撃されて戦う事になった。」
「何を一人で言っているんだ？」

そう言いながら、俺を変なものを見るような目で見てくる氷樹。
ちなみに、名前は攻撃された時に自分から名乗ってくれた。
それにしてもめんどくさい。氷華はどこかに行ってしまったし、
かと言ってこんなのを相手にするのもめんどくさい。このまま帰ってしまおうか・・。

「油断大敵だ！！」

そう言いながら槍で攻撃してくる氷樹。わかっていると思うが、
氷樹の使っている槍は本物だ。しかも、かなり鋭い。
俺はそれを横に軽く跳んでかわす。氷樹は、何故か驚いた顔をしている。

「危ないな。俺が何かしたのか？」
「やかましいわ！俺の・・俺の娘をたぶらかしやがって！！」

そう言いながら槍をブンブン振り回す氷樹。いや、たぶらかしてないし。
俺は槍による連撃を避け、氷樹の懐に潜り込む。そしてそのまま・・・

「それ。」
「なっ!?ガハッ!」

殴った。一応手加減はしているから大丈夫だろう。・・・たぶん。
そして氷樹は仰向けに倒れる。・・・いや、大丈夫だよな?

「ぐっ・・・!くそ、よくもやりおったな!!」

よし大丈夫だ!
そう思っていると、氷樹が先程よりも速くこちらに向かってきた。
そしてその槍を今度は斜めに振るう。俺はそれをかわす。

「お見通しだ!」
「ッ・・!?」

氷樹は槍を回転させ、柄の部分で俺の顎を殴った。それをかわせずに当たってしまった。俺はなんとかバックステップで後ろに下がる。

「・・痛いな。少しは手加減してくれないか?」
「わはははは!どうせならそのままくたばってしまえ!」

・・・うざい。というかお前は本当に氷華の父親か?
どう考えても精神年齢が子供だろ?

「はぁ〜・・・。めんどくさいな・・。」

「なら今すぐ楽にしてやる!!」

そう言いながら突っ込んでくる氷樹。仕方ない、少し本気を出そう。
俺はこちらに向かって槍で攻撃をしようとしている氷樹の腹を殴り、上に飛ばした。そして俺も上に跳ぶ。さて・・・

「これくらいで死ぬなよ?」

俺はそう言い、氷樹の腕を掴み、そのまま地面に落下する。

「破壊の烙印押し。」

氷樹を地面にぶつけたと同時にそう言い放つ。

「ご・・がっ・・!」
「ん?手を抜いていたとは言え気絶しないとは天晴れだな。」

俺はそのまま氷樹を肩に担ぐと、氷華の家の中に入った。・・結構大きな家だな。
そんなことを思いながらも、家来みたいのに話をし、氷樹を運んでもらった・・・・

ーーーーSide氷華ーーーー

私は家の中から先生とお父様の戦いを見ていた。
先生とお父様のどちらが強いか気になったので、私はお父様に闘ってもらう事にした。

「破壊の烙印押し。」

先生はそう言いながらお父様を地面に叩き付けた。・・すごい・・。
お父様はこの村で一番強い。そのお父様をあんな風に倒すなんて、
先生は一体何者なのだろうか？それに・・・

「かっこいい・・・／／／」

ハッ！いけない。先生の戦い方がかっこよかったから、つい見惚れてしまった。
先生はお父様を肩に担いで家の中に入った。

「うふふふ・・・。先生・・・・。」

私は自分でも気付かぬ内に笑っていた・・・

第５６話：氷華の父（後書き）

終わった～。
そんなわけで氷華の家に招いてもらった壊でした。
次は氷華の家での話し。

第57話：龍笛と花（前書き）

タイトルが思いつかなかった

第57話：龍笛と花

叩きのめした氷樹を従者に任せた後、俺は客間のような場所で待つように言われた。
そこそこ広い。

「先生。」

そんなくだらない事を考えていると、後ろの障子が開けられ、氷華が入ってきた。
いつも着ている武道着のような物ではなく、女性の着物を身に着けていた。

「・・氷華か。君の父親は大丈夫か?手加減はしたのだが・・・。」
「はい。もう大丈夫です。今は布団で『納得いかん!もう一回戦わせろ!』
と騒いでいました。」

・・帰ろうかな・・・。

「あの、先生。実は今日ここに呼んだのは先生の昔話が聞きたかったんです。」
「・・・俺の昔話?」
「はい。駄目・・・ですか・・?」
「いや、まぁ別に構わんが・・・。聞いてもおもしろくないぞ?」
「構いません。私がお願いしたのですから。」

そう言いながら俺の横に座る氷華。・・近すぎないか?

なんだか後ろの障子から殺気を感じるのだが・・・。

「では、お願いします。」

「あぁ。そうだな。まずは何から話そうか・・・。」

そんな感じで俺は昔話を氷華に語る・・・

そんなこんなで長い間俺は氷華に昔話を聞かせた。

話した内容は大したことじゃなかった。森で食える茸や木の実などと言った

事だ。後は雑魚妖怪の事とかだ。

「さて、もう帰らせてもらおう。」

「そうですか?泊まっていってもいいのですよ?」

「いや・・、コウたちが心配するだろうしな。」

「あ、それなら大丈夫です。私が「明日には帰ると思いますよ」と言っておきましたから。」

ニコニコとした表情でそう言う氷華。・・うん・・・まぁ、いいか。

「・・次からは勝手な事はしないでくれよ?」

「はい。(ニコニコ」

これはまたやるな。絶対にやる。さて・・

「なぁ、氷華。いい加減見られるのも嫌になってきたんだが・・。」
「？何のことですか？」
「君は気付いていないのか。」

俺はそう言い、障子の方まで一瞬で近づく。そして勢いよく開けた。
そこには、聞き耳を立てている氷樹とその他の従者などがいた。

「・・・お父様？何をしているのでしょうか？」
「あ・・あははは。違うんだ氷華。これはだな・・」
「回答無用です！！」

そう言いながら槍を構える氷華。いや、どこから出したんだ？
そして逃げる氷樹＆従者たち。それを追いかける氷華。・・頑張って生き残れよ。

「ふふふ・・、あの子のあんなに楽しそうな顔始めてみたわぁ・・。」
「・・氷樹の妻か。」
「えぇそうです。私は華野（かの）と申します。以後お見知りおきを・・・。」

いつの間にか横にいた華野が自己紹介をする。
それにしても氷華の親は二人とも灰色の髪だったんだな。

「あの子はいつも道場から帰ると貴方の話ばかりするんですよ？」
「初耳だな。てっきり嫌われているのかと思っていた。」
「あら、何故ですか？」

「氷華と組手をすると、たまに本物の槍で殺しにかかることがあるんだ。」

あれは焦った。実際、殺されるかと思った。

「ふふふふ・・あの子ったら・・。」

「笑い事じゃない。」

「あら、すいませんね。でも・・・ふふふ。」

「よく笑うな。」

「そうですね。それでは・・私はそろそろお暇させてもらいます。」

「あぁ。」

華野はそのままどこかへ行ってしまった。・・・暇だな。

月がよく見える場所でも探すか・・・。

縁側のような場所が見つかった。月が奇麗だな・・・。

「・・・そういえば最近吹いてないな・・。」

俺は能力で龍笛を創り出し、それを口元に持っていき、吹き始める。

最初はゆっくりと、徐々に速くし、またゆっくりと吹く。やがて演奏が終わった。

「・・いい音色だな。」

「・・氷樹か。氷華から逃げてたんじゃないのか？」
「あぁ、逃げてる。しかも、今さっき従者が3人やられた。」
ご愁傷様だ。
「お前も逃げたらどうだ？」
「まだ大丈夫だと思う。それに、貴様と話をしてみたかったからな。」
「貴様とは随分だな。親バカ。」
「うるさい。」
氷樹は少し離れた位置で俺の横に腰掛ける。
「氷華はな、孤独だった。」
「・・・・。」
「いつもいつも周りから神童だの何だの言われていてな、それで友人が出来なかった。
だがな、氷華は貴様に会って変わった。前よりも笑うようになり、友人も出来た。そして何より、貴様の話をよくするようになった。」
「・・・そうか。」
「俺はな、貴様に感謝している。氷華があそこまで変われたのは貴様のお陰だ。感謝する。」
「・・感謝するんだったら名前で呼んでくれないか？」
「・・・・貴様の名は？」
「紅鎖華　壊だ。」
「そうか、では壊。氷華のことを頼んだぞ。」
「あぁ。ただその前に・・・。」
俺はそう言いながら氷樹の後ろを指差す。そこには・・

「・・お父様？」
「ひ・・氷華？」

そして親子のリアル鬼ごっこが再び始まった・・・。訳じゃなかった。
氷華は俺の所まで移動し、横に座った。
俺は特に何も言わず、再び龍笛を吹く。二人の親子はそれに耳を傾ける。
近くに咲いていた一輪の花が風に揺れる。
そして龍笛の音色は風に乗り、村中に響きまわった・・・・

第57話：龍笛と花（後書き）

終わり、今回は別段なにもありませんでした。

第５８話：精一杯の墓（前書き）

タイトル通りです

第５８話：精一杯の墓

氷華の家に泊めてもらった日から3週間経った。
なんか氷華が最近おかしい。道場に来ては、「先生、肩をお揉みします。」
とか、「先生、私の作ったお弁当、食べてください」とか。
お前誰？みたいな感じになってしまった。さらに言うと、氷樹が「死ねぇ！！」
とか言いながら俺に奇襲を掛けてくることもある。・・俺が何かしたのか？
まぁ、今はそんなことはどうでもいいか。俺が今何をしているかと言うと・・・

「・・見つからないな・・・。」

山の中を歩いている。別に、ピクニックに来ている訳じゃない。
村の子供たちが山の中に入ってしまったのだ。
本当は入るなと言われている筈なのだがな。そんなことを子供が気にする分けないよな・・。
ちなみに、山の中に入ったのは、テツ、雪、光気、氷華、の４人だ。
しかも探しに行くのが俺一人だ。

「お～い。４人とも～、出てこ～い。」

本当にめんどくさいな。今日は久々に、料理を作ろうと思ったのだがな・・。
ちなみに、絶は村に置いて来た。何かあった時、氷樹だけじゃ頼りないからな。

「・・・なぁ、紫。覗き見するくらいなら手伝ってくれないか？」
「いやよ。めんどくさい。」
そう言いながら俺の少し上にスキマを開いて出てくる紫。
「・・まぁ、別に構わんがな。期待してなかったし。」
「あら、非道いわね。」
そう言いながら扇子で口元を隠し、クスクスと笑う紫。胡散臭い・・。
俺はそんな紫を無視して、再度子供たちの捜索をすることにした。
そんな俺の後ろを、紫が歩きながら付いてくる。早く見つかんないかなぁ・・・・。
「ち、ちょっと、壊！」
「なんだ騒々しい。どうかしたのか？」
紫が騒ぐので彼女のほうを見る。紫は驚いた表情である方角を指差す。
少し離れた位置にあったが、それを見た俺は物凄い速さで走った。
紫が指差した先にあったもの、それは・・・・
真っ赤に染まった村だった

村に着いた俺が見たのは火で燃やされている家。地面に転がった肉塊と所々
食い千切られている村人の死骸。そしてそれを貪っている妖怪。
理解した。すぐに理解できた。こいつらが元凶なのだと。俺は理解したと同時に、
近くで村人を貪り食っていた妖怪の頭を掴んで砕いた。さて・・

「始めるか・・」

村を回って片っ端から妖怪を掃除した。村人の中には、コウもいた。
そして粉々に砕かれた絶もいた。
気がつけば、妖怪の大将と思われる者の前まで来ていた。

「グゲゲゲ！人間が、調子に乗るなよ！」

妖怪の大将がそう言うと、どこからともなく雑魚妖怪が現れ、
俺に襲い掛かってきた。・・・鬱陶しい・・・。
俺は軽く右手を振った。それだけで襲い掛かってきた妖怪はバラバラになった。

「グゲゲ！やるな。お前人間じゃないな？どうだ、食うか？」

そう言い、妖怪が見せたのは・・・・

――――氷華の首――――

「グゲゲゲ！今日はついてる日だった。森の中にガキ共が迷い込んでな！
匂いを辿ってこの村まで来たんだよ！」
「・・・・・・」
「途中で変な人形に邪魔されたが、村人を人質に取ったら攻撃するのをやめて、
あっさり壊させてくれたぜ！グゲゲゲゲ！」
「・・・・なぁ。」
「あん？」
「その汚い手で・・・。」

俺の生徒に触るな

そう言った途端、俺は妖怪の腕を引き千切った。
ドサリ、と氷華の首と妖怪の腕が落ちる。

「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！？」
「うるさい。少し黙れ。」

もう片方の腕も千切る。まだ騒ぐか。
足も千切ってしまおう。それでもうるさい。
そうだ、首を引っこ抜いてしまおう。・・・やっと静かになった。

「・・・氷華・・・。」

俺は氷華の首を持つ。あぁ・・・、冷たい。
そうか・・・、やっぱり君も死んでしまったのだな・・。

あの後、いつの間に直っている絶と残っている村人の死骸を集めて墓を作った。自分の生徒の死骸もあったが、特に何も感じなかった。
・・だいぶ感覚が鈍ってきたな、俺。
それでも俺からはこんな事しか出来ないからな・・・。

「・・紫か・・。」

俺が何もない場所に向かってそう言うとスキマが開き紫が出てきた。
いつものような胡散臭い笑みではなく、真剣で、どこか悲しそうな顔をしていた。

「・・あなたは・・・泣いたり悲しんだりしないのね・・。」
「泣いても死人は生き返らんよ・・。悲しんでも死人は喜ばんさ。
死んでいるのだから・・。」
「・・・そう・・・。」

紫は黙って俺に近づいた。
そして何をするわけでもなく、俺の横に座った。・・・墓の前で二

人が並んで座ると言うのもアレだな。
・・・これでここの村の住民ともお別れだな・・・。
俺はそう思い、この下にいる村人たちのために、龍笛を吹く事にした。
やすらかに眠ってもらうために・・・・

村の有った場所からは、悲しい音色が鳴り響く・・・

第５８話：精一杯の墓（後書き）

そんなわけで終わりました。氷華が好きだった方々すいません。

第５９話：かぐや姫（前書き）

ようやっと原作キャラが出てきた・・・

第５９話：かぐや姫

俺があの村を出てから、少なくと１００年は経った。俺は旅を続け、２年くらい前に仕事を仕事を始めた。それは『陰陽師』だ。理由？なんとなく。
で、陰陽師になってからは人間の作った都の近くに建てた小屋で住んでいる。
もちろん、仕事は来る。１週間に２～３回程度だがな。ちなみに、服装は変えていない。
いつもの黒いコートに黒い服、黒いズボンと黒一色だ。
変えたほうが客が来るんだろうけど、今更変えるのもめんどくさい。
そして今日仕事が来たのだが・・・

「で、よくわからんがあなたの娘を妖怪から守って欲しいと？」
「はい・・・。わしの娘を守って欲しいのです。」

目の前には老人。なんでも、自分の娘宛に（と言っても養子らしい）一枚の手紙がきたとか。
内容は『一週間後、お前の娘を貰いに行くぜ！」だったらしい。
都の陰陽師に聞いたところ、僅かながら妖力がくっ付いていたと言っていて、
それで妖怪の仕業だとわかったらしい。

「まぁ、構わんがな。別に俺でなくとも他のやつの頼めばいいだろう？」
「貴方ほどの実力を持った陰陽師はめずらしいのですじゃ。
それに、今回は他の陰陽師も呼んでおります。」

俺って、いつの間にそんなに有名になったんだ？・・まぁ、いいか。

「じゃ、行くか。」
「はい。」

そう言い、俺は依頼主の家に向かった・・・・・

うん・・・。なんと言うか・・・、屋敷だな。
依頼主の家は立派な屋敷だった。相当お偉いさんなんだろう。
屋敷から頭が項垂れているいかにも「僕たち貴族です」みたいな男がたくさん
出入りしていた。

「あの貴族っぽいのはなんだ?」
「あれはわしの娘に求婚しに来た者たちです。
娘はそれを全て断って、追い返したりしているのです。」
「ふ~ん・・・。まぁ、どうでもいいさ。とりあえず、俺はどうすればいい?」
「はい。他の陰陽師たちと一緒に娘に会いに行ってもらいます。」
「そうか。じゃ、行くぞ。」

俺はそう言い、屋敷の中に入る。それに続いて依頼主も一緒に入ってきた。
屋敷の中は騒がしかった。依頼主の娘に求婚し、断られた男が項垂れていたり、
その娘をさらいに来る妖怪を「退治してくれる!」とかいいながら

どう見ても
一般ピープルなやつが刀をもって意気込んでいたりしていた。まぁ、頑張れ。

「ここです。」

そう言いながら依頼主は部屋の前で止まった。他のところより少し大きい
そこの障子を開けてはいる。なんて言ったかなぁ・・、障子っぽいけど障子っぽくないやつ。
まぁ、どうでもいいか。俺も後に続いてはいる。
そこには、中々の量の霊力を持った陰陽師が五人と、その前で座っている依頼主の娘。
なるほど、こう言うのも美女と言うのだな。覚えておこう。
依頼主の娘は俺を見てニッコリと微笑んだが、俺はそれを気にせずに、
他の陰陽師と同様に座る。改めて依頼主の娘を見る。
ストレートで、腰より長い程の黒髪。その前髪は眉の少し下辺りで切られている。
服装は上が桃色の服?で、裾は手を隠せるほど長い。下はスカートのようなものを
穿いており、今座っていて横に広がっている事から、非常に長いことがわかる。
着物じゃなくて、和風仕立ての洋装だな。

「それでは皆様方。これが私の娘のかぐやです。」

依頼主がそう言うと、かぐやが丁寧にお辞儀をする。
それだけで俺の横にいる陰陽師たちが「おぉっ・・・!」
とか言ってる。一人、鼻息が荒いのがいるな。摘み出したほうがい

いんじゃないか？

「それでは皆さん。一人ずつ、自分について語ってもらえませんか？」

かぐやがそう言うと、一番端っこのやつが「私は・・・」と言いながら
自分について話し始めた。それはもう、自分の名前から武勇伝まで色々と話した。
他のやつもそんな感じで自分のことを語っていた。時には自分の式を見せたり技を見せたり
する奴もいた。・・長いな・・。

「さて・・・。では貴方について教えて頂けませんか？」

いつの間にか自分の番になっていたみたいだ。

「・・紅鎖華　壊だ。」

俺は自分の名前だけ言った。それ以上語ることも無いしな。
かぐやが唖然としている。
何故か他の陰陽師たちも唖然としていた。・・どうかしたのか？

「・・・あの・・出来れば他の事も話して頂きたいのですが・・。」
「めんどくさいな・・・。」
「貴様！かぐや様になんと言う事を！！」

俺がそう言うと、鼻息が荒かった陰陽師が立ち上がり、
陰陽師が着るあの服の懐から札を出した。

そしてそれを地面に向けて投げる。するとそこから「ボフンッ！」という音と白い煙とともに、一匹の狼もどきが出てきた。・・式神か。

男は得意げな顔をすると、その式神に向かって「行け」と言い、式神が襲い掛かってきた。他の陰陽師たちが止め様としたが、間に合わずに式神は俺に噛み付こうとした。

「絶。」

俺は絶を呼ぶ。すると絶が急に現れ、両手を広げてコマのように回転する。

そしてそのまま式神の向かって突っ込んだ。式神はズバッ！という効果音が似合いそうな音を出すと、また「ボフンッ！」という音と白い煙を出し、札に戻った。

他の陰陽師たちは驚愕している。

まぁ、あの式神は確かかなり強い部類に入る奴だったからな。

それがこんな小さな人形にやられるとは思わなかったのだろう。

俺は絶を再び見えないようにする。そして立ち上がり、そのまま部屋を出ようとした。

「ま、待ってくだされ！」

すると依頼主が止めに入った。なんなんだ・・

「今日は陰陽師たちはここに泊まって行ってもらいたいのです！いえ、かぐやが狙われている間はずっと泊まって行って欲しいのです！」

「・・わかった。わかったから離れてくれ。近い。」

俺がそう言うと、依頼主は俺から離れ、かぐやの横に座る。
そして従者を呼び、俺たちを部屋に案内させた・・・・

ーーーSideかぐやーーーー

私は「蓬莱山輝夜（ほうらいさんかぐや）」いつも求婚者が来ていい加減に鬱陶しいと思っていたある日、私宛てに妖怪から手紙が来た。そこでお爺様は陰陽師たちを呼んで、
その妖怪を退治しようと言ったのだ。陰陽師たちは全員で6人呼ぶと言っていた。
私は別に興味はなかった。どうせほとんどが私のことを見るのが目的だろうし。
案の定、6人の内5人はそんな眼をしていた。
そして最後のお爺様が連れてきた6人目。顔立ちがよく、他の陰陽師たちとは
まったく違う服を着ていた。髪があまり長くなく……少し長いかもしれな白い髪、そして目の色は紅かった。
服は全てが黒一色だった。それがとても似合っていた。
私はとりあえず、いつも通りその男に笑いかけた。すると男はそれに気付かなかった
のだろうか、相槌も何も打たずにそのまま他の陰陽師たちと同じように私の前に座った。

「それでは改めまして。皆様方。これが私の娘のかぐやです。」

お爺様がそう言うので、私はお辞儀をした。陰陽師たちから「おぉ～・・・」
と言った感動の声が聞こえる。ふっ、私の美貌に惚れぬ者はいない。

「それでは皆さん。一人ずつ、自分について語ってもらえませんか？」

私がそう言うと、一番端の陰陽師が自分の名前や武勇伝を話し始めた。
それはもう、嬉しそうにだ。しかし、私にとってはつまらない事だった。
他の陰陽師も同様、似た様な話をした。しいて言えば、違うのは自分の技を見せたり
自分の式を見せたりするくらいだ。そして最後のあの黒い服の陰陽師の番になった。

「さて・・・。では貴方について教えて頂けませんか？」

私がそう言うと、男はさも「今気付いた」みたいな顔をした。
この男も他の陰陽師同様に自分の武勇伝などを聞かせるのだろう。

「・・紅鎖華　壊だ。」

男はそう言った。そう、たったそれだけだ。
しばらく待っても男は何も言わずに黙っていた。

「・・・あの・・出来れば他の事も話して頂きたいのですが・・。」
「めんどくさいな・・・。」

私は驚いた。この男は私に対する言葉遣いをまったく気にしていないのだ。

「貴様！かぐや様になんと言う事を！！」

一番端にいる陰陽師がそう叫び、立ち上がる。そして札を出し、
自分の式神を出した。それは私でも知っている式神。上位の式神だ。
他の者が止めようとしたが、陰陽師は自分の式を男に向かわせる。
そして式は噛み付こうとした。危ない！

「絶。」

男が静かにそう言うと、どこからともなく人形が現れた。
人形は男と式の間に入ると、両腕を広げ、コマのように回転した。
そしてそのまま式に向かって攻撃した。すると陰陽師の式は真っ二つにされ
元の札に戻ってしまった。
信じられなかった。あれほど大きな式を、あんな小さな人形・・おそらくは
式なのだろう。それが勝ってしまうなんて・・・
男は式を消し、立ち上がった。そしてそのまま帰ろうとした。

「ま、待ってくだされ！」

しかし、横にいたお爺様が男を止めた。そして男に近づく。

「今日は陰陽師たちはここに泊まって行ってもらいたいのです！
いえ、かぐやが狙われている間はずっと泊まって行って欲しいのです！」
「・・わかった。わかったから離れてくれ。近い。」

男は両手を少し前に出し、お爺様に離れるように言う。
するとお爺様は再び私の横に座った。
そして従者を呼び、男と他の陰陽師を部屋に案内させた。

「・・かぐや。」
「・・なんですか?」
「わしと二人でいる時は似合わぬ敬語はやめてもいいぞ?」
「・・なに?」
「うむ、やはりそれが似合っておる。あの男・・壊殿と言ったかの。話して見たいと思わんか?」

私は少し悩んだ後頷いた。するとお爺様は、今夜あの男を私の部屋に通すと言った。
別に構わないと言い、私は承知した。今夜が楽しみだ・・・

第５９話：かぐや姫（後書き）

そんなわけで輝夜です。ぐーやです。
次は、壊とぐーやのお話がメインです。

第６０話：貴族の娘（前書き）

今回も原作キャラ

第６０話：貴族の娘

「・・眠い・・・。」

俺は部屋に案内された後、気持ちよ～く寝ていた。なのに、従者が「起きてください」とか言って俺をお越しにきたのだ。なんでも、かぐやが俺と話をしたいんだとか。
迷惑だ。寝かせろ。
そんなことを思っていると、かぐやの部屋の前についた。

「おい、入るぞ。」
「・・どうぞ。」

部屋に入る許可を得て、障子を開ける。そこには戸を開け、空を眺めているかぐやがいた。
俺は黙って近くまで行き、座る。行灯の光で俺とかぐやの影がほんの少し壁に映る。

「・・・で、なんの用だ？用がないなら寝かせてくれ。」
「・・あなた、変わってますね・・。」
「・・・なぁ、一つ聞いてもいいか？」
「なんでしょう。」
「どうして敬語なんて使ってるんだ？無理に使う必要も無いだろう？」

なんか似てると思ったら、紫の胡散臭い話し方に似てるんだな。

「・・・よく私が無理してあんな喋り方してるってわかったわね。」
「まぁ、な。で、用件は？」
「特に無いわ。ただ貴方と話がしたかっただけよ。」
「・・・ていっ。」
「いたっ・・！」

くだらない理由に腹が立ったので、デコピンをしてやった。
額をスリスリと擦りながらこっちを涙目で睨んでくるかぐや。ざまぁ。

「痛いわね。何するのよ。」
「くだらない理由で人を呼ぶからだ。馬鹿者。」
「・・・そんなこと言われたの初めてよ・・・。」
「まぁ、いいさ。話くらいならしてやる。その前に、改めて自己紹介だ。
俺は紅鎖華　壊。一般人だ。」
「陰陽師は一般人って言わないわよ。まぁ、いいわ。
私は蓬莱山輝夜（ほうらいさんかぐや）よ。」
「そうか、よろしく。さて、じゃあ話をしよう。
とりあえず、聞きたいことは？」
「じゃ今日使った式を見せてくれない？ほら・・人形みたいな・・。」
「・・あぁ、絶か。いいぞ。」

俺はそう言い、絶を見せる。するとかぐやは興味津々といった感じに絶を見始めた。

「変わった式ね・・。」
「まぁ、な。一番付き合いが長いやつだ。」
「ふ～ん・・。」

かぐやは絶をツンツン突付きながら俺に質問をしてくる。そして俺はそれに答える。
そんな感じで俺はかぐやと夜遅くまで話していた・・・・

「・・ん・・・・・。」

俺は目を開く。どうやらいつの間にか寝てしまっていたらしい。
朝日が眩しいと思いつつも起き上がろうとする。

「ｚｚｚ・・・・・」

が、それは叶わなかった。なぜなら、輝夜が俺の体を枕にして気持ち良さそうに
寝ているからだ。しかも、涎のオマケつき。

「おい、起きろ。」
「ん・・ｚｚｚ。」
「起きろ。」
「う～ん・・ｚｚｚ。」

しぶとい！諏訪子なんかよりもよっぽどしぶとい！よくここまで粘れるな。
仕方ない。

「起きないと、痛い目に遭うぞ？」
「・・・ＺＺＺ・・・」

よし、起きないんだな？それなら・・
俺は輝夜の額まで手を持って行き、そこでデコピンの構えをする。
さて・・・

「お仕置きだ。」

ドスッ！と普通ならありえない音が輝夜の額から聞こえる。
「ひぎゃ！」と小さな悲鳴を上げて輝夜が凄い速さで起き上がる。
・・・涎拭けよ・・・。

「何！？何があったの！？」
「いや、まぁ。落ち着け。」
「あれ？なんで壊がここにいるのよ？」
「昨日そのまま寝てしまったらしい。さらに言うと、君が起きないから、少し君の額を指で弾いた。わかったか？」

俺がそう言うと、顔を赤くする輝夜。
とりあえず、涎が鬱陶しいので、能力でハンカチを創って拭いてやった。
すると、さらに顔を赤して俯いてしまう輝夜。

「さて、そろそろ飯だ。行くぞ。」

「あ、待ってよ！」

俺は輝夜の部屋から出る。輝夜は俺のあとに付いてくる。
そのまま食卓まで行くことにした・・・

「それではお願いします。」
「あぁ、わかった。」

飯を食い終わった俺は、屋敷の調査をして欲しいと頼まれた。輝夜をさらいに来る
妖怪が、どこかに細工をしているかもしれないから、だそうだ。
まぁ、別に構わんさ。ただなぁ・・・・

「「・・・・・・」」

他の陰陽師たちがもの凄い睨んでるんだよ。それはもう、睨んだだけで虫を殺せるんじゃないのか？
ってくらいに殺気を込めて。なに？俺が何かしたのか？

「おい、貴様。」
「・・なんだ？」
「昨夜はかぐや姫と何をしていた？」

「昨夜・・？」

俺がそう言うと、さらに殺気が高まった。ってか、輝夜ってかぐや姫なんて言われてるんだな。
初めて知った。

「惚けるな。昨夜、かぐや姫の部屋に入っただろう？
その時に何をしていたと聞いているんだ。」
「あぁ、それか。話し相手をして欲しいと頼まれただけだ。
それがどうかしたか？」
「そうか・・・」

そう言い、何故か安心したような顔をする陰陽師たち。いや、本当に何？
そんな事を思いながらも、再び屋敷の周りと屋敷を調べた・・・・

で、結果何もなかった。俺たちはそれを依頼主・・翁時とか言ったか？
翁時に報告した。すると翁時は、「それならまだ大丈夫でしょう」とか言って、
俺たちに自由に行動していいと言ってくれた。優しい爺さんだな・・。
そんなわけで、俺は団子を買い食いして都を歩き回っている。輝夜？知った事か。

「離してください！」

「うるせぇ！」

最後の団子を食い終わったら、何やら黒い髪の貴族っぽい感じの娘がごっつい男に腕を掴まれていた。

「おい、何をしているんだ？」
「あ？お前には関係ねぇだろ！」
「まぁ、そう言うな。で、何があったんだ？」
「食い逃げだよ！食い逃げ！この餓鬼、金を払わねぇで帰ろうってんだ！」
「だから、家からお金を持ってくるって言ってるじゃないですか！」
「信用出来るか！」

ギャーギャー騒ぐ二人。

「・・・なぁ。」
「なんだよ！」
「その子の代わりに俺が金を払うのはどうだ？」
「あん？・・まぁ、構わねぇさ。払えよ。」
「どれくらいだ？」
「そうだなぁ・・・。一貫くれぇでどうだ？」

俺は男がそう言うと、頭を鷲掴みにして持ち上げた。

「ふざけたことを言うもんじゃない。本当はいくらだ？」

そう言いながらさらに強く掴む。

「が・・ぁ・・、悪かった！離してくれ！頼む！」

男がそう言うので、俺は仕方なく手を離す。男がドサリと地面に落ちる。

「さて、もう一度聞こう。いくらだ？」

「あ、あぁ。３つで三文だ。」

俺は男に金を払う。しかし、あれだな。昔の金ってのはどうも慣れないな。

ーーーーSide貴族の娘ーーーー

私は、お団子を食べようと思い、こっそりと屋敷を抜け出した。
そしてお目当てのお団子を食べて帰ろうと思ったのだが、お金を忘れていた
ことに気付き、逃げられないように腕を掴まれていた。

「おい、何をしているんだ？」

そんな時、男の人の声が聞こえた。見てみると、背の高い、それこそ今私の腕を掴んでいるこの団子屋の亭主よりも背の高い男の人が立っていた。
目は深紅のように紅く、髪の色は白色で、着ている服は黒一色という変わった服。
体形は、太っているわけでもなく、かと言って痩せている訳でもなかった。

「あ？お前には関係ねぇだろ！」

「まぁ、そう言うな。で、何があったんだ？」

「食い逃げだよ！食い逃げ！この餓鬼、金を払わねぇで帰ろうってんだ！」
「だから、家からお金を持ってくるって言ってるじゃないですか！」
「信用出来るか！」

失敬な。ちゃんとお金は払う。ただ家から持ってくるだけだ。

「・・・なぁ。」
「なんだよ！」
しばらく亭主と言い争っていると、男の人が口を開いた。
亭主は邪魔されたのが気に入らなかったらしく、大声を張り上げた。

「その子の代わりに俺が金を払うのはどうだ？」
「あん？・・まぁ、構わねぇさ。払えよ。」
「どれくらいだ？」
「そうだなぁ・・・。一貫くれぇでどうだ？」

ふざけないで下さい！そう言おうと思ったら、団子屋の亭主が頭を掴まれて、
持ち上げられていた。男の人の目は恐ろしいほど冷たい目だった。

「ふざけたことを言うもんじゃない。本当はいくらだ？」

男の人はそう言い、さらに力を込める。ミシミシという音が聞こえそうだ。

「が・・ぁ・・、悪かった！離してくれ！頼む！」

団子屋の亭主がそう言うと、男の人は手を離した。すると団子屋の亭主が

ドサリと地面に落ちた。

「さて、もう一度聞こう。いくらだ？」

「あ、あぁ。３つで三文だ。」

男の人は団子屋の亭主にお金を払い、そのままこちらに近づいてきた団子屋の亭主は走って逃げてしまった。

「大丈夫か？」

「あ・・。はい、ありがとうございます。」

「まぁ、気を付けるんだな。じゃあな。」

「待ってください！」

「・・・なんだ？」

「あの・・、お礼がしたいので是非とも私の家に来てください・・。」

男の人は少し考える素振りをした。

「・・まぁ、いいさ。じゃあ行くぞ。」

「あ、待ってください。その前にお名前を・・。」

名前がわからなくては不便だ。だから名前を聞いておくことにした。

「そう言えば名乗っていなかったな。俺は紅鎖華　壊だ。」

「私は・・・・

藤原妹紅（ふじわらのもこう）です。では行きましょう。」

第６０話：貴族の娘（後書き）

はい、そんなわけで妹紅です。次回は妹紅の屋敷での話し。

第６１話：藤原妹紅（前書き）

妹紅との会話だけじゃ少し短いかも・・

第６１話：藤原妹紅

「どうぞ・・。」
「あぁ、ありがとう。」

屋敷の従者の女性に茶をもらう。・・・うん。美味い。
今俺は、ある部屋で待たされている。あれだ、殿様がよく客人を招くような部屋だ。
名前は忘れた。
そんなことを考えていると、後ろで障子が開かれた。そこからまだ少し若い男が入ってくる。
そして入り口から一番遠い・・もとい、俺の前で座る。上座か？
そして俺の目を真っ直ぐ見た。男は静かに口を開き、こう言った。

「いや～、妹紅が世話になったみたいだね～。感謝するよ。
あ、ちなみに僕の名前は藤原不比等（ふじわらのあそみふひと）」

・・なんか・・・。うん・・。貴族っぽくないな。

「父様、もう少し真剣に振舞ってください・・。」

いつの間にか横にいた妹紅が、そんなことを言う。

「え～、だってめんどくさいじゃないか～。」

そう言いながらあはは～と笑う不比等。・・・子供だな。

「・・・で、俺はもう帰ってもいいんだな？」
「いやいや、もう少しここにいてよ。まだお礼もしてないし、

そもそも僕は君の名前も知らないよ？」
「・・紅鎖華　壊だ。」
「紅鎖華　壊・・・どっかで聞いたような・・・？」
そう言いながら首を傾げて考え出す不比等。
「あ！思い出した！君、確か都で有名な陰陽師だよね？」
「父様、壊さんってそんなに有名なんですか？」
「うん。なんでもね「札をまったく使わない」らしいよ。
さらに言うと、「陰陽術」も使わないんだって。そうだよね？」
「・・まぁ、な。」
「どうしてですか？」
妹紅が首を傾げて俺にそう聞く。
「・・・使えないからだ。俺は陰陽術をどうやったら使えるか知らない。」
「え？でもそれじゃあどうやって妖怪を退治してるんですか？」
「普通に殴ったり蹴ったりしてだ。」
「化け物だね。」
やかましい。
「と、言う事は、君は陰陽師たちが使うような式神を召喚できないのかい？」
「それと似たようなことなら出来る。」
「へ～・・。見せてくれないかな？」
「まぁ、構わんさ。絶。」
俺が絶の名前を呼ぶと、絶が目の前に現れる。

「へぇ～・・、これが君の・・・。あんまり強そうじゃないね。」
「絶、やれ。」

不比等がそんなことを言うので、俺は絶に攻撃させる。
絶は、人間で言う人差し指を不比等の頭の少し上を狙い、
細い光線を撃った。

「・・・人は見かけによらないね。あ、式か。」
「まぁ、これが俺の式だ。」
「他にはいますか？」

妹紅が、絶を抱きかかえながらそう聞く。いるにはいるが・・・

「まぁ、これ以上は見せないぞ？」
「え！？何でですか！？」
「別に、なんとなくだ。あと、顔が近い。」
「む～・・・。」
「まぁまぁ、妹紅も。本人が嫌って言ってるんだからさ。ね？」

不比等が妹紅を慰める。いや、俺だって本当は見せてってもいいとは思ってる。
ただな、他の陰陽師が見たら戦いを挑んできそうな気がするんだ・・・。

「さて、そろそろ帰らせて貰おう。」
「ん？そうかい？もっとゆっくりして言ってもいいんだよ？」
「こっちも仕事があるんだ。じゃあな。」

俺はそう言い、屋敷を出た・・・・

「逃げろー！！」

で、屋敷から出た途端これだ。何があったって？妖怪だよ。妖怪。しかもこっちに向かってきてるし・・・。他の陰陽師たちはどうした？あ、戦ってた。

「シネェ！ニンゲン！」

「うるさい。」

飛び掛ってきた妖怪をぶん殴る。俺も参加するか。

俺は能力でナイフを創り出し、それを逆手に持って自然体で構える。

ナイフとかは大抵逆手に持ってる。俺はそっちの方が使いやすいからな。

向かってくる妖怪を切り捨てながら元凶を探しに行く。

うん、やっぱり逆手に持ったほうがやりやすい。少し腕を上に振るだけで妖怪を

切ることが出来る。（※普通はそんなこと出来ません）

「ん？あれか？」

しばらく進んでいると、やけに巨大な妖怪がいた。でかいなぁ・・・

。

４mくらいか？

それを陰陽師たちが必死に抑えている。翁時が呼んだ陰陽師まで頑張ってる。

俺は陰陽師たちの近くまで進んだ。

「精がでるな。」

「ぐっ・・！馬鹿な事を言ってないで手伝え！」

馬鹿とは失敬な。そう思いながらも、俺は妖怪に向かって思いっきり跳ぶ。

そして顔を、ナイフで切りつける。

「グギョァァァァ！！」

妖怪は叫びながらのた打ち回ってる。それを見た他の陰陽師たちが印を結び始めた。

そして妖怪に向かって巨大な炎が放たれた。・・容赦ないな・・・。

妖怪は、すぐに燃え尽きて灰となってしまった。あ、灰が目に入った・・・。

「まさかこやつ、かぐや姫をさらいにきた妖怪ではあるまいな？」

「いや、それは違うと思うぞ？」

陰陽師Ａがそんなことを言うので、俺は素直に違うと思うと言った。

「・・何故だ？」

「いや、やるなら夜にやるだろう。妖怪が本領を発揮するのは夜だぞ？

文字が書けるほど頭がいい妖怪なら普通はそうするだろう？」

「・・それもそうだな・・。」

まぁ、そんなわけで陰陽師たちは納得。と、いうかこれくらいわかるだろう？

そしてこのことをお偉いさんに報告し、俺たちは輝夜の屋敷に戻った。

その後は何事もなく一日が過ぎた・・・

第６１話：藤原妹紅（後書き）

はい、そんなわけ終わりました。
壊にナイフを持たせたのは、ある格闘ゲームのキャラクター
が使っていたのを見て、なんとなく壊にも持たせたかっただけです。
ちなみに、あるゲームとは、メル〇ィ〇ラッドです。

第６２話：嵐の前の静けさ（前書き）

今回は妖怪は、妖怪が輝夜をさらいに来る日の話です
まだ出ないけどね。妖怪。

第６２話：嵐の前の静けさ

なんだかんだあってもう一週間経った。この一週間、妹紅の屋敷に行ったり、
輝夜の話し相手をしたりと色々あった。まぁ、そんなことはどうでもいい。
さて、改めてもう一度言おう。一週間経ったのだ。つまり妖怪が今日、輝夜をさらいにくるのだ。
今、依頼主・・まぁ、翁時である。翁時が呼んだ陰陽師が全員集まっている。
と言っても俺を含めて６人だけだ。今更だが、こいつ等は全員それなりの実力を持っている。
なんせ都でも有名なほどだ。それ故に仕事もたくさん来る。なに？俺か？
俺の所にはあんまり来ない。格好が怪しいからな。前にも言ったと思うが、今更変える気は無い。

「どうしたのですかな？壊殿。」
「・・なんでもない。始めてくれ。」

俺は話しかけてきた陰陽師にそう言い、茶を啜る。
ちなみに、俺たちは円で囲むように座っている。あと輝夜はいない。
翁時に部屋から出ないようにと言われてるらしい。その翁時は今俺の横で茶を啜っている。

「では・・・。今日はおそらく、かぐや姫を妖怪がさらいに来るでしょう。
そこで、我々は一刻も早く策を練らねばいけませぬ。何かありませぬか？」

少し年を取った陰陽師がそう言う。すると他のやつらは全員、首を傾げ始めた。

「そんなの簡単です！今すぐ妖怪を退治してしまえばいいのです！」

陰陽師の中でも一番若いであろう男がそう言い出した。・・馬鹿だ・・。

「場所はわかるのですかな？」

「そんなのは探せばいいのです！」

「・・・探してる間にかぐや姫が襲われたらどうするのですか？まさか守る者を放って置いて探せと？」

「それは・・・・。」

「もう少し、慎重に行動しなければいけませぬぞ？」

「・・・申し訳ありません。」

若い陰陽師が他の陰陽師にそう言われ、座る。

ちなみに、俺はまだ一言も話していない。めんどくさいから。

「壊殿は何かありませぬか？」

「ふん、こんなやつに聞いたところで、大して役にも立たぬでしょう。」

前に自分の式を俺の絶にやられた鼻息が荒かった陰陽師がそう言いながら、

俺を上から目線で見る。・・・うざいな・・・。

「別に、常にかぐやの傍に誰かが付いていれば言いだけの話だろう？」

「「・・・・・・。」」

全員が「それもそうだった・・。」みたいな顔をしている。馬鹿だな。

「では、誰かかぐや姫の付き添いをしたい者は?」

「「私が」」

俺以外の全員が名乗り上げた。まぁ、予想はしてたがな。

「う〜む・・・。困りましたのぉ・・・。全員と言うのは駄目ですかの?」

「いや、それはやめておいたほうがいいだろう。妖怪が怪しんで近づかなくなる。」

「では、どうしましょうか・・・。」

そんな感じで「う〜ん・・・。」と唸りを上げた。すると、今まで黙っていた

翁時が「失礼」と話しに入ってきた。

「わしがかぐやに、誰を付き人にしたいか聞いてみましょう。」

「・・・そうですな。そうしてくだされ。」

翁時は失礼、と言いながら部屋を出て行った。そして少しすると部屋に戻ってきた。

輝夜のオマケ付きで。

そして輝夜は、翁時の隣に座り、陰陽師たちの顔をじっくりと見始めた。

じっくり見終わった後、最後に俺の顔を見た。

・・気のせいだろうか?俺のことを見た途端、顔を赤くし始めたん

だが・・・・。

「決めました。私の付き人は――――

で、結局俺になった。いや～、大変だったなぁ。輝夜が「私の付き人は、壊様。あなたです」

なんて言うもんだから、後ろの陰陽師たちが俺に向けて殺気をビシビシと当ててきて、

挙句の果てに「手が滑った」とか言って札を投げてくるもんだから、

輝姫を置いてそのまま

逃げてしまった。

「まったく・・・、私を置いていくなんて・・。」

置いて行かれた輝夜は横で頬を膨らまして拗ねている。子供かお前

は。

「そう怒るな。どうせ妖怪はまだ来ないさ。」

俺はそう言いながら輝夜の頭を撫でる。・・・なんか俺って、他人の頭を撫でてばかりだな・・

「ちょ、ちょっとやめてよ・・／／／」

「ん?嫌だったか?すまない。」

俺はそう言いながら輝夜の頭から手を退かす。

「・・・ねぇ。」

「なんだ?」

「私が妖怪にさらわれたら・・・壊はどうするの?」

「・・・させんさ。」

「え?」

「妖怪なんぞに、お前をさらわせはせんさ。俺が守るんだからな。」

俺はそう言いながら、輝夜のほうを見る。・・・いやいや、なんで顔を隠すんだ?

そう思いながらも、俺は妖怪が来るまで待つ事にした・・・

ーーーー輝夜ーーーー

壊が私の頭を撫でるのをやめた後、私は不意に思った

そして壊に聞いてみたいと思った。

「・・・ねぇ。」
「なんだ？」
「私が妖怪にさらわれたら・・・壊はどうするの？」

私は聞いた。もしかしたら「どうでもいい」とか「知った事か」なんて
言われるかもしれない。そう思ったらとても怖くなった。

「・・・させんさ。」
「え？」

考え事をしていて壊の言っていることが聞こえなかった。
私はつい、聞き返してしまった。

「妖怪なんぞに、お前をさらわせはせんさ。俺が守るんだからな。」

そう言う壊の横顔は、いつも通り無表情だった。ただ、その目は真剣な目だった。
嘘偽りのない本当の目。それがとても美しく、同時にかっこよく、
私はつい見惚れてしまった。
そして壊がこちらを向いた途端、見惚れていたのが恥ずかしくて顔を隠す。
顔を隠しながらも、私は思っていた。
この人は本当に私を守ってくれるんだろうな、と・・・

第６２話：嵐の前の静けさ（後書き）

そんなわけで終わりました。輝夜をさらいに来る妖怪は何にしようかな・・・

第６３話：（自称）大妖怪　狒々（前書き）

最近何を書けばいいか分からなくなってきました・・

第６３話：（自称）大妖怪　狒々

「・・・いつになったら来るのかしら？」
「さぁな。個人的には、来ないほうが嬉しいな。」

夜になっても、妖怪はまだ来なかった。いい加減、輝夜も痺れを切らしたのか、
さっきからゴロゴロしている。はしたないぞ。
ちなみに、他の陰陽師たちはどうしているかと言うと、自分の部屋に居たり、
縁側のような場所に居たり、何故か屋根で見張りをしているようなやつもいる。
頑張ってるな。風邪引くなよ。

「それにしても本当に遅いわね・・・。来ないんじゃないの？」
「まぁ、来ないならそれでいいじゃないか。」

そんな感じで俺たちは暇を潰していた・・・

「・・いい加減、待ちくたびれたわ。」

そう言いながら勝手に布団を敷き始めた輝夜。

「俺だって「壊殿！」どうした？」

いきなり若い陰陽師が部屋に入ってきた。輝夜は「勝手に入ってこないでよ」
みたいな顔をしている。まぁ、わからんでもない。

「そ・それ・・が・」
「落ち着け。」
「は・・はい。」
「で、何があった？」
「そうです！妖怪が来ました！」
「！・・・そうか。先に行っていろ。すぐに行く。」
「はい！では私はこれで！」

そう言いながら。走って行く若い陰陽師。・・・あいつ、嬉しそうな顔をしていたぞ？
何かいい事でも有ったのか？

「壊・・・・」

いつの間にか布団を仕舞った輝夜が俺を心配そうな目で見ていた。

「・・心配するな。すぐ帰って来る。」

俺はそう言い、部屋を出る。さて、どんな妖怪なんだろうな・・・

俺が外に出ると、真っ先に目に入ったのは妖怪の死骸だった。
しかも、そこらじゅうに転がっている。頑張ってるんだな。

「壊殿！」

若い陰陽師が俺に何か言ってきた。・・あぁ、さっきから俺のことを狙っている
妖怪のことを言ってるのか。大丈夫、妖力が駄々漏れだから気付いてる。
俺は能力でナイフを創り、後ろにいる妖怪を真っ二つに切った。妖怪は悲鳴を上げる事も出来ずに倒れた。

「奇襲するなら妖力を隠すんだな。」
「壊殿！大丈夫ですか！？」
「あぁ、問題ない。さて、行こう。」
「あ、待ってください！」

そう言いながら、若い陰陽師が俺の後を付いて来る。とりあえず、妖力が強い
方角に進めばいいだろう。俺はそう思いながら妖怪を切りつつ進む。

「ぜぇ・・ぜぇ・・・。」
「・・大丈夫か？」
「か・・・壊殿はまったく疲れていませんね・・・。」
「まぁ、な。」

そもそも、雑魚妖怪に手こずっていたら、大将を相手に出来んしな。
しかし、陰陽師というのはあまり体力が無いんだな。霊力で補ってるから当たり前か。

「・・お、あれだな。」

見てみると、やたらデカイ猿っぽいのと、他の陰陽師が束になって戦ってた。

猿の大きさは３ｍくらいだろうか？

「・・・頑張ってるな～・・。」

「何を呑気な事を言っているのですか！早く助けに行かないと・・・！」

「まぁ待て。」

「ゲハッ！？」

俺は行こうとする若い陰陽師の襟首を掴んで引き止める。

「ゴホッ・・ゴホッ・・！何するんですか！？」

「いや、落ち着け。とりあえず、俺たちは周りにいる雑魚妖怪を片付けたほうがいいと思うんだ。

まだ残ってるだろう？あの妖怪はあそこにいる他の４人に任せればいいさ。」

「・・わかりました。」

そもそもあれだよ。何で雑魚あっちのけで大物と戦ってるのか理解できない。

屋敷に被害が及ばないように雑魚を片付けるやつらとか残して置けよ。

・・ひょっとして、雑魚妖怪はこの若い陰陽師に任せてたのだろうか？

一人で相手に出来るわけ無いだろうが・・・。馬鹿だな・・。

「さて・・・。始めるぞ。」
「はい！」

そう言いながら俺は雑魚妖怪を片っ端から切る。ひたすら切る。
弱った奴などは、若い陰陽師が札で撃沈させていく。・・・多いな。
俺は若い陰陽師が気になり、そちらのほうを見た。

「！オイ！」
「へ？わぁ！」

若い陰陽師の後ろから妖怪が襲い掛かろうとしていた。
俺は自然と身体が動き、若い陰陽師と妖怪の間に入って攻撃を受けた。

「ぐっ・・！」
「壊殿！」

左肩をやられた。・・結構深いな・・・。
攻撃を受けた後、すぐに妖怪を切り捨てる。・・おかしい、体が妙にダルイ・・。

「大丈夫ですか！？」
「問題・・ない・・。早く倒すぞ・・・。」

俺は立ち上がり、再び妖怪を切って倒す。すると、妖怪は自分の大将を置いて逃げ始めた。
よし・・・。

「次は・・・あいつだ。」

未だに殺り合っている陰陽師たちと妖怪。しかし、陰陽師が3人、倒れていた。
必死に戦っているのは少し年を取った陰陽師だけだ。
その陰陽師に向かって、妖怪が巨大な腕を陰陽師に振り下ろそうとしていた。
しかし、俺はナイフを投げて妖怪の腕を刺した。

「グギャァァァ！」

妖怪は腕を抑えて叫び始めた。その隙に、陰陽師たちのもとへ駆け寄る。

「おい、大丈夫か？」
「壊殿・・・。助かりました。」
「気にするな。オイ」
「は、はい。なんですか？」
「そこの転がってるやつらを屋敷に運べ。ついでに、爺さん、お前もだ。」
「しかし壊殿は・・・。」
「俺か？俺はな・・・、

あれを片付けてから行く。」

そう言い、能力で大鎌を創って妖怪に向かって走る。そのまま妖怪

の体を切る。

「グォォォッ！ぐ・・ぬ、人間がぁ・・。わしにこのような傷を負わせよって！」

そう言いながら腕を振り下ろす妖怪。それを横に飛んでかわす。

「壊殿！」
「早く行け。」
「しかし・・・」
「・・行け。」

殺気を込めてそう言う。若い陰陽師はそれを理解したのか、式神を呼び、
負傷した陰陽師たちを運ばせる。さて・・・

「始めようかじゃないか・・。」
「抜かせぇ！人間がぁ！」

そう言いながら蹴りを放ってくる妖怪。俺はそれをかわした。

「ふぅ・・。危ないな。」
「・・・わしの蹴りをかわす人間なんぞ何百年ぶりかのぉ・・。人間、名はなんと言う？」
「・・・紅鎖華　壊。お前に名前はあるのか？」
「くっくく・・。わしは狒々（ひひ）！大妖怪の狒々（ひひ）じゃ！覚えておけ、人間！いや、壊！」

そう言いながらやたらと太い尻尾で攻撃してくる狒々。それを上に跳んでかわし、

大鎌を思いっきり投げつける。それが見事狒々の肩に突き刺さった。
そのまま俺は地面に着地し、後ろに下がる。

「・・・ッ!?」

再び走る違和感。力がどんどん抜けていく感じだ。

「おい、狒々。」
「ぐっ・・・。なんだ、人間・・・。」
「君は俺に何かしたか?」
「?何を言っている。わしは何もしておらん。」

狒々は何もしていない・・・。ということは思い当たる筋は一つだけだ。

「・・あの時か・・・」

たぶん、いやほぼ間違いなく若い陰陽師を庇った時に妖怪から受けた傷だろう。
そう思い、自分の左肩を見る。案の定何か仕込んであったらしく、俺の左肩は黒く染まっていた。
・・・あの妖怪の爪には毒でも仕込んであったのだろう。まったく・・厄介な・・。

「余所見とは余裕じゃのぅ!」
「ガッ!?」

狒々の腕がわき腹に直撃する。そして俺はそのまま横に吹っ飛んだ。
しかし、能力で刀を創り、ぞれを地面に突き刺して何とか止まる事が出来た。

「ほぅ・・・。」
「ぐ・・・。痛いじゃないか・・。」

俺はそう言いながら刀を逆手に持ち、狒々に向かって走る。
刀を逆手に持ったまま、おそらく狒々には見えないであろう速さで連続で切りつける。
二回や三回なんて生易しいものじゃない。５０や１００の数だ。
狒々の体が見る見るうちに切り刻まれていく。腕は地面に落ち、足は横に吹き飛び、中から骨が飛び出て、首が千切れかかっている。
そして俺は、最後にありったけの霊力・妖力・魔力を込めて刀を上に向けて振り上げる。
すると、狒々に身体は左右に真っ二つになった。・・終わったか？

「ぐ・・・ゴホッゴホッ！・・・毒が大分回ってきたな・・・」

俺は何とか力を振り絞り、屋敷に戻ろうとする。そして屋敷の入り口まで来た。

「・・・まずい・・・目が・・・」

目が霞んできた。。俺はそのまま地面にうつ伏せに倒れる。・・・
眠い・・・
そう思い、目をゆっくりと閉じる。最後に輝夜の声が聞こえた気がしたが、気のせいだろう・・・

第６３話：（自称）大妖怪　狒々（後書き）

そんなわけで終わりました。ちなみに、何故（自称）かと言うと特に意味はありません。大妖怪の割りには弱いなぁ・・・と、書いてる途中思いました・・。

第６４話：事件の後は安静に（前書き）

最近はタイトルを決めるのが・・・

第６４話：事件の後は安静に

・・・・俺はどうしたんだ？・・あぁ、そうだ。狒々と戦ったんだ。
その後に狒々と戦う前に食らってた、妖怪の毒で倒れたんだっけ？
という事は俺は今死んでるのか？
いや、ないな。一応、中途半端にだが不老不死だから死んではないと思う。・・そう思いたい。

「・・か・・・・よ・・」

なんだ、うるさいな・・・。
もう少し寝かせて欲しいんだが・・。

「か・・・おき・・・よ・・・」

・・・はて？なんだか水が落ちてきたぞ？雨か？
そう思い、ゆっくり目を開ける。

「壊・・うぅ・・おきてよぉ・・。」

・・・俺の顔を覗き込むような姿勢で泣いてる輝夜がいた。

「・・・何を泣いているんだ？輝夜。」
「・・壊・・？」
「そうだが？」
「壊！！」

抱きついてくる輝夜。首に抱きつかないでくれ。苦しい・・。

「うぅ・・血塗れになって倒れてて・・ひっぐ・・中々起きないから・・・医師に見せたら・・・
凄い毒のせいで目が覚めないんだって・・死んじゃうかもしれないって・・えっぐ・・。」

いや、今すでに死にそうなほど苦しい。頼む、もう少しだけ力を緩めてくれ・・
俺のそんな願いも届かず、尚も泣き続ける輝夜。

「・・輝夜。泣くな。」
「だって・・」

俺は何とか右手を輝夜の頭に乗せる。すると輝夜はさらに泣き出した。
頼む、泣き止んでくれ。俺がお前を泣かしているみたいだ。
こんなの、他の陰陽師に見られてみろ。「貴様よくもかぐや姫をぉぉぉ!」
とか言いながら殺しに掛かって来るに違いない。・・・やばい、それが頭の中で想像出来てしまった。

「うう・・ひっく・・・。」

・・・まぁ、その時はその時だな。今は一刻も早く輝夜に泣き止んでもらおう。
俺は右手で何度も輝夜の頭を出来るだけ優しく撫でる。
輝夜は、そのまま泣き続けていた・・・

「で、泣き止んでくれたな？」

黙って頷く輝夜。よかった、陰陽師たちには見られていない。

「そうか。ところで俺が倒れてから何日経った？」

「・・3日くらいじゃないかしら？」

結構寝たな・・。早く家に帰って掃除をしよう。埃が積もってるかもしれないしな。

それに、仕事も終わったし。

「仕事も終わったから俺は帰ら「駄目よ！」は？」

帰らせてもらう、と言い切る前に駄目と言われた。・・どういうことだ？

「だって、あなた非道い怪我してるじゃない。せめてここで怪我を治してから帰りなさいよ。」

確かにそうなのだが・・・。こんなの、霊力か何かを込めればすぐに治るんだけどな・・。

「いや、やはり帰らせてもらうよ。」

俺はそう言い、布団から起き上がる。そしてそのまま立ち上がって帰・・ろうとしたが
何故か輝夜にコートの裾を引っ張られ止められた。

「・・離してくれないか？」
「いや。」
「・・・頼む。」
「いや。」
「・・・・・。」
「いや。」

まだ何も言っていない。どうしても俺を行かせたくないらしい。
仕方ないので布団に戻り、再び寝る。すると輝夜は満足そうな顔をし、
部屋から出て、どこかに行ってしまった。・・・暇だな。

「壊、ご飯持ってきたわよ。」

あまりのも暇だったので、新しい式でも創ろうと思い、色々と考えていたら

輝夜が食事を盆に乗せて持ってきた。

「あぁ、すまんな。」

俺はそう言い、起き上がり箸と米の入った椀を受け取る。そして食べる。

輝夜は自分の分を持ってきて、俺と一緒に食べた。

「・・そうだ。他の陰陽師たちはどうした？」

「ん、それなら全員帰ったわよ。」

3日も経ったんだし、当たり前か。

「それよりも、どうしてあんなに酷い怪我を負っていたのかしら？私を攫いに妖怪って、そんなに強かったの？」

「いや、まぁ強いには強いが、俺があそこまで重症だったのは他の妖怪の毒にやられたからだ。医師も言っていたんだろう？」

「うん。と、いうことは貴方は毒のせいであんなにボロボロになったのね。」

「まぁな。」

そんな感じで食事を終え、俺たちはその後他愛ない話をした・・・

「・・・ん・・・。」

ふと、目を覚ます。どうやら今は夜中のようだ。
どうせすぐには眠れないし、少し外の風景でも見よう、そう思い、
部屋から出て、どこかいい感じの場所はないかと探していると、
庭がよく見わたせる場所を見つけた。・・・月も見えるな・・・。
能力で龍笛を創り、それを吹く。たまには曲の雰囲気を変えてみる
か・・・。

「～～♪」

俺が吹いているのは、昔聞いた和風ロックの曲。出だしは物凄く遅
いが、
後から急に速くなる曲だ。足音が聞こえたので、振り向くと輝夜が
こちらを見ていた。
そして俺の横に座る。目を瞑りながら俺の吹いてる曲に耳を傾ける。
それが終わると、次はゆっくりした雰囲気の曲を吹く。
さて、眠れるまでもう少し吹くか・・・

第６４話：事件の後は安静に（後書き）

そんな感じでおわりです。次回からは、壊が輝夜の屋敷で住みます。
・・少しの間だけ。

第６５話：平和と秘密と帰宅（前書き）

特になし

第６５話：平和と秘密と帰宅

輝夜の屋敷に泊まって三日経った。この三日間、色々な奴に殺されかけた。
しかも、その全部が男。・・・なぜ？

「ねぇ、壊。どうかしたの？」
「いや・・・。なんでもない。」

まぁ、そんな事を考えても仕方が無いな。俺は今、縁側で茶を飲んでいる。
それにしても、この世界は不思議だ。なんだか時が進むのが早く感じる・・・。
いや、まぁ気のせいだろうがな？

「平和ね・・・」
「そうだな・・。」

そう言いながら和む俺たち。そんな俺たちに、絶が羊羹を持ってきた。
それに軽お礼を言い、羊羹を口に運び、茶を啜る。美味し。

「ねぇ、壊。貴方って、月を見て何か感じる？」
「・・・さぁ、な。」

輝夜が急に訳の分からん事を聞いてきたので、適当に答える。
月か・・・。永淋や依姫、それに豊姫は元気にしているだろうか？
今度遊びに行くか・・・。

「・・ねぇ、もし私がおかしな事を言ったら信じる？」
「・・内容にもよるな。君が『実は男でした』とか言ったら、信じるかもしれん。」
「ちょっと！どういうことよ！？」
「冗談だ。で、何が言いたいんだ？」
「・・・なんか納得いかないけど・・・。」
「いいから。とっとと話せ。」
「・・・実は私ね・・・・」

そう言いながら俯く輝夜。なんだ？まさか本当に男だったのか！？
だとしたら他の男が絶望するかもしれん・・・。ドンマイ。
俺は勝手にそう決め付け、輝夜の口が開くのを待った。そして輝夜が俺の目を真っ直ぐ見てこう言った。

「私、月人なの。」

・・・ｗｈａｔ？今なんて言った？

「・・・すまない輝夜。もう一度言ってくれ。」
「私、月人なの。」
「・・・・・・。」

予想を斜め上行った。月ってあの空に浮かんでるやつだよな？
あれか？輝夜は永淋と同じ場所に住んでいたのか？

「・・・まぁ、いい。なぜ俺にそんな話を？」
「・・・貴方なら・・・、信じてくれるかなって・・・。」

いや、まぁ信じるさ。実際知り合いがいるしな。

「私ね・・・月から追放されたのよ。」
「つまりは何かやったわけだ。何をやった?」
「・・禁忌とされる蓬莱の薬を飲んで不老不死になったから。」

不老不死ね・・・。俺も不老不死なのだが・・・。

「でも、私は地上の生活に憧れてたの。月での生活なんてうんざりだった。
だから、絶対にやってはいけない事をやって、地上に追放された。」
「・・つまり、自分から望んで地上に流刑されたと。」

俺がそう言うと、輝夜は頷いた。・・なんと言うか、不老不死ってそんなに悪い事なのか?
それにしても、輝夜が自分の秘密を俺に話すなんてな・・・。

「・・そうだな。俺の事も少し教えてやろう。」
「?何か教えてくれるの?」
「あぁ。」

俺はそう言い、能力で刀を創る。輝夜はそれを見ただけで驚いていた。
まぁ、こんなもんじゃないさ。

「見てろよ?」

俺はそう言い、刀で自分の左腕を切り落とした。・・少し、痛いな・・。

「ちょっと！何してるのよ！」
「問題ない。」
「大有りよ！医者を呼ばないと・・」
「まぁ待て。まだ終わってない。」
「何を言って・・。」

輝夜がそういう前に、俺は自分の切り口の手を置いた。そしてそこに、適当に
霊力を込める。すると、新しい腕がメキメキと生えてきた。
俺はどこか身体の一部が失くして、霊力などと言ったものを込めれば、
すぐに生えてくる。

「大丈夫だろう？」
「あなた、一体・・。」
「そうだな。君と同類ってところだな。」
「え？それって・・。」
「俺も不老不死さ。ただし、中途半端だがな。」

俺はそう言いながら刀を消す。・・まさか他人に自分のことを話すとは・・・。
馬鹿だな、俺。まだ話してから日が浅いのに自分のことを話して・・。

「・・まぁ、なんだ。別にお前の言った事を嘘だとは思わんさ。
それに、例え君の言った事が被害妄想だったとしても、俺は君を馬鹿にはしない。」
「・・ねぇ楽しい？私のこと馬鹿にして楽しい？」
「あぁ。とっても。」

そんな感じで二人はのんびりとしてた・・・・

あの後、輝夜をひたすらからかった。前の世界ではこんなこと
子供の時にしかやらなかったな～・・。もちろん蒼華相手にだ。
そして俺は、部屋である作業をしている。・・実際は何かしている
わけではないが、
アイディアを考えているのだ。何のアイディアかって?新しい式の。
ただ、まったく決まらない。もう一層のこと『じごくのもんすた～』
とかにしてしまおうか?
・・・いや、駄目だ。あんな黄色いピーマンもどきを式にしたら、
その辺にいる子供のはらわたを食い散らかしそうだ。いや、でもな
ぁ・・
ゲームだと強かったから、ひょっとしたら現実でも強いんじゃない
かなぁ・・

「壊殿。おりますかな?」
「・・・翁時か。」

黄色いピーマンもどきの事を考えていると、翁時が部屋に入って来た。

「壊殿。この度はかぐやを助けていただきありがとうございます。改めて御礼を言わせて下され。」

「・・・もう少し前に言って欲しかったな。」

「ははははは・・・。申し訳ありませぬ。」

「まぁ、いいさ。で、用件は?」

「はい。実は壊殿の調子も大分良くなったと思いまして・・・。それでお望みならば今すぐにでも家に帰ってもらってもよろしいと医者に言われました。

どうでしょう?お帰りになりますかな?」

「・・そう・・・だな。いい加減、家に帰って掃除もしないといかんしな。

すまないが帰らせてもらう。出来れば今すぐにでも・・・。」

「わかりました。ではお見送りいたしましょう・・・。」

そう言い、立ち上がる。そして翁時と一緒に屋敷の出口まで行く。

すると輝夜が待っていた。

「壊、帰るの?」

「あぁ。傷ももうほとんど治ってるしな。」

「そう・・・。」

寂しそうな顔をする輝夜。

俺はそんな輝夜の頭に手を乗せた。

「・・まぁ、たまには遊びに来るさ。じゃあな。」

俺はそう言いながら屋敷を出る。そしてそのまま家に帰った・・・

第６５話：平和と秘密と帰宅（後書き）

そんな感じで終わりました。
黄色いピーマンもどきって、わかりますかね？

第６６話：フラワーマスター（前書き）

結構わかる人がいるかと思います

第６６話：フラワーマスター

自分の家に帰ってから1週間経った。帰ってきた時は驚いた。
家の中が奇麗だったからだ。どうやら、絶がたまに帰ってきて掃除をしていたらしい。
本当に気が効くな。今度何か買ってやろう。
そんな俺は依頼が無い日は妹紅の屋敷に行ったり、輝夜の屋敷に行ったりしている。
それと、仕事の量がちょこっと増えた。何故かと言うと、輝夜を攫いに来た狒々を退治したからだ。
それで都にその噂が広がり、俺に依頼しに来るものが増えた。まぁ、それでも1週間に5回程度だがな。
ちなみに、他の陰陽師は大体1週間に１０回くらいだ。しかも、最低１０回だ。・・・俺って、嫌われてない？

「ん？」

そう思っていると、引きとがコンコンと叩かれた。
俺は「今行く」と言いながら立ち上がり、引き戸を開ける。
そこには女が立っていた。まだ若いな

「あの・・・。貴方が紅鎖華　壊様でしょうか？」
「あぁ、そうだ。」
「私は由紀野と言います。今日は貴方に依頼があってやって来ました。」
「・・まぁ、とりあえず入れ。」

俺がそう言うと、「失礼します」と言いながら入ってくる由紀野。
そのまま部屋に案内する。そして座布団に座ってもらい、絶に茶を

持って来てもらう。

「さて・・・。依頼内容を聞こうか。」
「はい。少し前に私の村の近くに妖怪が住み着いたんです。
最初の頃は特に気にしなかったのですが、ある日のこと、村の中で
ある噂が広まり始めたんです。」
「噂・・ね。」
「はい。なんでも、住み着いた妖怪はもの凄く美しい妖怪、という
噂です。
もちろん、最初は皆信じませんでした。だけど、その噂が広まって
から三日後に
村の男性が妖怪に会いに行って、そのまま帰って来なくなったんで
す。
何日経っても帰ってこないものだから村の人達が心配して、何人か
探しに行ったんです。
そうしたら・・・・・。」
「・・・探しに行った村人も帰って来なかった。」
「はい・・・。」

そう言いながら俯く女性。
話の流れからして村人を助けて欲しいとか、妖怪を退治して欲しい
とかそんなんだろう。
俺は絶を呼んで茶を要求する。
うん、美味し。俺は湯呑みを置き、由紀野を見る。そして言った。

「いいだろう。仕事は引き受けよう。」
「本当ですか?ありがとうございます・・。」
「・・・とりあえず、その妖怪がいる場所を教えてくれ。
それと、君はここにいろ。いいな?」
「・・・わかりました。妖怪が住み着いた場所は・・・。」

あの後、依頼してきた由紀野に再度依頼内容を確認し、妖怪がいる場所までの道のりを教えてもらった。
何とかそこまで辿りついた俺は、その場所を見て驚いた。

「・・向日葵・・？」

そう、向日葵だ。他にも花はあるが、とりあえず向日葵がたくさん咲いている。
俺はその向日葵畑に近づく。これは・・・・

「・・・血の臭いがするな・・。」

向日葵畑の下から血の臭いがするのだ。それも、かなりの量だ。
俺はもう少しだけ向日葵に近づく。が、途中で足を止めた。

「こんにちは。」
「…こんにちは。」

後ろから女性の声が聞こえたので、俺はゆっくりと後ろを振り向く。
そこには案の定、女性がいた
容姿は、少し癖のある緑のショートボブに、真紅の瞳。
そして白のカッターシャツとチェックが入った赤のロングスカートのようなものを着用し、その上から同じくチェック柄のベストを羽

織っている。
首には黄色いリボンを着けており、右手に日傘を持っている。

「私の花畑に何か用かしら？」

そう言いながらニッコリと微笑む。しかし、その目は笑っていない。

「いや…別に用は無い。見ていただけだ。」
「あらそう？それで、感想は？」
「あぁ、見事だ。」

女性が少しずつだがこちらに近づいている。
その顔は笑顔のままだ。ただし、殺気を撒き散らしている。
さらに言うと、妖力も出している。本当に見事だ。さて……

「何をしているのかしら？」
「…チッ！」

そのままゲートで逃げてしまおうと思ったら、女性・・・いや、妖怪が傘で殴りつけてきた。
それを何とかかわす。不意打ちなんて卑怯だぞ？

「あら、よくかわせたわね？」
「それはどうも。」

そう言いながらも、俺に攻撃をしてくる妖怪。俺はそれを受け流すかかわす。
そしてかわしきれずに一発当たる……前に防御した。それを見た妖怪は驚いていた。
まぁ、こんな一撃、その辺のやつが食らったらグチャグチャになる

からな。

「驚いたわ…まさか私の攻撃を受け止めるなんて……貴方、何者？」
「人に名を尋ねる時はまずは自分からだ。」
「あら。うふふ……まぁいいわ。」

そう言いながら妖怪は後ろに飛んで距離を取った。そして傘を広げて自分の肩に乗せた。

「私の名前は風見幽香（かざみゆうか）よ。貴方は？」
「俺は紅鎖華　壊だ。」

俺が名を名乗ると、幽香はまた驚いた表情をする。そして楽しそうに笑い始めた。
…嫌な予感しかしないな……

ーーーSide幽香ーーー

今日も暇な日だ。さっき妖怪が私を倒しに来たが、それを軽く捻った。
弱い、あまりにも弱すぎる。私を楽しませれる存在はいないのだろうか？
そう思い、家の中で紅茶を飲んでいると、窓の外に男が居た。
その男が気になり、私は家を出て男の様子を窺う。
男は最初は私の花畑を見ていたが、少しずつ花畑に近づき始めた。
そしてさらに近づこうとしていたので、私は男に近づいた。なるべく足音を発てずに
近づいた。すると、男は急に止まった。どうやら私に気づいた様だ。

「こんにちは。」
「…こんにちは。」

私は男に挨拶をした。すると男もめんどくさそうに挨拶をする。
改めて男の容姿を見る。私より背が高く、あまり短くない少しだけ長めの白い髪。
そして黒い服に黒い上着。さらに下も黒色のものを穿いていた。
そして瞳の色は深紅の色をしていた。しかし、その目はやる気がなさそうな目だった。

「私の花畑に何か用かしら?」

私はそう言いながら男に微笑みかけた。大抵の男はこれでおちる。
しかし、目の前の男は大して気に留めていないような顔をしていた。

「いや…別に用は無い。見ていただけだ。」
「あらそう?それで、感想は?」
「あぁ、見事だ。」

私は少しずつ男に近づく。しかし、男は何か悟ったのか私から少しずつ離れていく。
そして男は懐をゴソゴソと漁り始めた。

「何をしているのかしら?」
「…チッ!」

私は男が何かをする前に傘で殴りつける。しかし、男は私の攻撃を横に飛んでかわす。

「あら、よくかわせたわね？」
「それはどうも。」

男はそう言いながらも私の攻撃をかわす。そして男に隙ができ、私は今度は自分の拳で男を殴りつけた。しかし、男はそれを腕で防いだ。

「驚いたわ…まさか私の攻撃を受け止めるなんて…貴方何者？」
「人に名を尋ねる時はまずは自分からだ。」
「あら。うふふ……まぁいいわ。」

私はそう言いながら後ろに飛んだ。そして自分の傘を開き、それを肩に乗せる。

「私の名前は風見幽香（かざみゆうか）よ。貴方は？」
「俺は紅鎖華　壊だ。」

紅鎖華　壊？確か都で有名になっている陰陽師のはずだ。陰陽術を使わず、代わりにあらゆる武器を使い敵を倒す。すごい、先程の雑魚妖怪なんて目じゃないほどの大物だ。それが嬉しくて笑ってしまった。
一頻り笑った後、改めて男を見る。男は…いえ、壊は私を変な物を見るような目で見ていた。

「ふふふ…ごめんなさいね。ただ、貴方みたいな大物が来るなんて思わなかったのよ。」
「…大物と思っているなら、それは誤解だ。俺はただの一般市民だぞ？」
「陰陽師を一般市民なんて言わないわよ。」

私はそう言いながら再び男に殴りかかった。
しかし、男の前まで来た途端、本能的に後ろに下がった。

「…おしいな。もう少しで当たりそうだったんだが……」
「危ないわね。そんな物騒な物を振り回すなんて。」

男の手には、いつの間にか握られていた刃物が鋭く光っていた。
そして先程のあの刃物の攻撃で、服の裾が少し切れていた。あのまま殴りかかっていたら
間違いなく切られていた。

「うふふふ……貴方のせいで身体が疼いて仕方ないの。もう少し付き合ってくれるかしら?」
「……めんどくさいな。」

そう言いながら、自然体で刃物を持つ男。しかし、まったく隙がない。
ふふふ……私を楽しませて頂戴……

第６６話：フラワーマスター（後書き）

そんなわけで風見幽香さんでした。次は本格的な戦闘です

第６７話：力の差（前書き）

今回は壊がおかしくなるかも？

第67話：力の差

幽香の攻撃をかわしつつ、ナイフで切っていく。しかし、俺の攻撃は全て、
すんでのところで避けられてしまう。

「・・すばしっこいな、君は。」
「あら、貴方には言われたくないわよ。ふふふ・・。」

何がおもしろいのか、笑う幽香。・・・何か怖いな・・。
もう一層のことクックルになってしまおうか？・・・駄目だな。
村人に来て、見られたら後々めんどうだ。

「戦いの最中に余所見なんて余裕じゃない！」

そう言いながら、殴り掛かって来る幽香。それを横に飛んでかわす。
そしてそこから回し蹴りを放つ。幽香はそれを傘で防いだ。・・・
丈夫な傘だな。
そんなくだらない事を思っていたら幽香が傘で俺を殴って吹き飛ばす。
そのまま遠くに有った木に背中を打ち付けてしまった。・・ぶはぁ！一瞬息が止まった！
俺は何とか起き上がり、幽香に向かって走った。仕返しくらいはしないとなぁ！
幽香に少し近づいた途端、俺は走る速度を上げた。そのままナイフで幽香を切る。

「ッ！！」

幽香の腕に切り傷が出来た。俺は幽香から離れ、ナイフを投げる。
それをかわす幽香。それくらいは見抜いていたさ。
俺は幽香に向かって走り、そのまま飛び蹴りを入れてやった。

「ぐっ・・！」

飛び蹴りは見事に幽香の腹に入った。しかし、幽香は俺の脚を掴み、
そのまま思いっきり遠くに投げた。
地面に着地し、再び幽香に視線を向ける。幽香は俺を見て睨んでい
る。

「ずいぶんと余裕そうな顔をしているわね・・。」
「いや、結構危なかったぞ?それと、そろそろ本気を出したらどう
だ?」
「・・気付いていたのね?」
「あぁ。勘だがな。」

俺がそう言うと、クスクスと笑い出す幽香。・・・どうしたのだろ
うか?

「私に本気を出せって言ってるけど、貴方だって出してないでしょ
う?」
「・・・まぁな。めんどくさいじゃないか。」

俺がそう言うと、幽香の眉が「ピクッ」といった感じに一瞬だけだ
が上に上った。
・・・気のせいだろうか、幽香の殺気が膨れ上がってる。

「そう・・・、私じゃ貴方の相手にはならないって言うのね・・。」

いや、言ってないぞ?戦うのがめんどくさかっただけだぞ?
何でそんな勘違いしてるんだ?

「いいわ・・。それなら本気で戦ってあげる・・。近くに花もないしね・・。」

幽香がそう言うと、妖力が跳ね上がった。・・・これって、死亡フラグってやつか?
あ、俺死なないんだった。

「ゴァッ!?」

くだらない事を考えていたら幽香の拳が俺の腹に突き刺さった。いや、実際は殴っただけだけど。
そして連続で殴ってくる。・・・痛いな・・。さらに、俺の腕を掴んで放り投げた。
そのまま地面に落下する。・・受身取り忘れちまったぜ・・・。
俺は何とか起き上がり、そして立ち上がる。・・・容赦ないパンチして来やがって・・。

「ぐ・・、痛いな。もう少し優しくしてくれないか?」
「あら、まだまだ大丈夫そうじゃない。」

そう言いながら、何故か傘の先を俺に向ける幽香。そして向けてきた傘の先に物凄い
妖力が集まっていた。・・・嫌な予感しかしない・・。

「食らいなさい。」

幽香がそう言った途端、俺に向かって巨大な光線が放たれた。・・・

うわぁ、これはヤバイ。
やがて俺の身体はその巨大な光のレーザーに巻き込まれた・・・

ーーーSide幽香ーーー

「・・・終わったわね・・・。」

いくら全力でないとは言え、普通の人間がアレを食らって生きているはずがない。
その証拠に、アレを食らった男は倒れている。しかし、原型を留めているだけ彼は凄い。
本来なら、上級妖怪でもこれを食らえば消し灰に出来てしまうのだ。
運が良くても腕一本になる。
だが、彼の場合は、服がボロボロになり、仰向けに倒れてるだけだった。あとはあちこちが焦げている。

「・・・ふふふ・・。中々楽しかったわよ?ただ、もう少し粘って欲しかったわね・・。」

そう言いながら私は身を翻す。

「ならもう少し楽しもうじゃないか。」
「ッ!?」

素早く後ろを振り向く。しかし、そこに有ったのは仰向けに倒れている彼。

「気のせい・・？」
「いや、気のせいではないぞ。」
「なっ！？」

仰向けの彼がゆっくりと起き上がる。手を使わず、足だけで仰向けのまま立ち上がる。
正直、気味が悪かった。そして、起き上がった彼は顔を俯かせていた。

「・・貴方、なぜ生きているのかしら？」
「君が言ったんだろう？もう少し粘って欲しいと。それに・・・
そう言いながら彼が少しずつ顔を上げる。

「舞台は整ったばかりじゃないか！！」

そう言う彼の顔は笑っていた。目を見開き、瞳孔を全開にし、口を三日月のようにして笑っていた。

「ククク・・・クッハッハッハッハッ！さぁ、始めよう！今度は俺を楽しませてくれよ！」

狂ったように笑う彼に、私は恐怖した。・・恐怖？この私が？ありえない・・。
頭ではそう思っても、身体は正直だった。震える腕をなんとか抑え、彼に向かって走る。そして全力で殴り掛かった。

「ククク・・・こんなものか？」
「なっ！？」

私の全力をこの男は片手で防いだのだ。私はそのまま、男の顎に向けて上段蹴りを放った。しかし、男は私の蹴りを上に向く事でかわす。男は私の手を掴んだまま私を地面に叩き付けた。そして私を放り投げた。
私はそのまま地面に背中を強く打ち付ける。

「ククク・・クッハッハッハッ！どうしたどうした！？まさかその程度ではあるまいな！？」

狂ったように笑い続ける彼。一体何があったというのだろうか？ふと、彼の足元に落ちている物に気がついた。それは腕輪。銀色の腕輪だった。
・・なるほど。おそらく、彼は自分の力をあれで抑えていたのだろう。
それが先程私が撃ったアレによって、外れてしまったか、または彼自身が外したのだ。

「・・いいわ。本気でやってあげる。」

私はそう言い、再び傘の先を彼に向ける。そして先程とは比べ物にならないほどの
妖力を込める。

「今度こそ終わりよ・・・。」

そう言い、全力で撃つ。私の撃った巨大な光線は男に向かって真っ

直ぐ飛んで行く。
しかし・・

「ククック・・・アーッハッハッハッ！素晴しい！」

彼は相変わらず笑ったままだった。そして私の光線が彼に当たる。
私の全ての力を注ぎ込んだ光線は尚も消えずに発射され続ける。
そしてようやく光線が消え、全ての力を使った私は自分の膝に手をつく。
これなら・・さすがにあの男も・・

「・・嘘でしょう？」

そう思い、男の方に顔を上げた途端、絶望した。彼は無傷だった。
未だに笑っており、前に右手を突き出していた。そして右手を下ろし、
両手を少し広げて再び笑い始めた。

「クッハッハッハッ！お見事！その力、賛美に値する！」

そう言いながら彼は再び右手を前に出す。

「確か・・・こうだったかな？」

彼はそう言いながら、再び右手を前に出す。すると彼の出した右手に、大量の妖力が
集まっていく。・・妖力？彼は人間ではないのか？

「・・王手だ・・。」

彼がそう言った途端、私の視界に赤黒い光線が飛び込んできた。
そして私は意識を失った・・・・

「ククククク・・・中々楽しめたよ・・・。ククククク・・・アッハッハッハッハッハッ！」

第６７話：力の差（後書き）

壊が・・・壊がどんどんおかしくなっていく・・・。
なんかどっかの吸血鬼みたいになってきたなぁ・・・。

第６８話：お茶会？（前書き）

最近更新が遅れて申し訳ありません

第６８話：お茶会？

生まれた時から妖力が高く、そして肉弾戦での才能が有った。
そんな私を見て、周りの妖怪は私から離れていった。
話し掛ければ逃げられ、時には石を投げられる。その時に実感した。
あぁ・・私は孤独なんだ、と。
やがて私は一人でいることが多くなった。そんなある日、森の奥を進んだところにある丘で、
偶然にも花を見つけた。大きく、そしてたくさん黄色い花。それを見ていると何だかとても嬉しい気持ちになった。
その花を見つけてから、私は毎日のように花を見に行った。水をやり、時には話し相手をしてもらった。
実は黄色い花を見に行ってから、私にある能力が目覚めていた。

『花を操る程度の能力』

それが私の能力だ。この能力のお陰で、私は花と会話する事が出来るようになった。
何年か経った頃の事だ。私がいつものように花畑に行くと、そこはいつもの花畑ではなかった。
私の今まで植えた花などが全て、掘り起こされていた。そして掘り起こしていたのは人間だった。
何人もの人間が私の友人たちを掘り起こしている。

私はそれを見た途端、人間たちを殺していた。命乞いをする者の首をへし折り、
逃げる者は後ろから殴りかかった。
そして全ての人間を皆殺しにした後、私は落ちていた花の種を広い、住む場所を変えることにした。

変えると言っても、この丘に家を建てるだけだ。
家を建て、新しく花の種を植える。・・そうだ、どうせならこの人間たちにも役に立ってもらおう。
そう思って、人間たちを地面に埋める。ふふふ・・・
それからは陰陽師と言った者たちが襲ってきた。
どいつもそこまで強くなく、返り討ちにした。あまりにも弱く、脆い。
しかし、あの男が現れた。都でも有名と言われた男。紅鎖華　壊。
陰陽術を一切使わず（※そもそも壊は使えません）あらゆる武術で戦う変わった陰陽師。
彼は強かった。最初こそは私が圧倒していた。
しかし、彼が狂ったように笑い始めてから、私は手も足も出せなかった。
やがて私は彼の放った一撃によって倒れた。
・・あぁ・・私は負けたんだ。でも・・・清々しい。彼はどうしてあんなに強いのだろうか？
それが気になった。・・・どうせなら彼の秘密も知っておきたい・・。ふふふ・・・。

ーーーーSide壊ーーーー

「・・ふふふ・・・。」

なんか知らんが寝ている幽香が笑ってる。・・少し怖いな。
ちなみに、俺は花畑の近くにあった家にいる。たぶん、幽香の家だと思う。
なんかあのまま放って置いたら駄目だと思ったので、この家に運んだ。
中はこの時代ではありえない洋風だった。幽香が寝ているのはそれ

なりに大きいベッド。寝台？

俺は現在、幽香が起きた時のために料理を作ってる。なぜかって？考えても見ろ。俺が本気でないとは言えボロボロに負けるくらい強かったんだぞ？

そんなやつを殺したら勿体無いじゃないか。しかし、幽香は何故倒れていたのだろうか？

俺の記憶は途中からあやふやなのだが・・（※壊は自分が幽香を倒した事を忘れています。）

まぁ、そんなことはどうでもいい。とりあえず、作ったから持って行くか・・・。

「う・・・ん」

作ったものをテーブルに並べてたら幽香が起き始めた。

「・・・！なんでここに・・！？」

そう言いながら飛び起きて後ろに下がる幽香。・・・傷つくじゃないか・・。

「まぁ、なんだ。とりあえず食え。」

俺はそう言いながらテーブルに親指を向ける。すると、幽香は警戒しながらも椅子に座った。俺はその向かい側に座る。

今日のはめずらしく洋食だ。この家の雰囲気に合わせてみた。

メニューは、パン（材料は自分で用意した）コーンスープ（何故か台所にトウモロコシがあった）

ハンバーグ（これまた台所に置いてあった肉。大丈夫、人肉じゃなかった）と、紅茶。
幽香は怪訝そうな目でパンを見て、少し千切って食べた。

「・・おいしいわね・・。」
「そうか。」

美味いらしい。その言葉を信じて俺も食べる。・・うん、美味い。
陰陽師の仕事やめて、飯屋でも開こうか。少しは儲かるかもしれないしな。
なんやかんやあって食事が終わった。俺は皿を洗い、再び紅茶を注ぐ。

「・・で、何で貴方がここにいるのかしら？」
「君を運んだからだ。以上。」
「以上、じゃないわよ。何でここにいるのか聞いてるのよ。」
「なんだ、俺が居てはいけないのか？」
「そうじゃないけど・・・。貴方、私を退治に来たんでしょ？」
「・・・そういえばそうだった。まぁ、別にいいさ。君が村人をこれから殺さないならな。」
「それは無理ね。」
「ほぅ・・。何故だ？」
「だって、あいつらは私の花が狙いですもの。」

・・なるほど。どうもこの依頼怪しいと思ったらそういう事か・・。
アレだろう、向日葵はこの時代じゃあめずらしいから、それを売ってガッポガッポ
ってところだろう。

「・・・そうか。それなら別に村人が死んでも構わないな。」

「・・依頼者の村が滅んでも構わないのかしら？」
「構わんさ。別に、俺は誰が死のうが知った事ではないしな。それに、ここで君を殺したら生かした意味がない。」
俺がそう言うと、右の眉を少し「ピク」と吊り上げる幽香。
「勘違いしないでくれよ？俺は君の成長に期待しているんだ。その若さでその妖力、実に素晴らしい。月日が経てばさらに君は強くなるだろう。だからここで殺すのが惜しいのさ。」
「・・貴方、変わってるわね・・。」
「よく言われる。」
俺がそう言うと、幽香は溜息をついた。・・・どうかしたのだろうか？
「・・ところで・・・。」
「ん？どうした？」
「貴方、人間じゃないでしょ？」
「・・・何故だ？」
「戦っている時に妖力を出していたじゃない。」
・・俺、妖力出してたのか・・・。
「・・まぁ、人間ではないな。言っておくが妖怪でもないぞ？」
「・・・ふ～ん・・。」
俺がそう言うと、幽香は興味なさそうに紅茶を飲む。いや、自分で聞いておいてその反応はないと思うぞ？

「さて。そろそろ帰らせてもらうよ。暗いしな。」
「あら、そう?もっとゆっくりして行けば良いじゃない。」
「今度来た時にそうさせてもらう。ではな。」

俺はそう言いながら幽香の家を出る。さて、これからどれほど強くなってくれるかな・・。

ちなみに、由紀野には、もうあそこに近づくかせるなと言っておいた。

第６８話：お茶会？（後書き）

そんなわけで終わりました。幽香フラグはまだ立っていない。

・・・たぶん。

第６９話：満月の音色（前書き）

そんなわけで６９話です。

第６９話：満月の音色

由紀野の依頼から1日経った。俺は特に何事もなく平和に過ごしている。
ちなみに、報酬は村で取れた野菜だった。まぁ、そんなことはどうでもいい。
俺は今非常に暇だった。依頼が来ないからな。暇だからと言って輝夜の屋敷にも、
妹紅の屋敷にもあまり行きたくない。あまり二人の屋敷に世話になりすぎると迷惑だ。

「・都・・行くか。」

俺は絶に留守番を頼み、必要ないであろうナイアとゲートを自由にし、
都に向かった・・・

「団子美味し。」

都に来た俺は団子を食ってる。・・・もう１０本くらい食い終わってた。
そろそろ帰ろうかな・・・。

「あれ、壊さん？」
「ん？・・妹紅か。」

何故か知らんが妹紅がいた。妹紅は俺の所に近づいてきて、横に座った。

「どうかしたか？ホラ。」
「あ、ありがとうございます。」

そう言いながら妹紅は、俺が与えた団子を口に入れる。もぐもぐと食べる姿は、どこか小動物を思わせる。

「で、どうしてこんな所に居るんだ？」
「・・・屋敷を抜け出してきました。」
「またか。」
「はい、またです。そういう壊さんは何故ここに？」
「暇だったから都に来た。たまたま団子屋を見つけたから食っていた。」
「そうですか・・。」
「あぁ。ほら、もう一個食え。」
「あ、ありがとうございます。」

再びもぐもぐと団子を食べる妹紅。・・・和むな。

「・・・さて、もう行くかな・・。妹紅はゆっくりしていても構わ

んぞ。
金は払っておく。」
「私も行きます。どうせ暇ですから。」

そう言いながら立ち上がる妹紅。・・・余った団子は持って帰ろう。
俺は団子をタッパー（能力で創った）に入れ、金を払い妹紅と都を歩く事にした。

「・・それにしても・・・。」
「？」
「都というのは相変わらず賑やかだな。」
「そうですね。壊さんは賑やかなのは嫌いですか？」
「いや・・、そうではないのだが・「てぇい！！」ゴァ！？」

嫌いではないが苦手だ。と言おうとしたら、背中に激痛が走る。
そのまま前に倒れてしまった。

「家の妹紅に手を出すなんていい度胸じゃないか！
・・大丈夫かい、妹紅？何か変な事されてない？」
「・・父様、何をしてるんですか・・・。」
「？どうかしたのかい？」
「・・父様が蹴り飛ばしたのは壊さんですよ？」
「え゛！？」
「・・不比等ぉ・・・。いい度胸じゃないか・・。」

この野郎、人のことを蹴り飛ばしやがって・・・。

「覚悟は出来てるか？いや、出来てるよな・・。」
「いや、あの・・。落ち着こうよ壊君。僕はただ娘が襲われていると思って・・。」

「くたばれ。」

その日、都で断末魔が響いた・・・

「すいませんでした。」

土下座で俺に謝る不比等。かなりボロボロだ。まぁ、俺が殴ったからな。

もちろん、軽く殴った。

「・・まぁ、いい。次からは気をつけろ。」

「うん・・。そうするよ。また君を蹴り飛ばしたりしたら次こそは殺されかねないからね・・。」

ちなみに、俺は今、不比等の屋敷にいる。あの後、妹紅に止められ、不比等から謝罪も含めて屋敷の招待したいと言われて、仕方なく来た。

「それよりもさ、今日の夕食はどうするの？ここで食べていくかい？」

「・・そうだな。そうさせてもらう。」

「わかった。使用人にはそう言っておくよ。」
「あぁ。出来たら呼んでくれ。」

俺はそう言い、立ち上がる。今日は満月だ。よく見える所を探すとしよう・・。
そう思い、部屋を出る。そしてそのまま縁側まで行く。前に来たとき、ある程度は
屋敷の構造を覚えておいた。
縁側に着くと、俺は腰を下ろす。・・・奇麗な満月だな・・。
俺はいつものように能力で龍笛を創る。そして口元に持って行き、吹いた。

「〜〜♪」

満月の晩は音がよく響く・・。いつものように吹いていると、
いつの間にかいたのか不比等が横で聞いていた。そして俺は演奏を終える。

「いや〜、すごいね〜。」

パチパチと拍手しながら俺を見る不比等。

「・・何か用か?」
「非道いね。まぁ、別に用はないよ?ただ、ずいぶん奇麗な音色が聞こえたからさ。」
「・・・そうか。」
「もう一曲、お願いできないかな?」
「あぁ。わかった。」

俺はそう言い、再び龍笛に口をつける。

今宵の満月は美しい笛の音色が響き渡る・・・
全てに安らぎを与え、全てに夢を与える不思議な音色が・・・

第６９話：満月の音色（後書き）

今回は短いです。次はどうしようかな・・・

第７０話：自分の意思（前書き）

今回は戦闘シーンなし。

第７０話：自分の意思

「・・・そうか。わかった。その依頼、引き受けよう。」
「ありがとうございますじゃ・・・。」

俺の目の前には両手を合わせて頭を下げている翁時がいる。
言わずもがな、依頼だ。翁時は俺に依頼をしてきたのだ。それもかなりめんどうな依頼だ。

「・・・依頼内容をもう一度確認するぞ?依頼内容は次の満月にやってくる月人から
輝夜を守ることだな?」
「はい・・・。」

実に面倒な依頼だ。なんでも、輝夜のもとに一通の手紙が届き、
その内容が「我々月の使者は次の満月の晩に輝夜を迎えに行きます」みたいな内容だったらしい。もちろん、最初は誰も信じなかったが輝夜本人が自分が月の生まれだと認めたので、信じたらしい。さらに面倒なことに、
都の帝まで輝夜を守りに来るそうだ。・・・戦えないくせに何を言っているんだか・・。
とりあえず、次の満月の晩までは確かあと三日だったはずだ。

「・・とりあえず、輝夜の所に行くか。」
「はい・・。」

元気がない翁時にそう言い、俺は輝夜のもとへ向かった・・・

屋敷に来た俺はまず輝夜に会いに行く事にした。さてさて、一体どんな様子なのだろうか・・。
そう思い、輝夜の部屋の前まで来る。

「輝夜、入るぞ。」
「・・壊？いいわよ。」

俺が入っていいか聞いたところ、許可を得たので障子を開けて中に入る。

「・・久しぶりだな。1週間ぶりくらいか？」
「そうね。だいたいそれくらいかしら。」

一週間前に会ったきりまったく顔を会わせていなかったな・・。
俺は黙って輝夜の横に座る。輝夜は、名にか思い詰めた顔をしていた。

「月に帰るそうだな。」
「・・・えぇ。そうよ。」

そう言う輝夜の顔は、どこか悲しそうな顔だった。

「月に帰りたいか？」
「・・出来れば帰りたくないわね。でも、地上の人間がいくら頑張

っても無理よ。」
「ほぅ・・・。何故だ?」
「貴方には信じられないかもしれないけど、月の技術力は地上とは比べ物にならないくらいすごいの。だからいくら地上の人間が束になろうと、傷を負わせる事さえ出来ないわ。」
「・・・俺はな、翁時にお前の護衛をするように依頼をされた。」
「っ!・・無理よ・・。」
「無理でも依頼を請けたからには仕事をしなければいけない。」
「だから無理よ・・・。貴方、殺されるわよ?」

そんなにキッパリ言われると傷がつくのだが・・・。

「・・殺される、か。上等だ、殺せるなら殺してみろ。俺は足掻くぞ。
全力を出し、式を使い、月人を皆殺しにしてやる。
さて、改めて聞こう、輝夜。君は帰りたいか?」
「・・帰りたくない・・。」
「何故帰りたくないんだ?」
「・・・あそこでは、私は周りの大人の言う事聞く人形なの。
自分の意思は関係なく、周りの言う事を聞かなければいけない。
もうそんなのは嫌なの・・。」
「・・では・・・」

俺は輝夜に少し近づく。

「・・何故あきらめているんだ?」
「・・え?」
「何故月人が迎えに来るとわかっていて何もしないんだ?」
「だから、この地上の技術じゃどうにも「違う。」・・え?」

「俺が聞いてるのは、この地上の人間がどうやって月人を倒したらいいかではない。
君が何故何もせずにあきらめているか聞いているんだ。
まさか君は月に帰って再び人形に戻りたいのか？」
「・・・・・・。」
輝夜は何も言わずに俯いている。
「さて、最後だ。この質問で終わらせる。君はどうしたい？」
「・・に・・り・・い。」
「聞こえないな。もう一度言え。」
「ここに・・・残りたい・・。」
そう言いながら輝夜は顔を上げた。その目には涙がたまっていた。
「ここで・・・地上で・・ひっぐ・・・もっと・・うぅ・・・暮らしたいよぉ・・。」
その目は確かに「自分の意思」だった。この地上に残り、もっと平和に暮らしたい。
そのような目をしていた。俺は泣いてる輝夜を抱きしめた。
「なら俺を頼れ。君が俺を頼れば、俺はそれに答えよう。」
「・・いい・・の・・？」
「あぁ。それと・・・・。」
俺は輝夜を抱きしめながら頭を撫でた。そして先程よりも強く抱きしめた。
「泣きたい時は思いっきり泣け。」

俺がそう言うと、輝夜は声を出して泣いた・・・

「・・まさか泣き疲れてそのまま寝るとは思わなかった・・。」

只今、輝夜に抱きつかれている。しかも、輝夜はやたら幸せそうな顔で寝ている。
色々吹っ切れてスッキリしたんだろうな・・・。
実はあの時、輝夜が自分の意思と関係なく月に帰ると言ったら、俺はそのまま
引き下がる気だった。本人の意思は大切だと思うんだ。俺は。

「・・・本当に幸せそうに寝ているな・・。」

しかし、この体勢、結構つらい。輝夜に抱きつかれたまま胡座を掻いて座ってるんだぞ？
まぁ、今はそんなことどうでもいいな。とりあえず、輝夜を迎えに来る使者の中に俺の知り合い
が居ない事を願いたい。
まぁ、知り合いが出てこない限り問題はない。いざとなったら、クックルを発動させればいいしな。
・・・その場合は他の陰陽師たちに妖怪だと勘違いされて退治されるかもしれないな・・。
「・・・・いい加減に起きて欲しいな・・・。」

未だに俺にしがみつく輝夜。その幸せそうな顔を見ると、

起こすのも気が引ける。・・・はぁ・・・

結局、朝まであの体勢だった。腰が痛い・・・

第７０話：自分の意思（後書き）

そんなわけでやっと月の使者が出ます。
そして、あの懐かしきキャラも・・・・

第７１話：月の使者に会う前に（前書き）

今回は、月から使者はほとんど出てきません

第７１話：月の使者に会う前に

俺は輝夜の屋敷である事を考えていた。

「・・・今日だな・・。」

あれからもう三日経った。つまり、今日の夜、月人が輝夜を迎えにやってくる。

今はまだ昼なので、夜までは色々と準備が出来る。まずは輝夜を守ることを第一に考えなければいけない。

まぁ、そこは何とかなるだろう。なんせ俺だけでなく、都の兵と陰陽師が集まってるんだ。

・・・それでも合わせて１０００人くらいだけどな

正直、他の奴らは役に立たないと思う。考えてみろ、「地上の武器ｖｓ未来銃」はどちらが勝つと思う？

言わずもがな、未来銃に決まってる。陰陽師もあまり期待出来ないだろう。

「・・・結局は俺が戦うんだな・・・。」

・・まぁ、こんなことを考えても仕方ない。気分転換に妹紅の屋敷にでも行こう。

俺は輝夜の屋敷を出て、妹紅の屋敷に向かった・・・・

そんなわけで妹紅の屋敷に来た。すぐに部屋に案内され、「しばらくお待ち下さい」
と言われた。・・暇だな・・。
そう思っていると、妹紅が部屋に入ってきた。

「妹紅か・・。」
「お久しぶりですね。壊さん。」

妹紅はそう言いながら俺の前に座る。・・・元気がないな。

「・・元気がないな。何かあったか?」
「・・・実は父様が・・・。」
「不比等がどうかしたか?」
「壊さんが来る1週間くらい前に輝夜に求婚をしに行ったんです。」

はて?求婚しにいっただけなら別にどうでもいいと思うが?

「・・それで輝夜は『それなら私の望む物を持ってきてください。そうすれば、
貴方がたとお付き合いしましょう。』と求婚しに来た貴族たちに言ったんです。
それで父様は『蓬莱の玉の枝』を持ってこいと言いまして・・。」
「・・で、持って行ったのか?」
「はい。ただ、それが偽者だったらしくて・・・。父様は旅の商人から買い取ったと言っていました。」

ってか蓬莱の玉の枝って、そんなものあるのか?そもそも、旅の商

人が持ってる時点で
おかしいって気付けよ・・・。

「・・・ちなみに不比等はどうした？」
「・・・今では仕事もせずに私の事を放って置いて飲んだくれています・・。」

・・輝夜、お前もずいぶんと厄介な事をしてくれたものだな・・。

「・・・すまんな、そんな時に来てしまって。」
「いえ、いいんです。これも全部、無理難題を突きつけてきたかぐやが悪いんですから。」

妹紅、それは違う。悪いのは情けない君の父親だ。

「・・まぁ、なんだ。頑張れ。今日は帰らせてもらうよ。」
「あれ、もう帰るんですか？」
「今日は夜に仕事があるんだ。」
「そうですか。見送りますね。」
「あぁ。」

俺と妹紅は立ち上がり、部屋を出る。そして屋敷の外まで一緒に歩いた。
・・妹紅は俺と話をする時はずいぶんと嬉しそうな顔をするな・・。

「さて、ではな。また会おう。」
「はい。それでは。」

俺はそう言い、妹紅の屋敷を出る。さて、夜まで寝るか・・・

ーーーSide妹紅ーーー

「・・はぁ～・・。」

壊さんが帰って、少し・・というかかなり残念な気持ちになった。
もう少し居てくれても良かったのに・・。どうせ父様はお酒で酔って眠ってしまっている。
父様が飲んだくれになってから、屋敷は色々と不味いことになっている。
母様は私が生まれてすぐに死んでしまい、今まで父様が私を育ててくれていた。
ただ、かぐやの事を噂で聞いてから、父様は再婚しようとしていた。
私は特に何も言わずに父様が再婚しようとした事を賛成した。
たが、かぐやは父様に無理難題を吹っ掛け、恥を掻かせた。それが許せない。
かぐやが父様に恥を掻かせたせいで、父様は他の貴族におかしな目で見られるようになった。

「・・絶対に許さない・・・。」

私は誰にも聞かれないほどの声でそう呟いた・・・

ーーーSide壊ーーー

「・・・眠い・・。」

起きたら辺りは真っ暗だった。・・・もう夜中じゃないか？

「・・少し・・寝すぎたかな・・。」

そう言いながら、何とか起き上がる。さて、そろそろ月の使者が来るだろう。

その前に、輝夜の様子を見に行くとしよう。どうせ寝てないだろうしな。

俺はそのまま輝夜の部屋まで進む。そして部屋の前に着いた。

「輝夜。起きてるか？」

「あ、壊？入っていいわよ。」

「失礼するぞ。」

そう言いながら輝夜の部屋に入る。輝夜は布団の上に座っていた。

俺は輝夜の布団から離れて座る。・・・何故か輝夜が半目で俺を見ていた。

「・・なんだ、その目は？」
「・・・鈍感。」
「何を言っているんだお前は。」
「・・知らない。」

そう言いながら「プイッ」とそっぽを向く輝夜。・・本当になんなんだ・・。

「まぁ、いいさ。ところで輝夜よ、お前は覚悟は出来ているな？月の使者を追い払うという事は、月人に反逆するようなものだぞ？」
「・・えぇ、もう覚悟は出来てるわ。」
「そうか。」
「あ、それとね。たぶん今回月の使者として、私の大切な人も来ると思うの。」
「ん？婚約者か？」
「違うわよ。私の先生みたいな人。それでね、その人を何とか説得してみようと思ってるの。
そうすれば味方が増えるし。」
「・・・まぁ、月人なんだから強いだろう。わかった、何とか説得してみてくれ。」
「うん、それでね。その人の名前なんだけど「かぐや！！」お爺様？」
「ぜぇぜぇ・・・月から使者が来た！！」
「！？」
「・・来たのか。」

俺は立ち上がる。輝夜が心配そうな目で俺を見ていた。

「心配ないさ。ほら、行くぞ。」

「うん・・・。」

そう言いながら俺たちは部屋を出る。さて、月人に絶望を叩き込んでやるとしよう・・・

第７１話：月の使者に会う前に（後書き）

そんなわけで終わりました。次はあの人が・・・

第７２話：逃げろ！（前書き）

そのままです。

第７２話：逃げろ！

月の使者は宇宙船もとい、ＵＦＯのような物に乗って庭に降りてきた。
・・・でかいなぁ・・、あのＵＦＯみたいなの。１００人は乗れるんじゃないか？
ちなみに、俺は屋敷の屋根の上で見ている。そんなことを考えていると、
宇宙船から月人が出てきた。出て来たのは数人の兵士と・・・

「・・・永淋・・・。」

永淋だった。俺が月に会いに行った時とまったく変わらない姿で、
宇宙船から出てきた。

「・・輝夜様・・。」
「永淋・・・。」

永淋が輝夜に近づく。そして輝夜が永淋に何か耳打ちをしていた。・・聞こえないな。
すると永淋は何か納得したような顔をした。永淋の後ろにいる月の兵士が前に一歩出る。
すると、輝夜に話しかけた。

「さぁ、姫様。一緒に月に戻ってもらいますぞ。」
「・・・嫌よ・・。」
「・・・どうやら私の耳は悪くなってしまったようだ。もう一度、言って頂けませんかな？」
「だから、月に行くなんて嫌って言ってるのよ！」

輝夜がそう言うと、永淋が輝夜を庇うように後ろに下げる。

「・・なるほど。反逆ですか。貴方もそうですかな?永淋様。」

「・・えぇ、そうよ。私は貴方たち月人を裏切って、輝夜様に付くわ。」

永淋がそう言うと、月の兵は溜息をつく。

「・・わかりました。今から貴方がたは月の裏切り者として始末します。

まぁ、永淋様は死んでも、その脳を月に持って帰れば住む事ですし、姫様は

無理やり連れて行って実験体になってもらいましょう。」

・・・ずいぶん物騒なことを言っているな・・・。ってか都チーム助けろよ。

一歩も動いてないじゃないか。・・・ひょっとして、動けないのか?月の兵が何かやってるんだろうか?

「・・構え!」

月の兵がそう言うと、宇宙船の中から沢山の兵が出てきて、未来銃を構えた。

数は・・１００人とちょいくらいか?多いな・・・。

さて、そろそろ行くか・・・

ーーーーSide輝夜ーーーー

月人が船から降りる。そこには私の大切な人『八意永琳』がいた。

「・・輝夜様・・。」
「永淋・・・。」

永淋が私の名を呼び、そして近づいてくる。私の前までやってきた
永淋は、
なんだか悲しそうな顔をしている。私は永淋にもっと近づくように
手招きをする。
そして永淋の耳元で話した。

「永淋・・・、私、月には戻りたくないの・・。でも、ここで一人
で残るのも
不安だから、一緒に逃げてくれないかしら・・。嫌なら嫌って言っ
て。」
「・・わかりました。私は貴方に付いていきます。」
「・・ありがとう・・。」

私たちが話し合っていると、痺れを切らした月の兵士が少しだけ近
づいてきた。
・・あれはおそらく部隊長だろう。

「さぁ、姫様。一緒に月に戻ってもらいますぞ。」
「・・・嫌よ・・。」
「・・・どうやら私の耳は悪くなってしまったようだ。もう一度、
言って頂けませんかな?」
「だから、月に行くなんて嫌って言ってるのよ!」

私がそう言うと、永淋が私を庇う様に前に出た。

「・・なるほど。反逆ですか。貴方もそうですかな?永淋様。」
「・・えぇ、そうよ。私は貴方たち月人を裏切って、輝夜様に付くわ。」

永淋がそう言うと、月の兵は溜息をつく。そして呆れた目でこちらを見た。

「・・わかりました。今から貴方がたは月の裏切り者として始末します。
まぁ、永淋様は死んでも、その脳を月に持って帰れば住む事ですし、姫様は
無理やり連れて行って実験体になってもらいましょう。」

月の兵がそう言う。どうせ最初から予想していたのだろう。

「・・構え!」

月の兵がそう言うと、船の中からたくさんの他の月の兵が出てくる。
その全員が、銃を構えてこちらに向けた。私はつい目を閉じてしまう

「撃t「がぁ!!?」どうした!?」

月の兵の部隊長が命令しようとした時、突然悲鳴が聞こえた。
その声に反応して、私は目を開いて悲鳴のしたほうを見る。そこには
左胸から真っ赤な手が突き出ている月の兵がいた。

「う・・がぁ・・・」

月の兵から手が抜かれる。そして月の兵はゆっくりと前に倒れる。
その倒れた月の兵の後ろに居たのは・・・

「悪いがそこの二人には手出しさせんぞ。」
月明りに照らされる一人の男・・壊が立っていた・・・

ーーーーSide壊ーーーー

あぁ気持ち悪い。人間の心臓を貫く感触って嫌だな・・。
ん?なんでそんなことしたのかって?いや、アニメや映画だとよくそういうシーンがあるだろ?
それで、心臓を貫いたりするやつらはどんな気持ちなのかぁ、と思ってな。
ちなみに、俺は不愉快になった。あとでちゃんと手を洗っておこう・・・・

「・・ハッ!な、なんだ貴様は!!」
「ん?あぁ。俺はな、ただの一般市民だ。」
「嘘付け!一般市民がこの静止音波の中を平然と動けるわけあるか!!」

静止音波?あぁ、だから他のやつは動けなかったのか。納得。

「「・・・・」」

なんか知らんが他の奴らが唖然としていた。永淋があんな顔するなんてめずらしいな。

「よっと。」

俺はジャンプして永淋たちの前に降りた。

「久しぶりだな。永淋。」

「・・・壊なの？」

「なんだ、もう忘れたのか？非道いな。」

「あ・・・あぁ・・」

「ん？」

・・なんか知らんが永淋が抱きついてきた。輝夜がこちらを睨んでいる。

再び唖然とする他のやつら。うん、俺もよくわからない。

「・・ハッ！えぇい貴様ら、やってしまえ！！」

男がそう言うと、他の月の兵が一瞬呆けていたがすぐに銃を構えた。

・・少しくらい待てないのか。

「え・・ひゃ！？」

俺は輝夜を背中に無理やり乗せる。まぁ、おんぶだ。そして永淋の肩と脚に手を入れ、

持ち上げる。ようはお姫様抱っこだ。

「輝夜、永淋。しっかり捕まっておけ。」

そのまま森に向かって走る。

「追えー！絶対に逃がすなー！せめてあの男だけでも殺せー！！」

「「「おぉぉぉぉぉぉぉッ！！！」」」

・・・なんか月人たちが熱くなってる・・・。そもそも俺だけでも殺せって・・・

「「死ねぇー!!このリア充がぁぁぁ!!」

何故そのような単語知っているんだ!?しかもどうして意気投合しているんだ!?
とりあえず、全力疾走だ!
俺はそのまま森の奥深くまで走った・・・

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・」
「あの・・・壊、大丈夫?」
「も・・問題ない・・。」
「そう言われても説得力がないわよ?」

うるさいぞ、永淋。君たち二人を運んだんだぞ?っというかいつ泣き止んだ?

「・・ふぅ。さて、改めて。久しぶりだな、永淋。」
「・・えぇ。そうね。久しぶりね、壊。」

笑顔でそう言う永淋。・・・輝夜がもの凄い睨んでる。

「さて、と、じゃあ早く逃げ「待ぁてーーー！！！」・・もう追いついてきたのか・・」

仕方ない。少し、相手になるか。

「輝夜、永淋。行け。ここは俺が何とかしよう。」
「ッ！？何を言ってるのよ壊！貴方死ぬ気なの！？」
「そうよ、壊。さすがに無理があるわ。」
「わかった。ならこうしよう。俺が合図をしたら、俺と一緒にすぐに森の奥に走るんだ。いいな？」
「・・わかったわ・・。」
「行くぞ？３・・・２・・・１・・・０！走れ！」

二人は一気に森の奥に走る。そう、「二人」だ。あいつらには悪いが、幻術を掛けさせてもらった。
俺の幻術は簡単には見破れないからな。何とか騙せてるだろう。
さて・・・・

「時間稼ぎと行くか・・・。」

俺は向かってくる集団に向かって突っ込んだ・・・・

第７２話：逃げろ！（後書き）

はい、おわりました。まだ少し続きます。

第７３話：月人騒動、終わり。（前書き）

今回で輝夜の出番はしばらくありません

第７３話：月人騒動、終わり。

「ク・・！撃て！なんとしても倒せ！」

月の兵・・まぁ、隊長だな。月の兵の部隊長が他の兵に命令をする。
すると、月の兵は未来銃で撃ってきた。
それを軽くかわす。・・・少し掠った・・。

「何をしている！早く倒せ！」

部隊長がそんなことを叫んでいる。少しは自分も戦えばいいものを・・。
月の兵たちは俺を早く倒そうと焦っている。もちろん、先程のような状態ならともかく、
自分たちの上司に「早くしろ」なんて言われたら焦るに決まっている。焦った月の兵たちの
銃弾は俺にはまったく当らない。

「まずは一人。」
「ぐぁ！？」

近くの月の兵の頭を掴んで地面に叩き付ける。すると月の兵の頭が地面に埋まった。

「どんどん行くぞ？」

そう言いながら視界に映ったやつらを片っ端から倒して行く。別に、死んではいないから
大丈夫だろう。死んだとしても知った事か。

「それにしても多いなぁ・・。」

本当に多い。まだ５０人くらいは残ってるんじゃないか？やっぱり人の姿で、
しかも力を抑えて戦うとなると大変だな・・・。
かと言ってここで本気にで戦うというのもな・・・。他の陰陽師たちにバレルな。

「食らえ！！」
「ッ・・・！？」

考え事をしている最中に撃たれるとは・・・。まぁ、今のは俺が悪いがな。
月の兵が撃った銃は見事に俺の胸を貫通している。・・・痛いな・・。

「・・痛いじゃないか。」
「なッ！？」

俺は撃ってきた月の兵の前まで一瞬で近づく。そして、月の兵が持っていた銃を掴んでそのまま握って壊す。
驚いている月の兵の頭を掴み、少しだけ力を入れる。

「人の心臓を銃で撃ち抜くなんて、意外と非道いことをするな？」
「が・・ぁ・・！」
「クソ！その手を離せ！」

後ろに居た月の兵Ｂがそんなことを言った。・・・俺が悪役みたいだな。

俺は掴んでいた月の兵Ａを月の兵Ｂに向かって投げつけた。そして投げた瞬間、月の兵Ｂの所まで走る。

「寝ていろ。」

「な！？ガハッ！」

ぶん殴って寝かせた。さて・・・

「いい加減にお遊びも飽きた。」

俺はそう言い能力で槍、剣、弓矢、鉄球などといった凶器を月の兵たちの真上に浮かべる。少し離れておこう・・

「王手だ。」

俺がそう言った途端、凶器の雨が月の兵たちに降り注いだ・・・

ーーーーＳｉｄｅ輝夜ーーーーー

「はぁ・・はぁ・・」

もうかなり走った。永淋と、壊と、私は必死に逃げた。
「はぁ・・はぁ・・ねぇ、永淋。あとどれくらい走るの？」
「もう少しです。ねぇ、壊？」
「あぁ。」
壊が頷いた。・・・？何だか違和感を感じる・・・。
「・・やられたわ・・・。」
「・・？どうかしの、永淋。」
「・・輝夜様。見ていてください。」
永淋はそう言いながら弓を出した。・・・どこから出したの？
そして弓矢をつけ、壊に向けた。そのまま撃った。
その矢は見事に壊の心臓を貫いた。そして壊はそのままうつ伏せに倒れてしまった。
「え、永淋！？」
「大丈夫です。」
永淋はそう言いながら壊を指差した。私は壊を改めてみた。すると、壊は
白い煙を出しながら少しずつ透明になっていった。いや、「消えていた」
「え・・何？なんで・・・」
「・・これは壊の幻術です・・。」
「幻術？」
「はい。つまり、私たちは壊に騙されていたのです。」
「なんでそんな事・・。」

「・・おそらくは私たちを逃がすためでしょう。」

それじゃあ壊は初めからここにはいなかったのだろうか?私たちを逃がすために
囮になったのだろうか?

「永淋、私「いけません」・・・え?」
「戻ってはいけません。今の私たちが戻っても、壊の足手纏いになるだけです。」
「でも、壊が!」

私が叫ぼうとすると、永淋が私のことを抱きしめて来た。

「・・お願いです・・。言う事を聞いてください・・。貴方まで失いたくありません・・。」
「・・永淋・・・。ごめんね・・。」

永淋の肩は震えていた。私は永淋が離れるまで待つ。そして永淋はゆっくりと私から離れて、
再び前を向いた。

「・・行きましょう。」
「・・・うん。」

そう言い再び走った。さようなら、壊・・・
(※この二人は、壊が不老不死だという事を忘れているようです)

ーーーSide壊ーーー

「・・やり過ぎたな・・・。」

回りには、グチャグチャになった元は月人の兵だったもの。いかん、加減を間違えたか・・。
おそらくは全滅だろう。まぁ、別に構わんか。俺は懐から丸い石を出し、ゲートを召喚した。

「ゲート。これの後始末を頼む。」

俺がそう言うと、ゲートは頷き、掃除機のように倒れている月人を吸い込む。
そしてゲートが全て吸い込んだのを確認すると、俺はゲートを石に仕舞う。

「さて、とりあえず戻るか・・・。」

俺はそう呟き、屋敷まで戻った・・・

屋敷に戻った時には、もう月人はいなかった。代わりに泣き喚いている陰陽師と帝の兵がいた。
翁時は何か壺の様な物を抱えている。確か、アレは輝夜が翁時に上げた蓬莱の薬だったか？
何か、お世話になりましたとかいう理由で、あの薬を上げたらしいな。まぁ、どうでもいいがな。
さて、帰ろう。月人が帰ったかどうか確認しに来ただけだからな。
俺はそのまま自分の家に帰った。さて・・この後はどうなるのやら・・・

第７３話：月人騒動、終わり。（後書き）

そんなわけで終わりました。永淋と輝夜の出番が殆どなかった。
しかも、なんか話がグダグダしてた・・・。

第７４話：蓬莱の薬（前書き）

今回は妹紅が出てきます

第７４話：蓬莱の薬

輝夜が逃げてから、二日経った。
翁時が輝夜に貰った蓬莱の薬は明日、山の頂上で燃やされるらしい。
翁時は「かぐやがいないのにこんな薬飲んでも仕方ない」と言っていたな。
帝もそんなことを言っていた気がする。まぁ、俺には関係な・・・・・いや、関係あったな。
俺も行くんだった。付き人として。めんどくさい・・・。

「・・・少し、気分転換をしに行くか・・・。」

そう呟き、俺は家を出る。また団子でも食いに行こう・・・

うん、団子うまし。やはりここの団子は美味いな。

「隣、よろしいかしら?」
「・・・好きにしろ。」

団子を堪能していると、声を掛けられた。しかも聞き覚えのある声

だ。
そいつは俺の横に座る。・・やっぱりな。
「・・で、何か用か？紫。」
「毎回思うけど、貴方って私に対してずいぶん冷たくないかしら？」
「気のせいだろう。」
「・・まぁ、いいわ。団子、一つ貰うわよ？」
「あぁ。」

俺がそう言うと、団子の皿に手を伸ばす紫。そして団子を一つとって、口に含む。
そのままもぐもぐと租借していた。

「それで？何かあったのか？紫。」
「んぐんぐ・・・。いいえ、特にないわ。貴方の事だって、まだほとんどわかってないし。」
「・・君もしつこいな。まだ調べていたのか？」
「当然よ。」

何を偉そうに・・・・。いい加減教えてやってもいいかな？・・やっぱりやめた。
そっちの方がおもしろそうだし。

「ご馳走様。それじゃあ私はもう行くわ。」
「あぁ。まぁ、頑張れ。」

俺がそう言うと、日傘を開き、クルクル回しながら帰っていった。
団子を食いに来ただけか。
そう思っていると、目の前をおかしな団体が通り過ぎていた。・・
なんだあれは？

「・・すまない。これは何だ?」
「へい・・・。藤原不比等様がお亡くなりなりやして・・。皆で葬式を挙げるんでさぁ・・。」
・・死んだ?藤原不比等が?
「・・死因は?」
「自分で自分の喉を切っていやした・・・。」
つまりは自殺だと。・・・何となく、自殺した理由が分かった。輝夜が理由だろう。
大方、輝夜が月に帰った(俺以外の全員はそう思っている。)ので、悲しくなって死にましたとか、そんな理由だろうな。・・・くだらない。
俺は聞いた男に礼を言い、家に帰る事にした。不愉快だ。早く帰って寝よう・・・
「・・眠い・・。」

あの後、家に帰ってすぐに寝た。そんでもう朝だ。よくこんなに眠れたな・・・。

「・・・そういえば今日だったな・・。早く行くか・・。」

俺は起き上がり、すぐに顔を洗い、歯を磨き、飯を食った。さて、行こう・・・

どうも、現在ピクニック・・・ではなく蓬莱の薬を捨てに山を登っている。

ちなみに、俺は列の一番後ろだ。

「あ～・・・。めんどくさい・・。」

「そう言うな。私だってめんどくさいのだから・・。」

目の前に居る陰陽師がそう反応してくれた。名前は知らん。

「しかしなぁ・・・。俺は今日は家にのんびりとしたかったんだぞ？」

「・・・お前、本当にあの有名な紅鎖華　壊なのか？」

「有名かどうか知らんが、確かに俺は紅鎖華壊だ。」

怪訝そうな目で見てくる陰陽師。

何だその目は。陰陽師は「まぁ、いい」とか言って前を向いてしまった。

ん・・？

「・・鼠が紛れ込んでいるな・・・。」

誰にも聞こえない声で呟く。後ろから誰かが付いて来ているようだ。

「・・・まぁいいさ。俺には関係ない。」

俺は大して気にせず、歩く。何か起こったときはそれはそれでおもしろいしな・・・

そんな事を考えていると、頂上に着いた。そして一番前にいる翁時が薬を地面に置く。

「なッ！？」

翁時が薬を地面に置いた途端、誰かが近くの岩の陰から飛び出し、薬を奪った。

そしてそのまま走ってどこかに行ってしまった。

「お、追えー！」

いや遅ぇよ。翁時に付いて来た都の帝が声を上げる。他の陰陽師や

都の兵がそれを聞き、
探し出した。さて、俺も行くか。まさか後ろに付いて来ていたのが
『彼女』だったとはな・・・

俺は今、木の上で薬を奪った奴を見下ろしている。

「はぁ・・はぁ・・・。もう大丈夫かな・・？」

薬を奪ったのは妹紅だった。今は俺の上っている木の下で休んでいる。ふむ・・

「ずいぶんとふざけた悪戯だな？妹紅。」

「！？」

俺はそう言って木の上から妹紅の前に飛び降りる。

「か・・壊さん・・？」

「あぁ、壊だ。さて、いきなりだが妹紅。なぜ薬を盗んだ？」

俺がそう聞くと、妹紅は下を向いて俯く。そして再び俺の事を見た。

「・・父様は輝夜がいなくなったのを知った時、絶望していました。

そして父様は自害してしまいました。父様が死んでしまったのは、
輝夜が求婚を断り、
月に帰ってしまったからです。私は復讐しようとしていました。でも、輝夜は月に帰ったので
もういません。それで思いついたのが輝夜の贈った「蓬莱の薬」というのを盗むこととでした。
それを盗めば輝夜が悔しがると思いました・・。」

・・・なるほど。まぁ、別に妹紅が復讐しようがどうでもいいな。

「・・復讐なんぞしても不比等は帰ってこないぞ?」
「・・わかってます・・。」
「・・まぁいい。俺はもう何も言わない。だからその薬を飲もうが捨てようが君の勝手だ。
その薬を飲めば君は不老不死だ。死ぬ事もなく、老いる事もない。
君の憎き輝夜と同じになる。」
「・・私は・・・」

「どうする?なんなら俺がこの場でその薬を消してやろうか?」
「・・いいえ・・、飲みます、飲んで輝夜に復讐する手段を見つけます。」
「・・そうか。」

妹紅は壺の蓋を開け、中に手を入れる。
そして出てきたのは、小さな薬包紙に包まれた蓬莱の薬。
それを丁寧に開いた。薬包紙に包まれていたのは白い粉の薬だった。
・・危ない薬じゃないよな?
妹紅は薬を見て、決心したようにサラサラと口に流し込む。そして
全て飲み終わった。

「・・ッ！？」

すると、妹紅が突然喉を押さえて苦しみ出す。まぁ、月人が作った薬がこちら側の人間に合うはずもないだろう。
そんな事を考えていたら、妹紅の身体に変化が訪れる。

「・・あ・・・が・・・ぁ」

妹紅の長い髪が白くなっていく。黒い瞳は俺より少し深みのある紅へと変わる。
・・・おもしろいな・・。蓬莱の薬を地上の人間が飲むとこうなるのか・・・。

「・・あ・・・ぅ・・・」
「ん？終わったのか・・。」

妹紅の目の焦点は合っていなく、虚ろになっていた。・・退屈しのぎになりそうだな。
家に連れて行くか。
俺は妹紅を横抱きし、目を閉じている妹紅を家まで運んだ・・・

第７４話：蓬莱の薬（後書き）

そんなわけで終わりました。次回はどうすればいいか悩んでいます。

第７５話：妹紅と一緒（前書き）

前書きなし。本文読んだほうが早いです

第７５話：妹紅と一緒

俺は連れて来た妹紅を家の布団で寝かせている。
とりあえず、妹紅が起きたらこれからどうするか聞こうと思っている。
今の妹紅は不老不死だ。だから、都に行っても受け入れてもらえないだろう。
あらゆる生物は集団の中で「自分たちと違う」もの受け入れずに否定する。
時にはそれを気にしないやつもいるだろう。
しかし、それは極稀の事である。さらに言うと、人間と言うのはどの生物よりもそういうのが強い。

「・・う・・ん・・。」

妹紅のこれからを考えていると、妹紅本人が起きた。

「あ・・れ・・？ここは・・？」
「起きたか。」
「・・壊さん？」
「あぁ。」
「あのここは・・・・。」
「俺の家だ。あの後倒れたからな。俺が運んだ。」
「そういえばそうでした・・。」

妹紅はそう言いながら俯いてしまった。

「さて、妹紅。大切な話がある。」
「なんですか？」

「あぁ。お前のこれからについてだ。」
「私の・・・？」
「あぁ。まず、お前は不老不死になった。おめでとう。」
「あの、そう言われてもいきなりでよくわからないんですけど・・。」
「仕方ないな。なら試してみるか。」

俺はそう言いながら能力でナイフを創る。
そして驚いている妹紅の右手を取り、手のひらに少し傷をつけた。

「痛っ・・！・・あれ？」

妹紅の手のひらの傷が元に戻るように塞がった。・・俺よりも回復するの早いんじゃないか？

「さて、これで不老不死になった事は証明されたな。次に君は容姿が変わった。」
「・・・は？」

理解できていない妹紅。まぁ、そりゃそうだろうな。
俺は再び能力を使い、今度は小さな鏡を創った。それを妹紅の方に向ける。
妹紅は鏡に映った自分の姿を見てポカーンとした後「え？」とか「これ・・」とか言い始めた。

「まぁ、蓬莱の薬の副作用だろうな。君の瞳の色も、髪の色も変わってしまったよ。」
「・・そうみたいですね・・。」
「さて、これからが本題だ。君はこれからどうする？」
「・・・？」

「・・・言っちゃ悪いが、今の君を受け入れる者はまずいないだろう。
俺も都のやつらにはそこまで受け入れて貰っている訳じゃないから何となく分かる。
もしも君が屋敷に帰ると言うなら、俺は君を送っていこう。ただ、もし帰りたくないと言うなら・・。」
「帰りたくないと言うなら・・？」
「・・ここで俺と暮らせ。」

俺がそう言うと、何故か唖然としている妹紅。・・どうした？
ずっと止まったままなので、妹紅の前で手を振ったりしたが、それでも止まっていた。
仕方ないので頭を軽く叩いてみた。

「痛！……何するんですか……。」
「やっと元に戻ったか。」

頭をさすりながら、こちらを涙目で見てくる妹紅。

「さて、もう一度聞くぞ？ここに住むか、戻るか。どうする？
君がここで住むならちゃんと面倒は見よう。都に戻ってもいいが、たぶん追い出されるだろうな。」
「……。」

妹紅は布団を握り締めながら俯いている。そして俺の顔をまっすぐ見て、頭を下げた。

「ここに住ませて下さい。」
「……わかった。今日から一緒に俺と暮らして貰う。
俺が家にいない時は絶たちと家事全般をやってもらう。いいな？」

「はい、わかりました。」
「まぁ、今日は俺が飯を作ろう。」
俺はそう言い、立ち上がる。さて、何を作ろうかな・・・

ーーーーSide妹紅ーーーー

なんだかんだあって壊さんと一緒に住む事になってしまった。
でも、仕方ないと思う。壊さんも言った通り、今の私を屋敷の者は受け入れないだろう。
壊さんは陰陽師の仕事をしているので、そこまで評判は悪くなかったが、今の私は堕落した元貴族の娘だ。
でも、そんな私を壊さんは一緒に住まないかと聞いてくれた。それが嬉しかった。

「壊さん、私は貴方のことが「おーい。妹紅、準備が出来たぞー。」今行きまーす!」

壊の声が聞こえたので、急いで起き上がる妹紅。その表情はとても嬉しそうだった・・・

ーーーーSide壊ーーーー

目の前には、目をキラキラと輝かせながら俺の作った夕飯を美味しそうに食べる妹紅。

何か食べる度に「あぁ……」とか言っている。

「……そんなに美味いのか？」

「はい！とっても美味しいです！」

「そ、そうか。それはよかった。」

ここまではっきりと言われると嬉しいな。この後、妹紅が俺の作った物を、

おかわりしながらも全て平らげた時は驚いた。

「さて、妹紅。この家に住むからには少しばかり知ってもらうことがある。」

「なんでしょうか？」

「まず、俺の式についてだ。」

「壊さんの式・・？」

「あぁ。前にも見せたと思うが、俺は絶と言う式、それと他に2体の式を扱っている。

俺は自分の式を定期的に外に出して体調を整えている。」

「・・・変わってますね。」

「まぁ、俺の式だからな。それでだ、君が妖怪と間違えて退治しないように

式を見せておこうと思う。いいな？」

「はい。」

俺は懐からナイアとゲートを仕舞った丸い石を取り出す。そして2体を召喚した。

「この2体が壊さんの式ですか？」

「あぁ。ナイアとゲートと言う。」

俺が紹介すると、ナイアは自分の腕を伸ばし、妹紅に握手を求めた。
妹紅はそれを理解したようにナイアの手を握る。ナイアの身体はスライムみたいな感じだ。ただ、硬さを自分の意思で調整できるらしい。
やがてナイアは握手をやめ、自分の腕を元に戻す。
次にゲートが妹紅の方に向かった。何故か口の中にある「目玉」だけが移動した。・・いや、怖ぇよ。
目玉がふよふよと浮きながら妹紅に近づいた。そして妹紅の前で上下に動いた。・・・よろしくって意味だな。

「・・えっと・・。壊さん・・。これはどういう意味でしょうか？」
「たぶん『よろしく』とでも言いたいんだろう。」

俺がそう言うと、再び頷く目玉、もといゲート。妹紅も頭を下げて
「よろしくお願いします」
と言う。律儀だな。ゲートはそれに満足すると、自分の口・・まぁ、身体だな。底に戻った。

「最後に・・・、絶。」

俺がそう言うと、皿を運び終わった絶がふよふよと近づいてきた。
そして妹紅の食卓・・卓袱台の上に降りる。

「前にも見せたが絶だ。この中で一番付き合いが長い。」

絶は妹紅に機械のような手を出す、それを妹紅が握り、握手をする。

「・・さて、こんなものだな。今日はもう遅いから寝ろ。詳しい事は明日になったら話そう。」
「はい。あの・・・」

「ん、何だ？」
「・・お、おやすみなさい。」
「・・・あぁ。おやすみ。」

俺が言い返すと、妹紅は顔を紅くしながら部屋に戻った。しばらく自分で淹れていた茶を飲んでいた。
ちなみに、ナイアとゲートはもう戻した。絶は早めに休ませている。

「・・・それにしても・・。」

明日からは退屈はしなさそうだ・・・。
そう呟き、俺は自分の部屋に戻って寝た・・・・・

第７５話：妹紅と一緒（後書き）

と、いうわけで次回からは妹紅と壊が一緒に暮らします。

第７６話：妹紅の修行と涙（前書き）

今回は、妹紅の修行です。

第７６話：妹紅の修行と涙

昨日、妹紅を家に泊め・・正確には一緒に住み始めた。
今さっき俺が作った朝飯を食べ終えたので、暇つぶしに何かしようと思ったので妹紅の修行をすることにした。

「そんな訳で修行だ。」
「いえ、あのどういう訳ですか？」

家の前で妹紅と一緒に向かい合うように立っている。

「いいか、妹紅。君は不老不死になったんだからいつかは妖怪や盗賊に目を付けられる。
その時のために強くならなければいけない。」
「・・わかりました。」

・・ずいぶんと納得するのが早いな。もっと嫌がると思っていたぞ。

「まぁ、こちらとしてはそっちの方がやりやすいんだがな。」
「？」
「気にするな。さて、まずは何か力がないか確認してみよう。」
「力・・ですか？」
「あぁ。自分の身体の奥深くに何かの流れがないか感じ取ってみろ。」
「やってみます。」

そう言い、妹紅は目を閉じる。まぁ、普通は目を閉じるよな。

「・・・あの・・・。」

「ん？」
「何だかモヤモヤしたものが見えます・・・。」
「・・たぶんそれだな。色は分かるか？」
「えっと・・・・青・・ですかね。」

青・・・妖力だな。（※他の力の色が知りたい人は『第１１話：洩矢神に起こされた凶鳥』を見てください）

「それは妖力だな。」
「妖力・・・。それって、妖怪が持ってやつですか？」
「まぁ、そうだな。妖怪が持ってるやつだ。たぶん、これも薬の副作用か何かだろう。」

俺がそう言うと、「そうですか・・・。」と言いながらどこか悲しそうな顔をする妹紅。

「・・とりあえず、修行だ。そうだな・・・まずは・・・。」

「妹紅・・。君には才能がないのかもしれないな・・。」
「うぅ・・・。すいません・・。」

あの後、水を出させてみたり電撃を出させてみたりと色々やったが、そのどれもが失敗に終わった。
水を出させれば出ず、電撃を出させれば自分の腕を吹き飛ばしていた。
結果、妹紅には才能がないことが分かった。・・・はぁ・・。

「・・仕方ない。最後は『火』だ。」
「はい・・。」

元気がない声で返事をする妹紅。・・・元気出せよ。いつかいい事あるさ。
妹紅は目をつぶり、手のひらを上にして自分の顔の前まで持ってくる。
そして「むむむ・・・」みたいな感じで念じ始めた。すると・・・

「・・あ・・え?」

妹紅の手のひらに、握り拳ほどの火の玉が出来たのだ。・・・これは・・

「・・すごいな。それなりの火だ。」
「そ、そうなんですか?」
「あぁ。力で言えば中級妖怪の下くらいだな。鍛えれば上級妖怪の上にも勝てるぞ?」

俺がそう言うと、目を輝かせながら「やったー!」と嬉しそうにする妹紅。
とりあえず、火を消してやろ。俺ははしゃいでいる妹紅の手のひらを掴み、火を消す。

すると「ジュッ」という音が出た。・・・熱いな。

「か、壊さん！大丈夫ですか！？」
「問題ない。だから慌てるな。」
「そうですか・・・。よかった・・。」

そう言いながら安心する妹紅。・・・どうしたのだろうか？

「・・・ん？」
「どうかしたんですか？」
「・・・おい、そこの妖怪。出て来い。」

俺がそう言うと、茂みがガサガサと揺れ、中から妖怪が出てきた。・・雑魚だな。

「ぐへへへ・・。よくわかったじゃねぇか。」
「ヒッ！」

・・・コイツは今まで見たことない奴だな。たぶん、最近住み始めたんだろう。
丁度いい・・

「妹紅。」
「な・・なんですか・・？」
「アレを倒せ。」
「え！？無理に決まってるじゃないですか！」

回答無用。俺は騒いでる妹紅の背中を押した。

「ひゃわわわっ！？」

「ぐへへへへ・・・。お前、俺と戦おうってのかぁ？」

妖怪が気色の悪く笑いながら口から涎を垂らしている。
妹紅は「ヒッ！」と短い悲鳴を上げながら後ずさりする。

「か、壊さん！」

妹紅がそう言い、俺のいた所を振り向くが残念。
俺は木の上で座って見ているので、もうそこには居ない。

「ぐへへへへ・・・。見捨てられたなぁ・・。」

妖怪にそう言われた妹紅は俯いている。・・何か妹紅から変な空気が漂ってる・・・。
そんな妹紅の空気に気付かないのか、妖怪は一歩一歩妹紅に近づく。
そして妹紅の目の前までやって来ると、その鋭い爪を上に振り上げる。

「ぐへへへへ・・・。じゃあなぁ！」

そう言い、腕を振り下ろす。その腕は見事に妹紅に・・・当らなかった。
代わりに妖怪が全身を火だるまにして燃えていた。・・・上出来だな。

「ガァァァッ！！」
「・・うるさい。」

妹紅は叫びを上げている妖怪に火の玉をぶつける。
妖怪はそのまま声を上げる事もせずに黒コゲになった。・・そろそ

ろいいな。

「上出来だ。」

「ッ！？・・・壊さん・・？」

俺が話し掛けると妹紅はこちらを振り向いた。そして俺に抱きついてきた。・・なぜ？

「・・おい、妹紅。離してくれ。」

「・・いや・・です・・。」

「何をそんなに震えているんだ？寒いのか？」

「・・違います。馬鹿。」

・・・妹紅が俺に抱き付いたまま罵声を飛ばしてくる。少し傷つくぞ？

「何で・・何で置いて行ったんですか・・・。」

「俺が居たらお前は俺を頼って妖怪と戦わないと思ったからな。」

「怖かったんですよ・・？捨てられたんじゃない・・かと思って・・。」

・・・何か知らんが妹紅が泣き出した。これって俺が悪いのか？そうなのか？

こういう時は慰めなければいけないんだろうか・・・

「・・すまないな。」

「うぅ・・・」

俺が妹紅の頭に手を乗せると、妹紅は声を出して泣いた・・・

この後、妹紅は顔を真っ赤にして落ち着かない様子だった。どうかしたんだろうか？

ーーーSide妹紅ーーー

「ぐへへへへ・・・。見捨てられたなぁ・・。」

妖怪にそう言われた時、目の前が暗くなった。見捨てられた？壊さんに？どうして？

妖怪がどんどん近づいてくる。そして妖怪は私の前まで来るとその鋭い爪を振り上げた。

「ぐへへへへ・・・。じゃあなぁ！」

そう言い、その爪を振り下ろす。・・・鬱陶しい・・。

「ガァァァッ！！」

気が付いたら妖怪は燃えていた。でも、今の私にはどうでもいい。

「・・うるさい。」

そう言い、私は妖怪に向かって火の玉を投げつける。すると妖怪は身体全体が黒コゲになり、
あっと言う間に死んでしまった。・・そうか。
妖怪をこんなに簡単に倒せる化け物と一緒に暮らしたいわけないんだ。
きっと先程妖怪が言ったように、私は捨てられたんだ・・・

「上出来だ。」
「ッ!?・・・壊さん・・?」

そう思っていたら、後ろから声が聞こえた。私は振り向いて誰かを確認した途端、
抱き付いた。

「・・おい、妹紅。離してくれ。」
「・・いや・・です・・。」
「何をそんなに震えているんだ?寒いのか?」
「・・違います。馬鹿。」

自分でも驚くほど身体と声が震えていた。

「何で・・何で置いて行ったんですか・・・。」
「俺が居たらお前は俺を頼って妖怪と戦わないと思ったからな。」
「怖かったんですよ・・?捨てられたんじゃない・・かと思って・・

。」

目から熱い何かがこみ上げてくる。
本当に怖かった。一人になるんじゃないかと思った。
そう思っていると、頭に何かが乗せられた。それは壊さんの手だった。

「・・すまないな。」
「うぅ・・・」

私は泣いた。捨てられてなかった事が嬉しくて、壊さんの優しさが嬉しくて、
声を出して泣いた・・・・

この後、泣いた事が恥ずかしくてずっと顔が熱くなっていた。

第７６話：妹紅の修行と涙（後書き）

終わり。意外にも妹紅フラグが立つかもしれない。ってかもう立ってるんじゃね？

第７７話：山羊の死神（前書き）

今回は少し短いです。あと山羊って何か格好いいですよね？

第７７話：山羊の死神

妹紅と暮らしてから１ヶ月経った。俺はこの一ヶ月、妹紅の修行にずっと付き合った。
俺が付きっ切りで鍛えてやった事で、妹紅はそれはもう、かなり強くなった。今では
中級妖怪の上でも勝てるくらいだ。本当に強くなったなぁ・・・。

「どうかしましたか？」
「いや・・、何でもない。さて、始めようか。」
「はい。」

そう言い、妹紅は背中から炎で作った翼を出した。本気で戦う妹紅は背中からアレ出すのだ。
空を飛べたり、羽を飛ばして攻撃したりと結構便利らしい。
対する俺はいつも通り自然体。毎度の事だが、いまさら自分の戦い方を変える気はない。
ついでに能力でナイフを創っておこう。ちなみに、ナイフで戦う理由は、一番手加減できるからだ。

「行きます！」

そう言い、こちらに向かって真っ直ぐ飛んで来る妹紅。そして体に炎を纏った。
突っ込んできた妹紅の攻撃を横に飛んでわす。ちなみに、どこで戦っているかと言うと
家より少し離れた滝の近くで戦っている。ここなら山火事も起きないだろう。・・たぶん。

「油断大敵です！」

そう言いながら妹紅が炎の羽を飛ばして来た。ナイフに霊力を込め、腕の関節を外して振り回す。すると炎の羽は全て消えた。
そして間接を元に戻して能力で浮き、自分の下にだけ足場を作り、妹紅に向かって走る。
妹紅は俺の行動に驚いて隙を見せた。・・・はぁ。

「隙を見せるな。」
「なッ！？」

俺は妹紅の前まで先程よりも速く走って近づいた。そのまま背中に肘打ちを入れる。
すると妹紅は地面に真っ直ぐに落ちた。・・・少しやりすぎたか？
地面に降りて妹紅の所まで歩く。妹紅はうつ伏せになって倒れていた。

「大丈夫か？」
「大丈夫じゃないですよ！」

いきなり「ガバッ！」といった感じに起き上がる妹紅。そして鼻を押さえながら
俺を涙目に睨んできた。

「非道いですよ！いきなり落とすなんて！」
「隙を見せた君が悪い。大体、お前だって「油断大敵！」みたいなことを言って
俺に羽を飛ばしてきただろう？」
「それを言われたら言い返せないです・・。」

「ズーン・・」みたいな効果音が似合いそうな空気を出す妹紅。
・・そこまで負けた事が悔しいか？

「まぁ、なんだ。前よりも強くなったんだ。それでいいだろう？」
「・・そうですね。」

少し、元気が出た妹紅。そもそも、５０も生きていない小娘には負ける気はせんよ。
・・・やっぱり俺は爺だな・・。

「今日はここまでだ。帰るぞ。」
「はい。」

妹紅は俺と並ぶように歩き、家に戻った・・・

家に戻って昼食を取った後、どうするか考える。どうせ今日は依頼は来ない。
つまり、俺はこの後は暇になるわけだ。・・・じゃあ何で妹紅の修行を途中でやめたんだ。俺。

「・・新しい式でも創るか。」

俺はそう呟き、式を創る事にした。どんな感じにするかな・・・

あれから数時間、最終的に「めんどくさいからランダムで」という事になり、
何とか創ることが出来た。
俺がランダムで創って出来たのは骨だった。細かく説明すると、身体にマントのような、肩の部分は銀の肩当て付いた黒い外套を羽織っており、
頭は山羊の頭蓋骨で、外套から出てきてる手は骨だった。・・死神？

「あ～・・・。喋れるか？」

俺がそう聞くと、死神っぽいのは山羊の頭蓋骨の頭を左右に振る。・・・喋れないと。

「まぁ、なんだ。とりあえず、よろしく頼む。」

俺はそう言いながら自分の右手を出す。死神っぽいのは骨の右手で俺と握手する。
・・温度が感じられないな。まぁ、それはそうか。

「さて、俺は君をどこに仕舞えばいい？」

俺がそう聞くと、案の定、死神っぽいのは丸い石を持っていた。今回は白色だ。
俺はそれを受け取り、死神っぽいのに向ける。そして死神っぽいのは中に吸い込まれるように入っていった。

「・・・名前はそのうち決めよう。」

俺はそのまま家に帰った。コイツの実力もまだ見なくてもいいな・・

・

第７７話：山羊の死神（後書き）

そんなわけで新しい式？が出来ました。ちなみに、あるアニメを参考にしました。

第７８話：妹紅と幽香（前書き）

今回は、短いです。・・・いつもあんまり長くないですけど。

第７８話：妹紅と幽香

俺は今、非常に困っている。何故かって?それはな・・・

「壊さんを離してください。」
「あら、貴方が離せばいいでしょう?。」

妹紅と幽香が俺を間に挟んで火花が散りそうな勢いで睨み合っているからだ。何故こうなった・・・
俺はそう思い、妹紅と幽香がこうなる原因を思い出す事にした・・・
・

ーーーーここからは回想ですーーーー
俺はその日妹紅とまったりと茶を啜っていた。どうせ今日は仕事は来ないだろうしな。
そう思い、絶が用意してくれた煎餅を一枚取って齧る。ちなみに醤油だ。

「平和ですね・・・。」
「平和だな・・・・。」

そう言いながら茶を啜る。茶を啜った後、なんとなく妹紅を見る。
・・今更だけど、妹紅の目の色と髪の色って、少し俺に似てるんだよな・・。

「どうかしましたか?」

「いや・・・。なんでもない。」

そう言い、誤魔化すように煎餅を齧る。妹紅も齧ってた。

「貴方たちって、何だか親子みたいね・・。」

「そうか?」

「えぇ。そう見えるわよ?」

「ふ~ん・・。」

俺は再び茶を・・・・いやちょっと待て。

当然のように話しかけてくるので気付かなかった。

「・・・なぜ君がいるのかな?幽香。」

「貴方がいつまで経っても会いに来ないから、私が来たのよ。」

「よく俺の家が分かったな。」

「都にいる人間たちに聞いたのよ。」

都にいる一般市民が何もされてない事を祈ろう・・。

そう願っていると、服が妹紅に引っ張られたのでそちらを見る。

「あの・・。その人、誰ですか?」

「あぁ。彼女は俺の知り合いの『風見幽香』だ。ちなみに、人じゃなくて妖怪だ。」

「えっ!妖怪!?」

何か妹紅が焦り出した。それを見ている幽香が面白そうな顔で見ている。

・・関係ないが、ここで日傘を差す必要はないんじゃないか?

そう思っていると、幽香が俺の横に座ったので、絶に頼んで幽香の分の茶を用意してもらった。

ちなみに、縁側で飲んでいる。ここは森の中だから涼しいんだ。
それと妹紅。いい加減に元に戻れ。そういう意味も込めて頭を軽く叩く。

「あたっ！・・・何をするんですか。」
「いい加減に元に戻って欲しかったから軽く叩いた。それと、幽香はこちらから手を出さないかぎりは何もしないから安心しろ。・・・たぶん。」
「失礼ね。たぶんじゃなくて、手を出されなければ何もしないわよ。」

そう言いながら半目で見てくる幽香。すまない幽香。君の言葉が信用できないんだ・・・。

「それにしても・・・。」

と幽香が俺の肩に頭を乗せる。・・どうかしたのか？何か妹紅が顔を真っ赤にしながら物凄い睨んでいるのだが・・・。
そして妹紅は俺の空いている方の腕を自分の方に引っ張る。
俺の肩に頭を乗せていた幽香がそれを見ると、今度は幽香が俺の腕を引っ張る。

ーーーー回想終了ーーーー

「そして今に至る。」
「誰に言っているんですか？」

妹紅が笑顔でそう言う。しかし、目が笑ってない。

反対側を見ると、幽香もそんな顔をしていた。・・・何がどうなっているやら・・・

「なぁ、離してくれないか？」
「だ、そうですよ。幽香さん。離したらどうですか？」
「あら、貴方の事じゃないのかしら？」

絶、ヘルプミー。そう思い、絶の方を見た。すると絶はどこから取り出したのか
白いハンカチをヒラヒラとさせている。ん？そうだ。

「幽香。少し頼みがあるんだがいいか？」
「何かしら。」

俺が幽香に話しかけると、何故か妹紅が俺の腕を「ギリギリッ・・」と抱きしめる。
いや、本当に音が鳴ってるぞ？

「俺が新しく創った式と戦って欲しい。」
「式・・？」
「あぁ。前に創ってな。まだ力を見てない。」
「・・まぁ、それくらいならいいわよ。」
「私、壊さんが新しい式を創ったなんて聞いてません。」

言ってないからな。俺はとりあえず、くっ付いている二人を無理やり引き離す。

「そうだな・・。どこか広い所でやってもらいたい。」
「それなら、私の家の近くにそういう場所があるわよ？」
「そうか。案内を頼む。」

俺がそう言うと、幽香は頷き、立ち上がる。そして歩き出した。
俺と妹紅もそれに続いた。さて、新しい式はどれくらいの強さか・・
・

第７８話：妹紅と幽香（後書き）

はい、終わりました。次回は新しい式？の戦闘です。

第７９話：フラワーマスターｖｓ山羊の死神（前書き）

今回は、新しい式と幽香が戦います。

第７９話：フラワーマスターｖｓ山羊の死神

まぁ、色々あって幽香の言っていた広い場所に着いた。
そこは幽香の花畑から少し離れた場所だった。・・確かここは・・・。

「俺と幽香が戦った場所だな・・。」
「そうよ。」

まぁ、確かにここも広い。回りには別にこれと言ったものもなく、精々木と草が生えてるくらいだ。
しかしなぁ・・。幽香があの馬鹿みたいにデカイ光線を撃ったら、花畑に直撃しそうだ・・。
そしたら八つ当たりして来そうだ。まぁ、その時は不死身の妹紅を生贄にして逃げよう。

「・・今何か変な事考えませんでした？」
「気のせいだろう。」

意外と勘がいいな。

「ねぇ、いい加減に始めたいのだけれど？」

幽香が若干イラついた声でそう言う。そうだな。いつまでも待たせるわけにはいかんよな。
そう思い、俺は懐から丸い白い石を取り出す。さて・・・

「来い。」

俺はそう言いながら、石に力を込める。すると中から・・名前はまだ決めてないから骨でいいや。
骨が出てくる。妹紅がかなりビビッテいる。そんなに怖いか？

「・・ずいぶんと趣味が悪いわね。」
「やかましい。」

『たまたま』こうなったんだ。幽香は骨をジロジロと見ると、満足そうに頷いた。
・・なんだ？まぁ、いいか。

「さて、幽香。始めてもいいか？」
「えぇ。いいわよ。」

そう言いながら幽香は傘を構える。構えるといっても、普通に持ってるだけだ。
対する骨は、外見通りに死神っぽく、どこからともなく取り出した大鎌を構える。
骨はそれを片手に持って構える。・・本当に死神なんじゃないか？

「行くわよ？」

幽香がそう言いながら少しだけ妖力と殺気を出す。骨は自分の顎を・・まぁ、口だな。
それをカタカタと上下に動かしている。そして幽香よりも少しだけ強めに殺気を放った。
骨の殺気を感じた幽香は嬉しそうに笑みをこぼす。ちなみに、妹紅はたった今気絶した。
さぁ・・・

始めて貰おうか・・・

ーーーSide幽香ーーー

パッと見はあまり強そうじゃなかった。角が生えている動物の頭蓋骨で、
外套から見えた手は人の骨。正直、気味が悪い。

「・・ずいぶんと趣味が悪いわね。」
「やかましい。」

そう言いながらも、壊は表情を変えなかった。相変わらず無表情だ。

「さて、幽香。始めてもいいか？」
「えぇ。いいわよ。」

私は傘を自然体で構える。構えると言っても、いつものように持つだけだ。
壊が出した式は、どこから出したのか、身の丈ほどもある大鎌を片手で構えていた。

「行くわよ？」

私はそう言い、少しばかりの妖力と殺気を放つ。すると、式は顎の骨をカタカタと鳴らし、
私よりも少し上の殺気を放った。おそらく、全力ではないだろう。・

・おもしろい。
都最強の陰陽師の式がどれほどのものか、見せてもらいたい。

「ッ！？」

そう思っていると、式が私の前まで凄い速さで飛んできた。そして手に持った鎌を横に振るう。
それを後ろに下がってかわし、すぐに殴りかかる。式はそれを読んでいたらしく、上に飛んでかわした。
私は地面に着地した式に、傘で殴りかかる。式はそれを大鎌で防いだ。

「やるわね！」

私がそう言うと、カタカタと骨を鳴らす式。そして大鎌を持ったまま、回転した。
しかも奇妙な事に腰から上の・・つまり上半身の骨だけをグルグルと回しているのだ。
それを後ろに跳んでかわすと、式は回転するのをやめた。そして式は再びカタカタと骨を鳴らした。

そして大鎌を持っていないもう片方の手を出した。すると骨の指に赤黒いモヤのような物が集まっていく。
やがて赤黒いモヤで出来た、鋭い爪のような形になった。それが全ての指に付いていた。
私がそれを見ていると、式が爪の手を自分の顔の前に持っていき、次にこちらに向かって飛んで来た。
そしてその手を振り下ろす。

「くっ・・！」

それを傘で防御する。しかし、式は私の傘を何度も爪で攻撃してきた。
私は蹴りを放って式を吹き飛ばす。そして傘の先端を式に向けた。
傘の先端に妖力を込めた。それを見た式は、大鎌を上に構え、大鎌の刃に魔力を込める。

「食らいなさい。」

私はそう言い、光の光線を放つ。それは威力を抑えてはいるが、上級妖怪なら倒せる威力。
式はそれを見ても慌てず、カタカタと骨を鳴らしながら大鎌を振り下ろした。
すると、振り下ろした大鎌の刃から赤黒いモヤの斬撃が放たれた。
それは大鎌の刃の形をしている。
その斬撃が私の光線とぶつかる。少しずつだが私の光線が赤黒いモヤの斬撃を押し始めた。
勝った!そうお思ったが・・・

「なッ!?」

式はさらに斬撃を飛ばしてきたのだ。最初の一撃は縦になって飛んで来ていた。
しかし、二回目の今は横向きになって飛んで来ている。それが重なり、十のような形になった。
そして私の光線が少しずつ押されていく。(※幽香は本気じゃありません)
やがて私の光線は完全に押し負け、斬撃は私を容赦なく切り裂いた。
そこで私の意識は途絶えた・・・

ーーーSide壊ーーー

「終わったか・・。」

幽香め・・・。手加減をしていたな?だから負けるのだ。
俺は倒れた幽香に近づき、横抱きする。あ、妹紅を起こさないとな。

「おい、妹紅。起きろ。」
「う~ん・・・・。あれ、壊さん・・?」
「あぁ、俺だ。帰るぞ。」
「はぁ・・・。」

何故か横抱きしている幽香を見ている妹紅。俺はそれを大して気に留めず、
骨を仕舞って家に戻った・・・・

第７９話：フラワーマスターｖｓ山羊の死神（後書き）

そんなわけで終わりました。今回も短かった・・・。
それと、山羊の名前を募集します。感想か、メールで教えてください。

第８０話：焼き鳥

なんやかんやあってもう１００年経った。俺は未だに陰陽師の仕事を続けている。
何故怪しまれないかって?引越ししたからだ。
どうやら俺の名前は他の都ではあまり有名ではなく、精々「そんな奴いたか?」くらいにしか思われていなかったらしい。・・・何か悲しいな・・。
ちなみに、都は全部で三つあるらしい。

「壊、どうかした?」
「いや、何でもない。」

今話しかけてきたのは妹紅だ。
昔に妖怪退治をしている時に、妹紅が手伝ってくれたのだが、前の話しかただと妖怪が調子に乗って妹紅を馬鹿にするのから話し方を変えたらしい。
それと、格好もずいぶん変わった。
前に着ていた服は妖怪にズタズタにされてしまったので俺が新しい服を能力で創って用意した。
白のカッターシャツに、護符みたいなのが貼られた紅いもんぺみたいなズボンを穿いており、それをサスペンダーみたいなので吊っている。
そして、髪には大きいリボン一つと、小さいリボンを複数つけている。
最初は面白半分で創ったのに、どうしてそんな奇妙な格好を気に入ってしまったのだ?妹紅よ。

「それにしても、ここの団子は美味いな。」

「そうだね。」

前の都の団子よりもこっちのほうが美味いな。そう思いつつも団子を口に含む。

それにしても紫とかは元気だろうか？最近まったく会っていないな・・・。

永淋とかは何処に居るかさえも分からないからな。依姫たちはその内会いに行こう。

「・・そろそろ帰るか。」

「うん。」

俺は立ち上がり、団子屋の主人に金を払う。そしてそのまま団子屋を出る。

妹紅が俺の後を付いて来る。俺はこの都でも変わり者扱いをされている。理由は簡単。

俺の服装だ。この時代にはコートなんて物はない。それと、目の色と髪の色も原因だ。

まぁ、別に嫌われてる訳じゃないからどうでもいいんだけどな。

「あのさ、壊。」

「どうした？」

「・・ううん。やっぱり何でもないよ。」

「？そうか。」

途中、妹紅に対して疑問を感じたが、すぐに気にせずに家に帰った・・・

家に帰った後、夕飯の食材を探していたら鶏肉があった。・・・焼き鳥にするか。

「妹紅～。」
「なんだ～？」
「今日はお前が焼き鳥を作ってくれ～。」
「わかった～。」

隣の部屋にいる妹紅にそう言い、鶏肉を置いておく。
ちなみに、なぜ妹紅に焼き鳥を作らせるかと言うと、妹紅の焼き鳥がめちゃくちゃ美味いからだ。
気紛れで妹紅に「焼き鳥作れ」と言ったら、俺よりも美味いのを作り上げたのだ。
今じゃ焼き鳥の腕だけは俺よりも上だ。他はある程度できるくらいだが・・。
それと、鶏肉は凍らせてある。俺が魔法で頑張って凍らせた。腐ったりしたら勿体無いからな。
俺は妹紅がいる部屋に向かう。そこには絶を指で突付いて遊んでいる妹紅がいた。

「・・君は暇人だな。」

「いや、だって暇だし？」

そう言いながらも、絶を指で突付くのをやめない妹紅。
しばらくそうしていた妹紅だが、いい加減に飽きたのか絶を指で突付くのをやめた。
そして今度はゴロゴロし始めた。・・・何だろう、情けなくなってきた・・・

「・・妹紅。暇なら焼き鳥を作って来い。」
「えぇ～。もう～？」
「いいから行け。」

俺がそう言うと、渋々といった感じに焼き鳥を作りに、もとい焼きに行った妹紅。
とりあえず、妹紅がどうやって焼き鳥を焼いているか見てみよう。
そう思い、妹紅のところに向かう。もちろん、外でやっている。家の中でやったら煙いだろ？
俺はそのまま家の外に出て、妹紅を探す。・・・いた。ちょうど鶏肉を串に刺してる最中だ。
妹紅に声を掛けずに黙って後ろに立つ。頑張ってるのに邪魔したら駄目だしな。
すべてを串に刺し終えた妹紅は、炭火コンロ（能力で創った）の中に炭を入れ網を乗せる。
そして火を出して炭を燃やす。その後は、普通に焼き鳥を焼いていた。・・妹紅は焼き鳥作りの才能でもあるんじゃないか？

「相変わらずいい出来だな。」
「うわぁ！？・・なんだ、壊か・・。」

「そんなに驚くな。見にきただけだぞ。」
「・・・ちなみに、いつから居た?」
「最初から。」

俺がそう言うと、呆れたような目でこちらを見る妹紅。なんだ、その目は。

「そんな目で見るな。俺はお前がどんな風に焼き鳥を焼いているか見てみたかっただけだ。」
「ふ~ん・・。まぁいいけどさ。運ぶの手伝ってよ。」
「わかった。」

俺は妹紅から焼き鳥の乗った皿を受け取り、それを家の中に運んだ・・・

ちなみに、焼き鳥はお酒と美味しくいただいた。もちろん、夕食にも出たぞ？

第８０話：焼き鳥（後書き）

そんなわけで終わりました。そろそろ物語を進めようかなと思ってます。

第８１話：旅立つ不死鳥（前書き）

今回は妹紅と壊が戦います

第８１話：旅立つ不死鳥

突然だが、妹紅が旅立つ事になった。
今日の朝食の時に、俺に向かって「壊。私、旅に出ようと思うんだ。」と言い出したのだ。
何日か前から何か様子がおかしいとは思っていたが、まさかそんな事を考えていたなんてな。
いつ旅立つのか聞いたところ、「明日」と言っていた。旅立ちさせる前に焼き鳥を作り置きして行って貰おう。そう思い、妹紅の部屋へ向かう。

「妹紅。入るぞ？」
「壊？ちょっと待ってて。」

妹紅がそう言ったので襖障子の前で待つ。すると妹紅が襖障子・・・めんどくさいから襖。
襖を開けてくれた。

「さ、入って入って。」
「お邪魔する。」

俺はそう言い、部屋の中に入る。そして卓袱台の近くにある座布団に座る。
そして妹紅が俺に茶の入った湯飲みを渡した。・・・美味い。

「で、何か用？」
「ん？あぁ。お前は明日に旅立つのだろう？」
「うん。そがどうかしたの？」
「明日、旅立つ前に焼き鳥を作り置きしておいてくれないか？」

俺がそう言うと、半目で見てくる妹紅。いいじゃないか。美味いんだぞ、お前の焼き鳥。
前に依頼人が来た時に、試しに食わせてみたら「もっと下さい！」とか言いながら泣きつかれた。
ちなみに、いつまで経っても泣き付いたまま離れなかったから、仕方なく分けてやった。

「・・・普通さ、旅立つ前の人にそんなこと頼む？」
「頼まないな。『普通』ならな。」
「・・・そう言えば壊は普通じゃなかったんだよね・・。」

そりゃそうだ。１００年も一緒に暮らしてるんだからわかるだろう。
妹紅が俺が不老不死だと気付いたのは２０年くらい前だ。その時は凄く驚いていた。
むしろよく今まで気付かなかったな。そっちのほうが凄いぞ？

「まぁ、なんだ。とりあえず、明日の朝に作って置いてくれ。」

俺はそう言い、座布団から立ち上がる。今思ったけど、この時代に座布団って
何だか違和感があるな。

「・・あぁ、そうだ。言い忘れていた事があったな。」
「？」
「明日、焼き鳥を焼き終えたら少し離れた所にある滝に来い。」

俺はそう言い、部屋を出る。妹紅に対する最後の試練をやろうと思う。
明日が楽しみだ・・・

俺は朝早く起き、妹紅に来いと言った滝へと向かい、先に待つ。
妹紅の奴はちゃんと焼き鳥を焼いてるかな・・・。いや、まだ早いし無理か。
時間は朝の5時くらいだろうか？こんな時間に起きる奴なんてあんまりいないだろう。

「・・・と思っていたんだがな。そこの妖怪、出て来い。」

俺がそう言うと、近くの茂みがガサガサと動く。そして中からやたら大きい熊もどきが現れた。
何故もどきなのかって？目玉が三つある奴を普通の熊とは言わない。
さらに、何故妖怪なのか分かったかと言うと、普通の熊は妖力を出さないのにこいつは出してるから。

「グルルルル・・・！」
「・・そう言えば妖怪の肉は食った事がないな。美味いのだろうか？」

ぶっちゃけ、戦いよりも目の前の熊妖怪が美味いのかどうかが気になる。
焼いて食うか煮て食うか・・・。

「グルォォォ！」

俺が熊妖怪をどう料理しようか考えていると、熊妖怪が腕を振り下ろしてきた。
それを片手で止める。

「・・少し待っていろ。まだどうやって食うか決めていない。」

俺がそう言うと、熊妖怪はもう片方の腕を横に薙ぎ払う。それを上に跳んでかわす。
そして降りて来る際に、熊妖怪の額にある三つ目の目玉に踵落としを入れる。

「グォォォォ！」

熊妖怪が額を押さえながらジタバタと暴れる。俺はさらに能力で槍を創り、熊妖怪の心臓に
突き刺す。すると熊妖怪は最初は痛がっていたが、徐々におとなしくなってうつ伏せに倒れた。
さて、妹紅が来るまでこれを食って待ってるか・・・

「壊、何やってんのさ？」

熊妖怪を完食したと同時に妹紅の声が聞こえた。見てみると、妹紅が呆れた目をしながら俺を見ていた。

「あぁ。飯だ。」

「・・私の分も残してくれても良かったと思うけど？」

そう言えばそうだな。初めて妖怪を食ったが、それなりに美味かった。

と言うか、あんまりその辺の動物と味は変わらなかったな。ちなみに、焼いて食った。

「・・ちなみに何食べたの？」

「妖怪。結構美味かったぞ。」

「・・本当にとんでもないね。壊は。」

気にするな。俺は立ち上がり、改めて妹紅の方に身体を向ける。

「妹紅。これから俺と戦ってもらう。」

「戦ってもらうって・・。よく試合してるじゃん。」

「・・そうだな。まぁ、とりあえず離れろ。」

俺がそう言うと、妹紅はよくわからないと言った感じに俺から離れる。

妹紅、これからやるのはいつものお遊びじゃないんだよ。

俺は妹紅が離れたのを確認すると、近くの小石を拾い上げる。

「これが地面に落ちたら開始だ。」

「うん。わかった。」

俺は小石を思いっきり上に放り投げる。それがゆっくりと地面に・・・

「・・すぐに動かなきゃ駄目だろう?」

「なッ!?」

落ちた途端に、妹紅に向かって走る。今までの特訓に付き合ったような速度ではなく、

現段階で本気の走り。そして妹紅の頭をつかんで思いっきり木に投げつける。

そして妹紅は木から地面に落ちる。

「うぐ・・・。壊、殺す気なのか?」

妹紅は自分のわき腹を押さえながら立ち上がる。

「殺す気かだと?当然だろう。旅立つのなら今の攻撃を避けられるくらいにはなれ。

いいか、教えておいてやる。旅では危険は付き物だ。もしかしたら俺より強い妖怪もいるかもしれない。

そんな時、君はどうする?自分は不死身だから何回死んでも大丈夫なんて甘い考えは捨てろ。

不死身だって痛みは感じるのだぞ?もしもこちらが反撃する暇もなく攻撃され続けたら?

そうしたら痛いなんてものじゃない。下手したら精神が崩壊するかもしれないぞ?」

「・・・・・」
「これは俺が君に大して行う最後の修行だ。内容は簡単。俺を倒せ。」
「そんなの・・・」
「無理とは言わせない。」

俺は再び妹紅に向かって走る。妹紅は炎の翼を出し、そこから羽を飛ばす。
それを避けながらも妹紅に近づくが、避けきれなかった羽が一本、俺の目の前まで迫ってきた。

「やった！」
「・・甘いな。」

俺は手を出し、炎の羽を握りつぶす。「ジュッ・・」と肉が焼ける音がした。
妹紅はそれを見て驚いている。

「驚いている暇があるなら攻撃をしろ。」

俺は妹紅まで近づき、殴る。しかし、妹紅は俺の拳をかわして上に飛んだ。
文字通り、飛んだ。今も俺の真上を炎の翼を出したまま飛んでいる。
俺は近くにあった
小石を右手で持ち、それを妹紅に向けて投げた。妹紅は小石を避けて俺に向かって羽を飛ばして来る。
俺はそれを軽くかわす。・・妹紅め・・・

「俺に手加減するとは、ずいぶんと偉くなったな?妹紅。」
「なぁ、もうやめようよ。こんな事したくないよ・・。」

そう言いながら俯く妹紅。すまない、これも君のためだ・・・。
俺は能力で浮き、足場を作って妹紅に向かって走る。妹紅は俺を見て、
身体全体に炎を纏う。それは徐々に形を作り、やがて鳥のようになった。
そして俺に向かって炎の鳥が突っ込んできた。・・なるほど、不死鳥だな。だが・・・

「凶鳥をなめるなよ？」

俺はある程度力を抑えながらも、身体に霊力を込める。
そして腕を前に組んだまま不死鳥に向かって突撃する。クックルだったら腕を組むのを忘れない。
やがて双方がぶつかった。すると回りに衝撃波が走り、木は倒れ、地面が抉れる。
そして妹紅の炎の鳥が、少しずつだが削れて行く。最後に、炎の鳥は消え、妹紅が
地面に落下していく。俺は妹紅が地面に落下する前にその手を掴み、地面に降ろして寝かせる。
・・・上出来だな。

「・・壊・・？」
「・・上出来だ。お前の心配はあまりしなくてよさそうだよ。」

俺はそう言いながら妹紅の頭を撫でる。妹紅は満足そうな顔をしていた。
しばらく撫でていると、妹紅が起き上がる。そしてそのまま立ち上がった。
それに続いて俺も立つ。

「・・・もう行くのか？」
「・・うん。そうするよ。」
「そうか。まぁ、元気でな。」
「壊もね。」

妹紅はそのまま翼を作り、空へ浮かび上がる。そして最後に俺に手を振り、
遠くへ飛んでいった。じゃあな、妹紅・・・また会おう・・・

第８１話：旅立つ不死鳥（後書き）

はい、そんなわけで終わりました。次は原作キャラを出そうか出さないか
迷ってます。

第８２話：西行寺幽々子（前書き）

今回は原作キャラが出てきます。

第８２話：西行寺幽々子

妹紅が旅に出てから一週間。俺は家の縁側でまったりと茶を啜っていた。
はっきり言って暇だ。暇で仕方ない。

「・・・本当に暇だ。何かおもしろいことはないか？紫。」
「・・・相変わらず鋭いわね。」

少し前から俺の事をスキマに隠れて見ていた紫が、スキマを開いて『ニュッ』と言った感じに出てくる。そして出てきて俺の横に座ると、スキマに手を入れてゴソゴソと漁る。
紫が取り出したのは湯呑みだった。

「私にもお茶を貰えないかしら？」
「わかった。」

俺は紫の湯飲みに茶を注いだ。紫はそれをズズーっと飲む。

「で、今度はどうした。」
「えぇ。貴方に私の友人に会ってもらいたいの。」
「・・今、何て言った？」
「え？だから私の友人に会ってもらいたいって・・。」
「・・・・紫。頭は大丈夫か？俺の知り合いにいい腕をした医者がいるんだ。
居場所はわからないが何とか探して連れて来るから一回見てもらおう。な？
いや、もしかしたら疲れているだけかもしれない。そういう時はゆ

っくり休め。」
「・・・貴方、私を馬鹿にしてるの？」
いや、考えても見ろ。紫だぞ？あの胡散臭い紫が友人を作れると思うか？
一応は俺も紫を友人だと思っているさ。だがな、こんな性格の奴がその辺で友人を
作れるか？もしかして頭の中のお友達だったりするんじゃないのか？
「・・なんだか馬鹿にされたような気がするわ。」
「馬鹿にしてない。純粋に心配しているんだ。」
主に君の頭を。
「・・まぁ、いいわ。それよりも、私の友人に会って欲しいのよ。」
「紫、もうそんな嘘をｔ「嘘じゃないわよ！」・・・本当か？」
「本当よ！まったく、貴方は私を何だと思っているの？」
・・・どうやら本当らしい。よかった、紫の頭はまだ無事らしい・・。
「・・で、俺に会いに行って欲しいってのはどんな奴だ？」
「それは行けばわかるわ。それより、会いに言ってくれるのかしら？」
「あぁ。どうせ今日は暇だしな。と、少し待ってくれ。」
俺は紙と筆を用意し、「休日」という文字を書いて引き戸に貼り付けた。
よし、準備ＯＫだ。俺は紫のいる所まで戻る。

「準備出来たぞ。」
「そう。じゃあ行きましょう。」

紫はそう言うと、再びスキマを開く。・・まさかアレに入れと？

「どうかしたの？早く行きましょう？」
「・・・そうだな。」

仕方ない。そう思い、紫のスキマの中に入る。案外、居心地自体はそこまで悪くなかった。
ただ、虚ろな目があっちにもこっちにもあるのは気味が悪い。
俺の後に続いて紫がスキマの中に入る、そしてそのまま前に進んだ。
俺はそれに黙って付いて行く。

「ねぇ、壊。貴方は確か陰陽師の仕事をやっているのよね？」
「・・・あぁ。あまり仕事は来ないがな。」
「そう・・・。着いたわ。」

紫はそう言いながら再びスキマを開いて出る。俺もそれに続いてスキマから出た。
スキマから出ると、そこには門が建っていた。・・・デカイな。
でかい門なのに門番がいないが・・・

「貴様。ここに何の様だ。」

門を眺めていると、後ろから声が聞こえたので振り向く。
そこには刀を腰に差してる老人が立っていた。・・老人の後ろにありえない長さの石段がある。

「・・・別に。ただ、言われたから来ただけだ。」

「言われた?貴様以外に誰もいないのにか?」

そう言われて周りを見ると・・・はて?紫はどこに行った?

まさか・・・・

「・・騙された?」

・・マジでか?やっぱり紫とは友人の縁を断ち切ろう。そうしよう。

もし次に会ったら頭を軽く叩いてやる。

とりあえず、ここから逃げ出さないとな。戦うのがめんどくさいし。

俺は能力で地面に潜る。

「貴様!何をしている!?」

「めんどくさいから戦いは避けたくてな。ご老体には辛かろうよ。」

「やかましい!大体、わしはまだ20だ!」

・・・その老け顔で20はないだろう・・・。俺はそう思いながらも、どんどん地面に潜っていく。

そして完全に潜りきった。どうせ帰っても暇だろうし、このまま門の中に入ってしまえ。

そう思い、潜ったまま門の下を通過する。そしてある程度進んだところで浮かぶ。

浮かんで地上に出ると、立派な屋敷が見えた。俺はなんとなくその屋敷の外を回る。

すると、縁側で少女を見つけた。その少女の容姿は青い着物のようなものを着ており、

髪はショートボブで桃色だ。どこか悲しそうな目をしている。少女は何をするでもなくただ空を見ていた。

俺は気紛れで、本当にただの気紛れで少女に近寄り、話しかけた。

「空ばかり見ていて楽しいか？」
「・・・貴方・・誰？」
「さぁな。もしかしたら盗賊かもしれないぞ？」
「・・そうなの？」
「いや、嘘だ。少し、そちらに行くぞ？」

俺はそう言いながら少女に近づく。すると、突然少女の周りに黒い蝶が現れた。
その蝶はヒラヒラと俺に近づいてくる。・・・虫は苦手だ。

「！？お願い逃げて！」
「・・・？」
「それ以上近くに来ないで！」

訳が分からない。何だ、俺っていきなり嫌われたのか？ショックだな・・。
そんな事を思っていると、先程の蝶が俺に向かって近づいてくる。・・鬱陶しいな。
俺はその蝶に手を伸ばして・・

「鬱陶しいぞ。」

そのまま握りつぶした。・・・はて？この蝶、何だかおかしいな。
手を見てみたら潰したはずの蝶が消えていた。・・？

「あ・・あぁ・・・。」
「どうかしたか？」
「あ、貴方なんともないの？」
「あぁ。別になんともないが？」

俺がそう言うと、少女は何故か安心したような顔をした。
別に嫌われてる訳じゃなかったみたいだ。
俺は少女に近づき、横に腰を下ろす。

「ねぇ、名前は何ていうの？」
「紅鎖華　壊だ。君は？」
「私？私は西行寺幽々子よ。」

幽々子がそう言いながらニッコリと微笑む。先程までの悲しそうな顔ではない。

「ところで、先程は何故あそこまで焦っていたんだ？」

俺がそう聞くと、幽々子はそのことを語りだした。なんでも、彼女は能力持ちだそうだ。
しかし、その能力がまた厄介で『死を操る程度の能力』らしい。
しかも、自分で制御できないと言っていて、自分が能力を制御できないせいで屋敷の者が何人も死んでしまったそうだ。
・・なんとまぁ恐ろしい能力だろうか。人間には少々きつい能力だな。

「まぁ、そう落ち込むな。いつかいい事あるさ。なぁ、紫？」
「え、紫？」

俺が紫の名前を口に出すと、案の定紫はスキマを開いて出てきた。
とりあえず、俺は紫の頭を軽く叩く。
紫は叩かれた衝撃でおかしな帽子を落としたが、それを拾い、何事もなかったように振舞う。

「久しぶりね。幽々子。」
「・・えぇ。紫も久しぶり。」

そう言いながら二人がクスクスと笑いう。ひょっとして紫が俺に会わせたかった
友人と言うのは幽々子なのか？
俺はそう思いながらも、楽しそうに笑っている二人を眺めていた・・

第８２話：西行寺幽々子（後書き）

そんな訳で生きてる時の幽々子でした。つぎはこの続きから始めます。

第８３話：見つけた退屈しのぎとお泊り（前書き）

前書きなし。呼んだほうが早いですよ。

第８３話：見つけた退屈しのぎとお泊り

目の前には楽しそうに話している桃色の髪の少女と、金髪の髪の少女？がいる。
二人とも時々お茶を飲み、再び話す。正直に言ってしまおう。暇だ。
幽々子と紫の話を聞いていても、俺にはあまり面白く感じない。・・・
少し、歩いて来よう。
そう思い、立ち上がる。さてと、適当にぶらつくか。

「あら、壊。何処に行くのかしら？」
「その辺を歩いてくる。」

俺がそう言うと、紫は「そう。」とだけ言って再び幽々子と話し始めた。
夢中になっている二人の邪魔をしないように歩く。とりあえず、向こうに行ってみよう。
俺はそのまま歩いて庭を進む。今更だが、この屋敷の庭はかなり立派だ。いい庭師がいるのだろうな。

「・・・これは・・。」

庭について考えていると、やたらと巨大な桜の木を見つけた。ただの桜ではない。
とても強い・・・先程の幽々子の蝶よりも強い『何か』を感じる。
俺はその木に近づく。
そして桜を眺めた。桜には花は咲いていない。おそらく、まだ時期だからではないのだろう。
そしてその桜に触る。・・・ほぅ・・・

「面白いものを見つけたな・・・。いい退屈しのぎになりそうだ・・・。」

俺はそう言い、桜から手を離す。自分でも理解できるほど心が躍る。
こんなに心が躍ったのは
いつ以来だろうか・・・。

「俺を楽しませてくれよ・・？」

そう言いながら、俺は二人のいる場所へと戻った・・・・

ーーーーSide幽々子ーーーー

「あ、そうだ。ねぇ、紫。壊って、どんな人なの？」
「・・・どうしたのよ。急に。」
「別に深い意味はないんだけど・・・。ただ知りたいだけ。」
「そう。まぁ私が話せる範囲なら話すわよ。そうね・・・。」

紫はそう言いながら何か考える素振りをする。いや、たぶん実際に考えているのだと思う。

「・・はっきり言って何もわからないわね。」
「・・・え、わからない？」
「えぇ。彼、あんまり自分のことを話さないのよ。
私が何百年掛けて調べても彼の事は殆どわからなかったわ。
精々長生きしているとか、旅をしていたとか、陰陽師の仕事を始め

たとか、それくらいしかわからなかったわ。」

驚いた。私はてっきり紫は物知りだと思っていた。いや、実際に彼女は物知りだ。

長年生きていると本人も言っているし、自分で物知りだとも言っていた。

・・自分で物知りと言うのもどうかと思うけど・・・。

「じゃあ、紫はどうやって彼に出会ったの？」

「ん～・・。始めは私がスキマから一方的に覗いていたのよ。そうしたら彼が私に気付いて、光線を撃って来たの。

最初はまぐれかと思って彼の横にスキマに隠れて移動したのだけど、彼、私のことに始めから気付いていてね。

まぁ、その後勝負したのだけれども、私は壊に負けて壊が私に勝った。

で、倒れた私を彼が治療してくれたのよ。」

「・・紫も負けるのね。」

「仕方ないじゃない。彼が強すぎるのよ。

しかもアレで本気じゃないって言うんだから化け物ね。」

「それはさすがに非道いんじゃないのかしら？」

「いいのよ。」

「よくないぞ。」

紫が言った事にいつの間にかやって来た壊本人が答える。

「散歩は終わったの？」

「あぁ。面白いものが見れた。」

壊はそう言い、私の横に腰掛ける。そしてお茶を飲んだ。・・何だかお爺さんに見える。

「壊。何だか爺みたいね。」
「うるさいぞ、紫。１０００年近く生きている君に言われたくない。」

壊がそう言うと、紫から「ピシッ」と言う音が聞こえた。

「壊・・・。」
「何だ？幽々子。」
「女性に年齢の話はしては駄目なのよ？」
「そうか。次から気を付けよう。」

そう言いながらお茶を飲む壊。わかってないでしょ？

「はぁ・・。まぁいいわ。壊、私はもう帰るけど、貴方はどうするのかしら？」
「そうだな・・。俺も帰るとしよう。今日の夕飯の仕込みが終わってないからな。」
「あ、あの・・・。」

私が呼びかけると、二人とも私のほうを見る。

「・・き、今日泊まって行かない？」
「・・・だ、そうだ紫。どうする？」
「そうね・・・。お言葉に甘えちゃおうかしら？」
「本当！？」

凄く嬉しい。紫と壊ともっとお話が出来る。私はそう思い、少し胸が躍った・・

ーーーーSide壊ーーーー

「で、どうして俺が料理を作らなければいけないんだ？」
「だって、妖忌は『俺はここで先程の侵入者が来ないか見張っております！」
って言うんだもん。」
「・・・妖忌？」
「えぇ。魂魄妖忌（こんぱくようき）。この屋敷の門番で、庭師のことよ。会わなかった？」
「・・・あぁ。あの老け顔か。」
「そうそう老け顔よ。」

そう言いながらも、料理を続ける。そして出来た料理を食卓に並べた。
ちなみに、幽々子は出来た料理を運んでくれたが、紫は何にも手伝ってくれなかった。
で、夕飯を終わらせて今は布団に潜っている。なに、早い？気にするな。
それと、幽々子の舌に俺の料理は合ってくれたらしい。よかった。
そんな事を思いながらも、俺は眠りについた・・・

一方その頃の妖忌

「さぁ、来るなら来い！」

未だに門の前で構えていた。壊は中に居ると言うのに・・・

第８３話：見つけた退屈しのぎとお泊り（後書き）

そんな訳で終わりました。短い？細かい事は気にしない。

第８４話：帝からの依頼？知った事か（前書き）

今回は、特に何も起きません

第８４話：帝からの依頼？知った事か

「・・・眠い・・・・。」

朝起きた俺の第一声はこれだ。眠い・・・。そう思いながらも何とか立ち上がる。
そういえば幽々子の屋敷に泊めてもらったんだったな。屋敷なだけあって広いな・・・。
そんなくだらない事を考えながらも、襖小事を開けて部屋から出る。
そのまま顔を洗いに外へ・・

「・・・・。（↑俺）」
「よく来たな。（↑昨日の門番もとい、妖忌）」

外へ出たら何故か妖忌が刀を2本構えて立っていた。というか、殺気がビシビシと俺に当ってるぞ？
そういえば、昨日は気付かなかったが妖忌の背中に何かくっ付いてる。

「・・邪魔したな。」
「待てぃ！！」

その場でUターンしようとしたら妖忌に肩を捕まれた。

「何だ？俺は何もしていないぞ？」
「そんなのはわかっておる。ただ話を聞いて欲しいだけだ。」

妖忌がそう言うので、俺は仕方なく再び妖忌の方へと振り向く。
すると妖忌は刀を仕舞った。・・・何のために出していたんだ？

「さて、早くしてくれ。俺はとっとと顔を洗って朝食を摂りたいんだ。」
「うむ。単刀直入に聞く。何が目的でここへ来ただ？」
「・・・別に。ただ、紫に言われて来ただけだ。自分の友人に会ってもらいたいとな。
嘘だと思うなら本人に聞け。俺はもう行くぞ。」

俺はそう言い、再び顔を洗いに行く。そして洗い終わったので朝食の準備を・・・

「ん？」
「どうした。」
「・・・そういえばここの朝食は誰が作っているんだ？」
「わし・・・俺だ。」

今わしって言ったな？本当は２０じゃないだろう？本当は嘘だろう？

「・・妖忌。本当は何歳だ？」
「・・・２００歳。」
「それで２０と誤魔化すのは無理がある・・・。」

一桁減ってるじゃないか。というか、人間じゃないな。

「妖忌、お前の種族は何だ？」
「わしは半人半霊だ。」

半人半霊・・・。まぁ、そのままの意味だろう。
じゃあ妖忌の後ろにくっ付いてる白いふよふよしたのは幽霊か？

「まぁ、どうでもいいな。それより、幽々子のために朝食の準備をしなくてもいいのか？」

俺がそう言うと、「ハッ！これはいかん！！」と言いながら屋敷の中へと入っていく妖忌。

歳なんだから無理するなよ。俺は妖忌に対してそう思いながら食卓に向かって歩いた・・・。

妖忌の作った朝食はそれなりに美味かった。まぁ、２００年も生きてるんだからこれくらいは当たり前だろうがな。

さてと・・・

「紫、そろそろ帰ろう。」

「あら、もう帰るの？私はもう少しここにいてもいいのだけれど・・。」

「俺は仕事があるんだ。君とは違うんだぞ？」

「・・・わかったわ。じゃあ、また会いましょう。幽々子？」

「えぇ。またね、壊、紫。」

幽々子が俺と紫に手を振るので、俺は「あぁ」とだけ言って、紫が開いたスキマの中に入った。

そして最後に、幽々子をチラリと見た後すぐに、紫がスキマを閉じた・・・・

「で、もう仕事が来たわけだ。」
「誰に言っているのかしら？」

家に帰ったら引き戸に紙が貼り付けてあり、「明日に都の帝のもとへ来るように」という内容だった。
なんだ？メンドクサイ仕事だったらやらんぞ？・・・待てよ？俺は幽々子の屋敷に一泊してきた。
そしてこの紙がいつ貼られたのか俺にはわからない。
つまり、もしかしたら昨日に貼られたのかもしれないと言う事だ。

「・・まぁ、どうでもいいな。」
「よくないでしょうが。貴方行かなくてもいいの？」
「めんどくさいから行かん。それに、行こうが行くまいが俺の勝手だ。」
「・・どうなっても知らないわよ？」

紫はそう言いながら俺を呆れた目で見てくる。まぁ、確かに断ったら後々めんどうだが、
俺にとってはどうでもいい。
あれだ、帝の依頼なんざ聞かなくても俺は困らないしな。（帝は困ります）

「・・まぁ、明日忘れていなければ行くさ。たぶんな。」
「そう。じゃあ私はもう帰るわね。」

「あぁ気をつけて帰れよ?」

俺がそう言うと、クスクスと笑いながらスキマに潜る紫。ぶっちゃけ、紫なんか心配しなくても大丈夫だろうとは思ってる。

そんな事を思いながらも、俺は引き戸に貼ってあった紙を引っぺがして家に入った・・・

第８４話：帝からの依頼？知った事か（後書き）

次回は原作キャラが出てきます。

第８５話：帝の依頼はめんどくさい・・・（前書き）

今回は原作キャラが出ます。

第85話：帝の依頼はめんどくさい・・・

俺は都の帝に呼ばれて、帝の前で座らされている。引き戸の件でめんどくさかったが仕方なく来た。

「・・で、何か用か？」

「貴様！帝に向かってなんと言う口の利き方を！！」

そう言った横に並んでいる陰陽師の内の一人が俺に札を投げつけて来た。俺はそれを
指で挟んで受け止める。そして投げて来た陰陽師に返してやった。
霊力を込めてのオマケ付きで。
俺の札返しを受けた陰陽師は「ぐはぁっ！」と言いながらそのまま仰向けに倒れた。

「幸雫ぁ！！」

何か知らんが倒れた陰陽師の横にいた陰陽師Ｂが名前を叫びながら必死になって
俺にやられた陰陽師を揺すってた。・・・馬鹿か。悪化するだろうが。

「・・・あ～・・。そろそろ始めても良いかの？」

「あぁ。すまないな。」

帝が言うには、最近少し離れた山に鬼が住み着いて、その山の麓の村を襲っているらしい。
それで陰陽師を何人か向かわせたのだが、全員が全員ボコボコにされて帰って来たそうだ。

で、仕方ないから『渋々』都でも強いと噂の俺に依頼したそうだ。
その話をした時の帝の顔は
本当に嫌そうだった。・・・そんなに俺が嫌いか？
そんな訳で俺は鬼がいる山まで徒歩で歩きながら向かった。ゲートを使うつもりはない。
歩いたほうがおもしろそうじゃないか。
まぁ、なんやかんやあって鬼がいる山の麓の村まで着いた。俺はその村で情報収集をする事にした。
その結果・・・

1. 鬼は酒と喧嘩と宴会が好き。
2. 鬼は自分より強い相手と戦うのが好きで、気に入った奴は自分の嫁または婿にする。
3. 気に入った奴に関しては、地の果てまで追いかける。
4. 鬼は嘘と卑怯な事が大嫌い
5. 鬼は正直者
6. 怖い

と、まぁこんな事がわかった。6に関しては知らんとしか言いようがないが、他の事は無視が出来ない。
例えば、俺が鬼に会いに行ったとしよう。すると鬼は高確率で俺に喧嘩を吹っ掛けて来るだろう。
その場合、負ければ痛い目に遭い、勝てばこれまた高確率で俺は鬼に追い掛け回されるかもしれない。
しかし、俺は仕事で鬼に会いに行き、そして村に手を出さないよう

に交渉しなければいけない。
・・・めんどくさい。奇襲でもして脅してやろうか？いや、やめておこう。卑怯な事が嫌いと言うのだから、
そんな事をしたら話すら聞いて貰えないだろう。それはそれで困る。
・・・どうしようか・・・。

色々考えた結果、「変装でもしよう・・。」と言う事になった。で、
今の俺の容姿は、
ただ外套を羽織っただけ。後は顔が見えないように布グルグル巻きにして隠している。なに？面？
別に面じゃなくても顔が隠せればそれでいい。さてと、行くか。俺はそう思い山を登る。
ある程度山を登ると、おかしな少女を見つけた。
何がおかしいかと言うと、まず容姿がおかしい・・って、俺も人の事は言えないな。

こんな顔中布でグルグル巻きにしているんだからな。普通なら通報レベルだ。・・まぁそんな事はどうでもいい
今は少女だ。俺はとりあえず少女に近づく。少女は俺に背を向けるようにして何かをしている。

「君はここで何をしているんだ?」

俺は少女に話しかけた。すると少女が俺の方を振り向いた。
少女の容姿は、薄い茶色のロングヘアを先っぽのほうで一つにまとめていて、真紅の瞳を持っている。
服装は白のノースリーブに紫のロングスカートを穿いている。なぁ、いい加減突っ込んだほうがいいよな?
何にかって?この少女の頭から何か生えてる事に。
どう見ても身長と不釣り合いな長くねじれた角が頭の左右から二本生えている。
後、頭に赤の大きなリボンをつけていて、左の角にも青のリボンを巻いている。
右の角には何かをグルグル巻きにしている。そして、手首や腰の辺りから先端に三角系や四角系の胴か?
その胴をくっ付けた鎖を吊るしている。右手には瓢箪を持っていた。
・・・これ、鬼だよな?

「あれ、人間なんてめずらしいね。何か用?」
「あぁ。実はこの山の鬼に少し話があるのだが・・。」
「へぇ~・・。なら私が案内してあげようか?」
「・・いいのか?なら頼む。」
「任せな!鬼は正直者で嘘を吐かないから安心して付いてきていいよ!」

そう言いながら目の前の鬼はドンッ!と自分の胸を叩く。・・これ

が鬼か。

「ところで、あんた名前はなんて言うんだい？」

「・・・壊だ。そちらは？」

「私かい？私はね・・・

伊吹萃香（いぶきすいか）だよ。よろしくね、壊。」

第８５話：帝の依頼はめんどくさい・・・（後書き）

そんなわけで伊吹萃香でした。次回は他の鬼も出ます

第８６話：鬼たち（前書き）

今回は、戦闘シーン少なめ

第８６話：鬼たち

「へぇ・・・。壊も命知らずだねぇ。」

萃香にそんな事を言われる。先程まで何故この山に来たのか説明していたところだ。

ちなみに、俺は旅人ということにしている。陰陽師なんて言ったら「戦え！」とか言われそうだからな。

それにしても・・・

「萃香、少し酒臭いぞ？」

先程からずっと瓢箪の酒を器に淹れてグビグビ飲んでいる。よく無くならないな。

俺がそういうと、萃香は「気にしない気にしない」と言いながらまた瓢箪の酒を飲む。

「それより、まだ着かないのか？いい加減同じ景色を見るのも飽きてきたんだが・・。」

「あと少しだよ。・・・ぷはぁ～・・。」

酒臭い。見た目幼女が酒をグビグビと飲むなんてシュールだな。

「おや、萃香じゃないか。こんなとこで何してるんだい？」

そんな事を考えていたら前から声が聞こえたので、声が聞こえた方を確認する。

そこには女がいた。もちろん、普通の人間の女ではない。

体操服のような服を着ており、ロングスカートを穿いている。

そして　金髪のロングヘアーで頭には赤い角が一本生えていて、その角には黄色い星のマークある。
目の色は赤色だ。・・・鬼だよな?随分と立派な角だ・・・

「あ、勇儀。丁度いいや。この人間・・壊って言うんだけどさ、コイツが
私たち鬼に話があるんだってさ。」
「ふ～ん・・・。あたしは星熊勇儀(ほしぐまゆうぎ)って言うんだ。アンタは?」
「・・・紅鎖華壊。君たち鬼に少し用があってな。」
「そうかい。それならもうすぐ着くよ。暇だからあたしも付いていく事にするよ。」
「まぁ、構わんさ。なぁ?」

俺が萃香にそう聞くと、萃香は「まぁ、いいんじゃない?」とか言いながら再び酒を飲みだした。
・・・酒好きだなぁ・・・・

「と、まぁ色々あったが鬼たちのいる場所に着いた。」
「誰に話してるの?」

気にするな萃香。まぁ、特に何も無かったが鬼たちのいる山の頂上まで着いた訳だ。

萃香と勇儀たちと違い、他の鬼はそこまで強い妖力を感じない。これなら襲われても逃げ切れそうだ。

「さて、とりあえず他の鬼達を集めようか。」

萃香がそう言い、勇儀と一緒に他の鬼たちに集まるように呼びかけをする。・・この二人はリーダーか何かなのか？
たぶんリーダーであろう萃香たちの声を聞いた鬼たちは俺たちの周りに集まった。

「あ～、とりあえず集まってくれてありがとう。皆に集まってもらったのは私たち鬼に用事あると言う人間の話を聞いてもらおうと思ったからだよ。壊、自己紹介して。あと、用件も。」

「・・紅鎖華壊だ。今回は俺の話を聞いてくれることを感謝する。
今回俺がここに来たのは、
この山の麓にある村に君たち鬼が手を出していると聞いてな。もし出しているのならやめて貰いたい。」

俺がそう言うと、鬼たちが「ふざけるな！人間の言う事なんか聞くか！」という雰囲気を作り出した。
・・・はぁ。めんどくさい。俺は二人に助けを求める。すると、勇儀が何か思いついたような顔をした。
そして萃香に耳打ちをし始めた。・・・何だろうか、凄く嫌な予感がする・・・。
勇儀の話を聞いた萃香は、ニヤリと笑って俺の顔を見た。
そして嫌な雰囲気を出している鬼たちに言った。

「皆がこの男の話を聞いて納得いかないなら、この男と戦うのはどうだ？負けた方は

どんなことがあっても勝者の言う事を聞く。これなら文句は無いはずだろう？」

萃香が話し終えると、鬼たちが「おぉぉぉぉぉぉっ！」と歓声の声を上げた。・・めんどくさい。

「萃香、俺に拒否権は「あるわけないじゃん」そうだよな。」

逃げ出そうにも、心に火が点いたこいつ等はしつこく追いかけて来るだろう。
戦おうにも、この数はめんどくさい。唯一の救いは、他の雑魚よりも強い二人が戦わないで観戦する気満々だと言う事だろうか。
あぁ、めんどくさい。ただ・・まぁ・・・

「・・・来い。全員片付けてやる。」

その途端、鬼達が俺に突っ込んできた・・・・

ーーーー勇儀ーーーー

始めてみた時は気味が悪かった。背があたしより高く、黒い外套を体に羽織って、
黒い布で顔を目以外グルグルと巻きにしている男。ただ、話してみると結構面白い男だった。

山の頂上に着いた時話を聞いたらこの男はこの山の麓にある村に手を出すなと言ってきた。
人間の癖に鬼にこんな事を堂々と言うのは精々陰陽師くらいだ。
その陰陽師たちも、私たちが出るまでも無く他の鬼にボロボロにされて、都に帰った。・・・そうだ。
鬼にこんな事を言えるくらいなんだから、たぶんその辺の奴より強いだろう。
だったら少し他の鬼たちの気分転換に付き合って貰おう。
私はそう思い、萃香に耳打ちで教える。
すると萃香はそれに同意した。

「皆がこの男の話を聞いて納得いかないなら、この男と戦うのはどうだ?
負けた方はどんなことがあっても勝者の言う事を聞く。これなら文句は無いはずだろう?」

萃香がそう言うと、鬼たちは全員歓声の声を上げた。ここのところ戦ってないから
いい気分転換になるはずだ。

「萃香、俺に拒否権は「あるわけないじゃん」そうだよな。」

壊がの言葉をあっさりと切り捨てる萃香。壊はすごくめんどくさそうな顔をしていた。
そして壊はダルそうにしながらも、目つきを鋭くして鬼達を見た。

「・・・来い。全員片付けてやる。」

壊がそう言った途端、鬼達が壊に向かって突っ込んだ。そして1人が壊に向かって殴りかかるが・・

「鬱陶しい。あっちに行っていろ。」
「ぐぁ！？」
壊は殴り掛かって来た鬼を一蹴りした。すると壊に向かった鬼は後方に吹き飛ばされる。
さらに、他の鬼が何人かがそれに巻き込まれて気を失う。
「・・・この程度か？」
・・理解した。この男は・・
「それなら・・こちらから行くぞ？」
もの凄く強い。壊は鬼たちに向かって走り、拳で殴りつける。
普通の人間が鬼を殴ると、鬼の硬さで拳を痛めつける。
しかし、壊はそのようなことはなく、鬼を片っ端から殴り倒していた。
「さぁ、舞台は整った。始めようじゃないか・・・。」
そういった途端、壊の近くにいた鬼が宙を舞った・・・・

第８６話：鬼たち（後書き）

次はこの続きから始まります。

第87話：小さな百鬼夜行（前書き）

今回は、ほとんどが戦闘シーンです。

第87話：小さな百鬼夜行

目の前に群がる雑魚鬼を何も考えずにひたすら殴り、蹴る。一体の鬼が俺に向かって岩を投げてきた。
それを殴って壊す。そして岩を投げてきた鬼に、仕返しとして近くにいた鬼を投げ飛ばす。
投げた鬼が、岩を投げてきた鬼に当ったので、再びその辺の雑魚鬼を殴り飛ばす。
いい加減に飽きてきたな・・・。そう思っていると、鬼が二匹で殴りかかってきた。

「・・・鬱陶しい・・。」

俺がそういった途端、周りにいる殴り掛かって来た二匹の鬼の動きが一瞬止まった。
ついでに他の鬼も動きを止めている。・・どうかしたのだろうか？
まぁ、いい。動かないなら好都合だ。このまま全員「ちょっと待った」何故か知らんが
勇儀に羽交い締めされた。と言うか止められた。

「・・・止めないで貰いたいな。そちらから売ってきた喧嘩だろう？」
「あんたがやってるのはどう見たって喧嘩には見えないよ。」

勇儀に言われたので改めて周りを見る。そこには軽い傷で済んでいる鬼も居れば、
腕を失くすと言った重症の鬼までもがいた。・・やり過ぎたか？

「・・・とりあえず離してくれ。もう攻撃はしないから安心しろ。」
俺がそう言うと、勇儀が羽交い締めをやめる。そして萃香が目の前までトコトコと歩いて来た。
「いやぁ～、強いね～壊は。まさか他の鬼がこんなにあっさりやられるとは思わなかったよ。」
「俺にとってはそんな事はどうでもいい。それより、約束は守ってもらうぞ。」
「何言ってるのさ。まだ戦いたい鬼が残ってるじゃないか。」
「・・・何処に？」
「壊の目の前と後ろにいる鬼。」
・・・こいつ等戦う気だったのか。確かに二人を見てみると、もの凄くいい笑顔をしていた。
めんどくさい・・・。
「・・・まぁ・・・。いいさ。で、どちらから戦うんだ？」
「う～ん・・・。じゃあ私が先に行くね。」
「じゃあその次はあたしだ。」
どうやら先に戦うのは萃香のようだ。俺は萃香と少し離れて向き合う。
そして勇儀に試合の合図をしてもらう事にした。・・この場合は喧嘩の合図か？
本当にめんどくさい・・・・
ーーーーSide萃香ーーーー

はっきり言って驚いた。私たち鬼に武器を使わずに、拳で戦うなんて普通なら自殺行為だ。
しかし、壊は普通ではなかった。他の鬼が殴り掛かればその拳を受け止め、お返しとばかりに殴るか蹴る。
壊から少し離れた鬼が岩を持ち上げ、壊に投げ飛ばした。壊はその岩を拳で粉々に粉砕する。
そして岩を投げつけた鬼に向かって近くに居た鬼の頭を掴んで投げた。すると投げられた鬼は
他の鬼も巻き込んで見事に岩を投げてきた鬼に命中する。そして壊は再び近くに居た鬼を殴った。
すると、2体の鬼が壊に向かって殴りかかった。壊はその2体の鬼を見ると、目つきを鋭くした。

「・・・鬱陶しい・・。」

壊が静かに、しかしはっきり聞こえる声でそう言った途端、壊から殺気か溢れ出した。
それを近くで感じている鬼は、その殺気だけで何体かが倒れる。そして壊は再び鬼たちに
攻撃をしようとしたが・・

「・・・止めないで貰いたいな。そちらから売ってきた喧嘩だろう？」
「あんたがやってるのはどう見たって喧嘩には見えないよ。」

勇儀が壊を羽交い締めいして動きを止めさせた。壊は勇儀に言われた事が理解出来ない
ようで周りを見た。
そこには気絶している鬼や、腕が失くなっている鬼も居た。

まぁ、時間が経てば直るでしょ。・・・たぶんね。

「・・・とりあえず離してくれ。もう攻撃はしないから安心しろ。」

壊がそう言うと、勇儀は壊を放した。それにしても強い。どう見たってただの旅人ではない程の腕だ。

「いやぁ～、強いね～壊は。まさか他の鬼がこんなにあっさりやられるとは思わなかったよ。」

「俺にとってはそんな事はどうでもいい。それより、約束は守ってもらうぞ。」

「何言ってるのさ。まだ戦いたい鬼が残ってるじゃないか。」

「・・・何処に？」

「壊の目の前と後ろにいる鬼。」

壊の戦いを見ているうちに、私も何だか戦いたくなってきた。これ程の強者を目の前にして
何もしないってのは鬼の名が廃るってもんでしょ。

「・・・まぁ・・・。いいさ。で、どちらから戦うんだ？」

「う～ん・・・。じゃあ私が先に行くね。」

「じゃあその次はあたしだ。」

戦う順番も決まったし、早く始めよう。久しぶりに鬼の血が騒いできたしね・・・・

ーーーーSide壊ーーーー

「始め！！」

勇儀がそう言った途端、萃香が俺に向かって突っ込んでくる。そして殴り掛かって来た。
俺は余計な事を考えていたので、萃香の攻撃をかわせずにその身に受けた。
そのまま後方に思いっきり吹き飛ばされる。そして岩に体をぶつけた。・・・痛いな・・・。

「おろ？もう終わり？」
「・・まさか。まだ終わりじゃないさ。」

そう言いながら何とか立ち上がる俺。鬼って、馬鹿力だな。あれだけであばら骨1本持っていかれた。
俺は萃香に向かって走る。そしてそのまま殴りつけた。

「・・・本当に馬鹿力だな・・。」
「そっちこそ・・。重い一撃だね。」

俺の拳は萃香の手で防がれてしまった。結構力を入れたつもりなんだけどな・・・。
そう思いながらも、右足を軸にして回転蹴りを食らわす。左足の蹴りが萃香の脇腹に当ったので、そのまま続けてジェノサイドカッターもどきをする。
すると萃香は宙に浮かんだ。俺はさらに、宙で飛んで手を組み、そのまま萃香に振り下ろして地面に叩き落した。
萃香が落ちた場所から煙がモワモワと出ている。さて、どうなったかな・・？

「・・いない？」

煙が晴れたので萃香がどうなったが確認しようとしたが、萃香の姿は何処にも無かった。

まさか・・・

「能力か・・？」

「正解！」

萃香の声が聞こえたと同時に、俺の背中に激痛が走る。後ろを振り向くと、萃香が俺の背中を殴っていた。

背中の痛みに耐えながらも、萃香から距離をとって離れる。

「能力持ちとは厄介だな。ちなみにどんな能力だ？」

「私の能力は『密と疎を操る程度の能力』だよ。」

「『密と疎を操る程度の能力』ね・・。」

ある意味凄い能力だな。自分の身体を霧にしたり出来るんじゃないか？

そんな事を考えていると、萃香が右腕を上に突き出した。そしてその手に、

砂や小さな石などが集まっていく。やがてそれは、巨大な岩となった。でけぇ・・。

「これをかわせるかい！？」

そう言いながら巨大な岩を俺に向かって放り投げてきた。あれはマズイ。あんなのには当りたくない。

まぁ、もっとも・・

「当らなければいいだけだ。」

俺は能力で地面に潜る。そして萃香の後ろまで移動して地面から浮かんだ。

「自分だけ能力を持っていると思うなよ・・？」

「なッ！？」

俺は萃香に思いっきり踵落しをした。萃香は俺の登場の仕方に驚いていたので、

踵落しは見事に萃香の頭に入った。俺はそのまま地面に萃香を頭から叩きつけた。

「うぐっ・・・！」

「どうした？まさかこんなものじゃないだろうな？」

必死に起き上がろうとする萃香に向かってそう言う。まぁ、どんな生き物でも頭をやられたら

グラグラと視界が揺れるはずだ。さて・・・

「俺は鬼のように正々堂々していなくてな。悪いが決めさせて貰う。」

俺はそう言い、萃香の右の角を持って持ち上げる。そして空いている手に大量に霊力

を込めた。そのまま拳を作り、萃香の腹を・・・

「・・殴る！」

「がぁっ！？」

腹を殴られた萃香は一瞬目を見開き、ゆっくりと目を瞑った。・・・
ふぅ・・・

「へぇ～・・。すごいじゃないか。まさか萃香を倒すなんてさ。」
「あぁ。喧嘩だから手加減をしてくれたようだ。」

どうやら萃香は純粋に喧嘩を楽しんでいたようだ。まったく、こっちは精一杯だったというのに・・・
見ろ、すごく満足したような顔で寝ている。

「で、次は君か？」
「あぁ。そうだよ。」
「できれば少し休ませて欲しいのだが・・。」
「何言ってるのさ。早く戦わないと興が冷めちまうじゃないか。」
「はぁ・・。わかった。なら萃香を何処かに寝かせてからにしてくれ。」
「それもそうだねぇ。じゃ、あたしが寝かせてくるよ。」

勇儀はそう言いながら萃香を肩に担ぐ。そしてそのまま何処かに行ってしまった。
さすがに連戦はつらいなぁ・・・

第87話：小さな百鬼夜行（後書き）

そんな訳で萃香戦でした。ちなみに、萃香は喧嘩を楽しんでいたので手を抜いて戦っていました。

第８８話：怪力乱神（前書き）

そんな訳で次は勇儀です。

第８８話：怪力乱神

さて、勇儀が萃香を何処かに休ませに行っている今がチャンスだ。
作戦を練るとしよう。
はっきり言って、作戦なんて考える気はまったくない。小賢しい事なんてしたら鬼たちが切れて村を襲いかねない。
俺はそれでもいいのだが、この依頼を失敗で終わりにしたら後々めんどくさい事になりそうだ。さすがにそれは困る。
まぁいざとなったら腕輪を外すか。それでも勝てそうになかったらクックル化にでもなるさ。

・・そういえば最近クックルになってないなぁ。早く紫たちが強くなってくれれば俺も本気で戦えるようになるんだがな・・
そうだな・・・。紫や幽香、諏訪子といった奴らが全員で組めば、クックル状態の時でも楽しめそうだな。
そう言えば、今まで気付かなかったが他の鬼たちが全員いなくなっている。
俺が萃香と戦っている間に、勇儀がどこかに運んだのだろうか？
そんな事を考えていたら勇儀が手を振りながら帰って来た。・・・チッ・・。

「今舌打ちしなかったかい？」
「気のせいだ。で、萃香はもう休ませたんだな？」
「ん、もう大丈夫だろ。それより遅れてすまないね。」
「個人的には、そのまま帰ってこないでどこかに消えて欲しかったな。」
「・・・アンタは私が嫌いなのかい？」
「いや、別にお前は嫌いではない。ただ、鬼と喧嘩するのが嫌なだけだ。」

「ほぉ・・・。そいつはどうしてだい？」
「めんどくさいからだな。おもしろくもない『ごっこ遊び』に付き合いたくはない。」
「・・・・・・。」

俺がそう言った途端、勇儀の眉が「ピクッ」と動いた。まぁ、ここまで言われたら黙ってないだろう。
ちなみに、『ごっこ遊び』は本当に思ってる。俺は戦うのはそれなりに好きだが、お遊びはあまり好きではない。
まぁ、修行や特訓では『ごっこ遊び』だなんて思っていない。誰かを鍛えるのはそれなりに好きだしな。

「へぇ・・。お遊びね・・・。それじゃあ本当のお遊びでもするかい・・？」

勇儀はそう言うと自らの妖力を開放する。・・たぶんまだ本気じゃないな。それに中々の妖力だ。
鍛えればかなり行くんじゃないか？まぁ、今はそんな事どうでもいいな。
どうやらあちらさんは本気で切れそうらしい。そうではなくてはおもしろくない。
どれ、もう少し挑発してみるか・・

「・・鬼は野蛮だと聞いたが本当らしいな。この程度の事ですぐに切れる。」

俺がそう言ったら、勇儀のほうから「ブチッ」と何かが切れる音がした。
そして勇儀は先程よりも大きい妖力を放ち、殺気も出し始めた。さて、こんなもんか。

「・・覚悟は出来てるだろうね?鬼の誇りを侮辱した事を・・・」

勇儀はそう言いながら腰を低くし、拳を構える。そして呼吸を整え、俺の目を真っ直ぐと見た。その目は怒気を感じさせる。

「死んで後悔しな!!」

勇儀はそう叫びながら凄い速さでこちらに走ってきた。そして宙に跳び、俺目掛けて殴りかかる。

それを横にかわし、さらに勇儀に回し蹴りを放つ。しかし、俺の回し蹴りは勇儀の手によって掴まれる。

そして勇儀は俺の足を掴んだままグルグルと回転をし始めた。うっぷ・・・。気持ち悪い・・・。

俺が回転によって胃の中の物をリバースしそうになった時、不意に足をから手を放されてしまった。

そしてそのまま宙を真っ直ぐ飛んで近くの岩に頭から突っ込む俺。

これは効いた・・・。

岩の中に埋まってしまった頭を、何とか引っこ抜いく。そして髪についてる小石を手で払う。

「・・容赦がないな。一般市民にこんな事したら駄目だろう?」

「お前のどこをどうしたら一般市民になるんだい?」

そう言いながらも、勇儀の殺気と妖力はまったく消えない。むしろ先程よりも上ってる。

さて・・・

「そろそろコチラも行かせてもらおう。」

俺はそう言いながら霊力だけを出す。一応、旅人という『人間の』設定だからな。
さらに、懐からナイフを一本取り出し、いつも通りに逆手に持つ。
さて・・・

「これはよく切れるんだぞ?」
「なッ!?」

霊力を全て脚に込め、勇儀のところまで全力で走ってナイフを横に振るう。
しかし、勇儀はすんでのところで後ろに跳んで避けた。
・・まぁ、腕輪を外してない状態じゃこれが限界だろうな。

「・・よくかわせたな。」
「いや、さすがに焦ったよ。まさかあんなに速く走れるとはね。人間にしてはいい腕をしてるじゃないか。」
「俺に対して手を抜いてる奴が言っても、あまりいい気はしないな。」
「・・やっぱり気付いていたんだね・・・。」

勇儀め。俺が人間だと思って手を抜いて戦っていたな。だが・・・

「慢心は隙を生む。」

俺は先程と同じように勇儀のところまで走る。そして勇儀の前まで来ると、今度は
ナイフを振りかぶった。そのまま振り下ろすが、勇儀は先程と同じように後ろに跳んでかわそうとする。
かかった・・・。

「戦いは力だけじゃない。」

俺はそう言いながら勇儀に向かってナイフを投げる。振りかぶるというのは実に便利だ。
隙が出来るが、得物を即座に投げる事も出来る。
俺の投げたナイフは見事に勇儀の右足に命中した。俺はさらに勇儀に向かって走り、
目の前まで来たと同時に勇儀の顎にサマーソルトを入れた。

「ぐぁっ！」
「まだまだ終わらせんぞ。」

俺はさらに、勇儀の角を掴んで地面に叩き付ける。さらにもう一度角を掴んだまま
持ち上げ、先程俺が投げられたときに当った岩に投げ飛ばした。

「・・・なるほど。さすが鬼だな。まだまだ元気そうじゃないか。」

岩に叩き付けられた勇儀は、まだまだ余裕そうな顔をしながら立ち上がる。はぁ・・・

「ふふん♪まだまだこれからさ！」

そう言いながら勇儀が俺に突っ込んできた。・・・はぁ。

「ま、これでもいいだろう。」

俺はそう言いながら突っ込んできた勇儀の角を掴み、そこから大量の霊力と魔力を一気に流し込む。
さて、分かっているとは思うが。行き場の失くなったちからは中で

どんどん蓄積されるわけだ。
つまり・・・

「ドカーン・・ってな。」

俺がそういった途端、角を中心にして勇儀が爆発した。
そして仰向けに倒れ「ふにゅ～・・・。」と言いながら目をグルグルとさせて気絶してしまった。
・・使えるなこの技。
まぁ、本人が納得しなかった時は、「敗者は黙って勝者の言う事を聞け」とでも言っておこう。
そう思いながらも、勇儀が起きるまで待つ事にした・・・

第８８話：怪力乱神（後書き）

はい、終わりました。今回は、勇儀と戦わせてみました。
本当はもっと長くしたかったけど、時間がなかったのでこんな決着の付け方にしました。すいません。

第８９話：鬼たち全員＋凶鳥の宴会（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした！

第８９話：鬼たち全員＋凶鳥の宴会

気絶している勇儀をそのまま寝かせて置き、今後の事について考えていた。
まずはこいつ『星熊勇儀』だ。おそらく、起きた時に俺を殺そうとするかもしれないな。
なんたって自分たちの種族を侮辱されたんだからな。まぁ、ただの挑発だったんだけどな。
前にも述べたがお遊びの戦いはあまり好きじゃないんだ。相手を侮辱している気がする。
・・・はて？そうしたら普段力を抑えている俺はどうなるんだろうか？これって思いっきり相手を侮辱してないか？

「ん・・・く・・。」

そんな事を考えていると、勇儀が起き始めた。俺は勇儀の顔を覗き込むようにして見る。
すると、勇儀は少しずつ閉じていたまぶたを開いていく。

「おはよう。調子はどうだ？」
「・・・嫌な奴の顔を見たから最悪だよ。」
「少し傷ついたな・・・。」

そりゃお世辞にもいい顔とは思っていないさ。だがな、はっきり言われたら傷つくんだよ・・。
俺が暗い空気を出していると、勇儀が気まずそうに俺の肩を叩いた。
慰める位なら最初から最初から言わないでくれ・・・。

「二人とも何なやってるのさ？」

目の前にはいつの間にか起きたのか萃香か呆れたような目で俺と勇儀を見ていた。
相変わらず瓢箪は欠かせないようだ。

「・・萃香か。俺は改めて自分に自信を失くしたよ・・。」
「勇儀。壊に何があったのさ?」
「いや、まぁ、確かに嫌な奴とは言ったけどね?たぶん誤解してると思うよ?」

萃香と勇儀が俺の後ろに移動して何やら話し始めたが関係ないな。
まぁ、俺の顔の事についてはどうでもいいな。いや、よくないが今はどうでもいい。
取りあえず、さっさと都に戻って帝に報告しに行こう。
そう思い、俺は来た道を戻ろうとする。が、しかし、戻ろうとしたら何かが俺の服の裾
を引っ張った。萃香だった。

「・・・何か用か?」
「ねぇ、この後空いてるかい?」
「いや、あいてn「空いてるんだね?」・・・空いてる。」

空いてないと言おうとしたが何故か言ってはいけない気がしたので仕方なく空いてるといった。

「そうかい。じゃあさ・・・。」

「ほら～。壊も、もっと飲みなって～。」
「萃香、酒臭い。くっ付かないでくれ。」
なんか知らんが宴会に誘われてしまった。しかも、俺が倒した鬼たちも参加している。
あっちでもこっちでも酒を飲み比べたりしていてうるさい。
「ホラ、飲みなって！」
「・・萃香。君の持っている瓢箪の酒は強すぎるから遠慮しておく。」
本当に馬鹿みたいに度数が高い。６０くらいあったぞ？ちなみに、俺も一応は飲んでいる。
萃香のじゃなくて他の鬼の酒だがな。強さは大体４０くらいだろうか？
「お二人さん、飲んでるかい？」
「あ、勇儀。」

「あぁ。萃香は呑まれてるがな。」

勇儀か大きな杯を持って俺の横に座る。どうでもいいが、殆どの鬼は胡坐を掻いて座ってるんだな。

「しかしあれだね。まさか人間にやられとは思わなかったよ。」

「・・・そう言うのが敗北へと繋がるのだ。その内足元を救われるぞ。」

俺はそう言いながら杯に入った酒をクィッ、と飲む。・・・美味い。

「あっはっはっ！手厳しいねぇ！」

勇儀が笑いながら俺の背中をバシバシと叩く。いや、もはや「ドスドス」だ。

「痛いからやめろ。それと萃香。あまりくっ付かないでくれ。」

「にゃはは～！」

酔ってやがる・・。萃香はニコニコとしながらも俺の膝の上に座った。角が当たる・・・

そう言えば諏訪子も酔ったらやってたな。・・・懐かしい。

「？なんか私の顔についてる？」

「いや、君を見たら友人を思い出してな。」

「壊の友人ねぇ・・・。どんな奴？」

「そうだな・・・。見た目は子供だ。ただ、中身はもう１０００歳を超えている神だ。」

「とんでもない友人だね。」

「俺は気に入っているがな。」

そう言いながら勇儀に酌してもらい、再び酒を飲む。・・・ん？

「勇儀・・・。この酒は萃香のじゃないか？」

「美味いかい？」

「君は俺を殺す気なのか？」

喉と舌がヒリヒリする。しかも、当の酒の持ち主はいつの間にか寝ている。

勘弁してくれ・・。

「勇儀、萃香をどこかへ寝かせてやってくる。これじゃあ酒が飲みずらい。」

「ん。はいよ。ほら萃香。離れな。」

そう言いながら勇儀がグイグイと萃香を引っ張る。しかし、萃香は俺の服を掴んだまま離さない。

仕方ないので俺も萃香の手を服から引き離そうとするが、まったく放す素振りを見せない。

というか、先程よりも強く握り締めている。

「勇儀、もういい。このまま飲む。」

「・・そうだね。そうしたほうがいいと思うよ。」

勇儀は苦笑をしながら再び杯の酒を飲む。よくもまぁ酔わないものだ。

周りの鬼たちは、すでに眠っている。何人かはいびきを掻いていた。

「壊、鬼は嘘が嫌いだ。だからあたしが質問する事に正直に答えておくれよ？」

「・・質問の内容にもよるな。」
「そうかい。じゃあ聞くけど、あんた人間じゃないだろう？」
「・・・そうだな。もうとっくの昔に人間はやめてしまったよ。」
「そうかい・・。」
俺が答えると、勇儀は満足そうに微笑み、再び酒を飲んだ。
俺もそれに続いて酒を飲む。

ーーーSide勇儀ーーー

やはり壊は人ではなかった。それが普通だ。しかし、壊が正直に話してくれて嬉しいと思った。
最初は鬼の誇りを侮辱する最低な奴だと思っていたけれども、萃香が宴会を開こうといった時はめんどくさそうな顔はしていたが断らなかった。
そして宴会が始まると、少しだけ楽しそうな目をしていた。
本当に嫌な奴ならここまで嬉しそうな、そして楽しそうな目はしないだろう。
それに、やっぱり話して見るとそれなりに楽しかった。案外いいやつなのかもしれない・・

第８９話：鬼たち全員＋凶鳥の宴会（後書き）

そんな訳で終わりました。次はどうしようかな・・。

第９０話：復帰と新たな依頼

結局萃香たちの所で一日世話になってしまった。俺は起きた後すぐに都へ行って帝に今回の依頼の報告をしようと思ったが、何故か萃香が「行ったら駄目～！！」と俺を上目遣いで見ながら止めた。
それを見た勇儀と他の鬼たちは呆れたように萃香を見ている。

「萃香、いい加減に手を離してくれ。さっさと家に帰りたい。」
「もう少しここに居てってば！」
「いい加減にしな！」

痺れを切らした勇儀が萃香の頭に拳骨を入れる。いやぁ、それは痛いぞ？
だって地面に頭が刺さってるじゃん。もう一度言っておこう、頭が刺さっている。

「・・わかった。さすがにここに残る訳にはいかないが、俺の家の場所を教えておく。
暇な時は遊びに来てもいいからそれで勘弁してくれ。」
「わかった。ほら萃香も。いつまで寝てるんだい。」

勇儀、萃香は寝てるんじゃない。気絶しているんだ。そう思いながらも、勇儀に家の場所を伝える。
まずい・・。早く帰らなければ死んだ事にされて、報酬が払われないかもしれん！
俺は霊力を足に込め、全速力で走る。さて、早く帰ろう・・・・

ーーーSide萃香ーーーー

壊が帰ると言うので、必死になってそれを止める。自分でもどうしてここまで
するのかわからないけど、何となく行って欲しくなかった。だから
腕を引っ張って止めようとした。

「萃香、いい加減に手を離してくれ。さっさと家に帰りたい。」
「もう少しここに居てってば！」

私はそう言いながら壊の腕をさらに強く引っ張る。絶対に帰さない・・！

「いい加減にしな！」

勇儀の声が聞こえた途端、私の視界が真っ暗になった。え？
息が出来ない。ちょ！勇儀！壊！助けて！
声に出そうにも声が出ない。え？どうなってるの？
そう思っていたら私は息が苦しくなり、気を失った・・・・

ーーーSide壊ーーーー

「やっと・・着いた・・。」

都の入り口の前で足に手を置き、肩で息をしている俺。ぶっ通しで走ったから疲れた。

・・ちなみに、何故ゲートを使わなかったかと言うと、行く時に歩いた方が面白いと思って家に置いて来たから。

取りあえず、顔に巻いた布を外す。勇儀たちと宴会をしている時も着けていた。

酒を飲むときは口に巻いた布を少し緩めていた。正直、飲みづらかった。何で外さなかったんだろうか・・。

そう思いながらも、俺は帝の所へ向かった・・・・

「ふむ、それは真か？」

「・・あぁ、問題ない。鬼たちは村に手を出す事はないだろう。」

言わずもがな帝に今回の依頼の報告をしている。ちなみに、状況は前と同じで、

俺と帝の横に陰陽師がズラリと並んでいる。それと今回は兵士も混じっているようだ。

「ご苦労。今回の報酬を払っておくぞ。誰かこの者に用意した報酬を持って来い！」

帝がそう言うと、従者のような女が俺に何かが入った袋を手渡す。

中身を見てみると、

入っていたのはそれなりの量の金だった。まぁ普通だな。

「さて、もう行かせて貰う。」
「ん？もう行くのか？」
「あぁ、夕飯の食材を買っていないからな。」
「そうか。ではな。」

何だろうか。周りの視線から「帝に失礼な口を・・！」みたいなのが混じってる気がする。
まぁ、気にしないのが一番だな。そう思い、立ち上がろうとすると・・・

「そうだ。言い忘れておった。」
「・・・なんだ？」

立ち上がろうとしたら帝が思い出したようにそう言うので再び座り直す。

「明日に陰陽師たちで森周辺の妖怪をある程度掃除する仕事があるから貴公もやってくれ。」
「・・ちなみに何人だ？」
「うむ、貴公を入れれば二人だ。」

いやそれじゃ「陰陽師たち」って言わないぞ？そもそも、何で俺なんだ？

「・・まぁいい。その依頼受けよう。もちろん、報酬は用意してもらうぞ。」
「わかっておるわい。もう帰ってもいいぞ。」

・・・何か腹が立つな。そう思いながらも、帝の住んでいる宮中っぽい場所から出る。

今日の夕飯は何にしようかな・・・

「で、なぜ君が居るんだ?紫」

何故か紫が我が家の卓袱台でお茶を飲んでまったりしていた。

「あら、帰ってきたのね。」

「そんな事はどうでもいい。もう一度聞くが、何故お前がここにいるんだ?」

「・・暇だったからかしら?」

「帰れ。」

「冗談よ。幽々子の件で来たの。」

「・・言って置くが、明日は会いに行けないぞ。仕事がある。明後日なら空いているからその時に来てくれ。」

「仕方ないわね。そう伝えておくわ。」

「あぁ、頼む。それよりどうする。ここで食べて行くか？」
「そうね。お願いできるかしら？」
「わかった。」

俺はそう言いながら厨房に進む。ちなみに、絶は休ませている。さて、作るか・・・

ちなみに、紫は俺の家で泊まる事になった。

第９０話：復帰と新たな依頼（後書き）

そんな訳で終わりました。次回はどうしようか・・

第９１話：最強の陰陽師（前書き）

壊じゃないですよ？

第９１話：最強の陰陽師

今日は森の周辺の妖怪をある程度駆除する日だ。まぁ、この辺の妖怪は大して強くないから問題はないな。
ただ、今日来る陰陽師が弱かったら俺はその陰陽師を守りながら戦わなくてはいかんな。
もしそうなったら色々とめんどくさいな。いざとなったら見殺しにしてしまおうか・・・。
そう思いながら朝食の味噌汁を飲む。啜るじゃなくて飲むだ。

「随分とむずかしそうな顔をしてるわね。何を考えているのかしら？」
「・・今日の仕事についてだ。」
「どんな仕事？」
「この辺の妖怪を駆除する仕事だ。ちなみに、俺ともう一人の陰陽師の二人でやる。」
「・・たったの二人だけ？」
「あぁ、二人だけだ。まぁ、別に全ての妖怪を駆除するわけじゃない。ある程度でいいらしい。」
「ふ～ん・・。ご馳走様。」

いつの間にか食べ終わっていた紫。それにしても紫は結構食べるな。
紫に続いて俺も食べ終わる。そして使った皿を片付けて再び戻って座る。
しばらくの間茶を啜っていたが、いい加減に行ったほうがいい思い立ち上がる。

「あら、もう行くの？」
「あぁ。そろそろ行かないと仕事に遅れそうだからな。

それと、家に有る物は自由に使っていいぞ。
腹が減ったら絶を呼べば何か作ってくれるだろう。ただし、あまり扱き使うなよ。」

俺は紫にそう言い引き戸まで歩く。紫の事だから絶を扱き使うんだろうな・・・。
そう思いながらも家を出た・・・・

目的地に着いたが、どうやらもう一人の陰陽師は来ていないらしい。
仕方がないので近くの木に登って枝に座る。
ちゃんと折れないガッシリしたやつに座っているからな？枝に座りながら木本体にもたれ掛かる。
楽でいいな・・。そんな事を思っていると、小鳥がパタパタと俺のところまで飛んできた。
そして俺の頭の上に乗っかった。

「羽休めなら好きなだけして行け。」

俺はそう言いながら頭の上に乗っている小鳥をすこしだけ撫でる。
そして撫でるのをやめて
ボ～っとしていると、誰かが歩く足音が聞こえ、やがて止まった。・・来たか？
そう思い、木の上から下を見下ろす。そこにはいかにも「陰陽師で

す」といった感じの格好をしている男がいた。
年は大体15か16くらいだろうか?髪は長く、腰まで伸びている。
体は少し細いな。
俺は木の上から男の前に飛び降りる。

「・・驚かせないでくれるかのぉ・・。」
「それは失礼したな。で、君が今回俺と組む陰陽師だな?」
「うむ。その通りじゃ。」

・・若いのに爺のような話し方だな。それにしても、木の上からはわからなかったが随分と整った顔立ちをしている。
こう言うのは美少年と言うのだろうな。美少女と言っても通じるんじゃないか?俺にはよく分からんがな。
背は・・紫と同じくらいか、それより少し小さいくらいだな。ただ、頭に被っている鳥帽子で背が高く見える。
鳥帽子も入れると、背は俺の首あたりまであるな。今更ながら自分の背がどれほど高いかわかる。
前の世界でも高かったからなぁ・・・。

「お主、どうかしたのか?」
「いや・・。なんでもない。自己紹介といこう。俺は紅鎖華壊だ。」
「知っておる。お主は都でも有名な陰陽師じゃからのう。」
「・・・俺はそこまで有名になった覚えはないが?」

いつの間に有名になったんだ。大体、俺は滅多に依頼を請けない。
今回は帝の依頼で
渋々と言った感じで請けているが、本来は週に2回か3回請ける程度だ。
理由は簡単、めんどくさいから。

「まぁいいさ。君の名前はなんだ？」
「我か？我は安部晴明（あべのせいめい）じゃ。」

・・安部晴明・・・。どこかで聞いたような・・・。

「・・あぁ、都で最強と言われている陰陽師か。」
「今更気づいたのか。お主中々鈍いようじゃのう。」

そう言えば霊力が随分と大きいな。まったく気付かなかった。最近感覚がおかしくなってきたようだ。
とりあえず・・・

「さっさと仕事を終わらせるぞ。」
「うむ。」

そう言いながら俺たちは二手に分かれて歩き出す。さて、妖怪駆除だ・・・

「ヒッ・・・！グギャア！？」
「これも仕事だ。悪く思わないでくれ。」

残り一匹になった妖怪の首を思いっきり引っこ抜く。すると妖怪の身体と首はお別れをした。

「えげつないのう・・。」
「・・・君か。そちらは終わったのか?」

俺は妖怪の首をその辺に放り投げて晴明に向かって歩く。

「うむ、終わったぞ。それにして派手にやったようじゃのお。」
「いつもこんな感じだ。それよりも、もう帰るぞ。」
「少し待ってくれんかの?まだ一匹残っておるのじゃ。」
「なら早く行って来い。」
「うむ。」

晴明はそう言いながら懐から札を出す。そして何かぶつぶつと唱え始めた。
唱え終わると俺の顔を見て静かに微笑み、持っている札を投げつけて来た。
それを指で挟んで受け止める。

「・・何のつもりだ?」
「我が気付かぬとでも思ったか?お主、人ではないじゃろう?」

晴明はそう言いながら今度は右手を横に振るった。すると俺の方に向かって
大量の霊力の弾が飛んできたので、それを手で払いながらかわす。
威力は中々だな。

「・・・驚いたな。今まで見破られた事は殆どないのだが・・。い

つから気付いていた？」
「始めからじゃ。」
・・・これは厄介な事になったな・・・・・

第９１話：最強の陰陽師（後書き）

はい、終わりました。というか更新遅れて申し訳ありません。
次は戦闘シーンがあります。

第９２話：最強の陰陽師との戦い（前書き）

晴明さん強いよ。

第９２話：最強の陰陽師との戦い

晴明の攻撃を避けながら、霊力弾などを撃つ。相手も本気ではないようだが、あの霊力は反則だ。
晴明の近くにある木が霊力を浴びただけでミシミシと音を発てて倒れている。

「自然破壊は感心しないな。」
「人外を退治するためじゃ。これくらいは仕方がない。」

そう言う思考が人を駄目にしていくんだぞ？わかっているのか。

「ほれ！」
「ぐっ・・！」

くだらない事を考えていたら晴明の霊力弾が腹のど真ん中に命中した。・・痛い・・。
一瞬息が出来なくなったが、何とか元にもどす。

「殺す気なのか？」
「当然じゃろ？」

笑顔で言いやがって・・。俺は足に霊力を徹底的に集める。
そしてそのまま晴明に向かって走った。
そのまま先程のお返しとして晴明の腹を殴る。
何かが割れる音はしたが晴明にダメージはないようだ。

「結界か・・。」
「正解。」

晴明はそう言いながら右手の人差し指と中指をくっ付けて俺に向ける。
そしてそこから霊力の弾が飛び出してきた。隙を見せていた俺は為すすべなく食らって、
後ろに吹き飛んだ。そのまま木に背中を打ちつける。・・痛い・・

「う・・ぐっ・・！・・容赦がないな・・。そちらがその気なら・・。」

俺は能力で地面に潜る。そしてそのまま晴明の真下まで移動する。
そして一気に上に飛び出す。
晴明は俺が下から出てきた事を驚いているようだ。
俺は驚いている晴明の右腕を掴み、そのまま地面に叩きつける。
そして晴明に向けて三つの力で作った弾を大量に撃った。
しばらくしてから撃つのをやめ、霊力弾などのせいで出ている煙が晴れるのを待つ。どうだ・・？

「痛いのぉ～・・。」
「・・・俺より君の方が人外じゃないのか？」

煙が晴れて起き上がった晴明は服をパンパンと叩く。服には焦げ目すらついていない。
非道いと思わないか？

「少し、お主を甘く見ておったようじゃ。どれ、久しぶりに本気でも出すかのお。」

晴明はそう言いながら霊力を出す。その霊力は、間違いなく紫やルーミアを超える量だ。

「・・ククク・・・。」

自然と笑ってしまう俺が居る。前に幽香に、俺は戦っている時に狂ったように笑う事があると聞いた事がある。

（※詳しくは『第６７話：力の差』を見てください。）

その時は何故か記憶が失くなっていてわからなかったが、今なら自分が笑っているのが分かる。

まぁ、たぶん晴明には聞こえてないだろうな。俺の笑い声は。

改めて晴明の方を見ようとしたら、いつの間にか目の前に晴明がいた。そして晴明は

右腕を横に振るう。すると、俺は横に吹っ飛んだ。霊力で腕を強化したな・・？

そのまま再び木に背中を打ちつける。あぁ・・痛い・・・。

ｌｌｌＳｉｄｅ晴明ｌｌｌ

少し、やりすぎたかもしれんのぅ。男は木に背中を打ち付けてズルズルと地面に落ちる。

久しぶりに強敵に会ったから、張り切りすぎた。

「・・ククク・・。」

「・・・打ち所でも悪かったのか？」

男が急に笑い出した。そして男は俯いたまま立ち上がった。

「いやいや・・。打ち所はそこまで悪くないさ。ただ、まさか紫やルーミア以外に、

しかも人間でここまで強い奴がいるとは思わなくてなぁ・・。これなら・・」

男はそう言いながら俯いたまま右腕を見せる。右腕の手首には銀の腕輪が着いていた。
そして男はその腕輪を外した。

「少しくらい本気を出しても構わんよなぁ!?」

男がそう言った途端、大量の力があふれ出す。
霊力、妖力、それとよくわからない力、確か魔力と言ったな。
それが重りのように上に圧し掛かる。いや、実際はそんな事はない。
そう感じているだけだ。
こちらも負けじとさらに霊力を放出する。

「・・素晴らしい霊力だ。まだ上るんだな・・。」
「お主もな。」
「ククク・・」

男が笑いながらゆっくりと顔を上げる。やがて男の顔がはっきりと見えた。
その顔を見た時、恐怖した。三日月のような口で笑い、紅い目を見開き、
瞳孔を全開にしているどこか歪んだ笑み。

「・・まさに化け物じゃな・・。」
「ククク・・・。俺にとっては褒め言葉だな。」

男は楽しそうに笑いながら右手を上に振り上げる。そしてそれを一気に振り下ろした。

すると真っ直ぐこちらに向かって妖力の刃が飛んできた。瞬時に結界を作り、それを防ぐ。

「なっ！？」

妖力の刃が結界に当った瞬間、結界が砕け散った。何とかその場から横に飛んで
刃をかわす。

「まさかアレをかわすとはな・・。ククク・・。」

「お主、本当に化け物じゃな。こんなに焦ったのは久しぶりじゃ。」

額から汗が流れているのが分かる。間違いなくあの男は強い。

「そろそろ行くぞ？」

男がそう言ったのが聞こえた時には男はすでに前に立っていた。こちらを見下ろすように
笑いながら。男は先程こちらがやったように右腕を横に振るった。
それだけで吹き飛んでしまった。
しかも、あれは何の力も感じられなかったので、おそらく純粋に力だけの技だ。
何とか地面に足をつけ、その場に踏み止まる。そして再び男を見るが、男はすでにいなくなっていた。
・・消えた・・？

「・・油断は命取りになるぞ・・？」

後ろから声が聞こえたので振り向くと、そこには腕を組みながら
こちらを見下ろしている男が居た。男は拳を作り、振り下ろしたが

それを横に飛んでかわす。
そして札を男に投げつける。ありったけの霊力を込めた札だ。

「ぬ・・ぐっ・・！」

札に当った男は後ろに後退する。そして札を掴み、握りつぶす。

「・・く・・クッハッハッ！この状態の俺に攻撃を入れる奴なんて久しぶりだ！
さぁ始めよう！舞台をすでに整っているのだからなぁ！！」

男はそう言いながらこちらに向かって走ってくる。しかし、負けるわけにはいかない。
男の攻撃に備えて今度は印を組みながら結界を張る。先程とは比べ物にならないほどの堅さだ。
結界まで来た男は、先程と同じように拳を振り上げてそのまま結界に向けて振り下ろす。
しかし、結界にはひびすらも入らなかった。男はそれを楽しそうに見ると、再び結界を殴った。
先程と違い、何発も、両手で、しかも見えない速さで結界を殴りつける。

「ッ・・！」

とうとう結界にひびが入った。男はさらに笑うと、右手を思いっきり振り下ろす。
すると結界は粉々に砕け散ってしまった。男が攻撃をしてくる前に印を組み、
炎の陰陽術で攻撃する。男はそれを左手で防いだ。そのまま左手で掴み掛かろうとするが・・

「残念。すでに準備は出来ておる。」

男が炎を防いだ時にはすでに印は組み終わっていた。両手を前に出し、
そして霊力を集める。すると、星が円に囲まれたような形の術が前に出てくる。
男はそれを見てもなお掴み掛かろうとしたが、こちらもそれを許すほど優しくはない。
そのまま術を発動させる。術は男に向かって進み、やがて男を縛るようにして包む。
急いでいたので少し雑になってしまったが、これでも威力は充分だ。
さらに、新しく印を組む。すると今度は周りに六芒星が浮かび上がり、男に向けて
光線を放つ。今の自分の全てを注ぎ込んで作った術だ。
男は動けずにそのまま光線に当たり、後ろに吹き飛んだ。そしてそのまま動かなくなった。
終わったのか・・?そう思っていたら、男がゆっくりと起き上がった。

「・・・ククク・・、ヒハハハハッ!」

男は両腕を少し広げて空を見るように上を向きながら笑い出した。

「素晴らしい威力だ!この破壊力!そしてこの霊力!こちらもそれ相応の反撃をさせて貰おう!」

男はそう言いながら右手を前に出す。すると、その右手に霊力やら妖力などの力が集まりだした。
それを見ていると、男がこちらの顔を見ながら再び三日月のような

口で笑い出す。

「これぞ破壊する力!!」

男がそう叫ぶと、男の右手から赤黒い巨大な光線が放たれる。急いで印を組み、詠唱をし、結界を作り上げる。さらに結界の内側から札を貼り強化する。さぁ、来い・・・!

そう思いながら男の光線が来るのを待ち受ける。そして光線が結界に当った。

しかし、当った途端、結界は砕けた。やがて赤黒い光線にこの身が飲み込まれる。

あぁ、ここで死ぬのか・・・

第９２話：最強の陰陽師との戦い（後書き）

終わりました。一応、晴明は紫たちよりも強いです。
強さ的に言うと壊が腕輪を外して全力を出した時
よりちょっと弱いくらい強いです。

第９３話：終わった戦いとその後（前書き）

今回は戦闘シーンなし。そして更新が遅れました。すいません。

第９３話：終わった戦いとその後

ーーーSide三人称ーーーー

薙ぎ倒された木々の中心。そこには一人の陰陽師と男が居た。陰陽師は仰向けに倒れて
気絶しており、男は倒れている陰陽師を見て楽しそうに笑みを浮かべている。

「ククク・・・。久しぶりに楽しい戦いだったな・・。」

男は楽しそうに笑う。しかし、その笑い声はどこか不気味であった。
しばらく男が笑っていると、「パキ」と木の枝を折るような音が聞こえた。

「・・誰だ?」

男は音のした方に声を掛ける。すると倒れていない木の後ろから一匹の妖怪が現れた。
いや、一匹ではない。５匹いた。恐らく、先程の陰陽師との戦いで、男の服に付着した血の臭いを嗅いに誘われてきたのだろう。妖怪の容姿は狼のような感じだ。

「グルルゥ・・・!」

狼のような妖怪の内一匹が威嚇するように唸り声を上げた。すると、それにつられて他の
妖怪たちも男に対して唸り声を上げた。

「ククク・・丁度いい、まだ少し戦いたかったんだ・・。」

男が笑いながらそう言うと、妖怪たちはさらに唸り声を上げた。
恐らく本能で分かっているのだろう。コイツは危険だと。近寄ってはいけなかったんだと。
男は両手をやや下にしながら少しだけ広げて妖怪たちに近づいて行く。

「・・俺の渇きを癒してくれよ？」

男がそう言った途端、辺りに赤い液体が飛び散った・・・

ーーーSide晴明ーーーー

「・・ん・・・。・・ここは・・？」

目が覚めると知らない部屋で布団に寝かされていた。

「・・起きたか。」
「！？・・お主・・・。」

部屋の襖が開けられて男・・壊が入ってきた。

「調子はどうだ?」
「・・何故助けた・・?」
「・・俺に助けられた奴は皆そう聞くな。流行っているのか?」
「流行っておらん。」
「そうか・・・。まぁそんな事はどうでもいい。何故助けたかだったな?
お前ほど才能がある者を、あのまま見殺しにするのがおしかった。
ただそれだけだ。」
「・・本当にそれだけかなのか?」
「・・・後は・・・、君が俺の退屈しのぎになりそうだったからだな。
俺は結構長く生きている。今までは戦いで暇を潰していたんだ。しかしな、
長く生きれば生きるほど強くなると同時に周りを弱く感じてしまうんだ。
君は強い。恐らく、これからもまだまだ強くなるだろう。君が強くなればなるほど、
俺は強い君と戦う事が出来る。」
「・・つまりは自分のためなんじゃな?」
「その通りだ。まぁ、化け物の言う事なんて信じなくてもいいぞ。」
「・・いや、信じよう。お主の目を見ていると、嘘をついているようには見えんからのぉ。」
「そうか。ありがとう。とりあえず・・・。」

壊はそう言いながら自分の後ろに手を回した。そして目の前に鍋を置いた。

「・・どこから出したのじゃ・・。」
「気にするな。消化にいい様にお粥を作った。食え。」

壊はそう言いながら、また何処から出したのか碗を出し、鍋の蓋を開けて
碗にお粥を入れる。そしてそれを我の差し出したそれを受け取り、とりあえず口に含む。

「・・旨い。」
「そうか、それはよかった。その傷で帰るのは無理だろうから今日は泊まっていけ。」
「ならばそうさせてもらおう。よろしく頼む。」

そう言いながらも、お粥を口に運ぶ。旨いのぉ・・

ーーーSide壊ーーー

晴明が寝たので、縁側で一人で月を見ながら酒を飲む。本当に、今日は楽しい日だった。
転生する前は楽しいという事がいまいちよくわからなかったが、今ならそれが何となくわかる。
例えばこうやって一人で酒を飲むのも、ある意味俺にとっては楽しい。
そう思いながら、再び酒に口をつける。・・美味い。さてと・・

「君も飲まないか?紫。」
「そうね。一杯頂こうかしら。」

紫がスキマを開き、俺の横から「ニュッ」と出てきた。相変わらずだな・・。

「はい、これに入れてくれるかしら?」

「わかった。」

紫がスキマから取り出した杯をこちらに差し出すので、それに酒を注ぐ。

そして紫は注がれた酒を一気に飲み干す。

「それにしても、まさか貴方の家に他の陰陽師がいるとは思わなかったわ。」

「・・都でも最強とまで言われてる陰陽師だ。」

「あら、本当?それなら私が確かめに行こうかしら。」

「行って来い。そして死んで来い。今の君じゃ間違いなく勝てないさ。俺でも梃子摺ったからな。」

俺はそう言いながら酒を飲む。

「貴方でも梃子摺ったりするのね。」

「当たり前だ。まぁ、本気にはなっていないがな。」

「・・壊、貴方って本当に何なのかしらね?」

「・・さぁな。案外、一般市民なのかもしれないぞ?」

「それはないと思うわ。」

「非道いな。」

俺と紫はそんな感じでふざけ合いながらも、夜の酒を楽しんだ・・・

・

第９３話：終わった戦いとその後（後書き）

はい、終わりました。次回は誰を出そうか迷ってます。

第９４話：久しぶりの幽々子（前書き）

今回はタイトル通り幽々子が出ます。

第９４話：久しぶりの幽々子

俺は今、晴明と朝食を取っている。晴明の怪我は俺が思っていたよりも重症だったらしい。
自分のせいでここまで怪我をさせてしまったのだから、せめて怪我が治ってから家に帰らせる事にした。
本人も承知の上だ。

「・・これも美味いのう・・。」

晴明はそう感心しながらが俺の作った肉じゃがを箸で突いている。
まぁ、気に入ってくれたなら嬉しいな。俺はそう思いながら今さっきおかわりした味噌汁を啜る。
そんな感じで俺たちは朝食を終えた。俺は皿を洗い、出かける仕度をする。
仕度と言っても、いつもと同じような服を着て、召喚石（ゲートなどが封じられている石）を２つほど持っていくだけだ。全部持っていく必要もないしな。
ちなみに、今回はナイアとニオ（山羊の骨見たいな奴）にした。
ニオの名前の由来は山羊座をスペイン語にしたカプリコル二オの後ろの二文字を取った。
センスが無かろうが知った事か。

「何処へ行くのじゃ？」
「・・少し、用事があってな。今日は遅くなるかもしれん。わからない事があったら絶に聞け。」
「・・絶？」

「そういえば言ってなかったな。絶は俺の式だ。絶、来い。」

俺がそう言うと、どこからともなく絶がふよふよと浮かんできた。
少し驚いている晴明のことを説明し、後は絶に任せる事にした。そして家を出る。
そのまま森の奥を進んで目的地まで歩く。さて、来ているといいが・・・

ある程度進むと目的の人物を見つけたので止まる。そして声を掛けた。

「紫、来たぞ。」
「遅かったわね。」

そう、紫だ。今日は紫と幽々子の家に行く。約束してしまったから、断ろうにも断れない。

「・・まぁいいわ。行きましょう。」

紫はそう言いながらスキマを開いた。相変わらず中は不気味だな・・・。

開いたスキマに紫が入っていくので俺もその後に続いてスキマの中に入る。
そしてそのまま紫の後を付いていくようにスキマの中を進む。
相変わらず無気力のような目がそこら辺から浮かんでいる。気味が悪いな・・。

「着いたわ。」
「ん、そうか。なら早く行こう。」

くだらない事を考えていたらいつの間にか着いていたようだ。俺は紫よりも先に
スキマから出る。出た先は門の前ではなく、あの桜の木の前だった。
俺の後に続いて紫がスキマから出てスキマを閉じる。不気味なのに便利な能力なんだよな・・。

「ほら、早く幽々子に会いに行きましょう?」
「・・あぁ、先に行っていてくれ。すぐに行く。」

俺がそう言うと、紫は「それなら早く来るのよ?」と言って幽々子が居るであろう
縁側の所まで歩いていった。俺はそれを見た後、再び桜の木を見る。
そして桜の木に触れる。

「・・ずいぶんと『妖気』が強くなったじゃないか・・。
だが、まだ足りない・・何かが欠けている・・。ククク・・満開になった時が楽しみだ・・。」

俺は桜の木から手を離し、紫が歩いた方向へと進む。さて、二人は何をしているかな・・

幽々子と紫は前と同じように縁側で楽しそうに喋っていた。俺は二人に近づいて話しかける。

「すまない、遅れた。」
「あ、壊。久しぶりね。」
「やっと来たのね・・・。」

幽々子が嬉しそうに俺に近づく。そして俺の背中を押すと紫の隣に座らせた。
俺を押した幽々子は俺の横に座る。・・コレも前と同じだな。
何故か満足したような顔をしている幽々子。そして再び紫と話を始めた。
いやいや、何のために俺をここに座らせたんだ?
俺はそう思いながらも、いつの間にか横に置いてあった茶を飲みながら
黙って二人の会話を聞く。・・暇だな。

「壊、貴方も幽々子と何か話したらどうなの?」
「・・まぁ、いいがな。幽々子、何か話したいことはあるか?」
「え?えっと・・・じゃあ・・、壊の昔話を聞きたいわ。」
「・・聞いても面白くないとは思うがな・・。」
「幽々子が聞きたがってるのだから少しは話してあげたら?」
「・・・わかった。」

まぁ、目を輝かせながらこちらを見ている幽々子の頼みを断ったら紫から妖力弾が飛んできそうだしな。ここでは暴れたくないから話すだけ話してみよう。
まずは何の話をしようかな・・・・

「へぇ～・・。紫が子供に・・。」
「私は覚えていないわよ？」

俺は今、紫が小さくなった時の話しをしている。まさかああなるとは思わなかった・・。
（※詳しくは第４７話：ダークマターの恐ろしさをご覧下さい。）

「さて、もう今日はこれで終わりだ。おもしろかったか？」
「えぇ。外のことも少し分かったから私は満足よ。」
「中々おもしろかったわ。」

二人とも満足のようだ。よかったよかった。
そう思いながら、もう冷めてしまった茶の入ってる湯呑みに手を伸ばす。
そして湯呑みを掴んで茶を飲む。・・・冷めても美味い。

そんな感じで茶を楽しんでいると、庭の方から妖忌が俺に近づいてきた。

「壊、すまないが少しわしと試合をしてくれんか？」

「・・・めんどくさいな。そもそも何故俺なんだ？」

「前に紫殿にお前が強いと聞いたのだが・・。」

「紫、余計な事を言うんじゃない。」

「あら、別にいいじゃないの。貴方だって殆どが暇なんだから。」

扇子を取り出し、それで口元を隠しながらクスクスと笑う紫。

何となく腹が立ったので頭を軽く叩いてやった。・・試合・・・ね。

「・・まぁいいさ。ただし、一回だけだぞ？」

「充分だ。」

そう言いながら縁側から離れる妖忌。俺も妖忌の後に続いて縁側から離れる。

そしてある程度は離れると、お互い距離をとって向かい合うように立つ。

妖忌は腰に掛けてあった二本の内長いほうの刀を抜き、それを構えた。俺は能力で

刀を創り、いつもと同じように逆手に構えた。

「・・この楼観剣（ろうかんけん）は一振りで幽霊１０匹分の殺傷力を持つ。」

そう言いながら妖忌は刀を強く握った。幽霊１０匹分って、どれくらいの強さだ？

はっきり言って大したことはなさそうなのだが・・・。

「・・魂魄妖忌、参る！」

くだらない事を考えていたら妖忌がこちらに向かって走ってきた。
そして刀を
横に振るう。俺はそれを逆手に持ったままの刀で防ぐ。・・結構重いな。
妖忌はそのまま刀をずらし、斜めに向かって切ってきた。それを後ろに飛んでかわす。
そしてそのまま妖忌に向かって走り、逆手に持った刀で切りかかる。
しかし、その一撃を妖忌は防いだ。まぁ、これくらいは出来なくてはな。
俺は刀を防がれている状態でわき腹目掛けて回し蹴りを放った。
すると妖忌はその一撃を防ぎきれずにあたり、そのまま横に吹き飛ぶ。
俺は妖忌の刀を弾き、逆手に持った刀を普通に持って刃先を妖忌の首に突きつける。

「・・お見事。わしの負けだ・・。」

妖忌がそう言うので、俺は刀を消す。そして落ちていた妖忌の楼観剣を拾い上げ、返す。
さて・・・

「紫、そろそろ帰るぞ。」
「・・そうね。帰りましょうか。」

いつの間にか近くにいた紫にそう言う。そして紫はスキマを開き、その中に入る。

「妖忌。幽々子に『また来る』と伝えておいてくれ。」
「わかった。」

俺は妖忌にそう言うと、スキマの中に入る。そして紫は最後に「あの子の事、よろしくね。」
と妖忌に言い、スキマを閉じた。
紫はスキマを閉じると、そのまま歩き出す。俺もそれに続く。さて、早く帰ろう・・

紫のスキマから出て、家の前に出る。・・そうだ・・。

「おい、紫。しばらくこれ貸してやる。持っていろ。」
「・・何かしら、これは？」
「・・お守りだ。何かあったらきっと助けてくれる。」
「そう、ありがたく貰っていくわ。じゃあ、また会いましょう。」

紫はそう言いながらスキマに潜った。さて、俺も早く家に入ろう・・

第９４話：久しぶりの幽々子（後書き）

はい、終わりました。最近忙しくて更新する時間があんまり無い・・。

第９５話：狐（前書き）

狐と言ったらあの人でしょ

第９５話：狐

晴明が家に泊まってから1週間経った。怪我はもう殆ど治っていたので、
これからどうするか聞いてみたところ、もう屋敷に帰ると言っていた。
別に反対する理由も無かった。ここに晴明を泊めていたのだって怪我を治療するためだった。
まぁ、そんな訳で今日は晴明が自分の屋敷に帰る日なんだ。
で、俺は晴明を屋敷まで見送りに行く事になってしまったのだ。めんどくさい・・。
ちなみに、すでに靴を履き終わっていて、これから家を出るところだ。

「・・準備はいいな？」
「うむ、問題ない。」
「そうか。ならもう行くぞ。」

そう言い、俺たちは家を出る。さて、とっとと送るか・・・

屋敷に着くまで、晴明は楽しそうに俺に話し掛けていた。
都に入ると、何人かが「晴明様が帰ってきたぞー！！」と騒いでいたな。騒いでいた奴らに晴明は笑いかけていたが、どこか無理をしている感じがした。まぁ、そんな事がありながらも晴明の屋敷に着いた。
大きさは輝夜がいたあの時の屋敷と同じくらいの大きさだった。つまりはデカイ。
まぁ、大抵の陰陽師の住んでいる家はデカイ屋敷らしいな。俺みたいにそこまで大きくない家に住んでいる奴は珍しいらしい。
ちなみに、何故俺はそこまで大きくない家に住んでいるかと言うと、掃除が大変だからだ。従者を雇う気もまったくない。

「さて、俺はもう帰るぞ。」
「なんじゃ、もう帰るのか？もう少しゆっくりして行けばいいのにのぉ・・。」
「・・俺みたいな人外を屋敷に招き入れてもいいのか？最強の陰陽師さん。」
「大丈夫じゃ。いざとなったら退治するからのう。」
「面白い事を言うじゃないか。わかった、お邪魔しよう。」
「うむ。」

俺は晴明の挑発に乗ってやる事にした。まぁ、暴れる気はないし何かする気も無いがな。
めんどくさいし。まぁ、なんやかんやで晴明の屋敷に入れてもらえる事になった。
さて、この屋敷のいるのはどんな奴らなんだろうか・・

「普通すぎてつまらん。」
「何じゃお主は・・・。」

横で晴明が半目で俺を見ているが知った事か。
この屋敷の奴らはあまりにも普通すぎてつまらん。
いや、普通なのはいい事だ。だがな、仮にも最強の陰陽師の屋敷で働いているんだぞ？
少しくらい他人と違うところがあってもいいだろう？・・・前の俺は普通が一番とか言ってたのにな・・。
ちなみに、客間のような所に通されている。ここには座布団が無いようだ・・・。

「まぁいい。それより、客人に茶を出さんとな。」

晴明がそう言うと、使用人のような女が茶を持ってきた。俺は出された茶を飲む。
・・・そこそこだな。絶が入れた茶のほうが美味いが・・・。俺は茶の入っている湯呑みを置く。

「で、招いて貰ったのはいいが、俺はこれからどうすればいいんだ？」
「普通に我の話し相手になってくれればいい。どうせしばらくは依頼も来ないじゃろうしのぉ。」

・・・一週間も行方不明になっていた奴にすぐに依頼なんてしないだろうしな。

当たり前と言えば当たり前か。

「・・まぁ、話し相手くらいならなるさ。」
「そうか。それでは頼むぞ？」

そんな感じで俺は晴明の話し相手をした。色々話していてわかったが、コイツは友人が少ないらしい。
まぁ、最強の陰陽師を友人にしようなんて普通は思わないだろうな。
この時代では陰陽師は権力が高い。
どれくらい高いかと言うと、下手すると貴族よりも高いくらいだ。
まぁ、よっぽど腕のいい陰陽師じゃないと権力は底まで無いのだがな。ちなみに、俺はそこそこあったりする。
一応それなりに強いと言われているからな。貴族までとは行かないがある。
と、色々話していたらだいぶ時間が経ったようだ。そろそろ帰るか。
そう思い、立ち上がる。

「なんじゃ、帰るのか？」
「あぁ。夕飯の仕込が終わってない。」
「・・お主、見た目がそれなのにずいぶんと家庭的じゃのぉ・・。」
「うるさいぞ。人を見た目で判断するんじゃない。自分こそ、ろくに料理も作れないじゃないか。」
「我はいいのじゃ。従者がやってくれるからのぉ。」
「人に頼るな。少しは自分で出来るようになれ。じゃあな。」
「うむ、また来い。いつでも待っているぞ。」
「あぁ。」

俺はそう言いながら襖を開け、部屋から出る。今日の夕飯はどうするかな・・・

ーーーーSide晴明ーーーー

「本当に変わった奴じゃ・・。」

その一言に尽きる。大抵の者は、我に頭を下げては機嫌を取ろうとしたりしているのに、
あの男はそんな事はまったくせず、むしろ友人のような態度を取ってくれる。それがとても嬉しい。
聞いた噂では、あの男は帝にまであのような口を利いているそうだ。
さすがにそれはどうかと思うが、帝はあの男をずいぶんと気に入っているらしい。

「本当に変わった奴じゃ・・。」

同時に面白い奴でもある。あ奴になら、我の秘密を教えても問題は無いだろうな・・

ーーーーSide壊ーーーー

晴明の屋敷でだいぶ話し込んだとは言え、まだ昼間くらいだ。食材は後で買うとして、
何をしようか・・・。そうだ、団子でも食おう。

そう思い、急ぎ足で団子屋まで歩く。早く食いたいからな。
そして団子屋にたどり着くと、縁台に腰掛ける。そして団子を三本注文する。ここの団子は美味いんだ。
しばらく待っていると、団子が運ばれてきたので、1本とって食べる。・・美味い。
1本目を食べ終えたので、次は二本目を食べようとしたが・・・

「失礼、壊殿ですな?」
「・・都の兵が俺に何のようだ?」

もう1本食おうと思ったら何故か都の兵が俺に話し掛けてきたので手を止める。
はて?何か悪い事でもしただろうか?・・そう言えば前に団子の串を道端に捨てたな・・。

「あの時は仕方なかったんだ。」
「・・・何を言っておられるのですか。私は帝に貴方を連れて来いと言われただけです。」
「・・そうだったのか・・。」
「はい。」

何だ、ポイ捨てが原因じゃないのか。それを聞いて安心した俺。
そして再び団子を食う。・・・美味い。俺は余っているもう一本を兵に渡す。

「・・よろしいので?」
「あぁ、一人で食っても美味くないからな。」
「では・・。」

兵はそう言いながら団子を丁寧に受け取り、おいしそうに食べる。

どうやら喜んでくれたようだ。俺は自分の食っている団子を食べ終え、立ち上がる。
さて・・

「行きますか?」
「あぁ。っと、その前に・・・。亭主、団子を１０本ほど持ち帰りたい。それと勘定だ。」

後ろで兵が溜息をついている。どうかしたのだろうか?そう思いながらも、団子を受け取り、
金を払う。さて、行くとするか・・・・

まぁ、なんやかんやあって帝の前で座らされている。ちなみに、鬱陶しい雑魚陰陽師たちはいない。

「で、何か用か?」
「わしにそのような口を利くのは主くらいじゃよ・・。」

そう言いながら溜息をつく帝。そう気にするな。いつかいい事あるさ。

「・・まぁいい。それより、今日主を呼んだのは妻に会ってもらいたいからだ。」
「・・・妻?帝のか?」
「うむ、その通りだ。前に主の話をしたら、どうも主に興味を持っ

たらしくな。
会って話がしたいと言い出したのだ。」
「・・・まぁ、構わんさ。それと、今回は金はいらんぞ。たかが話し相手だからな。」
「わかった。では頼む。おい、コヤツを我の妻のところへ連れて行け。」

帝がそう言うと、従者が入ってきた。俺は立ち上がり、その従者の後を付いて行く。
少し歩くと従者は一つの部屋のまで止まった。・・ここか。

「・・連れて参りました。」
「・・どうぞ。」

従者は俺に「お一人でお入り下さい」と言い何処かに行ってしまった。まぁいいさ。
俺は襖を開け、部屋に入る。

「待っていたぞ。」

そう言いながら部屋に居た女が座りながらこちらを見る。
俺は何も言わずに女に向かい合うように座る。
そして改めて女を見た。女の容姿は、髪は金のショートボブで、瞳の色は金色だ。
頭には角のように二本の尖がりを持つおかしな帽子を被っており、服装は法師が着ているような服で、ゆったりとした長袖ロングスカートの服に
青い前掛けのような服を被せている。
どことなく俺を見下したような目で見ている。・・気に食わんな。

「・・・で、俺に何か用か？帝の妻。」
「私にもちゃんとした玉藻前（たまものまえ）という名がある。」
「別に覚える必要は無いな。」

俺がそう言うと、右眉を少し「ピク」と動かす玉藻。結構挑発しやすいな・・。

「・・まぁいい。ところで貴様の名前は「言わなくても聞いてるはずだが」・・・。」

殺気を込めて俺を睨む玉藻。人を見下したのだから、これくらいはやっても構わんだろう。
それに、俺の目は『誤魔化せない』ぞ。

「もう一度聞こう、俺に何か用か？玉藻前。」
「・・都でも最強といわれているお前がどんな人物か興味があっただけだ。」
「ほぅ・・。で、会った感想は？」
「あまり好きになれそうにないな。」
「そうか・・。俺は君に興味があるのだがな。」
「何を言ってい「狐の尻尾は触り心地がいいらしいからな。」・・・。」

俺の言った事を理解できなかったのか、しばらく唖然とする玉藻。
そして理解したのか、その目は焦りを見せている。

「・・何を言っているんだ？ここでは狐なんて飼っていないぞ？」
「いやいや、俺の目の前に一匹居るんだよ。人の形をした女狐がな。」
「・・・・・。」

「君の術は見事だよ。他の陰陽師たちはまったく気付いていなかった。
だがな、俺には通用しない。」
「・・いつから気付いていた・・？」
「この部屋に入った時だ。最初はおかしいと思ったよ。この部屋から本当に微量だが、
妖気を感じてな。よく探ってみれば君の身体から出ている。」
「それだけでは狐とまではわかるまい？」
「あぁ。それは何となくそう思っただけだ。」
「・・・・・・。」

俺の言った事に再び唖然とする玉藻。そして観念したように溜息をついた。

「まさか見破られる日が来るとはな・・。１００年も掛けて修行したのだが・・。
それで、私をどうする気だ？このまま帝に言うか？妻は妖怪だと。」
「・・何故言う必要があるんだ？」
「・・は？だって陰陽師なら妖怪を見つけたら始末したりするって・・。」
「何が悲しくて自分からそんなめんどくさい事をしなければいけないんだ？
それに、俺にだって妖怪の知り合いくらいいるさ。」
「・・・変わった奴だな・・。」
「よく言われる。で、何故人間に化けているんだ？」
「・・人間の暮らしに興味があったから・・。それと、実際に見てみたかった。」
「そうか。君も充分変わった奴じゃないか。」
「・・・そうだな。」

玉藻はそう言いながら「ふふふ・・」と笑う。なるほど、輝夜とは別の美しさを持っているな。

・・すまない、俺には美しいというのがどういう事かよくわからなかった・・。

まぁ、そんな事はどうでもいい。

俺は懐から団子を入れたタッパーを取り出す。（移し変えた。）

そして蓋を開け、1本取り出して玉藻に渡した。

「・・これは何だ？」

「団子だ。知らないのか？」

「・・団子・・？」

知らないようだ。俺は玉藻に「とりあえず食え」と言い無理やり渡す。

玉藻は、最初は疑わしそうな目で見ていたが、恐る恐ると言った感じに団子を口運び、

目を瞑りながらもぐもぐと租借した。

「・・美味しい。」

「そうか、それはよかったな。」

どうやら喜んでくれたようだ。俺と玉藻は団子を食べながらも、普通の話をした。

その後俺は家に帰った・・・・

第９５話：狐（後書き）

はい、そんな訳で玉藻・・もとい、藍様でした。

第９６話：今日の一日の暇つぶし（前書き）

戦闘シーンなし。

第９６話：今日の一日の暇つぶし

昨日は玉藻と結構長く話し込んでしまった。時間的に言うと、夜の９時くらいまでだろうか？
団子を食い終わっても「もう少し付き合え」と物凄くしつこかった。
ただ、俺と話している時はやけに嬉しそうだった。きっと話し相手がいなかったのだろう。従者は遠慮していて、
夫の帝はまったく構ってくれないらしいからな。他の妖怪も、自分の力を恐れて近寄らないと言っていたしな。
・・その内また行ってやるか。今度は羊羹でも持って行ってやろう。
いや、狐だから油揚げとか持って行った方が喜びそうだな・・・。
まぁ、今はどうでもいいな。
俺は今、家の縁側で茶を啜っている。
何故かって？依頼が来てないからに決まっているだろうが。
まぁ、別に来てないなら来てないでどうでもいいのだがな。
どうせつまらん依頼しかこないだろうしな。

「・・・幽々子の所でも行こうかな・・。」

昼間から少女の家に遊びに行くのもどうかと思うが、どうせ幽々子も屋敷から出れなくて暇だろうしな。
俺はそう思いながら、縁側の後ろの部屋で昼寝しているゲートを起こす。
実は初めて紫に幽々子の屋敷に連れて行って貰った時に、ゲートに場所を覚えさせておいた。ゲートは場所さえわかれば道のりは関係なく連れて行ってくれるからな。
何故ゲートが縁側の後ろの部屋で昼寝しているかと言うと、今が式

たちにとって自由時間だからだ。
俺は式たちに、三日に一回は外に出して一日この辺りなら自由にしていいと言っている。
ちなみに、絶も昼寝をしていて、ニオは大鎌を担いで立っていた。・・お前も寝てるのか？
もし寝ているなら器用だな・・・。
そんな事を考えていると、ゲートが痺れを切らしたのか自分の口の中に浮かんでいる目玉を俺の前へと移動させてきた。・・・もしかしてゲートの本体はこの目玉なのだろうか？

「・・待たせてすまなかったな。さて、行こう。」

俺がそう言うと、ゲートの本体、もとい目玉は再び元の口の中に戻る。
そして俺もゲートの口の中に入った。
するとゲートがゆっくりと大きく鋭い歯が生えた口を閉じる。
着くまで少し待っているとするか・・・・

ーーーーSide紫ーーーー

前に壊から貰ったお守り。それは石だった。ある程度丸くなっており、色は闇のように真っ黒だ。

「・・本当に何なのかしらね。この石・・・。」

壊から貰った石を指で摘んで眺める。霊力を感じなければ妖力も感

じない。
ただ丸いだけの石にしか見えない。いざと言う時になったら助けてくれるらしいが・・。

「・・本当に彼は変わっているわね・・。」

今だって陰陽師と言う仕事をしている癖に妖怪の私と親しくしてくれる。
都の陰陽師にばれたらただではすまないだろうに・・。

「・・・ふふふ・・・。」

やっぱり壊は変わってる。
そう思いながらも、再び石を眺める。相変わらず黒色だ・・・

ーーーーSide壊ーーーー

そんな訳で幽々子の屋敷に着いた。ちなみに、前と同じように桜の木の前に送ってもらった。
ゲートに後でまた迎えに来て貰うように頼んで家に帰らせて、前と同じように桜の木を眺める。
相変わらず大きな木だ。これで満開になれば文句なしなのだがな・・・・。
そう思いながらも桜の気に触れる。やはり何かが足りない。これでは俺は楽しませる事は出来ない。

「・・お前は一体何を望んでいるのだろうな・・。」

誰にも聞こえないほどの声で俺はそう呟きながら桜の気から手を離

す。
コイツのことは後で考えよう。
今日は幽々子に会いに来たんだからな。そう思いながら幽々子の元へ向かった・・・・

幽々子は相変わらず縁側で座ってボーっとしていた。
ただ、何となくだがいつもと違う感じがした。
・・・これは知っている。前にも感じたことがある・・。

「・・幽々子、ずいぶん暇そうだな。」
「・・・壊？来てくれたのね。」

俺が話しかけると、幽々子は嬉しそうにこちらを向いた。そして俺に対して手招きをした。
それに従い、幽々子の所まで進んで幽々子の横に座る。・・ふぅ・・・

「何だかお爺ちゃんみたいね。」
「失敬な。・・・いや、否定できないな・・・。」

実際に４０００歳以上だしな・・。よくもまぁこんなに長生きできたものだ。
そろそろ５０００まで行くんじゃないか？そうしたら俺はこの世界じゃ一番の年長者だな。

「・・・・・。」
「ど、どうしたの？」

「いや・・。俺はずいぶんと年を取ってしまったと思ってな・・。」
「・・そんなに年を取っているようには見えないけど?」
「幽々子、覚えておけ。人を見た目で判断してはいけないぞ。
・・・というか俺は人じゃなかったな。」

俺がそう言うと、どこか悲しそうな目で俺を見る幽々子。どうかしたのだろうか?
とりあえず、それをあまり気にしないで再び幽々子と話す。
本当に嬉しそうに話すな・・・

「む、いかん。もう暗くなってきたな。そろそろ帰らせてもらう。」
「もう帰るの?もう少しゆっくりしていけばいいのに・・・。」

そう言いながらションボリとする幽々子。俺は幽々子の頭に手を乗せる。
そして撫でた。・・久しぶりにやったな・・。

「そう言うな。また今度来るさ。」

俺はそう言い、幽々子の頭から手を退ける。はて?気のせいだろうか。
幽々子の顔が少し赤くなっている気が・・・
そんな事を考えていると、目の前にいきなりゲートが現れた。・・

心臓に悪い。
そう思いながらも、ゲートの口の中に入り、幽々子の方へ向き直る。

「・・ではな。また会おう。」
「・・うん。またね、壊。」

幽々子は最後に手を振りながら笑顔でそう言ってくれた。
それを見ていると、ゲートの口が閉じて幽々子の顔が見えなくなった・・・

ーーーーSide幽々子ーーーー

「・・行っちゃった・・。」

壊はおかしな生き物の口の中に入り、そのまま帰ってしまった。
私の周りには人間の友達は居ない。初めて出来た友人も、紫だった。
人間の友人が出来ないのは、私の能力を皆恐れているから。
どうして神様は私のこんな能力を授けたんだろう?
こんな能力なんていらない。
この能力を授けるなら、せめて人じゃなくて紫や壊のような人外で生まれたかった。
そうすれば二人とずっと一緒にお話が出来るのに・・・

第９６話：今日の一日の暇つぶし（後書き）

そろそろ物語を進めようかなとは思っている。でもタイミングがわからない。・・そう言えば壊って何歳だっけな・・・。

第９７話：狐の好物？（前書き）

今回は、壊が幽々子に会いに行ってから１週間経った話。

第９７話：狐の好物？

今さっき、都の帝の使者が俺の家に訪ねてきた。何でも、今回は帝の妻・・まぁ、玉藻だ。
玉藻が俺に用があるらしい。どんな用件かはもうわかっているがな。
どうせ話し相手になってくれとか
そんな用件だろう。いや、そうに違いない。何故なら、前に会いに行った時から大体１週間も経っているからだ。
別に会いに行ってもいいのだが、何か機嫌が悪くなっている気がするんだ。
・・もしもの時のためにアレを持って行こう・・・

まぁ、そんな訳で団子屋の団子を２０本ほど買い、さらに秘密道具も持って玉藻の部屋まで案内された。
玉藻の部屋の前まで着く間、ここの従者たちの何人かが「ご愁傷様です・・。」と言いながら手を合わせていた。

「玉藻様、壊殿を連れて参りました。」
「・・通せ。」

部屋の中から玉藻の声が聞こえると、従者は「ご愁傷様です・・。」

と言って何処かに行ってしまった。
おい、縁起でもないぞ。本当にそうなったらどうするんだ。心の中でそう思いながら部屋の襖を開ける。
襖を開けた先には玉藻が座ってこちらを睨んでいた。殺気のオマケ付きで。

「・・・とりあえず、睨むのと殺気を出すのをやめてくれ。」
「うるさい。また会いにきてくれるって言ったのに全然来てくれなかっただろうが。」
「いや、まぁそうなんだが・・。別にそこまで怒る事でもないだろう?」
「私は約束を守らない奴は嫌いだ。」

そう言いながらそっぽを向いてしまう玉藻。・・・子供かお前は。
俺は機嫌が悪いであろう玉藻の前に向かい合うように座り、懐からタッパーに詰めた
団子を出す。玉藻はそれを見て、一瞬目を輝かせた。

「・・ハッ!?そ、そんな物では私の機嫌は直らんぞ!」
「そうか、なら仕方ない。俺一人で食おう。」

俺はそう言いながらタッパーの蓋を開け、中から団子を一本取り出す。
そしてそれを食う。・・うん、美味い。美味いのだが・・・

「・・・そう見つめられると非常に食いずらいのだが?」
「う・・見てない。私は決して見てないぞ・・。」

顔を赤くしながら目を逸らす玉藻。・・説得力がないな・・。
そう思いつつも、2本目の団子に手をつける。すると玉藻は再び俺

の団子を見つめ始めた。
・・食いたいなら食えばいいものを。
俺はタッパーを黙って玉藻の前まで移動させる。そして自分の手にある2本目の団子を食う。

「・・一人で食べてもあまり美味くなくてな。一緒に食べないか？」
「し、仕方ないな。お前がそこまで言うのなら食べてやる。」

顔を赤くして何を偉そうな事を言っているのやら・・。
玉藻はタッパーから団子を1本取り出して食べる。すごく幸せそうな顔をしている・・。
俺はそんな玉藻を見ながら団子を食べる。
そして団子を全て食べ終わった頃に、玉藻は満足そうな顔をしながら俺の事を見て話しかけてきた。

「で、何故私に会いに来なかったんだ？」
「・・用事があったんだ。」
「本当は？」
「来るのがめんどくさかった。後、忘れてた。」
「・・ほほぅ・・。」

玉藻から殺気が放たれる。
しまった！つい本当のことを言ってしまった！まずい、どうすればいい・・・？
・・・そうだ、こんな時こそあれだ。

「まぁ待て玉藻。今日は団子以外にも持ってきた物がある。」

俺はそう言いながら団子のタッパーが入っていた場所とは違うもう一つの懐から

ある物の入ったタッパーを取り出す。ちなみに、見えないように布を巻いている。

「・・・何だこれは?」

「これはな・・・。」

俺はそう言いながらタッパーに巻いていた布を解く。すると中から出てきたのは・・

「油揚げだ。」

そう油揚げだ。玉藻に会いに来る前に、頑張って作った「対玉藻用秘密道具」だ。

狐と言ったら油揚げだろう?残念ながらこの世界にはまだ油揚げは無かった・・。

豆腐はあるのにな・・・

「まぁいい。食え。」

「いきなりだな。そんな物、怪しくて食えるか。」

「いや美味いぞ?・・・たぶん。」

「今たぶんって言ったな?モガッ!?」

「いいから黙って食え。」

玉藻がうるさいので油揚げを一枚摘んで口に捻り込んでやった。玉藻仕方ないといった感じで油揚げをもぐもぐと食べ始めた。

「どうだ?」

「・・・美味しい。もう一枚くれ!」

そう言いながら自分で油揚げを摘んで口に放り込む玉藻。・・まぁ、気に入ってくれたなら
いいさ。しかし狐は油揚げが好物だと聞いたが本当だったんだな。
その証拠に、玉藻が次から次へと油揚げを平らげていく。ちなみに、全部で１０枚作った。

「・・ご馳走様。」
「もう食べたのか？早いな・・・。」

満足そうな顔をする玉藻。・・・俺はまだ一枚も食っていないのだが？

「・・そんなに美味かったか？」
「すごく美味しかった。」

先程とは違ってニコニコとした表情でそう答える玉藻。
その顔を見ていると、何故かこちらも嬉しくなってしまった。

「・・まぁいいさ。そろそろ帰ってもいいか？」
「・・・もう少しここに居ろ。」

・・どうやらまだ帰してもらえそうに無い・・・・

「やっと帰ってこれた・・・。」

そう言いながら引き戸を開け、中に入る。

「おかえりな「帰れ。」せめて全部喋らせてくれないかしら?」

引き戸を開けると、何故か正座で茶を啜っている紫がいた。
冗談じゃない。何が悲しくて帰ってまで紫の相手をしなくちゃいかんのだ。

「・・で、何か用か?」
「遊びに来たのよ。」
「・・・もういい・・・。何か作るから待っていろ・・・。」

俺はそう言いながら厨房に向かう。・・・何だかんだで俺も紫の事はそこまで嫌いじゃないからな。
むしろいい友人だと思っている。まぁ、そんな訳で俺は夕飯を作って紫と食べた。
そしてその後紫がこの家に泊まる事になった・・・

第９７話：狐の好物？（後書き）

はい終わりました。次は物語を進めます。

第９８話：生か死か（前書き）

今回は、まだ少ししか進まないかもしれない・・

第９８話：生か死か

俺は今、幽々子の屋敷でまったりとしている。本当は、晴明の屋敷へ暇つぶしに行こうと思っていたのだが仕事で居なかったのだ。それじゃ幽々子にでも会いに行こうと言う事になって幽々子の屋敷に来た。ちなみに、紫はいない。

「壊って、いつも暇そうよね。」
「依頼が来ないのだから仕方ないだろう？」
「どうして壊の所には依頼が仕事があまり来ないの？」
「・・・たぶん俺の見た目が悪いからだろう。」
「そんな事はないと思うけれど・・・・。」

まぁ、俺にとってはそんな事はどうでもいい。仕事なんてただの暇つぶしにしかならないからな。
そう思いながらも茶を啜る。そして一緒に置いてあった団子を食う。
俺が買って来たやつだ。
横に座っている幽々子も団子を食べていた。俺は団子を食べている幽々子に質問をする事にした。

「なぁ、幽々子。」
「んぐっ！？・・・なに？」
「向こう側にある桜の木、アレはいつ頃満開になるんだ？」
「・・普通の桜の木が咲く時期と同じよ。でも、前から咲かなくなっているの。」
「前とはいつ頃だ？」
「確か私が能力に目覚めた時だから・・・。２年前くらいかしら？」

本当に最近だな。しかし何故咲かなくなったのだろうか？何か理由

があるはずだが・・・。
まぁいい。時間はまだまだあるからな。絶対に俺の退屈しのぎにはなってもらうさ・・・。

「・・・壊？どうかしたの？」
「いや、なんでもないさ。ただ、満開になれば面白いと思ってな。」
「どうして？」
「・・長く生きているとな、生きる事に退屈になってくるんだよ。だからそれを紛らわす為にも俺には退屈しのぎになるものが必要なのさ。
今回はあの桜の木が退屈しのぎになると思っていたんだがな・・。まぁ、時間はいくらでもあるからな。満開になるまで待つさ。」

俺はそう言いながら幽々子の顔を見る。幽々子はどこか悲しそうな、寂しそうな顔をしていた。
・・この顔は前にも見たことがあるな・・・。確か前の世界で家族を俺に殺されたターゲットがこんな顔をしていたな。確かその後そいつは・・

「・・まぁいいさ。さて、そろそろ帰るか。」
「あら、もう帰っちゃうの？」
「あぁ。すまんな。」

俺はそう言い、立ち上がる。そしてそのままゲート（今日は持ってきた）を召喚し、
ゲートの口の中に入る。そしてゲートの口が閉じ切る瞬間、俺は幽々子に背を向けたまま
こう言った。

「死ねば楽になれるなんて思うなよ？」

そしてゲートの口が完全に閉じた・・・

ーーーーSide幽々子ーーーー

今日は壊が団子を持って屋敷に遊びに来てくれた。
私の横に座り、まだ入れたばかりの熱いのお茶を啜っている。

「壊って、いつも暇そうよね。」
「依頼が来ないのだから仕方ないだろう?」
「どうして壊の所には依頼が仕事があまり来ないの?」
「・・・たぶん俺の見た目が悪いからだろう。」
「そんな事はないと思うけれど・・・・。」

壊の容姿はかなりいい。背がとても高く、白い髪に紅い目が凄く似合っている。
着ている服も、その容姿に合っている。愛想よくしていれば女性が集まってくると思う。
どうして自分に自信が持てないんだろう・・。
そう思いながら、壊がもって来てくれたお団子を1本食べる。・・美味しい。

「なぁ、幽々子。」
「んぐっ!?・・・なに?」

お団子を食べていると壊が話しかけてきた。

急に話し掛けて来るので喉に詰まりそうになったが、それを何とか飲み込んで壊に返事をする。

「向こう側にある桜の木、アレはいつ頃満開になるんだ？」

「・・普通の桜の木が咲く時期と同じよ。でも、前から咲かなくなっているの。」

「前とはいつ頃だ？」

「確か私が能力に目覚めた時だから・・・。2年前くらいかしら？」

よく覚えていないけれど、たぶんそうだと思う。

私がそう言うと、壊は腕を組んで何か考え始めた。

「・・・壊？どうかしたの？」

「いや、なんでもないさ。ただ、満開になれば面白いと思ってな。」

「どうして？」

「・・長く生きているとな、生きる事に退屈になってくるんだよ。だからそれを紛らわす為にも俺には退屈しのぎになるものが必要なのさ。

今回はあの桜の木が退屈しのぎになると思っていたんだがな・・。

まぁ、時間はいくらでもあるからな。満開になるまで待つさ。」

・・・改めて思った。やっぱり壊は普通の人じゃないんだ。

私は普通の人間だから、寿命が来てしまえば死んでしまだろう。

でも、壊や紫は人ならざる者だから寿命で死ぬことはないと思う。

私も壊や紫のようになりたい・・。そうすれば、二人とずっと一緒にお友達でいられるから・・。

どうやったら壊や紫のように人外の者になれるんだろう？

もしかしたら一回死ねば、生まれ変わったときに壊や紫と同じ人外になれるのかもしれない。

それに、もし人外のなれなくてもそのまま楽になれるかもしれない・

・・。

「・・まぁいいさ。さて、そろそろ帰るか。」
「あら、もう帰っちゃうの？」
「あぁ。すまんな。」

壊はそう言うと立ち上がり、懐から小さな石を取り出した。
するとその石から、前に壊を家まで送った大きな獣の口のような形をした式が出てきた。
そして壊は、その式の口の中に入る。やがてゆっくりと式はその口を閉じていく。
もう少しで閉じ切る時だった。

「死ねば楽になれるなんて思うなよ？」

・・・え？

何故彼は、私の考えていた事を分かったのだろう？
私は壊に聞こうとしたが、式の口は完全に閉じきっており、その式の姿も消えた。
しばらく唖然としていたが、やはり私の気持ちは変わらない。

「・・・ごめんなさい壊。それでも私は・・・。」

――――貴方たちとずっと一緒にいたいの――――

誰に聞こえるわけでもない声で、私は呟いた・・・

ーーーSide壊ーーーー

幽々子のあの表情は、自ら命を絶つ者のする表情だ。俺の知る限りでは、
今まであの表情を見せた者は必ずと言っていいほど自ら死を望んでいた。
中には何とか生きようとする者もいたが、それは本当に少なかった。
・・まぁ、俺にとってはどうでもいいな。今さら誰かが死を望もうとがめる気はない。

「・・・明日だな・・。」

俺の勘だが、幽々子はおそらく明日死ぬだろう。別に、彼女が死んだら死んだで仕方ないと
思うが、一応は世話になったからな。死ぬ時はみていてやるとするか。
もし彼女が生きる道を選べばそれでよし。死の道を選べばそれを見届ける。
さて、それでは・・・

「・・明日に備えて寝るとしよう・・・。」

俺はそう呟き、布団の中で眠りについた・・・・

第９８話：生か死か（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。次回こそは物語を進めたい。

第９９話：選んだ道と見物とお守りの効果（前書き）

今回は戦闘シーンあり。
ついでに壊が紫に渡したお守りの効果がわかるかもしれない？！

第９９話：選んだ道と見物とお守りの効果

俺は今、空の上から幽々子の屋敷を見ている。もちろん、昨日言ったとおり見に来たのだ。
ちなみに、姿は見えないように能力で空気に潜り込ませて隠している。何？よくわからない？
だったら透明人間になったと思えばいい。それにしても応用が利くなこの能力・・・。
俺が潜り込もうと思えばどんな大きさなの物だろうが潜り込める。
例えば壁、地面、水、空気、米粒。
・・いや、さすがに米粒には潜り込まないぞ？とにかく、何にでも潜り込めるわけだ。
出たくなったら浮かび上がればいいしな。

「・・・出てきたか・・。」

そんなことを考えていたら、屋敷から幽々子が出てきていつも通り縁側で腰を下ろす。
・・・たまには別の事をすればいいものを・・。
幽々子は相変わらず茶を飲みながらボーっとしている。ただ、その表情は昨日より
何か吹っ切れたような顔になっている。

「さて、幽々子が望むは生か死か。・・・いつまでも見ていても仕方ないな。一度帰って飯でも食うか。」

俺はそう呟き、空の散歩を楽しみながら家に帰った・・・・

ーーーSide幽々子ーーーー

「・・・？」

先程から「誰かに見らている感じ」がしたが、たった今消えた。気のせいだったのだろうか？
ともかく、これでやっと行動が出来る。妖忌はまだ屋敷の中で刀を研いでいるし、
紫も来ていない。今なら誰にもばれないで目的を果たせる。私はそう思い、あの桜の木が
生えている場所まで向かう。そしてその桜の木の下で裾に隠しておいた一本の短刀を取り出す。
ふふふ・・。・・どうせなら最後に満開の桜が見たかったなぁ・・・

ーーーSide紫ーーーー

「・・暇ね・・。」

とてつもなく暇だ。どれくらい暇かと言うと、スキマの中で一日中お茶を飲んでいられるくらい暇だ。
今日は得にする事がない。『楽園』だって出来るまでもう少し掛かるし・・・

「・・幽々子の所にでも遊びに行こうかしら・・。」

どうせ幽々子は今日も屋敷から出させて貰えずに退屈に違いない。
そう思い、真横にスキマを開く。そしてそこから出る。私が出た場所は
いつも幽々子がいる縁側だ。しかし・・

「・・いない・・。」

いつもなら縁側にいる幽々子が何故かいない。何処に行ったのだろうか?

「何をしておるのですかな?紫殿。」

幽々子が何処に居るのか考えていると、後ろから声が聞こえたので振り向く。
そこにいたのは白く長い髭と髪を持つ老人『魂魄妖忌』がいた。

「ねぇ、幽々子は何処にいるのかしら?」
「はて?いつもならここで茶でも啜っている筈だが・・・。」
「貴方もわからないの?仕方ないわね・・。探しましょうか。」
「わかった。俺はあちらの方を探すから、紫殿は向こうを探してくれ。」

妖忌はそう言うと、私とは逆方向に歩いていった。私も妖忌に言われたとおり、
幽々子を探す。確か向こうには桜の木があったはずだ。
今まであの桜の木が咲いたのは見たことが、満開になればきっと素晴らしい眺めになる事だろう。
ちなみにこの桜の木は『西行妖』と言う。
幽々子は知らなかったみたいだが、私はこの桜の噂を何度も聞いた

事がある。
そんなことを考えていると、桜の木が見えてきた。そしてその下にあるものを見た途端、
私はそれに向かって走った。桜の木の下で見たのは・・

「幽々子！！」

胸に短刀を突き立てて倒れている幽々子だった・・・

ーーーーSide壊ーーーー

「・・ご馳走様。」

今日の昼食はいなり寿司だ。何故か無性に食べたくなったから作ってみた。
味は・・少し薄かったな。次からは一晩つけたまま煮汁を染み込ませよう。
一日くらいなら大丈夫だろう。俺はそう思いながら食器を洗って再び茶を啜る。
そして式が入っている石を全て懐に入れ、絶を呼び肩に乗せる。さてと・・

「・・行くか・・。」

そう呟き、ゲートを召喚して幽々子の屋敷へと向かった・・・・

「・・それが選んだ答えか・・・。」

屋敷に来て、先程と同じように能力で見えないように姿を隠して空に浮く。

縁側を確認してみたら幽々子の姿がなく、仕方がないので探してみたら桜の木の下で

胸に短刀を突き刺しながら紫に抱きかかえられていた。

そして桜の木から、とてつもなく大きい妖力を感じられた。これは・・・

「・・幽々子の血を吸ったからか・・？」

おそらくそうであろう。あまり気にしていなかったが、幽々子の力は強い。

腕力などではなく、霊力の事だ。その辺の下級妖怪が幽々子を食えば、間違いなく

大妖怪になれるほどの力を持っている。まぁ、死んでしまった今となってはどうでもいいがな。

そう思いながらも、しばらく紫と死んだ幽々子の事を見ていたが、

紫が幽々子を地面に横に寝かせ立ち上がった。そして横たわっている幽々子の周りに何かを描き始めた。

・・あれは・・・

「・・・まったくもってバカな事を・・・。」

前に晴明に聞いた事がある。死者の魂をこの世に繋ぎ止め、束縛する禁術の話を。
術式も一度だけ見せてもらった事がある。
今紫が行っているのは間違いなく俺が晴明から聞いたその術だろう。
しばらくそれを眺めていたが、不意に桜の木から先程とは比べ物にならないほどの
妖力を感じた。改めて桜の木を見てみると、何と花が咲いていたのだ。
満開と言ってもいい。花ビラがひらひらと舞い、紫たちのところへ落ちている。
しかし、その美しい花とは対照的に、桜の木本体は何とも禍々しい妖気を放っていた。
紫が自分の上から落ちてくる桜の花ビラを見上げた途端、紫の真下から巨大な根が現れ、
紫に攻撃を仕掛けた。しかし、紫はスキマを自らの足元に開き、幽々子の亡骸と一緒に中に落ちて入った。
そして再び桜の木からある程度離れた場所からスキマを開いて出てくる。もちろん、幽々子と一緒に。

「どれ、しばらく見ているとするか。」

俺はそう呟き、空の上で胡坐を掻いて座る。座ると同時に妖忌が紫へ走って向かっているのが見えた。
すると、妖忌に向かって桜が根を振り下ろした。意外と遠くに居ても気づくんだな。
妖忌はその一撃を刀で防いだ。頑張るなぁ・・・。
紫の方は再び何かをしている、今度は先程とは別の術式を地面に描いている。
まぁ、頑張るんだな。俺はもう少し見物させてもらうとしよう・・・
・

ーーーSide紫ーーーー

私とした事が、幽々子の周りに術式を描くので頭がいっぱいで、この桜の木・・・西行妖から出ている妖力に気付かなかった。この桜は、今までの多くの人間の血を吸って成長している。
その血の量が余りにも多すぎて妖気を持ってしまい、やがて人の血を啜る妖怪桜になってしまった。
何故か少し前から人の血を吸わなくなって花も咲かなかった。

「紫殿！この西行妖を何とか出来ませぬか！？」
「少し待って！今封印するための準備をしているから・・。」

妖忌が先程の西行妖の一撃を刀で防ぎながら私に言うので、私も急いで術式を描く。
しかし、この術式は描く量が多いのでまだ掛かりそうだ。

「！紫殿！！」

妖忌が私に向かって叫ぶので、私は妖忌の方を見る。すると、目の前に西行妖の根が迫っていた。
まずい！そう思い、来るであろう衝撃に目を瞑る。・・・・？
いつまで経っても体に衝撃が来ない。不思議に思い、目を開けると・・・

「・・貴方は・・？」

目の前に居たのは全身が黒い泥のようになっている人型の何か。
その何かが自らの腕で絡ませて西行妖の攻撃を止めていた。私の問い掛けに黒い何かが
反応し、振り返る。振り返られたその顔には口は無く、宝石のような真っ赤な目が二つ並んでいた。
黒い何かは背中から黒い小さくて細い触手のような物を生やし、その先端を下に向けた。
それにつられて見てみると下を見ると、そこには壊に渡された黒く丸い小さな石が転がっていた。

「・・・貴方は壊の式なのかしら?」

私がそう言うと、その通りだとでも言うように頷く壊の式。
もしかして壊はこうなる事を予想していたのだろうか?だからこの式を私に渡した・・
(※ちなみに、壊はこうなるとは思ってもいませんでした。)

「紫殿!その黒いのは・・・。」
「大丈夫よ。この子は壊の式だから心配ないわ。それよりも、壊の式と一緒に
時間を稼いで。その間にアレを封印する術式を完成させるわ。」

私はそう言い、先程の術式を続きから描く。妖忌と壊の式はそれを理解したように
西行妖に向かって突撃する。西行妖は突撃してきた二人に向かって巨大な根を横に薙ぎ払う。
妖忌はそれを上に跳んでかわし、壊の式はかわさずに自らの身体を絡ませた。そしてそのまま
根の上で西行妖に向かって素早く進む。ある程度近づくと、壊の式は腕を伸ばして西行妖を

殴りつけた。すると、西行妖がその攻撃に辺り、少し動きが止まる。
次に妖忌が西行妖の根を刀で切り裂いた。妖忌に切られた根はそのまま地面に音を発てて落ちる。
・・こちらも終わった。

「二人とも、そこを退きなさい！」

私がそう言うと、妖忌と壊の式は横に跳んで西行妖から距離をとる。
それを確認した私は、術式を発動させる。私の発動させた術式から太い縄のような物が伸びて
西行妖に巻きつく。しばらく根を振り回して抵抗していたが、やがて西行妖は抵抗するのをやめて動かなくなった。・・・成功？

「・・紫殿。これは・・。」
「・・どうやら成功したみたいね・・。」

私がそう呟いた途端、西行妖に絡み付いていた縄が千切れる。そんな・・・・
今の自分の全力を出してもこの桜は封印できないというのだろうか？
そう思い、目の前が暗くなっていった気がした・・・

第９９話：選んだ道と見物とお守りの効果（後書き）

はい、中途半端ですけど終わりです。本当は幽々子を死なせずに生かそうと思ったんですけど、どうもしっくりこなくって・・。
それと、わかっていた人もいたかもしれませんが、壊が紫に渡したお守りはナイアです。
次回は壊と他の式も出てきます。

第１００話：西行妖　封印（前書き）

１００話じゃぁぁぁぁぁ！！三日坊主が１００話まで行ったぞぉぉぉ！

第１００話：西行妖　封印

ーーーSide壊ーーーー

初めは紫たちが押しているようで、封印をするところまで行った。
しかし、駄目だ。
今の紫の妖力ではあの桜の木の妖力には勝てない。別に紫の妖力が小さい訳じゃない。
むしろ紫の妖力は大きい。さらに能力を使えば戦いで有利になるだろう。
しかし、幽々子のための術式と、桜の木を封印するために描いた術式の事、
それと封印を破られた事でショックを受けて頭が上手く回らなくなっているようだ。

「・・まぁ、まだ負けを認めていない相手に、勝利を確信した時点で紫の負けだがな・・。」

戦いとは相手が完全に負けを認めるまで勝ったとは言わない。
ちなみに、どうして俺がここまで戦いに勝利に執着しているかと言うと、
まぁ・・・、前の世界で今の紫と似たような気持ちになった事があってな。
それで油断していたらやられてしまった事があるんだ。懐かしいなぁ・・・。
昔の事に懐かしんでいると、桜の木が紫に向かって根で攻撃をしようとしていた。
しかも今度は1本ではなく、5本も使っている。あの距離じゃあナイアと妖忌も間に合わないな。

紫も、封印を簡単に破られたのがよほどショックだったのか、ただ立ち尽くしている。
まったく・・・、仕方ないな・・・

ーーーSide紫ーーー

幽々子は私の数少ない友人の一人だった。私は力が強い事もあり、周りの妖怪から
嫌われていた。当然の事だ。力の強い者は皆から羨ましがられて、やがてそれは嫉妬に変わる。
別に、他の妖怪が私をどう思っていようがどうでもよかった。私には最初の友人の壊がいる。
・・まぁ、今はそんなことはどうでもいい。そんな私はある日こんな話を聞いた。

『西行寺には死を呼ぶ少女がいる。』

その話を聞いた時、私はその少女に会ってみたくなった。最初は本当に気紛れだった。
やがて私はその少女に会いに行った。少女を最初に見た時、確かにどこか普通の人間とは違う感じがした。
少女は縁側で何をする訳でもなく、ただ青い空を眺めていた。私はその少女に話しかけてみた。

「こんにちわ。」
「・・こんにちわ。」
「あら、元気が無いわね?何か嫌な事でもあったのかしら?

このお姉さんに相談してみなさいな。」

私はそう言い少女の横に腰掛ける。

「私「あ、少し待って頂戴。」・・？」

「八雲紫。私の名前よ。貴方は何ていうのかしら？」

「・・西行寺　幽々子・・。」

少女、幽々子の話によると、彼女には友人がいない。自分の能力のせいで

周りの者は自分から遠ざかって行くらしい。・・私はこの少女の話しを聞いて思った。

あぁ・・、この子は私と似ている・・。何となく、放って置けなくて無意識の内にこう言った。

「ねぇ、貴方・・・。」

――私とお友達にならない？――

それ以来、私は幽々子と友人になった。彼女は私の話す事をとても楽しそうに聞いてくれた。

共に悩んだり、笑ったり、そんな日々が続いていた。壊が来てからは幽々子は以前よりもさらに明るくなった。

それなのに、彼女は死を選んでしまった。

理由は何となくわかっている。私や壊はとても永い時間を生きる事が出来る。しかし、幽々子は人間。

間違いなく私たちよりも早く死んでしまう。もう一つは、彼女の能力が原因だろう。
幽々子の能力は人間にが持つにしてはあまりにも重すぎる。だから辛くなって死を選んだのだろう。
でも・・・

「・・やっぱり・・・頼って欲しかったわね・・・。」

もう西行妖の根が目の前まで来ている。今更慌てたところでよける事は不可能だろう。
幽々子、私もそちらに行くわ。壊・・・

「・・さようなら・・。」

私はそう呟き、目を瞑る。しかし、いつまで経っても攻撃が来ない。
何故？
そう疑問に思い。ゆっくりと目を開けると・・

「何を謝っているのか知らないが・・これくらいで諦めないで欲しいな。・・紫。」

そこには式を肩に乗せ、西行妖の根が身体中に突き刺さっている壊がいた・・・

ーーーーSide壊ーーーー

紫を助けに行こうと思ったら、すでに桜の木の攻撃が当る寸前だった。

さすがにアレでは俺の攻撃も間に合わない・・。そう思い、仕方なく紫の盾になった。
まさか両腕両足、それに心臓を貫いてくるとは思わなかった・・。
意外と痛いな・・
とりあえず・・

「・・絶・・・切って・・くれ。」

俺がそう言うと、絶は両腕に魔力を込めて鋭くし、突き刺さっている桜の木の根を切ってくれた。
しかし、それでも根の一部が身体に刺さったままなので、それを強引に引っこ抜く。

「壊！貴方何をしているの！？」

何故か知らんが紫が俺に声に怒気を込めて俺に話しかけてきた。

「紫・・・少しうるさい・・。」

紫にそう答えて再び根を強引に抜く俺。先程から血がドクドクと流れて止まらない。
ナイアが俺の近くに来て、抜くのを手伝う。妖忌は一人で桜の木と戦っていた。
爺なのだから無理はするなよ。

「喧しい！俺を爺と言うな！」

・・口に出してないのによく分かったな。というか、俺かわしかどちらかに統一しろ。
と、そんな事を思っていたらいつの間にかナイアと絶が根を抜き終

わっていた。
俺はナイアと絶に、妖忌の応戦をしに行くように言うと身を翻して、とんび座りをしている紫に近寄る。

「壊・・どうして・・。」
「・・なぁ、紫・・。君は幽々子が死んでしまって悲しいか?」
「当たり前じゃない・・!」
「・・なら・・・、どうして俺を・・・置いて死のうとしたんだ?」
「・・・え?」
「君は幽々子が死んで、残された者が悲しむとわかったはずだ。それなのに何故死のうとしたんだ?」

俺がそう聞くと、紫は一瞬何を言っているの理解できないと言った感じの顔をしていた。
先程から後ろで妖忌が「きぇぇぇい!!」と叫んでいるのが聞こえる。妖忌、少し黙っていろ。

「紫、はっきり言って、君が死んだ所で幽々子は喜ばんよ。幽々子だって、君が死ぬなんて嫌に決まっている。
彼女の死んだ理由の半分はおそらく、周りの者たちが自分のせいで次々と死んでいってしまうのが嫌で自害したのだろう。
それなのに、君が死んだら死んだ幽々子はさらに辛くなるんじゃないか?
彼女を友と言うのなら、それくらい気付いてやれ。」

俺がそう言うと、紫は俯いてしまった。少し言い過ぎたかな?
まぁ、言い過ぎたことは後でいいとして、とりあえずあの桜の木を何とかしよう。

「・・紫、あの桜を封印するんだろう?とっととやるぞ。」
「・・・私では無理よ・・。」
「・・情けないな。仕方ない・・。」

俺はそう言いながら腕輪を外す。するといつも通り抑えていた力が溢れ出す。

「大方、妖力が足りないのだろう。俺のくれてやるから早くしてくれ。」
「・・・・・・。」
「黙っていてもいいがな。死んだ幽々子は今の君を見てどう思うだろうな?」
「ッ・・!?・・・私に出来ると思う・・?」
「出来るか出来ないかじゃない。やるんだ。」

俺がそう言うと、紫は顔を上げて立ち上がる。やっといつも通りに戻ったか。

「さて、とりあえず、俺の妖力を君に送る。手を出せ。」
「・・こうかしら?」

紫が左手を差し出してきたので、俺は右手で紫の手を掴む。

「ちょ、ちょっと壊!?／／／」
「黙っていろ。上手く送れなくなる。」

誰かに力を流し込んだろするのは結構集中力がいるし、俺にとっては難しい。
どれくらい難しいかと言うと、いなり寿司を作るために厚さ1ミリの油揚げに酢飯をたくさん詰め込むくらい難しい。

・・いや、やった事はないが・・。とにかく難しいのだ。

「・・紫、俺の妖力は流れ込んでいるか？」
「えぇ・・、凄いわね。私よりも多いじゃない。」

そんなやり取りをしながらも、無事紫に妖力が流れ込んだようで、紫からは大量の妖力を感じられた。・・・無理をしすぎたか？目が霞んできた・・

「術式はすでに発動させているな？」
「えぇ、後は西行妖が動きを止めてくれれば・・。」
「西行妖・・？あぁ、アレか。わかった、俺が動きを止めて隙を作ってくる。」

俺はそう言い、桜の木・・・西行妖に向かって走る。
もう少しだけ持ってくれよ、俺の身体。心でそう願いながら、西行妖の根をすべて回避する。

「壊！もう大丈夫なのか！？」
「そんな事はどうでもいい！お前たち、全員退け！！」

妖忌の問い掛けに俺はそう答える。すると妖忌とナイア、絶は紫の所に移動する。
よし、これで心置きなく戦える！
そう思い、桜の木まで先程よりも速く走って近づく。向こうも「近づけて堪るか！」みたいな感じで
根を7本くらいこちらに向けて突き刺そうとしてくる。
それを霊力、妖力と言った感じの物を右手に集め、近づいて来た根を叩き落す。
しかし、いくら叩き落そうが新しい根が西行妖の下からポコポコと

生えてくる。
そんな事が何回か繰り返されながらも、俺は西行妖の前まで来る。
そしてそのまま殴りかかる。
・・今更だが、木に殴り掛かるなんて馬鹿な事をしたな。俺に殴られた西行妖は動きを止めた。
よし・・・

「紫！」

俺が紫の名を叫ぶと、後ろにいる紫から妖力を感じた。俺は西行妖が動かないように、
さらに魔力で拳を覆い、殴る。能力はあまり使えない。今の俺には大した武器は創れないかただ。
しかし、クックルにもなれない。間違いなくこの西行妖に影響を与えてしまうだろう。

「壊！退いて！」

と、紫が術式を発動させたようだな。しかしなぁ・・退いて・・か。はっきり言おう。無理だ。今だって立ってるだけでも辛い。紫に妖力を渡して、
しかもこの桜、西行妖を殴って足止めしたりしたから、先程から血がドクドクと流れ出ている。
・・・不味い・・、足がふらついてきた・・・・。だが、もう少し持たなければな・・

「壊！何をしているの！？」
「うる・・さい・・。」

俺がそう言った途端、紫の発動した術式が西行妖と俺に向かってく

る。
・・何かさっきと違うぞ?今度は縄ではなく晴明が使うような六芒星のような奴だった。
さてと・・・

「いい退屈しのぎだったよ・・。」

最後にそう言うと、俺の視界は黒く閉ざされた・・・

第１００話：西行妖　封印（後書き）

はい終わりました。終わり方が強引だった気がするけど、気にしない。
次回は壊の過去についてです。

第１０１話：残酷な少年（前書き）

今回は、壊の過去を書きます。

第１０１話：残酷な少年

目の前では庭のような場所でワイヤーを振り回して木を切っている幼い頃の俺がいる。
・・久しぶりに過去の自分が出てきたな・・。
って事はこれは夢だな。違う点があるとすれば、前に夢で見た時よりも幼い頃の俺の背が伸びている。
この頃から背が伸び始めたのだろうか？よく覚えていないな・・・。
しばらく幼い頃の俺を眺めていたら、その俺に向かってある男が近づいた。

「進、少しいいか？」
「・・・親父・・・。何か用か？見ての通り、練習をしているんだが？」
「いや、少し仕事を頼みたくてな。」
「・・わかった。後で行くから待っていてくれないか？」
「あぁ。」

幼い・・めんどくさくなってきたな。昔の俺、進の返事を聞いた親父は頷くとそのまま屋敷の中に入った。
ちなみに、分かっているとは思うが屋敷は洋風じゃなくて和風だ。
昔の俺、進はワイヤーを懐に仕舞い、そして屋敷の中に入った・・・

廊下

ーーーーＳｉｄｅ昔の壊（次からは進）ーーーー

「進、少しいいか？」

庭でワイヤーを上手く扱う練習をしていたら親父が話し掛けてきた。
親父が俺に話しかける理由なんて大体は一緒だ。わかってはいたが用件を聞く事にした。

「・・・親父・・・。何か用か？見ての通り、練習をしているんだが？」
「いや、少し仕事を頼みたくてな。」
「・・わかった。後で行くから待っていてくれないか？」
「あぁ。」

俺の言った事に対して頷いて返事をする親父。とりあえず、一度部屋に戻ろう。
仕事の準備をしなきゃな。そう思い、ワイヤーをポケット仕舞って縁側から屋敷に入る。
そのまま廊下を進み、自分の部屋まで歩く。やがて自分の部屋の襖に辿り着いたので
襖を開けて自分の部屋の中に入る。部屋にあるものは、机とその机の上に乗ったノートパソコン。
それと衣服や布団が仕舞ってある押入れ。俺は机に向かい、４つある引き出しの右の一番上の引き出しを開ける。
中には今まで使った武器などが入っている。俺はそこから前にあるメイド長から取った銀のナイフを取り出す。
（※詳しい事は『第４２話：最後の鬼ごっこと約束』をご覧下さい）
始めは捨ててもいいと思ったが、何となく捨てたくなかった。くだらない理由だな。
そう思いながらも、ナイフの刃を布で包み、懐に仕舞う。さて、行くとするか・・・

ーーーSide壊ーーーー

久しぶりに懐かしい我が家をぶらついていると、少し離れた所に凶道　進を見つけた。
俺は進の後を付いて行く事にした。（進って誰よ?と思っている人は小説を最初から読んで下さい。）
進は真っ直ぐと廊下を歩き、そのまま一つの部屋の前まで来た。

「・・親父、入るぞ?」
「進か、入れ。」

進はそう言うと部屋の障子を開けて中に入った。俺もそれに続いて中に入る。
部屋には親父が座布団の上で座っており、親父の後ろには何ともまぁ達筆な掛軸が飾ってあった。

『例え親でも利用しろ』

達筆な字なのに嫌なことが書いてあるんだよな・・・。

「進、座れ。」

親父がそう言うと、進は親父に向かい合うように座る。ついでに俺も進の横で座る。
しばらく二人とも黙っていたが、進が口を開いた。

「それで?今回の仕事はなんだ?」
「・・あぁ、ある屋敷に住んでいる者たちの皆殺しだ。出来るか?」

「出来ないと言ってもやらされるんだろう？」

進がそう言うと、親父は一瞬だけ顔を顰めたが、すぐに元に戻した。
そして懐から何かが書かれた紙を進に渡した。進はそれを受け取って目を通す。

「・・屋敷がどこにあるかはその紙に書いてある。期限は一週間だ。」

親父はそう言うと立ち上がり、俺と進を残して部屋から出て行った。
進はしばらくその紙を見ていたが、紙を懐に仕舞って立ち上がる。

「・・行くか・・。」

そのまま進は障子を開けて部屋を出る。俺もその後に続いて部屋を出た・・・

ーーーSide進ーーーー

「・・めんどくさいな・・・。」

これから行く屋敷への道を歩きながらついそう呟いてしまった。
別に仕事をどうこう言うつもりはない。ただめんどくさい。それに、まだ学校の宿題も
蒼華を殺してから5年。当時6歳だった俺は11歳になった。学校も、そこそこいい所に入った。
ただ、学校に行っても別に面白い事は無く、授業が終わればすぐに家に帰った。

俺の身長が高いせいか、殆どの奴は俺に何もしなかった。ただ、よく女子から視線を感じるのが怖かったな。
たまに喧嘩を売ってくるような奴もいるが、そういう奴らは武器を使わずに潰せば次からは何も言わなくなった。
話が逸れたな。とりあえず、仕事がめんどくさい。
でもまぁ、一応金は貰ってるから、それでよしとしよう。

「・・ここか。」

くだらない事を考えていたらいつの間にか屋敷に着いていた。
その屋敷は、どことなく蒼華のいた屋敷に似ていた。見た目じゃなくて雰囲気が。
俺はとっとと仕事を終わらせたかったので、屋敷の門に手を掛ける。

「待ちなさい。」

屋敷の門に手を掛けようとしたら、門の先から声が聞こえた。
見てみると、そこにはいかにも「自分、門番ッス」みたいな男が立っていた。

「この屋敷に何かようですか?」

と、向こうが優しい声で聞いてくる。俺はいつも通り仕事モードの口調になる事にした。

「・・はい。少しここの屋敷の主に話がありましてね?通してくれませんか?」

俺がそう言うと、男はしばらく考えるような素振りを見せた。
そして考える素振りをやめ、俺のことを見ながら微笑んだ。

「すみませんが今ここの主は忙しくてですね。今度、お母さんやお父さんと一緒に来てくださいね。」
「・・それなら仕方ありませんね・・。」

俺がそう言うと、男はそのまま屋敷に戻ろうとした。なんだ、初めから入れる気なんて無かったのか。
俺は懐からワイヤーを取り出し、近くに有った石を拾い上げる。そして石を門番の頭目掛けて
投げた。投げたと同時にワイヤーを門の上に括り付け、それを上っていく。
そして門を飛び越えると、門番を確認しに行った。
門番は俺の投げた石に見事に当たり、うつ伏せになって倒れていた。
・・・死んだか？
念のために脈が動いていないかどうか門番の手首に指を当てて確認する。死んでるな。
と言うか弱いな。あんた本当に門番か？

「・・とっとと仕事を終わらせて帰ろう・・。」

そう呟いて、門番の死体を放置したまま屋敷の中に入った・・・・

ーーーSide壊ーーー

進が来た場所は親父に渡された紙に書いてあったであろう屋敷だった。
屋敷の周りには特に何も無く、人もまったく通っていない。進は軽

く門番を倒すと、
そのまま屋敷の中に入った。俺もそれに続いて屋敷の中に入る。
どうでもいいが、俺が見ている夢だからなのか、壁などは幽霊みたいに
すり抜けてしまうから門を開ける必要が無くて便利だな。
まぁ、そんな感じで俺は屋敷のドアを開けるまでもなく中に入ることが出来た。
進はそのまま屋敷の中を歩き始めた。しばらく歩いていると、使用人のような男を見つけた。
使用人のような男は進に近づき、話し掛けてきた。

「何処から来たんだい？もしかして、迷ってしまったのかい？」

顔には笑みを浮かべながら、使用人は進にそう話しかけている。
進は使用人の話には返事をせず、再びワイヤーを上に振り上げた。
それだけだ、それだけの事なのに使用人の腕が切り落とされた。
使用人は初めは唖然としていたが、やがて自分の腕が切り落とされたと理解すると
悲鳴を上げた。

「ぁあああぁぁぁぁぁぁあぁあっ！！！」
「・・うるさい、黙っていろ。」

進は、使用人の悲鳴を聞いても感情の篭っていないような声でそう言うと今度は首を切り落とした。
・・昔の俺はこんなにえげつなかったのか？少しショックだな・・・。
使用人の首を切り落とした進はそのまま廊下を進む。途中で見つけた奴らは全て切り落としていた
（※どこを切り落としていたかは自分でご想像下さい。ちなみに、

即死です。）
実は前の世界にいた頃から人間じゃなかったんじゃないか？俺。

「後は・・ここだけだな。」

と、いつの間にか屋敷の主の部屋に着いていたようだ。進は目の前にある扉を開けて中に入る。
俺も進に続いて扉に入り、中を見る。そこには恐ろしいものを見ているような小太りの爺が椅子に座っていた。
進がその小太り爺に少しずつ近づくと、爺は両手を前に出して「来るな！」と叫んだ。
しかし、そんな事で進が止まるはずもなく、さらに爺との距離が縮まる。

「な、何が目的だ！金か！？金だったらいくらでも払う！だから命だけは助けてくれ！！」
「・・違うさ。俺が今欲しいのはな・・・

――――アンタの命だよ――――

進がそう言って爺の首を飛ばす。それを見た後、俺の視界は暗くなっていった・・・

第１０１話：残酷な少年（後書き）

はい、そんな訳で過去編でした。ちなみに、壊が昔の自分の事を進と言っているのは、たんに作者がそうしたかっただけです。

第１０２話：西行妖封印その後（前書き）

今回は、かなりグダグダしていると思います。・・・いつもそうか。

第１０２話：西行妖封印その後

「・・・痛いな・・。」

目が覚めた俺の第一声はこれだった。どうやら俺は布団で寝かされているらしい。
しかも知らない天井ならぬ知ってる天井だった。というかここは俺の家だ。
何故俺はここにいる？そう思いながらも起き上がろうとするが、身体中が痛くて起き上がれない。
根性で右腕を動かして痛みの原因を見てみると、手首の辺りに穴が開いていた。
すごいな、向こう側が見える。・・いや、ふざけている場合じゃない。
その傷は俺が西行妖にやられた時に出来たもののようだ。そう言えば紫を助けるときに西行妖の根が身体の彼方此方に突き刺さったな。
あの時は途中から感覚が麻痺したから戦っている間痛みを殆ど感じなかった。

「・・壊？」

「ん？・・なんだ紫か。勝手に人の部屋に入ってくるな。」

色々考えていたら部屋の襖が開けられて紫が入ってきた。何故か帽子を外して。レアだな。
と、そんな事はどうでもいい。紫は襖を開けたまま俯いて突っ立っていた。
気のせいか、肩が震えている気が・・・

「・・紫、どうかｓ「壊！」ガハッ！？」

紫がいつまで経っても部屋に入ってこないので話し掛けようとしたら、何故か寝ている俺に飛びついてきた。

「・・・よかった・・。目を覚ましてくれて本当によかった・・・。」

そう言いながら涙を流しつつ、俺を強く抱きしめる紫。それ以上されたら骨が・・・

しかし、紫はそんな事はお構いなしといった感じで俺を『さらに』強く抱きしめた。

いや本当に勘弁してくれ。見ろ、今も傷口から血がドクドクと流れ出ているぞ。

ただ、まぁ・・

「・・・う・・・ぐす・・・。」

泣いている友人を無理やり退かすと言うのも出来んな。それに、泣きたい時は泣かせておくのが一番だ。

俺は紫の頭に手を乗せて撫でる。頭を撫でられている間、紫は声を押し殺して泣いていた・・

「・・・ごめんなさい・・・・。」

俺の身体に包帯を巻きながら紫が謝る。紫は泣いている間ずっと俺に抱きついていた。

しかも、妖怪なだけあってかなりの力でだ。そのせいで西行妖に開けられた俺の傷口から止まることなくドクドクと血が流れ出てしまい、紫が泣き止んだ頃には俺の身体は血塗れになった。布団に付いた血は落ちないので、新しいのに変えよう・・・

「まぁ、友人のためだ。これくらいは我慢しよう。・・もう少し上を巻いてくれ。」

俺がそう言うと、何故か顔を赤くする紫。はて、風邪でもひいたのだろうか？

「なぁ紫、顔が赤いｚ「壊～。遊びに来たぞ～。」紫、悪い事は言わない。すぐに帰れ。」

「そ、そうね。それじゃまた今度会いましょう。」

晴明の声が聞こえたので、紫に帰るように言うと、紫もさすがに不味いと思ったのか急いでスキマを開いて中に入る。

そしてスキマが閉じるのを確認した俺は、そのままに玄関へ向かい、引き戸を開ける。

そこには案の定、晴明がいた。

「急に来ないでくれるか？こちらにも都合と言うものがあるのだが？」

「気にするでない。それよりも・・・・」

晴明はそう言いながら俺の身体を見る。

「・・随分と非道い怪我をしたようじゃな。布でよく見えんが・・。」

「あぁ。両腕、両足、それに胸を突かれてな。血を止めるのが大変

だった。」
「・・・お主よく生きていられたのぅ・・。」
「気にするな。とりあえず、上っていってくれ。茶を出そう。」
「うむ、邪魔するぞ。」

そう言いながらズカズカと上りこんで、客間の襖を開けて中に入る晴明。
さて、茶の用意をしなければな・・・・・

ーーーSide紫ーーー

「ふぅ・・・。危なかったわね。」

まさか都最強の陰陽師、安部晴明が壊の家に来るとは思わなかった。いくら私でも都最強は相手にしたくない。

「・・・幽々子・・・」

私は親友とも言える友人の名を呟く。西行妖を封印した後は大変だった・・

――――回想――――

「いい退屈しのぎだったよ・・。」

身体中から血を出している壊は、そう言いながらゆっくりと後ろに倒れた。
それを見た途端、私は壊に向かって駆け寄った。そして倒れている壊を抱き上げる。

「壊、目を覚ましなさい！」
「紫殿、落ち着いてくだされ！壊を治療するのが先です。」

後からやって来た妖忌に言われて気が付いた。そうだ、まずは怪我を治療しないと・・
そう思い、妖忌に屋敷の部屋へ移動させてもらおうと言おうとした時・・

「・・・ッ！？」

壊の懐が光りだし、私が持っていたのと同じ丸い小さな石が出てきた。
そしてそこから大きな獣のような口が出てきた。
鋭い牙が上下に並び、大きな口の中には目玉がふよふよと浮かんでいる。身体のようなものは見当たらない。

「・・・ひょっとして壊の式なのか？」

妖忌がそう尋ねると、ふよふよと浮かんでいる目玉を上下に揺らした。
壊の式は、その大きな口をさらに大きく開けた。そして私に抱きかかえられている壊を吸い込んだ。
・・・は？

「ちょ、ちょっと!?」

私が何か言おうとすると、壊の式は私も一緒に吸い込んで口の中に入れた。

――――回想終了――――

そこから記憶が曖昧なので良く覚えていない。気が付いたら壊の家で寝ていた。

たぶん、あの壊の式が運んでくれたのだと思う。しかし、何故わざわざ壊の家に運んだのかわからない。

それに・・・

「友人、か・・。ふふふふ・・。」

あの言葉が嬉しくて思い出すと笑ってしまう。壊もちゃんと私を友人と見てくれていた。

個人的には、友人以上になってもいいのだけれども・・・

まぁ、それはまた後で考えておくとしよう。とりあえず、もう一回あの術を幽々子に試してみよう・・・

ーーーーSide壊ーーーー

ズカズカと上りこんできた晴明に茶を出す。晴明は俺の出した茶を飲みながらまったりしていた。

「ふぅ・・・。」
「俺よりも爺みたいだな。」

晴明にそう言う。・・今思い出したが服を着ていなかった。客人の前で包帯だらけの身体を晒すのも失礼だな。そう思い、服を取りに行くために立ち上がる。
が・・

「・・・晴明、足を掴まないでくれ。」

何故か晴明に足首を掴まれてしまったので、動きを止める。

「まぁ待たんか。我がお主の怪我を治してやる。」
「・・・いいのか?」
「うむ、問題ない。とりあえず座れ。」

晴明の言うとおりその場に座り、巻いていた包帯を全て解く。
いや、包帯を解いたほうが見やすいのではと思ってな・・・・・

「とりあえず、胸に空いた穴を塞いでくれないか?ここが一番痛くてな・・・。」

俺が傷を見せると、何故か俯く晴明。・・何故?

「おい、早く治してくれ。空気に当ると痛いんだ。」
「う、うむ。少し待て。すぐに治す／／／」

・・・何故顔を赤くする?
まぁ、そう思いながらも怪我を治療してもらった。何か俺の身体に

触るとさらに顔を赤くしていたが、気にするほどの事でもないだろう。

その後、晴明に屋敷に帰ってもらい、何事もなく一日は終わった・・・

あ、ナイア返して貰ってない。

第１０２話：西行妖封印その後（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。次回は何を書こうかな・・・

第１０３話：久しぶりの幽香（前書き）

戦闘シーンなしです。

第１０３話：久しぶりの幽香

幽々子が死んでから一週間。その間に怪我は完治し、力も大分戻った。
紫が幽々子の魂を縛り付けているが、未だに目覚めていない。おそらく幽々子が目覚めるのはもう少し先だろう。
と言っても、幽々子の身体は西行妖を封印するための媒介にしてしまったらしいので、次に俺が出会う幽々子は人じゃないだろうな。
まぁ、俺は別に構わんさ。どうせもう『会う気もない』しな。幽々子が死んで西行妖が襲い掛かって来た時、俺は心が躍った。幽々子が死んだというのに、それよりも待ち望んでいた西行妖への興味のほうが何倍も強かった。
友人の親友（紫）が死んだのに何も思わなかった奴が行っても仕方ないさ。
向こうも気分が悪くなるだけだろう。まぁ長々と語ってしまったが、要するに俺は暇なわけだ。何か面白い事でもないものか・・・・

「と、まぁそんな訳でここに来た。何か面白いことは無いか？」
「無いわよ。」

目の前には、如雨露で花畑の花に水を与えつつ俺を呆れた目で見る幽香。
そんな目で見るなよ・・・。

「普通、暇だからって言う理由でこんな所まで来ないわよ？」
「幽香、君は俺が普通だと思っていてくれているんだな？」
「・・・ごめんなさい・・・。」
「・・やはり思っていなかったのか。」

すまなそうな顔で謝られたからさらにショックだ。あぁそうさ！俺はもう普通じゃないさ！
分かっているんだよそんな事は！だがな、俺だって元は人間なんだよ。傷つくんだよ。

「・・まぁいいさ。それより退屈で仕方ないんだ。せめて何か手伝う事でもないか？」
「あら、それじゃ向こうの花に水をあげてきてくれない？」
「わかった。なら如雨露を貸してくれ。」
「はい。」

俺がそう言うと、幽香が如雨露を渡してくれた。言っておくが、『この時代に如雨露なんてなくね？』と思っている奴、忘れるな。ここは別の世界だ。つまり、こんな時代でも他の国とかではもの凄い科学が発展しているかもしれないと言う事だ。
・・・そもそも他の国なんて有るのだろうか？今度確かめてみるか。

「どうかしたの？」
「いや・・。行って来る。」

俺はそう言って幽香から離れて花へ水を与えに行く。それにしても

花の数が多いなぁ・・。
そう思いながらも、花に水をやる。・・結構楽しいな・・・

花に水をやり終えた後、何故か幽香の家に招かれて紅茶を出して貰っている。
そう言えばこの世界に来てから紅茶はあまり飲んでいないな・・・。
そう思いながらも、香りを楽しみながら紅茶を口に含む。

「・・どう?」
「・・・あぁ、美味い。」
「そう・・。」

俺がそう言うと、安心したように自分の手元にある紅茶を飲み始めた。
それを気にしないで幽香の淹れてくれた紅茶を再び飲む。それにしてもこのティーカップ、何処で買ったのだろうか?

「ねぇ壊。暇なら私と戦ってくれないかしら?」
「・・・確かに暇だが君と戦うと疲れるから断らせてもらう。」
「いいじゃない。」
「断る。大体、俺が君に勝てるわけ無いだろうが。」
「いや、貴方前に私に勝ったわよ?」

それはいつの間にか腕輪が外れていたからだ。それに俺はその時のことを覚えていない。

「仕方ないわね。じゃ諦めるわ。」
「そうしてくれ・・。っと、そろそろ帰るとしよう。」
「そう?送って行きましょうか?」
「いや、いいさ。それじゃあな。」

俺はそう言いながら椅子から立ち上がり、そのまま玄関のドアまで進んで開ける。
言っておこう、突っ込んだら負けだ。そんな物あるはずが無いとか思うな。ここは別の世界だ。
そして俺は家に帰った・・・

第１０３話：久しぶりの幽香（後書き）

そんな訳で終わりました。次回は物語をチョコッと進めます。
あれですよ。寺の話でも書こうかなと・・・

第１０４話：バレタ狐（前書き）

今回は、藍の話を進めたいと思います。

第１０４話：バレタ狐

今、俺の目の前には帝の使者が俺の出した茶を啜っている。そう、依頼だ。しかし、今回は帝からの依頼ではない。
帝の周りにいるお偉いさん(貴族)からの依頼だ。何でも、数週間前から帝の具合が悪くなっていて、しかも最近じゃ悪化しているらしい。医者にも見せたが、病気の類ではないと言われたので、都にいる陰陽師たちに見せてみたら、何かに当てられているが自分たちにはどうする事もできないと言ったそうだ。最近の若いのはこれだから・・・ちなみに、まったく関係ないがナイアは返してもらった。と言うか朝起きたら枕元に置いてあった。
たぶん紫が置いて行ったのだろう。

「あの・・壊殿？そろそろ返事を聞きたいのですが・・。」
「ん？あぁ、すまんな。どうせ暇だからその依頼を受ける事にしよう。」

俺はそう言いながら立ち上がり、壁に掛けてあるコートを着る。そして玄関まで向かう。それに続くように、帝の従者が残っている茶を飲み干して俺の後に続く。報酬はどれくらい取ろうかな・・・

と、まぁ金のことを考えていたらいつの間にかいつも帝と俺が話していた所に案内された。しかし、今回は帝はいない。自分の部屋で寝込んでいるそうだ。帝の代わりにお偉いさん方が俺の目の前で座っている。

「・・で、俺はいつまでこうしてなければいけないんだ？」
「もう少し待て。貴様の他にももう一人、陰陽師を呼んだ。」

・・もう一人ね・・・。俺はあまり信用されていないのだろうか？

「失礼します。」

そんなことを考えていると、後ろから従者のものであろう声が聞こえた。そして襖を開ける音が聞こえると、
そのまま従者ではない誰かが中に入ってきた。・・前は障子だった気がするんだが・・・。気のせいだろうか？
（※たぶん気のせい。）入ってきた誰かは俺の横に座った。

「・・何だ、君だったのか。晴明。」

俺の横に座ったのは晴明だった。まぁ、確かに晴明の実力だったら呼ばれてもおかしくないな。
と言うか、何故今まで呼ばれなかったのかが不思議なくらいだ。

「安倍晴明、只今参りました。」
「うむ、では依頼内容を確認させてもらうとしよう。」

そう言いながらゴホンと咳払いをするお偉いさんＡ　。はっきり言って似合わない。

「・・依頼内容は確か、帝の具合が悪いから何とかしてくれ、だったな?」
「うむ。都一番の医師にも見せたが、どうやら普通とは違うらしくてな。陰陽師に見せてみたら
妖気に当てられていると言われたのだ。何とかして治せないかと聞いてみたところ、今の自分たちには出来ませぬと言っておった。そこで、都でも有名なお主らならどうにかできぬかと思ったのだ。」

お偉いさんAがそう言うと、横にいた晴明が何か考えているような顔をした。正直、こんなつまらない依頼早く終わらせて家に帰りたい。

「・・とりあえず、帝がどんな風になっているか見せてくれないか?帝がどんな調子が分からないことは何とも言えないからな。なぁ、晴明?」
「・・そうじゃのお。どうか我々にも調べさせてくれませぬか?」
「・・・わかった。」

お偉いさんAがそう言うと、いつの間に来たのか従者が隣にいた。そして「こちらです」と言いながら襖を開けて部屋を出て行く。俺と晴明もそれに続いて部屋を後にした・・・

従者に案内されて着いた帝の部屋は、いかにも『貴族の部屋ですよ

ー』みたいな部屋だった。
いや、なんか無駄にキラキラした飾りがしてあるからそう思ったんだ。横にいる晴明も呆れたような顔をしている。
俺は帝の許可も得ずに障子を開けて中を見た。・・・中もキラキラしていた。金も無駄だな。
そう思いながらも帝が寝ている布団に目をやる。帝の顔色は悪く、何か知らんが青色になっていた。・・死んだんじゃないか？

「壊、お主よく勝手に帝の部屋に入ろうと思ったのぅ・・。」
「こっちは治療してやるんだからこれくらい構わんだろうさ。」

俺はそう言いながら寝ている帝の横に座る。それに続くように晴明も、俺と向かい合うように座った。
晴明は帝の額に手を乗せる、目をつぶり始めた。しばらくそうしていると、晴明はゆっくりと目を開けてこう言った。

「・・壊、帝が何故こうなったかわかったぞ。」
「・・そうか。で、何故だ？」
「それを話すにはまず貴族たちに集まってもらわなくてはのぅ。」

晴明はそう言いながら、近くにいた従者に耳打ちを始めた。そして晴明の耳打ちが終わると、従者は部屋を出て行った。
しばらくして従者が連れてきたのは、先ほどのお偉いさんと玉藻だった。・・・玉藻？

「さて、皆様方、集まっていただき真に感謝いたします。」
「晴明殿。帝が何故こうなったのかわかったのですな？」
「はい。それは・・・。」

晴明はそう言いながら玉藻を見る。・・気付いてしまったようだな・

・。

「玉藻様。最近は帝が貴方様とよく部屋でお話をしているとか。」
「・・はい。確かに帝は、最近はよく私に構ってくれております。」
・・・はて?こいつは誰だ?玉藻がこんなに丁寧に話すはずが無い。
と言うことは偽者か!
ふざけるのはこれくらいにしてと・・・。
「・・玉藻様。」
晴明が真剣に表情をしながら玉藻を見つめる。それを見た玉藻は、
額に汗が一筋流れた。
・・自分でも気付いているみたいだな。その玉藻の汗を見て確信し
たのか、晴明はこう言った。
「貴方は・・いや、お主は狐じゃな?」
晴明がそう言った途端、玉藻の周りに風が集まり、小さな竜巻にな
って玉藻を隠した。
そして竜巻が消えると玉藻の姿も消えた。・・逃げたか。
「こ、これは一体・・・。」
「・・帝の妻の玉藻様は妖怪だったのでございます。
おそらく帝は、長くあの妖怪と一緒に居たからその妖気に当てられ
てしまったのかと思われます。」
それを聞いた貴族のお偉いさんは驚きの表情をしている。まぁ、普
通ならそうだろうな。
ちなみに、俺はすでに玉藻が原因だと気付いていたので驚かない。

玉藻は人に化ける事と同時に、自らの妖力を霊力に化かす事が出来る。それで今まで妖怪でないと誤魔化していたようだが、それは力の無い者にしか通用しない。俺や晴明くらいまでなると見破られてしまう。

さらに、最近では何故か妖力が本当に僅かだが漏れていて、意識すれば上の中くらいの陰陽師でもわかってしまうくらいだ。

それも頑張って誤魔化していたようだが、今日で終わったな。晴明が気付いてしまったから。

「ぐ・・・。・・・ここは・・・？」

そんな事を考えていると、寝ていたはずの帝が起きた。非道い寝癖だな。

帝が起きた事により、周りにいたお偉いさんが歓声の声を上げながら共に抱き合ったりしていた。

・・・なんだか気色悪いな・・・。

第１０４話：バレタ狐（後書き）

はい、そんなわけで今回も終わりました。次は藍との戦闘シーンがあるかも？

第１０５話：負けた兵（前書き）

今回は、壊は戦わせない事にしました

第１０５話：負けた兵

帝が起きた後、お偉いさんはどうして帝が目覚めなかったのかなどを説明し、玉藻を退治するように言った。
すると帝は何の迷いも無くそれを承知し、都にいる兵からその辺にいる侍っぽいのまで呼び寄せて約五万もの軍隊を作った。
もちろん、その中には陰陽師も入っており、俺や晴明までもが玉藻退治をする事になってしまった。・・と言っても、陰陽師は俺たち二人だけだがな。他の奴らは役に立たないと言うことになったらしい。哀れなり、雑魚陰陽師。
まぁ、そんな訳で玉藻を退治しに行くわけだ。ちなみに、玉藻のいる場所はもう分かっている。晴明が頑張って玉藻の妖力を辿って見つけてくれた。
さらに細かく説明すると、俺たちを指揮するのは都で有名な・・・誰だっけ?まぁ、有名な将軍三人だ。
そして先程その将軍たちの内一人に『貴様たちは戦うな』と言われた。たぶんあれだ。手柄を自分たちだけの物にしようと思っているのだろう。陰陽師の力を借りずに妖怪を退治できれば、今よりも階級が上る事間違いなしだ。そうすれば金がもっと手に入る。
もちろん、俺と晴明はそれに従った。俺はその将軍Ａにこう言ってやった。

「あまり妖怪をなめるなよ?」

俺がそう言うと将軍Ａは鼻で笑い、スタスタと歩いて行ってしまった。
さてさて自信満々の将軍たちはどう戦う?そう思いながら俺と晴明も将軍Ａに続いた・・・

で、目的地に着いた。森の中心のような場所で、かなり広くて周りに大きな木が立っている。
その中心に玉藻はいた。しかも、驚いた事に玉藻は尾が九つの狐になっていた。確か・・・九尾と言ったか？
俺と晴明は戦いの邪魔にならないように近くの木に登って観戦する事にした。先に仕掛けたのは人間チームだった。
弓をも持った兵士が構え、将軍Ｂの「撃てー！！」と言う掛け声と共に大量の矢が空を切る。
しかし、玉藻はそれをかわそうとせず、九つの尾に火を点して振り下ろした。すると殆どの矢が燃えて地に落ちた。
・・意外とやるじゃないか、狐。
そう思っていると、不意に玉藻がいかにも妖怪らしい咆哮を上げると、いきなり兵たちの様子がおかしくなった。
はて？どうかしたのだろうか？俺はそう思いながら兵たちの声に耳を傾けた。

「ひっ！来るな！来るなぁぁぁ！！」
「やめろ、やめてくれ！あぁぁぁぁぁっ！？」
「ママーーーー！！！」
「あ・・アハハハハハハハ！！」

「俺は・・自由だーーー!!」

ある者は何かに恐怖しながら叫び、ある者は刀で味方を切っていたり、またある者は狂ったように笑いながら両手を広げて走っていたり、服を脱ぎだそうとしている者までいる・・あぁ、そういう事か。

「・・晴明。これは幻術を見せられているんだな?」
「・・そのようじゃのう。」

よく見れば将軍たちまで怯えていたりしている。だから妖怪をなめるなと言ったのになぁ・・・
玉藻の方を見てみると、幻術を見せられている兵たちを見ながら尾を揺らし、そのまま森の中に入ってしまった。

「また逃げられたな。」
「そうじゃのぉ・・・。」

どことなく悔しそうな顔をしていた。それを大して気にもとめずに思った事がある。
・・・こいつ等はいつになったら元に戻るんだ?
そう思いながらも、俺はそいつらを助けることなくただ見ていた・・・
(※めんどくさいから。)

結局、晴明が全員元に戻した。今は帰る途中だ。都に向かって進みながら俺は兵たちの様子を見た。
兵たちは未だに何かに怯えているような表情をしており、ついでに『ドヨ～ン・・・』としていた。ついでに将軍ＡＢＣもそんな感じだった。ちなみに、先頭は将軍ＡＢＣで、次が俺と晴明。その後ろに兵がついて来ている。
都に帰ったら帝になんて言われるだろうな？何か俺も色々言われそうだが、その時は将軍Ａに言われた事をそのまま言えばいいな。そう思いながら歩いていると、やがて都が見えてきた。都の前にはすでに、何人かの陰陽師お偉いさん＋帝がいた。
他の兵たちがそれを見た途端、さらに『ドヨ～ン・・』とした空気が濃くなってしまった。いい加減うつりそうだからやめてくれないか？そう思っていると、帝がこちらまで近寄ってきた。そして一番前にいる将軍Ａに話しかけた。

「・・・妖怪は退治できたのか・・？」

帝の言葉に答えずに俯く将軍Ａ。まぁ、素直に答えられるわけ無いな。
俺が代わりに答えてやるとしよう。そう思って、将軍Ａを押し退け、帝の前まで行く。

「帝、依頼は失敗だ。」
「なんだと！？何故だ！貴公や安倍晴明までおったと言うのに、何故退治できなかった！？」
「喧しい。少し落ち着け。今回、俺と晴明は戦っていない。」

俺がそう言うと帝は、何を言っているんだコイツ、見たいな顔で唖然とし始めた。
まぁ、ここまでは予想していた。

「帝、今回の指揮はそこの将軍たちに頼んでいたな？」
「・・うむ、三人とも屈強の者たちだ。それがどうかしたか？と言うか貴公が戦わなかった事と関係はあるのか？」
「屈強かどうかは関係ないが、俺と晴明はそこの将軍に戦うなと言われて参加しなかった。」

そう言いながら将軍Ａを指差す。ちなみに、あの時ＢとＣは特に何も言ってこなかった。
帝は将軍Ａを睨みつけながら、将軍Ａにどんどん近づく。そして将軍Ａの目の前で立ち止まると、将軍Ａを殴った。
将軍Ａは、帝の行動を予想できなかったのか、そのまま仰向けに倒れてしまった。

「て、帝！一体何を「黙れ！」がぁ！？」

将軍Ａの言葉を遮るように帝が起き上がろうとした将軍Ａの腹を踏みつけた。

「貴様、何故あの二人を戦わせなかった！？
どうせ妖怪のことを侮った挙句、手柄を全て自分のものにしようと思っておったのだろう！
手柄が欲しいのならいくらでもくれてやる！だがな、民の事を考えないのなら貴様なんぞここでは必要ない！」
「ぐ・・、申し訳ありませぬ・・・。」

将軍Ａは謝っているが、帝はそれを無視して踏む、踏む、踏む。さすがに哀れになってきたな・・。
俺は未だに将軍Ａをガンガンと踏んでいる帝の肩を掴んで後ろに下げた。

「・・・何をする?」
「・・こんなくだらない事をする暇があるのなら次にどうするか考えておけ。」

俺がそう言うと帝は、渋々と言った感じに将軍Aの腹から足を退かす。
そして身を翻してそのまま都の中に入ってしまった。他の奴らは帝が都に入るの唖然とした顔で見ていたが、
帝が都に入ると途端に帝を追いかけ始めた。・・・さて、

「・・・おい、駄目将軍。」
「喧しい!誰が駄目将軍だ!!」
「どうだ?侮っていた妖怪に手も足も出なかった気分は?」

俺がそう言うと、駄目将軍は無言になった。・・まぁいいさ。

「駄目将軍。次は俺と晴明も戦う。構わんな?」
「・・・あぁ。」

俺は駄目将軍の言葉を聞くと、そのまま家に帰ることにした。
ククク・・『お遊び』なんぞでは終わらせんぞ、狐・・・

第１０５話：負けた兵（後書き）

次回こそは壊を戦わせたいです。

第１０６話：歪んだ世界（前書き）

・・何も書く事が無いです・・

第１０６話：歪んだ世界

玉藻退治失敗事件から二日経った。玉藻はうまく姿を隠しているようで、晴明も中々見つける事ができないと言っていた。
都でも、他の村に行って情報を集めたりと色々頑張っているようだ。ご苦労様。ちなみに、俺と晴明を戦わせないで任務失敗をした将軍Aは、罰として罰金みたいなのを食らった。１００両くらいだっただろうか？意外と取ったな。
何故ここで江戸時代の金が出て来るんだとかそう言う突っ込みはなしにしよう。俺も使っているしな。
まぁ、そんな事はどうでもいい。実は俺は新しい式を創ったのだ。・・またかよとか思うなよ？
暇なんだから仕方ないだろう？絶たちと特訓しようと思ったのだが、今日は絶たちが自由に過ごせる日だ。邪魔をするわけにいかないしな・・・。

「壊殿。おりますか？」
「ん、少し待て。今行く。」

式について考えていたら玄関から声が聞こえたので立ち上がり、そのまま玄関まで向かう。そして引き戸を開けると、そこには以前団子を食わせてやった都の兵がいた。

「どうした、何か用か？」
「・・九尾の居所を掴みました。」
「そうか・・・。わかった。すぐに行こう。」

俺はそう言いながら外に出て引き戸を閉める。そしてそのまま兵と一緒に都に向かった・・・

都に着くと、俺はすぐに帝のいる宮殿？に向かった。そしていつものように帝の前に座らされた。
横には晴明と将軍ＢとＣがいる。・・将軍Ａはどこにいるんだ？

「皆の者、集まってくれた事を感謝する。」
「・・別に構わんさ。戦えて、しかも金を貰えるんだからな。」
「こら、壊！・・帝、申し訳ありません。」
「気にする事ではない。もう慣れた。さて・・。」
「・・玉藻が見つかったんだな？」
「うむ・・・。奴はここから少し離れた草原におる。」

・・草原か・・。まぁ、確かに獣の本領発揮は大抵は森や林、それと山の中などと言った自然の中だからな。おかしいな話じゃない。ただ、草原じゃ身を隠せないんじゃないか？もしかしてこちらにいる兵を侮っているのだろうか？

「・・考えても仕方ないな・・。」
「？壊、どうかしたのかのぅ？」
「何でもない。帝、そろそろ行かせてもらうが、一つ聞きたい事がある。今回も前と同じか？」
「・・そうだな。しかし、今回の全体的な指揮は安倍晴明に任せる事にした。そこの将軍たちそれを兵たちに伝える事が仕事だ。」

・・つまり、殆ど晴明が指揮をするという事か・・。まぁ、それが

一番妥当だな。
俺でもいいが、晴明のほうが慣れている気もするしな。

「そうか。なら頼むぞ晴明。」
「うむ、任せろ！」

晴明はそう言いながら右手でドンと自分の胸を叩いた。・・何か音が小さかった気がするな・・。
そんなくだらない事を思いながらも、俺は晴明に指揮を全面的に任せる事にした。・・まぁ、聞く気はないがな。

道中雑魚妖怪の相手をしながらも目的地の草原のような場所に着いた俺たち。それにしてもこの草原広いなぁ・・・。
そう思っていると、少し離れたところから妖力を感じた。そしてその妖力は少しずつだが確実にこちらに近づいてきていた。
やがてその妖力を持ったものが目の前に現れた。そう、文字通り目の前に現れたのだ。現れたのは案の定、九尾姿の玉藻だった。横にいる晴明は警戒して霊力を出している。
俺は玉藻に向かって一歩進み、そして立ち止まる。・・後ろの兵たちが何やら騒いでいるがどうでもいいな。

「二日ぶりだな？元気にしていたか？」
「グルルルゥ・・・。」

俺の問い掛けに対して唸り声を上げる九尾玉藻。・・ずいぶんと嫌

われたものだなぁ・・。
さらに言うと、晴明は俺を見て呆れている。コミュニケーションは大事なんだぞ？
俺が晴明にそう言おうとしたら、九尾玉藻が前と同様に咆哮を上げた。・・幻術か・・・。

「ぎぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そう思っていると、後ろから叫び声が聞こえたので振り返ってみると、一人の兵がうつ伏せになって倒れていた。
それに続くように他の奴らがこれまた前と同様、笑ったり走ったり服を脱ごうとしたりし始めた。効き目抜群だな。
くだらない事を思っていると、俺の視界にあるものが全てグニャリと歪んだ。
例えるなら、少量の水に飴玉を放り込んで溶けてモヤモヤと出てきている砂糖を一回だけかき混ぜている感じだ。
まぁ、とにかく不思議な感じだ。と言うかどう考えても幻術だよな？
しばらくその風景を眺めていると、右腕に違和感を感じたので右腕を上に上げて見てみると、俺の右腕の皮膚がモゾモゾと動き出し、やがて皮膚を突き破って見た事も無い蟲がゾロゾロと出てきた。しかも突き破られたところが地味に痛い。
幻術と言うのは戦いの中ではある意味かなり有効的だ。どんなに強い奴でも心が折れてしまえば役に立たなくなる。
神奈子もそうだったしな。
（※わからない人は『第３８話：三神ｖｓ凶鳥（変装）』を見てください）
しかも玉藻は幻覚と幻聴に幻視、ついでに痛覚まで操れるようだ。
先程からさまざまな所から男や女の呻き声のようなものが聞こえてくる。たぶん兵たちのものではないだろう。俺は幻覚に幻聴、それに幻視までは操れるが、さすがに痛覚までは操れない。

この玉藻の見事な幻術で何人が壊れているだろうか?また、何人が壊れかけているだろうか?それほどまでに玉藻の幻術は見事だ。皮膚を突き破って出て来た蟲が俺の腕を伝って顔まで近づく。そして口の中に入ろうとする。・・・さすがに嫌になってきたな。俺はそう思いながら目を瞑り、自分の身体にある力を一瞬だけ開放する。その瞬間、歪んでいた世界にヒビが入る音がし、パリーンと割れた音がした。割れた音を聞いた俺は少しずつ目を開く。そこには先程まで気色悪い蟲はいなく、最初に来たときの同じ草原が広がっていた。・・どうやら元に戻ったらしい。

しかし、俺は元に戻ったが後ろにいる兵たちは未だに叫んでいたり笑っていたりしている。何人かは倒れている。

とりあえず、横にいる晴明に元に戻させるか。そう思い、晴明を見てみると・・・

「あ・・あぁ・・・。」

・・自分の肩を抱くようにし、ガタガタと震えながらながら泣いていた。・・都最強を恐怖に陥れるとは・・・やるな。狐。

と、ふざけている場合じゃない。晴明はこんなんだから俺が兵たちを元に戻すしかないな。俺は能力で笛を創る。玉藻が警戒していたがそれを気にせずに笛に霊力を込めて吹いた。すると騒がしかった兵がバタバタと倒れていく。この霊力やら妖力やらを込めた音を聞いたら、力の無い者は眠ってしまう。・・まぁ晴明などと言った力のある者には通用しないがな。

やがて俺の演奏が終わった頃には、俺と玉藻と晴明以外は全員眠ってしまった。さて・・

「晴明、大丈夫か?」

「あ・・ぅ・・・。」

「・・大丈夫じゃないな・・。」

俺は人差し指に霊力を込めて、晴明の額をチョン、と突付いた。すると晴明は「あ・・」と言ってそのまま前に倒れた。これでよし。俺は晴明をそのままにして置き、再び玉藻を見る。玉藻は未だに「グルルゥ・・」と俺を威嚇し、殺気と妖力を放ちながら尾に火・・狐火を点した。・・なるほど、そちらも準備は整っているようだな。

・・ククク・・・

自然に笑みがこぼれる。『お遊び』ではない。本当の戦い。さぁ・・

・

――始めようじゃないか。退屈しのぎにはなってくれよ？――

それが始まりの合図だった・・・

第１０６話：歪んだ世界（後書き）

はい終わりました。結局また戦わせる事が出来ませんでした。
でも、次は必ず！・・戦わせる事が出来たらいいなぁ・・・。

第１０７話：大妖怪　九尾ｖｓ紅鎖華　壊（前書き）

更新が遅れました。すいません。

第１０７話：大妖怪　九尾ｖｓ紅鎖華　壊

ーーーSide三人称ーーーー

先程の壊の発言を聞いてさらに警戒をする九尾、玉藻。玉藻は九尾の姿で身を低くし、九本の尾に狐火を点しながら唸り声を上げ、壊を睨みつけている。

対する壊は、腕を組んで自然体で構えている。顔は無表情を装っているが、彼の目は退屈しのぎを見つけて喜んでいるようにも見える。

壊の後ろにいる兵たちは皆壊から離れた位置で気絶しており、今は壊と玉藻の二人だけが向かい合って殺気を飛ばし合っている。風で草原の草がワサワサと揺れる。

「・・・ッ！！」

先に動いたのは玉藻だった。彼女は壊に向かって走って近づき、右前足の鋭く尖った爪をを振り下ろした。壊はそれを後ろに軽く跳んで避ける。

しかし、玉藻は予め自らの尾に点しておいた狐火を壊に向けて飛ばした。壊は薙ぎ払うように右手を横に振る。すると、飛んできた狐火が全て掻き消された。

彼がやった事は、右の腕全体に妖力を込め、それを振るって飛ばしただけだ。普通は、こんなものでは大妖怪である九尾の狐火は消えることは無いが、生憎と彼は普通ではない。

自分の狐火を消されるとは思わなかったのか玉藻は驚いていた。しかし、すぐに元に戻ると彼女は再び尾に狐火を点し、次に宙へ跳び、そしてそのまま前に回転しながら壊に向かって突っ込んだ。

それは壊から見たらヨーヨーのように見えただろう。しかも、狐火のオマケ付き。

壊は突っ込んできた狐ヨーヨーを先程と同じく後ろに飛んでかわす。
しかし、地面に着地した狐ヨーヨーは止まらずにそのまま壊に向かって突っ込んだ。油断していた壊はそれを真正面から受け止める。
『キィィィィ！！』と、まるで金属がぶつかり合うような音が辺りに響く。
やがて狐火が消え、玉藻の回転も止まって行く。止まった途端、玉藻は壊から距離を取るように後ろに跳んだ。壊の黒いコートは先程の狐火で所々焦げており、プスプスと煙を上げていた。
壊は少しの間自分の黒いコートを確認すると、再び玉藻の方を見た。

「・・まさかその程度ではないだろうな？」

それを聞いて彼女が自分から感じた感情は怒り。１０００年とまでは行っていないが、彼女はこれでも５００年は生きている。しかも彼女は大妖怪の九尾だ。強くなると、どの妖怪でもプライドと言うものがある。彼女はそれが他人よりも少し強かった。ただの陰陽師にあんな事を言われるのは気に食わなかったのだろう。
今の彼女が壊に抱いている感情を簡単に言うなら、おそらく『気に食わない』だろう。玉藻は再び壊に向けて殺気を放つが、壊はまるで何ともないような顔をしている。
そこで彼女の堪忍袋が切れた。玉藻は壊に飛び掛り、そのまま前の両足振り回す。壊はそれをギリギリのところまで引き付けて全てかわした。そして玉藻の右前足を掴んだ。

「・・戦いでは怒りに身を任せた奴が早く死ぬ。覚えておけ。」

壊はそう言うと、玉藻を前に放り投げた。しかし、彼女は地面にぶつかる前に、身を翻してしっかりと４本の足で着地する。
もちろん、壊もこんな攻撃で倒せるわけが無いとはわかっている。わかっていてやっているのだ。彼からすれば、戦いは自分を満たす

ためにやっているようなものだ。この時代ではパソコンなどと言った娯楽的な物は殆どなく、壊からすれば命を削る戦いこそがいわばパソコンの代わりのような物なのだ。・・そもそも不死身なのに命を削るって、おかしくね？
と言うか、真面目に書くのがめんどくさくなってきた。壊～、バトンタッチ～。

ーーーSide壊ーーー

・・何か頼まれたような気がするが気のせいだろう。
目の前には殺気と妖力を辺りに放ちながら威嚇する玉藻がいる。
・・・あの尻尾を触って見たいと思った俺は間違っていないはずだ。どう見たってモフモフなんだぞ？普通は触りたいと思うだろう？俺はおかしくないよな？
くだらない事を考えていたら玉藻が狐火を飛ばしてきたので横に飛んでかわす。・・が

「甘い！！」

玉藻がそう叫ぶと、狐火が軌道を変えて再び俺の方へ飛んできた。
追尾型か？
俺は霊力を脚に纏い、狐火目掛けて突っ込んだ。そのまま右足を出し、左足を軸にして回転蹴りをする。
すると、玉藻が撃ってきた狐火は俺の右足が片っ端から相殺していった。少し右足が熱い。
狐火を全て消すと、俺は回転するのをやめて玉藻に向かって走った。

・・回りすぎて酔った・・。
そして玉藻の前まで来ると、右手で玉藻を殴って吹き飛ばした。しかし、玉藻は俺に殴られた途端、俺をもふもふの尾で巻いて投げ飛ばした。俺はそのまま地面に叩きつけられたが、大して痛くもなかったので立ち上がって再び玉藻を見た。どうやら玉藻も今起き上がったようだ。起き上がった途端に威嚇するのはやめて欲しいな。

「甘いのはそちらだったな?玉藻。」
「チッ・・!」

本気で舌打ちするなよ・・。傷つくじゃないか・・・。
そう思いながらも、再び玉藻に向かって走った、が、嫌な予感がしたので後ろに大きく跳んだ。先程跳んだ場所を見てみると、そこだけ地面が抉れていた。・・・Ｗｈａｔ?
どういう事だ?ちゃんと見てなかったからまったくわからない。
そんなことを考えていると、玉藻がこちらに向かって走って来た。
そして先程同様、右の前足の爪で俺を切り裂こうと振り下ろす。俺はそれを軽くかわし『ブシュ!』・・・はて?
何故かは知らないが、俺の右肩が切り裂かれていた。玉藻はいつ攻撃を当てたのだろうか?
そう思いながらも玉藻から距離をとる。

「まったくもって厄介な攻撃だな。どうやっているんだ?」
「教えるわけ無いだろうが。」
「それもそうだな。ならその厄介な攻撃を見破れば言いだけの話だ。」
「ハッ。」

鼻で笑われた。玉藻は俺を鼻で笑うと、そのまま俺に向かって走ってきた。そしてまた前足を振り上げて俺を攻撃しようとした。しか

し、俺は先程と同じように玉藻の攻撃をかわす。ここからだ。俺はかわしながら玉藻をじっくりと見た。すると、玉藻の尾から妖力が鋭い爪のような形になってこちらに伸びてきた。なるほど、こういう事か。

俺は伸びてくる妖力をしゃがんでかわし、玉藻の顎に向けてしゃがんだまま蹴りを入れてやった。

玉藻は俺の蹴りをまともに食らって、少し上に浮いた。俺は素早く立ち上がると、浮いている玉藻の腹を蹴って吹き飛ばした。

そのまま受身も取らずに地面に背中から叩きつけられる玉藻。・・ちとやり過ぎたかな？

「貴様ぁ・・！」

「・・ほぅ・・。」

そう思っていたら、玉藻が起き上がり先程よりも鋭く、そして濃い妖力と殺気を放ちだす。

妖力は紫ほどではないが中々のものだな。殺気に関しては紫以上、幽香より少し劣るといった感じか。

ともかく中々の力の持ち主だ。もう少し年月が経てば今よりも楽しめそうなんだがな・・・。

そんな事を考えていると、ふと回りの温度が上った気がした。疑問に思っていたが戦いに集中しようと玉藻の方を見たら、

玉藻が九つの尾にあきらかに先程よりも大きい狐火を点していた。どれくらい違うかと言うと、最初が縦横２０？くらいの大きさだったのに対し、今玉藻の尾に点っている狐火の大きさは大体８０ｃｍくらいになっている。しかも妖力の量が半端ない。下手したらここら一帯が焼け野原になるんじゃないか？

「死ねぇ！！」

これまたくだらない事を考えていたら玉藻が物騒な事を言いながら狐火を飛ばしてきた。
俺はその狐火を何とかかわしていく。
しかし、七つ避けたところで足元の草に足を絡ませてしまい、そのまま前のめりに倒れる。
絡まっている草を無理やり引き千切り、立ち上がる。そして再び狐火をかわそうとしたが、狐火はすでに俺の目の前まで迫っていた。

「まずい・・・・。」

そう呟いた途端、俺は残り二つの狐火に呑み込まれた・・・

ーーーSide玉藻ーーー

私の作った巨大な狐火が、陰陽師、紅鎖華壊を包み込む。私の作った狐火は、そこら辺にある火よりも何倍も熱い。いくら強くてもあの狐火を食らえばひとたまりもないだろう。狐火はしばらく壊の所で燃えていたが、やがて少しずつ消え始めた。
狐火が全て消えると、案の定、壊は黒こげになって倒れていた。顔の皮膚は焼けただれ、服は下は残っていたが上は炭になっていた。
あまり見ていたいものではない・・・。

「・・次に来たら全員殺す。」

私はそう言い身を翻し、その場から立ち去ろうとしたが・・

「・・ッ！？」

不意に後ろから感じる殺気。そして霊力に妖力とよくわからない力。（魔力です）私は咄嗟に後ろを振り向いた。

「・・ク・・・ククククク・・次なんて必要ないさ・・・。」

そう、今し方倒れていたはずの壊が立っていた。両手をダラリと下げ、顔を俯かせたまま肩を震わせて不気味に笑っていた。見る者が見ればその男から感じる力だけで気絶するだろう。何故？確かに殺したはず・・・

「ククク・・非道いなぁ・・。まさか身体を焼くなんてな・・。」

「ッ！黙れ！何故貴様は生きている！？」

私の問いかけに対しても、男は静かに笑っているだけだった。そして男は顔を上げた。その顔は先程見たような顔ではなく、皮膚が焼けただれていた。壊は自分の顔の前まで手を持って行き、頭の上から下までスッ、と移動させる。すると壊の顔はまるで何事も無かったかのように元の顔に戻った。白い髪、少し白い肌に紅い目。

「貴様・・何者だ？」

何とか冷静になりながらも壊に問いかける。壊は静かに、楽しそうに笑う。

「何者？何者だと？ククク・・クッハッハッハッハッ！いいさ、わからないなら教えてやろう！全てに絶望と言う凶を与え、死と言う

凶を与える存在、それが俺、紅鎖華壊だよ！」

壊は、突然狂ったように笑い始めた。右手で目を隠すようにしながら上を向き、左手を少し広げながら楽しそうに笑う。

私は思った。『コイツは妖怪なんかよりもよっぽど危険なんじゃないか？』

やがていつの間にか笑うのをやめた壊がこちらを見ていた。違う点があるとすれば、口を三日月のようにし、目の瞳孔が開いている。

壊は三日月のような口ではっきりと言った。

「さぁ、始めようじゃないか。」

そう言った途端、こちらに向かって走ってきた。それに対し、私は壊に撃った巨大な狐火を作り飛ばす。

壊はそれを避けようともせずに、むしろ速度を速めてこちらに向かってきた。そしてそのまま狐火に呑み込まれた。

しかし、壊を呑み込んだ私の狐火は、まるで弾ける様に・・・いや、実際弾けた。ありえない、私の狐火がそんなに簡単に・・・

「油断は死を招く。」

いつの間にか目の前に壊がおり、それに気づかなかった私は首を絞められた。ぐ・・息が出来ない・・！何とか目を壊の顔に向け、壊の顔を見た。

今思えば、見ない方がよかったのかもしれない。先程はある程度離れていたからわからなかったが、壊の目は濁っていた。紅く鋭い目は水に泥を加えたように濁っていたのだ。その目を見て、私は恐怖した。

「ククク・・どうした？震えているぞ？怖いのか？」

・・認めない。私が誰かに恐怖するなんて絶対に認めない。認めてはいけない。
自分にそう言い聞かせ、尾に狐火を点す。そしてそれを壊に飛ばす、壊はそれを避けるために私の首から手を離し、後ろに大きく跳んだ。
急に手を離された私はその場に落ちた。

「ぐ・・ゲホゲホッ！」
「ククク・・ずいぶんつらそうだなぁ・・。」

尚も笑いながら近づいてくる壊。私は確信した。間違いなくこいつは狂っていると。
少しずつ私に近づいてくる壊。草を踏みしめる足音は、例えるなら死の宣告。
壊が近づくにつれ、妖力が、霊力、殺気がさらに重くのしかかる。
やがて壊が目の前までやって来た。おそらく、これで決めるつもりなのだろう。

「・・なぁ、玉藻。少し俺と賭けをしないか？」
「・・・賭けだと？」
「あぁ。今から俺は力をある程度開放する。殺気に妖力、霊力と魔力も全て桁違いに上るだろう。それに耐えられたら君の勝ちだ。君を逃がす事を約束しよう。もし負けたら・・・・」
「・・負けたら・・？」
「そうだな・・・君を食わせてもらうと言うのはどうだ？狐の肉は不味いらしいが、自分では食った事がないからな・・。」

驚いた。この男は妖怪を食おうと言っている。しかし、この賭けで私が勝てばこの場から逃げる事が出来る。
私はその勝負に乗ることにしたので、頷いた。

すると壊は、より一層笑みを浮かべて右の手首に着いていた腕輪を外した。その途端、先程とは比べ物にならないほどの霊力などが溢れ出した。息が苦しい。身体が思うように動かない。

「・・10秒だ。その間に君が気絶しなければ助けてあげよう。ククク・・はたして君は耐えられるかな?」

ーーーーSide壊ーーーー

「・・・君の勝ちだよ。」

玉藻は、若干ふらつきながらも俺の出した霊力などに耐えていた。その玉藻を逃がそうと手を伸ばしたが・・・

「死ねぇ!妖怪!」

そんな声と共に後ろから一本の矢が飛んできて玉藻の脇腹に刺さった。

矢を撃った奴を確認しようと後ろを向いたが、俺が後ろを向いた途端もう一本矢が飛んできて今度は玉藻の首の近くに刺さった。

後ろを見ると、三本目の矢を撃っている兵がいたが、俺は飛んできた矢を素手で掴み、折った。

「おい、九尾は死んだ。だからそれ以上矢を無駄にするな。」

俺がそう言うと、いつの間にか起きていた兵は地面に座り込んだ。

しばらくすると他の兵もポツポツとだが起き始めた。

やがて殆どの兵とついでに晴明が起きた。俺は晴明に、全ての兵を都に帰すように言った。

「・・お主は帰らんのか？」

「俺はもう一仕事ある。だからとっとと帰れ。」

俺がそう言うと、渋々と言った感じで晴明は兵たちに命令を出し、来た道を戻っていった。

・・さて・・

「約束は守らないといかんよな。」

俺は近くにあった大人が座れるほどの大きさの石に妖力を込めて玉藻が残していった物として置いておく。

こうして置けば玉藻がすでにどこかへ逃げたと言う事になり、俺の家にいるなんて思わないだろう。

そしてかろうじて生きている玉藻を担いで家に戻った・・・

どうでもいいが、何故に玉藻は人型になっているのだろうか？

第１０７話：大妖怪　九尾ｖｓ紅鎖華　壊（後書き）

はい、終わりました。早く瑠璃を出したい・・・。

第１０８話：玉藻と壊（前書き）

藍の尻尾って、もふもふしたくなりますよね？

第１０８話：玉藻と壊

あの後、怪我をしている玉藻を俺の家に連れてきて、首の辺りと脇腹に刺さった矢を文字通り引っこ抜き
包帯を巻いて布団に寝かせた。何故か人の形になっていたから服を脱がせるのが大変だった・・。
で、俺は今布団に寝ている玉藻を看病しているわけだが、玉藻の布団から微妙に出ている九本の尾が気になってしょうがない。
むしろ触りたい。もの凄くもふもふしている。少しくらいいいだろうか？
そう思いながらも、もふもふの尻尾に手を伸ばす。そして触った。
これは・・・

「・・見事な毛並み・・！」

実に触り心地がいい。もう少し触っていても大丈ｂ「ん・・ひゃっ・・！」・・はて？

「・・・・（モフモフ）」
「あ・・ふぁ・・やっ・・！」

・・何故だろう、尻尾を触る度に玉藻がおかしな声をあげるのだが・・・。
しかも顔が赤くなっている。・・・まぁ、そんなことはどうでもいいな。とりあえず、玉藻が起きた時のために何か作っておこう。
そう思って立ち上が（ガシッ。）れなかった。玉藻に服の裾を掴まれてしまった
玉藻の手を引っぺがそうすると

「・・一人にしないで・・・。」

と、訳の分からん寝言を言うので仕方なく一緒にいる事にした。・・もふもふだな。

ーーーSide玉藻ーーー

温かい・・・。目が覚めて最初に思った事はそれだった。覚めたと言っても目はまだ閉じたままだ。

もう少し、この温もりを感じていたい。・・しかし、何故か先程から身体が動かない。

それに何かが身体に巻きついているような・・。さすがに不安になってきたのでゆっくりと目を開ける。

そこには・・・

「・・zzz・・・。」

・・何故か私を抱きしめながら寝ている壊がいた・・・

ーーーSide壊ーーー

「・・・・（怒）」

俺は玉藻に正座させられている。何でも、目を開けたら俺が抱きしめていたらしい。
たぶん尻尾を撫でていたら触り心地が良くて寝てしまって、俺の寝相が悪かったからそのまま玉藻に抱きついてしまったのだと思う。

「・・何か言う事は無いのか？」
「・・すまない。悪気は無かったんだ・・。」
「有ってたまるか！！」
「そんなに怒鳴ｒ・・待て、俺が悪かった。だから狐火を出すな。」

そんなに怒鳴る事無いだろうと言おうとしたら、玉藻が人差し指に狐火を点しはじめた。
こんな所で狐火を飛ばされたら、家が火事になりかねない。そうなったら俺が困る。

「・・・まぁいい。それより何故私を助けた？」
「ん、それはだな・・。約束を守るためだ。」
「・・約束？」
「あぁ。賭けで俺が負けたら君を逃がすと言っただろう？それでだ、逃がそうと思ったら兵が君に矢を撃ってしまってな。
あのまま兵に君を始末してもらうのも良かったのだが、俺は君を逃がすと言ってしまったからな。
しかし、玉藻、お前は結構重症だったから逃がすことが出来なかった。
仕方が無いので、君が逃げれるようになるまでこの家で治療する事にした。理解したか？」
「・・よくわかった。つまりこの身体に巻いてある布はお前がやったのだな？」
「あぁ。服を脱がせるのが大変だ・・待て待て、狐火を尾に点すな。」

玉藻がニッコリと微笑みながら、もふもふの尻尾の先端に狐火を点し始めたのでそれを急いで止める。
冗談抜きで家が火事になる。俺が止めると、玉藻は微笑むのをやめてジト目で俺を見てくる。

「やめろ、そんな目で俺を見るな。」
「・・はぁ・・。もういい。それはそうと何か食べるものはないか？」
「それなら今から作ってくる。少し待っていろ。」
俺はそう言って立ち上がる。さて、何を作ろうかな・・・。

で、晩飯の時間だ。結局何を作ったかというと・・・

「・・これは何だ？」
「きつねうどん。」

そう、きつねうどんだ。何を作ろうか考えていた時に頭に浮かんだのがこれだった。
もちろん、うどんも自分で作った。買いに行こうと思ったのだが、夜だから空いてないしな。
人間やろうと思えば大抵の事はやれるものだ。はっきり言って、玉

藻の視線はうどんよりも油揚げに釘付けになっている。
それでも好物は後で食べようと思ったのか、玉藻はおそるおそると言った感じに、うどんをちまちまと口に入れ始めた。

「・・美味しい・・。」
「それはよかった。」

どうやら気に入ったようだ。まぁ、好物の油揚げも乗っかってるしな。
それにしても我ながら上手く作れた。うどんなんて作っている所を二回ほど見ただけだからな・・。
そんな懐かしい事を思い出しながらも、俺はうどんをすする。

「あぁ、そうだ。玉藻。」
「ん、なんだ？」
「しばらくの間よろしく頼む。」

俺がそう言うと、何故か唖然とする藍。しかし、すぐに元に戻った。

「・・よろしく。」

そう言いながら再びうどんをちまちまと食べる藍。何か顔が赤いぞ？風邪か？
まぁ、大丈夫だろう。そう思いながらも、俺はうどんをすする。・・
少し味が薄いな・・・

ちなみに、寝る前に尻尾を触らせてもらおうと思ったら断られた。

第１０８話：玉藻と壊（後書き）

そんなわけで終わりました。次回からは藍と壊がしばらくの間ですが一緒に暮らします。

第１０９話：玉藻クッキング（前書き）

今回は玉藻が初めてのお料理を！？

第１０９話：玉藻クッキング

「今日は私が夕飯を作る。」

玉藻の怪我を治療してから三日ほど経ったある昼下がり、玉藻は何を思ったのかそんな事を言い出した。
いや、今さっき食べたばかりなのにもう夕飯の話をするのか、君は。

「突然何を言い出すんだ。お前は。」
「今まで世話になった礼さ。」
「いや、そもそも君の怪我はまだ完治していないのだろう？そんな状態で作らせたくないのだが。」

そう、玉藻の怪我はまだ完治していない。どうやらあの兵が撃ったのはただの矢ではなく、妖怪専用の矢だったらしい。
お陰で玉藻の傷口は完全に塞がっておらず、走ったりするとブシュ、っと血が吹き出る。前にそれで畳がダメになった。
今は絶対安静を心掛けるように言っているからそこまで非道くはないが、またいつ畳がダメになるのやら・・・

「この程度の怪我、なんとも無い！」

玉藻が両手を腰に当てて胸を張って言う。・・・不安だ。もの凄く不安だ。

「・・・わかった。ただし、俺も手伝うぞ。（一人で作らせたら何を作るかわからない）」
「む、いいさ。私だってやれば出来るということを見せてやる！」

何故だろう・・・。先程よりも不安になってきた・・・

そして夜。

「さぁ、作るぞ！」

片腕を回し、意気込みながら厨房に入っていく玉藻の後に続いて俺も厨房に入る。
厨房に入った玉藻は、当然ながらもまずは手を洗う。もちろんの事だが俺も洗っている。

「・・・玉藻。君は料理をした事があるか？」
「ふふふふ・・・。そんなもの・・」

水のついた手を俺の渡したタオルで拭きながら笑っている玉藻。
そして俺の目を見て、『ビシッ！』と人差し指を突き立てるように向けてきた。

「ある訳が無いだろう！」
「よしわかった。俺が作るから君はあちらで待っていろ。」
「いや心配するな。私に掛かれば料理なんて！」

そう言いながら棚（自作）から包丁とまな板をを取り出し、その上にいつ持ってきたのか人参を乗せる。
そして包丁両手で持ちながら大きく振り上げ・・待て待て。

「君は何をする気だ。そんなに振り上げたら狙いが定まらないだろうが。」
「え？」

玉藻は、包丁を振り上げたままの状態で俺の方を見ながら疑問の声を上げる。
俺は玉藻に近づき、とりあえず振り上げてる包丁を取り上げる。

「あ、何をする！」
「いいから貸せ。包丁はこう持つんだ。」

玉藻を退かしてまな板の前に立ち、正しい包丁の持ち方を教えて包丁を返す。
玉藻は、俺と包丁を交互に見て再びまな板の前に立つと、人参に包丁の刃を当てる。
するとトントンと音を立てて人参を切り始めた。ただ・・・

「玉藻、大きい過ぎる。もう少し小さく切れ。」

デカイのだ。どれくらい大きいかと言うと、ジャガイモを半分の大きさに切ったくらいデカイ。
下手したら喉の詰まらせるぞ？

「う・・うるさい！口出しするな！」

そう言いながら玉藻は勢いよく身体ごと振り向く。そしてその手か

ら銀色に光る刃が俺の方へ飛んで・・・
何!?

「ゴハッ!」
「か、壊!?」

玉藻の手から飛んできた包丁は、見事に俺の腹に突き刺さった。

「・・・玉藻・・・。出来れば包丁を振り回すのはやめて欲しい・・。と言うかしっかり握ってくれ。」

刺さっている包丁を抜きつつそう言う。中々シュールな光景だな。
そう思いながら、抜き取った包丁を横に置き、霊力を込めて傷を早く治す。
ふぅ・・・。地味に痛かったな。

「だ、大丈夫なのか・・?」
「当たり前だ。このくらいでは死なんよ。」
「そうか・・・(よかった・・・)」

胸を撫で下ろす玉藻。はて、どうかしたのだろうか?

「まぁいい。さっさと作るぞ。玉藻。」

――――厨房の様子――――

「玉藻、味噌汁が沸騰している！火を止めろ！」（↑自作ガスコンロ式）
「うるさい！お前がやればいいだろう！？」
「黙れ。君の失敗作一号を処理するので忙しいんだ。」
「失敗作って言うな！少し焦げただけだ！」
「炭になってるじゃないか！？そんな事より早く火を止めて運べ！」
「わかってる！まったく・・・『つるッ！』あ。（↑下にあったジャガイモの皮を踏んだ）」
「何をしてい『バシャ！』～～ッ！？（鍋で沸騰していたジャガイモ入りの味噌汁を頭から被った）」
「いつつ・・・、壊！ちゃんと皮を捨て・・・何を遊んでいるんだお前は。」
「遊んでない！誰のせいだと思っている！？」

こんな感じだった。

ーーーSide壊ーーーー

「料理をするだけであそこまで怪我をしたのは初めてだ。」

「う・・・すまない・・。」

狐の耳を下に下げてションボリとする玉藻。帽子は膝の上に置いてある。

玉藻との料理は命がけだった。食材を切らせれば粉切れ（誤字であらず）にしたり、

味付けを頼めば調味料を全てぶち込み、皿を運ばせれば足を滑らせて何故か俺の方に飛ばしてきたり。

まぁ、最終的には作ることが出来た。味噌汁も作り直したしな。（ぶちまけた味噌汁はゲートに吸い込んでもらった。）

ちなみに、言っておくと玉藻の料理は普通だった。別段美味い訳でもなく、不味い訳でも・・・すまない。少し不味かった。

心の中で謝りながらも、玉藻の作ってくれた夕飯を平らげた・・・・

第１０９話：玉藻クッキング（後書き）

はい、終わりました。それと、更新が遅れました、すいません。
最近時間が無いんですよね・・・。更新が出来なくなるかもしれないし・・・
まぁ、そこのところは何とかします。

第１１０話：梟（前書き）

タイトル通り。漢字なのは仕様です。

第１１０話：槭

今俺は、縁側で茶を啜っている。まぁ、今はそんな事はどうでもいい。
さて、皆のもの、以前に俺が新しい式を創ったと言ったのを覚えているだろうか？
（※『第１０６話：歪んだ世界』の冒頭の部分に書いてあります。覚えていない人はそちらを見てください。）
今まではすっかり忘れてしまっていたが、先程思い出したので改めて新しい式について教えておこうと思う。
何を今更とか思わないでくれ。俺だって忘れる事はある。ちなみに、今回の式を仕舞うための石の色は、丸い無色の石に、黒色の棒状のものが渦を巻いている感じだった。で、今回の式の容姿はと言うと・・・

「・・・出て来い。クロック。」

俺は式の名前を言いながら召喚する。そう、名前でもわかると思うが、時計だ。それも壁に立て掛けてあるような奴。
丸い円盤のような形をしており、数字のところには？？？と言ったローマ数字が書かれている。
現在、昼の１時５３分１８秒を示している。あ、今２０秒になった。
俺のいたところで見た時計とあまり変わりは無いが、しいて言えば縦にした時の横幅が普通の時計よりも少し厚いくらいだろうか。
その円盤、もといクロックは俺の目の前でプカプカと浮いている。・・・今思ったがこいつ、強いのだろうか？
強さを確かめるのなら戦うのが一番いいが、やはり自分で戦うよりも他の奴と戦わせてその戦った奴に感想を貰いたい。

「・・・また後で考えよう。そろそろ玉藻の包帯を変える時間だしな。」

俺はそう言ってクロックを石に戻し、戸棚から包帯の沢山入った箱を取り出し、
ついでにタオルと水の入った洗面器を持って玉藻の部屋まで持って行く。
そして玉藻の部屋の前に着いた。

「さて、おとなしくしているかな・・・。玉藻、入るぞ。」
「へ？あ、ち、ちょっと待っていろ！・・・・よし、入っていいぞ。」

玉藻の許可も得たので、襖を開けて中に入る。玉藻は布団の上で何故かきちんと正座をしていた。
しかも薄っすらとだが汗を掻いている。まぁ、どうでもいいな。
俺は何故か正座をしている玉藻の近くに移動して座り、そして箱を開けて包帯を取り出す。
もちろん、能力で創った自作だ。とりあえず・・・

「玉藻、少し近づけ。まずは首に巻く。」
「あ、あぁ。」

俺がそう言うと、俯いたまま近づいてくる玉藻。
それを大して気にせずに玉藻の首に巻いてある古い包帯を解き、水にタオルを浸して絞り、玉藻の首を軽く拭く。

「あ・・・ん・・・・」
「変な声を出すな。」

そんな事を言いながらも、拭き終わったのでタオルを洗面器の水に浸し、包帯を箱から取り出して玉藻の首に巻く。
さて次は・・・・

「玉藻、脱げ。」
「・・・・・・は？」

先程まで顔を赤くしていた玉藻が目を見開いて間抜けな声を出す。

「いや、脇腹のも新しく変えなければいけないだろう？もう三日は変えてないぞ？」

そう、三日も変えていないのだ。始めは一日置きに変えようかと思っていたのだが、
いざ変えようとすると玉藻に上手くはぐらかされてしまい、結局三日ほど変えていないのだ。
で、今朝方に「いい加減に変えるぞ」と言って無理やり納得させた。

「・・・脱がなくてはダメか？」
「当たり前だろう。いいからとっとと脱げ。」

俺がそう言うと、玉藻はボソッと「変態・・・」と言いながら後ろを向いて服を脱ぎ始めた。
誰が変態だ。訳の分からんことを言うな。そう思いながらも玉藻の腹に巻いてある包帯を解く。
そして再びタオルを絞り、玉藻の脇腹から拭く。・・・さすがに今回は尻尾が邪魔だな。

「・・・ん・・・・もっと優しく・・・ふぁ・・。」
「わかった。それと、変な声を出すな。」

そんな感じで拭き終わり、次に包帯を巻く。・・・巻きづらいな。
そう思いながらも口には出さず、やがて包帯を巻き終えた。

「よし、終わりだ。・・・どうした?顔が赤いぞ。」
「はぁ・・はぁ・・・、な、なんでもない・・・。」

何か玉藻の息が荒いのだが・・・。

「壊殿ー!いらっしゃいますかー!」
「ッ!?」
「・・・玉藻。絶対に出てくるなよ。いざとなったら幻術で誤魔化せ。」

俺は玉藻にそう言い、立ち上がる。そして玄関まで向かい、引き戸を開けた。
外には都の陰陽師が驚いたような顔をしながら俺を見ている。

「・・・急に出てこないで下さい。貴方は背が高いので少し怖いです。」
「傷つくな。まぁいい。それより、何のようだ?」
「貴族からの依頼でございます。
丑三つ時に帝の帝の部屋から黒雲が出ていたり気味の悪い鳴き声が聞こえたりするらしいです。
貴族は、おそらく妖怪の仕業、と言っておりまして・・・」
「・・・俺のところに来たと。晴明はどうした?」
「寝込んでおります。」
「・・・・・。」

仕事のしすぎだな。そのうち何か持って行ってやろう。

「他の陰陽師に頼まなかったのか?」
「頼んだらしいのですが悉く逃げられるそうで・・・。しかも帝も夜に来る妖怪が恐ろしくて病に伏せてしまいました。」
「・・・言い方が軽いな。まぁいい。請けるかどうかは今日決めておく。明日になったら来い。」
「わかりました。いい返事を期待しています。」

陰陽師はそう言って最後に頭を下げ、身を翻しそのまま都に帰った。
さて、まずは玉藻と話をしておこう・・・・

草木も眠る丑三つ時とはよく言ったものだ。俺は今、能力で壁に潜り込んで自分の姿を隠して帝の部屋にいる。
もちろんの事だが、他の陰陽師は俺がいることは知らないし、帝も俺がいるのを知らない。何故俺がこんな事をしているかと言うと、理由は簡単。なんとなくだ。本当はあの時陰陽師の依頼を断る必要も無かったのだが、こうやった方が面白いと思った。
ちなみに気味の悪い鳴き声や黒雲やらはまだ聞こえないし見えない。いつになったら来るんだ・・・

「・・・来たか。」

いい加減に待ちくたびれた時に、鳴き声が聞こえた。低いような鳴き声と、まるで超音波のような声が響いている。

やがて帝の部屋の連子窓から黒雲が入ってきた。そして入ってきた黒雲は獣の形になった。

猿の頭に狸の胴。足は虎の足で、尾が蛇になっている。大きさは大体虎より少し大きいくらいだろうか？

妖怪に関してはあまり知識はあるとは言えないが、さすがにこれは俺も知っている。『鵺』だ。

確か『源頼政』と言う弓の達人が撃ち落すのではなかっただろうか？まぁ、それは後にしよう。

鵺は帝の枕元まで来ると、何をする訳でもなくひょうひょうと鳴いている。

・・・もしかして呪っているのか？しばらく鳴くと、鵺は満足したのか再び黒雲になり、そのまま連子窓から出て行った。

俺はそのまま壁から出る。さて・・・

「・・・追いかけてみるか・・・。」

そう呟いて再び壁に潜り込んで反対側から外に出る。そして鵺が飛んでいった方向へと向かった・・・

で、まぁあの後飛んでいる鵺を見つけてその後を付けていた訳だがその鵺が止まった場所が山だった。

鵺が地面に降りたので俺も降りる。鵺はそのまま山を登るので、俺も再び鵺の後を付いて行った。

ちなみに、今は妖力も霊力も全て抑えている。他の妖怪に見つからないためだ。戦うのがめんどくさいからな。

そんなこんなでしばらく山を登っていたが、不意に鵺が立ち止まった。どうでもいいが、触ってみたいな。

くだらない事を考えていると、鵺がぐにゃりと歪んだ。そして徐々にその歪みが元に戻り、鵺が姿を現した。
しかし俺はそれが本当に鵺なのか信じられなかった。なぜかって？
それはな・・・・

「ん～・・・・あぁ～疲れた。」

歪みが元に戻ってそこから現れたのは少女だったからだ。髪は黒のショートボブで、
右の方の後ろ髪が外に跳ねている。後姿なので前は確認できないが、服装は黒のワンピースのようなものを着ている。
背中からは、右の方には赤い鎌のような形の羽・・だろうか？それと左には青い矢印のようなこれまた奇妙な羽がそれぞれ三枚生えている。片腕にはの蛇のようなものが巻きついており、何故か黒のニーソックスをと赤い靴を履いている
背は・・・まぁ間違いなく諏訪子よりは高いと思う。とりあえず・・・

「こんな所で何をしているんだ？」

「ッ！？誰！？」

俺は少し近づいて少女に話しかける。すると少女は後ろをバッ、っと振り向いた。
先程は前を向いていてわからなかったが、瞳の色は深紅で、胸元には赤いリボンが付いていた。
どうでもいい事なのだが、この少女の着ているワンピース、少し丈が短かすぎやしないだろうか？

「・・・あんた誰？こんな所で何してるのよ？」

「君は、人の名前を尋ねる時はまず自分からと言うのを知らないの

か？」
「うっさい、何の力も無い人間の癖に！」
何ともまぁ小生意気な小娘だこと。たぶん、生まれて間もないんだな。
ちなみに、妖怪に親なんてものは存在しない。妖怪はその辺の妖怪に拾ってもらって
親代わりになってもらう事があるそうだ。幽香とかも確かそうだったな。
「ちょっと。無視しないでよ。」
と、俺が何も言わなくなったからご機嫌が斜めになったようだ。妖力と殺気を出している。
ただ、はっきり言って大したことは無い。玉藻のほうがよっぽど強い妖力と鋭い殺気を放っている。
「最近の若いのはいかんな。口よりも先に手が出る。」
「うるさい！これでも食らえ！」
俺の言った事に腹が立ったのか、少女はどこからか取り出したのだろうか、三又の・・トライデントのような槍を出して俺に投げつけてきた。はぁ・・・、本当に・・・
「少しは人の話を聞いたらどうなんだ・・・。」
「えっ！？」
俺は少女が投げた槍を素手で掴んで持ち直す。
「嘘・・・・」

「さてと・・・・」

俺は少女に一歩ずつ近づく。少女は、まさか何の力も感じられない人間（人間じゃないけどな）に槍を止められるとは思わなかったようで、その場でへたり込んでしまった。そして少女の前まで来た俺は槍を・・・

「ひっ・・！・・・あ・・れ？」

「何をそんなに怯えているんだ。ほら、君の槍だ。」

少女に返す。いや、俺にとってはこんな槍必要ないしな。

「あ・・ありがとう・・・。」

俺の差し出した槍を、礼を言いながら受け取る少女。さて・・・

「俺の名前は紅鎖華壊だ。君の名前はなんだ？」

「・・・・封獣ぬえ。」

「そうか。よろしく。」

「えっと・・・・よろしく？」

なんやかんやあってぬえと話が出来るようになったので、何故帝の所に来るのか聞いてみたところ、

ぬえはあまり力がなく、他の妖怪に見下されているらしい。それで、陰陽師のいる都の帝を弱らせて、

自分は強いと思わせたかったらしい。・・・子供だな。ちなみに、

ぬえの投げてきた槍は本人が消した。

「なるほど。それで毎晩帝の枕元で呪っていたわけだな。」
「うん。」

俺の横で座っているぬえがそう返事をする。ちなみに、近くにあった木にもたれ掛かって座っている。

「まぁ、別にあんな帝どうなっても構わんが一つだけ言っておく。もう都で好き勝手するのはやめておけ。安倍　晴明などと言った陰陽師に目を付けられたらお前じゃ絶対に逃げられない。」
「・・・うん。わかった。」
「いやに素直だな。何か企んでいるのか？」
「何にも企んでないわよ。ただ、あんたみたいな強い奴が言うから素直に聞いておこうと思っただけ。」
「そうか。ところで、あの帝の部屋に来たときの姿。あれは幻術か？」
「ん～・・・。ちょっと違う。アレは私の能力でそう見せてるだけ。」
「ほぅ・・・。君は能力持ちか。」
「そうよ。私の能力は『正体を判らなくする程度の能力』。例えば、鳥になったり、蛇になったりとか不定形な正体不明の種を相手に仕込んで、撹乱するの。見る奴によって見た目は違うわよ。」

・・・ふむ。例えるならヤカンを空に飛ばすと、それががＵＦＯに見えると言った感じか。
面白い能力だな。相手を騙す時とかに使えそうじゃないか。

「・・・ぬえ、お前の家はどこに・・・ん？」
「ｚｚｚ・・・。」

どうやら寝てしまったらしい。普通はこんな所では寝ないぞ?相当疲れていたんだな。

さて、どうする。ここに置いておけば陰陽師が来た時などに間違いなく退治される。

仮に陰陽師が来ないとしても、その辺の一般市民が桑やらなんやらで襲い掛かりそうだ。

しかしながら、俺はぬえの家を知らないから彼女の家に運ぶ事は出来ない。

「・・・・仕方ない・・・・。」

俺はそう呟き、ぬえを背中に背負う。気が付けば朝日が昇っていた・・・

第１１０話：槭（後書き）

はい、そんな訳で原作キャラのぬえと新しい式のクロックです。
ぬえは次回も出します。

第１１１話：家族？が増えました～。（前書き）

前回に引き続きぬえが出ます。

第１１１話：家族？が増えました～。

始めは空を歩いて（誤字であらず。）家まで移動していたが、途中の森から地面を徒歩で移動する。
いや、あのまま空を歩いていたら怪しまれるだろう？ゲートなどの式はは家に置いて来たから使えない。
それにしても・・・

「・・・ＺＺＺ・・・」

背負われていると言うのによく寝ていられるな。まぁ、涎を垂らされていないから大して気にもしないがな。
微妙にずり落ちそうになっているぬえを背負い直し、再び家までの道のりを楽しむ。健康に気を使うなら散歩は大事だ。
言っておくが、俺はしょっちゅう散歩をしているぞ？縁側で茶を啜っているだけじゃないからな？

「と、まぁそんな事はどうでもいいな。そこの妖怪。さっさと出て来い。」

右斜め前にある茂みに向かってそう言い放つ。すると茂みがガサガサと揺れ、中から妖怪が現れた。
・・・下の中くらいか？大きさは、大した大きさではなく、俺より低い。耳まで裂けている口からは涎をダラダラと垂れ流している。

「グギギギギ・・・。オ前、紅鎖華壊ダナ？」
「その通りだが。何か用か？」
「グギギギ・・・。都デ最強ノオ前ヲ喰エバ俺ガ最強ダ！」
「何を訳のわからない事を・・・。都で最強なのは晴明だぞ？」

「グギギギギギ！！」

どうやらあちらさんは俺の話に耳を傾ける気がないらしい。
爪を振り上げながら俺に向かって飛び掛ってきた。まったく・・・

「お前の相手なんかしていられないんだ。」
「グギェ！？」

俺は飛び掛ってきた妖怪に前蹴りを入れる。足が腹にめり込んだのでそのまま蹴り上げる。そして地面に落ちた妖怪の腹を踏みつけた。

「グェェェ！！」
「うるさいぞ。・・・そうだな。生かした所でまた襲い掛かって来るだろうし、ここで片付けてしまおう。」

俺はそう入って能力で刀を三本、妖怪の顔の真上に二本、左胸に一本と言った感じに宙に創りだす。
もちろん、能力で浮かばせていないので刀は重力に従い見事に妖怪に突き刺さった。・・・と言うか早いな。
最近の妖怪は弱いな・・・。そして今の戦いで目を覚まさなかったぬえはある意味すごい。

「・・・早く帰って朝食の準備をしよう・・・。」

独り言のように（実際独り言）呟いて再び家まで向かった・・・

「遅いッ！！」
「家の主が帰ってきて真っ先に言う事がそれか。お前は。」
家の中に入った途端に何故か正座をしている玉藻に言われたのがこれだ。

「私がいつからここにいると思っているんだ！？」
「いや知らない。いつからだ？」
「お前が出て行ってから少し経ったころからだ！」

よくもまぁそんなに長く待っていられたものだ。正座はさぞかし辛かろうに・・・。

「と言うかよくその時間に起きていられたな。俺はてっきり寝ていると思ったぞ。」
「え！？いや・・・あの・・それは・・・・。」

何か知らんが玉藻が慌て出した。人差し指をくっ付けてモジモジし出したぞ。医者に見せた方がいいかなぁ・・・

「おい何だその哀れな者を見るような目は。やめろ、そんな目で私を見るな！」
「・・・まぁいい。それより「う～ん・・・。」起きたか。」

今まで完璧な空気だった背負っているぬえがモゾモゾと動き出した。あまり動くと落ちるぞ。
ぬえは目を薄っすらと開けて周りを見わたすとそのまま首を傾げな

がら「・・・ここどこ？」と言った顔をした。
と言うか目が微妙に半目だ。まだ眠いのだろうか？

「・・・ぬえ。まだ眠いか？」
「ん～・・・ｚｚｚ。」

せめて答えてから寝ろ。仕方ない・・・
俺は何故か唖然としている玉藻の横を通り過ぎて空いている部屋に連れて行く。
そして布団を絶に布団を敷いて貰って部屋を出る。
さて、さっそく何か作って「おい。」来ようと思ったら玉藻に肩をつかまれた。
何なんだ一体・・・。そう思って後ろを振り向くと・・・

「・・・（にっこり）」

玉藻がとてもいい笑顔で微笑んでいる。ただし、殺気のオマケ付きで。
おい、空いている手に狐火を点すな。近づけるな。熱い。

「この・・・」
「？」
「変態がぁぁぁ！」
「俺が何をした！？」

「・・・・（ギロリ」
「・・・ごめんなさい。」

わかっていると思うが、上が俺で下が玉藻だ。
あの後狐火を飛ばされたり爪で喉を突かれそうになったり色々大変だった。殺されかけた。
その反省の意も込めて目の前で正座させて謝らせている。最初は九尾としての誇りがどーのこーの言っていたが、俺が尻尾を触ったら素直に謝った。これからは悪い事をしたら尻尾を触ろう。

「・・・何だか悪寒がしたんだが・・・。」
「気のせいだ。それより、何か作って来るからぬえを見ておいてくれ。」
「ん、わかった。・・・ところでどうしてあの『ぬえ』とか言うのを連れて来たんだ?見たところ強そうでもないし・・・。」
「・・・さぁ、な。気紛れじゃないか?」

俺はそう言って部屋から出る。・・・少し眠いな・・・・

「壊。大丈夫か?」

向かい合うように卓袱台の前に座っている玉藻が箸を持ちながら心配している。・・・してるか？してるよな。

「問題ない。」

「いや、指を少し切るくらいなら私もここまで心配はしないが、さすがに首を切ると言うのはどうかと・・・・。」

包丁で食材を切っていたら、首が痒くなり掻こうと思ったら、包丁でそのまま切ってしまったと言う馬鹿な事をしてしまった。相当眠かったんだな。俺。ちなみに、ぬえは俺の横で寝ている。起きたらすぐに飯を食わせられるようにと思って横に寝かせておいた。何だか娘を持った気分だな。・・・未婚だがな・・・。

「・・・・・・・・（↑メッチャ暗い空気出してる）」

「お、おいどうした。本当に大丈夫か？」

「あぁ・・・。問題ない・・・・。それよりとっとｔ「う～ん・・・」またか。」

先程の玄関の時と同様に、ぬえが起きて周りを見渡す。しかも今度は涎のオマケ付きだ。

俺はたぶん寝ぼけている・・・いや、確実に寝ぼけているぬえを横に座らせる。

「飯は食うか？」

「・・・・うん・・・・。」

ぬえが返事をして頷くので、予め用意しておいた茶碗に米と味噌汁をよそい、おかずになる玉子焼きと漬物、それに魚を差し出す。質素だが、個人的にはこう言うのが一番好きだ。

「・・・んぐんぐ・・・。」

何ともまぁマヌケな顔をして食べるものだ。目を半開きにして首をカックンカックンと揺らしながら米を口に入れている。

こんな食べ方をしていたら、そのうち箸が喉を突くのではな「グエッ!?」・・・時すでに遅し。

箸を口に銜えたまま首を揺らすからそうなるんだ・・・・

「ゲホッ!ゲッホゲホ!」

「大丈夫か?」

「はぁ・・・はぁ・・・何とかね・・・。」

「そうか。それはよかった。」

「うん・・・ん?ちょっと待てぃ!」

「なんだうるさいぞ。」

「何だじゃないわよ!ここ何処!?何で私がこんな所にいんの!?」

いや今更か?いくら何でも遅すぎじゃないか?ほら見ろ、玉藻も呆れているぞ?と言う玉藻。君はいつの間に食べ終わったんだ?

仕方ないので持っていた箸を一旦置き、横でギャーギャー騒いでいるぬえに向き直る。

「とりあえず落ち着いてくれ。ぬえ、俺がここに君を連れてきたのはな、俺と話をしている最中に君が寝てしまってだな。あのまま放置しておくのも年上としてどうかと思ったんだ。で、最初は君の家まで連れて行こうと思っていたんだが生憎俺はお前の家を知らない。それで仕方なく俺の家まで連れてきた。ここまでで何か質問は?」

「はい。」

「何だ言ってみろ。」

「そもそも何で私をそのまま放って置かなかったわけ?」

「だから言っただろうが。年上として放っておけなかっただけだ。・・・本当は気紛れだがな・・・。」
「今最後に気紛れって聞こえたんだけど・・・。」
「気のせいじゃないか？」
「・・・まぁいいわ。そもそも私より年上って言ってるけど、あんた何歳なわけ？」
「よく覚えていないが・・・。まぁ、確実に４０００は超えているな。」
「ブッ！？」

湯飲みの茶を飲んでいる最中だった玉藻が茶を噴き出した。・・・汚いぞ。
ぬえも唖然としている。そう言えばこの二人は俺の事を人間だと思っていたな。
ぬえはともかく、玉藻とは戦っている最中に少しだけ妖力を開放したと思うんだがな・・・

「あんた化け物だったのね。」
「俺からしたら褒め言葉だな。伊達に凶鳥名乗っていないさ。」
「・・・凶鳥？」
「二つ名だ。容姿がそれっぽかったからそう言われている。もっとも、今じゃそう呼ぶ奴も殆どいないだろうな。」

何せこの世界じゃあ一番永く生きているようなものだからな。それと玉藻。いつまでもポカーンとしてないでいい加減に噴き出した茶を拭け。畳に染みが付くだろうが。

「まぁ、何だ。とりあえず食え。その後縁側で茶でも啜りながら色々話でもしようじゃないか。」
「爺くさいわね。」

「喧しい。黙って食え。」

俺はそう言いながら再び箸を片手に持つ。先程から会話に入って来れない玉藻は体育座りをしながら壁と向き合って拗ねているが、もうどうでもいいな、後で油揚げでも与えておけば機嫌も良くなるだろう。

今日は縁側で茶を、なんて言うのはいつも通りだが、違う点があるとすればぬえが横で茶を啜っているくらいだろうか。

茶飲み友達が出来たみたいで個人的には嬉しいな。お陰で茶と先程買ってきた団子がいつもより美味く感じる。

こう言うのを祝福の一時というのだろうか？・・・たぶん違うな。

「時にぬえよ。」

「なに？」

「お前はこれからどうする？」

「どうするって・・・。山に帰るけど？」

「それでも構わんが、どうせ山に帰っても暇なんだろう？」

「うん・・・まぁそうなんだけどさ。」

「俺と暮らさないか？どうせ空き部屋もある。・・・いい暇潰しになりそうだしな・・・」

「最後ボソッと聞こえた事は気のせいと言う事にしておくわ。でも

私なんかと暮らしたら陰陽師が絡んでくるんじゃないの？」
「今更だな。家には何の役にも立たない大妖怪の九尾だって居るんだ。妖怪の一匹や二匹くらいなら都のやつらも気づかんさ。」
「何気に貶してない？」

ぬえはそう言うと何か考えるように顎に指を当てる。おそらくこれからどうするか考えているのだろう。
まぁ、正直言って、俺はぬえが一緒に暮らそうと暮らすまいとどうでもいい。これは俺の気紛れ。ただ何となく暮らしてみたかった。それだけの事だ。・・・意外と最低な思考回路だな。

「・・・決めた！ここで暮らすわ。」
「ふむ・・・。まぁいいさ。帰りたくなったらいつでも帰っていいぞ？」
「うん。でも、どうせ帰ったってやる事もないし、ここで暮らしたほうがおもしろそうだもん。
それよりもさ、あれ、放って置いてもいいの？」

ぬえはそう言いながら俺の後ろを指差した。そこには・・・

「・・・・・・・・・・。」

玉藻が背中を向けてブツブツと独り言を言っている。近づいて聞き耳をたててみると、「役に立たない・・。」とか何とか言っている。どうやら先程の会話を聞いていたようだ。普通ならここでフォローを入れるところだが、生憎とそんなめんどくさい事はしたくない。よって俺は無視をすることにした。

「・・・ぬえ、これからよろしく。」
「軽く無視したわね。でも、これからよろしくね。」

そんな訳で新しい家族が増えた・・・

「玉藻、油揚げをやるからそんなに機嫌を悪くするな。」
「ふ、ふん！仕方ないな。油揚げに免じて許してやる！」
「・・・コイツ本当に大妖怪なの？」

第１１１話：家族？が増えました～。（後書き）

はい、終わりました。今回は、地味に藍の扱いが酷かったですね。
それにしてもいつになったら幻想入りするんだろう・・・。
もう少しこの現状が続きそうだ・・・

第１１２話：平和な日常（前書き）

前書きなし。読んだほうが早いです。

第１１２話：平和な日常

さて、ぬえと一緒に暮らし始めてから5日ほど経った。ぬえには、玉藻が料理を作る時にその手伝いをしてもらっている。
玉藻も最近は包丁を飛ばす事もなくなり、ミスも調味料を間違えるくらいになった。と言うか、何故玉藻は怪我が完治しているのに俺の家にいるのだろうか？いや、別に居ても構わない。ただ、そろそろ勘のいい陰陽師に気付かれそうなのだ・・・・
当然の事だが、都に居る陰陽師全員がショボイわけじゃない。中には晴明よりも勘のいい陰陽師だっている。
そういう奴らに目を付けられたら厄介だ。間違いなく他の陰陽師と組んで俺を見張るかもしれない。
・・・まぁ、その時はその時だ。あの二人を逃がすくらいなら余裕で出来る。晴明が来なければの話しだがな。
あの二人にはもっと強くなってもらわないとな・・・。主に俺のために。

「壊～！ご飯できたって～！」
「すぐに行く。」

と、夕飯の時間だ。アレコレ考えるのは後にしよう。さて、ちゃんと作れているかな・・・

意外にも、玉藻は料理をちゃんと作れていた。あの肉じゃがは美味かったな、うん。
それにしても、今日は満月か・・・。
さて、俺は満月と新月の夜に必ず飲む物がある。酒だ。満月の日は、今まで何となくやっていたから習慣になってしまった。
新月の日は・・・。何と言うか、身体が疼いて眠れなくなる。だから酒で気分を紛らわせている。
酒と肴をいつも通り、月のよく見える縁側まで持っていく。今回の肴は枝豆だ。突っ込みは許さん。
一つとって口に枝豆を近づけ、豆の入っているであろう場所の下の部分を押す。するとピョンと言った感じに豆が飛び出し、口の中に入る。塩加減も中々だ。ところで・・・

「相変わらず趣味が悪いようだな。紫。」
「それって、久しぶりに会った友人に言う言葉なのかしら?」
「いいからさっさと出て来い。」

俺がそう言うと、目の前にスキマが開き、中から紫がズルリと言った感じに這い出てきた。
そしてスキマからいかにも自分専用と言う感じがする杯を取り出した。

「私もお酒、貰えるかしら?」
「駄目と言っても勝手に飲むだろう?ほら、注いでやるからもう少し近づけ。」

俺がそう言うと、紫は右手で杯を差し出してきた。それに、酒を注ぐ。
そして注がれた酒をチビチビと飲み始めた。さすがに酒だけでは口惜しいと思ったので、枝豆の入った皿を差し出す。

紫はその枝豆に手を伸ばし、俺がやったような食べ方で食べる。

「あら、意外とおいしいわね。これ。」

どうやら気に入ったようだ。まぁ、今はどうでもいいな。それより・・・

「紫、俺に何か用があるんじゃないのか?」

「・・・そう言えばそうだったわ。」

忘れてたなコイツ。

「そ、そんな目で見ないでくれる?私だって少しは反省しているのよ?」

「・・・まぁいい。さっさと用件を言え。」

「そうね。まずは一つ。貴方ならすでに気付いているかもしれないけど、都の勘のいい陰陽師の何人かが貴方に目を付け始めたわ。」

「・・・そうか。」

まぁ、予想はしていたから大して驚くことでもないな。

「もう一つは何だ?」

「・・・幽々子に会ってくれないかしら?」

・・・これもいつか来るとは思っていたがな・・・・。実際に、しかも胡散臭くない表情で言われるとは思わなかった。

ただ・・・

「断らせてもらう。」

「・・・何故かしら?」

紫の声に微かにだが怒気が込められている。だが、そんなの知った事か。
俺は自分の杯に酒を注ぎ、それを一気に飲み干して杯を置く。

「・・・もう俺は彼女の友人じゃないからだよ。紫、俺はな、幽々子が死んだ時に悲しまなかった。
むしろ幽々子が死んで西行妖が目覚めた事を喜んでいたよ。あぁ、久しぶりに退屈しのぎが出来る・・・ってな。」
「・・・・・・。」

紫は何も言わずに黙って俺の話を聞いている。

「そんな最低な『オトモダチ』が会いに行ってもいいと思うか?否、会いに行って言い訳がない。」
「・・・自覚できるだけマシだと思うわよ?」
「自覚できても後悔はしないし、悔い改める気もない。それに、今更友人なんぞ減ったところで大して変わりもしないさ。」

前の世界でも、片手で数えられるくらいしかいなかったしな。しかもその殆どが変人だった。

「・・・まぁ、そんな訳で俺は幽々子に会いに行く気はない。向こうだって俺なんかとは会いたくないだろうさ。」
「・・・・でも幽々子は生前の記憶を失っているのよ?今からでも幽々子と友人になれると思うわよ?」
「ずいぶんと必死だな。そこまで俺と幽々子を会わせたいのか?・・・・まぁいいさ。考えておこう。」

俺はそう言って酒を杯に注ぎ、呷るように飲む。少し度数の強い酒

がのどを通る。
・・・はて?あんなにあった枝豆がさやだけになっている。紫を見ると、いつの間にか取り出した扇子で口元を隠しながら俺から目を逸らしていた。

「・・・紫、次からは少しは残しておけ。」
「ごめんなさい。」

そう言いながら頭を下げる紫。・・・はぁ・・・
紫に呆れながらも再び月を眺める。本当に、前の世界にいた頃よりも退屈しないな。
もう少し、この平和な日常を味わうのも悪くないかもしれないな・・・

第１１２話：平和な日常（後書き）

と言うわけで終わりました。もう少ししたら物語を進めます。

第１１３話：戦力増強（前書き）

今回は、戦闘シーンなしです。

第１１３話：戦力増強

心地よい朝の日差しが部屋の中に入る。そして小鳥がまるで話し掛けて来るかのように囀る声が聞こえる。

『壊さん、壊さん。約束通り焼き鳥にして下さいでチュン。』

よしわかった。今日こそは焼き鳥にしてやる。そう思いながら布団を出ようと・・・ん？

何だろうか？やけに身体が重く感じるのだが・・・。それに布団の端から何かはみ出ている・・・。

自分の身体の身体が動かない事と、布団の端から出ている物が気になり、何となく布団の中を覗いてみる。そこには・・・

「・・・ぬえ・・・。何故ここで寝ているんだ・・・。」

何故だか知らないが、ぬえが俺の腰にしがみつきながら寝ていた。布団からはみ出ているのはぬえの背中に生えた羽だったか。と言うか羽が邪魔だ。消せ。

「ぬえ、起きろ。」

「ん～・・・。後１０分・・・・。」

「なら自分の部屋の自分の布団で寝ろ。俺の布団で寝るな。」

「後・・・１０分・・・。」

「・・・仕方ない。そちらがその気なら・・・。」

俺はそう言いながらぬえの矢印の羽を束ねるように掴み、思いっきり引っ張った。

するとぬえは「わひゃん！？」と言う声を上げて目を覚ました。

「え・・あれ・・・？」
「おはよう。よく眠れたか？目が覚めたなら、腰にしがみつくのをやめて離れてくれ。」
俺がそう言うと、ぬえは一瞬理解できないように唖然としていたが、すぐに俺の腰から手を離して布団から出た。
そして俺から離れると、女座りをして俯いてしまった。・・・・どうかしたのだろうか？
「・・・ところで何か用事があって来たのではないのか？」
「あ、そうだった。今日の朝ごはん作るの壊だったからお越しに来たんだった。」
「・・・ちなみにどれくらいの時間に来た？」
「・・・寅の刻くらい？」
寅の刻・・・。確か４時くらいだったか？よくもまぁそんなに早く起きようと思ったものだ。
起こしに来たのはいいが眠気に負けて俺の布団に潜り込んで寝ていたと・・・。マヌケだな。
「なんだか馬鹿にされた気がする・・・。」
「気のせいだろう？眠いならもう少し寝ていていいぞ。俺は何か作ってくる。」
俺はそう言い、布団から出て立ち上がる。そしてそのまま部屋を出ようとすると、部屋の片隅で自分専用の布団を敷いて寝ていた絶が起動？して俺の後をふよふよと付いて来る。食材は何があったかな・・・

「「「いただきます。」」」

それぞれが声を合わせてそう言い、箸を片手に持つ。今日は焼き魚に味付け海苔、それと沢庵にいつも通りの米と味噌汁。ついでに納豆があったのでそれも出した。

しかしアレだな。俺や玉藻も、もうちょっとした家族みたくなってきたな。

「壊、どうかしたのか？」

「ん、いや。なんでもないぞ？それより、何故君は怪我が完治しているのに未だにここにいるんだ？」

「・・・私がここに居てはいけないのか？」

「そうじゃない。別に、君が望むならいくらここに居ても構わんさ。ただ知りたかっただけだ。

何故君が未だにここから逃げないで俺と暮らしているんだ？と言う事をな。」

「・・それは・・・・／／／」

「・・・壊って、頭は回るくせに、何故かすごい鈍感よね。」

玉藻、何故そこで顔を赤くする。ぬえもそんな目で俺を見るな。

俺が何をしたと言うんだ。どうして玉藻が未だに俺と暮らしているか聞いてみただけだろうが。

まったく・・・・。心でそう思いながら味噌汁をすする。ちなみに赤味噌だ。白味噌は二日前に切れた。

そう言えば前に紫が酒を飲みに来たときに、都の陰陽師が俺に目を

付けていると言ってたな。
紫が酒を飲みに来たのは1週間くらい前だから・・・。もうそろ都の陰陽師も動き出すかもしれないな。
ばれたら高確率で晴明が乗り込んでくるな。アイツは俺と一回戦っているから、確実に俺用の対策を練ってくるはずだ。
まぁ、そうなっても力でねじ伏せれば良いな。頭を使うのは嫌いじゃないが、めんどくさい。
それに、そちらのほうが何倍も面白い。

「・・・壊？どうかしたの？そんな怖い顔して・・・」
「・・・なんでもないさ。早く食ってしまおう。」

ぬえが心配そうな顔をしながら俺を見るので、適当に返事をして誤魔化すように朝食を再開する。
とりあえずは、いざとなった時のために、この二人が逃げられる対策だけでもしておこう・・・

いつも通り縁側で茶と茶請けを堪能する俺。
で、まぁ茶を啜りながら晴明対策としては色々考えたわけなのだが、考えてみたら晴明一人で戦うわけが無い。
無いとは思うが、もしかしたら都の陰陽師全員で乗り込んでくる可

能性もあるわけで。
そうなるとこちらの戦力じゃ歯が立たないわけで。凶鳥になるのもいいがそれじゃ俺がつまらない。
そんな訳で戦力増強のために新しい式を創ることにした。友人が少ない俺にとっては自分の式も友人のようなものだな。
言っておくが、式自体を強くする気は毛頭無い！めんどくさいからな。式を鍛えるくらいなら創った方が遥かに楽だ。
さてと、後で玉藻たちを逃がす準備もしなくてはいけない訳だから、さっさと創ってしまおう・・・・

「・・・疲れた・・・・。」

何とか新しい式を創る事が出来た。いや、確かに式を鍛えるよりかは楽だが、こちらの方が精神的に疲れた。
創った式はこれまた変わった奴だった。一言で言ってしまえば、狼のような奴だ。
白銀の毛。目は鋭く、その色は金色。大きさは頭胴長で3メートルくらいで、俺より大きい。全長にすると4メートルくらいだ。
体高は・・・2メートル弱だな。そいつが俺の前で尻尾を振りながらお座りをしている。・・・狼なのか？
何となく頭を撫でてみたくて手を伸ばす。すると・・・

『カプッ』

噛まれた。いや、そこまで痛くは無いからたぶん甘噛みだとは思う。
とりあえず、狼？の口から手を抜いて能力でハンカチを創ってそれ

で拭く。
そしてめげなずにもう一回手を伸ばす。・・・今度はちゃんと触れた。毛並みは中々いい。
ふかふかだ。玉藻の尻尾のようにもふもふではなく、ふかふかだ。
さて、いい加減にふざけるのはやめよう。俺は狼?を撫でるのをやめる。

「聞こう。俺の言葉は分かるな?」

俺がそう言うと狼は、他の式のように頭を縦に振る。こいつも喋れないのか。

「お前は名前があるか?」

俺の質問に首を横に振って答える狼。まぁ、当然だな。しかし名前か・・・。
・・・決めた。

「今日から君はゼクだ。いいな?」

俺が名前を言うと、狼、もといゼクは嬉しそうに尻尾をパタパタと振る。
ゼクはドイツの6の読み方、ゼクス(またはゼックス)から取った。こいつは6番目だったからな。
さて、まずはこいつを仕舞う石を貰わないとな。
俺はゼクを仕舞うための石を貰い、ゼクを石の中にしまった。今回の石は透明で中に狼のシルエットの様なものが浮かんでいた。
準備は出来た。絶以外は手元に居るな。絶はおそらく玉藻に捕まって遊び道具にされているだろう。
次は二人を逃がす方法だが、これはゲートがいるから問題ない。陰

陽師たちが来たらゲートのを召喚して、二人をゲートの口に放り込めばいいな。問題は陰陽師たちがいつ来るかだ。俺の予想では、早くて明日。遅くて三日だな。
仮に晴明が指揮をとっているならそれくらいだろう。あいつはどこか抜けているが結構慎重だからな。
まぁ・・・・・

「・・・本人に聞き出してみるほうが手っ取り早いな・・・・。」

俺はそう呟き、家を出て都に向かう事にした・・・・・・

第１１３話：戦力増強（後書き）

そんなわけで終わりました。なんかね、自分で書いといてなんですけどね、途中からよくわからなくなってきました。次回は晴明の屋敷に行きます。

第１１４話：準備（前書き）

今回も戦闘シーンなし。ついでに少し短いかも・・・

第１１４話：準備

都に着いた俺は真っ先に晴明の屋敷に・・・向かったわけではなくまずは団子屋に向かった。
よくあるじゃないか、何かを無性に食いたくなるような事が。今回は団子が食いたくなった。それだけの事だな。
俺は団子屋まで来ると、適当に空いている縁台に座る。すると店の中から団子屋の娘が出てきた。

「あら、壊さんじゃない。久しぶりだね。」
「・・・そうだな。久しぶりだな。早速で悪いが三食団子四つ頼む。」
「本当に早速だね。まぁ、いいけどね。待ってて、今持って来るから。」

団子屋の娘はそう言って店の奥に入り、すぐに団子が乗った皿と茶を乗せた盆を持って来て俺の横に置いた。

「・・・一本多い気がするが？」
「それはオマケよ。気にしないで食べてね。」

オマケならありがたく貰っておこう。俺は三色団子を一本掴んで食べる。
・・・いつ食べても旨いな。

「どう？」
「あぁ、いつ食べても旨い。」
「ゲッハッハッ！そらぁよかった！」
「・・・父さん。いきなり話に入ってこないで。」

やたらと低い声で笑いながら店から出てきたのはこの娘の父親でありこの店の亭主である男。
ちなみに、俺はこの亭主と結構仲がよかったりする。都に来たら必ず食いに来る常連だからな。

「久しいな亭主。」
「おう！壊のアンちゃんも久しぶりだな！最近の仕事はどうでぇ。」
「依頼なら、最近あまり来ないな。そちらはどうだ？」
「あ～そこそこだな。最近はそこら辺から侍とかが来てくれるよ。」
「侍？何故だ？」
「あれ、壊さん知らないの？何でもね、裏切り者を倒すから、兵になる人達を帝が沢山集めてるんだって。」
「裏切り者？妖怪じゃないのか？」
「うん。私も詳しい事はわかんないけど・・・。壊さんの住んでる森の中にいるらしいよ？」

・・・それってまさか俺じゃないよな？

「・・・その裏切り者の容姿はわかるか？」
「んっとね・・・確か・・・人の形をしてて・・・背が高くて・・・髪が短くて白い・・・だったかな？目の色は聞きそびれちゃった。」

９０％の確立で俺だな。まさか都でも噂になっているとは・・・・。
まぁ、別にどうでもいいがな。問題は相手の戦力だな。この前玉藻と戦った時は約５万くらいだったか？
仮に俺に対しての戦力だったら最低でも１万は集めるだろうな。一応都の奴らは、晴明以外は俺を人間だと思っている。
だから帝も、人間に対してはそこまで金を使わんだろう。もっとも、晴明が帝に何かを言ったらもっと増えるかもしれんがな。

・・・あいつが俺の事を友として見ているならそれは無いと思うがな。後は・・・

「その裏切り者の始末はいつやるんだ？」
「え？えっとね・・・父さん。いつだっけ？」
「確か・・・明日の夜じゃなかったか？わざわざ妖怪が活発化する時間帯に行かなくてもいいと思うけどなぁ・・」
「そうだよね。そもそも裏切り者一人始末するのに兵を集めてる時点でおかしいよ。」

やはり都の住民はそう思っているのか。さてと・・・・

「亭主、そろそろ帰る。それと、家に団子を持って帰りたい。１０本くらい。」
「あいよ。少し待ってな・・・。」

亭主はそう言って店の中に入る。さっき5本持ってきて貰って一本オマケで今１０本頼んだから１４文だな。
俺は懐から金をいつもより多めに取り出す。

「壊さん。今言うのも変だけど、また来てね。」
「・・・「アンちゃん、もって来たぜ！」ん、すまんな。ほれ、金だ。」
「あ？何か多くねぇか？」
「なに、いつもここの団子は旨く食わしてもらってるからな。その礼だと思えばいい。
じゃあな。」

俺はそう言って立ち上がる。まさかこの団子屋で情報が集まるとは思わなかった。

さて、次は晴明の屋敷に行って再確認してこよう。仕事をしていなければ会えると思うが・・・

「会えなかったな・・・。」

晴明の屋敷に行ったら即効で『お帰り下さい』と言われてしまった。何でも、晴明は札に術式を組み込んでいるらしい。しかもそれは、かなーり複雑な結界と言っていた。・・・まぁ、そんな訳で俺は諦めて家に帰って来た。で、今は縁側で三人で団子を食べつつ茶を啜っている。自分で言うのも何だが、こんなにのんびりしていていいのだろうか・・・

「壊、どうかしたのか？」

「・・・何でもない。あぁそうだ。君たちは明日はどう過ごすんだ？」

「何だいきなり。」

「いいから。明日は何をして過ごすんだ？」

「私は特にする事は無いな。いつも通りのんびりするさ。」

「そうか。ぬえ、お前は何をするんだ？」

「んぐんぐ・・・私は森の中で旅人とかを驚かして遊ぶ。」

「・・・そう言えば妖怪は人間の恐怖する心などが必要だったな。」

「うん。」

妖怪は人間の心から生まれる。大抵の奴は何かに対する恐怖から生まれるらしいな。

さて、この二人が明日にどう過ごすのかはわかった。知ったところで何かするわけじゃないけどな。

それにもう準備も終わってる。後は、おそらく明日の夜に来るであろう人間たちと戦って俺が勝つか負けるか、それだけの事だ。

「ゲームはおもしろくしないとな・・・・。」
「ん？壊、何か言ったか？」
「気にするな。」

もし明日の晩に陰陽師以外の人間たちが来るならそれはそれで面白そうだ・・・・

「・・・・ククク・・・・。」

俺は横で楽しそうに話している二人に気付かれないほどの声で静かに笑った・・・・

第１１４話：準備（後書き）

と、まぁ終わりました。結局晴明の出番はありませんでした。
次回は戦闘シーンあるかもです。

第１１５話：戦いの前の頼み（前書き）

今回は、壊は戦いません。次くらいに戦うかもしれません

第１１５話：戦いの前の頼み

「・・・眠い・・・。」

寝たままで目を擦りながらそう呟く俺。
人間が起きた時にほぼ間違いなく言う言葉はこれじゃないだろうか？少なくとも俺はそう思っている。・・・何を考えているんだ俺は。くだらない考えを破棄して布団から起き上がり、黒色の寝巻き、もといパジャマを脱いでいつものこれまた黒色の服に着替える。
コートはまだ羽織らなくてもいいな。いくら何でも家の中でずっと羽織っている訳じゃないぞ？出かける時とかくらいしか着ないからな？コートはな。ちなみに、前に玉藻に「黒い服ばかり着ていないで他の色も着たらどうだ？」と言われた事があり、その時に白のカッターシャツを着てみたら、意外にも似合っていると言われたので、その頃から地味に白いのも着るようになった。
着替え終わった俺はそのまま顔を洗い、歯を磨き、そして厨房へ向かう。今日の当番は俺だ。
黒いエプロンを着用して右手に包丁を持ち、いざ朝食の準備を。・・・・そういえば何を作るか考えていなかった・・・・

あの後朝食を摂って皿を洗い、そしてそのまま縁側まで移動する事にした。
もちろん茶と茶請けの煎餅は忘れない。まぁ、今回はまったりしに来たわけじゃない。

絶の強化をするのだ。強化と言っても、魔力や霊力を絶の水晶に込めたり、他の式と戦わせたりと言うありきたりな事だ。
だがしかし、絶だけを強化すると言うのも面白くない。どうせならクロックの力も見ておこう。
そう思い、俺はクロックを召喚する。相変わらず俺の目の前でふわふわと浮かんでいる。今は9時35分か。

「クロック、早速で悪いがお前の力を見るために絶と戦って欲しい。」

俺がそう言うと、クルクルと回るクロック。オーケーと言う事でいいのだろうか？
とりあえず、未だにクルクルと回るクロックを落ち着かせ、絶と距離をとって向かい合うようにする。
家の庭はそれなりに広いから、少しくらい暴れても問題ない。

「試合開始。」

先に動いたのは絶だった。ロボットアームのように腕を伸ばし、それを地面に叩きつける勢いでクロックに振り下ろす。
クロックは、その攻撃を横に避ける。そして自分の回りからナイフをシャキーン！と言った感じに出し、時計の盤を下にしながら回転して絶に向かって突っ込む。まるで丸鋸だな。絶は先程伸ばした腕を支え棒のようにして上に跳んでかわす。
クロックは先程まで絶が居たところで回転したまま留まり、出していたナイフを地面に着地しようとしてる絶に飛ばした。
その数12本。それが真っ直ぐ絶に向かって飛んでいく。絶はそれを予想していたのか、地面に足が着く前に宙で両手を広げる。
そして着地したと同時にコマのように回転し始めた。まるでプチハリケーンだな。

ガキィン！という金属が弾かれる音が辺りに響き渡る。こちらに飛んでくるナイフを指で挟んで受け止めつつクロックを見る。
ナイフを全て弾かれたクロックは、次に草刈り鎌を４つほど出し、今度は地面を走るタイヤのように絶に向かって突撃する。
どうでもいい事なのだが、よくあの時計のような身体にあれだけの武器を詰め込めるな。
そんなくだらない事を考えていたら、クロックが思いっきり跳ねた。
そしてそのまま絶に向かって落下するが、それを普通に避ける絶つ。
しかし、クロックは地面に触れる擦れ擦れのところで時計の文字盤を上にして草刈り鎌を四方に飛ばす。
草刈り鎌はクルクルと回りながら絶の方へ１つ、あさっての方向へ１つ、家の壁へ一つ、そして俺の方へ一つ飛んできた。
こいつは俺は殺す気なのだろうか？柄の部分を上手く掴んで横において置く。絶は飛んできた草刈り鎌を魔力弾で撃ち落す。
絶はそのまま弾をクロックの方へ撃つ。回転をやめばかりのクロックはそれに当た・・・らなかった。

「・・・これは面白いな。」

絶の撃った弾の速度が急激に遅くなったのだ。クロックの能力か？
次にクロックは、残像が移るほどの速さで絶のゆっくり弾を掻い潜るように移動し、そのまま絶の前までやってきた。
速いな。あれもたぶんクロックの生まれつきの能力だろう。時計だから普通に考えたら時間関係の能力だな。
絶は目の前まで来たクロックを指先から小さなレーザーで攻撃する。
しかし、速くなったクロックはその攻撃を上に飛んで避ける。
そして飛んだクロックは文字盤をしっかりと絶に向けるようにすると、文字盤を守っている・・・あれは何製だろうか？
ガラスと同じくらい透明で鉄並みの堅さの風防がパカッと開き、文字盤の中心と、数字のところに穴が開いてそこから銃砲のような物

が出てくる。
そしてそこに魔力が集まっていく。それを見た絶は、両手を前に出し、これまた突き出した手の前に魔力が集まる。
と言うかこいつら、妖力とかあんまり使わないんだな。いや、絶以外は魔力とか霊力しか持っていないんだけど・・・

「あれ、壊。何してるの？」
「ん、あぁ、ぬえか。前に創った式の実力を見ていてな。」
「・・・あのとんでもなく魔力を集めてる奴？」
「あぁ。」

いや冗談抜きでとんでもなく魔力を集めていやがる。下手したら俺の家が崩壊するぞ？
お前らそれをわかっているのか？・・・止める気はないけどな。
これも式の力を測るためだ。
と、そんな事を考えていたら両者ともに魔力を集め終えたようだ。
それがほぼ同じタイミングで発射される。クロックの光線は純酢に力だけの光線だ。しかし、それも１３も集まれば厄介だろう。
それに対して絶は、ある程度縮小したような細い光線を撃っている。
今の戦いを一言で説明すれば力と技だな。
圧倒的な力で敵をねじ伏せようとするクロック。確実に仕留めるために力の弱点を突かんとする絶。
・・・実に面白い。あの２体が組めば力と技がいい噛み合うな。

「ね、ねぇ壊。あれ、いい加減に止めたほうがいいんじゃないの？」

ぬえが俺の服の裾を引っ張りながらそう言うので、改めて２体を見てみたら、
絶とクロックを中心に周りにある木やら草が吹き飛んでいた。・・・
・止めたほうがいいな。

そう思い、縁側から立ち上がって衝撃波の中心部に近づく。ある程度近づいた俺は両手に出来る限りの力をつぎ込み、右手をクロック、左手を絶に向けて、手から光線を撃ち出す。一応今の状態の全力。絶とクロックは即座に光線を俺の方に向けて相殺した。ここまで呆気なく相殺されると自信がなくなるな。

「さて、試合は終わりだ。とりあえずクロック、お前の実力はよくわかった。
だからしばらく休んでいいぞ。」

俺がそう言うと、クロックは嬉しそうにふよふよと家の中に入って行った。・・・玉藻が勘違いして壊さないといいな。
ぬえはクロックの後を付いて行ったようだ。俺は絶を肩に乗せて再び縁側に腰を下ろす。

「紫、出てきてくれ。」

先程から感じる視線の方向へ話し掛ける。するとそこにスキマが開き、中から紫が出てきた。
紫は扇子で口元を隠しながら俺に横に座った。

「相変わらずいい勘ね?」
「何年友人やってると思ってるんだ?それより頼みがある。」
「・・・貴方が私に頼みごとをするなってめずらしいわね。」
「あぁ。大した事じゃない。陰陽師がいつ来るか知っているな?」
「えぇ。今日でしょう?」
「その通りだ。まぁ、本当に今日来るのか分からないが、この際そんな事はどうでもいい。
もし今日の夜に都の陰陽師が来るのなら、当然の事だが俺は戦う。

だがしかし、あの二人は俺が戦おうとすれば間違いなく自分たちも戦おうと思うだろう。」

「いい事じゃないの。」

「本気で言っているのか？はっきり言ってしまえばあの二人は足手まといだ。

いくら玉藻が大妖怪だからと言っても、晴明と同じほどの力を持った陰陽師が何人も来ればやられる。

ぬえに関しては話にすらならない。出て行った瞬間にあの世行きだろう。」

都の陰陽師には四天王と言うのがいる。晴明もその一人で、四天王の頂点に立っている。

だからと言って他の四天王が弱いわけではない。むしろ強い。四人も集まったら玉藻なんか一瞬でやられる。

「それで？私にどうして欲しいの？」

「・・・俺は陰陽師たちが来たらあの二人を適当な場所に逃がそうと思っている。

ぬえはわからないが、玉藻は誇りがどうのこうのと言って戻って来るかもしれない。

もし俺が逃がした先で玉藻がそう言って俺の所に戻って来ようとしたら、適当に記憶でも弄って俺の事を忘れさせてやって欲しい。」

「わざわざ記憶を弄る必要なんかないと思うわよ？」

「彼女はそうでもしないと絶対に戻ってくる。一応今日まで一緒に暮らしてきたから何となく分かる。」

俺がそう言うと、紫はしばらく何かを考えるように黙った。

「・・・いいわ。その頼み、聞いてあげる。」

「・・・すまんな。恩に着る。」

「そのかわり・・・・。」

紫がそう言いながら怪しく笑う。・・・まぁ、ただでやってくれるとは思わなかった。

「・・で、条件はなんだ?」

「えぇ。彼女、九尾の方を私の式にしてもいいかしら?」

「それは俺が決める事じゃない。本人に許可を得て来い。」

「それもそうね。」

紫はそう言うと、いつの間にか取り出したのか湯のみの茶を飲む。

「紫、そろそろ帰った方がいい。君も忙しいだろう?」

「そう?それなら御暇させてもらうわ。」

紫そう言いながらスキマを開き、そのままスキマの中に入る。そして最後にこちらを見て手を振ってスキマを閉じた。

そろそろ昼食かな。準備をしてこよう・・・・

第１１５話：戦いの前の頼み（後書き）

そんなわけで終わりました。もう少し展開を早くしたいですね・・・
次回は壊が戦うかもしれません

第１１６話：都との戦いの始まり（前書き）

今回は、戦わないかもしれません

第116話：都との戦いの始まり

現在夜の7時23分。俺は屋根に上って都の連中がいつ来るか見張っていた。
紫が帰った後、絶とクロックを強化したり、他の式同士を戦わせてウォーミングアップさせたりとそんな感じで時間を潰した。
ちなみに、途中、気紛れで式たちに細工をした。もちろん、本人たちの許可は得たので問題ない。
それにその細工のお陰で俺の式はかなり強くなる。強くなったではない。俺の放した細工が発動した時だけ強くなるのだ。
もっとも、俺の許可が出ない限りは発動しないようにしているがな。
何故俺の許可が必要かというと、何となくだ。

「ん、絶か。どうした？」

いつの間にか横に絶がいた。どうやら俺に茶を持って来てくれたらしい。
本当に気が効くと言うか何と言うか・・・。礼を言って湯飲みを受け取り、まだ熱い茶を啜る。
冷えた夜なので熱い茶がいい感じに身体を温めてくれる。・・・・ふぅ。
それにしても暇だ。今ここに居る絶以外の式は家の中で自由にさせている。
あいつ等に見張りをさせるのもいいが、さすがに戦いの前なので無理はさせたくない。
それに今回は俺の我が儘に付き合って貰うようなものだからな。

「絶、お前も休んできていいぞ。」

俺がそう言うと、絶は首を横に振る。（首と言うか顔だな）
相変わらずいい奴だ・・・・。そう思いながら再び茶をすする。

「ガゥ！」

茶を啜っていると後ろからそんな声が聞こえたので振り返ってみるとゼクがいた。
何やら尻尾を振って嬉しそうに俺に近づく。そして俺の横、空いているほうでクルリと丸まって横になった。
・・・・ふかふかだな。ゼクの身体を撫でながらそう思う俺。
しばらく撫でていると、微かにだが枯れ葉を踏みしめる音が聞こえてきた。それも一つや二つではない。
来たか・・・・

「絶、他の奴らも連れて来い。それと、ゲートに玉藻たちを適当な場所へ逃がすように言ってきてくれ。」

俺がそう言うと、絶はすぐに屋根から飛び降りて家の中に入っていった。横に居るゼクは頭を上げて唸るように威嚇している。
やがて足音が少しずつはっきりと聞こえるようになった。見えないので何人いるかはわからないが、足音から予想して間違いなく１万はいるだろう。ククク・・・

「退屈しないで済みそうだなぁ・・・・。」

ーーーーSｉｄｅ晴明ーーーー

「裏切り者の始末を任せたい。」

ある日、帝に呼ばれた時にこう言われた。
もちろん、始めは断ろうとも思ったが、帝は都の陰陽師の殆どと兵を掻き集めているといっていた。
帝も馬鹿ではない。それだけの数を集めると言う事は、それだけ強い敵だと言う事だ。
それに壊の奴も一緒に戦うだろう。そう思って首を縦に振ってしまった。裏切り者の名前も聞かずに。
それからは毎日が忙しかった。こちらが有利になり、尚且つ相手が不利になる結界の札を作ったり、式を召喚するための札も作った。
そして今日、その裏切り者を始末する。
改めて帝の集めた兵力を見た時、驚いた。帝の言ったとおり都に居る都に居る殆どの陰陽師に、名も知らぬ兵から腕の立つ雇った兵まで様々だ。さらに、都の自分以外の四天王までいる。
いくらなんでもこれは多すぎだと思う。そもそも裏切り者とは誰のことなのだろうか？
そんな事を疑問に思いながらも、裏切り者がいると言われている森の中を進む。
ある程度進むと、兵と何人かの腕の立つ陰陽師が三つにわかれた。
裏切り者のいる場所の周辺に我の作った札を仕掛けるのだ。しかし、それでも裏切り者を倒す戦力は変わらない。
先程聞いたところ5万ほどいるらしい。はっきり言って金の無駄だ。

「・・・？」

今まで暗くてよくわからなかったが、この道のりは壊の家への道のりだ。
そう言えばこの裏切り者の始末に壊が混じっていなかった。まさか・・・・・

「晴明殿、如何なされました?」
「・・・何でもない。」

横から兵が話しかけてきたので、考えるのをやめて再び歩く。
そしてある程度進むと、先頭が止まり、陰陽師たちが札を、兵が刀や弓を構えた。
その先に居たのは・・・・

「やっと来たか・・・・・。」

半の月を背にして屋根の上で座りながら、暗黒の中で目を光らせている我の親友、紅鎖華壊だった・・・・

ーーーーSide三人称ーーーー

都からやって来た兵たちが見上げる先には湯飲みを片手に持つ男、紅鎖華壊。
壊は都からやって来た陰陽師や兵を少し見ると、持っていた湯飲みの茶を啜る。

「紅鎖華　壊。お前は陰陽師の身でありながら妖怪を匿うという裏切りの行為を行った。
よってお前を処罰する。まぁ、この僕が直々に出向いてやったんだ。感謝しろ。」

一番先頭に立っていた陰陽師、四天王が一人鋼城(こうじょう)　仁(まさし)が壊へ言う。

この男は腕はそこそこいいのだが、権力にものを言わせているので都の住民の多数が嫌っていた。
しかも、退治してきた妖怪は殆どが下級妖怪と言う本当に四天王なのかと疑いたくなる男だ。
対して壊は、仁の言った事を適当に聞き流しながら再び茶を啜る。
それを見た仁は気分を悪くしたのか、眉を少し動かし口元を引き攣らせる。
そして小さく舌打ちをしながら「これだから無能は困るんだ・・・・。」と呟いた。

「いいかい?この忙しい僕がわざわざ君程度のために出向いてあげたんだよ?何か言う事があるんじゃないのかい?」

仁はニヤニヤとした表情を浮かべながらそう言った。
しかし、それでも壊は仁の見向きもせずにつまらなそうな顔をしながら茶を啜る。

「お前・・・いい加減にしろよ!!」

さすがの仁もこれには腹が立ったのか、札を何枚か取り出してぶつぶつと何か唱え、
それを壊に向けて飛ばした。しかし、壊はそれを見てもそこから動かずない。
そして仁の投げた札が壊に当たる一歩手前という所まで来たとき、
その札が全て切り裂かれた。
文字通りバラバラに切り裂かれた札はひらひらと地面に落ちた。
この時、この場に居る仁も含めて殆どの者が何があったか分からずに焦っていた。
しかし、何人かは何があったのかしっかりと見えていた。
やがて壊の横にゆっくりと何かが舞い降りた。それは外套を羽織っ

た骨。
その骨は大鎌を肩に担ぎ、自らの主を守るように真っ黒な何もない目でこちらを見る。
そしてその骨に続いて次々と何かが壊の回りに現れる。
獣のような容姿のものだった、小さな人形にようなものだったり。
それは式。壊の周りに集まっている式は、いずれもが強力な力を持っている。

「なんだ・・・何なんだお前は!?」

仁が悲鳴を上げるように壊に問い掛ける。他の者たちも再びざわめきだす。
今の今まで茶を啜っていた壊はおもむろに立ち上がり、湯飲みを後方へと投げ捨てる。
そして静かにこう言った。

「俺は君たちの敵さ。」

そう言った途端、壊と回りに居る式が力を解放する。濃厚で、それでいて鋭い殺気。
この場に居る殆どの者がそれを肌で感じているだろう。しかし、仁以外の四天王が結界を作り、壊たちの殺気を防いだ。

「ほぅ・・・・。」

壊はそれを見ると、感心したように声を上げる。そして静かにククと笑い、
右手を自分の頭より少し上げる。

「さぁ、始めようじゃないか・・・・・。」

そう言いながら右手をそっと下ろす。それと同時に式たちが動き出した。

壊は楽しそうな目をしながら屋根から降り、式に続くように真っ直ぐと軍へと突っ込む。

戦いは今始まった・・・・

その頃の玉藻＆ぬえ

「・・・ここ何処？」

「それは私が聞きたい！」

第１１６話：都との戦いの始まり（後書き）

はい、結局今回も壊は戦いませんでした。すいませんね。
展開が遅くて。でも次は戦うと思いますよ？話の流れ的には。

第１１７話：最凶の式　降臨（前書き）

…遅れました。すいません。最近忙しい＆ａｍｐ；ネタが切れてきました

第１１７話：最凶の式　降臨

敵陣に突っ込む俺に対し、相手の弓兵が矢を放ってきた。それを避けつつさらに敵に近づく。
手始めに、手前に居た弓兵の頭を掴んで前方におもいっきり投げる。
投げられた弓兵は、俺に向かってきた矢に何本か刺さりながら味方を巻き込んで地面に叩き付けられる。
それを見たほかの兵は、今度は自ら刀や十字槍を持って俺を囲むように突っ込んできた。
・・・・どうやらこいつ等を纏める司令塔はそれなりに頭が回るようだ。しかし、俺には通用しない。
一番最初に辿り着いた十字槍の柄を掴み、横に向かって軽く突く動作をする。
そして向かってきた別の、刀を持った兵の肩に槍の先を突き刺した。
そして刺さっている兵を蹴り飛ばす。
さらに、十字槍を持った兵を蹴り上げて槍を奪い取り、奪い取った槍を振り回すように回転する。
すると俺を囲んでいた兵が十字槍によって薙ぎ倒される。
ある程度倒すと、今度は回転したままその辺を移動し、回りに居る兵を片付ける。
何故槍を振り回しているのに木などに当たらないかと言うと、今朝方、木を切り倒したばかりなのだ。
よって障害物になるような物は殆ど無い。

「舐めるなぁ！！」

と、気がついたら十字槍が刀で受け止められてしまった。
受け止めたのは髭を生やした３０ほどの男だった。こいつ・・・中々やるな。

男が俺の十字槍を受け止めたのを好機と見たのか、他の兵が各々の武器を持って再び俺に突っ込んでくる。
だがしかし、俺とて黙って殺られるほど優しくはない。十字槍を受け止めている男を力任せ吹き飛ばし、そのまま上に跳ぶ。すると下の奴らの何人かが同士討ちになった。
ついでだから同士討ちにならなかった兵の一人に向けて十字槍を投げてやる。
借りたものは返さないとな。俺の投げた槍は兵の右肩を貫通し、その兵は痛みで気絶した。
それだけで気絶してしまうとは、情けない・・・・
他の式たちが起こしているであろう爆発音や、遠吠えを聞きながらそう思う。
地面に着地したと同時に近くに居る兵の足を素早く掴んで兵の身体に霊力を込めて強化&動けないようにして武器の代わりに振り回す。
どんなものでも霊力や妖力を込めればそれなりに使える武器になる。

「くっ！この外道め！！」

喧しい。そういう意味も込めて今文句を言ってきた兵に人間バットを振り下ろす。
人間バットが頭に直撃した兵は、泡を吹いて気絶した。よく見ればバットになった人間も気絶している。

「クソッ！コイツ強いぞ！！」
「あぁ、一見ふざけているように見えるが出鱈目な強さだ！！」

そんなことを言いながら後ろで騒いでいる兵たちに向けてフルスイング。
人間バットに当たった兵は何人かを巻き込んで放射線を描きながら吹き飛んだ。

はっきり言って、こんな人間バットよりも能力で創った武器の方が何倍もいいのだが、それでは俺の退屈しのぎがすぐに終わってしまうので、能力は出来るだけ使わない。
まぁ、代わりに近くに居た人間を使うと言うのもどうかと思うがな。
さすがにこれ以上はこの兵が死んでしまいそうなので、少し離れた位置に居る兵に向けて投げる。
投げた兵は見事狙った兵に当たり、両方とも気絶してくれた。
（※バットになった人間は最初から気絶しています。ご愁傷様。）

「おい！陰陽師は何をやってるんだ！？」
「俺が知るかよ！！」

横からそのような声が聞こえる。そう言えば陰陽師がどこにもいないな。どこに行った？
逃げた・・・とは思えない。向こうにも色々事情はあるだろう。それなら何かを仕掛けているのだろうか？
始めに見たときに晴明も含めた四天王も居たな。それに、晴明は俺を見た時に驚いていた。
俺が裏切り者だと知らされなかったのだろう。まぁ、そんな事はどうでもいい。
それより、今は陰陽師たちがどこに行ったかだ。

「隙ありぃぃぃぃっ！！」

陰陽師たちについて考えていると、左右から兵が刀を振り上げながら突っ込んできたので、
片方の兵の足に自分の足を掛けてよろけさせ、顎を蹴り上げる。もう片方の兵の方は頭を掴んで地面に叩き付けた。
心なしか、兵たちが焦りを見せ始めている気がする。
と言うか先程から絶が起こした爆風やゼクが投げ飛ばした兵がこち

らに飛んでくるのだが。

「後は我らに任せよ！！」

鬱陶しい兵たちを叩きのめしていると、兵たちの後ろからそのような声が聞こえた。

その声を聞いた兵たちは、道を作るように俺から離れていった。

そして兵が離れて俺の目の前に見えたのは、今までここにはいなかった陰陽師だった。

周りからは「おぉ・・・」とか「これで勝てる！」とか「ふはははは！これで手柄は俺のものだ！」とか

色々聞こえる。とりあえずそこのお前、手柄の事より自分の心配をしろ。

と、心の中でそう思っていると、一人の陰陽師が俺の目の前までやってきた。

「・・・・晴明か。」

俺の目の前までやってきたのは晴明だった。どことなくそわそわしている。

いつの間にか敵兵も俺の式も戦うのをやめている。

「壊・・・・大人しく罪を償う気は無いのかのぅ？」

「・・・・そちらから仕掛けてきたのだから、今更取り消せやら、罪を償えやら言われても無理な話だ。」

「そうか・・・・。」

晴明はそう呟くと、下を向いて俯く。周りを見れば、いつの間にか俺の式も敵兵も戦うのをやめていた。

「それなら仕方ないのぅ・・・・・・。」

晴明はそう言うと、ゆっくり顔を上げた。そして俺の目をしっかりと見てきた。
その目は何かを決意した目だった。真っ直ぐで、純粋で、何かを守りたいという目。

「我はお主を倒す。」

晴明がはっきとそう言うと、今まで黙っていた陰陽師が全員ぶつぶつと何かを唱え始めた。
目の前にいる晴明も何か呪文のようなものを唱えている。すると・・・

「っ…!?」

約１０秒ほど晴明と園との陰陽師が何かを唱え続けると、俺の身体に異変が起きた。
おかしい・・・体がやけに重く感じる。力が抜けていく感じもする。
身体に力が入らず、そのまま片膝を地面につける。俺の異変に気付いたのか、晴明は得意げな目で俺を見下ろす。

「壊、お主は強い。たぶん本気を出したお主には誰も勝てぬだろう。
それならば本気を出す前に手を打ってしまえばいいのじゃ。」

…なるほど。そう言う事か…

「今お主のこの辺り一帯にはお主たちの身体能力を極限まで下げる結界を張ってある。
思うように力が出ぬじゃろう?これは我が独自に作り上げた結界で

な。他の陰陽師たちに覚えさせるのは苦労したぞ？」
「それなら…」
俺はそう言い腕輪に手を掛ける。しかし、腕輪に触れる前に晴明が俺の腕輪に触った。
そしてその手をゆっくりと引いた。
「っ…！？」
腕輪が外せない！？
「その腕輪がお主の力を封じているの知っておる。じゃから外せないように封印をさせてもらったぞ？」
…油断した。戦いを楽しみたいからと言って侮っていた。
いつもの俺なら「敵を侮るな」とか「油断するな」とか言っているのになぁ。
最近はそれらしい戦いをしていなかったから身体が鈍っているんだろうな……。
初めから本気になればこんな事にもならなかっただろうに…馬鹿だな、俺。
ん？待てよ…
「…何故君たちはそんなに平然としていられるんだ？
結界はこの辺り一帯に張られているのだろう？」
「それはな、これじゃ。」
晴明はそう言って袖の中から一枚の札を出した。見たことの無いタイプだな。

「この札はな、今張っている結界をほぼ無効化できる。さらに結界の効力を逆に出来る。」
「…と言う事は、その札を持っている君は身体能力が下がるのではなく上るのか。
なんともまぁ便利で厄介な結界だな。」
「我だけではない。今回ここに来た者たちには全員にこの札を持たせておるぞ？」
「そう言えば何だか強くなった気がする…。」
「俺も…。」

晴明が言った事を、今更ながらここにいる殆どの者が理解したようだ。本当に厄介な事を…
心の中でそう思いながら絶たちの様子を見る。どうやら俺の式たちも俺と同じ状態のようだ。

「壊…すまぬがここで我に倒されてもらう。」

晴明がそう言った途端、俺は後方に吹き飛ばされる。そしてそのまま受身も取れずに地面に叩きつけられる。
さらに、晴明は追い討ちを掛けるように陰陽術で作られた六芒星を８個ほど自身の回りに浮かべ、それを俺に飛ばしてきた。
確かあれは晴明のオリジナルの一つ、『破魔の六芒星』だったか？
あれは当たるともの凄く痛んだよな…。前なんか手加減されてしかも１発だけだったのに食らったら右腕が千切れかけた。
しかし、晴明はそれをすぐには飛ばさず、今度は光の矢を六芒星と一緒に浮かべた。

「…さらばじゃ、我が親友、壊よ。」

晴明は、そう言ったと同時に俺に向けて作り出した陰陽術を飛ばし

て来る。
絶たちが助けにこようとしているが、今のあいつらでは間に合わない。
俺は、先程の晴明の攻撃で身体が言う事を聞かない。あいつめ、相当力を込めたな。
あぁ…これは…

「…詰んだな。」

その途端、俺に晴明の陰陽術が命中した…

ーーーSide三人称ーーーー

晴明が壊に向けて撃った陰陽術が壊に当たると同時に爆ぜる。
袖で顔を隠し、爆風から顔を守る。
やがて爆風が止み、壊の姿が見えたが、晴明は罪悪感から壊を見ることが出来なかった。
大切な親友をこの手で殺めたのだから当然の反応なのだろう。
周りに居る兵は、裏切り者、紅鎖華壊が倒された事によって全ての者が喜び合っている。
そして今回の軍の指揮官的存在の男の近くまで晴明は近づいた

「…紅鎖華壊の処理は任せるぞ?」
「承知しました。では・・・おい、お前たち!紅鎖華壊を燃やせ!!」

指揮官が部下の兵に向かってそう叫ぶ。すると5人ほどの兵が紅鎖華壊に近づいた。
そして晴明はそのまま身を翻し、集まっている陰陽師の集団に戻る。

「なっ！！？」

突然、壊に近づいた兵が驚愕の声を上げる。
それと同時に「ブシュッ」と何かが引き千切られる、または切り裂かれるような音がした。
晴明は何があったか確認するために壊の方を向いた。そこには…

「ク、ククク・・・・・・。」

今しがた倒れていたはずの壊が立っていた。
左腕の手首の先は無くなっており、着ているコートはボロボロになっている。
そして右手には兵の頭を鷲掴みにしている。
その掴まれている兵以外は皆、首やら腕やらをバラバラにされて死んでいた。
・・・死んでいるのだろうか？

「あ・・・うぁ・・・・・」

頭を鷲掴みにされている兵は何が起きたのか理解できないように口をパクパクと開けたり閉じたりしている。
しかし、その瞳は確かに恐怖を宿していた。ここにいる壊以外の全員が唖然としている中、壊は静かにその口を開いた。

「ククク…絶、お前たち全員に許可する。」

壊がそう言うと、今まで何の反応も示さなかった壊の式たちが一瞬で壊の周りに集まった。
そして式たちの身体が歪みだした。歪みは徐々に広がり、やがて歪みは式たちを掻き混ぜる。
壊は歪みの中心で楽しそうに笑う。『異様』そうとしか言いようの無い状態。
そして少しずつ式たちの歪みが消え、その姿を現す。しかし、式の数は6体から3体に減っており、さらにはその容姿も変わっていた。

1体目は、身の丈3メートルほどはありそうな人形のような何か。
箱をつなぎ合わせたような腕に、見るからに硬そうな手。
どこぞの天空の城に居るおかしなロボットの長い腕をを思わせる。
顔と言える場所には四角形の端を丸くしたような物が浮かんでおり、四角形の顔の中央には十字架のような穴が開いていた。さらにその中央には丸い物が鈍く紅い光を放っている。おそらく、これが目の役割をしているのだろう。
四角形の顔の下にはこれまた奇妙な端を丸くした台形を引っ繰り返したような人間で言う胸の部分があり、さらに下にはまるで鎖をつなぎ合わせたような奇妙なものが繋がれている。
その鎖のような物の一番下には、丸い大きな円盤がくっ付いていた。
円盤は、どういうか訳ゆっくとだがクルクルと回っている。
人形のような何かは宙を浮いている。

2体目は、約１８０?の黒い男性の形をした黒い塊。
その腹部には円を描くように鋭い牙が剥き出しになっている。簡単に言えばイソギンチャクのようになっている。
さらに、肩、肘などと言った場所からは腹部にあるような牙が生えていた。
顔には紅い宝石のような目が一つ。さらに、よく見ると両の手のひらにも紅い宝石のような目があった。

下半身から下は人のものではなく、まるで動かない棒状のような…
蝋燭のような下半身をしている。
それが時たまグニャリと動いたりしている。

3体目は限りなく人骨に近い何か。まるで狼のような牙に口、山羊のような角。
そんな感じの頭蓋骨。風に靡く外套から覗く身体は人の人骨と大して変わりは無いが、
腕が4本あった。しかも、指の先は鋭く尖った何かを重ね合わせたような形になっており、全ての手には大鎌が握られている。
そして普通の骨の足と何故か生えている骨の尾。そのどちらもやはりだが鋭い。

この3体は何れも全てが壊の式。力の釣り合いがとれている同士を1体にする事により力が何倍にも膨れ上がる。
これが壊の凶鳥化以外の新しい切り札。
いくら結界で力が弱まっていると言っても、先程よりはずっと強い。
おそらく、都最強の陰陽師、晴明でもここまで強い式は知らないだろう。

壊はゆっくりと頭を鷲掴みにしていた男を自分の顔の横まで持ってくる。
男は必死に痛みに耐えるように苦痛の表情を浮かべている。
そして壊の横に居た死神が4つの大鎌の内一つを動かす。そしてその大鎌を振るった。
すると男の身体が地面にどさりと落ちた。しかし、落ちたのは身体だけだ。
首は壊がまだ掴んでいる。その首を乱暴に放り投げた。
それを見ていた晴明と他の陰陽師は壊に向けて殺気を放つ。

「壊…、お主！」

「ククククク…クッハッハッハッ！！さぁ始めよう！！まだまだ終わらせはしない、俺が飽きるまで付き合ってもらうぞ！！」

戦いはまだ終わらない……

第１１７話：最凶の式　降臨（後書き）

そんな訳で終わりました。それと、更新遅れました、すいません。
ちなみに、融合した式同士は

絶＋クロック

ナイア＋ゲート

ニオ＋ゼク

ですね。
次回も都の兵＆陰陽師ｖｓ壊＆ａｍｐ；式の戦いです。
でも都兵はあんまり出番ないかなぁ……

第１１８話：戦いの末（前書き）

前書きはなし。本編をどうぞ

第１１８話：戦いの末

ーーーーSide壊ーーーー

「クハハハハッ！どうしたどうしたその程度かぁ！？」

目に映る兵を片っ端から潰す。見つけた者は殴り、蹴り、引き千切る。

「この…！いい加減にしやがれ！！！」

後ろから兵が十字槍で俺の心臓を突く。そしてそのまま俺を上に掲げる。

…痛いなぁ…でも・・・

「…その程度か？」

「な…！？がぁっ！！？」

突き刺さっている十字槍をへし折り、今しがた突き刺して来た兵の首を右手で締め上げる。

そのまま地面に叩き付けて思いっきり胸を踏みつける。

「くっ！！てめぇ！！」

近くに居た兵が刀を振りかぶって俺の突撃してくるが、踏み付けている兵の脇腹を蹴り上げて宙に浮かせる。

そしてその兵を盾にすると、刀が奇麗に盾兵を切り裂く。

晴明なら俺を倒せるだろうが、陰陽師は全員が俺の式に足止めを食らっている。

普通なら今の俺の式じゃここにいる陰陽師全員を足止めすることは出来ない。
しかし、先程その辺の兵から札を引っぺがし、それを俺以外の全員に持たせているので本来の力を出せる上にそれも強化される。
何故自分が持たないかって?それは持っていても無駄だからだ。
晴明の奴が俺に細工をしてな。だから俺だけは持っていても無意味。
腕輪を外そうにも、俺の腕輪は前に一定の力を出さないと外れないように瑠璃に頼んで作り直して貰った。
今は力が制限されているので晴明の結界のせいで外れない。

「くたばりやがれ!!」

そう言いながら先程まで味方を切って放心していた刀兵が再度俺に切りかかる。
刀を横に避けてかわし、そのまま横顔目がけて蹴りを放つと同時に、存在を忘れていた胸に刺さっている十字槍の刃を投げつける。
それは見事に刀兵の額に突き刺さり、刀兵は槍の刃を突き刺したまま何人か巻き添えにして真横に吹っ飛ぶ。
すかさず他の弓を持っている兵の懐にもぐりこみ、顎に向けてサマーソルトを炸裂させる。
そのまま別の兵を蹴り飛ばす。しかし、これまた別の兵に弓を射られて耳の穴に入り矢が突き刺さる。
見事に突き刺さった矢の勢いで地面に叩き付けられるように横向きに倒れた。
さらに追い討ちを掛けるかのように周りに居る兵が俺に各々の武器を突き立てる。…痛い…

ーーーSide晴明ーーーー

「強い…。」

思わずそう呟いてしまうほど目の前に居る壊の式たちは強かった。
もう我を含めた四天王三人しか残っていない。…四天王であるはずの仁は一番最初に倒された。
「あんな式、僕に掛かったら一撃さ。」と言って札を投げた途端におかしな光線を撃たれて気絶した。
油断ばかりしているからじゃ・・・

「晴明よ、向こうは三体でこちらも残りはわしら三人だ。分かれて戦わないか?」

四天王が一人、灸時堂(きゅうじどう)　泰久(やすひさ)がそう言う。

「おんや?泰久殿はそれで勝てるのかいねぇ?」

馬鹿にしたような口調でそう言うのは、四天王の一人夜霧(やぎり)　香字(こうじ)。
その香字の言葉に対し、泰久は鼻で軽く笑う。

「見くびるなよ。これでも四天王の一人、そう易々とやられわせん。」

「まぁ、あっしは構わんがねぇ。どうするよ、晴明?」

「…わかった。では個々で分かれて戦おう。各々でどの式と戦うか決めておこうかのぅ。」

我はそう言い、改めて式たちを見る。どうやら我たちが話している間、待ってくれていたようだ。
なんと言うか・・・優しい。

そう思っていると、式がこちらに文字通り飛んで来る。
そして黒い男のような式が香字へ、骨の式が泰久へ、そして大きな人形が我へと攻撃を仕掛ける。
式の攻撃をかわし、そのまま一対一に持ち込むように分かれる。
さて、早く倒して壊を止めねばならんのぅ・・・

ーーーSide三人称ーーー

「・・・やった・・・のか？」

最後に壊の身体を刀で斜めに切った兵がそう呟く。
周りに集まっている兵も、本当に倒したのかどうか疑問に思っている。
しかし、壊の身体は既にぼろぼろになっていた。各々が突き刺した武器は数十を超え、
痛々しいまでに深く刺さっている。槍なんかはもう反対側から飛び出ている。
正直言ってグロイ。

「・・・やったんだ・・・。俺たちは勝ったんだ・・・！」

壊の周りに集まっている兵たちは静かに歓声の声を上げる。
中には感動しながら泣いている者たちもいた。
今まで感じていた恐怖は過ぎ去った。これが今の兵たちが思うことだった。

「な・・・なぁ・・・。」

しかし、一人の兵が急に顔を青くしながら泣き始めたのだ。

感動の涙ではない。脚をガタガタと震わせながら何かに怯えるように泣いている。
疑問に思った兵は何故震えているのか聞こうとしたが・・・

「なっ・・・!?」

震えている兵の足元を見て別の兵は固まった。
血で真っ赤に染まった手が震えている兵の足首を掴んでいるのだ。
そしてその血塗れの手で掴んでいるのは・・・

「ク・・ククク・・・。」

武器を身体中に突き刺さしている化け物、紅鎖華壊だった。
下を向いたままゆっくりと、ゆっくりと化け物が立ち上がる。
周りの者は皆が今目の前で起こっている状況を理解できずに唖然としている。
しかし、壊の近くにいる足首を掴まれていた兵だけは今の状況を理解していた。
そして立ち上がった化け物は俯かせていた顔を少しずつ上に上げる。

「ククク・・・。」

その瞳には狂気を宿し、口を三日月のようにしながら笑っている。
身体の至る所からは血をダラダラと流しているが本人はまったく気にしていないと言った様子だった。
壊は自分の目の前で背を見せて震えている兵の右腕へそっと手を伸ばす。
そしてそのまま兵の右手首を『ゴキッ』と折った。

「ぎゃぁぁぁぁぁ!!」

手首を折られた兵は悲痛の叫びを上げ、右の手首を押さえながら地面に蹲る。
壊はそれを楽しそうに見下ろすと、両腕を少し広げ、改めて兵たちへ向き直る

「ククク・・・クハッハッハッハッ!!」

腕を少しだけ広げながら狂気を含んだ笑いをする壊。
瞳孔が全開になったその瞳は闇夜で獲物を狩る獣のように紅く輝いている。
都の兵たちは恐怖しながらも全員が同じような事を考えた。
『こいつは化け物だ。相手にしてはいけなかったんだ。』
もやは都の兵たちには、戦う気力も無ければ戦力も殆どない。目の前にいる化け物に根こそぎ持って行かれてしまったのだから。
化け物は草を踏みしめる様にしながらゆっくりと近づく。時折気絶して歩く邪魔になっている兵などがいるが、そう言う兵は遠くへ蹴り飛ばして再び歩く。しかし

「そこでまでじゃ、壊。」
「・・・・・・・・・・・・。」

不意に都最強の陰陽師、晴明の声が辺りに響き渡る。壊は声のする方へゆっくりと振り向く。
そこには若干肩で息をしている晴明がいた。

「・・・何故君がここにいるんだ?俺の式はどうした?」
「お主の式なら我の持っている全ての式で足止めしておる。」

壊の問いかけに対して晴明がそう答える。

それを聞くと壊はチラリと自分の式たちを見た。確かに、絶とクロックを融合させた式が晴明の召喚した５０ほどの式と戦っている。他の２体は四天王とガチでやり合っているようだ。頑張れ。

「壊・・・いくら何でもやりすぎじゃ。」
「やりすぎ？何を言っているんだ。一人も殺していないんだからこんなものまだ序の口だろう？」

壊はそう言いながら静かに笑う。それに対し晴明は黙って壊を睨みつける。
そう壊は本当に誰一人として殺していない。今まで死んで行ったものは全て壊が見せた幻術なのだ。
では何故そのような事をしたのか？それは壊が戦いを楽しむためである。
当然の事だが、晴明は壊が誰一人として殺していないのを分かっていた。
晴明はそのまま印を組まずに壊に陰陽術を放った。壊はそれを上に跳んで避ける。
さらに近くに居た兵の顔を踏み台「ぐぎゃ！」にして晴明の頭上まで一気に跳び、そのまま踵落としをする。
しかし、晴明は霊力を込めた腕でその攻撃を受け止める。壊は舌打ちをしつつ晴明の腕を蹴って後ろに跳んで距離をとる。
そして地面に着地したと同時に身自分の身体に刺さっている矢を引き抜いて晴明に向けて飛ばす。
晴明は飛んできた矢を横に跳んでかわした。

「ずいぶんと無茶な戦い方をするのぅ・・・。」
「そちらもだ。俺に合わせて戦うなんて、馬鹿な事をしているじゃないか？」

そう、晴明は壊に対して手を抜いているのだ。
今の壊ではどんなに頑張ったところで晴明には勝てない。それをわかった上で壊は晴明と戦っているのだ。

「ククク・・・まったく持って厄介だよ。君は。」
「そうかのぅ・・・我からしたらお主も充分厄介じゃぞ？ふふふ・・・」

もはや戦場と言える場所で化け物と人間が共に笑う。
化け物は、先程の歪んだ笑みではなく、純粋に心の底からの笑い声。
瞳の狂気は消え、三日月のような口も元に戻り、ただ純粋に楽しんでいる笑み。
おそらくは女性がいれば１０人が１０人振り返るであろうその笑みは、もてない男からは羨ましがられるだろう。
・・・羨ましくなんかねーぞ畜生！！

「・・・壊っ！？」

晴明が壊の名前を叫んだ。突然壊が仰向けに倒れたのだ。
壊の名前を叫んだ晴明はそのまま壊のもとへ駆ける。そして膝を地面につく。
壊は目を閉じながら口から血を吐いている。
周りに居る兵は、いつの間にか戦うのをやめている四天王と壊の式が指示をして都に帰らせていた。
倒れている者たちは、晴明が出した式が頑張って運んでいる。
いや、あんた達さっきまで戦ってたのになんで今はそんな協力し合ってるんだよ。

「壊！しっかするのじゃ！！」
「・・・晴明うるさいから少し黙っていろ。後ついでに、身体に刺

さっている武器を抜いてくれ。」
「・・・・よかった・・・。」

そう言いつつ壊の身体に刺さっている武器を次々と抜いていく晴明。

「今の身体の調子はどうなっておるのじゃ？」
「・・・身体中が悲鳴を上げていてどこも動きそうに無い。
途中から霊力や妖力などで無理やり動かしていたからな。
お陰で手首を再生させるための力でさえも残っていないよ・・・。」

壊はそう言いながら手首の無くなっている方の腕を見せる。
未だに血は止まっておらず、見ていて痛々しいと思っている晴明は目を逸らす。
晴明が目を逸らすので、壊は腕を隠すようにポケットに突っ込む。

「さて、晴明。俺はどうなる？まさかこのまま逃がしてもらえると言う事は無いだろう？」
「・・・帝からは始末せよと言われているが、よくよく考えてみたらお主は死なんからのぅ・・・。
じゃから我はお主を封印しようと思う。」
「・・・結界を破って封印を解くかもしれないぞ？」
「どうせしばらくは力も戻らんじゃろう？それに、仮に結界を解いて力を戻そうとしても、今のお主の身体では耐えられないのだろう？」

晴明は自信満々にそう言う。そう、晴明の言う通り今の壊が封印をされても封印を解く事は出来ない。
仮に壊の力を弱めている結界を解いても、今の壊では元の力に耐えられるだけの力は残っていない。
無理に耐えようとすれば使った力が回復しなくなる。

「まぁ・・・な。今の状態で力が回復するのには早くて５００年、遅くて１０００年と言ったところだろうな・・・。」
「ずいぶんと時間がかかるのぉ。」
「君のせいなんだがな・・・。」

口元を袖で隠しながらクスクスと笑う晴明。

「晴明、封印するなら早くしろ。」
「・・・・いいのか？」
「何を今更。どうせ今の状態で逃げたって仕方ないさ。」
「・・・わかった・・・。最後に何か言うことはないかのぅ？」
「そうだな・・・それじゃあ確認したい事が一つ。他の四天王もここからなら聞こえないだろう。」
「何か言いづらい事なのかのぅ？」
「そうだな。少なくとも君は知られたくないだろうな。」

壊はそう言って話し疲れたのか、一旦呼吸を整える

「お前は女だろう？」
「っ・・！？お主・・・気付いておったのか・・・。」

晴明は驚きを隠せないような顔をしている。筆者的には、もう少し誤魔化してもいいと思うぞ。

「・・・いつから気付いておった？」
「初めて君の屋敷に招かれた時だな。服から微妙にさらしがはみ出ていた。」
「・・・変態。」

晴明はそう言いながら顔を赤くし、両腕で抱きしめるようにして胸を隠すような仕草をする。

「誰が変態だ。見えてしまったのだから仕方ないだろう。・・・さて、気になっていた事も確認できた。さっさと封印をするなり何なりしてくれ。」

「微妙に納得できんがまぁいい。では封印するぞ？本当に逃げようとは思わんのじゃな？」

「くどいぞ。逃げた所で大したことも出来ないし、間違いなく追ってが来るだろう。

その追ってから逃げるのは疲れる。だったら封印されている間に力を回復させる方がよっぽど楽だ。」

「そうか・・・それなら仕方ないのぅ・・・。少し待っておれ。準備をする。」

晴明はそう言って袖から札を何枚か取り出す。

いい加減めんどくさくなってきたので壊に代わってもらおうと思う。

という訳で、次は壊からです。

ーーーーSide壊ーーーー

「駄目作者だな。」

「行き成り何を言い出すのかのぅ、お主は・・・。」

晴明が変なものを見るような目で俺を見る。

何故かは知らんがそう言った方がいい気がしたんだ。

だから頼む、そんな目で見ないでくれ・・・。

「・・・晴明、今気付いたんだが君以外の他の四天王はどうしたんだ？」

いつの間にか晴明以外の四天王がいなくなっている。
ついでに言うと俺の式が3体から6体に戻っている。とりあえず、どうして絶は茶を淹れているのだろうか？
と言うかいつ持ってきた？

「壊、終わったぞ。」
「・・・そうか。封印されるのはどんな気分なんだろうな・・・。」
「・・・封印されるのは怖いか？」
「さぁ・・な。少なくとも封印される事で退屈しそうだよ。」

封印されたら間違いなく退屈するだろうな・・・。
一層の事、前のようにずっと寝ていようか？まぁ、そんな事をすれば回りの事も分からなくなるだろうし・・・。

「始めるぞ？」
「ん、あぁ・・・少し待ってくれ。お前らこっちに来い。」

何故か茶を啜っている絶たちにそう言う。と言うか飲めるんだな。
絶たちが近づくのを確認した俺は、絶たちに再び話しかける。

「とりあえずだ、俺はこれから封印される。
そこでお前たちに選択肢を与えたい。このまま俺を忘れて自由に生きるか、それとも封印されて俺に縛られるように生きるかだ。
どうする？１０秒待つ、だからその間に決めろ。どちらを選んでも俺は何も言わない。」

俺がそう言うと、式たちは俺の近くでまったく動かずに留まっている。
そして１０秒が経っても式たちは一体も動かなかった。・・・・馬鹿だなぁ・・・。

「・・・本当にいいんだな?自分で言うのもなんだが、俺はお前らを扱き使うかもしれないぞ?」

それでも動かない式たち一行。まぁ、扱き使うといっても今までと変わらないがな。
俺はそれを確認すると右腕で懐を探り、石を出して式たちを仕舞う。

「・・・まぁ、そう言う訳だ。晴明、こいつらも一緒だ。」
「親思いじゃな。では・・・。」

晴明がそう言うと、晴明の周りにとてつもないほどの霊力が集まる。
・・・まさかコイツ、全力で俺を封印しようとしていないか?いや絶対に全力で封印しようとしている。
と、くだらない事を考えていると晴明が俺の周りに描いた術式に光が集まる。
すると俺の身体が少しずつだが足から上に消えていく。身体にあまり違和感を感じないな・・・。
横に居る晴明の方へ顔を向けると、顔を俯かせながら肩を震わせていた。・・・泣いているな?

「晴明、俺からの最後の頼みだ。」
「・・なんじゃ・・・。」
「数少ない親友が泣いている所はあまり見たくない。だから笑え。」

親友やら友人が少ない俺にとってはこういう場面ではどうすれば言

いかよく分からない。
しかし、これが最後だと言うのに泣き顔を見ると言うのはなんとなく嫌だ。
その辺の人間と俺の寿命はまったく違う。だからよっぽどの事が無い限りはもう二度と会えない。
俺がそう言うと晴明はゆっくりと顔を上げる。笑っていた。涙を流しながらも笑っている。

「・・・と、もう肩まで消えたな。」

今まで話していたから違和感を感じなかった。しかしアレだな。
今の俺は生首状態なんだよな。・・・あぁ、そうだ。

「晴明。」
「なんじゃ・・・？」

今も尚笑っている晴明言いたい事があったのを思い出した。
口元が消えそうになった時、俺はなるべくはっきり聞こえるようにこう言った。

――――今までありがとう――――

そこで俺の視界は暗くなった・・・

第１１８話：戦いの末（後書き）

はい終わりました。途中からグダグダだったけど気にしない。
次回は壊の封印後、他の人達がどうしているかを書きたいと思います。

番外編：それぞれの・・・・・・（前書き）

今回は、壊が封印された後に、他のキャラクターがどうしているかを書きたいです。

番外編：それぞれの・・・・・

ーーーSide晴明ーーーー

「・・・馬鹿者め・・・・。」

あんな事を言われたら・・・忘れられないではないか・・・。
諦められないではないか・・・。恋しくなってしまうではないか。

「・・・っ・・！」

今更ながら熱い何かが目頭にこみ上げる。
初めての親友であり、そして初めて恋をした男。
今まで女としては生きず、男として生きてきた『私』が初めて好いた男。
自分の事を知られるのが怖くて女として生きたくなかった。
私の身体にはほんの僅かにだが狐の妖怪である母の血が流れている。
壊はそれを知っていた。いや、ずっと前に私自らが話した。信用していたから。
しかし、いざ話してみたら怖くなった。もしかして嫌われるのでは？そう思っていた。
だが返ってきた言葉は「そうか。」の一言だった。あの男にとっては種族なんてものはどうでもよかったのだと思う。
たぶんそれからだったと思う。種族を気にしないで誰にでも平等に触れ合う壊に惚れたのは。
でも、その惚れた相手を封印した。胸の中が罪悪感で膨れ上がる。

「ッ・・う・・・・うぅ・・・。」

誰にも聞かれる事無く、私はその場で泣いた・・・・

ーーーーSide瑠璃の部下（もとい秘書）ーーーー

どうもお久しぶりです。皆さん私のことを覚えているでしょうか？
ちょくちょく話に出させてもらっている瑠璃様の部下、もとい秘書的なお仕事をさせてもらっている者です。
ちなみに名前はありません。さて、そろそろ現実逃避をやめて今の状況を何とかしましょう。

「えっぐ…ひっぐ…え～ん…」
「お願いですからいい加減に泣き止んでくださいよ…。」

目の前には地面にへたり込んで両手で目を隠しながら泣いている上司の瑠璃様が。
先程仕事を終わらせて久しぶりにあの男、紅鎖華　壊の様子を見ようと言い出したのですが見た時に丁度あの男が封印されているシーンでして、それがが相当ショックだったようでずっとこの調子なのです。

「ほら、涙を拭いてください。」

私はそう言いながらハンカチを瑠璃様に手渡す。瑠璃様はそれを受け取り、涙を拭いて…

「ズビ～ッ！！」

あぁ…これで何枚のハンカチが犠牲になっただろうか…
少なくとも3枚は犠牲になった気がする。帰ってきた涙と鼻水塗れのハンカチを近くにあったゴミ箱に投げ入れる。

「うぅ…壊さんが…ひっく…壊さんがぁ…。」

…どうしたらいいのでしょうか?とりあえず、何とかして慰めなくては…。

ーーーSide紫ーーー

壊に言われたとおりに九尾と鵺をスキマの中から探す。
確か九尾の記憶を消せと言っていたが、壊の敵を討とうなんて考えなければ記憶を消す必要も無いだろう。
おそらく壊は、九尾が都に攻め込めば簡単に退治されてしまうと分かっているから記憶を消して自分の敵討ちさせないようにしようとしているのだろう。

「…見つけた。」

しばらく探しているとやっと見つける事が出来た。山道らしき所を少女と女性が歩いている。
女性からは九つの尾が生えており、少女の背からは奇妙な羽が生えていた。

「こんにちわ~♪」
「「っ!?」」

二人の目の前でスキマ開く。やっぱり誰かを驚かせて驚いた顔を見るのは面白い。
さてと…、とりあえずお話だけでもしましょう。

ーーーSide神たちを三人称でーーー

「放してってば～！！」
「だから駄目だって言ってるだろうが！！」
「お二人も仲がいいですね～…。」

今にも神社を飛び出しそうな勢いの諏訪子と、それを必死に押さえつける神奈子。
そしてそんな二人を見ながら茶を啜っているアマテラス。
諏訪子は壊が退治されると言う事をアマテラスに聞いたのだ。
アマテラスはどうやってそんな情報を仕入れたかと言うと、たまたま通りかかった旅人に聞いたらしい。
それを聞いた諏訪子は神社を飛び出して壊を助けに行こうとしているのだが、今の勢いでは間違いなくが一般市民を巻き込んでしまいそうなので神奈子がそれを止めている。

「アマテラス！見てないで止めるのを手伝いな！！」
「無理です。私にそんな力ありません。」

アマテラスはそう言いながら再び茶を啜る。
どうしてアマテラスがここまで落ち着いているかと言うと、アマテラスは壊が死ぬ事はないと言う事を覚えている。

仮に倒されてしまっても。不死身であるが故にすぐに復活すると思っているのだ。
ちなみに、この三人は壊が既に封印されていると言う事を知らない。
旅人から聞いた情報も、もう二日も前の話であり、アマテラスも壊が封印された今日にこの二人に話したのだ。
この三人は神としてどうなのだろうか……

ある日都に一人の妖怪の少女が敵討ちが目的で攻め入った。
その少女は背中に奇妙な羽を生やし、都の者からは訳の分からない力で別の化け物に見えた。
しかし、少女は都で一番の弓の名手によって退治され、陰陽師たちに封印されてしまった。

ーーーーSide三人称ーーーー

「あらあら…まさかあの子が都に攻めるとは思わなかったわね…。」

スキマの中から今しがた封印されてしまった少女、ぬえを見ながらそう呟く紫。
そして…

「紫様、そろそろ夕飯の時間です。」
「そう、ありがとう。藍。」

後ろから紫に話しかけた女性、名は八雲（やくも）　藍（らん）。そう、玉藻である。
玉藻は壊の言ったとおりに都に攻め入ろうとしたのだ。そこで紫が、力ずくで止め、ついでに式にする事にした。
ぬえの方は、始めは都に攻め入る気など無いといったので放って置いたが、『地底』に封印された。
さすがの紫も、今はまだ地底に交渉できないので助ける気は無い。
そもそも紫は玉藻の事は言われたがぬえの事はまったくと言っていいほど何も言われていない。
そして先程、その壊を封印から解こうとしたが失敗して帰って来たところである。
晴明の組んだ術式があまりにも複雑で強力すぎたのだ。結界は紫の得意分野ではあるが、さすがに手も足も出なかった。

「…行きましょうか。」
「はい。」

そう言い、スキマを開いて紫たちは何処かに向かった…

番外編：それぞれの・・・・・（後書き）

はい、終わりました。
どの話も中途半端に終わらせてみましたがどうでしたでしょうか？
仕様ですよ？
中途半端にしてこの後どうなるかを読者の皆さんに想像してもらおうと思いました。
（半分はめんどくさいと言う理由ですけど…）

ところでこの後どうしたらいいでしょうか？
このまま時を進めて幻想入りか、それとも現代入りにしようか迷ってます。

第１１９話：解かれる恐怖

「退屈だ…。」

殆ど何も無い場所でそう呟く。
晴明に封印されて一体どれほどの時が流れただろうか？
この世界は退屈だ。俺以外の生物はいなく、あるのは昔と変わらない俺と、ピクリとも動かない絶。
それと懐に仕舞ってある石が５つ。そして俺を閉じ込めている鉄格子。
そう、鉄格子だ。俺の周りをグルっと囲んでいる。重く、そしてピクリとも動かない。
まるで牢のようだ。これを壊さない限り、俺は封印を解いて外に出る事は出来ない。
しかしいくら頑張っても壊れないのだ。確かに、俺の力は完全に戻ったわけではない。
だがそれでも普通の俺ならこんな牢すぐに殴って破壊する事が出来る。
殴っても破壊できないと言う事は、これがこちらとあちらを遮っている結界なのだろう。
実にめんどくさい。
これほど強力なものは紫の能力でも解く事が出来ないと思う。

「…本当に退屈だな…。」

再び俺の発した言葉が辺りに響き渡る。いい加減にここから出たいな。
早くこの退屈を紛らわせたい…。

「…絶はいつになったら動くのだろうか…。」

ここに一緒に封印されてから、絶はまったく動かない。
前に何回か試してみたが、他の式も召喚できなくなっていた。
…まぁ、もう一度試してみるか。俺はそう思い、懐から全ての石を取り出す。
そして手の中でグッと握り、出て来いと念じながら霊力を少量流し込む。
失敗するか、成功するか……成功すれば出る方法はある…

ーーーーSide三人称ーーーー

そこは人気のない夜の林。その林の茂みの中にある獣道をある程度進むと、まったく人の来ない1メートル弱の祠がある。
誰が何のために建てたかはわからない不気味で古い石で出来ている祠。
その祠の前で、サングラスを掛け、スーツを着た怪しい男たちと、額や腕に刺青を入れ、和服のような物を着ている男たちが向かい合っていた。
数は10ほどだろうか?各々5人ずつで分かれており、どちらも5人の内一人が銀のアタッシュケースを持っている。
そして向かい合っている男たちの先頭の二人とアタッシュケースを持っている二人の計四人が前に出る。
他の男たちは後ろで待機している。

「…で、そちらさんはわいらの言った物持ってきてくれたのか?」
「問題ない。この通り…。」

スーツの男はそう言い、横にいたアタッシュケースを持っている男にアタッシュケースを開けさせる。

その中には白い粉や、液体や、何かの固体がギッシリと詰まっていた。

「おうおうちゃんとあるじゃねぇか。」
「勿論だ。そちらこそ、私たちの要求しただけの金はあるのか？」
「おう、問題ねぇぞ。おい、見せてやんな。」

もう片方の刺青を入れた禿頭の向かいあっている男がそう言うと、その男の少し後ろで控えていた
別のアタッシュケースを持った男がアタッシュケースを開ける。
その中にはが札束がこれまたギッシリと詰まっていた。

「ほれ、確かこれくらいだったよな。これでいいんだろう？。
それにしてもよくこんなに集めたもんだな…。」
「これはまだ少ない方だ。
後のやつはまた別の日に取りに来るといったのはそちらだろう？
だから前金の一億をこうして持ってきてもらったんだ。」
「ん？そううだったか？いやすまねぇなぁ。何せこっちももう年だからな。
うわっはっはっは！！」

刺青禿頭はそう言いながら大笑いをする。それを見たスーツ男は、口角を小さく吊り上げる。
分かっていると思うがこの男たちは裏の男たちだ。

「しっかしいい場所だなここぁよぉ。
だーれも来やしねぇ。」
「そうだな。ここほど取引に適したいい場所は中々見つからない。」
「ひょっとしたらこの祠に祀られてる奴のお陰かもしれねぇな！」

そう言いながら刺青禿頭は石造りの祠をペチペチと叩く。
祠は長い年月を経ていて、しかも誰も掃除していなかったのにはそこまで汚くはなかった。

『ピシッ…！』

しばらくの間、刺青禿頭が祠をペチペチ叩いていると不意に祠に亀裂が走った。
それに驚いた刺青禿頭は祠から離れるように後退る。そして祠の上部分が砕けた。
そして祠の砕けた部分からズルリと手が生えてきたのだ。いや、正確には出てきたのだ。
出てきた手は少しずつ伸び、やがて黒いコートに包まれた腕全体まで出てきた。
それを見ている男たちは何が起こったか理解できずに唖然としている。
そして腕が全体が出て来ると、次はもう片方の腕が出てきた。そして男の顔が出てくる。
白い髪に白髪の髪に紅く鋭い目。しかし、その瞳はどこかやる気が感じられない目だった。
男は出ている両腕と手で祠を後ろに押すようにしながらドンドン出てくる。
正直言ってその辺のホラー映画よりも怖い。
やがて右足を地面に下ろし、。最後にまだ出ていない左足を出して地面に立つ。
改めて男の身長を見ると、長身だという事が分かった。約１９０ｃｍほどだ。
男は首をポキポキと鳴らし、再び腕を砕けている祠にスルリと突っ込んだ。
まるで水の中に手を入れるように何の抵抗も無く白髪の男の腕が祠

の中に入る。
そして何かを引っ張り出す。それはおかしな小さい人形。それをコートの内側のポケットに仕舞った白髪の男は欠伸をし、そのまま肩を回す。

「…ハッ！お、お前一体なんだこらぁ！？」

今まで目の前でありえない事を見ていた刺青禿頭が肩を回している男にそう叫ぶ。
白髪の男はそれを無視して何かを考えるように林全体を見渡し、そして今しがた自分が出てきた祠を見る。

「…そうか…俺はこれに…。中々の霊力が込められているな…。」

白髪の男はそう言いながら自分の横にある祠をマジマジと眺め、何か感心したような声を上げた。
刺青禿頭は自分が無視された事の怒り、そして今しがた祠から男が出てきた事による混乱により白髪の男に掴み掛る。
しかし……

「ぐぁ！！！」

刺青禿頭はそのまま頭を掴まれ（髪はないから頭）そのまま石造りの祠に叩き付けられた。

「人が考え事をしている時は邪魔をするものじゃないぞ。」

そう言いながら白髪の男は刺青禿頭から手を放す。すると刺青禿頭はそのまま地面に頭を打ち付けた。
そしてそのまま気絶する。

「ん、いかんな。手加減はしたんだが気絶してしまったか。それならば仕方ない…。」

白髪の男はそう言って他の男たちに向き直った。
他の男たちの手には拳銃や短刀などと言った物が握られている。
そして拳銃を持ったスーツ男が白髪の男に向けて拳銃の引き金を絞り、

『パァン！！』

発砲した。その音が響き渡ると、白髪の男はゆっくりと後方に倒れる。
『ドサリ』と言う音がしてしばらく経つと、拳銃を発砲した男とその他の男は安心したように息を吐いた。

「ク…ククク…。」

しかし、それもすぐに終わった。白髪の男から笑い声が聞こえたのだ。
それを聞いたスーツ男は再び拳銃を構え、そして再び白髪の男に向けて撃った。
一発二発三発と次々に撃っていく。それを見ていた他のスーツ男も、自分たちの持っている拳銃で白髪の男を撃った。
おそらく、全員が全員まともな思考はしていないだろう。それもそのはずだ、いきなり小さな祠から長身な男が出て来たのを見たのだから。
やがれ拳銃を持っている全員が白髪の男に向けて全発撃ち終わると、今度こそ大丈夫だろうと安心した。

「ククククク……。」

だが再び聞こえた笑い声によってその場の空気が凍った。仰向けに倒れていた白髪の男がゆっくりと足だけで起き上がる。そして完全に起き上がると、顔を俯かせたまま静かに笑う。その姿は血塗れだ。

白髪の男は俯いたまま右の手のひらを口の前まで持って行く。すると『カランカラン』と白髪の手のひらの上で軽い金属のぶつかり合う音が響いた。

白髪の男は自身の手のひらをそっ、と男たちに見せた。それは銃弾。血塗れになった銃弾が手のひらの上でコロコロと転がされていた。

この白髪の男は口の中から身体に撃った銃弾を吐き出したのだ！

「クク…ククククク…、人を殺そうとしたのだから勿論そちらも死ぬ気はあるな？」

白髪の男はそう言って銃弾を握り締め、一つだけ親指の爪の上に乗せて人差し指で抑える。

そしてそれを弾いた。

「がぁ…！」

それが見事に別の男の額に当たり、その男は膝を地面に付けて倒れる。

もはや誰もが動ける状況ではなかった。動きたくても目の前にいる白髪の男に恐怖して動けなかったのだ。

それをとても楽しそうに眺める白髪の男。銃弾は数え切れないほど撃ったので、この白髪の男がここにいる全員を撃ち殺すには時間は

掛からない。一方的な虐殺が始まった…

ーーーSide壊ーーー

「…ずいぶんと呆気なかったな。」

目の前には、先程俺が指で弾いた銃弾に撃ち抜かれた死体が転がっている。
本当は殺す気なんてものは無かったのだが、拳銃で撃たれたときに久しぶりに疼いてしまった。

「しかし何故解けたのだろうか…。」

実は何故封印が解けたのか自分でもよく分からない。
気がついたら俺の周りを囲っていた鉄格子の力が弱くなった気がし、それを思いっきり殴ったら封印が解けた。
もしかして、誰かが俺を封印している祠に触ると封印の力が弱まるのか？
おそらくそうだろう。前の俺は力があまりにも弱すぎたので誰かがこの祠に触れても弱まっている事にさえ気づかなかったが、それなりの時が経って俺の力が戻ったから弱まっていると気付く事が出来るようになり、そして封印を解く事が出来るようになった。
晴明がそう言う風に細工したのだろうな。

「ん？」

物言わぬ骸と化した男たちの近くにアタッシュケースが転がっていた。
気になったので一つ開けてみる。そこには…

「…麻薬…と覚醒剤か？」

アタッシュケースの中には、覚醒剤やら麻薬やらがぎっしり詰まっている。
麻薬&覚醒剤ぎっしりアタッシュケースを閉じてもう一つのアタッシュケースに近づく。
開けてみると今度が諭吉がたくさん入っていた。…これは貰って行こう。
とりあえず、この麻薬は消そう。そう思い、魔力で作った炎で消す。
文字通り消す。
死骸は…放って置こう。どうせ誰がやったなんて分からないだろうしな。

「まずは住居だな…。」

俺はまったく道のわからない林の中を歩いた…

第１１９話：解かれる恐怖（後書き）

やっと現代入りした…。

第１２０話：新しい住まいを手に入れた！（前書き）

はい、まんまですね。今回は原作キャラを出そうと思います。

第１２０話：新しい住まいを手に入れた！

何度か迷いながらも林を抜け出してどこかの歩道を歩いている。
服は血塗れになっていたので、林を抜ける前に能力で新しい服に着替えておいた。
今は夜中くらいだろう。辺りに建っている建物の殆どは明かりが点いておらず、俺の周りは静寂と闇に包まれている。
幸い、コートを着ているので夜中でも寒くはない。時計があれば時刻を確認できるのだが…

「…やってみるか。」

俺の能力は万能そうに見えてそうでもない。能力で時計を創っても時間が合っていないのだ。
何故そんな事がわかるかというと、前に時計を創った時に、明らかに昼なのに時間が６時をさしていた事があった。
その後も何度か試してみたが必ず時間が合わない。いくら頭で想像して創っても時間が合わない。
おそらく、あの時代に時計がないと言うのもあったのだろうが…
しかし、俺の式であるクロックは、しっかりと時間が分かるのだ。
だからこそ時間を確認するときは能力で創った時計よりも式のクロックの方が頼りになる。
俺は懐からクロックを仕舞っている石を取り出して霊力を込める。
するとクロックが出てきたのだ。前に封印されていた時とまったく変わらない姿で。

「…久しぶりだな。クロック。」

何故召喚できたのか疑問に思いながらもクロックを見る。

クロックの時計針は文字盤の４時３０分丁度を指し示していた。
アレだな。自分の式を時間を確認するためだけに召喚すると言うのも非道い話だな。
クロックは俺の周りを嬉しそうにグルグルと回る。ふと、コートの内側でゴソゴソと何かが動いた。
俺はコートの中を確認する。そこには俺を見上げている絶がいた。
そう言えばコイツだけは石が無いし創っても仕舞えないからコートの内ポケットに入れておいたんだった。
肩に乗せようにも動かなかったしな。俺は絶を引っ張り出して肩に乗せる。
何だかんだで俺の肩は絶のための専用席になっている。

「お前たちが動けるという事は…。」

俺はそう呟いて懐にある石を全て取り出し霊力を少量込める。
少量と言っても、今の俺の力は大したことは無いので体力をそれなりに消耗する。
自慢じゃないが今の俺なら紫にも余裕で負ける事が出来るだろう。
俺が霊力を込め終えると、石が少しだけ輝いて式が現れた。やはり召喚できるのか。
今まで封印されて一緒に居たのに召喚できなかった式。そして今の俺の家族。

「…皆久しぶりだな。」

俺がそう言うと、俺の式たちは嬉しそうに俺の近くを飛び回ったり（クロック&絶）
身体をプルプルと震わせたり（ナイア）骨をカタカタ鳴らしたり（ニオ）
顔をなめてきたり（ゼク）近くにある電柱を噛み砕いたり（ゲート）

…いや、さすがに電柱を噛み砕くのは不味いと思うのだが…
そう思い、顔をなめているゼクを引き剥がして電柱を噛み砕いているゲートを止める。
しばらく式たちと再開を懐かしんでいると、いつの間にか薄っすらとだが朝日が昇り始めて空いた。
それを見ると、感動の再開も終わったのでさっさと式たちを仕舞う。
こんな状況誰かに見られたら大変だからな。
それにしても冷えるな…。自動販売機で温かいコーヒーでも飲みたい。
だがまぁ、その前に住む場所を探さないとな…

「と言う訳で住居を手に入れた。」

昼になるまでずっと探し回ってやっと見つけた。スーパーまで徒歩１０分、駅まで徒歩１０分だ。
１０階建てで、４階の４０１号室。家賃は1ヶ月に8万5千円で２ＬＤＫで、すぐに住んでもいいと言われた。
それなりに安いと思う。洋室が二部屋で、両方とも6畳ほど。
玄関を開けると、それほど長くない廊下、右側の方には先ほど述べた部屋が二つ、左側にはトイレ。
廊下を真っ直ぐ進むとガラスと木製の扉があり、それを開くと、ダイニングとリビングとキッチンが分かれている場所に着く。
キッチンに入って少しだけ歩くとバルコニーがあり、バルコニーとは反対側の方向には洗面所と浴室がある。
ただ家具があまりない…。洋室にはベッドとタンス。リビングには、少し埃を被った三人ほど座れるソファー。

それだけだ。冷蔵庫も無ければＴＶも無い。俺はソファーの上にアタッシュケースを投げて持たれかかる様にして座る。
『ボフッ』と言う効果音がつきそうなほど埃が宙を舞うが、大して気にする事でもない。
しばらく上を向きながらボ～っとしていると、今まで家の中を飛び回っていた絶がやって来た。
その身体は埃塗れになっている。

「…掃除…しないとな…。」

俺はソファーから絶を見てそう呟いた。先程までは大して気にしていなかったが、さすがに今の絶の状態を見たのに掃除しないわけにも行かない。後回しにすると掃除が大変そうだ。何よりもこれからこのマンションに住むのだからな。
そう思い、式を全て召喚する。そして手がある式には能力で創ったモップやなどを持たせ、手が無い式には他の事をしてもらう。
さてと……

「始めるぞ。」

俺はそう言うと、式たちと掃除を始めた……

「これとそれからこれも…後ついでにこれも買って置こう。」

ん？何をしているかって？今夜の夕飯の買出しだ。

掃除はある程度終わったので残りは式に任せてきたから問題ない。
ついでに、買い物に来る前に能力で必要な家具や物をいくつか創ったので、絶たちに並べて置くように頼んでおいた。
あまり扱き使うのも可哀想だが、初日なので仕方ない。明日からはゆっくりさせてやろう。
ちなみに金は、アタッシュケースに入っていた沢山の札束の内一つの札束から適当に数枚抜き取った。
肉売り場を見てみると、牛バラ肉が３９５円から２００円まで値下がりし安売りだったので、そこへ向かい牛バラ肉の入ったパックを掴んでカゴに入れる。
さて、もうそろそろ帰るとしよう。そのまま商品の入ったカゴをレジまで持って行く。
店員がバーコードをレジスターにくっ付いているバーコードスキャナを近づける度に音が鳴る。
そしてビニール袋に俺の買った商品が次々と入れられる。

「お会計、３５２０円になります。」

中途半端だな…。そう思いながらも俺は一万円札を渡す。

「１万円お預かりいたします。…６４８０円のお返しです。またお越し下さい」

お釣りと買った物が入っているビニール袋を受け取り、そのままスーパーを出る。
そしてマンションまでの道のりの途中にある公園まで差し掛かった頃、急に喉が渇いたので公園の中にある自動販売機で何か買って飲もうと思い、公園に入ったら…

「ぐ、ぐへへへ。ほら、お兄さんと一緒に行こうよ。」

…自動販売機の近くで汗まみれの眼鏡を掛けている太った男が鼻息を荒くしながらスーパーの袋を持った小学生くらいの少女を誘拐しようとしていた。
今は大体4時くらいだろうか？そんな時間に少女を誘拐しようとするなんて堂々としているな。
俺はそう思いながらも自動販売機の前まで行き小銭を入れてコーヒーを買う。
プルタブに人差し指を掛けて持ち上げるようにして缶コーヒー開ける。そして缶に口をつけて飲む。
美味い。のだが…

「はぁはぁはぁはぁ……。」

……鼻息を荒げている太った男が鬱陶しくて飲んでも気分が悪くなる。
太った男は少女の腕を掴んで今にも連れて行きそうだ。まぁ、俺には関係ないな。
少女は首を横に振りながらも抵抗するが、やはり太っていても男。力は適わなかった。
やがて少女と俺の目が合ってしまった。その目は「助けてください」と言っている。
それを無視しようとしたが、太った男の鼻息がうるさいので苛々してしまい、つい男に話し掛けてしまった。

「おい。」
「ぐへへへ…へ？な、何だい？今取り込み中だよ？」
「あぁ、見たら分かる。だがお前の鼻息が鬱陶しくてしょうがない。それとそこの奴も嫌がっているぞ？」
「う、うるさいな！君には関係ないじゃないか！！ほら、行こうよ

！」

「い、嫌です…。」

少女はそう言いながら嫌々と言った感じに腕を振り払おうとする。
しかし、太った男は少女の腕をさらに引っ張る。俺は持っている缶コーヒーの中身を男の頭に思いっきり掛けた。

「うわぁ！？な、何するんだよ！？」
「すまんな、手が滑ってしまったよ。」
「こ、この野郎！！」

太った男は少女から手を離し、俺に殴り掛かろうとする。
しかし、俺は太った男の顔面に前蹴りをしてその動きを止めた。
太った男はそのまま顔を抑えながら蹲る。そして…

「い、痛いよぉ！うわぁぁぁぁぁ！！」

上を向いて泣き出した。鼻からは鼻血が出ている。太った男は泣きながら立ち上がり、そのまま走ってどこかに行ってしまった。
何と言うか…情けない奴だったな…。
太った男にコーヒーをかけたせいで中身が無くなってしまった缶をゴミ箱に捨て、そのまま帰る。

「あ、あの！」

帰ろうとしたが助けた少女に呼び止められた。目をチラリと少女に向け、改めて少女を見る。
薄い緑色の瞳に長い緑色のロングヘアー、左側の髪を白いヘビのような髪留めで留めて前に垂らしている。
ついでに左頭部にも蛙の髪留めをしている。…個性的だな。

年は…８~１０歳くらいだろうか？

「…何か用か？」

「えっと…助けてくれてありがとうございます！」

少女はそう言いながらペコリと俺に頭を下げる。…助けた？あぁ…

「助けたわけじゃない。あの男の鼻息が鬱陶しかったからこの場から追い返しただけだ。」

「それでも…ありがとうございます。」

…ずいぶんと礼儀作法がなっているな。嫌いじゃない。

「ところで家の神社の神様を信仰しませんか？」

…は？この少女は今何と言った？笑顔で神を信仰しないかだと？

「悪いが遠慮しておく。」

俺はそう言って少女から離れる。ひょっとして、あの少女は太った男にもあんな事を言ったのだろうか？

そう考えるとまた面倒ごとを起こしそうな少女だな…。

後ろで少女の呼び止める声が聞こえるが、それを無視して公園から出てそのまま家に帰った…。

ーーーSide緑髪の少女ーーー

「む～…また失敗しちゃった…。」

もう誰もいない公園で静かにそう呟く。
実は言うとあの太った男の人に捕まっていたのは演技だ。
その気になればいつでも倒す事は出来た。ただ、誰かが助けてくれた時にその人にあの御二方を信仰してもらえるように頼めないかなぁ～と思ってわざと捕まっているふりをしていたが、見事に失敗してしまった。
それにしてもあの助けてくれた人、助けてくれた時格好よかったなぁ…
背も高かったし。

「…て、何を考えているんですか私は。」

そう呟いてそのまま公園を出る。もう暗くなってるから早く帰らないと…

第１２０話：新しい住まいを手に入れた！（後書き）

と、そんな訳で終わりました。
今回はいつにも増してグダグダだった気がします。
名前をあえて出しませんでしたが、緑髪の少女が誰だか分かったでしょうか？原作よりも幼くしましたけど…。

第１２１話：挨拶回り（前書き）

新キャラが出るかも？

第１２１話：挨拶回り

何だかんだで一週間だ。ここ一週間、俺にとっては大した事はないまま時間は過ぎて行った。
一応仕事も見つけた。と言っても表じゃなくて裏の仕事だがな。世に言う始末屋だ。
文字通り、依頼人が依頼し、金を出せば大抵の奴は始末する。始末すると言っても殺さなくてもいい場合もある。
例えば、『組織の一人が裏切った。しかし表沙汰にしたくないから何とかしてくれ』と依頼されたとしよう。
その場合は記憶を消すだけでもいい。消し方は簡単、手に霊力を込め、それを相手の頭部に乗せる。
それだけでいい。俺が相手の脳に送った霊力を操る事で、一部の記憶だけを失くす事が出来る。
殺すとなるとばれる可能性が高い。だから表沙汰にしたくないならこれが一番効率がいい。
ただ、妖力では駄目だ。身体が拒否反応を起こして下手をするとやられた相手は死ぬ。魔力の方は、素質さえあれば死ぬ事はない。
まぁ本当に効率がいい消し方は頭部ひたすら殴る事なんだがな。
ちなみに、一週間で３人の依頼人が依頼をしに来た。そのどいつもが組織の裏切り者を何とかして欲しいと言う依頼内容だったので、裏切り者全員記憶を消して依頼達成した。報酬は、３人合わせたら１２００万円だ。
儲けた金とアタッシュケースの金は銀行に振り込んでいる。アタッシュケースの金は札束を一つ取り出して、残りを銀行に預けた。
…そう言えば大切な事を忘れていた…。今までずっと忙しくてやっていなかった事…。

「…挨拶回りしてないな。」

そう、挨拶回りだ。すっかり忘れていたが、ここで暮らすなら少なくともこの階の住民にだけはして置いた方がいいだろう。
幸いの事に、差し入れの菓子はいくつか買い置きしてあるので問題は無いだろう。
俺は買って置いた和菓子や洋菓子を袋に詰め、そのまま玄関まで移動して家を出る。端から順番に行くか…

と、まぁそんな訳で何となく一番端から挨拶回りをして今は４０４号室の扉の前に居る。
俺はインターホーンを押す。そして『ピンポーン』と言う正解音のような音が鳴った。
そして扉の先から誰かが歩く足音が聞こえると、ガチャリと扉が開いた。
出てきたのは少女だった。青いショートヘアの髪で眼鏡を掛けており、長袖のTシャツを着て膝丈ほどのスカートを穿いている。
肌は白い。年は前に見た緑髪の少女と同じくらいに見える。

「誰…？」

少女が少し半目で俺を見る。まぁ、昼間から黒いロングコートを羽織っている男が突然訪問してきたら普通は怪しむだろうな。
ちなみに、俺のロングコートは１７０?近くある。

「…親は居ないのか？」
「今出かけてる…用があるなら私が伝え「美冬ちゃ～ん。誰だった

～？」…。」

少女が話そうとした時、部屋の中から別の少女の声と共にが足音が聞こえる。
そして別の少女がひょっこりと言った感じに出てきた。
別の少女の容姿は、最初に出てきた少女と同じ青髪のポニーテールに同じく白い肌。
服装は、これまた模様は違うが同じ長袖のTシャツに今度はジーンズを穿いている。
背丈は最初に出てきた少女と同じくらいだ。双子だろうか？

「あれ、まだ話してる途中だった？」
「お姉ちゃん…。」

きょとんとしている姉の横で溜息を吐いている少女。妹の方は確か美冬と呼ばれていたかな？
…どうでもいいな、そんな事は。
妹の方…美冬はやれやれと言った感じの顔をしながらも再び俺を見た。

「それで…何か用？」
「…一週間前に４０１号室に住み始めた紅鎖華　壊だ。挨拶回りに来た。それとこれを…。」

俺はそう言いながら袋の中に入っている饅頭の入った箱を手渡す。

「わっ！美冬ちゃん、お饅頭だよ！」
「お姉ちゃん、お願いだからもう喋らないで…。えっと…壊さんって呼んでもいい？」
「好きに呼んでくれ。」

「それじゃ壊さんありがとう…。私は霧島（きりじま）　美冬（みふゆ）で、こっちが「霧島（きりじま）　美夏（みか）だよ。よろしくね。」私のお姉ちゃん。」

こう見ると眼鏡の少女…美冬の方が姉に見えてしまうのは俺だけではないと思う。

性格も正反対だな。静かで口少ない妹と、明るく元気なよく喋る姉と言ったところか。

姉の美夏は饅頭の箱を高々と上げてはしゃいでいる。まさか饅頭でここまで喜ばれるとは思わなかった。

それを見ている妹の美冬もどこか嬉しそうな顔をしている。…行くか。

「それじゃあな。君たちの親によろしく伝えて置いてくれ。」

「…うん。」

「はい！」

俺はそのまま次の部屋に向かった……

「…疲れた…。」

リビングのソファーにもたれ掛かりながら俺はそう呟く。

俺ももう年だな…（↑大体６０００歳くらい）

そんなネガティブな考えをしていてもしょうがないので何か作って食べる事にした。

確か豚の挽肉（ひきにく）があった気が…

ーーーSide瑠璃ーーー

「ふふふふふふふふ……。」
「瑠璃様、怖いですよ？」

書類を片付けつつ笑いが込み上げる。
少し前にやっと…やっと封印されていた壊さんが封印から解かれた。
今まで会う事はおろか見ることすら出来なかったのにもうすぐ会いに行けるんですよ？
これを喜ばずにいられるでしょうか？

「会いに行くのはいいですけど、その前に仕事を終わらせてください。」
「む～、心を読まないで下さいよ。」

目の前には大量の書類、書類、書類……
その書類にひたすら判子を押したり記入したりと、本当に嫌になっちゃいます。
でももうすぐ…ふふふふふ…待っててくださいね、壊さん…。

第１２１話：挨拶回り（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。
新キャラの名前は美冬と夏美。
一応、設定上は双子で、姉が夏美、妹が美冬です。
これからもちょくちょく出そうかなと思っています。

第１２２話：本当に久しぶり（前書き）

はい、タイトルどおりです。

第１２２話：本当に久しぶり

『退屈』

今の俺の心境を一言で表すならこれだろう。

何だかんだで１ヶ月ほど経って、仕事の方は記憶を消す作業ばかりで正直言って飽きてきている。

まぁ、こんな仕事でもちゃんとやれば金が入ってくるから我慢は出来るがな…。

ちなみに、何もやる事のない俺はリビングのソファーで読書をしている。だんだん駄目人間みたくなってきたなぁ…。

と、そんな事を考えながらふと時計を見てみると、（クロックではなく普通の時計）既に１２時近くを指し示していた。

そう言えばまだ昼食は摂ってなかったな…。そう思い、本を横に置いてソファーから立ち上がり、冷蔵庫の前まで移動して開ける。

そして冷蔵庫の中から適当に食材を取り出す。買い溜めして置いたから近くは買いに行かなくてもよさそうだ。

『ピンポーン』

と、早速調理に取り掛かろうとしたらインターホンが鳴った。

皮を剥いていたジャガイモをキッチンカウンターにおいて玄関まで移動する。

一体誰だろうか？仕事の依頼ならパソコンで待ち合わせ場所を相談するから違う。

かと言って、この時代に親しい奴もいないしな…。疑問に思いながらもドアを開ける

覗き穴なんて見るのがめんどくさい。

そこに居た人物を見て、俺は少しだけ驚いてしまった。

「お久しぶりですね、壊さん。」

ドアを開けて居た人物は瑠璃だったのだから…

瑠璃を家の中に入れてダイニングの食卓の椅子に座らせ、俺は向かい合うように座る。

こういう時は何と言ったらいいのだろうか…

「…改めて、久しぶりだな。瑠璃。元気そうで何よりだよ。」

「はい。壊さんも元気そうで安心しました。」

そう言いながらニコニコと笑う瑠璃。

瑠璃が俺に会いに来る理由は大抵休みを貰った時だが…

「瑠璃、ひょっとして休みを貰ったのか?」

「はい、壊さんに会うためにお休みを貰いました。もうずっと会っていませんでしたから…。」

「そうか…。どれくらい会っていなかったんだ?」

「そうですね…少なくとも１５００年近くあっていません。」

「長いな。しかしよくここがわかったな?」

「壊さんの封印が解けてからどこに行ったのか頑張って調べましたから!」

えっへん!といった感じに胸を張る瑠璃。

と言うか、瑠璃は俺が封印されていた事を知っていたんだな。

ひょっとしたら…

「…封印が解けた時、俺が一番最初にやった事は何か分かるか？」
「？お家を探してたんじゃないんですか？」

不正解だな。どうやら俺が真っ先に人を殺したのを知らないらしい。
まぁ、知られて困るわけでもないが、一応神である瑠璃にはあまり知られたくないな。

「…まぁいい。ところで俺がどれ程封印されていたかわかるか？」
「えっと…たぶん１０００年くらいだと思います。」

結構長いな。千年間、ずっとあの牢獄の中にいたのか。よく気が狂わなかったなと自分を褒めてやりたい。
それにしてもたった６０００年ほどでずいぶんと変わるものだな…。
少しおかしくないか？

「なぁ瑠璃。」
「はい、何ですか？」
「この世界が出来てから少なくとも６０００年は経ったわけだが、たった６０００年でここまで変わるものなのか？」
「あ、それは私がなるべく早く時代を進めてくれとこの世界の意思にお願いしました。」

つまり、瑠璃がその世界の意思とやらに頼み込んだから時代の流れがここまで早く進んでいるのか。
まぁ、瑠璃はそれなりに位が高いらしいからそれくらいは出来るのだろう。

「瑠璃、昼食は『ぐぅ…。』摂ってないんだな。君の分も作ろうか

？」

「…はい、お願いします／／／（↑顔真っ赤）」

「わかった。」

俺はそう言って椅子から立ち上がる。まだジャガイモの皮を剥き終わっていなかったな。

調理している間は瑠璃も暇だろうから、絶に相手をさせよう。

ーーーSide瑠璃ーーー

壊さんが台所に行ってから特にする事も無くて暇になってしまいました。

とりあえず、目の前に置かれている壊さんが淹れてくれたお茶を飲む。…はふぅ。

「あら？」

湯飲みをテーブルに置いたら丁度一号さん…今は絶さんでしたっけ？絶さんがふよふよと浮きながら私の目の前でテーブルの上に乗りました。

「どうかしたんですか？」

私がそう聞くと、絶さんはどこからか紙と鉛筆を取り出して紙に『

瑠璃の相手になるように言われた』と書きました。
もしかして壊さんは、料理をしている間私が暇になりそうだから退屈をさせないように絶さんに頼んだのでしょうか？

「ふふふ…ありがとうございます。」

『気にしなくていい』とでも言うように絶さんが首を横に振る。
絶さんはこれまたどこから取り出したのか、トランプを私の前に置いた。

「二人でやるんですか？」

私がそう聞くと、絶さんは首を横に振り、またまたどこから取り出したのか小さな石を二つ、両手に持った。
そしてそれを床に投げ捨てると、石から動物の骨みたいな人（？）と黒いシルエットみたいな人（？）が出てきました。

「あの…絶さん、この人達は…。」

私がそう聞くと、絶さんは紙に『自分と同じ式』とだけ書きました。
つまり、この方たちも壊さんの式だと言う事ですよね？
絶さんは他の式さんたちに何かを説明するように両手を上下に揺らしたり、トランプを見せたりしていました。
すると式さんたちは納得したように頷いて残り二人とも椅子に座りました。
それを見た絶さんは、テーブルの上でトランプを切り、次に各5枚になるように私たちに配った後紙に『ババ抜き』と書いて私に見せました。
わかりやすいですね。
そう思いながらも自分の手札を見る。どうやらババは無いみたいで

す。よかった。
壊さんが料理を作りおえるまで退屈しないで済みそうですね…

ーーーSide壊ーーー

「…よし。」

出来た昼食を盆に乗せる。いつも通りの米と味噌汁、それに今回はコロッケに千切りキャベツと焼き鮭だ。あとついでに沢庵。
これくらいあれば充分だろうと思う。
そのままテーブルまで運ぼうと移動する。さて、絶はちゃんと俺の言った事を聞いているかな…

「・・・・・」

…何故か知らんが瑠璃と絶の他にもニオとナイアがいた。
いや待て。俺は確かに、絶には瑠璃の相手をしてやれと言った。だがあの2体には言っていないぞ?
ついでに言うとババ抜きらしき事をしている。ババ抜きのはずなのだが…

「うぅ…。」

何故瑠璃は半泣きになっているのだろうか?ババ抜きで泣く要素はあるのか?
絶たちも思いっきり困っている。

「瑠璃、トランプは終わりだ。」

疑問に思いながらもそう呼びかけ、盆をテーブルの上に乗せる。
そして未だに半泣きの瑠璃を慰めてトランプを回収。（もとい没収）

「絶たちも、ご苦労だったな。」

そう言って右手に霊力と妖力、それに魔力を練り上げ、そしてそれを混ぜ合わせて三つの小さな欠片を作る。
この欠片は…まぁ軽いおやつのような物だと思ってくれればいい。
何故か知らないがこいつ等は、俺の霊力などを与えるとやけに喜ぶ。
作った小さな欠片を絶たちに渡す。ニオは骨の顎で噛み砕き、他の2体は直接身体に取り込む。
俺はそのまま絶以外の式を近くに置いてあった石に戻して改めて瑠璃の前に昼食を置く。
いつの間にか半泣きをやめて明るい笑顔になっている。神も意外と現金なんだな。
そのまま俺たちは『頂きます』の掛け声と共に箸を片手に持つ。どれ、ちゃんと作れてるかな…
そう思いつつもコロッケを4分の一くらいの大きさにして箸で摘まんでで食べる。普通に旨い。

『トゥルルルル』
「壊さん、電話みたいですよ?」

コロッケの味を堪能していたら突然電話が鳴り響いた。誰だ?
椅子から立ち上がり、端っこに台に乗せてある電話の受話器を取り耳に当てて「もしもし」と言う。

『……今電話に出ているのは紅鎖華　壊殿でいいですかな？』
「あぁ、と言うか名前を言え。」
『失礼。私　赤星（あかぼし）　橋木（はしき）と言う者です。
以後、お見知りおきを……。』
「そうか。用件は何だ？」

なるべく早く終わらせようと電話越しに男を急かしてみる。こっちはまだ昼食の途中だ。

『せっかちですねぇ……まぁいいでしょう。はっきり言いましょう。依頼です。』
「……内容は？」
『それは明日に話しましょう。待ち合わせ場所は……』
「…承知した。ではな。」

俺はそう言って受話器を置く。明日は仕事か……。
そのままテーブルに戻って椅子に座る。

「お仕事ですか？」

瑠璃が、米粒を口元に付けながらそう聞いてくる。

「あぁ。そうだ、瑠璃。休みの間は泊まるところが無いだろう？ここで泊まって行かないか？」
「いいんですか？」
「構わんさ。部屋も一つ余っているしな。」

一人や二人泊めたところで大して変わりはない。

「えっと…じゃあよろしくお願いします。」

「あぁ、よろしく。」

とりあえず、口元に付いている米粒を取った方がいいと思うがな……

「まさかもう封印を解いていたなんてね…。それなら貴方を招待するわ。ねぇ、壊？」

一人の女が目だらけの空間でそう呟いた・・・・・・

第１２２話：本当に久しぶり（後書き）

と、まぁそんな訳で終わりました。
今回出てきたのは久しぶりの瑠璃。
まぁ、これからしばらく一緒に主人公と暮らす方向に行きました。
一番最後に出てきた人（？）はあの人です。
話し方でわかる人には何となく分かるんじゃないかなとは思います。
と言うか、目だらけの空間ってだけでもわかるかな？

第１２３話：依頼者に会いに行こう（前書き）

今回は、特にこれと言った事はしません。

第１２３話：依頼者に会いに行こう

「１時２０分、そろそろ行くとしよう……。」

そう呟いてソファーから立ち上がる。

「壊さん？お出かけですか？」

昨日から俺の家で止まっている瑠璃が、俺が立ち上がった事により頭に絶を乗せたままそう尋ねる。

俺はそのまま黙って頷き、玄関まで歩くと瑠璃は頭に絶を乗せたまま俺の後ろをトコトコと付いてきた。

玄関まで来ると、靴を履いて立ち上がり、ドアノブに手を掛ける。

「ちゃんと鍵は掛けて置けよ。それと、帰りが遅くなったら絶に何か作ってもらってくれ。」

「はい。」

ニッコリとしている瑠璃に少し目をやって、そのままドアを開けて外に出る。

財布を忘れていないか懐の中をゴソゴソと探りながら確認していると、後ろから『ガチャリ』と言う音が聞こえた。

どうやら俺に言われた通りに鍵を閉めたようだ。

心の中で瑠璃を褒めながら、財布を確認するのをやめてエレベーターまで移動し、←のボタンを押す。

ブィィィン……チーン♪と言った音が鳴るとエレベーターの扉が開いたのでその中に入る。

そして一階のボタンを押すと扉がそのまま閉じ「待って待って待って待って～！！」られようとしたが誰かの声がしたので急いで開くボタン

を押して開けてしまった。
そこから勢いよく二人の少女が入ってきた。

「はぁ…はぁ…はぁ…。」
「ま…間に合った…。」

本を抱えている美冬と手ぶらの美夏だった。大した距離でもないのによくそんなに疲れるな？

「あれ？壊さん？」

と、ようやく誰が一緒に乗っていたのか気づいたのか俺を見上げながら名前を言う美夏。
美冬は未だに肩で息をしている。君は運動不足だな。
俺は今度こそエレベーターの扉を閉める。息の整った二人はそのまま俺の横に並ぶようにしてエレベーターが一階に着くのを待った。

「ところで君たちは何処へ行くんだ？」

何となく気になったのでそう聞いてしまった。

「うん？私たち、これから図書館に行くんだ。」

俺の問いかけに対して美夏は笑顔でそう答えた。なるほど、美冬の持っているのは図書館の本か。
何故真昼間に学校にも行かずに図書館に行くのか疑問に思ったが、考えてみれば今日は土曜日だな。
小学生は休日だ。

「壊さんは…。」

そんな事を考えていたら不意に美冬が口を開いた。

「壊さんは…何処に行くの？」

「そう言えばそうだよね。何処に行くの？彼女の所？」

何故か美冬の後に続いて目をキラキラと輝かせて聞いてくる美夏。

彼女…ねぇ…

と、いつの間にか一階に着いていた。

「とりあえず降りるぞ。」

「あ、待ってよ！」

「待って～……。」

そう言いながら俺の後を付いてくる二人。

「ねぇねぇ彼女の所なんでしょ？」

俺の横でニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながら、美夏が再びそう尋ねてきた。

はっきり言ってウザイ。美冬が俺をすまなそうな顔で見ているのが唯一の救いだ。

「残念ながら恋人はいない。」

「「えっ！？」」

信じられない…とでも言うような目で見てくる二人。

「何だその目は。」
「え、いやだって…嘘ぉ…。」

何故か動揺している美夏。ついでに言うと美冬も動揺していた。
彼女がいなくて悪いか？誰も背高ノッポの俺を相手にしてくれないのだから仕方ないだろうが。

「じゃ、じゃあ何処に行くの？」
「仕事だ。」
「壊さん仕事してたんだ……。」
「美冬、それは一体どういう意味だ？」

俺は美冬と、ついでに美夏の額を指で弾いてそのまま目的地まで向かった……

マンションから25分ほど歩いて目的地に着いた。そこはレストラン。
しかも、ただのレストランではなく金持ちがよく来る言われている…まぁつまりは高級レストランだ。

「ほわぁ～…大きいね…。でもここって高級レストランじゃん。ね、美冬ちゃん？」
「うん、確か五つ星だったと思う…。」

何故か未だに俺の後を付いて来ていた二人の会話を無視しつつ、木製の手動ドアを押して中に入る。
二人は会話を一旦やめて俺の後を追うように急いでドアを開ける。
入ると同時に受付のような場所にいる女に話しかける。

「お客様、何か御用でしょうか？」
「あぁ、金治銅（きんじどう）　康介（こうすけ）と言う客がここにいるな？その男に呼ばれて来た。
紅鎖華　壊が来たら案内するように言われていないか？」
「金治銅　康介様…はい、確かに。貴方様が紅鎖華　壊様ですね？後ろのお二人は…。」
「…連れだ。気にしないでくれ。」
「かしこまりました。」

女がそう言うと、どこからかウェイターがやって来て俺たちに『こちらです』と一言告げて歩き出す。
後ろで付いてきている二人は楽しそうな顔で笑っている。
もう何も突っ込むまい…。……そうだ

「美夏、美冬、君たちは別の場所に座れ。」
「え～…」
「喧しい。俺は仕事でここに来たんだぞ？
君たちが居たら邪魔だ。何か頼んでもいいから別の場所に座れ。」
「む～…。」
「お姉ちゃん、無理に付いて来たんだから我侭言ったら駄目だよ…？」

上目遣いで見てくる美夏を美冬が慰める。
まったく持ってその通りだ。追い返さないだけでも感謝してほしい。
俺は目の前にいるウェイターにその事を告げて二人を適当な場所に

座らせて貰えるように頼む。
ウェイターはその事を承知して他のウェイターを呼んで二人の案内を任せて再び俺の案内をする。
しばらく歩いていると、一番奥の辺りに少し禿ている老人がいる席で立ち止まった。
……こいつが金治銅　康介か…。
俺は何も言わずにその老人の前で椅子に座らずに待つ。ウェイターはそのまま「少々お待ち下さい」と言って少し早足でその場から離れた。メニューでも取りに行ったのだろう。
それにしても大分あの二人と離れたな。

「…座ったらどうじゃ？」

しばらく無言でいると、老人……金治銅は俺に座るように進める。
それもそうだな。俺は言われるがままにその席に座り、改めて周りを目を動かして見る。
床は赤い絨毯が敷かれており、椅子や丸テーブルには白いシンクのテーブル掛けなどが掛けられている。
目の前に居る老人はパッと見は５０～６０ほどに見える。着ているのはこの場では不釣合いな着流しだ。
周りを見渡しても、この男の護衛と思われる人間はうない。
どうやら一人出来たようだ。

「お主が紅鎖華　壊でいいのだな？」
「あぁ。俺が紅鎖華　壊だ。そちらは依頼主の金治銅　康介だな？」
「いかにも。儂がお主に依頼を頼んだ金治銅　康介だ。」

金治銅はそう言うとグラスに注がれている水を少し飲んだ。
そしてまだ水の残っているグラスを置くと再び俺の目を真っ直ぐと見る。

「…今回の依頼でお主に始末して欲しいのは一人ではないと思われる。」
「一人じゃない？」
「うむ、まずはこれを見てくれ。」

金治銅はそう言いながら裾をゴソゴソと漁り、そこから一枚の紙を取り出した。
それは写真。写っているのは少しだけ太っている人の悪そうな顔をした男だった。

「そやつは『雉組（きじぐみ）』と言う組の頭、雉一（きじいち）　鷹助（たかすけ）。
最近何かと儂の組に手を出しおってな…。この前なんぞ儂の組の何人かが殺された。」

俺は先程置かれたメニューを見ながら金治銅の話を聞く。

「儂の組は確かにデカイ。じゃがその組の方が数が多くてな…。しかも雉一は頭がよく回る奴らしくてな…。そこでよく頭の回る雉一を殺せば、その部下たちが混乱して多少は儂の組でも抵抗できると思うのだ。」

ずいぶんと物騒な話をしていて聞かれたらどうするのだ思うかもしれないが、生憎近くには殆ど座っていない。
大方この男が何かしたのだとは思うがな……。

「いくらだ？」
「む？」
「報酬はいくらだと聞いているんだ。まさか数百万でやらせるつもりはないだろう？」

「お主、意外とちゃっかりしているな……。これくらいでどうだ？」
金治銅はそう言って今度は小切手を俺に見せる。２０００万か…。
「少ないな。最低でも５０００万は用意しろ。」
「ぬッ！？お主たかが一人の男を殺すだけで５０００万も用意させるのか！？」
うるさいな…。周りには聞こえていないからいいものの、聞かれたら騒がれるぞ…。
それに……
「誰が一人だと言った？」
「……なに？」
「俺はたかが一人殺すのにそんなに金は要求しない。」
「…では誰を殺すのだ？」
「雑組全員に決まっているだろう？」
俺がそう言うと、金治銅は唖然とし始めた。
「…カッカッカッ！！」
しばらくポカーンとしていると、突然口を大きく開けて上を向きながら笑い出した。
何を笑っているのだろうか？周りに居る何人かの客やレストランで働いている者たちもそれに驚いてこちらを見ている。
一頻り笑うと、金治銅は笑うのをやめて再びグラスの水を飲んで落ち着いた。
今まで気にしていた者たちも、もうこちらを見ていない。

「お主ずいぶんと面白い事を言うな…あの雑組全員を敵に回すと？」
「あぁ、全員を相手にするならかなり安い値段だと思うぞ？
もちろん、その雑組が持っている財産はそちらの物にしても構わない。」
「なるほど…確かにこちらの利益が大きいな……。それならばその話、乗ろう。」
「わかった。なら依頼の期限は1週間だ。なるべく早く終わらせるとする。」

俺はそう言って立ち上がる。もうここにいる意味も無い。

「じゃあな。」
「1週間後を楽しみにしておるぞ…。」

後ろで金治銅が何かを言っているが、俺にとってはどうでもいい。
金治銅に背を向けたまま再び歩き、美冬と美夏の二人が居るテーブルへと向かう。
二人ともまだ食べている途中だった。

「おい、まだ終わらないのか。」
「ん、壊さん。もう少し待っててよ。」
「私も……。」

そう言って少し急いで食べる二人。仕方ない、少し待ってやるとしよう・・・・・

「美味しかったね～。」
「うん……。」

満足そうに俺の後ろを付いてくる二人。
ちなみに、この二人が食べたのを合わせると8万円近くだ。あの後、美香が追加でデザートを頼みよった。
こいつ等は（殆ど美夏）遠慮と言うのを知らないようだな…。
後ろをチラリと見てみると、楽しそうに話をしている二人がいる。
…まぁ……

「……こういうのも悪くないな……。」

後ろの二人には聞こえないほどの声で静かにそう呟いた…

第１２３話：依頼者に会いに行こう（後書き）

そんな訳で終わりました。
この兄弟は次回も出そうかと思っています。

第１２４話：瑠璃とお出かけ（前書き）

はい、今回はほのぼのにする事にしました。

第１２４話：瑠璃とお出かけ

朝、目が覚めると違和感を感じた。
いや、目は開けていないので目が覚めたと言うのはおかしいかもしれないが、とにかく違和感を感じた。
違和感と言うのは俺が何かに抱きついていると言う事だ。
抱き枕かと思ったが、生憎ながら俺は抱き枕を買った記憶も創った記憶も無い。
それに妙に温かいような……
何だろうと疑問に思いながらも少しずつ目を開く。そこには…

「…ん……」

何故か隣の部屋で寝ているはずの瑠璃がいた……

「……で、俺の布団に潜り込んで寝ていたと？」
「すいません……。」

そう言いながら本当に申し訳なさそうに項垂れる瑠璃。
簡単に言ってしまうと、夜中に水が飲みたくなり台所で水を飲んだ後に部屋に戻ろうとしたが、自分の部屋と俺の部屋を間違えてしまったらしい。
……まぁ、ある意味じゃ瑠璃らしいのかもしれないな。

慰めるために重い空気を放っている瑠璃の頭を軽く撫でる。

「別に怒ってはいない。だからそこまで気にするな。」

俺がそう言うと瑠璃は安心したように俺を上目遣いで見てきた。

ふむ、妹が出来た気分だな。

数十秒ほど撫でていただろうか。そろそろ撫でるのをやめようと思い瑠璃の頭から手を退かす。

手を退かした俺はそのまま座っていたベッドから立ち上がり、そのままタンスの前まで移動して中から黒のワイシャツとズボンを引っ張り出す。

そして寝間着のボタンを上から一つずつ外して『バタン！』ん？瑠璃が部屋から出て行ったな。

何か慌てている様な気がしたが……気のせいだろう。俺はそう思い、再び寝間着のボタンを外した……

ーーーSide三人称ーーーー

壊の部屋から勢いよく出てきた少女（？）瑠璃。出てきた壊の部屋のドアを背にし、顔を真っ赤に染めている。

どうやらこの少女にとって壊の着替えシーンは少々刺激が強かったらしい。

初々しいと言うか何と言うか……

「……少し……見たかったですね……／／／。」

そう言いながら瑠璃は寝間着から私服に着替えるために自分の部屋に戻った……

ーーーーSide壊ーーーー

あの後、着替え終わってからすぐに朝食の支度をした。
今回はトーストとベーコンエッグ、それにドレッシングを掛けるサラダ。
後はジャムやらバターやらを冷蔵庫から取り出した。
片手にバターを塗ったトーストを持ち、それを齧りながら今日の新聞を読む。
そこには『またまた行方不明者!?』と言う文字が大きく載せられていた。

「……またか……。」

思わずそう呟いしまった。
一週間ほど前からこれと同じような記事がよく載せられており、俺の記憶が正しいならもう10人以上は行方不明になっていると思う。
確か連れ去られた人間は特にこれと言った特徴もない一般人だと書いてあった。
どうせなら金持ちの人間を連れて行って身代金を要求したほうがいいと思うがな……

「壊さん、どうかしましたか？」

しばらく考えていたらトーストを食べ終わった瑠璃が話しかけて来た。

トーストに塗ったイチゴジャムを口元に付けながら。

「瑠璃、口元にジャムが付いているぞ。」

俺がそう言うと、瑠璃は慌てながら近くにあるティッシュで口元を拭く。

まるで諏訪子たちを見ている気分だな。信仰の薄くなった現代では元気にしているだろうか？

久しぶりに会ってみたいな。まぁ、何処にいるかわかないし、そもそも生きてるかどうかも怪しいから会いに行けないがな。

そう思いながらも、再びトーストを齧った……

朝食を食べ終わり、現在９時３０分。俺はいつも通りソファーで本を読んでいた。

タイトルは『今日のご飯なんだ！！』だ。ふざけているタイトルだが意外にも分厚い。

軽く２００は行っているのではないだろうか？ちなみに、瑠璃は俺に座りながらテレビを見ている。

それにしても、瑠璃がこのマンションに来てから一度も遊びに連れて行ったことが無いな。

……よし。

「瑠璃、どこか行きたい所はあるか？」

「え？」

俺は横にいる瑠璃にそう話し掛ける。

すると瑠璃は俺の事をキョトンとした顔をしながら見ていた。

「いや、どうせ一日中家に居ても暇だろう？

だから今日は君が行きたい所に連れて行こうと思ったのだが……。」

「……えっと…じゃあ……。」

ーーーーSide三人称ーーーー

ビルやデパートが並ぶ街の歩道を歩く人間たち。その中で二人も歩いていた。

小さな花の模様が付いた割には少し地味な服、そして少し長めスカートを穿いた小柄な少女。

キレイなこげ茶色でサラサラな髪をしており瞳の色は黒。ついで言うと美少女だ。

もう一人は黒い服に黒いズボン、そして黒いロングコートに黒の手袋と少し暑苦しい格好をしている長身の男。

それなりに長い白のショートヘア、そして赤の瞳。こちらも顔立ちは整っており、中々の美形。

先程から道行く人々の何人かは、この二人をチラチラと見ている。

言わずもがな、瑠璃と壊の二人である。はっきり言って、この組み

合わせは色々と拙い気がする。
見る者が見れば、男が少女を誘拐する場面にも見えるかもしれない。
まぁ、この男、壊はそんな事は考えていないし、思われたとして気にしないだろう。

しばらく二人が歩いていると、不意に壊が立ち止まった。
それにつられるように瑠璃も立ち止まり、壊の見ている方向へ視線を向ける。
瑠璃の向けた視線の先には、少し大きめの服屋があった。

「瑠璃、あそこに行くぞ。」

壊はそう言ってドンドン服屋へと向かって歩く。

「待ってくださいよ～！」

その後を瑠璃が小走りで付いて行った……

ーーーーSide壊ーーーー

店に入ると同時にエアコンの涼しい風が身体に当たる。
エアコンで涼んでいると後ろの自動ドアが開き、少し遅れて瑠璃が店の中に入ってきた。

「置いて行くなんて酷いですよ……。」

少し怒ったように上目遣いで俺を睨む瑠璃。
その視線から、半ば逃れるように店内を見渡す。
客はあまり来ていなく、来ている客は全員が若い女だ。
店の中は明るめの雰囲気で、服やズボンなどと言った衣類が壁や洋服掛けに掛けられている。
ついでに、衣類以外にも人形が売られている。あの熊の人形、瑠璃より大きいな……

「いらっしゃいませ～。」

と、店の中を眺めていたらおそらく店員であろう女がやって来た。
なんと言うか……やる気の感じられない声だな。まぁ、俺は別に構わんが。

「何をお求めですか～。」
「あぁ、瑠璃……俺の後ろにいる少女に合いそうな服は無いか？」

俺はそう言って後ろにいる瑠璃に目を向ける。
先程から店内の至る所を面白い物を見たかのように見渡している。
店員は少し考えるように目を右斜め上にずらすと、瑠璃に向かって『ちょっと来てくださいね～。』と言って連れ去った。
俺は微妙に困惑している瑠璃を見捨てて、瑠璃が戻ってくるまでの間店の中の物を色々と見る事にした。

しばらくすると、人形がたくさん置かれているところに来た。

フランス人形やらベアドールやら、はてには市松人形から藁人形まで置いてある。
ここは確か服屋だったはずだが？まぁ、どうせ店主の趣味か何かだろう。もう気にしない事にする。
そう言えば前に、女は人形を貰うと喜ぶと聞いた事がある。本当だろうか？
もし本当なら何かと世話になっている瑠璃に人形を買ってやりたいが……

「お客様～。」

人形を眺めながら考えていると、不意に後ろから声が聞こえたので振り返ると、
そこにはあのやる気のない女店員がニコニコしながらこちらを見ていた。

「ほらほら～、大丈夫ですよ～。全然変じゃありませんよ～。」
「お、押さないで下さい……。」

女店員はそう言いながら自分の後ろに隠れている少女…瑠璃を前に押し出した。
ただし……

「あ、あの…変じゃないですか……？」

いつもと違う……白いワンピースを着ている。
特に模様もなく、ただただ純粋な白いワンピース。
瑠璃はワンピースの裾を握りながら上目遣いで俺を見ている。
似合うか似合っていないか心配なのだろう。勿論の事だが、似合ってる。

「……大丈夫だ、充分似合っているぞ。」

俺はそう言って瑠璃の頭を撫でる。すると瑠璃は、パッと満面の笑みになった。

「瑠璃、金を払うから少し外で待っていてくれないか？」

「え？でもそんなに迷惑を掛けるわけには…。」

「気にするな。俺が連れて来たんだからな。」

「えっと…ありがとうございます。じゃあ外で待ってますね。」

そう言ってルンルンと嬉しそうに店のドアから外に出る瑠璃。

ワンピースが似合っていると言われたのがそんなに嬉しかったのか？

さて、とりあえず……

「店員、少し相談があるのだが……。」

「～♪」

「嬉しそうだな。」

「はい♪」

横で買った白いワンピースを風で揺らしながら嬉しそうに着ている瑠璃。

辺りはもうすっかり夕暮れ時になっており、先程から子供たちが手

を振りながら帰る場面を何度か見かけている。
時間は大体5時かそこらだと思う。少し後ろからカァカァとカラスの鳴く声がこちらまで聞こえる。
……確か冷蔵庫に鶏肉があったな。今日は唐揚げにしよう。ついでだ、仕事を終わらせよう……
そんな事を思いながら、俺は横でニコニコと笑みを絶やさない瑠璃とマンションまで帰った……

第１２４話：瑠璃とお出かけ（後書き）

と、終わりました。
次は壊が依頼を実行します。
戦闘シーン一応ありだと思います。

第１２５話：依頼実行（前書き）

今回は、壊がやたら残酷です。
そう言うのが苦手な人はあんまり見ない方がいいかもしれませんね。

第１２５話：依頼実行

ゆっくりと目を開ける。視界に映ったの、辛うじて見える部屋の天井。
俺は瑠璃と出かけて帰って来て、夕食を摂って９時ごろに寝た。
今回は朝まで寝る気は毛頭無かった。つまりは仮眠をしていた訳だ。
何故かと言うと、今日中に金冶銅の依頼を終わらせてしまおうと思ったからだ。

「……眠いな……。」

そう呟きながら、壁に立て掛けてある時計へと目を向ける。
暗くて少し見えづらいが夜の１１時３５分頃のようだ。…仕事をするには丁度いい時間だな。
まだ若干ダルイ身体を起こして眠る前に枕元に置いておいた黒の服とズボンに着替える。
そのままコート掛けに掛けてある黒いコートを着て、ポケットの中に入っている黒い手袋をつける。
傍から見れば間違いなく怪しい奴だと思われるかもしれんが、別に気にする事でもないだろう。
いかん、靴下を履き忘れた。タンスの中から靴下を引っ張り出してその場で履く。
勿論の事だが黒色だ。

なるべく音を立てないようにドアを開けて玄関で靴を履く。
絶たちには予め話して置いたので問題ないし、瑠璃のめんどうも見て置くように頼んだ。
後で使うための金を入れた財布も持った。
何も忘れていない事を確認した俺は、そのまま玄関のドアを開けて

外に出た……

缶コーヒーを片手に人気の少ない歩道をひたすら歩く。
時間が夜なだけあって中々に冷えるので、こう言う時の温かいコーヒーが有り難く感じるな。
そう思いながらも缶コーヒーに口をつける。今日は月が見えないな……

ある程度歩いていると、ようやく目的地を見つけた。
人通りの少ない路地裏地を奥に進んで何度か曲がると見える大きな日本屋敷と言ってもいい家……の屋根。
道が複雑なので表の連中に簡単にばれる事はないし、仮にばれたとしても、厄介事に加わるのは嫌だろうからここまで来ない。
この場所を探すのに瑠璃と出かけてる間に式たちに探させていたから間違いないだろう。
ちなみに、缶コーヒーの缶はちゃんと捨てた。

「……本当に大きいな……。」

そう思いながらも、目の前にあるやけに大きい屋敷門に近づいて軽く力を込める…が、当然の事だが開かない。
まぁ……

「…開ける必要も無いがな。」

俺はそう呟いて久々に能力を使って屋敷門に潜り込んでそのまま向

こう側に出る。
力が戻っていなくて中途半端な状態でも、この能力だけは霊力などの消費が少なくて済むから便利だな。
もう一つの『想像したものを創造する程度の能力』は結構消費するからな…。
今の俺じゃ本気になっても昔みたいに大量に創り出せないだろう。

まぁ、そんな事はどうでもいい。
屋敷門を潜(くぐ)ると、視界に映ったのは立派な庭と近づくと鯉(こい)が泳いでいるのが見える池。
ついでに屋敷門がやけに大きくて屋根しか見えなかったが、立派な日本屋敷も建っている。
あの中に雉一と言う男がいるのだろうか?雉一の子分が誰も出かけていなければ仕事がやりやすくなるが……。

そう思いながら俺はそのまま地面の中に潜る。さて、『仕事』の時間だ……

ーーーーSide子分Aーーーー

「ガハハハハ!!おう、おめぇも飲め!!」

そう言いながら俺より先に入った８９３がバンバンと背中を叩きながら俺に杯を渡す。

「兄貴、痛ぇからやめてくださいよ……。」

そう言いつつも杯を受け取って一気に飲み干す。

何故かは知らないが、今日は久しぶりに組の者全員で宴会を開く事になった。

たぶん親分の気まぐれか何かだろうと思う。最近いい結果が得られているって喜んでたし。

「……ちょっと便所行って来る。」

そう言って杯を渡した男が立ち上がり、襖を開けて部屋から出る。

「お？んじゃ俺も行くわ。」

それに続くように近くに居た他の男が立ち上がって襖を開けた男の後に付いて行く。

あの人達のペースに合わせていたら命が幾つ有っても足りない。

帰ってくるまででもゆっくりと酒を楽しみたいなぁ……。そう思いながらも杯に酒を注いで飲む。

しかし、１０分経ってもあの二人は戻って来なかった。

他の仲間にも話してみたら「寄り道でもしてんじゃねぇの？」と言いながらあしらわれるだけだった。

確かにそうかもしれない。でも、不安と言うのはすぐには消えず、胸の中で未だにモヤモヤするばかりだ。

それに何だか嫌な感じがする。普段ならあんな奴ら放って置くけど、今回は少し心配になってきた。

「少し、見てきます。」

そう言って立ち上がる。後ろで飲んでいる仲間たちは「早く戻って来いよ。」と言いながら酒を飲んでいる。

俺はそのまま襖障子を開けて部屋から出る。まずはトイレに行ってみよう。

ここのトイレは小便器と洋式と和式などの殆どが備え付けられてる。

まぁ、ぶっちゃけ公衆便所みたいな感じだと思ってくれればいい。

トイレに着いた俺は邪魔なドアを開けて中に入る。

いつもと変わらない小便器が壁に付いており、向かい合うように洋式と和式便所の扉が５つがある。

しかし、いつもと変わらないはずの場所にいつもと違うものがあった。

床には赤黒い何かの塊と赤い液体がぶちまけられており、壁にも飛び散っている。

そしてこの場所からただよう鉄のようなニオイ……。

ここにある物を理解した俺はそのまま口を塞いで洗面所に胃から逆流した物を吐き出す。

「う…げぇ……っ！！」

ある程度吐くと、俺は少し涙の溜まった目を動かして先程の場所を再度見る。
それは人の身体の一部。指、足、腕や目玉などが無残にも辺りに散らばっている。
これは先程トイレに来た俺の上にいる男。
転がっている首の顔は苦痛の表情を浮かべており、目玉が無くなっていた。
よく見るとこの男に付いていったもう一人の男も身体の肢体がなくなった状態で壁に持たれかかっている。

「……何だよ…何がどうなってんだよ。」

再び頭の中が混乱して訳も分からずに呟く。腕と脚がガクガクと震え上手く動かない。
確かに、こんな仕事をしていれば誰かに恨まれる。だけど幾ら何でもここまではやらない。
そうだ……こんな時こそ冷静にならなければ駄目だ。まずは他の宴会の場所に戻って全員にこの事を話そう。
まだこんな事をしたキチガイが近くに居るかもしれない。

「そうだ…そうしよう……。」

自分の頬を両手で叩いて気合を入れ直し、トイレから出るためにドアを開けて廊下に飛び出す。
そのまま渡り廊下を全速力で走って宴会が行われている部屋まで向かう。
そして宴会の行われている部屋まで着くと、勢いよく襖障子を開けた。

「おい皆！聞いてく…れ……。」

部屋に入って叫ぼうとしたら上手く声が出なかった。
宴会をしている男たちが全員、見るも無残な姿になっているからだ。
ある者は首を切り落とされ、またある者は原形を留めていないほどグチャグチャなっている。
その腐ったような部屋の中心で、見たことも無い男が静かに杯に酒を注いで飲んでいた。
白い髪に紅い目、全身は黒一色の服装で固められている。血を目立たせないためだと思う。
しかし、白い髪や顔には返り血であろう液体が少し付いていた。

「……ん、まだ残っていたか。丁度いい。」

男はそう言って空になった杯を後ろに放り投げて立ち上がる。
立ち上がると、男の身長が俺よりもずっと高いと言う事がわかった。
そしてゆっくりと、ゆっくりとこちらに向かってに近づいて来る。
表情の読めないその顔はどこかつまらなそうにも見えた。
今すぐにここから逃げ出したいが、まるで金縛りにあったかのように身体が動かない。

男は俺の前までやって来ると、腕を組んで上から見下ろす。

「……雉一はどこにいる？」

静かにそう言った。

「お…親方に何の用だ……？」
「君は黙って俺の質問に答えればいい。もう一度聞く。雉一はどこ

だ？」

男はそう言ってナイフを握り締めた。…いつ持ったんだ？
頭と心の中でこの男に全てを話してしまおうと思った。
しかし……

「こ……断…る……ッ！！」

ーーーSide壊ーーー

「……。」

目の前に転がっているまだ２０代前半であろう若い男の死骸。
『断る』。この男はそう言った。だから俺は雉一の居場所を吐かせるために痛めつけた。
だが、いくらナイフで切ろうと身体に傷をつけようとこの男はここの組の頭である雉一の居場所を吐かなかった。

別に、罪悪感がなければ後悔もしていない。
罪悪感は疾の昔に捨てたし、今更何人殺そうが気にする事でもない。
それにこの男、断ると言っていた時に少し違和感があった……。
俺は殺した男たちの死骸をそのままにして襖障子を開けて渡り廊下に出る。
雉一はどこにいるのだろうな…。そう思いながらも渡り廊下を真っ直ぐと進む。

しばらく歩いていると大きな部屋の前に着いた。
ここまでの道のりは全て確認したので、あと見ていないのはこの部屋だけだ。
どの部屋よりも襖障子が二回りは大きく、そしてどの部屋よりも怪しい。
おそらくだが、雉一はこの部屋の中にいるのだろう。

そう思い、俺は襖障子を開けて中に入る。
しかし、部屋の中は別に大した事はないただの寝室だった。
ただ大きい…畳二十畳の部屋。常人が見ればそう感じるであろう部屋だ。そう、常人が見れば。

「……下から何か感じるな……。」

だがしかし、俺はその辺の常人ではなく化け物だ。だからこそ気づいた。
部屋に入るまで気づかなかったが、この大きな部屋の下から何かおかしな感じがする。

「…行ってみるか。」

俺はそう呟いて能力で畳に潜る。そしてそのまま下に向かって進む。
さて、一体何があるのやら……

第１２５話：依頼実行（後書き）

そんな訳で終わりました。
戦闘シーン、無かったですね……。
次こそは入れたいと思います。次こそは！

第１２６話：雉組の頭（前書き）

今回は戦闘シーンあり。
短いけどね。
それと、今回は前回よりもある意味やばいですので、見たくない人はそっとページを閉じるか戻るをクリックしてください。

第126話：雉組の頭

能力を使って潜って出た先は和風の通路。
真っ直ぐと延びた通路の横には障子、壁には少し染みが付いている。
どうやらこの先からおかしな感じがするようだ。
明かりは点いているのでそこまで暗くないから通路の道がしっかりと見える。
こんな退屈な仕事、さっさと終わらせて早く帰るとしよう……

「……長い……。」

思わずそう呟いてしまうほどこの通路は長かった。
右を見ると壁&障子。左を見ても壁&障子。前を見ると通路の道。
この屋敷に入ってからもう2時間以上は経っているだろうか？
まさかここまで長引くとは思わなかったな……

「…ん？」

不意に、右側にある一つの障子の先から人の気配を感じた。
いや……本当に人なのか？人にしてはあまりにも……

「……行ってみるか……。」

そう言って障子に手を掛け、そのまま開けて中に入った。

通路よりも若干部屋の中は薄暗いが、見えないと言う訳ではない。
薄暗い部屋の中で、おかしな感じのする方へと目を向ける。
そこには黒い何かの塊があった。大きさは成人した男くらいだろう。
と言うか、アレは人間の男だな。アレからおかしな感じがするようだが……

「……少しいいか？」

とりあえず話し掛けてみる。
何も言わなかったらすぐに首を飛ばすか何かして俺のことが言えないように口を封じてしまおう。
俺が話しかけると、今まで俺に対して背を向けていた男はゆっくりと身体を俺の方に向ける。
男の身体が俺の方に向くと同時に、男は拳を俺目掛けて振り下ろしてきた！
それを右に軽く跳んでかわし、男の脇腹に回し蹴りを放つ。

「グギェ！？」

奇妙な声と共に男の身体が吹っ飛ぶ。
しかし、男は吹っ飛んでいる途中で両手両足を地面に付けて着地した。
人間とは思えない運動能力だな。

「メ…メシ！ハラヘタ！！」

まるで飢えた獣のように涎をボタボタと垂らしながらそう叫ぶ男。
何だコイツは？

「メシ！メシィ！！」

「悪いが食べれるものは持っていない。」
「ダッタラオマエガメシダァァァ！！！！」

男がそう叫ぶと、男の身体に変化が訪れた。
四つん這いになっている両手両足の爪が音をたてて長く、身体も全て先程とは比べ物にならないほど大きくなる。
人間の顔である顔は醜く膨れ上がると蜥蜴のような顔になった。
さらに、一番の違いは男から出ている力。

「…妖力……。」

そう、男の身体からは下級妖怪ほどの妖力が滲み出ているのだ。
コイツ……妖怪か？
……ありえない。わかっているとは思うが、妖怪とは人間が妖怪へと恐怖する心で存在している。
しかし、今の時代の人間は妖怪はいないと主張しているので人間たちの殆どと言っていいほどの人数が妖怪の存在を信じていない。
なのでいくら下級妖怪とは言えここに存在しているはずが無い。

「グルァァァァッ！！！

男がおかしな声を上げながら俺に向けてその巨大な腕を振り下ろす。
振り下ろされた両腕を掴んで攻撃を止める。すると今度は巨大な口を大きく開けて俺に食らい付こうとしてきた。

「イタダキマァァァスッ！！！」
「道端に落ちている物は食べてはいかんと教わらなかったのか？」

そう言いながら右足で妖怪もどきの顎を蹴り上げる。
男の上顎と下顎の鋭い歯がボキボキと折れ、いい具合に歯茎に突き

刺さって血が飛び散る。

「イギァァァァッ！！！」

男は俺に掴まれている腕を無理やり振り解くと、自らの蜥蜴のような口を片手で押さえてもう片方の腕を横に薙ぎ払った。
それを伏せてかわし、再び伏せたまま男の顎目掛けて蹴りを放つ。

「ウギァオッ！！？」
「もう口を開くな。」

立ち上がって両手を組み、霊力とその他を込めて男の頭目掛けて全力で振り下ろす。
男は叫び声の代わりにグチャッ、と言う頭の潰れる音を出して地面に倒れ伏した。

「ウ…ウォ……。」

辛うじて呻き声のようなものを上げる男。
このまま放って置いても勝手に死ぬだろうが、生憎と俺はそこまで優しくない。
まだうつ伏せになりながら生きている男の頭の残っている部分を足で思いっきり踏み潰す。
辺りに血と脳と骨が飛び散り、男の声はそれっきり聞こえなくなった。

「……まぁ、退屈はしなかった。」

俺は倒れている男に向かってそう言うと身を翻し、障子に向かって歩き……ん？

そう言えば妖怪は人間を食って失った妖力を取り戻したり妖力を上げたりしているんだったな。
ひょっとすると、妖怪ではないが俺でも人間を食えば力が戻ったりするのだろうか？

「……試してみるか。」

我ながら馬鹿な事を考えていると思いながらも丁度よく転がっていた形の悪くなった男の目玉を拾い上げる。
所々が凸凹として血塗れになっている。右目だろうか？それとも左目だろうか？
そんなくだらない事を考えながらも、摘んでいる目玉を口に投げ入れた。
カニバリズムは人として最大の禁忌。だが今の俺にはそんな事まったく関係ない。
口に入れた目玉を団子のようにモグモグと咀嚼してそのまま飲み込む。

「……不味い。」

口に広がったのは鉄のような味。こんな物のどこが美味いのだろうかと妖怪たちに聞きたくなる。
妖力は……戻ってないな。少し期待していたが残念だ。
口の中に残っている血を唾と共に吐き出して障子に向かって歩いて開ける。
それにしても、今更だがどんどん人間から遠ざかっていくな。…もう人間じゃないけど。

「ここか。」

あの後、特にこれと言った事もなく一番最後の部屋まで辿り着いた。
最後の部屋の前もやはり障子。アレか、ここの組の頭である雉一は和風好きか？
それなら俺と気が合いそうだ。俺もどちらかと言うと和風好きだからな。
まぁ……

「それでも生かす気はないがな。」

そう言って障子を開ける。障子の先には……

「おや？来たようだね。」

広い部屋で眼鏡を掛けた若い男が座布団の上で茶を啜っていた。
いや絶対におかしいだろ。

「ようこそ侵入者さん。ここまで来て一体何の用だい？」

男が落ち着いた口調で話す。
黒く少し短めの髪に黒い目。何故か白衣のような物を着ている。
こちらを見て微笑んでいるが、それとは裏腹に、出ている雰囲気は全く違う。

「ま、そこに座ってよ。」

男はそう言って自身の前に座布団を投げて敷く。
俺は男のいる部屋の中心まで歩いて敷かれた座布団の上に座る。

「無用心だね？殺されても知らないよ？」
「勘違いしないで貰おうか。俺は殺しに来たのであって殺されに来たのではない。」
「ふーん……それよりも、私に聞きたい事があるんじゃないかい？」
「……あの出来損ないの妖怪もどきは何だ？」
「出来損ないとは非道い。あれでも私の部下なんだよ？」
「……部下？…一つ問う。お前の名前は何だ？」
「私は雉一鷹助だよ。」

……？
こいつは今何と言った？雉一鷹助？こいつがか？
待て待ておかしいだろう。俺が写真で見た雉一はもっと太っていたし面も悪かったぞ。

「……君は本当に雉一か？写真で見たのとはずいぶん違うが……。」
「それはたぶん私の子分だと思うよ。私は表に顔を出すのが嫌いでね。
だから裏から子分たちに仕事をさせているんだよ。
けれども組の頭が顔を見せないと示しが付かない。
それで代理として適当に目に付いた男に頭の代わりをさせているんだよ。」

…金冶銅め……ちゃんと正確な情報を教えろあの爺。
いやしかし、まさか雉一がこんなにも若いとは思わなかった。

「じゃ、話を戻すよ。アレは元人間さ。」
「元人間？」
「そう。私の家系は少し変わっていてね。

世に言う黒魔術やら何やらを代々受け継いでいる家系なのさ。
私たちは人外法と呼んでいるよ。人外法は文字通り人を人外にする。
と言っても、実際に妖術やら何やらが使えるわけじゃない。
私たちが使うのは薬だよ。」
「…薬……。」
「そう薬。ドーピングの薬だと思ってくれればいいよ。
ただ、作る為にはある希少な花が必要でね。まぁそれも家で栽培してるんだけどね。」
「ほぅ……。」

あの男はその人外法の薬であんな姿になり、下級妖怪のような妖力を手に入れた。
その『希少な花』とやらに何か特殊な効果があると思ってもいいだろう。
もしかしたら俺の力を手っ取り早く戻す方法に繋がるかもしれない
……

「その花は一体どこにある?」
「ん?見たいかい?それなら付いてきなよ。」

雉一はそう言って立ち上がってそのまま後ろを向いて部屋の奥に進む。
そして壁に手を当てて何かボタンを出してそれを押すと、壁に扉が現れた。

「隠し扉か。」

雉一がその扉に入っていくのを見た俺は立ち上がり、雉一に続くように扉の中に入った……

第１２６話：雉組の頭（後書き）

はい、終わりました。
壊は別にカニバリズムな訳じゃないですよ？
ただ弱体化している力が戻るんじゃないかなって純粋に思って食べたんですよ？
次回は本格的なバトルが…！あるかもしれない。

第１２７話：依頼終了（前書き）

まんまですね。
今回で、雉一の出番は殆どなくなります。

第１２７話：依頼終了

扉の先には少し狭い洞窟が広がっていた。
壁には一定の距離で松明が飾られており、さらに雉一がいつの間にか持っていた提灯のお陰で洞窟の中はよく見える。
と言うかこの時代で提灯というのも珍しいな。
しばらく歩いていると雉一が洞窟の行き止まりの壁で止まった。

「……行き止まりのようだが？」
「問題ないよ。ホラ。」

雉一はそう言って先程この洞窟の扉を開けたときと同じように壁に手を当ててボタンを出し、それを押す。
するとこれまた先程同様に扉が現れる。
雉一が扉に入るのを確認した俺はそれに続いて扉に入る。そして扉の先には……

「ほぅ……。」

見たことも無い黒い花が花壇一杯に咲き誇っている。
その黒い花一輪一輪から、微量だが妖力が漏れている。
俺は花に近づいて手前に生えている一輪を根元からへし折って花を摘む。
匂いは……無臭か。妖力の量も大した事はないな。だがここにいると気分が良くなる。

「気に入ってくれたかい？」

今まで横で黙っていた雉一がそう問うて来る。

「あぁ。実にいい気分だよ。」

そう言いながら今度は花ビラを少し舐めてみる。

……味はないし特にこれと言った変化も無い。調合した時だけ効果があるのか？

「よくもまぁそんな得体の知れない花の匂いを嗅いだり舐めたり出来るね。

私でも最初は戸惑ったと言うのに。」

感心したような声を上げながら俺を見る雉一。

さて、そろそろ……

「仕事を再開しないとな。」

俺はそう言って持っていた花の茎が雉一に向くように投げる。

雉一はそれを人差し指と中指で挟むようにして受け止めた。

「いきなり危ないじゃないか。」

「こちらも仕事でな。見たいものも見れたし知りたい事も知れたからもうここに用は無い。」

俺の言った事に対して雉一は「やれやれ」と言った感じに首を横に振るとキッ、と睨みつけてきた。

そして懐からおかしな笛を取り出すとそれを勢いよく鳴らした。

『ピッーー！！！」

笛の音が辺り一面に響き渡ると同時に雉一の周りに何かが落ちて来

た。
それも1つではなく2つ3つと次々に落ちてくる。
「・・・・・・・。」
落ちて来たのは人。いや……『人外』
あそこで見た一匹とは違い、こちらは唸り声一つ上げずに俺を見ている。
性別は男だけでなく若い女や老人、さらには子供まで混ざっていた。
はて?あの人間たち、どこかで見た事があるような……まさか……
「……新聞に載っていた行方不明者…?」
「アレ?よくわかったね。この子達は私が子分に連れて来させた実験材料だよ。」
そう言いながら雉一は近くに居る若い女を引き寄せる。
「この子達は言わば成功作。他の奴らと違って僕に忠実になるように作った。」
なるほど、だから行方不明者と数が合わなかったのか。
「失敗作は廃棄処分でもしたのか?」
「うん?一匹残して置いたけど、他のは全部燃やしたよ。」
一匹……俺が始めに戦ったアレか。
「この薬の実験は結構大変でね。
子分にまで気付かれない様にだけど協力してもらったよ。
例えば『私の居場所を吐けない様にする』とかね」

……なるほど。
あの若い男に違和感を覚えたのはそれだったか。
本当は場所を言おうとしたけど薬のせいで喋れなくて俺に殺されてしまったと。
まぁ、言おうが言うまいがどちらにしろ殺していたがな。仕事だし。

「……（ブォン！」
「お…っと。」

子供の人外が俺に突っ込んで蹴りを放ってきたので、少し横に動いて攻撃を避ける。
この子供を入れて人外の数は……5人だな。
子供の人外を軽く蹴り飛ばしつつ残りの人外の数を数える。

「お、凄いねぇ。いくら子供の人外とは言え普通の大人よりも強いんだけど。」
「普通の大人より強いからな。ところでこいつ等は元に戻ったりするのか？」
「うん？ムリムリ。もう戻らないよ。何？助けようとしてた？」
「可能ならばそうしたかったが……。」

再び俺の顔に迫る子供の人外の拳。それを首を動かして避け、そのまま子供を殴り飛ばした。

「無理なら仕方ない。全員殺して帰る。」
「……そうかい。それならしかたないなぁ。……行け。」

雉一がそう言うと、今まで控えていた人外が一斉に襲い掛かってきた。

若い男の人外が本当に元が人間だったのかと言う程高く跳んで踵落としをして来るがそれを後ろに避ける。
しかし、すぐ後ろに居た老人が細い身体からは想像も出来ないほどの速さと威力で拳を振り下ろす。
それを片腕で防御して足払いを掛け、そのまま蹴り飛ばす。
さらに、左足を軸にして周りに居る老婆と若い女を回転蹴りで薙ぎ払う。
回転蹴りをやめると同時に現在進行形で襲い掛かっている子供と若い男にカウンターで拳を放つ。

「おぉ！凄い凄い！まさか投薬した人外をこうもあっさりと倒すなんてね。でも……。」

雉一がそう言うと、倒れていた人外がゆっくりと起き上がる。
やはりと言うか何と言うか、その瞳は光が無い虚ろな目をしていた。

「倒すんじゃなくて殺さないとね。」

再び始まる猛攻。5人が一斉にその拳、足、はてには歯を使って攻撃を仕掛けてくる。
それを殴り飛ばす、または蹴り飛ばしながら応戦する。
おかしい。先程から全力で攻撃しているのに……死なない。
老人の方だって入れ歯が吹っ飛んで顎が拉げているのにまったく疲労感を感じさせない。
他の人外もそうだ。先程若い男の顔も拉げていたが、何故か元に戻っている。
……異様な再生能力だな。これも薬の効果か何かだろうか？

「鬱陶しい……。」

考え事をしている時に邪魔をされるのは実に不快である。
能力でナイフを作り出して若い女の腕を切り裂く。

「容赦ないねぇ。」

知った事か。
心の中でそう呟きながらも、次々と相手の身体を引き裂く。
ある程度引き裂くと、敵は攻撃するのをやめてその場に留まり始めた。
……何だ？

「……ッ！？」

途端に、今まで何も感じなかった人外たちから溢れ出す妖力。
それは最初に戦った男とは比べ物にならないほどの量だ。
多少バラつきはあるが、少なくとも中級妖怪の上はあるだろう。
敵である人外が人の形をやめて次々と異形になって行く。
子供は猿のように、若い男は大きな百足。
若い女は頭が蛇のようになり、老人と老婆は巨大な亀と狼のようになる。
これは……

「少しきついな……。」

そう言っている自分の額から、一筋の冷汗が流れるのが分かった……

ーーーSide三人称ーーーー

人外と向かい合うように立っている男、紅鎖華壊。
彼は今、目の前に居る人外をどう倒せばいいか悩んでいた。当然だ。
実は壊の今の力は中級妖怪の中より少し下と言ってもいいほどの力しか戻っていない。
それに大して今壊が相手にしている人外たちは中級妖怪の上ほどの力と妖力を持っている。
しかもそれが五体も居る。結果、壊が圧倒的に不利なのだ。
今更ながら、壊はどうして絶たちを連れて来なかったのだろうと後悔していたりする。

「ウェァアアァァア……。」

巨大な亀がおかしな唸り声を上げて壊を威嚇している。
それに続くように他の人外たちも何かしらの行動をしたり唸り声を上げたりし始めた。

「ルギャァァ！！！」

猿のような人外が叫ぶと、不意に壊の身体が揺れて横に吹き飛んだ。
ドコンッと言う壁に激突する音と、メキャっと言う骨の折れる音が聞こえ、砂埃が壊の周辺に舞う。
そのままドサリと地面に落ちたが立ち上がり、口の端から出ている血を手の甲で拭う。

「…容赦ないじゃないか……。」
「そちらだって同じようなものだったじゃないか。」

一見爽(さわ)やかな会話に聞こえなくもないが、双方から発せられる殺気のせいで台無しである。
殺気の間に挟まれている人外たちが不憫で仕方ない……。

「いいさ、そちらがその気ならこちらにも考えがある。」

壊は、そう言って能力で刀やらナイフやらと言った武器を辺り一面に降らせた。

人外たちと雉一は驚きながらも降ってくる武器を避ける。

もちろん、壊の狙いは相手に降らせた武器を刺す事じゃない。

ある程度武器を降らせると、壊は腕をダラリと下げながら肩で息をする。

そして近くにある刀の柄を掴んで地面から引き抜いた。

「行くぞ……。」

静かにそう言うと人外たちに向かって駆け出す。

「お前たち、行け！！」

雉一がそう言うとただ見ていただけの人外も壊に向かって駆け出す。

壊は右手に刀を持ちつつも、走りながら左手でナイフを拾い上げて猿に投げつける。

猿は、走りながら、しかもあの距離から攻撃されると思っていなかったのかナイフが腕に突き刺さった。

それを見た他の人外たちは一瞬だけ動きを止める。

壊はそれを見逃さずに、立ち止まった人外の内の一匹である狼に切り掛かった。

「グォォォォ！！！」

狼の叫びで再び他の人外も壊に視線を向けて攻撃を仕掛ける。

壊はそのまま刀を振って、刀に付いた血で亀の目を潰した。

さらに、近くに居た百足の頭の上に飛び乗り、刀を思いっきり頭に突き刺した。
蛇女が壊に噛み付こうとしていたが、壊は百足の頭を蹴ってその場から離れる事で蛇女の攻撃を避ける。
壊の代わりに噛み付かれた百足がのた打ち回っているが、運が悪かったとしか言えないのでスルー。

「おぉ、凄い凄い！武器だけでもずいぶんと変わるものだねぇ。」
「……別に武器があるからと言って俺が強くなったわけじゃない。むしろ俺の戦いは素手の方が上だ。」

そう、壊の戦いは素手の方が武器を使うよりも強い。
ならば何故武器を使ったのか？それは武器が異物になるからだ。
拳で殴ってもすぐに回復してしまう。
それなら武器を身体に突き刺してそのままにしてみればどうだろうか？
そうすれば回復しても武器は突き刺さったままになり、間違いなく拳よりはダメージになる。

「キシィィィィ……ッ！」

蛇女に噛み付かれた百足が、未だに奇妙な声を上げながらのた打ち回っている。
おそらく、蛇女の牙には百足でさえ歯が立たない毒が塗ってあるのであろう。
壊はそう思い、徐に地面に落ちているナイフと槍を掴んで自然体で構える。

「さぁ、始めようじゃないか。舞台は既に整っているのだからな……。」

そう言うと同時に、壊は再び敵に向かって駆け出した……

壊が武器で戦っている頃、一人の女性が雑組の屋敷の前に立っていた。
ドレスのようなものを着ており、変わった帽子を頭に被り、何故か夜中なのに日傘を差している。
女性が片手をスッっと横に引くと、そこにおかしな切れ目が具現化する。
その気味の悪い切れ目に手を入れて中から扇子を取り出すと、女性はそれを広げて顔の前まで持って来る。

「ふふふ……もう少しで貴方を迎えに行けるのだから、こんな所でやられては駄目よ？壊……。」

女性はそう言って静かに笑った。何を考えているのかわからない声で……

ーーーSide壊ーーーー

持っている槍を思いっきり猿に突き立てる。

「ギギィィィィ！！？」

必死に叫び声を上げているが俺は追い討ちをかけるようにさらにナイフを首に突き立て、そして近くにあった鋭利な武器を片っ端から猿に突き刺す。
別の人外が何度も俺に攻撃を仕掛けているがそれを避けつつも一番弱い猿から標的を変えない。

「ウ…ギィ……。」

しばらく武器を突き立てていると、猿はとうとう抵抗する事無くその場で目を瞑って動かなくなった。
一匹目……案外呆気なかったがどうでもいい。早くこいつ等を始末して雉一も始末しなければいけない。
次の標的を決めて近くに落ちている剣を拾い上げる。次は……

「お前だ。」

そう言って蛇女に切りかかる。こいつは猿と同じで物を掴める手があるからな。
先程から俺の能力で創った武器で攻撃しようとしている。
まぁ、頭は蛇でも身体は人間だからな。だから猿も先に片付けたんだ。
そのまま刀で蛇の喉元を軽く切って傷口を開き、蛇女の口の中に刀を突っ込む。
それと同時にありったけの霊力と魔力を大量に流し込んだ。

「シャァァァ！！！？」

蛇女が驚いているが当然の反応だ。
俺がやった事は、蛇女の胃に流し込んだ霊力と魔力を利用して、胃

の中で武器を創造した。
まぁ簡単に言うと、今の蛇女は身体中の至る所から武器が突き出ていると言う事だ。
海栗(うに)を想像してくれればいい。さらに、蛇女の頭を掴んで首を引き千切る。
二匹目。

「うわぁ……えげつない事するねぇ……。」

喧しい。
心の中でそう呟きながら落ちている斧を拾い上げて、すぐ横で飛び掛って来ている百足に向けて振り下ろす。
未だに頭に刀が突き刺さっている状態でさらに斧で頭をカチ割られると言うのは不幸としか言いようが無いな。
さらに、蛇女から突き出ている槍を強引に引き抜いてオマケとばかりに百足の頭から顎まで貫通させる。
三匹目……だな。長い身体をピクピクとさせながら死んで行く。

「…ッ!?」

不意に左肩に走る激痛。見れば狼が俺の肩に食らい付いていた。
それに追い討ちを掛けるかのように亀がその鋭そうな顎で右肩を食いちぎった。
急いで狼を蹴り飛ばしてその場から離れる。……チッ……
右肩が中途半端に食い千切られたせいで右全体の腕がプラプラとしか動かせない。
治そうにも、霊力も妖力も足りない。
つまり、この状態で人外&雉一の相手をしなければいけないと言うわけだ。

「ガァァァァ！！！」

そう吠えながら狼が俺に向かって口を大きく開けて噛み付こうとして来たが、左手で足元に転がっている鉄球を口の中に投げつける。
いい具合に喉に入った鉄球のお陰で狼の動きが一瞬とまり、そのまま狼の首を左腕で挟んで息が出来ないようにする。
考えてみたらこいつ等心臓を刺されても死ななかったが別に不死などと言った生物ではないので、息を止めれば苦しくなるんじゃないかと……

予想通り狼は口から涎を垂れ流しながら目を見開いてギョロギョロとさせている。
気持ち悪かったので近くにあった刀を柄が口に来るように足で蹴り上げて咥え、そのまま刃の先を狼の首に突き刺す。
さらに、刀を口に咥えたまま横に思いっきり動かして狼の頭を切り落とし、その頭を踏み潰す。
切り落とした首からボタボタと流れ出る血と一緒に先程投げた鉄球がゴトリと音を発てて生首のすぐ横に落ちる。
身体のほうは横たわっているが尻尾などが弱弱しく動いている。
イニシャルGも驚きの生命力だ。ちなみに、亀は先程攻撃してきたが引っくり返してやった。
今は仲間を助けずに俺を見て威嚇をしている。馬鹿だな……

「そんな事をする暇があったら攻撃をしろ。」

そう言って持っている刀を狼の身体に突き刺して亀に向かって駈ける。
何故刀を狼に突き刺したかと言うと、まぁ保険のようなものだ。
亀は俺に向けて口から炎を吹いて攻撃してきた。それを横に跳んでかわす。

そのまま横から亀に向けて拳を振るった……のだが甲羅に隠れられてしまった。
やはり亀だな。そう思いながらも、首を引っ込めた場所に向けて拾ったナイフを投げる。

酷く鈍い音が響くと同時に、亀が甲羅から頭を突き出した。
どうやら俺の投げたナイフは亀の左目に突き刺さったようだ。
そのまま亀に近づいて首の肉を左手で掴み、思いっきり振り回す。
そして残っている霊力などを込めて亀を地面に叩き付ける。

「グェェェェェ！！」

ここにいる人外は皆奇妙な声で叫ぶんだな。
運がいい事に亀の甲羅に少しだけヒビが入ったので、それに向けて槍&その他の武器を刺したりして動けなくする。
五匹目……そこで改めて自分の周りを見わたす。

咲き誇っていた花はかなり悲惨な状態になっており、倒した人外は未だに弱弱しくピクピクと動いている。
そのどれもが動けなくなっているので問題ない。
右腕全体の感覚は既に失くなっており、動かす事もままならない。
もう一度周りを見るとある事に気が付いた。

「……雉一がいない……。」

そう、先程まで俺を馬鹿にしたような口調で見ていたはずの雉一がいなくなっている。
入ってきた扉を見ると僅かにだが開いていた。逃げたか……クククク……

ーーーーSide三人称ーーーー

「はぁ…はぁ…はぁ……。」

一人の男が屋敷の中で出口へ向かって走っていた。
その男の名は『雉一　鷹助』
彼はある始末屋、紅鎖華　壊から全力で逃げているのだ。
始めはただの興味本位だったのかもしれない。
この屋敷に侵壊入者が潜り込んだ事に気づいた彼は、子分に『宴会』と言う名の餌を与え壊の実力を測るための道具にした。

それは壊を薬の実験体にするため。
人外法の薬は精神と肉体の強い者ほどその威力を高める事が出来る。
しかし、彼が今まで人外にしてきた者たちはそれが弱く、本当に成功と言う例は無かった。
だからこそ期待していた。あの男を実験材料にすれば今よりももっと薬を効率よく使えるのではないか?と。

だが今回ばかりは薬がどうのこうの言っていられなかった。
アレは人間じゃない。化け物だ。
人外たちをも倒せるほどの力を持った化け物を、何の力も持たない彼が倒せるはずが無かった。

「……。」

走りに走った彼は大切な者を忘れていた事に気が付いた。
それは自分の唯一の家族である妹。
逃げる事に夢中で気が付かなかったが、妹を置いていく訳には行かない。
今までただ一人、自分の事を支えてくれたのだから。
彼は今までの来た道を戻ろうと身を翻した。しかし……

「鬼ごっこはもうお終いか？」

身を翻して目に映ったのはあの化け物。
人外の返り血を浴びて、そして右肩が食い千切られて身体中から鉄のような臭いを漂わせている。
その顔は無表情。しかし、その目はどこか嬉しそうに笑っているようだった。
まるでこれから鬼ごっこの『鬼』としての役割を果たせるかのように。

「あ……あぁ……。」

思わず彼は後ろに下がった。
その異様な人物……いいや違う。『異様な化け物』に恐れをなして。

「先程までの口調はどうした？具合でも悪いのか？」

化け物はそう言いながら彼との距離を詰める。
黒いコートの裾が揺れて血がピチャリと地面に落ちる。
左腕を少し前に出してダラダラと肩から血を流している右腕をブラブラとさせながら歩くその姿はまさに化け物。

「た……頼む、命だけは……。」
「……命乞い……か。一組織の頭が随分と情けない事をするな。」
まるで冷めたものを見るような目で化け物が彼を見る。
そして何か思いついたように黒のコートの懐から液体の入った注射器を取り出した。
「そ…それは……。」
「先程研究室のような場所で拾ってな……。これが人外法の薬だろう？」
化け物はそう言って注射器をクルクルと回す。
「お前に選択肢をくれてやる。今ここで俺に殺されるか……。」
そう言いながら注射器を回すのをやめて真剣な目つきで彼を見た。
「……俺を殺すかだ。」
「む……無理だ！私があんたに勝つ方法なんて「あるじゃないか」…え？」
「人外法の薬……君が人外になって俺と戦えばいいだけの話だろう？」
これを聞いた彼…雉一は驚いた。
まず彼の身体が人外の薬に耐え切れるかどうかが問題だ。
そして雉一は、何故この男は自分に生き残る機会を与えたのかと言うのも疑問に思っている。
だがしかし、本当にこれはチャンスである。
「…わかった。それを渡してくれ。」

雉一がそう言うと、壊は再び瞳に笑みを浮かべて注射器を投げ渡す。
それを掴むと、雉一は徐に注射器の針を自分の手首に向ける。
ガタガタと振るえながらゆっくりと……

「……ッ！」

針の痛みに顔を僅かに歪ませる雉一。額からは一筋の汗が流れている。
突然、本当に突然だ。雉一の身体から妖力が溢れ出した！

「ほぅ……。」

その力は間違いなく上級妖怪の中はあるであろう。
本人も、力が膨れ上がった事に若干驚いているようだった。
しかも妖力が溢れ出した以外は変化なしだ。

「は…ははは…やった。やったぞ！これで戦える！！」

雉一はそう言いながら握り拳を作って喜んでいた。
そのまま改めて壊の方に向き直った雉一は口角を吊らせながら壊を見下したような目で見る。

「これで私の勝ちは決まった！！！」

そう言いながら壊に殴りかかった……

ーーーSide壊ーーーー

まさか気紛れで持って来た注射器で敵がここまで強くなるとは思わなかった。
先程から俺の頬に拳が掠る度にヒュンヒュンと言う風を切る音が聞こえてくる。

「どうしたんだい!?私に反撃してこないのかい!?」

すっかり調子の良くなっている雉一が俺を馬鹿にしたようにそう言う。
そこまで言うなら……

「反撃ぐらいしてやる。」
「グァッ!?」

調子に乗っている雉一の首目掛けて回し蹴りを放つ。
確かにこいつの妖力は凄い。それこそ上級妖怪と同じくらいはあるだろう。
しかし、いくら妖力が多くても使いこなせなければ意味がないのだ。
先程の人外たちは何となく分かっていたようだが、コイツはなってから間もない為扱い方を知らない。
つまり、雉一の実力は実質先程の妖怪よりも妖力だけが若干高いだけになる。
まぁそれでも今の俺には少しきついが……

「ッ…!よくも!!」

そう言いながら突っ込んでくる雉一の攻撃をかわし、懐に仕舞っておいたナイフで腕を切りつける。

やはり左腕しか使えないと言うのは不便だな。
そう思いながらも攻撃の手を休めずに次々と切り付けて行く。
ただ、相手も多少ながら反抗しているようで中々急所に当らない。
チッ……腕輪を外せれば一瞬でケリが付くのに……

「この！！」

雉一がそう言いながら拳を振り下ろしてきた。
それをナイフの刃の横で受け止めて、そのまま右腕を振り回すようにして攻撃する。
所詮は悪足掻きのような攻撃だ。それでも俺が思いっきり振り回せばその辺の奴らは倒せる。
見事に脇腹に当った攻撃で雉一は一瞬顔を苦痛に歪めて動きを止める。

俺はさらに、左手で持ったナイフを雉一の頭に思いっきり突き刺し、顎を蹴り上げる。
少し回復した霊力で刀を創り、雉一の腕を切り下ろす。
雉一はそのままゆっくりと仰向けに倒れ、そのまま俺を睨みつけて来た。

「…ッ…ア……よくも……。」
「……黙れ。敗北者は勝者が許可しない限りは口を開くな。」

俺はそう言って雉一の首の横に刀の刃を当てる。

「……何か言いたい事は？」
「……最…後に妹…会いたかった…。それで…言い…たかった…

――――すまないと――――

雉一がそう言ったと同時に、俺は雉一の首を切り飛ばした。
後に残るのは雉一の身体と俺、そして飛んでいった雉一の首。
その首も、そこまで悪い表情ではなく、寧ろ何か吹っ切れたような顔をしている。
妹…か。

「……帰るとしよう……。」

後ろから感じる小さな気配を無視して、俺は屋敷から出る事にした
……

第１２７話：依頼終了（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。
今回は少し長かったかな？
途中からグダグダしちゃったし。
次回は、この屋敷を出た後の話を書こうと思っています。

第１２８話：スキマと帰宅とぬいぐるみ　（前書き）

スキマと言えば……？

第１２８話：スキマと帰宅とぬいぐるみ

雉一を始末した屋敷から出るために屋敷の出口まで向かう。
やはりと言うか何と言うか……右肩にいくら痛みを感じないとは言え欠けていると違和感があるな。
そう思いながらも亀に食い千切られた右肩を見る。
あの亀め……骨も噛み砕きやがった。歯がないのに大したものだ。

そんなくだらない事に感心していると、やっと屋敷の出口まで辿り着く。
屋敷から出た俺は眩しい朝日を浴びながら……ん？朝日？

「……しまった。時間を掛け過ぎたか……。」

どうやら既に朝日は昇っていたようだ。
まさかここまで時間が掛かるとは思わなかったな。
大体…６時くらいか？あそこが開くのは確か７時だったからまだ大丈夫だな。
それに考えてみたらこの状態で表通りを堂々と歩いたら通報される。
霊力も大して戻っていないので傷も治せない。
まぁ、勝手に再生するがそれでは時間が掛かるしな……

とりあえずは霊力でも妖力でもいいからある程度回復させて、傷を治してからここを出よう。
そう思い、近くにあった石に腰を下ろす。
この状態からして……３０分ってところだろう。
大体の時間の目安を頭の中で予想しながら空を眺める。

「あらあら、随分と酷い格好になっているわね？」

不意に聞こえたどこか胡散臭さを含んだ声。
声のした方向に目を向けると、何も無い空間が広がる様に割れる。
そこから日傘の先端が出てきて、次に一人の女が出てくる。
おかしなドアノブカバーのような帽子、外人とでも言うようなドレスに金髪の髪。
……ククク……まさかなぁ……

「また君に会えるとは思わなかったよ……」

その女はゆっくりとおかしな空間……スキマから出てくる。

「久しぶりね、壊。」
「あぁ、久しぶりだな……

――――――八雲　紫――――――

そこに居たのはかつての友人だった……

ーーーSide紫ーーー

久しぶりに会った彼は着ている上着が所々破れ、身体から鉄の臭い

を放っていた。

「本当に酷い格好ね？」

「そう言わないでくれ。こちらも色々と大変だったんだ。」

そう言いながら彼は少し溜息を吐く。

「まさか君が見ていることに気が付かないなんてな……。」

「それだけ貴方が弱くなって、私が強くなったんじゃないの？」

「確かに強くなっているな……。俺の期待通りだ。」

そう言いながら壊は少し目を細める。

その顔はどこか優しそうで、どこか嬉しそうで、そして楽しそうな顔だった。

「驚いたわね……貴方でもそんな顔できるのね？」

「？どんな顔だ？」

どうやら気が付いていないらしい。

なら私だけの心の内に仕舞っておこう。

そう思い、壊に近づいて壊と同じように近くにある石に腰を下ろす。

「それで？何故そんなにボロボロになっているのかしら？」

「……どうせここに何があったのか知っていたんだろう？」

そう言いながら私を半目で見てくる壊。

「勿論知ってはいたわよ？ただどんなものかはまだ見ていないのよ。」

「……そうか。文字通りただの人外だったよ。妖怪と大差なかった。

まぁ……少しは楽しめたな……。」

壊はそう言うと、何かに食い千切られたように失くなっている右肩を見た。

……そろそろ聞いてみよう。

「ねぇ、壊。貴方ここに……壊？」

いつの間にか横に居た壊がいなくなっていた。あれ？

探してみると、何故か鯉が泳いでいる池に右腕全体を浸して洗っていた。

「……貴方何してるのよ？」

「ん？あぁ、実は右肩に蛆が湧い「わかったから！もう言わなくてもいいわよ！」そうか。」

そう言いながら再び水でバシャバシャ右肩を洗う。

その度に、鯉が泳いでいる池に白い小さな蟲がウヨウヨと蠢いている。

正直言って気持ち悪いわね……たぶん、壊はそんな事思ってないだろうけど……。

ある程度洗い終わった壊は、右腕を軽く振って水を切った。

何やら壊の後ろにある池の鯉が水飛沫を上げながら暴れているけれど……

「……壊。貴方って、どこかずれてるわね。」

「失敬な。俺のどこかずれていると言うんだ。」

無自覚とは時に恐ろしい。壊に大して初めてそう思った。

「……まぁいいわ。それより壊。」
「何だ?悪いが腹が減ったなら我慢「違うわよ。」何だ違うのか。」
「はぁ……。もういいわ。それで壊、貴方ここでの生活に不満とかは感じているかしら?」
「……特にこれと言った不満は無いな。強いて言えば、いい加減に自分の力を取り戻したいと言うくらいだ。
だが簡単には戻らないのだから気長に「今よりも早く戻ってくる方法があるわよ。」…なに?」

私の言った事に対し、壊は眉を少し上にピクリと上げて反応した。
ふふふ……ホラ食い付いた。
スキマを開いて中から扇子を一つ取り出し、口元を隠すように広げる。

「私、昔から妖怪と人間の共存できる楽園を作っているのよ。」
「……共存…ね。本当に共存している奴は少ないだろうに。」
「そう言う事言わないでくれるかしら?前よりもかなりマトモになったのよ?」
「よかったな。それじゃあ続けてくれ。」
「……その楽園に『魔法の森』と言う場所があるわ。」
「『魔法の森』……。」
「えぇ。そこは森全体が常に瘴気で溢れているの。」
「瘴気か……。そう言えば昔暇つぶしで散歩していたら瘴気が充満している洞窟に迷い込んだ事があったな。」

壊は昔を思い出して懐かしそうにそう言った。……知らないわよそんなの。

「兎に角、少し不安はあったけれど貴方にとって瘴気は回復する一つに手段のはずよ。」

「…まぁな。他の妖怪たちなどの事は知らないが、俺にとって瘴気は失った力を取り戻すにはいい物だ。
もっとも、現代じゃ瘴気が充満している所なんてないし、あっても大した量じゃなかったからこの方法は諦めていたがな。」

瘴気と妖気とは違う。
本来は魔力を失った魔法使いなどが回復する時などにその身に受ける事で失った力を取り戻す事が出来る。
しかし、それは力の強い者やある程度瘴気に抵抗出来る者でなどの話だ。
普通の人間が中てられれば簡単に死ぬし、弱小妖怪でも中てられたら倒れる。
昔に壊が『妖怪じゃない。しかし人間でも神でもない』と言った事があり、もしかしたら壊が力を取り戻すのに丁度いいと思ったが予想通りだったようだ。

「……それで?そんな話をしたからには俺に何か対価があるはずだろう?」
「勿論よ。……って言っても、大した事じゃなわ。
それに、貴方だって考える時間ぐらい欲しいでしょうし、また日を改めて来るわ。」

そう言って扇子を閉じ、真横にスキマを作る。

「それじゃあまた会いましょう?」

そう言ってスキマの中に入って閉じる。

「ククク……紫、利用する相手はよく考えて置けよ……?」

最後に壊が何かを言った気がしたが、それを聞く前にスキマが完全に閉じきった……

ーーーSide壊ーーー

完全に閉じきった紫のスキマを確認して、再び右肩を見る。
先程まで蛆が湧いていたが池で洗ったのでもういない。
その蛆も、殆どが鯉と言う天敵の腹の中に収まっている。
しかし楽園か……。

「おもしろそうだな。」

楽園……本来なら無いはずの物をあそこまで嬉しそうに語られると見てみたくもなる。
本人は気付いていないだろうがな。

「……そろそろ行くとするか。」

先程までの肌寒さはなくなっており、太陽の位置も大分ずれている。
たぶん8時くらいだと思う。本当は7時半ぐらいに移動したかったのだが予想より話し込んだな。
霊力と魔力も大分戻った。妖力は、紫にバレないように少し貰ったので問題ない。
今頃は微妙なダルさが身体を襲っているだろう。

一方その頃、紫は

「な～んか妙に身体が重いわね……。」

スキマの中で茶を啜りながらそんな事を呟いていた。

と、まぁそんな訳だから今の俺は大分回復した。
勘違いされないために言って置こう。『戻った』のではなく『回復した』だ。
左手に霊力を込め、それを右肩に押し当てる。
するとメキメキと言う音と共に食い千切られていた右肩が少しずつ戻っていく。

身体の傷を治し、次に能力で身体や服にある『汚れ』と『血』を浮かび上がらせる。
すると、身体中から音も無く汚れや赤黒い血が出て、それが集まって濁った色をした球体が俺の目の前でプカプカと浮かんだ。
やはり便利だな。ついでだから古いコートを消し、以前と同じ新しいコートを創って羽織る。
そのまま屋敷門まで移動して能力で潜り込んで向こう側まで移動する。

とりあえず、この屋敷は金冶銅に何とかさせよう。
それに、あの気配も感じなくなっているからもうここにはいないだ

ろう。

「……いつからここまで甘くなったんだろうな……俺は。」

そう呟き、屋敷門を振り返らずにその場を後にした……

ーーーSide三人称ーーー

路地裏地を一人の少女が走る。
黒く長いロングヘアーに、動きやすそうな短パンと白のシャツ。
走り方が常人よりもしっかりしており、目からは涙を流して色白の肌に流れている。
その顔は悲しそうな、そして何かに憎しみを持ったような、そんな顔をしていた。

「…はぁ…はぁ…あっ！」

しばらく走ると、少女は小さな石に躓いてその場に倒れ込むように転ぶ。

「……ッ……！に…いさん……うっ…うぅ……！」

やがて少女は倒れたまま拳を握り締め、声を喉の奥から出すように泣き出す。
そして少女は泣きながら決意した。絶対にあの男を殺してやる、と……

ーーーSide壊ーーーー

現在マンションの自分の部屋の前で、ラッピングされた大きな箱を持ちながら立っている。
中には、帰りにあの服屋で買ってきた物が入っている。
俺はインターホンを押してしばらく待つ。

「どちら様ですか。」

しばらく待っていると扉越しに瑠璃の声が聞こえてきた。

「俺だ。紅鎖華壊だ。」
「……壊さん?少し待ってて下さい……。」

瑠璃がそう言うとガチャリと鍵の外れる音が聞こえたので扉を開けて中に入る。

「おかえりなさい。」

玄関で待っていたのは、絶を頭に乗せて笑顔になっている瑠璃。
しかし、目がまったくと言っていいほど笑っておらず、しかも光が消えている。

「今までそこに行っていたんですか?」

瑠璃がそう言いながら俺に一歩近づく。
何だろうか?身体中から冷や汗が流れているのだが……

「あ、あぁ。仕事だ。」
「へぇ……お仕事ですか。どうして私に何も言わずに行ったんですか？とっても心配したんですよ？」
不味い。何が不味いのか分からないが、俺の本能がそう告げている。
ここは……
「……すまない。気持ちよく寝ているようだったから起こせなかった。」
素直に謝っておこう。本当は寝顔なんて見ていないが、まずはこの場を凌げればそれでいい。
俺がそう言うと、瑠璃が溜息を吐いた。
「…あんまり心配させないで下さいね？せめて置手紙くらい置いて行ってください……。」
「次からはそうしよう。」
いつも通りの調子でそう言って来る瑠璃。
もしまたあんな状態になったら、次は手刀で気絶させて記憶を失くさせよう。
と、そうだ。
「瑠璃、お詫びと言ってなんだがコレを持ってきた。」
そう言ってラッピングされた箱を渡す。
瑠璃は首を傾げながらもその箱を受け取り、俺に許可を得て箱を開けた。
中には……

「……ぬいぐるみ……。」

そう人形。大きな熊のぬいぐるみだ。
実は瑠璃の服を買いに行った時に、女に何を上げたら喜ばれるのか聞いたら、『ぬいぐるみなんかどうですか～』と言われた。
瑠璃は俺の恩人だ。だからせめてこう言う礼だけでもしておきたいと思っていた。
ちなみに、このぬいぐるみの大きさは俺の身体半分より少し大きいくらいだ。つまり結構デカイ。
瑠璃を見ると、ぬいぐるみを持ちながら「はふ……」と言いながらニコニコとしていた。
喜んでくれたみたいだな……。

「瑠璃、朝食は摂ったか？」
「え？あ、まだです。あの……本当に貰っていいんですか……？」
「あぁ。今までの礼だと思ってくれればいい。」
「ありがとうございます！」

上機嫌だな。ぬいぐるみを抱きしめながら喜んでいる瑠璃をそっとして置き、俺は朝食の準備に取り掛かった……

第１２８話：スキマと帰宅とぬいぐるみ　（後書き）

はい終わりました。
今回は、瑠璃が少しヤンになりました。
そしてバ……紫が久しぶりに登場＆オリキャラっぽいのも出てきました。
あと何話か書いたら幻想入りにしようかなと思っています。

第１２９話：緑髪の少女　東風谷早苗（前書き）

今回はあの子が出てきますよ。

第１２９話：緑髪の少女　東風谷早苗

金治銅の依頼達成から約４日ほどが経った。
依頼達成で家に帰って午後頃に、金治銅のいる場所を探し回って報酬を手に入れた。
そして雑組の屋敷にある死骸なども全て金治銅に処理させた。
ちなみに、どうでもいい事だが報酬が５０００万から７０００万まで跳ね上がっていた。
まぁ、貰えるならそれでいいに越した事はないから気にしないがな。

……さて、そんな俺は現在、何をする訳でもなくソファーで寛いでいる。
我ながら駄目人間道まっしぐらだがそんな事は気にしない。もう人間じゃないからな。
それに紫もあの日から何か事情があるのか俺のところに来ない。
個人的には、早く『楽園』とやらに行って力を全て戻したい。
……行き方が分からないからどうしようもないが……。

何となく、横で俺の買ってきた熊のぬいぐるみを抱きながら寝ている瑠璃を見る。
先程まで俺と一緒にテレビを見ていたが、飽きて寝てしまった。

「……そうだな。何処かに出かけてこよう。」

誰が聞いている訳でもないのにそう呟いて立ち上がる。
念のために瑠璃が風邪を引かないように能力でタオルケットを創って被せて行く事にした。
さて、何か退屈しのぎになるものがあればいいな……

と、そんな訳で外に出てみたのはいいが何も無い。
確かに平和なのはいい事なのだが、せめて何か退屈しのぎになる物が欲しい。
ちなみに、今は大体1時くらいだと思う。

「ん？」

しばらく歩いていると、高校生くらいの男子集団が何かを取り囲んでいるように円になっているのが見えた。
少し近づいてみると……

「オラァ！金出せっつてんだよ！！」

何だカツアゲか。
周りの奴らは不満そうな顔をしているが、誰もが助けようとしない。
……まぁ、当然の反応だな。誰も好き好んであんな厄介事に首を突っ込もうだなんて思わないだろう。
俺も確かに暇だが、助けても特に退屈しのぎにさえなりそうにないのでスルーする事にした。

「あ、待ってください！」

が、逃げる事は許されなかった。
あろう事か絡まれていた奴が俺に話しかけてきたのだ。
しかもこの声……前に聞いた事があるような……
いやいやながらも仕方なく絡まれている奴の方向を見る。

「お久しぶりです。」

何と絡まれていたのは何時ぞや緑髪の神教誘導少女だった。
さて、行き成り自分たちの事を無視された不良たちは俺の方を見るのだが……

「あぁ！？何だテメェ、この餓鬼の連れか！？」

当然のように俺は巻き添えを食らう訳だ。
身長は俺の方が圧倒的に上なので、俺が不良を見下ろし、不良が俺を見上げながら睨みつけて来る。

「何とか言えやぁ！！」

そう言いながら俺の胸倉を頑張って掴んで来る不良Ａ。
何だか巻き添えを食らった事に腹が立ってきた……
不良Ａの後ろに居る他の不良たちは、俺と不良Ａを見ながらニヤニヤとにやけている。
不良Ａは俺が何も話さないのに腹が立ったのか、空いている手で拳を作り、俺目掛けて殴り掛かってきた。

「鬱陶しい。」
「なっ！？」

が、その拳は虚しくも俺の手によって受け止められてしまう。
俺は受け止めた拳をさらに強く握る。

「いたたたた！！！」

不良Ａが何とも情けない声を上げながら必死に振り解こうとするが、

化け物である（種族的な意味で）俺に力で敵うはずも無くただもがくばかりである。
さて……

「少し、お灸を据えてやらんといかんようだな？」

「すみませんでした！」
「「すみませんでした！」」

ボロボロの姿になりながらそう言って全力で土下座をする不良たち。
ふむ、やはり悪い事をしたら素直に謝罪させるのが一番だな。
周りの視線が気になるが大して気にする事でもないと思うので問題なし。

「それじゃ俺らはこれで帰らせてもらいます……。」

そう言いながら一番最初に俺に掴み掛かってきたリーゼントの不良Aが立ち上がる。
そしてそれに続くように他の不良たちも立ち上がった。
しかし、その足取りはどこか覚束（おぼつか）ない。……少し、やり過ぎたか？

「……少し待て。」

俺はそう言って不良たちを呼び止める。
俺に呼び止められた不良たちはビクリと肩をならして背を向けたま

ま立ち止まる。
立ち止まっている不良たちに向かって歩き出し、不良Ａの前まで移動する。
そして……

「受け取れ。」

財布から金を取り出して渡した。

「……は？」

不良Ａは何が何だかよくわからないと言った感じになり、他の不良たちも同じような顔をしていた。

「……治療費だ。それだけ有れば足りるだろう。」

そう言って無理やり不良Ａの手に２０万円を握らせる。
実は先程財布の金が残り僅かになっているのを思い出して５０万ほど下ろしておいた。
本当は１０万ほど財布に入れて残りは家に置いて置こうと思ったのだが……

そのまま身を翻してその場を後にし「待ってくれ！！」ようとしたが今度は不良Ａが呼び止めてきた。

「頼む！あんたの名前を教えてくれ！！」

……まぁ、別に教えても構わんだろう。

「……紅鎖華壊。覚えなくてもいいぞ。」

そう言い、今度こそその場を後にした……

「…あの……私は？」

「まったく……。」

そう言いながら俺の横で頬を膨らませる緑髪の少女。
不良たちを打ちのめした後、何故か知らないが勝手に付いて来た。
ちなみに、現在俺は公園のベンチで缶コーヒーを飲んでいる。

「悪かった。だからそんなに怒るな。」
「もういいです。」

さらに頬を膨らませる少女。
そう言えば今更の事なのだが、この少女は誰なのだろうか？

「……おい。」
「はい、何ですか？」
「考えてみたら俺は君の名前を知らないのだが？」
「……そう言えばそうですね。」

前にあの太った男（『第１２０話：新しい住まいを手に入れた！』を参照。）から助けた時は、信仰がどうのこうのでさっさと逃げて

しまったから名前を聞いていなかったし、もう会わないと思っていたので聞く気も無かった。
しかし、二度ある事は三度あるとも言うし次ぎ会った時のために名前を聞いておきたい。

「気が利かなくてすいません。私は東風谷早苗と言います。」

そう言って少女……早苗はニッコリと微笑んだ。
あまりにも純粋すぎる微笑。裏の事なんてまったくと言っていいほど知らないだろうな。
いや、知っている方がおかしいのだがな……

「俺は……紅鎖華壊だ。」
「はい。さっき自分で言ってましたよね?」

そう言えばあの現場にいたんだったな。
それなら名乗る必要なかったようだ。

「ところで一つ聞きたい事があるんですけど……。」
「なんだ?」
「どうしてさっき、治療費とか言ってお金を上げたんですか?」

……そう言えばそうだな。何故金をくれてやったのだろうか?
以前の俺ならそのまま放って置いて家に帰っていたが……

「……気紛れさ。ただの……な。」
「……気紛れであんな大金渡すんですね。」

呆れたような目で俺を見る早苗。
そんな目で俺を見るな。自分だって不思議でしょうがないんだから。

「ところで家の神社の神様を信仰しませんか？」
「行き成りだな。」
唐突に訳のわからない事を口走る早苗。確か前にもそんな事を言ったな。
「私、風祝（かぜはふり）として神社でお掃除とか色々してるんですけど、中々信仰が集まらなくって……。」
「……ちなみに祀っている神の名前は？」
「あ、それはですね……。」
早苗の神社で祭っている神の名前を聞いた俺は少し驚いてしまった。
どうやら退屈せずに済みそうだ……

第１２９話：緑髪の少女　東風谷早苗（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。
次回はあの神々が出てくる！？
それと、壊の『破壊の格印押し』を『破壊の烙印押し』に修正しました。

第１３０話：神との退屈しのぎ（前書き）

今回は平和です。
戦闘なんてありませんよ。

第１３０話：神との退屈しのぎ

今の時間帯を考えると大体2時くらいだろうか？
それくらいの時間に小さな箱を持った長身の男と、その男の隣を緑髪の少女が並んで歩く。
少女は男の方を見ながら何か楽しそうに話、男はそんな少女の話に相槌を打ったりしている。
言わなくても分かると思うが、紅鎖華壊と東風谷早苗である。

あの後、壊は何を思ったのか早苗が話していた神社に行くと言い出したのだ。
そして手ぶらでは悪いと思った壊は、近くで女性に人気と言われているケーキ屋でケーキを買い込んだ。
早苗曰く、神社の場所はここよりも少し離れた湖に囲まれた場所にあるらしい。

「それでですね――――――――って聞いてます？」

早苗が話すのを中断して壊の顔を半目で見上げる。

「ちゃんと聞いている。で、その神が団子を勝手に食べてどうしたって？」
「……えっと、それでですね――――」

壊の返却を聞いた早苗は満足したように再び話を始める。
この時、壊は早苗の案内する神社までの道のりで退屈する事は無かった。
それは横で楽しそうに話している少女が壊の退屈を紛らわせてくれ

るからだった……

ーーーSide壊ーーー

歩いてから大体30分経ったくらいだろうか？
やっとお目当ての神社の石段の前まで辿り着いた。
結構長いなぁ……

「どうかしたんですか？」
「……いや何でもない。早く行くとしよう。」
「？そうですね。」

少しめんどくさいと思いながら石段を登って行く。
はぁ……

と、何だかんだあって今度こそお目当ての神社に到着。
それにしてもあの頃と殆ど変わっていないな。
しいて言えば、参拝者が居ないので少し寂れたように見えるくらいだろう。
さて、ではさっそく……そう思って神社に近づく。

「……ん？」

賽銭箱の近くに何かある。これは……

「……注連縄……。」

どこかで見た事があるような注連縄が落ちている。

……何故？

「あ、それは……。」

「……ここの神様とやらの私物か？」

「はい……。」

「自分の物も管理できないなんて、相変わらず情けない神だな。」

「あはは……そうですね。……え？相変わらずってどう言う――」

早苗が何かを言い終わる前に、不意にこめかみ辺りに強い衝撃が走る。

そして俺はそのまま真横に吹き飛び、近くにあった柱に右の側面を強く打ち付けてしまった。

まずい、顔が上下逆さまになってしまった。

「早苗！！」

懐かしい声と共に早苗に駆け寄る一人の女。

紫色の変わった髪型に赤紫のような色と白い長袖の服に少しこげ茶色い黒のロングスカート。

胸には丸い鏡が付けられており、片手には何故か御柱を持っている。

「え？え？神奈子様？」

そう、もうずいぶん昔から会っていない俺の友人の一人、八坂神奈子だ……。

ーーーSide神奈子ーーーー

「まったく諏訪子の奴……。」

そう呟きながら神社の中を歩き回る。
昼寝をしていたらいつの間にか諏訪子が勝手に私の注連縄をどこかに隠してしまった。
まったく、暇だからってこんな悪戯をしなくてもいいだろうに……
しばらく歩き回っても見つからなかったので、もしかしたら鳥居の近くで遊んでいるんじゃないかと思って縁側から外に出る。
そして鳥居に向かう途中……

「ん？早苗？」

早苗が賽銭箱の近くで苦笑いしているのが見えた。
そして側面を向けるように、一人の男が早苗と向き合って立っている。
顔がよく見えないが……まさか……アレは……

「……ナンパ！？（違います）」

おのれ家の早苗に手を出すとは不届きな輩だ！
成敗してくれる！！
あまり残っていない神力で片手に出来るだけ小さな御柱を作って……投げる！！

それをモノの見事に男のこめかみ辺りに当たり、男はそのまま柱に身体を強く打ち付ける。

「早苗！！」

唖然としている早苗の名前を叫んで駆け寄る。

「え？え？神奈子様？」

私の存在に気付いた早苗はよくわからないと言った顔をしながら私の名前を呼ぶ。

「大丈夫かい？あれほど知らない男に付いて行ったら駄目だって言っただろう！！」

「……知らない男――――――。」

そう呟くと、早苗は額から大粒の汗を流しながら固まる。

可哀想に……そんなに怖かったか……。

「あ…あの、神奈子様……。」

早苗はそう言いながら私の後ろを指差した。？なんだ？

そのまま早苗の指に従うように後ろを振り向くと……

「随分とご挨拶だな、神奈子？」

顔が上下逆さまになっている長身の男立っていた……。

ーーーSide壊ーーーー

「悪かった……。」

現在神奈子が茶の間で俺に頭を下げて（俺が無理やり下げさせた）謝罪中。
何でも、俺が早苗をナンパしていると勘違いしたらしい。
親馬鹿という奴か？そもそも俺はナンパの仕方を知らないぞ。

「本当に悪かった。だからその首を戻してくれ。少し怖い。」
「……あぁ、忘れていたな。」

どうも何か違和感があると思ったら首が逆さまのままだった。
顔の横に手を添えて思いっきり回す。『ボキ』と言う骨の音を鳴らしながら首を元に戻していく。
元に戻すと、ちゃんと動くかどうか首を鳴らして確かめる。……問題なし。
神奈子を見ると、何故か俺から少し離れた位置に居た。

「何故離れる？」
「引いてるんだよ。」

そこまで堂々と言わなくてもいいと思うが？
そう思いながら敷かれている座布団の上に座りなおす。
俺を見た神奈子も同じようにちゃぶ台の前まで戻って座布団に座りなおした。

「まさかアンタにまた会うとはねぇ……。」

「何だ、俺に会うのが嫌か？」
「そんな事は言ってない。ただ、また会えると思わなかっただけだよ。」
「俺も思っていた。それにしても……」
俺はそう言いながら胡坐を掻いて座っている神奈子を見る。
……何と言うか……
「……随分と弱ったな？」
「ははは……仕方ないさ。信仰も集まらないし。」
「まぁ、今の時代で神を信じる奴なんてそんなにいないだろうからな。
それに見えないものを信じろと言うのも無理な話だろう。」
「そうなんだよ。今じゃ神より科学の時代だからね。
私たちに対する信仰もどんどん減っていくから、神を見せろと言われても神力が少なくて見せられない。」
「落ちたものだな。」
「今のお前には言われたくないけどね。そっちこそ随分と弱くなってるじゃないか。」
「あぁ……少し、な。遊んでたら封印された。」
「くだらない理由だねぇ……。」
そんな呆れたような目で俺を見るな。
ちなみに、早苗は俺が持ってきたケーキを持ってどこかに行った。
諏訪子は未だにどこに居るかわからない。
「……なぁ、神奈子。俺が会いに来なくなって諏訪子はどんな感じだった？」
「別に……時々あんたの話をしたりいつになったら会いに来るの待ってたりとかそんな感じだった。」

「そうか……。それならいいんだ。」

仮に泣き喚いていたとかだったら少し困るからな。

「神～奈～子～。」

はて、この小さな子供のような声は……

横にある障子が音を発てて開く。そこに居たのは少女。

金髪の髪に所々蛙が描かれている壺装束のような服。

ついでにニーソックス。そして何よりも目に付くのはおかしな帽子。

少女は部屋に入ってきて俺の姿を確認すると……

「……神奈子、幻覚が見えるからちょっと休んでくる。」

と言って身を翻してその場から……いやいや。

「待て待て本物だ。」

俺がそう言うとピタリと止まり、ゆっくりと顔をこちらに向ける。

そしてそのまま勢いよく飛びついて来た。

成すすべなく畳の上に背中と頭を打ち付ける。

その拍子に帽子が俺の頭の上を通り過ぎて後ろに落ちた。

「……本物だよね？わたしが見てる幻覚じゃないよね？」

「もう少し自分の目を信じた方がいいと思うぞ。」

「本物……会いたかったよぉ……。」

何故か泣き出してしまった諏訪子。こういう時は泣かせて置けばいいか……

そう思い、俺は服を濡らされながらも泣いている諏訪子の頭を撫で

続けた……。

「で、結局こうなったと。」

何がどうなったかと言うと、諏訪子が俺の膝の上で寝ている。以上。
いや、まぁ別にそこまで重くは無いから気にする事でもないと思うのだが帰る時がな……。

「諦めるんだね。」
「そうですね。諦めてください。」

先程ケーキを持ってきた早苗と神奈子が無情にもそう告げる。
……どうせその内起きるだろうから、起きるまでの間時間を潰そう。

「それにしても……壊さんと神奈子様たちって知り合いだったんですね。」
「ん、まぁな。神奈子より諏訪子との方が知り合ってから長い。」
「そうなんですか神奈子様？」
「そうだよ。」
「へぇ……じゃあ出会いは？」
「……諏訪子とは寝ている時に叩き起こされたのがきっかけだな。
その後に色々あって一緒に住む事になった。
神奈子は……大和の神が諏訪子の王国の使者として行ったのがきっかけか。」
「あの時は焦ったよ。まさか神の前で堂々とあんな事をするんだから。」
「あんな事ってなんですか？」

「……トヨウケビメとスサノオを殺しかけたんだよ。こいつは。」

そう言いながら何故か溜息を吐く神奈子。

懐かしいな……あの時はトヨウケビメに腹が立ったから殺してしまおうかと思ったんだったな。

スサノオに関しては、襲い掛かって来たから返り討ちにしたと言ったところか。

「で、あの後大和の国が諏訪子の国に攻め入って戦争になった。」

「そうだったねぇ……あの戦争で一番厄介な兵はあんたのあの人形だったよ。」

「お人形ですか？」

「あぁ。まぁ、その人形を使っても神奈子には勝てなかったがな。」

まさか絶量産型があそこまでやられるとは思っていなかった。

「へぇ……じゃあ最後に勝ったのは神奈子様なんですね。」

「残念ながら最後に勝ったのは俺だぞ。」

「え？」

「神奈子が勝った後、諏訪子の敵討ちの意味も込めて少し遊んでな。そしたら神奈子が気絶して戦場で俺が残った。」

「へ、へぇ……。」

何だか知らんが早苗が俺から目を逸らして神奈子の方を見ていた。

その神奈子も、何かを悟ったように早苗と俺から目を逸らして明後日の方向を見ている。

どうしたんだろうな？

「ん…んぅ……。」

不意に俺の膝の上で丸まっていた諏訪子がモゾモゾと動き出した。

「んぇ……壊……おはよ～……。」

絶対に寝ぼけてるな。早苗も神奈子も苦笑いしてるぞ。

未だに丸くなっている諏訪子を持ち上げてキチンと膝の上に座らせる。

ついでに近くに落ちている諏訪子の帽子を拾って被せる。

「……何だか親子みたいですね。」

「本当にねぇ……。」

それは俺が年寄りだと言いたいのか？否定できないのが悔しい。

ーーーーSide三人称ーーーー

鳥居の前で一人の男と二人の少女と女が立っている。

「じゃあな。」

「うん、また来てね。」

そう言いながら諏訪子は手を振る。

「次は何か別の物を持ってこよう。」

壊はそう言って石段を降りる。

その瞳には退屈をしのげるものを見つけたと言う感情を浮かべなが

ら……

「非道いですね。私に会いに来てくれないなんて……。次は私にも会いに来てくださいね？」

誰にも聞こえない声で、白い着物の女がそう呟いた……

第１３０話：神との退屈しのぎ（後書き）

と、そんな訳で終わりました。
アマテラスを待っていた方々、申し訳ありません。
今回は彼女の出番はなかったです。
だって出すタイミングが掴めなかったんだもん！
まぁ、出さないと言うのも可哀想なので、少しだけ出したけどね。

第１３１話：思い出作りの遊園地（前書き）

今回で、瑠璃の出番はしばらくないと思います。

第１３１話：思い出作りの遊園地

「暇だ……。」

そう呟きながら武器やら道具やらを創って投げたりして遊ぶ。
実は今しがた仕事を終わらせて来たところだ。
内容は『スパイが紛れ込んでいたので始末して欲しい。方法はそちらに任せよう。』と言う内容だった。
こちらに任せると言って来たので、適当に一ヶ月ほどの記憶を消してやった。

「壊さｎ『スコンッ！』……。」

後ろにいた瑠璃が話しかけたので振り向いたら、手が滑って持っていたナイフが瑠璃の顔の横を通り過ぎて壁に刺さった。
周りに人が居るときにこういう遊びをするのはやめよう。
能力で創った武器を全て消して呆然と立ち尽くしている瑠璃を見る。

「……で、どうかしたのか瑠璃？」
「……何事も無かったかのような態度をとらないで下さい！
当ったら死んじゃうかもしれないんですよ！？」

そう言いながら俺をバシバシと叩いてくる瑠璃。まったく痛くないな。
ちなみに、ぬいぐるみは部屋に置いて来たらしい。

「……で、どうした？」
「……まったく反省の色が見えませんね。

えっと……実は私、そろそろ帰らなくちゃ行けないんです。
それを伝えておこうかと思って……」

……まぁ、結構長く……一ヶ月近くここに居たからな。

「それはいつだ？」
「明日です。」

急だなぁ……そろそろだって言うから後2～3日はあると思ったんだがなぁ……。

「よし、なら出掛けるぞ。」
「……はい？」
「最後の一日くらい何処かで思いっきり楽しめ。」
「え！　ちょっと壊さん！？」

そう言いながら瑠璃を担いぐ。どこに行こうかな……

「そんな訳で遊園地に来た。」
「誰に言ってるんですか？」

周りを見渡せば、楽しそうに走り回っている子供たちや頬を赤くしながら照れ臭そうに手を繋いでいるカップルなどがいる。
やたら子供が多いと思ったら、今日は日曜日だったな。

「さて瑠璃よ。」

「何ですか？」
「……どうすればいい？」
「……え？」
「いや、実は遊園地なんて一度も来た事が無いからまずは何をすべきかわからなくてな……。」
生まれてこのかた、一度も遊園地なんて来た事が無い。
前世でも、仕事をするか家でＰＣ弄ってるかくらいしかしてなかったからな。
瑠璃はそんな俺の質問に対してジト目で見てくる。
「……はぁ……。壊さんって、どこかずれてますね。」
失敬な。
「とりあえず、壊さんの好きにして下さい。
私もあんまりこう言う場所は来た事が無いので少ししかわからないです。」
少なくとも俺より知識があると言う事だな。
まぁ、いいだろう。そうだな……
「あれに乗るぞ。」
俺はそう言ってゆっくりと歩みだす。
その後ろを瑠璃がトコトコと付いてくる。さて……瑠璃が楽しめればいいがな……

何故か一番手前の席が空いていたのでそこを詰めて座る。
その横をやや緊張した瑠璃が座り、後ろに他の乗客が座る。
そして安全バーがゆっくりと降りてきて俺たちが落ちないようにガッチリとホールドすると、そのままスィ～と乗っている物が前に進む。
やがてそれがある程度進みレールの盛り上がった高い部分に辿り着く。
そしてそれが徐々に落下して行き……
さて、ここまで言えば俺たちが何に乗っているかわかるだろう。そう、これは……

『ギャァァァァァ！！！！（↑その他』
「キャァァァァァ！！（↑瑠璃」
「……（↑俺」

ジェットコースターである。目に付いたので乗ってみた。
ちなみに１４０？のお子様は乗れませんと書いてあったが問題なかった。

「キャァァァ！！」

横にいる瑠璃に目を向けると、目を硬く瞑りながら楽しそうに叫んでいる。
いや本当に楽しそうだ。何が楽しいのかわからないが楽しそうだ。
グルングルンとレールにそって回転し、やがてゆっくりと元の場所に戻った。
ジェットコースターから降りて瑠璃を見てみると、少しホッとしたような顔になっている。

「どうだった？」
「少し怖かったけど楽しかったです！」
何ともまぁ満面の笑みでそう答えてくれた。……まるで子供のようだな。
「……他の所も回るぞ。」
「はい♪」
瑠璃のテンションが、いつもより高い気がしないでもないが気にする事じゃないだろう。
それに……
「……俺も少し楽しいのかもしれないしな……。」
「？　何か言いましたか？」
「いや、何でもない。それより次はあそこだ。」
俺はそう言って瑠璃と共に近くにある不気味な屋敷に向かった……
不気味な屋敷……もとい、お化け屋敷を攻略し、その他色々な物で遊んで満足した俺と瑠璃はそのままベンチまで移動した。
途中で瑠璃がクレープを物欲しそう目で見ていたのでそれも買ってきた。
ちなみに俺は買っていない。今は食いたい訳じゃないしな。

「んぐんぐ……。」

クレープを包んでいる紙袋の部分を両手で持ちながらチマチマと食べている瑠璃。
どこか嬉しそうな顔をしながら食べ、クリームが口元に付いている。

「瑠璃。」

俺が瑠璃の名を呼ぶと、瑠璃は食べるのをやめてこちらを見る。
こちらを見た瑠璃の口元に付いているクリームを能力でハンカチを創るのがめんどくさかったから親指で軽く拭き取った。
とりあえず、拭き取って指に付いたクリームを舐める。ちと甘すぎるな。

「あ……。」
「ん、どうかしたか？」
「い、いえ……／／／」

そう言いながら顔を赤くして再びもそもそとクレープを食べ出す瑠璃。
……？　何故顔を赤くしているのだろうか？
まぁ、大して気にする事でもないだろう。
それよりも……大分ここで遊んだみたいだ。

空が少し紅く染まっている。
それに最初に来たときと比べて客も少なくなっている。
何か乗れても後一つくらいだな。
横を見ると、瑠璃がクレープの袋をゴミ箱に捨てていた。

そうだな……

「瑠璃、最後にあれに乗るぞ。」

お互い向かい合うように座り、ガラスの窓から外の光景を見る。
外に見えるには遊園地全体とポツリポツリと残った客、それに真っ赤な夕日。
何に乗っているか何となくわかると思うが、観覧車である。
眺め自体は中々のものだ。

「奇麗ですね……。」

瑠璃がそう言いながら少し微笑む。
……どうやら瑠璃の最後の一日は中々に充実した日だったようだな……

「……そうだな。」

そんな瑠璃を見て、俺は内心少し嬉しかったのかもしれない……

第１３１話：思い出作りの遊園地（後書き）

はい終わりました。
その内『あのキャラについて！！』みたいな質問コーナーを作りたいと思っているので、何か質問がある人は今の内にどうぞ。
活動報告にもその事を書いておきますので、そちらからも質問をお書き下さい。

第１３２話：雨と散歩と酒と（前書き）

ＰＶ１００万　ユニーク１０万
になってた。これって凄いですよね？
こんな小説を読んでくれてありがとうございます。
今回は、あのオリキャラが出てくると思います。

第１３２話：雨と散歩と酒と

瑠璃が帰ってから大体３日ほどが経った。
現在外は雨が降っている。しかも小降りではなく土砂降りの大雨だ。
天気予報では今日は雨が降らないと言っていたので雨が降ったせいで干していた洗濯物が少し濡れてしまった。
まぁ別に構わんがな。衣服だって能力で創ればいいし。

「……そうだ、出掛けよう。」

自分でも何を馬鹿な事をと言いたくなるが、暇なのだから仕方ないだろう？
玄関まで移動して靴を履き、能力で真っ黒な蝙蝠傘を創る。さて……

「行ってくるか……。」

ザァザァと雨の中、蝙蝠傘を差しながら当ても無く歩く。
言うなれば散歩だな。少し湿った土の匂いが鼻に、蝙蝠傘に当たる大粒の雨音が耳に入る。
道にはあまり……と言うか殆どと言っていいほど人間は居ない。
たぶん子供たちはこんな日にも学校に行くんだろうな、と少し心で感心してしまう。

ちなみに時間帯は大体１１時くらいだと思う。
家にいた時に時計を見たら１０時４９分くらいだったからな。

そんな事はどうでもいい。
雨のせいで視界がかなり悪いが、別段気にする事でも無いと思ってそのまま歩く。

個人的には雨は嫌いじゃない。寧ろ好きだといってもいい。
雨の日は飛び散った血も、手で片付けられないような細かな肉片も、一緒に洗い流してくれる。
それに雨の音を聞きながら過ごすと言うのも案外いいものだ。

「……喉が……渇いたな。」

誰にも聞こえる訳でもないのにそう呟く。
公園は……いつもよりゆっくり歩いていたからもう少し先だな。
土砂降りの雨で薄っすらとしか見えない道を歩く。

公園に着いた俺は、まず真っ先に自動販売機に向かう。
喉が渇いているから何か飲み物を買いたい。
自動販売機まで来ると、財布から１２０円を取り出して金を入れる。

「はろ～。」

不意に後ろから聞こえた聞き覚えのある声。
が、しかし、その声に反応するのがめんどくさかったので無視して何を買うか選ぶ。
たまには違った物を飲むのもいいな……

「ちょっと。無視しないでくれるかしら?」

「俺に何か用か？　紫。」

後ろを振り向かずに話し掛けてきた本人、紫にそう問う。

「冷たい反応ね。ゆかりん悲しいわ。」

「……突っ込んでやらんぞ。」

自分の分を買って再び財布から金を取り出して入れる。

そして『へ～い茶だよ～』とふざけた名前のラベルの貼られているペットボトルの茶のボタンを押す。

それを取り出すと同時に、背を向けたまま紫に軽く投げつける。

後ろから微かに『パシッ』と何かを掴んだような音が聞こえたので落とさないで取れたようだ。

「せめて何か一声掛けてから投げてくれる？」

「取れたんだから問題ないだろう。」

そう言いながら俺はやっと後ろを振り向く。

そこに居たのは、いつも持っている日傘を差しながら少し頬を膨らませている紫。

片手には先程俺が投げた茶の入ったペットボトルを持っている。

俺は先程自分の買った缶の蓋を開ける。そしてそれに口を付けて飲む。

「貴方でもそう言う物飲むのね。」

紫が少し意外そうな顔をしながらそう言う。

今日俺が買ったのは缶コーヒーじゃない。『オレンジジュース』だ。

「……まぁ、気分さ。たまには別の物を飲むのもいいと思ってな。」

「そう。」

紫はそう言いながらペットボトルの蓋を開けて茶を飲む。

さて……

「紫、君が俺の元へ来たという事はやはりあの件だな？」

「……えぇそうよ。貴方を迎え入れる準備が出来たわ。」

少しだけ紫の表情が胡散臭い笑みになった。

……あまりいい予感はしないな。

「……で、いつ頃に行ったらいいんだ？」

「いつでもいいわよ。ただ、行くなら私に一声掛けるか何かして。そうしないと、前の貴方ならともかく、今の貴方じゃ結界を越えられないわ。」

……結界……か。

「その結界とやらは『こちら』と『そちら』を隔てているのか？」

「意外と頭の回転が速いわね？」

「……一応褒め言葉として受け取っておこう。」

予想だったがな。

普通に考えてみたら、紫の言う『楽園』はこちら側では見えない。

ならば何故見えないのか？それは何かしらの壁があるからだ。

それもとびっきり丈夫で壊れにくくてかなりの分厚さを持った壁。

「まぁ、そんな事はどうでもいい。いつ行くかはこちらで決めていいんだな？」

「えぇ。行く時に言ってくれればそれでいいわ。何なら今から行く

と言うのはどう？」

……今すぐに行ってもいいが……

「……いや、やめておこう。もう少しここで過ごしてからそちらに行く。」

前世での名残があるのか、まだこの時代にいたかったので何となくそう答える。

俺がそう答えると紫は『そう？』とだけ答えてスキマを開いた。

「それじゃあ、私はそろそろ御暇させてもらうわ。」

「あぁ。またな。」

「えぇ。」

紫はそう言い、スキマの中に入る。

そしてスキマの中で俺を見て微笑むと、そのままスキマを閉じた。

それを確認した俺は、再び持っている缶を口につけた……

あの後、缶ジュースを飲み終えて再び当てもなくぶらぶらと歩いていた。

そして気が付けば守矢神社に辿り着いていた。……何故？

疑問に思いながらも、石段をゆっくり登る。雨が降っているから滑らないようにしないとな。

やがて鳥居まで辿り着き、その鳥居を潜って神社まで近づく。

「……金でも入れていくとするか。」

蝙蝠傘を閉じ、懐から財布を取り出して適当に小銭を選ぶ。
水で口を濯いだりとか参拝らしくしてからの方がいいんだろうが、生憎と俺は願いを言いに来たわけじゃない。
それに、神頼みはあまり好きじゃないからな。

「……諏訪子たちはいるかな……。」

そう呟き、そのまま神社の中に……入ろうと思ったがやめた。
こんな土砂降りで訪問するのはさすがに気が引ける。
そう思い、賽銭箱に背を向けるように身を翻して「あれ、壊？」……。

「……何故お前は俺の行動を阻止するんだ、諏訪子？」
「何言ってるのさ。」

呆れた様な声が後ろから聞こえたので、再び賽銭箱に向き直る。
そこには神社の中から出て来たであろう諏訪子が居た。

「で、こんな雨の中どうしたの？」
「あぁ、ただの散歩だ。それで偶々ここに辿り着いた。」
「……こんな土砂降りの中散歩なんて変わってるね……。」
「雨の中の散歩と言うのも、中々いいものだぞ？」

俺はそう言いながら少し諏訪子に近づく。……傘が邪魔だな。
片手に持っている傘が鬱陶しくなったので消す。

「相変わらず便利な能力だね～。って言うか、力が弱くなってても

使えるんだね。」
「まぁな。……諏訪子、俺は自分が弱体化している事を君に話していないと思うんだが？」
「神奈子に聞いたんだよ。それよりさ、上がってかない？」
「……そうだな。迷惑でなければ上って行く。」
「ん。」

諏訪子は満足そうな顔をして頷くと、そのまま神社の中に入って行く。
そして俺も、それに続いて神社に入った……

「さぁ飲め！！」

で、何故か神二人の酒の相手をさせられてしまった。
今回、場所は縁側ではなく茶の間だ。……俺は縁側でも構わないんだがな……。

「ほらほら～。」

そう言いながら横に座っている諏訪子が俺に盃を押し付けてくる。
どうせ粘っても無理やり飲まされるだろう。
そう思い、仕方なくそれを受け取って一気に飲み干し、卓袱台に置く。
諏訪子が『おぉ！』とか言いながら軽く拍手しているが気にしない。
そもそも盃一杯の酒なんて大した量でもない。

「神を信じている信者が見たら別の意味で泣きそうだな。」
「大丈夫、どうせ見えないし。」

ふざけた事を抜かしている諏訪子を放置し、卓袱台の上に置かれている肴の『ソフトさきいか』なる物を摘んで口に入れる。
それにしても、いい加減に眠ってくれないだろうか……

「「ｚｚｚ……」」
「やっと眠ったか……。」

畳の上で寝転がっている神二人。
あの後何度も酒を飲まされたのだが、結局この二人が先に酔い潰れてしまった。
……少し熱いな……。それに頭もボーっとする。

「……冷やして来よう。」

そう呟いて立ち上がり、そのまま茶の間のすぐ近くにある縁側へと向かう。
障子を開いて外の様子を見ると、先程よりはマシになったが、まだ雨は降っていた。
縁側に腰掛、雨が地面に落ちる音を聞きながらゆっくりと目を閉じて休憩する。
すると……

「お久しぶりですね。」

どこかで聞いた女の声が聞こえ、首に何かが絡み付いて背中に越し

重みを感じる。
目を開いて首に巻き付けられているものを見る。
それは白い着物の袖を纏っている腕。そして俺は自分の後ろにいる者の名前を呼ぶ。

「……久しぶりだな、アマテラス。」

後ろから俺に抱き付いているのは昔からの神の友人、アマテラス。
アマテラスは俺の背中から離れると、俺の横に座り酒の入っているであろう徳利と『ソフトさきいか』を俺と自分の間に置いた。
……それ、茶の間に置いてあった奴じゃないか？

「どうぞ。」

アマテラスはそう言いながら盃を俺に私、それに酒を注ぐ。
俺は特に何も言わずにそれを飲み干し、もう一つの置いてある盃をアマテラスに渡して酌をする。
俺が酌をするとアマテラスは微笑んでから盃の酒を少し飲んだ。

普通なら、ここで感動の再開とか何とかで盛り上がるべきなんだろう。
しかし、俺はどうやったらそう言う風になるのかまったくと言っていいほど分からない。
月で永淋に会った時も、永淋が泣きながら俺に抱きついて来たので俺も同じようにやっただけだ。
（※詳しくは『第２０話：え、なんでこんなとこにいんの？』を参照ください。）

「……私は貴方が封印されていると言う事を知っておりました。」

不意にアマテラスがそんな事を呟いた。

「風の噂……と言うのでしょうか？
陰陽師たちが変わった服装の裏切り者を始末したと言う話を聞きました。
全身黒一色の服を着、その髪は白く、その瞳は美しい紅色で長身の男。
そこで私は何となく思いました。それは貴方の事では？と。」

……美しいかどうかは別として、確かに今の俺の特徴と一致してはいるな。

「……私は貴方が封印されていると知った時も助ける事が出来ませんでした。
それがとても……とても悔しかったです。」

そう言いながらアマテラスは、持っていた盃を膝の上に乗せるようにして俯いた。
……要はアレか。俺が封印されてるのを知ったのはいいがどうする事も出来なかったから悔しいと……。

「……なぁアマテラス。君は俺が封印されたと知った時にどうした？」
「え？」

俺が言った事に対して少し呆然とするアマテラス。
しかし、それはすぐに悲しそうな何とも言えない表情になる。

「……すぐに貴方が封印されている場所を探しました……。」
「……何だ、充分じゃないか。」

俺はそう言いながら盃に酒を注ぐ。

「俺はな、アマテラス。
自分で望んで封印されたようなものだ。
だからこそ、誰かに助けて貰おうなんて思っていなかったし、誰かが助けてくれるなんて思っていなかった。
だがお前は俺が封印されている時に探してくれたんだろう？
それなら、お前はある意味では俺を助けてくれているんじゃないか？
誰からも気付かれないで、誰からも助けてもらえない。
何もない、俺を封じる鉄格子のような牢獄と真っ暗な世界。
そんな世界に封印された。
本来なら誰もが探す事すらしてくれないような場所でも、お前は俺を探してくれたんだろう？」

俺はそう言いながら盃に入っている酒を少し飲む。

「……けれど私は、貴方がどんな場所に封印されているか知りませんでした。」

顔を俯かせたままアマテラスはそう答える。
あれだな、話が噛み合っていない気がしないでもないが……
たぶんアマテラスの感情が揺れているんだな。

「知っていたらそれはそれで怖いな。
ただ純粋に誰かを助けたいと思っていたなら場所なんて知る必要もない。
……どれほどの間俺を探していた？」
「……５００年です。」
「そうか。……そんなに長い間俺みたいな化け物を探してくれたの

か。それだけでも充分だ。」

俺はそう言いながら盃を置き、片手をアマテラスの頭に乗せる。
アマテラスは一瞬ビクリと身体を震わせたが、俺はそれを気にせずに思った事を言った。

「……ありがとう。」

俺がそう言うと、アマテラスはゆっくりと顔を上げた。

――――泣いていた――――

涙を流しながらただただ俺を見ていた。
……さて、こう言う時は……

「……これくらいしか出来んが……」

そう言いながらアマテラスの頭を胸に寄せる。

「……泣きたいなら泣け。」
「……ッ！私は……貴方を……助け……たくて……ッ！
でも……助けられなかった……から……悔しくって……ッ！」

それが合図かのように、アマテラスは自分の感情を吐く。
そして静かに声を出して泣いた……

「……寝た、か。」

泣き疲れたのかアマテラスは、俺に身体を預けるようにしながら寝息を発てている。
辺りは既に薄暗くなっている。それにしてもなぁ……

「……俺程度が封印されて助けられなかっただけで、そこまで後悔するものか？」

助けられなかったと言うのは普通に封印を解けなかったと言う事だろう。
そもそもアマテラスは俺が封印されている場所を見つける事が出来なかった。
それを見つけるために５００年……か。晴明も中々凄い事をするじゃないか。

「……なぁ、アマテラス……。」

俺の胸で顔を埋めているアマテラスの頭に手を乗せ、撫でながら名を呟く。

「……一体何が君を５００年も頑張らせたんだ？」

既に雨は止んでいる。まるで今のアマテラスの心のように……

第１３２話：雨と散歩と酒と（後書き）

……壊って、こんなカッコいいキャラだっけ？
それと途中から訳わかんなくなったですよね？
しかもグダグダしてたましたよね？責めないでくださいね？
もう少し現代入りしてから次に入ります。
だからもう少し待っててください。

第１３３話：苦労人？いいえ、苦労狐です（前書き）

タイトル通り今回はあのお方が！

第133話：苦労人？いいえ、苦労狐です

『チュン、チュン。早く焼き鳥にしてくださいでチュン。』

鳥たちの声が聞こえ、少しずつ閉じていた目蓋を開く。

「……ん……朝、か……。」

どうやらあの後結局寝てしまったらしい。

胸に重みを感じるので目を向けると、そこには未だに寝息を発てているアマテラスがいた。

と言うかアレだ、縁側で、しかもずっとこの体勢で寝ていたと言う事が凄いな。

首を2～3回グキグキと鳴らし、胸元で寝息を発てているアマテラスの肩を揺らす。

「アマテラス、起きろ。」

「ん～……駄目です……それは私の豆大福……。」

「どんな夢を見ているんだ。いいから起きろ。」

おかしな寝言を呟いているアマテラスの肩を只管（ひたすら）揺らす。

やがて、アマテラスがゆっくりとその目蓋を開いた。……半目だな。

「……おはようございます……。」

「おはよう。起きて早々悪いが、退いてくれないか？」

俺がそう言うと、アマテラスはしばらくボーっとしていたが、ゆっくりと身体を起こして俺から離れた。

とりあえず、俺も身体を起こして若干着崩れしているアマテラスの

着物を正してやる。
女は身嗜みを気にしなければいけないらしいからな。

「ちゃんと服を正せ。」
「あ……すいません……。」

起きたばかりだからまだ頭が覚醒していないのだろう。
未だに半目だ。……まぁ、後は一人でやらせよう。

「一度顔を洗って目を覚まさせて来い。」

俺はそう言って立ち上がり、その場を後にする。
一泊させてもらったんだから、礼くらいはしないとな……

各自手を合わせて「いただきます」と言い、各々手に持った箸を朝食につける。
一泊させてもらった礼に、掃除や朝食の用意などと言った家事全般をやらせてもらった。

「久しぶりに食べるけど相変わらずおいしいね～……。」
「早苗のも美味いけど、こっちも美味い。」

お前ら自分で作ろうとは思わないのか？

「そう言えばアマテラス、アンタはいつ来たんだい？」

不意に神奈子がアマテラスにそう聞いた。
味噌汁を啜っていたアマテラスは一旦椀を置いた。

「昨夜、貴方たちが神酒を飲んでいた時からです。」
「って事はわたしたちがお酒飲んでいる間ずっと見てたの？」

アマテラスは「はい」とだけ答えると再び味噌汁を啜る。

「ならどうしてその時入って来なかったんだ？」

神奈子が諏訪子に続くようにアマテラスにそう質問する。
それもそうだ。

「それは……。」

アマテラスがまた卓袱台に椀を置き、今度は俺をチラリと見る。

「二人きりでお酒が飲みたかったからですよ？」

……何だろうか。満足そうな表情をして機嫌が良さそうなアマテラスとは対照的に、近くに居る二人の顔には影が出来ていて真っ黒なオーラが感じられるのだが……
しかも何故か半目で俺を見ている。

「……何だその目は。」
「「別に」」

そんな感じで朝食の時間は過ぎていった……。

「……そろそろ帰るか……。」

茶の間で寛いでいたが、いい加減に帰った方がいいと思い立ち上がる。

「ん～？もう帰るの～？」

俺が立ち上がると、先程からゴロゴロと寝転がっている諏訪子が顔を上げてそう尋ねてきた。

……やはり心から神を信仰しているものが見れば泣きそうだな。

「あぁ、いつまでもここに居る訳には行かないからな。」

絶たちも家に置いて来たままだし、ひょっとしたら依頼が来ているかもしれない。

まぁ、依頼に関しては俺の気分でやるかやらないか決めるので問題ないな。

「もう少しここに居てもいいんだぞ？」

「遠慮しておこう。」

神奈子の言う事に対して即答し、そのまま神社の外に出る。

俺の後を諏訪子がトテトテと付いてくるが気にする事でもない。

ちなみに、今更だがアマテラスは帰った。

と、そんな事はどうでもいい。神社の鳥居まで辿り着くと、未だに俺の後を付いて来る諏訪子の方を向く。

「それじゃあな。」

「うん。またね。」

最後に諏訪子の頭を軽く撫で、俺は鳥居を潜って家に石段を降りた……

ーーーーSide苦労狐ーーーー

「……はぁ……」

紫様にも困ったものだ。

暴れまわった妖怪が結界に微かにだが傷をつけてしまい、傷が付けられた結界の修復が『めんどくさいから』と言う理由でその修復を私に任せるのだから。

「……1000年位か。」

あのお方……紫様の式になったのはもう1000年も前の話だ。

私があのお方と戦って負けた時に、式にならないかと問われた。

あの時はあのお方の力に感激し、そして憧れ、自ら紫様の式になった。

ただ一つ、疑問に思うことがある。それは……

――――何故あの時紫様と戦ったのか？――――

それがわからない。
頭の中でその記憶だけがスッポリと抜けていて、いくら思い出そうとしても思い出す事が出来ない。
確か都に攻め入ろうとしていた気がする。
そもそもどうして都に攻め入ろうとしたんだろうか？
紫様に聞いても『さぁ、私も覚えてないわ』と言う答えしか返ってこない。

「……。」

昔の事を思い出しているといつの間にか結界の修復が完了した。

「ご苦労様。」

不意に後ろから声が聞こえたので素早く振り返る。
そこには、スキマから上半身だけを出して扇子を片手の持っている私の主、紫様がいた。

「……紫様、行き成り現れないで下さい。」
「気にしないの。それよりも貴方に少しお願いしたい事があるのよ。」

紫様は、そう言いながら扇子で口元を隠しながら目を細める。
……嫌な予感しかしない……

「ちょっとこれを届けて欲しいのよ。」

紫様はそう言うと、スキマの中に手を入れて何かゴソゴソと漁り始

めた。
そして中から一つのお札を取り出して私に渡した。
「……これは……？」
「それを届けて欲しいの。」
不意に、浮遊感を感じて身体がブワッと浮く。
下に顔を向けると目だらけの空間が私を待ち構えていた。
……は？
「紅鎖華壊って言う名前の男に渡してちょうだい。」
「紫様あぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ……」
私の叫びも虚しく響きながらスキマの中を落ちていった……
ーーーーSide紫ーーーー
彼女がスキマに落ちたのを確認し、開いていたスキマを閉じる。
もし壊が彼女に会ったらどんな反応をするか気になり、自然に笑みがこぼれる。
彼女は１０００年前まで玉藻前と言われていた大妖怪。
しかし、今は『八雲』の名を与えて別の名前を語っている。
「ふふふ……ちゃんと渡すのよ？」
再び扇子で口元を隠してそう呟いた……

ーーーSide壊ーーーー

「……。」

さて皆の者、俺は今あらゆる意味で困っている。
あの後別段何かあった訳でもなく、普通にマンションに帰れた。
しかし、自分の部屋の前まで辿り着いて『問題』が起きた。

女がドアを背中を預けて気絶しているのだ。
勿論、普通の女ならあまり問題は……無い訳でもないがそこまで気にしなくてもいい。
しかし、今俺の目の前にいる女はよりにもよって知り合いである。
しかも本来は『こちら側』にいるはずのない遠い昔の妖怪の友人だ。

金のショートボブで頭には少し横にずれている二本の尖がりを持つ帽子。
中華風の服で、長袖ロングスカートに青い前掛けのような服を被せている。
何よりも問題があるのは腰より若干下の尾骨辺りから九本の金色の尻尾が生えている。

幸い、このマンションの部屋のドアは、人一人分が見えなくなるほどの凹んでいる壁で隠れているので、通路を通らなければドアは見えない。
よって、誰かがここを通っていない限りは今の彼女は見られていないだろう。
まぁ、たぶん見られていないだろう。
誰かが見ていたら絶対に人だかりが出来るからな。

「……こんなところを見られたら間違いなく騒がれるな。」

そうしたら俺も、関係者だとか何とか言われて、ささやかな日常も破壊されそうだ。

「……仕方ない……か。」

倒れている女の腕を首に回すようにして肩を貸し立ち上がらせる。

そして誰にも見られていないかを確認して『４０１号室』という自分の部屋に入った……

第１３３話：苦労人？いいえ、苦労狐です（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。
本編では昔の名前しか出さなかったけど、もう誰だかわかりますよね？
次回は主に彼女と壊の話。
それにしても相変わらずグダグダだなぁ……。（＾＾；

第１３４話：苦労狐と紅鎖華壊（前書き）

今回は、いつも以上にグダグダすると思われます。

第１３４話：苦労狐と紅鎖華壊

気絶していた彼女を俺の隣の部屋……つまりは瑠璃が使っていた部屋に寝かせ、俺はリビングのソファーで寛ぐ。
もし起きた時のためにと言う事で、彼女の寝ている部屋には絶がいる。

「……はぁ……。」

何故彼女がここに居るのかは何となくだがわかっている。
どうせ紫が、俺と彼女を会わせて俺が彼女へどう言った反応をするか見たいとかそんな理由なんだろう。
……何だかんだで紫の考える事がわかってきている気がするな。

「……はぁ……。」

またもめんどう事に巻き込まれないようにと願いながら、ソファーの上で再び溜息を吐いた……

ーーーーＳｉｄｅ苦労狐ーーーー

「ん……」

そんな声が出ると共に、目蓋が自然と開かれて行く。

まだ覚醒していない頭をそのままにし、再び目蓋を閉じ、温かい布団の温もりに身体を預ける。
……ん？布団？
再び目蓋を閉じて覚醒していない頭を無理やり目覚めさせて身体を起こす。

「……ここは……」

見たことも無い場所。
木製の少しだけ古くなっている箪笥に少々肌色の混じった窓掛け（カーテンの事です）
そして今自分が寝ている白中心の寝台。掛けている毛布も白色だ。
ある程度部屋を見渡すと、今度は何故自分がこんな所に居るのか考える。

「……」

そうだ紫様だ。
頼み事があるとかで札を渡されて回答無用でスキマに落とされたんだった。
札は誰かに渡して欲しいと言われたが……

「……紅鎖華壊……。」

確かそんな名前だった気がする。
……紅鎖華……壊……？

「ッ……！？」

不意に頭痛に襲われる。紅鎖華壊……どこかで聞き覚えのある名前

……誰だ？
思い出そうとする度に頭の痛みが増す。もう少し……もう少しで思い出せそうなんだが……

「……駄目だ、思い出せない……。」

まるで記憶を何かに抑え付けられているかのように思い出すことが出来ない。
仕方ないので思い出すのをやめると、不思議と頭の痛みがサッと引いて行くのがわかる。
そして、今まで気付かなかったが自分の頭に違和感を感じるた。
何だと思い自分の頭の上に手を乗せる。

帽子が無い……。
いつも被っている帽子を被っていなかった。
帽子を探すべく辺りを見渡すと、帽子は寝台の端に引っ掛けられている。
帽子が無くなっていない事に安心し、腕を伸ばして取ろうとすると、枕元に置かれている物が視界に映った。

「……人形？」

そこには、寝台の上方に付けられている板……世に言うベッドボードを背にするように人形が置かれていた。
こげ茶色の少々変わった形をしており、先程の聞き覚えのある名前同様どこかで見た事のある気がする。
枕元に置かれているを人形を両手で抱き上げるようにして持ち上げる。

「……やっぱりどこかで見た事がある気が……。」

そう呟きながら人形の……人間で言う顔のところに開いた二つの穴を見る。
しばらく眺めていると……

――――ペシッ――――

っと、ダラリと下がっていた人形の手が、行き成り私の腕を叩いた。

「わぁ！？」

自分でも情けないと思う悲鳴を上げて人形を放り投げる。
人形は放射線を描き、『ボフッ』と言う効果音と共に私の布団の上に落ちた。
ビ……ビックリした……

人形は布団の上で仰向けのまま動かなかったが、しばらくするとスッ……と音もなく浮かんだ。
そう、『立った』ではなく、布団擦れ擦れで『浮かんで』いるのだ。
人形は、そのまま寝台からゆっくりと飛び降りるとドアの前まで移動し、ドアノブの付いている位置まで浮かんで両手で器用にドアノブを捻って少しだけドアを開けた。
そしてふわふわと再び地面擦れ擦れに戻ると、真っ黒の二つの穴で寝台に寝ている私を眺めてきた。

「……部屋から出ろ……と？」

人形はがコクンと頷いた。
私は寝台から降り、寝台の端に引っ掛けられている帽子を頭に被り、人形の前を通って部屋から出る。

開けたドアの先は渡り廊下のような場所だった。
私の後に続くように人形が部屋から出て先程まで開いていたドアをパタンと閉める。
そして私の前でクルリ、と背を向けると、そのまま前に渡り廊下の先に移動した。
人形は、渡り廊下の先にあるガラスで出来たドアの前で止まって再び私を見た。

「……。」

何となく人形が付いて来い言っている気がするので人形まで近づく。
人形は私が近づくのを確認すると先程同様にドアを開けた。
そして今度は自分が先にドアの先に入って行った。
私も、人形に続くようにドアに入り、入ってすぐにドアを閉める。
そして入ってきたドアの先の部屋を見ると……

「……来たか。」

不意に、男の声が聞こえた。それもそこかで聞いた事のある声。
すぐ近くにある私に背を向けるように置いてある白い物体から真っ黒な人影がゆらりと立ち上がる。
それは全身を黒の服で固めていて、先程の人形を肩に乗せている長身の男だった。
髪が白く、こちらに背を向けているので顔が見えない。ただ、何となくだが瞳の色が紅い気がした。

「さて……」

そう言いながら男がゆっくりと身体をこちらに向ける。
そしてその身体がこちらに向けられた。

予想通り、瞳の色が赤く、その目はどこかやる気のなさを感じる。
男はそのまま私に向かってゆっくりと近づいてきた。
そして男が目の前までやって来た。
その途端、頭が真っ白になり、身体が勝手に動き、目から熱いものが込上げると同時に――――

――男の胸元辺りに顔を埋めて泣いていた――――

どうしてこんな事をしているのかわからない。
ただ私はこの男を知っていて、そして会いたかった。
男は何も言わず、泣いている私の頭を帽子越しに撫でていた……

ーーーーSide壊ーーーー

「……迷惑を掛けた。」

俺と向かい合うように椅子に座っている女……玉藻がそう言いながら、少々赤くなった顔を帽子で隠す。
まさか起きた途端に抱きつかれるとは思っていなかった。
抱きつかれた時、一瞬だが殺されるんじゃないかと思ってしまった。

「……まぁ、そこまで気にしていない。それよりも耳と尻尾を隠せ。」
「へ？……あっ！？」

慌てて自分の尻尾やら耳やらを触って隠そうとする玉藻。
どうやら今まで自分の尻尾と耳が出ているのを忘れていたようだ。
俺じゃなかったら驚いて腰を抜かすか、変人か何かだと思われるぞ？
しばらくすると、玉藻はやっと冷静になり、少しの間目を瞑った。
すると、いつの間にか尻尾と耳は消えていた。……残念だ、触らせて貰おうと思ったのだ……。

「……あの……とりあえず、私が人間ではないと言う事は秘密にしてもらいたいんだが……。」
「まぁ……構わんさ。そんな事よりも、だ。
何故君は俺の家の前に倒れていたんだ？」
「あ、そうだった。
実は私の主……名を八雲紫と言うんだが、紫様にある男にコレを渡して欲しいと言われて……。」
そう言いながら玉藻は袖の中に手を入れてゴソゴソと漁り始めた。
そして何やら文字がビッシリと書かれている一枚の札を取り出した。

「……それは何だ？」
「私にもよくわからないが……これを渡して欲しいと言われた。」
「ちなみに聞いておこう。その男の名前は何だ？」
「紅鎖華壊と言う名前らしい。」

俺だな。やはり紫の差し金だったか。
それにしても……玉藻は見事に俺の事を忘れているようだな。
先程抱きついてきた時も『何故抱きついたのかわからない』的な事を言っていたしな。

「……まぁいい。で、紅鎖華壊だったな？」
「ん、確かそうだった。」

「そうか。ならそれをくれ。俺が紅鎖華壊だ。」

俺がそう言うと、玉藻はポカーンとした表情になった。

中々おもしろいな。

「……いやいやいや、そんな行き成り貴方が紅鎖華壊と言われても……。」

「何だ、信用できないか？」

「それは……まぁ……。」

ふむ……まぁ、普通の反応だな。

「……紫を呼ぶ事は出来ないのか？」

「いや……それはちょっと……。」

「……そうだな、それなら紫の能力を当ててやろう。」

少し紫の話をすればその内信用してくれるだろう。

「確か紫の能力は……『境界を操る程度の能力』だったな？」

「……正解。それなら紫様のご友人は知っているかな？」

「……紫の友人か……俺の知る限りは幽々子くらいだな。」

「正解……それなら――――

こんな感じで俺は紫について知っている事を色々と話した……

「……わかった、君を紅鎖華壊と認める。」

そう言いながら渋々といった感じ俺に札を渡してくる玉藻。
俺はそれを受け取って札を見る。
札には、先程述べたように文字が書かれており、その文字は円を描くように書かれている。
特にこれと言った用途も無いと思うのだが……

「……まぁいいさ。紫が渡したのなら、少なくとも使えない物じゃないだろう。」
「ん、札を渡したので私は帰らせてもらうよ。」

玉藻はそう言うと、椅子から立ち上がって歩みだそうとした。

「少し待て。」
「？」

しかし、俺が呼び止めた事によりその場に止まる。

「君に問おう、一体どうやって帰るんだ？」
「……。」
「君は紫のスキマによってここに落とされた。
それなら帰るにもスキマが無ければ帰れないはずだが？」
「……そうだった……。」

俺が言うとやっと気付いたのか、玉藻は再び椅子に座って『ズーン』と負のオーラを撒き散らし始めた。
おいやめろ。俺の家の空気が澱む。

「……紫がスキマを開くまでしばらくここにいるか？」
「……いいのか？」

「問題ない。部屋なら余っているし、何よりも友人の式をほうって置く訳にはいかない。」

あの無責任スキマ妖怪の事だから、こうなる事も読んでいただろうしな。

「……それなら……お願いできるか？」

「あぁ。だがここに住んでもらう前に一つ聞きたい事がある。」

「？」

「お前の名前だ。」

俺がそう言うと、玉藻は『しまった』とでも言うような表情をする。

まぁ、玉藻と言う名前だと言うのは知っているがな。

やはり自己紹介は大切だ。

それにしてもこの式は本当に大丈夫なんだろうか？どこか抜けている気がする。

「俺は先程言ったとおり紅鎖華壊だ。お前は？」

俺は自分から名前を名乗る。

「私は――――

――――八雲（やくも）　藍（らん）だ。よろしく、壊。――――

……名前、変わったんだな……

その日から、俺と玉藻……藍の同居生活が始まった

第１３４話：苦労狐と紅鎖華壊（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。
ここでやっと名前が出てきた苦労狐、もとい藍しゃま。
真面目だけど少し抜けている感じにしてみました。
次回からは藍しゃまと壊の甘酸っぱい同居生活が！？
……いや、やっぱり甘酸っぱくならないかな……

第１３５話：今も昔も絶望を（前書き）

更新遅れました。最近書くことが中々思いつかなくて……
今回は、ちょいシリアスだと思います。
しかも藍様の出番あまり無いと言う。

第１３５話：今も昔も絶望を

目の前に青少年がいる。
黒いショートヘアーを少し長めにし、黒く鋭いが、どこかやる気の感じられないような目。
それに黒いＴシャツに黒いジーンズと黒一色で染められたような服装。
本来、俺の目の前にいるはずのない『前世』での過去の俺、『凶道進』
俺の目の前に居る進は、それなりの大きさの日本屋敷の庭でただ立ち尽くしている。
……夢だなコレは。

前にもあった事なので、ここが夢だという事は理解した。
その場から動かず、ただ過去の俺である進を見る。

「……そろそろだな。」

不意に、目の前で立っていた進がそう言いながら屋敷の中に戻る。
俺も進に続いて縁側から屋敷の中に入った。
進は、屋敷に入るとそのまま渡り廊下を何の迷いも無く進んだ。
やがて一つの部屋の前まで辿り着くと、「邪魔するぞ」とだけ言って襖を開けた。
俺も襖を通り抜けて中に入る。そこはいつも親父が居る座敷。
そしてやはり、今回も親父はそこにいた。

「……来たか……そこに座れ。」

親父がそう言うと、進は何も言わずに親父の前に置かれている座布団に座って胡坐を掻く。
俺も座ろうと思ったが、めんどくさくなったので三角形になるような位置で立っている事にした。
さて、今回は何を聞いて、何を見るんだろうな……

ーーーSide進ーーーー

「……それで？また仕事か？」

座れと言われてから30秒くらい経っただろうか。
一刻も早くこの場から立ち去りたくて、俺は親父にそう聞いた。

「……うむ。」

親父はそう言うといつもと同じように裾の中をゴソゴソと漁り、写真を取り出して俺に向けて飛ばす。
それを親指と人差し指で挟んで止め、写真を確認する。
写真の裏には何かの地図、表には幼い少女と少年、それに若い男と女が写っていた。

「その写真に写ってい「言わなくてもいい。」……？」

俺は親父の言葉を遮って座布団から立ち上がる。
そのまま襖まで移動して襖に手を掛けて開け、首を少し回して親父をチラリと見る。
どうせ……

「……やる事は一緒なんだろ？」

そう言って部屋から出た……

ーーーSide壊ーーー

前世の俺、進が部屋から出て行ったので俺もその後に続いて部屋を出る。

既に俺の頭の中では依頼達成方法が浮かび上がっているのだが……。

進はまた何の迷いもなく渡り廊下を歩くと、先程とは別の襖の前に立った。

進が襖を開けて中に入るので俺も中に入る。

部屋の中は以前と変わらず質素で地味な部屋だった。

敷布団が仕舞ってある押入れ、汚れの殆どが無いノートPC。新しく買ったんだろう。

そしてノートPCを乗せている引き出しが4つある勉強机。

前には無かったが、少し小さめの箪笥が部屋の隅に置かれてる。

進は何も言わずに勉強机の引き出しを開け、中から刃の部分を布で巻いている銀のナイフとワイヤーを取り出した。

刃の部分に布が巻かれているナイフとワイヤーを懐に仕舞った進は、そのまま部屋から出てしまった。

いつまでもここに居ても仕方ないと思い、俺は進の後を付いていった……

で、現在そのターゲットの家に着いたわけだ。
パッと見はそこら辺の家よりも少し大きい一軒家だな。

「……早く終わらせよう……。」

進はそう呟くと、玄関門を開けて堂々と中に入る。
いやいや、誰かに見られたら不味いぞ？と言うか、まだ4時くらいなのにもう仕事を始めるのか？
俺の疑問をよそに、進はドアの前まで歩くと、そのままポケットを漁る。
そしてそこから……

「ピッキング準備。」

何ともまぁテンションの低い声でそう言い、少し先を曲げて伸ばした針金を鍵穴に突っ込んだ。
そして少しガチャガチャと動かすと『カチャリ』と鍵の開く音が聞こえた。
と言うか凄いな俺。家の鍵を失くした時に試してみよう。
……よく考えてみたら能力で事足りるからそこまで必要じゃないな。

「……お邪魔する。」

随分と律儀だなと思いながらも『昔の自分だろうが』と心の中で突っ込みを入れつつ家に入る。
中は普通の玄関、先にはフローリングの渡り廊下が続いている。
そして廊下の左側には『トイレ』と書かれたプレートが掛けられている扉。
右には2階へと続くであろう階段がある。
……さて、今回はいつまで続くかな……

ーーーSide進ーーーー

……見た感想は至って普通。
写真の裏に描かれている地図を見ながら辿り着いた先は、何の変哲も無い少し大きめの一軒家だった。
誰も見ていない事を確認して素早く玄関門を開け、ドアをピッキングして音を発てないようにしながら家の中に進入する。
家の中に進入してからポケットに手を入れてナイフとワイヤーを取り出す。
そしてナイフに巻き付いている布解いて柄にワイヤーを解けないようにしっかりと結びつける。
この作業に掛かった時間、約3秒。……少し遅いかな。

そんなくだらない事を考えながら渡り廊下を進んで行く。
2階を後回しにして1階から先に見ておこう。
そう思い、渡り廊下の奥にある縁が木で出来ているドアを……勢いよく開いた!

「ッ!?何だ!!」

勢いよく開けて聞こえたのは、リビングで女と少年と一緒に居る男の声。
勿論、三人ともあの写真に写っていた家族だ。……少女がいないな。
突然の事に唖然としている家族を余所に少女が何処に居ないかリビングを見渡して探す。

「……ッ、何だお前は！？」

不意に、男が唖然とするのをやめて俺に向かってそう言ってきた。
……まぁ、どうせ全員片付けるんだから、まずは目の前にいる三人を片付けよう。
予め右手に持っていたナイフのワイヤーを右手になるべく解けないようにグルグルと巻く。
そして、手始めにナイフを少年の右頬擦れ擦れに当るように投げる。
そのままワイヤーを少し手前に引いて、ナイフが帰ってくるようにワイヤーを少年に首に括り付ける。
二回ほど少年の首の周りで回転したナイフはそのまま俺の元へ帰ってきた。

「ッ！……お……父さ……んッ！」
「き……喜一！」

何が起きたのかあまり理解していない少年の親二人。
よく見ると、母親の頬に少しだけ傷が付いている。
おそらく、先程少年の回りをナイフが回転していたときに付いたんだろう。
少年は苦しそうな顔をしながらも、自分の首を必死に引掻いている。
親二人も、やっと少年の首に巻き付いている物を理解して解こうとする。
さて、

「一人目。」

俺がそう言うと同時に、少年の首が赤い液体を噴出させながら宙を舞った。
数秒程宙を舞った少年の首はドスッと言う音を出し、赤い液体はバ

シャばしゃと地面に落ちた。
そして、先程まで少年と一緒に宙を舞っていた赤い液体が少年の両親の服や顔に付いている。

「……あ……あぁ……」

母親の方が地面にへたり込み、その自分の手に付いた血を見ながらわなわなと震えだした。

「イｙ「ストップ」ッ！……あ〝……ぁぁ〝……」

突然叫ぼうとし始めたので、その前にワイヤー付きナイフで先程と同じように首に括り付ける。
父親の方は、未だに放心しているが、母親が苦しんでいる顔を見るとまた先程と同じようにワイヤーを解こうとした。
しかも今度はどこから出したのかはさみで切ろうとしている。
俺ははさみを持っている方の手へナイフを投げて突き刺し、はさみを落とさせる。

「ガァ……ッ！」

まるで押し殺したような悲鳴を上げ、突き刺さったナイフを抜いて手の甲を押さえながら蹲る男。
女の方は、もう既に顔が真っ青になっている。……そろそろ楽にしてやるか。
そう思いながらワイヤーを思いっきり右斜め後ろに引っ張った。
すると女は、自分の子供と同じように首を宙に舞わせた。
そしてへたり込んでいる身体が前に倒れ、宙を舞っていた首が『ゴ

ン』と言う音を出してフローリングの床に落ちる。
首と宙を舞っていたのと、首の無くなった身体から出ている赤い液体が父親の顔や服にビチャリと付く。

「二人目。」

そう呟いて改めて男の方へ顔を向ける。

「ヒッ……！」

目の前で妻と息子を殺され、今度は自分が殺されると理解したのか男は小さく悲鳴を上げる。
そして座り込んだまま後ろに少し下がった。
しかし、少し下がるとまったく動かなくなり、今度は俺を見てきた。

「どうした？逃げなくてもいいのか？」
「お、お前は……。」

俺の言った事を聞きながら、男は何かを言いかけた。

「……お前は……どうしてこんな事をするんだ……？」

男は、真っ直ぐと俺の目を見ながらそう問いかけてきた。
……そう言えば……

「……どうしてだろうな？」
「……は……？」

俺がそう言うと、男は信じられない事を聞いたかのように唖然とした。

「俺がお前達を殺すのは『言われたから』
でも、どうしてお前達が俺のような人間に殺されなきゃいけないのかは俺にはわからない。
強いて言えば、お前達内誰かが、どこかで道を踏み外したから俺に殺されるような結果を招いた、ただそれだけだ。」

俺はそう言って男を見る。
男は俯いて肩が少し震えている。だが、俺に対して恐怖している訳ではないだろう。
そう、これは……

「ふ……ふざけるなぁ！！」

俺に対して怒りを感じているのだ。
先程とは打って変わり、鬼のような形相で男が俺を睨みつける。

「俺達が……俺達が何をした！？
ただ家族で幸せに過ごしていただけじゃないか！！
それなのに何でお前みたいな餓鬼に幸せを奪われなきゃいけないんだ！！」

男はそう言いながらさらに俺を睨みつけ、そして近くに落ちているはさみを掴んで立ち上がった。

「悪いが……」

俺がそう呟く頃には、男は既に俺に向かって距離を詰めている。
そして俺の前まで来るとはさみを振り上げて、思いっきり振り下ろ……されなかった。

「な……ぁ……」

男がはさみを振り下ろす前に、俺が男の腕を掴んで、胸にナイフを突き立てたからだ。

掴んでいる腕を離し、刺さっているナイフの柄を持って男を軽く蹴り飛ばす。

すると男はそのまま後ろに吹き飛びながら仰向けに倒れた。

男の持っていたはさみは、俺の足元に落ちている。

「あ……ぁ……」

足元にあるはさみを蹴って横に飛ばし、仰向けに倒れながら微かな呻き声を上げている男に近づく。

男は、俺が近くまで来ると死に掛けていると言うのに、血走った目でさらに俺を睨みつけてきた。

俺はナイフの刃を下にして、男の胸の上に来るように持って行く。

「……お前達の事になんて興味ないんだ。」

そう言って、持っていたナイフの柄から手を離した。

ナイフは、重力に従うように落ちると再び男の胸に突き刺さった。

「……三人目。」

ワイヤーを引っ張り、もはやただ肉塊と化している男の胸のナイフを抜きながらそう呟いた……

ーーーSide壊ーーーー

「……今も昔も変わらないな……。」

ここじゃ絶対聞こえる訳でもないのにそう呟いた。
凶は、ナイフに付いた血をポケットから取り出したハンカチで奇麗に拭いていた。
その目はどこかやる気のないような、全ての事に興味が削がれたような、そんな目だった。
……やはり昔とは言え自分を見るのは妙な気分だな。

「終わり、っと。次は2階だ。」

ハンカチでナイフを奇麗にした凶は、そのまま来た道を戻って渡り廊下まで行く。
そして、最初に素通りしていた2階へと続く階段をゆっくりと上って行った。
確か……写真で確認したターゲットは4人だったな。
2階には、普通の何も無い扉ともう一つ『子供部屋』と書かれているプレートがぶら下がっている扉がある。
そのどちらもが木製だ。ただ、子供部屋の方から、本当に常人には聞えないほどの大きさで微かに何か聞こえる。

「……まずは子供部屋かな。」

凶はそう言って子供部屋へと近づく。
たぶん、今のあいつにはこの微かな音は殆ど聞えていないだろう。
ドアノブに手を掛けた凶はそのままドアノブを捻り、と扉を開けた。

「……お兄さん、誰？」

凶が開いた扉の先に居たのは、一人の少女が床に座っていた。
凶はその少女に向かって近づき、少女と向き合うようにその場にしゃがんだ。
そして……

「……こんにちは。」

――――少女に対して微笑んだ――――

それを見た少女は凶に向かって

「こんにちは……。」

と返す。……俺も言っておこうか？
聞えないんだから意味がないな。

「君のお母さんとお父さんがさ、さっき出掛けたんだ。」
「……お買い物？弟も行ったの？」
「あぁ、そうだよ。それで君も連れて行きたいから向かいに行って欲しいと頼まれたんだが……。」
「……先に行っちゃったの？」
「そうだよ。どうする？お母さん達のところに行くか？」
「うん……連れてって。」

普通なら明らかに怪しいと思うだろう。
だがしかし、この少女は人を疑うと言う事をあまり知らないらしい。
普通なら親に『知らない人には付いて行ってはいけない』的な事を

教わっていると思うが……

「わかった……連れて行ってあげるよ。」

凶はそう言うと、今まで少女には見えないように手の中に隠し持っていたナイフをしっかりと持つ。
そして微笑んだまま立ち上がると、そのナイフを振り上げ……

「……四人目。閻魔に会ったらよろしく言っておいてくれ。」

凶がそう言うと共に、辺りに赤い液体が飛び散った……

あの後凶は、真っ赤に染まっている少女を担いで1階まで移動し、
他の家族が転がっている場所に少女を置いた。
そして勝手に台所を漁って黒い大きなゴミ袋を幾つか持って来ると、
慣れた手つきで次々と肉塊になったものを放り込み、それを持って
家を出ると途中のゴミ置き場にゴミ袋を置いた。
運がいい事にその日は燃えるゴミの日だったらしい。

――――ピシッ！――――

不意に、俺の目の前の空間に亀裂が奔った。
おいおいここで終わりか？
……まぁ、本来見るはずのものも見れたから別に構わんがな……
そう思うと同時に、俺の意識は途切れた……

「い……お……ろ……。」

身体が誰かに揺さぶられている様な感じがする。
それに声も聞えるな……

「壊……ろ……」

閉じている瞼を少しずつ開くと、目の前にボンヤリと霞んでいるものが見える。
やがて霞んでいたものが少しずつ見えるようになり、そしてしっかり見えるようなってそこにあったのは……

「壊、起きろ。」
「……藍か……。」

昨日から我が家に住み着く事になった同居人、藍だった。
どうやら俺の事を起こし来たらしい。
中華風の長袖ロングスカートの服を着て、俺の顔を覗き込むように立っている。
勿論、耳と九本の尻尾もちゃんと出ている。
誰にも見られていない時は出してもいいと言っておいた。

「やっと起きたか。もう１０時だぞ？。」
「……すまんな。」
「ふふふ……別に気にしてない。それより朝食を準備したから顔を

洗って一緒に食べよう。」
「あぁ、わかった。先に行ってくれないか？すぐに行く。」
「んわかった。」

俺の言った事に対して藍はそう言い、そのまま俺の部屋から出て行った。

「……他人の幸せを奪う俺が、殆ど不自由をしないとはな……。」

誰も居なくなった部屋で、静かにそう呟いた……

第１３５話：今も昔も絶望を（後書き）

はい終わりました～。
今回は、壊の過去編でしたね。
昔の壊は作り笑いでもすることが出来たんです！
次回は……何を書くかまだ決めていません。

第１３６話：見えない月見酒（前書き）

はい、更新遅れましたすいません。
実はリアルで少し立て込んでて……

第１３６話：見えない月見酒

玉藻……じゃなかった。我が家に藍が来てから5日程が経った。
あの紫の式なだけあって、料理も洗濯もお使いも、大抵の家事はしっかりとこなせる。
勿論、俺や絶も手伝っている。働かざる者食うべからずだ。

「「いただきます」」

で、現在朝食の時間な訳だ。ちなみに今日は玉……藍が作った。
箸を右手に持って白米の盛られた椀を左手に持つ。
そのまま右手の箸をおかずの野菜炒めに伸ばして摘み、口に運んでモソモソと食べる。
白米を口に入れ租借するとそれを味噌汁で流し込む。
……千年前よりも料理を作るのがずっと上手くなったな……。

「ところで壊。」

焼き魚の切れ身を箸で突付きながら解(ほぐ)していると、不意に玉藻……だから違う、藍が話し掛けて来た。

「何だ？」
「いや……壊は働いているのかな……と思って。」
「……何故そんな事を聞くんだ？」
「その……ここ五日間壊が仕事をしているのを見たことが無かったのでただ何となく気になったと言うか……」

そう言いながら藍は白米を口に運び、もぐもぐと租借する。

「一応働いているぞ。でなければこんな生活が出来ると思うか？」
「……それもそうだな。てっきり、紫様のように碌に仕事もしないで自堕落浸っているのか思った。」
紫……自分の式にこんな事を言われるまで落ちたのか……
心の中で、紫に呆れながら少し溜息を吐く。
まぁ、それでも……

「……期待はしているんだがな……」
「？　何か言ったか？」
「何でもない。」

不思議そうな表情をしている藍を適当にはぐらかし、再び魚を箸で突付いた……

「ガゥ！」

さて、この奇妙な鳴き声を発しているのは一体誰なのか？
それは俺の式『ゼク』である。
実は先程、式たちの羽を伸ばさせてやろうと思って石から出した。
で、家の中ばかりに入るのも色々と身体に悪いだろうと思い、式たちを外に連れ出した。
ただ、外に連れ出したのは絶とゼクだけだ。
他の奴らは来たがらなかったので家でのんびりさせている。

「ガゥ！」

何とも嬉しそうな声を上げ、繋がれている首輪を揺らしながらトテトテと歩くゼク。
さすがにあの巨体を町に連れて行く訳にも行かないので、どうするか悩んでいたらゼクが小さくなって、柴犬みたくなった。
だから今の姿は、パッと見た感じはただの小さい柴犬もどきだ。
他の犬より変わった所と言えば、生えている毛が白銀と言う事と鳴き声くらいだろうか。

「ガゥ！」

ほらこの通り。
そんな事を思いながら、先程自動販売機で買ったコーヒーを飲む。
ちなみにゼクと絶の他にも玉藻……藍が付いて来ていたりする。
横で俺が奢ってやった缶茶の蓋を開けるのに苦労しているようだ。

「藍、本当に開けられるのか？何やら缶がミシミシ音を発てているぞ？」
「問題……ないッ……！」

そんな汗を出して必死な顔をしながら言われてもな……

「はぁ……貸せ、こうやって開けるんだ。」

自分の持っている缶コーヒーを絶に持たせ、無理やり藍の手から缶を奪い取りプルタブに指を掛けて開ける。
そしてそれを藍に返す。

「ほら。」
「あ、ありがとう……」

俺は開けた缶を藍に渡し、そのまま絶に預けていた缶コーヒーを返して貰い飲む。
……ふぅ……ん？

「どうした、ゼク？」

何か知らんがゼクが尻尾をはちきれんばかりに振っている。
そして……

「ガゥ！！」

そう鳴くと、俺の持っている首輪のヒモを引っ張って勢いよく走り出した。

「お、おい壊！！」

後ろで藍が何か叫んでいるが、それを無視するかのようにゼクは勢いを殺さずに曲がり角を曲がる。
そして……

「……何だコレは？」
「ガゥ！」

曲がり角を曲がった先にあったのは落としたのだろう『犬の絵』と『ビーフジャーキー』が描かれているアルミ製の袋だった。
……何故？

「ガゥ！！」

ゼクは、ビーフジャーキーの入っている袋を咥えて俺の前でお座りをした。
……まさか開けろと？この何故か道端に落ちていた物を開けろと言いたいのか？
と言うか開けてどうする？食うのか？食いたいのか？

「……もういい。開けてやるから貸せ。」

考えるのもめんどくさくなったので、仕方なくゼクから袋を受け取り、袋を裂いて開ける。
中にはビーフジャーキーが……5枚入っていた。

「ハッ、ハッ、ハッ！」

……ゼク、涎をドバドバと垂らしながらこちらを見るのをやめろ。
袋の中に手を入れて薄く長いビーフジャーキーを一枚摘んでゼクの上に落とす。
ゼクは、ビーフジャーキーが落ちる前にジャンプしてビーフジャーキーを咥えた。
そして『ガツガツ』と言った感じに食い始めた。

「壊、一体どうしたんだ。」

と、少し遅れてやって来た藍が後ろから話しかけてきた。
さすが妖怪、少しとは言え走ったと言うのに、まったくと言っていいほど疲れていなければ服も乱れていない。
やって来た藍に、黙って持っていたビーフジャーキーの袋を見せる。

「……それは何時買ったんだ？」

「落ちていた。ちなみに俺は食っていない。」

そう言いいながら、もう一枚摘んでゼクの方へ投げる。
ナイスキャッチだな、ゼク。横で一緒に見ている藍が呆れた顔をしている。

「ガゥ！」

……先程よりも食うのが早くなってないか？
もう一回摘んで投げる。とりあえず……

「ゼク、早く行くぞ。余ったのは途中で食え。」

俺がそう言うと、ゼクはビーフジャーキーを咥えたまま歩き出した。
しかも、歩きながら首を振ってビーフジャーキーを器用に食っている。

「……随分と器用だな、この子は。」

先程まで呆れていた藍も感心の声を上げている。
……そう言えば辺りが少し暗くなったな……

「藍、ゼク、帰るぞ。」
「ん、わかった。」
「ガゥ！」

夕飯は……藍が作るんだったな。

ーーーーS.ｉｄｅ三人称ーーーー

一人の男がバルコニーに小型の椅子とテーブルを出して座っている。
男の名は『紅鎖華　壊』夕食を食べ終え、現在9時ぐらいである。
そして、何故壊がバルコニーで座っているかと言うと……まぁ月見酒だ。
だがしかし、見ているのは満月ではなく新月だった。
真っ暗な、だが星明りが照らす空を見ながら、テーブルに置いてある日本酒の入ったコップに口を付ける。

「まだ寝ていなかったのか？」

不意に、壊の後ろにあるバルコニーのドアから声が響く。
壊はその声の主を、首を少し回して確認すると、自分の横……向かい側に椅子を創る。

「失礼する。」

そう言いながら壊に話し掛けて来た人物、『藍』は壊の創った椅子に座った。
チラリ、と壊は横目で確認すると、自分の持っているコップを少し上げて見せる。

「……君も飲むか？」
「……うん、是非とも。」

藍は、壊の問いに対して笑顔でそう答える。
それを横目で見た壊は、再び能力でテーブルの上にコップを創り、

それにテーブルの中央に置かれている酒瓶の酒を注いだ。
そしてそれを藍の前に置いた。コップを置いた壊は、そのまま空を見上げる。

「それじゃあ……。」

藍は、そんな壊の態度を大して気に留めず、目の前に置かれたコップを取って口を付けて飲む。
そして一口飲むと「ふぅ……」と息を吐いた。
しばらく二人の間に沈黙が流れたが……

「……寝なくてもいいのか、藍。」

その沈黙を先に破ったのは壊だった。

「ふふふ……何となく、起きていたくてな……。」
「あまり無理はするなよ？一応客人なのだからな。」
「大丈夫、紫様の所に居た時よりずっとマシだよ。」

何気に主に対しての愚痴を溢している藍。

「そんな事より、壊こそどうしてここにいるんだ？」

何故ここに居るのか気になるのだろう藍が、壊にそう聞いた。
壊は、一度酒を口に含むとコップをテーブルに置いて再び空を見た。

「……血が……疼くんだよ……。」
「……血……？」
「あぁ、昔から……と言っても始めは気づかなかったが、大体……起きた時だから……４０００くらいからだろうか。

それぐらいの時から新月になると身体中が疼くようになったんだ。
眠たくても、気分が高上して眠れなくてな……ただ、何もしないと……」

壊はそう言いながらまたコップの酒を飲む。

「……壊したくなるんだよ……。」

そう言って、酒の無くなったコップをテーブルに置く。

「身体がどうしようもなく疼いて、回りにあるものを全部をメチャクチャにしたくなる。
それで、満月と新月の夜は酒で気分を紛らわせようと思ってな……。
まぁ、別に何もせずに我慢すればいいだけなのだが、どうも新月の夜だけは我慢するのがな……。」

そう、壊は新月の夜にだけ破壊衝動が湧き起こる。
しかも、本人は気づいているかわからないが、身体能力も一気に向上するという地味なオマケ付きなのだ。

「満月も……？」

「いや。満月は……ただの友人の名残と言うか何と言うか……まぁ、そんなものだ。」

壊はそう言い、再び酒を飲む。その顔は何かを懐かしむような顔だった。
それを見た藍は、この五日間、一緒に住んで初めて見た壊の顔に、少し嬉しくなって頬が緩む。

「そうか……」

藍は、壊の言った事に対してそう言うと、持っているコップを膝の上に置くようにして覗き込む。
コップに注がれた酒には、彼女の少し嬉しそうな顔が映っていた……

第１３６話：見えない月見酒（後書き）

そんな訳で終わりました。
もうそろそろ幻想入りさせようと思います。

第１３７話：それは突然の決心（前書き）

はい、そんなわけで１３７話です。
相変わらずグダグダですが、どうぞ見てやってください。

第１３７話：それは突然の決心

「武男さん……」
「美知子……このまま一緒に逃げよう、どこか遠い所へ。」
「えぇ……私は貴方に付いて行くわ……どこまでも……。」
「ありがとう……さぁ、行こう！僕たちの未来を切り抜けるために！」

そして二人は歩みだす。明日を未来を目指すために……

～～ｆｉｎ～～

「……つまらないな。」

レンタル屋で借りて来たドラマのＤＶＤを見た感想はこれだった。

「そうかい？私は面白かったけれど……。」

ソファーの、俺に横で一緒にＤＶＤを見ていた藍がそう言った。
内容は、二人の男と女がある事をきっかけに出会いをし、そして恋に落ち、結婚を誓い合う。
しかし、二人の家は家系が家系なだけあってとても仲が悪く、二人は結婚を反対されてしまう。
そこで二人は家に内緒で密かに会っていたが、とうとう我慢できなくなってしまって最終的には駆け落ちしてしまうと言う話だったが……

「……やはり俺にはつまらんよ。」

別に、恋をするのがくだらないとは……少し思っているかもしれないが悪いとは言わない。
だがしかし、自分の家を捨ててまでもその恋をした相手に尽くす理由が理解できない。
ひょっとしたら、他の……恋愛をした奴らならわかるのかもしれないが、俺はした事が無いのでわからない。

『トゥルルルル……トゥルルルル……』

と、考え事をしていたら電話が鳴り響いた。
ソファーから立ち上がり、電話が置いてある台へと向かい、受話器を取って耳に当てる。

「……もしもし。」
『もしもし、紅鎖華壊様ですね？』
「あぁ、確かに紅鎖華壊だ。」

電話を掛けてきたのは男だった。声からすると歳は……３０代前半と言ったところだな。

『失礼、私『高山（たかやま）　雪道（ゆきみち）』と申します。
折り入って、貴方に依頼したい事が……』

……仕事、か。

「……わかった。ただし、態々（わざわざ）会いに行くのもめんどうでな。
悪いが依頼内容は今、ここで語ってもらいたい。いいな？」
『……わかりました。では、依頼内容のご説明を……』

ーーーSide藍ーーーー

「……依頼内容はそれでいいな？」

黒い小さな塊……『電話』に出ている壊がそんな事を言っている。
たぶん仕事の話だと思う。

「わかった、今日中に終わらせよう。報酬は……あぁ、充分だ。
今から指定する口座に振り込んでくれ。」

どうやら報酬の話をしているみたいだ。
壊は、最後に電話の相手に「今日の夜、また電話を掛けてくれ」と
言って受話器を元に戻した。

「仕事かい？」
「あぁ。夜には戻れるようにする。」

壊はそう言うと、懐から黒い手袋を取り出して手につけた
そしてそのままドアを開け、玄関まで向かっていく。
さすがに見ているだけと言うのもアレなので、見送るために後に付
いて行く。
私が見送りに来た時には、壊は既に靴を履き終えていた。

「いってらっしゃい」
「……行ってくる。」

壊はそう言うと、玄関のドアを開けて外に出た……

「……さて、壊が帰って来るまで何をしようか『ピンポーン』ん？客人かな？」

誰だろうと思いながらも、出ている尻尾と耳を消してドアを開けた。
そこに居たのは――――

ーーーSide壊ーーー

家を出て、依頼を果たすために目的地まで向かう。
今回の依頼は内容……まぁ、言わずもがな裏関係の事だ。
依頼内容は至って簡単、『全員始末する』たったそれだけの事だ。

「めんどくさい……。」

そう言いつつも、目的地まで向かうために歩むのを止めない。
途中でコーヒーでも買って行くか……

「到着、っと。」

目的地に着いたので、ただ何となく、そして意味もなくそう言う。

「……ここで合っているのだろうか？」

目の前にあるのは廃墟と化しているボロボロの少し大きい廃病院。
病室であろう場所の窓にはひびが入っていたり割れていたりしてお

り、外側から見える壁にはスプレーでの落書きがあったりする。『夜露死苦』か……懐かしいな。
誰も住んでいない、そして来ていないので、雑草が辺り一面に覆い茂っている。

まだ中身の残っている缶コーヒーを飲み干し、近くにあるメッシュゴミ箱に投げ入れる。
さて……

「依頼実行と行こうか……」

ーーーーSide三人称ーーーー

先程まで壊が見ていた廃病院……の一室で、黒いスーツを着込んだ男たちが向かい合っている。
数は両者合わせて11人。少なくとも、病室ではないようだ。

「要求したモンはちゃんと準備できたか?」

片方の、口が悪く、額から唇まで真っ直ぐな傷を付けた男がそう言う。

「えぇ、この通り。」

そしてその口の悪い男と向き合っている塊のうちの一人の、真面目そうな男がそう言いながら、どこからかアタッシュケースを取り出して中身を開ける。

アタッシュケースの中には何かの『部品』沢山入っていた。
口の悪い男はそれを見ると、『ニヤリ』といった感じに口角を軽く吊り上げる。

「上出来じゃねぇか。残りは次会う時に取りに行きゃいいんだろ？」
「えぇ。では、こちらも約束の物を……」
「わぁーってる。そう急ぐんじゃねぇよ。」

口の悪い男はそう言い、後ろに控えていた別の男に話しかける。
するとその男は、先程と似たようなアタッシュケースを持って口の悪い男に渡す。
口の悪い男はそれを受け取ると、アタッシュケースを開けた。

「おぉ……。」

そのアタッシュケースに入っていたのは宝石やら金やらとにかく金目の物だった。
それがギッシリと、溢れんばかりに詰められている。

「これでいいんだろぉ？」
「えぇ、まぁ……しかし、些か多いような気がしますが……。」
「気にするコタァねぇ。こっちも、それ相応のモン貰うんだからよ。」

口の悪い男がそう言うと、もう向かい合っている男が薄ら笑いを浮かべた。
それに釣られるように、口の悪い男も先程よりもより一層口角を吊り上げて笑う。

「た、大変です！！」

と、不意に部屋の扉が勢いよく開かれると一人の男が入ってきた。

「!?何だよ、テメェか……今取り込み中だってのがわかんねぇのか?あぁん!?」

「ひッ……!!で、でも、物凄く一大事なんでさぁ!!」

「その慌てよう……どうやらただ事ではないようですね……。」

入ってきた男のあまりの慌てように、部屋の中にいた男たちにも少し緊張が走る。

「じ、実は――――『ズチャ』……え?」

入ってきた男が何かを言い切る前に、辺りに気色悪い音が響いた。

そして入ってきた男の首が地面に落ち、首を失った体が少しよろめくと前に倒れた。

「ふぅ……34人目くらいか?」

先程まで男がいた扉から、別の男が入ってきた。

黒一色と言っていいほどのコートにズボンに手袋などの衣服。

平均より背の高い長身で、白い髪に、少し白めの肌。

そして、どこかダルそうな、しかし鋭い紅の瞳。

その男の体からは鉄の……所謂(いわゆる)『血の臭い』が漂っている。

顔には返り血であろう赤い血が少し付いている。

「!何だテメェ!!」

唖然としていた男のうちの一人、口の悪い男に向かってそう叫んだ。

「ん、何だまだいたのか。」

黒い男、『壊』は何でもないようにそう言うと、右足のつま先で軽く二回地面を蹴って……

「３５人目。」

そう言うと共に、口の悪い男の塊のうちの一人が壁に叩き付けられた。

そしてそのまま右手で他の……男Ｂを掴み、首を締め上げる。

「３６人目。」

『グチャリ』と再び鈍い音が響くと共に男Ｂの体が地面を転がった。

なんと壊は、右手の握力だけで男Ｂの首の一部を千切ったのだ。

「か……ぁ……」

首の、丁度の喉の辺りを千切られた男が、あまりの痛みに微かな呻き声と『カヒュー』みたいな空気の音を出す。

他の男たちも、再び唖然とするしかなかった。

なんせ自分の仲間が一瞬で二人やられたのだから。

「……貴方は何者でしょうか？」

唖然としている男たちの中では意外と冷静な真面目な男が壊にそう問う。

他の男たちも、無闇に手を出せば自分たちも危ないと理解したのか、冷や汗を出しつつも壊を睨み付けている。

「名前は……『紅鎖華　壊』」

壊はそう言い放つ。
時間としては数秒か、はたまた数十秒かそれくらいだろう。
それくらいの時間、辺りに静寂に満たされた。
突然、その場にいる殆どの男たちが顔を恐怖に染めたのだ。

「紅鎖華……壊……？誰ですかそれは？」

口の悪い男の塊の一人、男Cがそんな事を言った。
それに続くように男D、男Eも『誰だそいつ』みたいな顔をする。

「テメェら知らねぇのか？」

壊について知らない三人以外の男たちが、皆信じられないような顔で三人を見ている。
それを真面目な男が説明するかのように言う。

「……『紅鎖華　壊』裏じゃ『始末屋』として有名な男です。
その実力は、恐らく裏では最強、1位と言っても過言ではないでしょう。
金さえ積めば大抵の事を『始末』してくれます。それが例え記憶に関する事でも……ね。」
「……よく知っているじゃないか。
そこまで有名になっているとは思わなかったよ。」

話を聞いたC、D、Eも、先程と打って変わるように少し焦っている。

「な、何でそんな奴が俺たちの所に……」
「決まってんだろ、誰かが俺たちを始末するように依頼したんだよ。」
「その通り。ただ君たちを始末すると言う実に簡単な依頼だ。」
壊はそう言いながら、手の中グチュグチュと音を立てている肉片を投げ捨てる。
「言ってくれるじゃねぇか……簡単かどうか試して見やがれ!!」
口の悪い男はそう言いながら、胸ポケットから『拳銃』を取り出す。
そして、それに続くように、他の生きている男たちも拳銃を取り出した。
しかし、ただ一人、冷静だった男だけが拳銃を取り出さずに壊を睨み付けている。
口の悪い男が拳銃の先を壊に向け、その引き金を少しずつ絞り――
――パァンッ!!――
乾いた音が響くと同時に、壊の体が一瞬揺れてゆっくりと仰向けになるように倒れる。
「……ハ……ハハハ、何だよ、大した事ねぇじゃねぇか!」
口の悪い男がそう言うと、周りに居た他の男たちも呆気にとられたような顔から一転して声を出して笑い始める。
しかし……

「彼、『紅鎖華　壊』が裏社会で最強の称号を手に入れたのは、一つは彼の身体能力が化け物じみていたから。
そして仕事を絶対に成功させるために周りのターゲットを確実に仕留めていた。」

突然、真面目な男がそんな事を言った。
他の男たちは笑うのをやめて男の話に耳を傾ける。

「そしてもう一つは……」

真面目な男が言い切る前に、ムクリ、と何かが起き上がった。
それは、頭から血を流しながら倒れていたはずの『紅鎖華　壊』だった。
それを見た他の男たちは、一瞬何が起こったのか理解できないような顔をした。
壊が起き上がっても、真面目な男は話を続けた。

「……同じく、不死と言ってもいいほどの生命力を持っていたからです……。」
「う、うわぁぁぁぁぁ！！」

真面目な男が言い切ると、男Cが悲鳴を上げながら持っている銃で壊を撃った。
一発　二発　三発……それに続くように他の男たちも、口の悪い男も連射していた。
しかし、真面目な男だけは拳銃を取り出さず、ただ壊が撃たれている光景をずっと見ている。
やがて男たちは全ての弾を撃ちつくした。しかし……

「……非道いな、コートがボロボロだ。」

壊は倒れなかった。体の至る所から血を流していると言うのに、まったく動じない。
コートの端を持ち上げながらダルそうな目をしていた。

「それとそこの男。先程の話、一つ訂正してもらいたい。」

壊は、先程の話をしていた真面目そうな男を見てそう言い、コートから手を離す。

「『化け物じみた』じゃない。俺はな――――

回りの者が、目の前にいる壊の言おうとしている事に対して息を呑む。

――――化け物なんだよ――――

それが化け物がその場にいる全員に言い放った最後の言葉だった……

ーーーーSide壊ーーーー

「ふぅ……。」

現在、廃病院の物言わぬ骸を片付け（能力で地面に潜り込ませて、地面に潜らせたまま能力を解いて放置した）廃病院の外で偶々見つけたベンチで座っている。

しかし一人だと暇だな……

「隣、いいかしら？」

「……あぁ、構わないぞ、紫。」

突然後ろから紫が話しかけてきた。

紫は、ベンチの前まで回りこむと、開いている俺の横に腰を下ろす。

「どう、私の式との同居生活は？」

「それなりに楽しいぞ。ただ、式を休ませるために『お使い』と言って俺の所へ送るのもどうかと思うがな。」

「あら、やっぱり気づいてたのね。」

扇子を広げ、横で「ふふふ」と笑う紫。

「半分は勘だがな。あの札も、ただ文字を書いただけの札だろう？」

「えぇそうよ。

あの子、少し真面目すぎるのよねぇ……だからああでもしないと休んだりしてくれないのよ。」

「だからと言って俺の所へ送らなくてもいいだろう？」

記憶が戻ったら殺されるじゃないか。

「……それで、何の用だ？」

「ただあの子……藍の様子を貴方に聞きに来ただけよ。」

「俺に聞かないで見に行け。」

……そうだ、今のうちに話しておこう。

「紫、『楽園』の話だが……。」

「なに？行くのをやめるの？」
「違う。ただな……明日に行きたいんだがいいだろうか？」
「……ずいぶんと急ね？」
「まぁ、な。ここは暇で仕方ないんだよ。それに、早い方が君としても楽だろう。」
「そうね。明日の……昼頃に迎えに来るけれど、それでいいかしら？」
「あぁ、手間を掛けるな。今度何かご馳走しよう。」
「ふふふ。期待しているわよ。それじゃ、そろそろお暇させてもらう事にするわ。」

紫はそう言って立ち上がり、自分の真横にスキマを作る。
そしてそのスキマに入り、最後に俺に手を振るとそのままスキマを閉じた。
さて、俺も帰るとしようか……

「……で、何故君たちがここにいるんだ？」
「あ、壊さん、おかえりなさい！」
「お邪魔してます……。」
「おかえり、壊。」

何故か知らないが藍の他に、本来居る筈のない美冬と美夏が茶を啜っていた。
式の姿が見当たらないと思ったら、どうやら彼女たちが来た時に石に戻ったらしい。
苦労させるな……

「今日、お母さんもお父さんもお仕事でいないから壊さんの所に遊びに来たんだ。
そしたらさ、壊さんじゃなくて藍さんが出てきたからビックリしたよ。」
「今すぐ家に帰って宿題をしろ。」
「う、大丈夫だよ！明日やれば間に合うって！ね、美冬ちゃん？」
「ごめんねお姉ちゃん。私もう終わったから。」

美冬がそう言うと「美冬ちゃんの裏切り者！」と言いながら美夏が嘘泣きをし始めた。
頼む、帰ってくれ……

「……はぁ……。」
「溜息を吐くと幸せ逃げるよ……？」

美冬、溜息の元凶は君たちなんだぞ？

「まぁまぁ、壊。別にいいじゃないか。」
「さすが藍さん！！」

……まぁ、明日には会えなくなるんだから、別にいいかな。

「藍、そろそろ暗くなる。何か作ってくれ。」
「ん、そう言えば今日は私だったな。そっちの二人はどうする？」
「迷惑じゃなかったら……。」
「私も～。」

藍はそれを聞くと、一回微笑んでそのままキッチンに入っていった。
しばらくすると……

「ね、ね。壊さん。」
「何だ？」
「あの人、壊さんの恋人？」
向かい合うように食卓の椅子に座っている美夏がそんな事を聞いてきた。
「違う。彼女はちょっとした理由で家に泊めている友人だ。」
「そうなの？私てっきり壊さんの恋人かと思ってたけど……。ね、美冬ちゃん？」
「うん、私もそう思ってた……藍さん、美人だし……。」
ふむ、やはり藍は美人の類に入るのか。
「まぁ、どうでもいいさ。
そうそう、俺は明日になったらここを立ち去るからな。」
「「……え？」」
あの後、二人に『仕事の都合で転勤する』と言う説明で納得させた。
『楽園に行ってきます』なんて言っても頭のおかしい奴としか思われないだろうからな。
で、現在４人で藍の作った夕飯を食っている訳だ。
「藍さんって、料理上手だね～。」
「私、ここまで美味しく作れない……。」

「ありがとう。でも、壊の方が私よりずっと美味しく作れるんだぞ？」

……おい何だお前たちその顔は。

「……意外だね。」

「うん、そうだね美冬ちゃん……。」

やかましい。そんな感で、夕飯は明るく過ぎて行った……

「明日か……。」

自室の椅子に座り、ノートＰＣを立ち上げながらそんな事を呟く。
そのまま自分のお気に入りに入っているサイトを開き、裏隠しサイトに入る。
隠しサイトに繋げると、そのままＩＤとパスワードを入力し、ある操作をして自動終了の設定をする。
そして俺は、そのままベッドに潜り込んだ。

『始末屋』
このサイトを削除しますか？

↓はい
いいえ

第１３７話：それは突然の決心（後書き）

はい、そんなわけで終わりました。
一番最後のあれは少々わかりずらいですかね。
アレは、そのまんまの意味です。
次回は、幻想入りすると思われます。

第１３８話：さらば現代、そして楽園へ（前書き）

はい、今回は楽園へ！

第１３８話：さらば現代、そして楽園へ

「……今日、か……。」

自室で式たちを石に仕舞い、出かける準備をしながらそう呟く。
とりあえず、金をおろしてこよう。向こうで使えるかわからないが、無いよりかはマシだろう。
仮に使えなかったとしても、働けばいいだけの話だ。
ちなみに、藍はリビングで寛いでいたりする。

「行くか……。」

俺は藍に出かける事を伝え、式たちを連れて家を出た……

現在９時２５分。
先程銀行へ行って全財産をおろしてきた。
あまり使っていなかったらしく、大体３億近く貯まっていた。
ちなみに、その大金は連れて来たゲートの口に放り込んでおいたので盗まれる心配は無い。

そんな俺が何をしているかと言うと、片手に羊羹の入った袋を持って諏訪子たちのいる神社に向かっている。
今日で会えなくなるからな。昔からの友人に会いに行くのも悪くないだろう。
そんな事を考えながら歩いていると、諏訪子たちのいる神社、『守

矢神社』に着いた。
めんどくさいと思いながらも、石段を一段、また一段と上る。
やがて鳥居が見え、次に神社と、賽銭箱の近くで蛙跳びをしている金髪の少女が……ん？

「諏訪子、何をやっているんだ？」
「あれ、壊？と絶？そっちこそどうしたのさ。」

賽銭箱の近くで蛙跳びをしているのは諏訪子だった。

「……俺はお前たちと少し話をしたくなってな。お前は何故そんな所で蛙跳びをしているんだ？」
「ん、いや、まぁ……暇だったから何となく、かな？」
「昔の威厳の会ったお前とは似ても似つかないな。
……すまない、よく考えてみたら昔から無かったな、威厳なんて。」
「うっさい馬鹿！」

そう言いながら、蛙跳びの体勢をやめて立ち上がり、両腕をグルグルと回しながら突っ込んできた。
その攻撃を、諏訪子の頭を右手で押さえて止める。

「と、諏訪子。とりあえず、上らせて貰ってもいいだろうか？
先程言ったとおり少し話したい事があるのだが……。」
「む～……いいよ。丁度アマテラスも来てたみたいだし。」

そう言いながら諏訪子は腕を回すのをやめて神社の中に入る。
好都合だな。そう思いながら、神社の中に入っていく諏訪子の後を付いて行った……

「お久しぶりです。」

俺が茶の間に入ると、俺を見たアマテラスが丁寧にも頭を下げながらそう言う。

「遊びに来たのかい？」

そして部屋の中に居たもう一人、神奈子がそう言いながら茶を啜っている。

「久しぶりだな、アマテラス。それと神奈子もな。」

俺は二人にそう言うと、とりあえず近くの座布団に腰を掛ける。
そして、そのまま片手に持っている羊羹の入った袋を卓袱台の上に置く。

「それは何だい？」

「差し入れの羊羹だ。今すぐ食うなら、絶に頼んで皿を持ってきてもらうが？」

「そうだね。わたしは早く食べたいからお願い。」

「では私も……。」

「二人がそう言うなら私もお願いしようかねぇ。」

三人がそう言うので、俺は今の今まで肩に乗っていた絶に皿を持ってくるように頼む。
絶はそれを聞くと、コクリと頷いてふよふよと部屋を出て行った。

「相変わらず変わった式ですね……」

「今更じゃない？そう言えば壊、他の式はどうしたの？」
「あぁ、連れて来た。」
そう言うと、俺は懐から式の入った石を全て取り出す。
「……増えてないか？」
「かなり昔に増やしたからな。諏訪子、少しこいつらに息抜きをさせたい。
湖で放してきてもいいか？」
「別にいいけど……誰かに見られたりしないよね？」
「問題ないだろう。」
手の中にある石に少量の霊力を流し込み、全ての式を召喚する。
そのまま式たちに湖で息抜きをして来いと伝えると、全員が外に出て行った。
しばらくすると、絶が小皿を4枚持ってきたので羊羹を切り分けて小皿に乗せ、楊枝と一緒に配る。
「ご苦労。絶、お前もゲートたちと一緒に湖で息抜きをして来い。」
俺がそう言うと、再びふよふよと浮きながら絶は部屋から出て行った。
さて……
「そんな訳で話をしよう。」
「いや、どう言う訳だい？」
神奈子、余計な突っ込みはいらない。こっちは時間が限られているんだ。

「で、だな。今回俺が君たちに会いに来たのはだな、まぁ別れの挨拶をしに来たというか何と言うか……。」
「「「……は？」」」
羊羹を口に運ぼうとした諏訪子はその動きを止め、神奈子は湯のみの茶が零れるか零れないかのギリギリの位置で口の近くに止め、アマテラスは俺を見ながら唖然としている。まぁ要はつまり、全員の動きが止まった。
「……って事は何か、アンタまた何処かに行くわけかい？」
「まぁな。お前たちにも既に話した事だが、俺の力はまったくと言っていいほど戻っていない。
俺としても、本来の力が戻っていないのは微妙に嫌でな。
だから『ある場所』に行って力を完璧に取り戻そうと思っている。」
「……なるほど、その場所に行くために、ここを離れてしまう訳ですね？」
「まぁそうだな。」
それに、ここだと暇だしな。紫の言う『楽園』の方が何倍もおもしろそうだし、退屈もしのげそうだ。
「ねぇ、いつ行くの？」
「今日の昼頃。」
「……もうすぐじゃん。今11時だよ？」
む、そうなのか。今気づいた。腕時計なんか持ち歩かないからな。
「さて、ここからが本題だ。」
「？何がだ。」

俺は一度、自分の前に置かれている湯飲みの茶を啜る。……ふぅ。

「……俺と一緒に来る気はないか？」

「……何だって？」

「この時代じゃ信仰なんてものは中々集まらない。

それは人間たちが『神』ではなく『科学』を信じきっているからだ。

これから俺が行く場所は『妖怪』と『幻想』の生き物がいる。

それはつまり、向こうでは妖怪が力を失わないほど恐れられているという事だ。」

「……つまり？」

「つまり、『神』と言う『幻想の存在』も、間違いなくここよりも信じられている訳だ。

今の君たちはいつ消えてもいいくらい相当弱っているはずだぞ。

ここにいるよりも、俺と共に来て向こうで信仰集めしたほうがいいと思うと言う事だよ。」

一頻り話し終えた俺は、再び茶を啜る。……はて？俺の羊羹が無くなっている……

「……やめて置くよ。」

羊羹が何処に消えたか考えていると、諏訪子がそう言った。と言うかお前、自分の皿の羊羹を食っていないのに、何故羊羹が口元に付いているんだ？俺のを食ったな？

「わたしたちはもう少しここで頑張るよ。ね、神奈子？」

「そうだねぇ。確かに信仰はそこまで集まらないけど、まだまったく集まらない訳じゃない。

それに、『あの子』の事も心配だしね。」

「……東風谷　早苗か。意外と過保護だな、君たちも。」

「うん。」
「私も、今は遠慮しておきます。」
「そうか……まぁ、無理に連れて行こうとは思わない。君たちがその道を選んだのなら、俺は止める気は無いさ。」
「ん、そっか。」
「あぁ。……ところで諏訪子、俺の羊羹が無くなっているんだが、何処にあるか知らないか？」
「え？知らないよ？」
「そうか。ところで、羊羹は美味かったか？」
「うん！……ハッ！？」

満面の笑みで返事をした諏訪子だったが、自分の皿に乗っている羊羹を食い忘れたのを思い出したのだろう途端に冷や汗を流す。
別に食われても大して気にはせんからいいんだがな。
とりあえず、ただ何となくと言う理由で諏訪子にデコピンをし、再び神奈子たちと話をした……

「……さて、そろそろ帰らせてもらおうか。」
「ん？もう帰るの？会えるのも今日で最後なんだからもっとゆっくりして行けばいいのに。」
「そうは言ってもな……もう1時じゃないか。そろそろ迎えも来るだろうから、やはり帰らせてもらいよ。」

そう言って、俺は立ち上がる。最後に諏訪子の頭をポンポンと軽くなでる。……ついでに、羨ましそうな目で見ているアマテラスの頭もなで、そのまま部屋から出る。
俺の後を続くかのように、他の三人も一斉に立ち上がった。

「また会えるよね？」
「さぁな。死ななければ会えるんじゃないのか？」

諏訪子の言った事に対しそう答え靴を履く。
2～3回靴の先で地面を蹴り、靴の調子を確かめてから三人に向き直る。

「そうだ……。」

不意に、アマテラスがそう言うと、アマテラスの姿がその場から消えた。
……何処にいるのかわからなければ、気配も、神力も、息遣いさえも感じられない。
しばらくすると、アマテラスが俺の横に現れた。
その顔は、少しだけだが何故か朱色に染まっている。

「ふふふ……これが今の私が出来る事です。」

そう言いながら、先程まで何かがあったかのように俺の右頬を指でなぞる。
……一体何をしたのだろうか？それに右頬に若干違和感が……

「ふふふ……。」
「おい、いい加減に指で人の頬をなぞるのをやめろ。」

先程から、前方にいる二人から殺気が放たれているの……
俺がそう言うと、アマテラスは若干残念そうな顔をすると俺の頬から指を離した。

「じゃあな。」
「うん。」
「はいよ。」
「ではまた。」

最後にそう挨拶し、俺は石段を降りた……式たちを迎えに行くのを忘れてたな……

式たちを迎えに行くのを忘れたので、再び嫌々ながら石段を上る。再び鳥居を潜ると、三人ともいなくなっていた。意外と薄情だな……そう思いながらも神社の裏手にある湖に向かうと、俺の式たちは釣りをしていたり昼寝をしていたり泳いでいたりしていた。

「お前ら、帰るぞ！」

そう言って式たちを石に戻して懐に仕舞い、絶を肩に乗せ、そのまま身を翻して家に「はぁ～い」……

「……せめて家に帰るまで待つと言う選択肢はないのか？」
「嫌よ。」

堂々と俺の目の前でスキマを開いて出てきた紫にそう言いながら溜息を吐く。

「で、もう行くのか？俺は家に帰って藍と行こうと思っていたのだが？」
「大丈夫よ。もうスキマ送りにしたから。」

「……」

紫の事だから、絶対に何の説明もなしでスキマに落としたんだな。
せめて一緒に暮らしていた時の事で礼を言いたかったんだが……

「……まぁ、また会えたらするとしよう。」

「？」

「何でもない。さ、俺をその楽園とやらに連れて行ってくれ。」

「はいはい、それじゃ、一名様ごあんな～い♪」

似合わない、と言おうとしたら、不意に身体が浮く。
そしてそのまま下に向かって落下した。そう、つまりスキマに落ちた訳だ。
相変わらず不気味な空間、あるのは目、目、目……
この空間の先に、その楽園とやらがあるのだろうか？だとしたら、その楽園は一体どれだけ俺を楽しませる事が出来るのだろうな。
そんな事を考えていると、落下中の下の方に明るい出口が見える。
そして少しずつその出口に落下し、スキマから外に出た。……着地失敗、頭から地面と思わしき場所に突っ込んでしまった。
埋まっている頭を何とか引っこ抜き、軽く振って辺りを見わたす。

「森……だな。」

そう、森だ。少々薄暗い森だった。

「どう、初めて見た『楽園』の感想は？」

そんな声が聞こえると共に、紫が俺の横に隙間を開いて出てくる。

「……少々暗いという事ぐらいだな。後、弱い瘴気が発生していて

少し気分がいい。」
「そう、でも貴方が行くのはこの奥よ。私が案内するから行きましょう？」

紫はそう言って俺の前を歩いた。慌ててその後に付いて行こうと、頭に付いている土を払って立ち上がる。

「あ、言い忘れていたわ。」
「？何だ、急に立ち止まって。」

紫は何かを思い出したように立ち止まり、身を翻して俺を見る。
そして扇子を取り出し、口元を隠すとこう言った。

――ようこそ『幻想郷』へ　幻想郷は全てを受け入れるわ――

それはどこか怪しい、そして優しい笑みだった……

第１３８話：さらば現代、そして楽園へ（後書き）

そんな訳で幻想入りした壊でした。
次回は、この続きから書きたいと思います。
ついでに、アマテラスが壊に何をしたかわかりましたかね？

わからない人のためのヒント

壊の右頬にアマテラスが何かをした　以上

今更だけどこの作品で疑問に思うかもしれない事や設定を説明する回（前書き）

そんな訳でこの作品で疑問に思うであろう事を書きたいと思います。

今更だけどこの作品で疑問に思うかもしれない事や設定を説明する回

その1『壊の付けている腕輪について』

白と黒「誰もが一度は疑問に思ったかもしれない。
『あの腕輪、壊の腕輪の付いている方の腕が吹っ飛ばされた時とかに力は解放されないのか？』
ズヴァリ！お答えしよう。おい主人公～。」

壊「呼んだか？」

白と黒「うん呼んだ。上の事のついて説明してっちょ。」

壊「……わかった。瑠璃から聞いた話だが、この腕輪は『俺自身が外さないと』効果がないらしい」

白と黒「……はい？」

壊「つまり、いくら腕輪を付けている方の腕を吹き飛ばされようが、体を木っ端微塵にされようが、腕輪その物を破壊されようが、俺自身が『腕輪を外す』と言う行為を行わなければ抑えている力は出てこない。」

白と黒「じゃ何？他の誰かが外しても何の意味もないわけ？」

壊「その通り。ついでに言っておくと、腕輪の付けている方の腕を切り落とされた場合、腕輪は俺が新しい腕を生やすまでずっと前の腕にくっ付いている。
俺が新しい腕を生やすと、いつの間にか古い腕から新しい腕に付い

ている。」

白と黒「……地味に怖いね。んじゃ次～。」

その2　『凶鳥化について』

白と黒「壊本来の姿は凶鳥（クックル）な訳だけど、何で本来の姿に戻るのに態々力を解放しないといけないわけ？」

壊「そうだな……簡単に言うと、ずっと昔に俺がそうした、としか言いようがないな。」

白と黒「……はい？」

壊「本来の姿は凶鳥な俺だが、やはり前世の姿に名残があってな。それで、人間になった時、自身にちょっとした細工をした。凶鳥化する時は一定以上の力を出さないとなれないと言う……言わば封みたいなものを自身に掛けた。」

白と黒「なんで解かないの？」

壊「封を掛けてからどうやっても解けなくなってしまったんだ。」

白と黒「……え？お前馬鹿なの？」

壊「やかましい。あまりにも複雑にしすぎて、晴明にも解けなかったんだ」

白と黒「別の意味で凄ぇよ。じゃ次。」

その3　『能力について』

白と黒「はいお願い」

壊「適当だな。なら今回は『潜と浮を司る程度の能力』について話そう。
この能力は……まぁ、そのまんまだ。重力を操る事も出来たり、回りの空気に潜り込んで一体化する事も出来る。
やろうと思えば他人の記憶に潜ったり、その他人に別の記憶、または感情を潜り込ませる事も出来る。」

白と黒「つまり他人の記憶を自由自在に改善する事が出来るんだ。現代でもそれを応用した？」

壊「いや、現代にいた時は何故かそこまで能力が器用に使えなかった。
たぶん、能力も所詮『幻想』のものだから『科学』を信じている現代じゃ上手く使えなかったんだな。」

白と黒「いや、もう一つの能力で家具とかバンバン創りまくってたじゃん。」

壊「あぁ、あれも微妙に質が落ちていたりしていた。」

白と黒「ふ～ん。何かその『潜と浮を司る程度の能力』を使えば他人の思っている事を簡単に表に出せそうだな。」

壊「できるぞ。よっぽどの事じゃない限り、そんな事しないがな。」

白と黒「そうかい。んじゃ次～。」

その４　『壊たちの強さはどれくらい？」

白と黒「これは俺が答える。」

壊「……まぁ、妥当だな。それでは頼む」

白と黒「んじゃランクはＳＳＳからＥを基準につけるわ。」

『紅鎖華　壊』（腕輪着用で全力）

攻撃力　Ｃ＋

防御力　Ｃ＋

霊・妖・魔力　Ｂ

素早さ　Ｃ＋

白と黒「こんなもんでしょ」

壊「……わりと低いな？」

白と黒「いいのいいの。んじゃ次」

『紅鎖華　壊』（腕輪を外して凶鳥化しないで全力）

攻撃力　Ｓ＋

防御力　Ｓ

霊・妖・魔力　Ｓ＋

素早さ　Ｓ

壊「おい、一気に跳ね上がったぞ。」

白と黒「気にしない気にしない。だってこの状態のお前って全体の５割でしょ？」

壊「まぁ……そうだが。」

白と黒「だったらこれくらい跳ね上がっても大丈夫だって。そんな訳で次」

『紅鎖華　壊』（凶鳥化）

攻撃力　測定不能

防御力　測定不能

霊・妖・魔力　測定不能

素早さ　測定不能

壊「もうランクも何もあったもんじゃないな。」

白と黒「いや、真面目にわかんないんだってば。」

壊「まぁいい。これで終わりだな」

白と黒「いやいや、どうせなら式たちのも載せてやろうよ。」

壊「……そう言うえばそうだな。あいつ等が俺を基準にしてどれほど強いか知らない。」

白と黒「はい、んじゃ式一同～。」

『絶』

攻撃力　Ａ＋

防御力　Ａ＋

霊・妖・魔力　Ａ＋

素早さ　Ａ＋

『ゲート』

攻撃力　A

防御力　SS

霊・妖・魔力　A＋

素早さ　B＋

『ナイア』

攻撃力　S＋

防御力　B＋

霊・妖・魔力　B＋

素早さ　S＋

『ニオ』

攻撃力　S＋

防御力　C

霊・妖・魔力　S

素早さ　Ａ＋

『クロック』

攻撃力　Ｂ＋

防御力　Ｂ＋

霊・妖・魔力　ＳＳ

素早さ　Ａ

『ゼク』

攻撃力　Ａ

防御力　Ｂ＋

霊・妖・魔力　Ａ－

素早さ　ＳＳ

白と黒「どうよ？」

壊「よくわからんな。結局、一番強いのはどいつだ？」

白と黒「ん～、たぶん絶じゃないかね？一番パラメーター安定してるし。全部Ａ＋だぜぇ？」

壊「……そう言えばゲートは戦う時、よく結界を張っていた気がするな……それで防御力が高いのか。」

白と黒「そうだよ。ここじゃ本編で説明しなかった事とか書いてるから、読者はわからなかっただろうけど。」

壊「ちゃんと書け。」

白と黒「いいの。後付設定の方が、たまにやりやすい時があるの。」

壊「……」

白と黒「じゃ、もうここで終わり～！他にもわからない事があったら、どんどん言ってください。こう言うコーナー作って、『答えられる』範囲で答えますから。今後とも『東方凶鳥記』をお願いします。」

壊「ではまた。」

今更だけどこの作品で疑問に思うかもしれない事や設定を説明する回（後書き）

今回は、作者が本編では語らなかった壊の事について色々説明しました。
上でも書いてあるとおり、何か疑問になった事は活動報告のコメントからでもいいんで言ってください。答えられる範囲なら全て答えます。
ちなみに、

八雲　紫　（昔壊と出会ったばかりの頃）

攻撃力　C＋

防御力　B＋

妖力　A

素早さ　C＋

こんな感じ。防御力が高いのは、その頃から結果が得意分野だったから。今は……昔とは比べ物にならないほど強くなってます。

第１３９話：ここは幻想郷（前書き）

今回は、ほんのちょびっとだけ原作キャラを出します。

第１３９話：ここは幻想郷

森の奥へ進みながら時折紫と話をする。
この楽園、名を『幻想郷（げんそうきょう）』と言うらしい。
遥か昔、紫が『妖怪と人間が共存できる世界』を夢見て創った。
その理念は、来る者を阻まず去る者を追わず、気が付いたら神やら妖精やら色々暮らしていたそうだ。……妖精には会ってみたいな。

「壊、この森に入ってから調子はどう？」
「そうだな……かなりいいな。」

森の奥を進めば進むほど瘴気が濃くなり、その瘴気が濃くなればなるほど身体に力が戻ってくる。
恐らく、ただの気のせいかもしれないが、少なくとも俺にはそう感じられた。

「そう。でも奥にはここは比べ物にならないほどの瘴気が充満しているわよ？」
「ほぅ……それは楽しみだ。まぁ、それはいいとして……」

そう言いながら地面でヨタヨタと動き回っている物に目を向ける。
見た時からずっと気になっていた。

「これは何だ？」
「キノコ。」

それはわかる。だがキノコはそこら辺を動き回ったりしないし、ましてやこんな気色の悪い口は付いていない。

「私にもよくわからないけど、森の瘴気に中てられた茸は大抵そうなっているのよ。」

紫が顔を少し後ろに向けるようにしそう話す。

この森の瘴気は好きになれそうだが、この気色悪い茸たちは好きになれそうにないな。

……いや、案外食ったらいけるかもしれん。今度試してみよう。

気色悪い茸の傘を摘みながら、心の中でそう思った。

道中、気色悪い茸やパッと見は普通の茸を拾いながら紫の後を付いて行く。

「ここよ。」

そう言って、紫が立ち止まる。どうやらいつの間にか目的地に着いていた様だ。

確かに最初にいた場所とは比べ物にならない。

「どう？」

「……あぁ、実にいい場所だ。」

向こうにいた時よりも、少しずつだが確実に力も戻っている。

ただ……

「茸が駄目になってしまったな。」

さすがにここの瘴気に耐えられなかったのか、持ってきた茸が全部黒く朽ちてしまった。
あぁ……一番期待していた緑色の黒い小さな斑点が二つ並んだ茸まで朽ちてしまうとは……

「よく食べようと思ったわね……。」
「ゲテモノを食う勇気は大切だぞ。」

どこかのアニメでも言っていたじゃないか。グロイ物ほど食ったら美味いと。
それにちなんで怪しい物ほど食ったら美味いと思った訳だ。

「……まぁいいわ。それよりも、ちょっとアレを見て。」

紫はそう言って少し手前の方を指差す。そこには木製の家が建っていた。
大きさとしてはそこまで大きくなく、かと言って別段小さい訳でもない。言ってしまえば普通の家だ。懐かしいな……

「一応、住居はこちらで用意しておいたわ。もし気に入らないのなら他のを用意するけれど？」
「いや、あれでいい。これ以上手間を掛けさせるわけにもいかないからな。」

そう言い、俺は用意された家に近づく。……まだ新しいな。木造製の……そうだな、どこかコテージに似ているかもしれない。二階建ての。そのコテージのドアを開けて家に入る。
内装は、入って中央に二人は座れそうな白いソファーが向かい合うように二つ。
そしてそのソファーの間には、横テーブルが置かれている。

隅には観察植物と思わしきものが一つ置いてあり、ソファーの向こう側にはダイニングキッチンの部屋がある。

「思っていたよりいい家だな。」

「あら、それなら頑張った甲斐があったわね。」

純粋に心から思った事をそのまま呟くと、紫が後から続いてコテージの家に入ってきた。

紫は、そのままソファーまで移動すると腰を下ろす。

「入ってきて早々寛ぐのもどうかと思うがな？」

「いいのよ。寛ぐためにあるようなものなんだから。」

……まぁいい。それより……

「紫、さっそくで悪いが、この辺り一体の地理を教わりたい。」

「意外ね。貴方なら私に聞かないで自分で歩き回って覚えると思っていたのだけれど……」

「歩き回って道に迷ったら洒落にならん。いいから早く教えろ。」

「しょうがないわねぇ……とりあえず、貴方も座りなさいな。」

紫がそう言うので、俺は言われたとおり向かい側のソファーに座る。

そして俺が座ったのを確認した紫は自分の真横にスキマを開き、ゴソゴソと漁ると紐を括って丸めている紙を取り出した。

括り付けられている細い紐を解き、それをテーブルの上に広げる。

紙には、おそらくこの幻想郷とやらの地図であろうものが描かれている。

「まずはこの幻想郷の主な場所を説明するわ。しっかりと頭に叩き込みなさい！」

「よし来い！」

……我ながら馬鹿なやり取りだな……

さて皆の者。現在俺は、紫の地理授業で詳しく教わった魔法の森の外を歩いている。

あの後、まだ時間もかなり余り、どうせなら少しでもこの幻想郷を見て回りたいと思ったので家を出た。

ちなみに、俺は魔法の森の南側から出て『人里』に向かっている。

何でも、名前の通り『人間』が暮らしているらしい。そして妖怪は、『人里』の中にいる人間たちには決して手を出してはいけないと言うルールもあるそうだ。

「ん？」

しばらく歩いていると、かなり遠目にだが人里が見えてきた。見えてきたのだが……

「行くぞ！お前ら！！」

『オォォォォ！！！』

何故か妖怪の集団が、人里の門より少し離れた位置で雄叫びを上げている。

……人里に攻め入るのだろうか？まぁ、全ての妖怪が幻想郷のルールを守るとは限らないからな。

そうだな……

「……今日は気分がいい。紫には言われたが……」

靴の先で軽く地面を2回ほど蹴りながら霊力を込め、そのまま……

「見物するくらいならいいだろう。」

妖怪たちが向かう人里の近くに生えていた、やけに立派な木の上に飛び乗る。

妖怪たちに気付いたのか、人里の門にいた二人の見張りのうち一人が、人里の中に入って行く。

人里で仲間でも呼ぶつもりなんだろうか？精々頑張るんだな……

ーーーSide先生ーーー

これは違うこれは合ってるこれは違う……ん、これは三角だな。

目の前にある紙に書かれている問題の解答に〇や×、微妙なのには三角を付ける。

やはり子供たちの成長を見るために筆記と言うのは大切だ、少なくとも私はそう思う。

「先生、大変です！！」

突然、そんな声と共に引き戸が勢いよく開けられて音がし、次に渡り廊下をドタドタと誰かが走る音がする。

そして私の部屋の襖が、これまた勢いよく開けられた。

襖を開けたのは、この人里に住んでいる、昔寺子屋の生徒だった大工屋の息子だった。

「ぜぇ…ぜぇ……せ、先生、大変です……。」
「わかったから少し落ち着け。何をそんなに急いでいるんだ？」
肩でぜぇぜぇと息をしながら大粒の汗を流している大工屋の息子にそう言い、何とか落ち着かせる。

「よ、妖怪が……襲撃を……」
「なに！？今日の見張りはどうした！」
「……一人が俺たちに知らせに来てくれて何人かの奴らを連れて行きました。
俺も行ったんですけど『お前は先生を呼んで来い』って親父に言われて……。」
「それでそのもう一人はどうしたんだ？」
「少し腕を怪我しただけで無事でした。それよりも、先生も早く行きましょうよ！！」
「わかった！」

そう言い、急いで大工屋の息子と寺子屋を出て、そのまま現場まで向かう。
皆、無事でいてくれ……ッ！！心の中でそう願いながら妖怪たちの所へ向かった……

「……これは、一体……。」

目の前に広がる光景を見て、少し動揺した。
まず、戦っていた人里の者たちは、全員が近くに生えている木に寝

かされており、そして襲撃しに来た妖怪たちは……

「死ネェェェ！！」「殺シテヤル！！」

「おっと……危ないな。そら、次は右だ。出だしが遅いぞ。」

一人の男を囲むように戦っている。いや、戦っている、と言うのは少し間違っている。

妖怪たちは、男に『遊ばれている』。既に倒れている妖怪たちもおり、もはや原型を留めていない妖怪もいる。

男は、襲ってくる妖怪たちをその手で、足で、次々と倒していく。

男がその腕を振るい、妖怪の一匹が木っ端微塵に吹き飛ぶ。

本来ならその光景は恐れられるべきのものなのだろう。だがしかし

――――――

「どうした？俺を殺すんじゃなかったのか？」

――――私はその光景に魅入っていた。

男にしてはほんの少し長めの白い髪が揺れ、楽しそうな紅い瞳と口角を少し吊り上げた薄っすらとした笑み。

妖怪たちの攻撃を後ろ、横に跳んでかわす度に黒い服の裾が揺れ、時折反撃をしているのはまるで踊っているかの見えた。

そして、反撃された妖怪たちの血が、男と一緒に踊るかのように宙を舞う。

赤黒く不気味なはずの血が、太陽の日を浴びて光り輝き美しい『幻想』を作る。

もはや妖怪たちの叫びや、男の声などは関係なくその光景に見入ってしまう。

「せ、先生置いて行かないでください……先生？」

「……え！？あ、居たのか。すまない。」

「非d『ワァァァ！！！』え？ゲハァ！！」

と、大工屋の息子が何かを言い切る前に妖怪がこちらに向かって飛んで来た。

飛んで来た妖怪に当った大工屋の息子は、そのまま妖怪と一緒に里の門にぶつかって気絶した。……たぶん大丈夫だろう。

男の方を見ると、どうやら今飛んで来た妖怪で最後だったようで、顔に付着した血を服の袖で拭っていた。

男の事を改めてみる。先程述べたとおりの白い髪、紅い瞳。長身で全身を黒い服で固めている。

手にも黒色の手袋を嵌めていて、先程の薄っすらとした笑いはもうしていない。

辺りを充満している血の臭いに思わず顔を顰めてしまったが、とにかく、あの男に里を救ってもらった礼をしたい。

そう思い……

「すまない、少しいいかな？」

私は男に話しかけた……

ーーーSide壊ーーー

木の上から見ていたが、やはり見ているだけと言うのは暇になってしまうもので、つい手を出してしまった。

邪魔な村人を軽く気絶させ、適当に木の側に放り投げて、そのまま妖怪で遊ぶ。

すると、改めて自分の力が少しずつだが戻っていると言うのがわかった。
やがて場にいた妖怪たちを全て片付け、顔に付いた血を拭っていると……

「すまない、少しいいかな？」

……女が話し掛けてきた。
容姿は、腰まである少し青のメッシュが入った綺麗な銀髪。
頭にはおかしな赤い横文字のような絵が描かれ、天辺に赤いリボンが付いている青い……帽子、なのか？
瞳の色は黒っぽい感じで、服装は青の上下繋がったスカートのような、はたまたワンピースのような物で、胸元の辺りを開けていて、これまた赤いリボンが付けられている。
袖は短く白い。スカートの先は幾重にも重なった白いレースが付いている。……長いな。
ちなみに、帽子の形は、三角形と四角をくっ付けたような物だ。

「……何か用か？俺は今すぐ帰って体を洗いたいんだが？」
「そう言わないでくれ。とりあえず、お互い自己紹介と行こう。私の名前は『上白沢慧音（かみしらさわけいね）』よろしく。
妖怪の襲撃からこの人里を守ってもらった事に礼を言いたくて話し掛けた。」
「……俺は……」

と、自分の名前を言おうとした時、出かける前に紫に言われた事を思い出した。

――――回想始まり――――

「壊、一つ言って置きたい事があるの。」
「なんだ？」
「貴方、今はあんまり幻想郷の住民と関わりを持たないで欲しいのよ。」
「……何故？」
「壊、貴方は自分じゃわかっていないかもしれないけれど、本来ならとても力を持った存在よ。
それこそ、この幻想郷を変えられるほどの力を持っているわ。
もし鬼とかに目を付けられて貴方が戦って勝ったら、この幻想郷のパワーバランスが崩れる可能性があるのよ」
「……つまり、幻想郷のパワーバランスが心配だからなるべく知らない奴との関わりを避けるように、と？」
「そう言う事。でも、ずっと誰かと関わりを絶つと言うのもアレだから、私がいいと言うまで我慢してくれればいいわ」
「……承知した。知り合いの場合ならいいか？」
「えぇ、それなら構わないわ。じゃ、行ってらっしゃい。」
「行ってくる。」

――――回想終了――――

「……。」

正直、幻想郷のパワーバランスが崩れようが俺には関係ないが、紫の頼みならおとなしく聞くとしよう。

「どうかしたのか？」

どうやってこの場を切り抜けようか考えていると、心配になったのか女……慧音とか言ったか？
慧音が下から覗き込むように話し掛けてきた。

「いや、何でもない。それよりこれから用事があってな。悪いがお暇させてもらう。」
「え、ちょ……！！」
俺は能力で素早く、それはもう本当に一秒と言ってもいいほどの速さで地面に潜り、その場から離脱した……

「戻ったぞ。」
「あら、お帰りなさい。結構遅かったのね？」
あの後、慧音の前から消えた（逃げたんじゃない）俺は、再び魔法の森に戻って彷徨っていた。
意外に迷いやすかったなこの森。
だがまぁ、そんな事よりも気になったのが、あの慧音とか言う女……

「……さて、何か作るとしよう。紫、この家に食材はあるか？」
「えぇ、さっき私がスキマで運んだのが厨房に置いてあるわ。」
「そうか、なら作ってくる。お前も食っていくか？」
「……そうね、お願いできるかしら？」
「わかった。」

そう言い、俺は紫が座っているソファーを通り過ぎてキッチンまで向かう。
本当に……

「この幻想郷には色々いるみたいだな……。」

紫には聞こえない音量でそう呟き、キッチンに入った……

第１３９話：ここは幻想郷（後書き）

そんな訳で慧音先生です。
と、ここで読者の皆さんに聞きたい事が。

次の話、時間を一気に飛ばすか、それとも飛ばさずに昔の友人とかに会わせるか、どっちの方がいいでしょうか？
活動報告コメントに詳しい事を書いておくんで、できれば答えてください。お願いします。

第１４０話：花畑（前書き）

タイトルでわかる人はわかりますかね。

第１４０話：花畑

幻想郷に来てからもう三日が経った。俺は三日間、魔法の森の中をただ只管歩き回ってこの森の地理を頭に叩き込んだ。
ちなみに、なるべく他人と関わらないために人里には近寄っていない。

特に『妖怪の山』と『旧地獄』もとい、『地底』にはあまり近づいてほしくないと紫が言っていた。
『妖怪の山』は、『天狗』がいるらしく、『妖怪の山』にいる妖怪以外はほぼ回答無用で攻撃を仕掛けてくるらしい。
そして『旧地獄』、『地底』は、地上に忌み嫌われし者の集う場所らしく、ここでは地上にいる者を殆どの者が歓迎してくれないそうだ。下手したら行った途端にけんかを吹っかける可能性があるそうだ。しかも、紫自身も『地底』とはあまり関わらない。

仮に行って敵意ある攻撃をされたとしても、攻撃してきた奴を片っ端から始末してしまえば済む話だがな。
まぁ、友人の忠告なので、今は大人しく聞いておこう。

「そろそろ行くか……」

そう呟きながらソファーから立ち上がる。今日はこの魔法の森を出て他の場所へ行こうと思っている。
だがしかし、紫に言われたとおり知り合い以外に会う気はないし、紫に言われるまで誰かと関係を持つ気はない。
そう、『知り合い』になら会ってもいいわけだ。俺がこれから行く場所は、おそらくだがかつての友人がいるかもしれない場所だ。

「お前ら、少し出掛けて来るから留守番は任せたぞ。」

一階の部屋で寛いでいる式たちに向けてそう言い、俺は家の扉を開けて外に出る。

さて、久しぶりに『彼女』に会えるといいがな……と言うか居るといいな……

魔法の森を抜け、話し相手もいないので黙々と目的地へと向かう。

途中、鬱陶しい妖怪やら羽の生えた小さい少女などもいた。羽の生えていた少女は、たぶん紫の言っていた妖精だな。

妖力弾や霊力弾などを撃って来てとてつもなく鬱陶しかったので、こちらも仕返しに撃ってやった。

「あ、知らないのがいる～！」

と、くだらない事を考えていたらまた妖精がやって来た。今度は……6匹？だな。

「皆、行くぞ～！」

『おお～！！』

何とも気の抜けた掛け声と共に撃ち出される大量の霊力弾。ゲームで言う『弾幕』というやつだな。

ちなみに、『弾幕』とは、敵機が一度に大量の弾をぶっ放す攻撃の事だ。

避けるのも飽きてきたな……そう思いながら、右手に思いっきり霊力を込める。

そして右足を後ろに下げ、霊力を込めた拳を振りかぶり……

「寝てろ」

思いっきり振り下ろす。すると、右手に込めた霊力が大きく前方に広がり、妖精諸共弾幕を飲み込み、掻き消した。

シュウ……と辺りの焦げる音が聞こえ、妖精と弾幕が跡形もなく消える。

まぁ、別に構わんだろう。先程、妖精を木っ端微塵にしてみたらものの数分で蘇ったし、消えた妖精も放置しておけば元に戻るだろう。

勝手にそう納得し、再び目的までの道のりを歩いた……

「相変わらず見事な花畑だな……。」

目の前一杯に広がる花畑を見ながら、心の中で思った事を口に出す。

俺が目指していたのは『太陽の花畑』もう名前からして誰がいるのか何となくわかるだろう？

しばらく花畑を眺めていると、不意に後ろから地面を踏んで誰かが近づいてくる足音がする。

そして俺の真後ろでその足音が止まった。……この妖力、やはり期待通りの人物がいたみたいだな……

「この子達に何か用かしら？」

「いやいや、用があるのは君だよ。」

俺はそう言いながらゆっくりと身体を翻す。

そこに居た『彼女』は、どこか驚いたような、そして嬉しそうな表

情をしていた。

「久しぶりだな。」

彼女こそ、この幻想郷最強の一角であろうにして俺の友人――――

「幽香……。」

幽香は嬉しそうに笑みを浮かべながら、静かに涙を流していた……

ーーーーSide幽香ーーーー

出会いは、はっきり言ってしまえば最悪の出会いだった。
彼が私の花畑を眺めていて、その彼に私が戦いを挑んだのが出会いのきっかけ。
しかし、自分から戦いを挑んだにも拘らず、私は彼に負けた。

それからだった。私が彼に惹かれたのは。
殆ど笑う事はなく、表情もあまり変わらず、そして強く、どこか優しい。そんな彼に私は惹かれた。
だからだったかもしれない。ある日を境に、彼とまったく会えなくなった時、とても悲しくなった。

私は彼に会えなくなってから、彼の事を忘れようと必死になった。
忘れてしまえば、もう彼に会えないからと言って悲しむ必要なんてない。
そして知らず知らずのうちに『幻想郷』に辿り着いていた。

毎日花の世話をし、花と語り合い、充実した日々を送っていた。

でも、駄目だった。

少しずつ彼を記憶から消しても、いくら花と語っても、いくら花の世話をしても、何かが足りない。

私の心は決して満たされる事はなかった。

それでも私はその満たされない何かに気付けず、毎日を同じように過ごし、彼の事を少しずつ記憶から消していった。

しかし、今日、家の窓から花畑に男が立っていたのが見えた。

始めは人里の人間かと思い、人里の男だったらいつもと同じように人里に帰るように言おうと思っていた。

私は家から出て、花畑の男に近づいた。だがしかし、男に近づく度に、その男の姿に見覚えがあるように思えた。

心の中で男に疑問を持ちながらも、男の真後ろに立つ。

「この子達に何か用かしら？」

「いやいや、用があるのは君だよ。」

まずは軽く挨拶、そしてこの男がこの子達に危害を加えないか確認してから……そう思い、話しかけると、男は何でもないように私に用があると言った。

男の声を聞いた時点で、私は何かが胸に込み上げる感じがした。この声は知っている。

男はゆっくりと身体をこちらに向け、やがてその顔が見えた。

あぁ……私はこの男を知っている。いや、会いたかった。

１０００年以上もの間、会いたくても会えなくて、それなら一層忘れてしまおうと思っていた思い人……

「久しぶりだな。」

男は私の目を真っ直ぐに見つめながらそう言った。
それに対し、私は出来る限り笑顔を、心の底からの笑顔を作る。
男は私の上から見下ろすように見つめたまま、静かに、静かに……

「幽香……。」

私の名前を呼んだ。彼に自分の名前を呼ばれたのが嬉しくて、懐かしくて、心の底から熱い何かが目に込み上げる。
本当に、会いたかった――――

「か…い……」

――――思い人、『紅鎖華壊』の名前を呼んだ……

ーーーーSide壊ーーーー

「か…い……」

……幽香、何故俺の名前を言いながら泣くんだ?

「何だ?俺に会えたのがそんなに嬉しかったか?」
「えぇ、凄く嬉しいわ……」

いや、冗談で聞いたのだが……

「まぁ、何だ。とりあえず涙を拭け。」

そう言いながら能力でハンカチを創り、それを幽香に渡す。
幽香は、泣きながら、それでも笑顔を作って俺のハンカチを受け取ると、ハンカチで涙を拭く。
おい、何で涙を拭いているのに止め処なく流れるんだ。何でさっきの笑顔が消えて泣きそうな顔になってるんだ。

「……おい、泣くのをやめろ。」
「泣いて……ないわよ…ッ！」

いや、そんな涙をボロボロと零しながら言われても説得力なんてまったくない。

「まぁ、泣くなら泣け。」

俺はそう言いながら、幽香の頭に右手を乗せポンポンと撫でる。
泣きたい奴は涙が枯れるまで泣かせた方がいい。これが、今まで泣いている奴らを見て俺が出した結論だ。
それに、幽香は結構プライドが高いから、あまり心配すると逆に切れかねないしな。

「ッ……！」

幽香は、再び俺に顔を見せないように俯くと、肩を震わせて泣いた
……

「ねぇ、壊。」

もう既に泣き止んで花畑を眺めている幽香が、横に居る俺に話しかける。

「何だ？」

俺はそう言いながら横に居る幽香に顔を向け……ようとした。

しかし、不意に嫌な予感がし、顔を向ける前にその場から大きく横に跳んだ。

「あら、さっき弱くなってるって言ってたけど、そこまで弱くなってないみたいね？」

俺が居た場所には、幽香の傘が叩き付けられて地面に小さな穴が開いていた。

「危ないな、一体何のつもりだ？」

勘が鈍っていたら脳天が砕かれていたぞ。

「だって貴方さっき『封印されてた』って言ったでしょ？」

「言ったな。お前が泣き止んだ後に。」

「忘れなさい。……私ね、少し怒ってるのよ？自分を倒した相手が、陰陽師とは言え人間にやられたのだから。」

幽香は、そう言いながら傘を肩に乗せ、傘で自分の肩を軽く二回ほど叩く。……その辺の男よりよっぽど雄々しいと思ってしまった。

そして幽香は、紅い目を細め、口角を吊り上げると……

「……私が貴方の事、鍛えてあげるわ。」

そう言って俺目がけて突っ込んできた。
そして一瞬で俺の目の前まで来ると、両手で傘をを持って振り下ろす。
『ドスンッ！』と言う音が響く勢いで振り下ろされた傘を腕で受け止めると、足元が少し地面に沈む。
そのまま蹴り上げて幽香を攻撃するが、幽香は俺の攻撃を軽くかわして後ろに下がった。

「そこまで鈍ってないみたいね。」
「……今の俺が勝てるかわからないが…仕方ない、やるだけやってやる。」

お互いにそう言い合い、再び戦闘が始まった……

第１４０話：花畑（後書き）

はい、そんな訳で、今回は幽香さんでした。
最初は、別の……昔のオリキャラとか出そうかなと思ったんですが、個人的には一番わかりやすい幽香さんにしてみました。
次回は、本格的に戦闘シーンありです。……壊、勝てるかな？

第１４１話：凶鳥と花（前書き）

まぁ、見てください。

第１４１話：凶鳥と花

幽香の拳が俺の顔目掛けて飛んで来る。それを首を横に倒して避けるが、幽香は開いている手で、傘を振り回して今度は顔の横を狙ってきた。
何とか傘を片腕で防いで、その場から後ろに跳んで離脱する。……腕が折れた……。

「幽香、まさか本気で俺を殺す気じゃないだろうな？」
「大丈夫よ、手加減してるからたぶん死なないわ。」

いや、そういう問題じゃない。
まだまだ大丈夫、みたいな顔をしている幽香に心で突っ込みを入れ、改めて辺りを見わたす。
いつの間にやら先程の花畑からずいぶんと離れたようだ。
Wのように折れ曲がった腕を、手首を引っ張って無理やり元に戻す。
結構な痛みに、若干だが顔を顰める。

「……ずいぶんと無茶な治療をするのね？」
「君と戦うなら、霊力や魔力は温存して置きたいからな。」

幽香を相手にするなら、力の戻っていない今の俺じゃ間違いなく勝てない。
だからと言って、腕輪を外して戦えと言われれば、まだ2割戻ったか戻ってないか程度なので外す事は出来ない。
よって今の俺は、幽香から見たら雀の涙ほどの霊力や魔力で戦わなければいけない訳だ。
……世に言う無理ゲーだな。レベル1の主人公でレベル１００のモンスターを倒せと言っているようなものだ。

「考え事だなんて、ずいぶんと余裕ね！？」

幽香はそう言いながら、俺の目の前まで跳ぶと、そのままの勢いで先程同様、俺の顔目掛けて拳を出す。

それを、少し身を屈めて避け、右足で幽香の顎を蹴り上げようとする、がしかし、幽香は俺の足首辺りを掴んで自身の後方に放り投げた。

投げられた俺は、そのままキレイな放射線を描き、受身を取り忘れて地面……から出っ張っている石に頭を打ちつけた。

……頭が少し割れたな……

割れた部分を、人差し指でなぞるように触りながら立ち上がる。

「もう少し手加減してくれてもいいんじゃないか？」

「余所見してる方が悪いのよ。」

まぁ、それを言われたら納得せざるを得ないんだが……

「さて……」

ふと、幽香がそう言いながら傘の先端を俺に向けた。

……まさか……

「いい加減、貴方も疲れてきたでしょうから、今回はここで終わらせてあげる。」

幽香はそう言うと、ニヤリと口角を吊り上げて、赤い目を怪しく光らせた。

間違いない、殺す気だ！！幸いにも、彼女は本気を出す気はないよ

うだが、それでも今の俺にとっては間違いなく致命傷的なダメージを与えられる。
……まぁ、仮にも不死身だから死ぬ事はないだろうが、死ぬほどの痛みは味わうな。
さすがに死ぬ痛みを味わうのは嫌だ。

「喰らいなさい……。」

幽香がそう言うと、向けられた傘の先端に、妖力が少しずつ集まって行く。
どうせなら……

「……少しでも抵抗してやるさ。」

俺がそう言った途端、幽香の傘から光線が放たれた。

ーーーーSide幽香ーーーー

「……少しでも抵抗してやるさ。」

壊がそう言ったとほぼ同時に、私の傘の先端から妖力が壊目掛けて一直線に放出される。
傘の先端から放出された光線は、野原を荒地に変えるほどの威力を持つ。
その光線が壊を飲み込み、そして壊が居た場所を通り抜けて行く。
目の前が光線で光線で見えないが、おそらくこれじゃ壊自身も無事では済まないと思う。

まぁ、これは壊に対する『お仕置き』なので、死なないとは思っている。
そもそも、私を倒せるほど強かったのに、油断して陰陽師にやられたと言うのが気に食わない。
しかも封印されたせいで力まで弱体化したというではないか。それが許せない。

「（そろそろかしら……。）」

心の中でそう思いながら、傘の先端から発射される巨大な光線を見つめる。
すると……

「……捕まえ…た」

光線の中からそんな声が聞こえると共に、目の前の光線から一本の黒い手が伸び、出てきた。
手が出ると同時に、光線が少しずつ細くなって行き、やがて手を伸ばしている者が姿を現す。

「……」

消えた光線には、先程まで離れた位置にいたはずの紅鎖華壊が立っていた。
黒いコートがあちこちボロボロになっており、顔には先程地面から出ている石に頭を打ちつけた時に出た血がダラダラと流れている。
腕と肩はダラリと下がっている。

「貴方……」

「どうも俺は…簡単には倒れられなくてな……。」

そう言いながら壊は私の傘を手で払うように退かし、そのまま私の顔に手を近づけ――――

――――ペシリ、と私の額を人差し指で弾いた――――

「……え？」

「…すまんが力が出なくてな……これくらいしか出来んのだよ……。」

唖然とする私に対して、壊は楽しそうに、どこか勝ち誇ったような目をしながらそう言う。

いつもと同じような無表情をしているので、その目の変化に気付くのは中々難しい。

「…っと……」

突然、壊はそう言うと、ゆっくりとこちらに倒れ掛かってきた。

それを、巻き込まれて一緒に倒れないように、壊の身体を反射的に受け止める。

「ちょ、ちょっと！？／／／」

「……すまん。少し、寝かせてくれ……。」

私の問いに対し、壊はそう答えると、静かになった。

「…しょうがないわね……」

そう呟き、肩に頭を乗せているような体勢の壊を、そのまま肩を貸

すようにし、そのまま家まで運んだ……

壊を何とか家まで運び、家にあるベッドに寝かせる。
とりあえず、壊のボロボロになっている服を何とかした方がいい。
そう思い、寝ている壊の黒コートを脱がそうと手を伸ばす、すると
……

『ガシッ』

伸ばした手を、寝ている壊に掴まれた。そしてそのままベッドに引き込まれ、さらにそのまま抱き締められた。

「ちょ、何してるのよ!?　放しなさい!!／／／」

そう言いながら両手で壊の胸を押し返すが、押し返そうとすればするほどさらに抱き締める腕に力が込められる。
普段の彼からはとても想像がつかない行動に焦り、自分の顔が熱くなるのを感じた。
押し返そうとした時、不意に自分よりも上の位置にある彼の顔を見た。

「……ふふふ……仕方ないわね……。」

心地良さそうな顔をしながら寝ている彼の顔を見て、気付かぬうちに自然に笑みをこぼしながらそう呟いた……

ーーーSide壊ーーーー

……はて、何だか温かい感じが……それに何だろうか、何か柔らかい物に抱きついている気がする……そんな事を疑問に思いながら、閉じていた目をゆっくりと開いていく。
そして抱き付いているものに目を向ける。そこには……

「……」

幽香が俺の腕の中で眠っていた。何故？
そもそもここはどこだ？幽香の額を指で弾いたのは覚えている。その時から意識が曖昧……と言うか殆ど覚えていないんだが……。
それにしても、ずいぶんと心地良さそうに眠っているな……

「ん……ぅん……」

不意に、腕の中で寝息を発てていた幽香がモゾモゾと動き出す。
そして目を開き、起き上がると、指で目をゴシゴシと擦りながら辺りを見渡して最後に俺を見た。

「……おはよう……。」
「あぁ、おはよう。」

あの後、寝惚けている幽香に何とか起きてもらい、俺がどうなったかを説明してもらった。

何でも、幽香にデコピンをした後、そのまま気絶してしまい、その気絶した俺を放って置く事も出来なかったので、自分の家に運んでベッドで寝かせたらしい。ちなみに、ベッドに寝かせていた時には頭の血はもう止まっていると言っていた。
で、何で一緒に寝ていたかと言うと、俺が寝惚けて幽香をベッドに引きずり込んだからだそうだ。……すまん、幽香。

「それで、一つ聞きたい事があるのだけどいいかしら？」
「答えられる範囲なら構わんぞ。」

丸いテーブルを向かい合うように座って紅茶を飲んでいた幽香が話しかけて来た。

「どうして貴方は私の目の前に居たのかしら？」
「……つまり、何故俺があの光線の中移動して君の目の前にいたか、と？
まぁ、簡単な話、霊力や魔力を温存するのをやめて、光線が向かってくる前方に纏わせたり、回復に使ったりした。
ちなみにお前の目の前まで行った理由は、せめて一回は攻撃をしたかったから。」

俺の解釈としては、霊力が回復に使えて、魔力が魔法を使うときなどに使えて、妖力が幻術や防御方面に使える。
俺が説明すると、幽香は呆れた表情になりながら紅茶を飲む。

「よくそんな事やろうだなんて思ったわね……。」
「別に、こんな事、前まで日常茶飯事だったしな。いざとなったら、能力を使おうと思っていた。」
「……そう言うえば貴方の能力は何？私聞いた事ないのだけれど？」
「ん、言ってなかったか？なら秘密だ。自分で調べろ。」

「何でよ？」
「自分で調べて知った方が、後の達成感が味わえるぞ。」
どこか納得いかない、と言った顔をしている幽香を尻目に、出された紅茶を飲み干し、立ち上がる。
「帰るの？」
「あぁ、いい加減に帰った方がいいと思ってな。」
「そう、じゃ見送るわ。」
そう言い、幽香も立ち上がる。
そのまま外に出ると、幽香が『少し待ってて』と言ってそのままどこかに行ったが、しばらくすると戻ってきた。
「これ、貰ってくれないかしら？」
戻ってきた幽香は、そう言いながら俺に土の入った少し大きめの花壇と、何かの入った袋を渡した。これは……種か？
「まさか育てろと？」
「えぇ、貴方なら育てられるでしょ？」
「……まぁ、花は嫌いじゃないが、枯らしてしまうかもしれないぞ？」
「その時は真っ先に貴方を殺しに行ってあげるわ。」
「枯らさないように努力する。」
そんないい笑顔で物騒な事を言われたら絶対に枯らせられないな。
心の中でそう思いながら、俺は帰宅した……

第１４１話：凶鳥と花（後書き）

そんな訳で終わりました。
ちなみに、最後に渡された花は本編に出てくるかわかりません。
次回も昔の友人に会わせたいとも居ます。…数は限られてますけどね。

第１４２話：もう直せない、もう戻せない（前書き）

今回は、ちょいシリアスです。

第１４２話：もう直せない、もう戻せない

目の前に広がるのは真っ白な空間。夢…そう、これは夢だ。
何もなく、殆ど何も聞こえない空間で、真っ白な空間が広がっている。
唯一聞こえるのは、自分の息遣いくらいだろうか。
そんな、いつも見ているものとは違う夢。

「――――ねぇ――――」

不意に、自分の後ろから声が聞こえ、振り返る。
振り返ってみると何もなかったが、数秒経つと目の前の一部の空間がグニャリと歪みだした。
その歪みは徐々に中心に集まるように小さくなっていき、やがて人の形になった。
真っ白なワンピースに長い、金髪のロングヘアー。そして青い澄み切ったような奇麗な瞳。
片耳の千切れたウサギを大事そうに抱えている少女。
もうずっと前に前世で別れた初めての友人――――

「私と遊ぼ、凶ちゃん？」

――――岸島（きしじま）　蒼華（あおか）――――

人形を抱き締めながら、俺に微笑み掛けてくる。夢の中でも、昔と変わらない……いや、俺が奪ったせいで昔から変われない姿。

「凶ちゃん、どうかしたの？　具合でも悪いの？」
「……いや…何でもない。それよりも、何をして遊ぶんだ？」

心配そうに問いかけて来る蒼華に、若干戸惑いながらも言葉を返す。
蒼華は、俺が言った事に対して嬉しそうに笑うと、『ちょっと待っててね』とだけ言って俺の後ろに回りこむ。
俺は、蒼華を目で追うように後ろを振り向いた。
そこには、先程まではなかったぬいぐるみや人形に囲まれ、微笑みながら座っている蒼華がいた。

「凶ちゃんも座って一緒にお人形さんで遊ぼ！」

俺は言われるままに蒼華の近くに座り、人形に囲まれた。

「凶ちゃんはね～…はい、この子！」

そう言いながら蒼華が差し出したのは、鈴とリボンが着けられている、少しふさふさしたテディベア。
差し出されたテディベアを黙って受け取ると、蒼華は満足そうに近くにあったワニのぬいぐるみを掴み、そのワニで俺の熊に話しかけてきた。

「く～ま～さん、あっそび～ましょ～♪」
「……は～い。」

ワニのぬいぐるみを揺らしながら蒼華が楽しそうに言った事に、俺はくまのぬいぐるみでそう返した。
すると、何が楽しいのか蒼華は『えへへ～♪』と言いながら俺に微笑んできた。
蒼華が微笑むのを見た俺は、自然と心の中で何かが満たされて行くような感じがした。

『ピシッ！』

突然、そんな音が響くと共に、自分の回りの空間にヒビが入った。
ぬいぐるみや人形も、そして蒼華にも、自分以外のあるもの全てにヒビが入り、やがて鏡が割れるかのような音が再び辺りに響き渡ると全てが消え去り、塗り替えられたかのように、今度は真っ暗な空間が広がる。

「凶ちゃん……」

再び、後ろから蒼華の声が消える。しかし、先程と違い今度は弱々しい…苦しそうな声が聞こえる。
自分でも見たくないと思いながらも、しかし身体は勝手に動き、やがて座ったまま後ろを振り向いた。

「凶ちゃん……痛いよぉ……。」

そこに居たのは、仰向けに倒れながら白いワンピースを真っ赤に汚している蒼華だった。

「……ッ！蒼華ッ！」

一瞬呆然としてしまったが、蒼華の名前を呼びながら立ち上がり、蒼華に近寄る。
そして近づくとその場でしゃがみ、蒼華の頭を右手で支えるように持つ。

「…凶ちゃん…痛いよぉ…助けて……」

弱々しくそう言う蒼華に、俺は何とか助けたいと思い辺りを見渡す。

そしてふと、自分の空いている手に、いつの間にか何かが握られているのに気がついた。
恐る恐る自分の手を見ると、そこには鈍く光り輝く銀色のナイフが握られていた。

――ドクン――

心臓が大きく跳ね上がる。

――ドクン――

空いている左手が勝手に動き出す。

――ドクン――

勝手に動くナイフの握られた手が、苦しんでいる蒼華の腹の真上で止まる。

――ドクン――

ナイフが狙いを定めるかのように少し止まると、少し上に上がる。
……やめろ……

――ドクン――

そして少し上に上ったナイフが再び止まると、グッ、と勝手に自分のナイフを握り締めている手に力が篭る。
……やめてくれ……

――――ドクン――――

「凶……ちゃん……？」

もうやめてくれ……止まってくれ……

――――ドクン――――

「また……」

蒼華がどこか悲しそうに、寂しそうに俺の顔を見つめる。
そしてはっきりと、そして静かに言った。

――――また、殺すの？――――

腕が振り下ろされ、『ブシュ』と、嫌な音が響き、蒼華の腹から赤い液体が飛び散る。
それが俺の顔や腕、そして服に着く。また、殺した……俺が……また、蒼華を……

「そう、お前が殺したんだ、進。」

突然、横から声が聞こえたので少し上を向きながら振り向く。
そこに居たのは、腕を組みながら俺を見下ろしている親父がいた。

「親父……？」

「そうだ、お前の父、凶夜　陣。そして……」

親父はそう言いながらギリギリ俺に見えないくらい少し俯いた。
そして不意に、俺にだけにその顔が見えるように少しだけ上げた。
血に塗れており、片目は潰れ、まるで鬼のような形相をしており、
いつの間にか身体から錆びた鉄の匂いを漂わせている。
親父は鬼のような形相をしたまま、はっきりと辺りに響く大きな声
で言った。

『オ前ニ殺サレタ男ダァ！！！』

「ッ！！」

ガバッ！、と言う効果音が付くほどの勢いで起き上がる。
……ここは……あぁ、リビングか。そうだ、そう言えば昼に気分が
よくなってソファーで寝そべっていたら、いつの間にか眠ってしま
ったんだったな。
昼の事を思い出しながら、額の汗を拭う。

「……親父…か。」

夢で出てきた血塗れの親父を思い出す。
確かに、前世で、親父は……いや、親父だけじゃない。お袋も、俺
を殺そうとした使用人も殺した。
アレはそう……雨季の季節だっただろうか……

始まりはなんて事のない、ただ親父に『もう人を殺すのはやめたい』と伝えようとしただけだった。
もう疲れた、もう充分だった。泣き叫ぶ者も命を請う者も、悪人も善人も全て殺さなければいけなかった。
それが嫌になったので親父に言いに行ったのだ。

「ならん。」

勿論、それは拒否されてしまった。それでも、俺にしてはめずらしく反論した。
別に俺がいなくても新しい息子を産めば済むはずだ。大丈夫だろう、と。

「……いいだろう、ならはっきり言ってやる。お前はこの家の道具だ。」

……呆然とした。行き成り何を言っているんだと思った。
俺を尻目に、親父は話すのをやめずに続けた。

「お前が居ればこの家を今よりもさらに大きく、やがてはこの国を裏から操れるほどにまで登りつめる事が出来る。
そしてお前がいれば、この家の跡を継ぐものはさらに優秀な子供が生まれる。
苦労した……『完全な道具』を作り出すためにあの小娘を殺させるという危険な賭けまでした。
こんなに危険な賭けをしたのに、何故また新しい子供を作って危険な賭けをしなければいけない？」

……そうか、わかった。この親父は俺の事はどうでもよかった。
ただ、この家が途絶えるか、途絶えないか、もしくは如何にして優

秀な者を代に継がせるか……そんな事ばかり考えていたんだ。
時折見せてくれる優しさ、あれは息子へ対する優しさではなく、道具の調子が悪くならないないように、または道具がこの家に反乱しないかという事への心配。
今までの仕事も、金も、俺と言う道具を育て上げるための餌。
そして、そんなくだらない理由で、蒼華を俺に殺させた。そう、蒼華も俺を育てるための餌だった。

理解した俺は、すぐに行動した。偶々携帯したワイヤーとナイフで親父と殺し合いをした。
何十分、何時間かもしれない。それ程強かった。腕も、足も、ガクガクになって動かなくなりそうになった。
だが、俺は勝った。ナイフとワイヤーで我武者羅に切りつけ、最後に親父の胸にナイフを突き立てた。

親父は、胸に突き刺さったナイフの柄を掴み、血走った目で俺を睨むと、やがてその命を絶った。
そこからは簡単だった。親父同様の考えを持ち俺を殺しに掛かってきたお袋を殺し、そして俺を裏切り者として始末しようとした使用人や小部隊を皆殺しにし、何も知らないような雇われた奴らは金を渡して黙って家に帰した。
罪悪感なんてものは湧かなかった。殺らなきゃ殺られる、そんな漫画染みた事を考えていたから。

どいつも親父には遠く及ばず、簡単に始末する事が出来たので問題はなかった。
そして俺は、家にある残った金を持ち出し、僅か……確か１３才だったと思う。一人暮らしを始めた。
前の学校を転校し、別の県へ引っ越してアパートを借りた。
アパートの大家には、『親が事故で死んでしまい、親戚も居なく、

孤児院にも見捨てられた』と適当に思いついた事を言ったら、泣きながら部屋を貸してくれた。しかも家賃２０００円のわりにはいい部屋を。

だが、まぁ場所を引っ越しても、どこからか俺の事を嗅ぎ付けて自分の組織に入れようとする奴もいた。
そういう奴らは適当にあしらったりした。それでも食い下がらない奴は脅しを掛けたり極稀に仕事を引き受けたりしてやった。
ちなみに親父たちは謎の死と言うことで政府が片付けたらしい。

結局、俺は何年、何十、何千経っても命を奪う事しか出来なくて、命を守る事なんてできないんだ。
ただ目の前にあるものを壊して、壊したものを直そうなんて考えないし、直そうとする努力もしない。
仮に直そうと頑張っても、もう二度と戻らないのを知って諦める、そんな最低な男。

「…蒼華……。」

現実でも、そして夢の中でも壊してしまった初めての友の名前を呟く。

「…いつか、また生きているお前と会いたいものだよ……変わらない最低な俺を見て、笑って欲しいな……。」

……やめよう。考えても蒼華は戻ってこない。心の中で留めて置くだけにしよう。
そう思い、不意に外に出たくなった。ドアの横についている窓から

は外の薄暗い……と言うか夜になるととびきり濃い瘴気のせいで真っ暗で見えなくなってしまった森を見る。
そしてソファーから立ち上がり、ドアを開けて外に出る。上を向き、本当に辛うじて見える星を眺める。
さて……

「……夜の散歩にでも行くとしよう……。」

そう呟き、夜の散歩に出かけた……

第１４２話：もう直せない、もう戻せない（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。
今回は、ほんのちょっとシリアスでしたね。
ちなみに、壊の父親の事がよくわからない人のために説明すると、壊の父親は壊の事を、家を大きく、より力のあるものにするための道具にしたかったわけです。
で、完全な道具にするためには、まず壊のある程度の『感情』を捨てなければいけません。
そのために蒼華っちに近づけさせて、友人にさせ、そして殺させて『悲しみ』という感情をある程度捨てさせる。
どんな感情でも一つなくなれば少しずつおかしくなって行って、仕舞いにゃ壊は『殆ど』の感情が薄くなっていきました。
ここで壊を道具にすると言う企みは、ほぼ完了しました。

でも、ここで誤算が。陣の予想以上に壊には『殺し』の才能と、その技を只管磨いた努力があり、そしてかつ壊に無理をさせたが故に、壊自身が家を捨ててしまうと言う結果を生んでしまったのです。
で、陣が、『もう大丈夫だろう』と思って本当のことを話してしまって
壊ブチ切れ。
まぁ、そんな訳で陣にはここで退場してもらっちゃいました。

わかんない方たちはすみません、諦めてください。何せ作者は文章に表現するのが苦手でして……本当にすみません。

次回は……どうしようかな……何かいいアイディアありますでしょうか？

第１４３話：夜の羽ばたき（前書き）

今回は、原作キャラを一人出すつもりです。

第１４３話：夜の羽ばたき

現在俺は、『迷いの竹林』と言う場所を徘徊している。
理由は実に簡単、『筍』だ。前に紫に『季節でムラはあるけど、筍がよく採れる』と言われたのを思い出して途端に食いたくなった。
で、来たのはいいんだが……

「……迷ったな……。」

さすが迷いの竹林とでも言うべきか、入ってものの数分で帰り道がわからなくなってしまった。
まぁ、まだ筍は採れていないので帰る気はないし、いざとなったら空を歩けばいいだろう。
まさか空を歩いてもここから抜けられないなんてバカな事はないと思う。

「確か…筍は生える前に採ったほうが美味いんだったな。」

頭が緑色よりも黄色っぽく、節目の間隔が狭い物や、全体的に膨らんでいて中間辺りが膨らんでいるものほどアクが少なくて柔らかいく美味い……らしい。
だがしかし、知識をあってたとしても肝心の筍が見つからなければ意味がない。
2～3個手に入ればすぐにでも帰るんだが……

「ん？」

不意に、近くの竹がゆさゆさと揺れたのでその方向を見る。
そこには何故か数羽の兎が、前足と後ろ足で土を掘り返している。

はて、何をしているのだろうかと思い近寄ると……

「……筍……。」

数羽の兎に隠れるように、幾つもの筍が地面から頭を出しているのである。

どうやら兎たちは匂いで土にある筍を見つけて掘り返していたらしい。

……兎って、こんなに鼻が効くのか……始めて知った。

「ふむ……」

顎を、人差し指と親指で挟むようにしながら考える。

どうやって筍を採るか……ここまで来たらもう意地でも筍を持って帰ってやる。

そうだな…よし決めた、この辺り一帯の土を抉ってみよう！

靴に霊力か何かを込めて、それを地面に叩き付ければ簡単に抉れるだろう。（↑と言うか地面が割れます。）

そう思い、靴の底に霊力を込めようとすると……

『クイクイッ』

群れの中に居たうちの一羽の兎が俺の足元に近寄り、ズボンの裾を噛んで引っ張った。

「どうした？早く逃げたほうがいいぞ。もうすぐ……と言うか今からここは土が抉られるからな。」

俺によってな。兎は、俺の言った事を最後まで聞いても只管ズボンの裾を引っ張り、そのまま近くにある竹まで移動した。

…ふむ、付いて来いと……そう思い、俺は兎の元へ近づく。
そして兎は俺が近づくのを確認すると、そのまま前足で近くの地面をちょちょいと突付いた。
そこは微妙に、本当に極僅かにだが他の所よりも土が盛り上がっている。

「……まさか掘れと？」

俺がそう尋ねると、兎はコクンと頷いた。
とりあえず、兎に従って地面を思いっきり蹴り上げる。
すると、微妙に盛り上がっていた場所に頭の部分が黄色い筍が現れた。
出てきた筍の頭を掴み、思いっきり引っこ抜く。…ふむ、本で見た時の美味いという筍と同じだな。

「すまんな兎、恩に着るよ。」

そう言いながら、筍のある場所を教えてくれた兎の頭を人差し指で撫でる。
ふと、顔を上げて辺りをよく見渡すと、至る所に盛り上がった土がある。
兎の頭から指をどかし、近くにある別の盛り上がった土を手で抉るようにして掘ると、そこにも筍が埋まっていた。
なるほど…やはり土が盛り上がっている所に筍が生えているのか……

「……どれ、もう幾つか採っていくかな……。」

そう呟き、俺は筍を幾つか採った……

「…まぁまぁだな。」

あの後、兎たちが何処からともなく現れて俺の近くにあった筍を食い尽くす勢いで掘りながら食べていた。
で、俺もそれに負けじと頑張ったのだが、何せ筍狩りなんて生まれて初めてだったので、手に入れた筍は5個。
そのうち一個を、俺に筍の採り方を教えてくれた親切な兎に上げてしまったため残り四個になってしまった。
まぁ、四個も採れれば上出来だろう。そう思いながら、すっかり暗くなった迷いの竹林を歩く。
ちなみに、どうでもいい事だが、手に入れた筍は全部コートの内側に仕舞っておいた。

「……そろそろ浮かぶか……。」

そう呟き、能力で浮かぶ。そしてある程度浮かぶと、そのまま霊力で足場を作ってその上を歩く。
この時、足場を一つ一つ、自分が歩く場所にだけ作るのがコツだ。
じゃないとすぐに燃料切れを起こす。
出来れば俺も紫や諏訪子たちのように空を自由に飛びたいが、そこは鶏の宿命なのか、まったくと言っていいほど飛べないからなぁ……。

若干ブルーになりながらも、迷いの竹林の上を歩き、やがて迷いの竹林を抜けると地面に降り立つ。
そして降り立つ共に、魔法の森にまで、夜の散歩がてら戻ろうとある程度歩いていると……

「…ん？」

不意に、横から翼が羽ばたくような音が聞こえ、そちらの方向を見た。

「こんばんは～。」

と、気の抜けた声と共に翼をはためかせていたもの……少女が、俺から少し離れた位置に静かに降りた。

容姿としては、ジャンパースカート…と言うのだろうか？禍々しい、例えるなら『雀』か『蛾』をイメージしたような、そしてどかこ毒々しいものを着ており、服の上からしたのは真っ直ぐ、ではなく、若干曲がったようにアクセサリ、いや服の裂け目かもしれない、それが着いている。瞳の色は恐らく黒色で髪の色は桃色。紫と似た、おかしな帽子を被っている。

ここまで聞くと少し変わった人間に思うかもしれないが、他の容姿を上げればそれは誤解だとわかるだろう。

まず、指がおかしい。いや、具体的には爪だが、異様に長いのだ。5～8ｃｍくらいだろうか？

そして次に、耳。鳥の羽毛のような物が帽子の隙間からピョコピョコと左右両端に出ている。

そして最後に、背中から生えている翼。紫の、枝分かれしたようなのが羽の形をかたどっており、その間に白い羽毛が生えている。

まぁ、ぶっちゃけ……

「妖怪か……。」

そう、妖怪だ。まぁ、確かに夜じゃ妖怪も活発化するからな。

「正解、よくわかったわね」

いや、その羽と耳を見れば、この幻想郷にいる奴らなら誰でもわかる。

個人的には、早く帰って筍で何か作って食いたいんだが……

「どうやら帰らせてもらえそうに無いようだな？」

「そりゃそうよ。久しぶりに人間に会えたんですもの。」

……人間？……あぁ、そうかわかった。霊力しか出してないから、俺の事を人間だと思っているのか。

ふむ……どうせ早く帰っても食って寝るしかしない訳だから、少し遊んでやるか……

「それじゃ…行くわよ？」

妖怪がそう言った途端、自分の目に違和感を感じる。

前が……見えづらい。何故か知らないが、俺の視界に映るものが極端に暗く、見えづらくなっているのだ。

おかしいな、俺はいつの間に夜盲症になったんだ？

「それっ！」

妖怪がそう言うと、俺の右頬に僅かだが痛みが奔り、そして生暖かいものが伝う。

「どう？夜雀の私、『ミスティア・ローレライ』に鳥目にされた気分は。何も見えないでしょ？」

……夜雀……ね。名前は長いから無視しよう。
目の前にいる妖怪、夜雀。はっきり言って彼女の力はわからない。
その辺の妖怪より強いかどうかはわからない。
だがしかし、彼女は俺に傷をつけた。油断していたとは言え、いとも容易く俺に傷をつけたのだ。
この幻想郷で気紛れに戦った下の下ほどの弱小妖怪たちの攻撃と違って、先程の攻撃は、少なくとも俺を楽しませることができる。
上級、中級妖怪は、何故かわからないが会うことが出来なかったが、彼女は下の上ほどの力があるかもしれない。

自分の右頬から出ている生暖かい『血』を指で拭い、手を振って血を落とす。
そして、鳥目でよくわからないが、気配を感じ、彼女がいるであろう方向……自分の斜め上を見る。
この鳥目は、まったく見えないと言うわけではなく、ただ見える範囲が極端に減ってしまっただけだ。
能力？いや何となく違う気がする。しかし、こんな力を使ってくるとはな…ククク……

「…おもしろい！この凶鳥が！　今宵は君と踊ってあげよう！！」

自分でも気づかぬうちに大きな声で、そして邪悪に目を細めて、俺は夜雀にそう言った。
そして、俺は鳥目状態で空で羽をはばたかせ、浮かんでいる夜雀に向かって跳んだ……

第１４３話：夜の羽ばたき（後書き）

はい、そんな訳で夜雀さんこと、ミスティア・ローレライさんでした。
またの名みすちー。迷いの竹林って聞いて別の原作キャラを思い浮かべた読者さん、残念でした。
いや、最初は迷いの竹林つったらこの子でしょ！ってキャラ出そうと思ったんですよ？
でもですね、『どれにしょうかな』ってやつ、あれをやったらみすちー
になっちゃったんですよ。
まぁ、だから諦めてみすちーで我慢してください。
そしてみすちーファンの方はおめでとう。

第１４４話：若干狂ってる（前書き）

もうね、タイトルが中々決まんなくってこんなんになっちゃいましたよ。
今回は、みすちーとの戦闘があります。

第１４４話：若干狂ってる

一匹の化け物と、一匹の妖怪の少女が戦っている。
片や凶鳥こと『紅鎖華　壊』、片や夜雀こと『ミスティア・ローレライ』だ。

「そら、逃げないと串刺しになるぞ！」

壊は楽しそうにそう言うと、自身の能力で創ったナイフを、地を走りながら空に飛んでいるミスティア目掛けて投げる。
ミスティアは投げられたナイフを宙でかわすが、そのナイフが一本、また一本と増え、今じゃ壊が一回腕を振るうごとに１０本近くは飛んで来ていた。

「あぁもう！鬱陶しいわね！！」

先程から地味にうざったい壊の攻撃を避け、何度も攻撃の隙を窺っているが、壊は走り回っているわりにはまったくと言っていいほど隙を見せない。それで若干苛々している。
まぁ、それは壊も似たようなもので、半分は只『楽しみたい』という理由でナイフを創っては投げを繰り返しているため、すぐに燃料切れを起こしてしまいそうだった。まぁ、もう半分は違うようだが……

「これでも食らえ！」

ミスティアは、壊に向かってそう言い、両手を前に突き出した。
すると丸と三角形のような形をした奇妙な弾幕が、壊の視界一杯に広がる。

「どう、避けられる？」

まるで勝ち誇ったかのような笑みを浮かべるミスティア。
しかし、壊は楽しそうに、嬉しそうに目を細めると、ナイフとワイヤーが繋がれている物を何十と創り、ワイヤーの端を持って物凄い速さで振り回した。
すると、壊に向かってきていた弾幕が爆ぜながら、次々とナイフ＆ワイヤーに掻き消され、壊が居た場所にモワモワと煙が立ち込める。

「うそ……」

煙が晴れてそこにいた壊を見ると、ミスティアは驚いた顔になった。
そう、無傷。服にも、武器にも焦げ目すら付いておらず、さすがにミスティアもビックリのようだ。

「何で鳥目にしたのにそんなに動けるのよ……」

あ、そっちでしたか。

「別に目が見えなくても差して問題あるまい。それより……」

壊はそう言いながら自分の持っている武器を、ミスティアではなく辺り一面にばら撒くように投げる。

「ここでならもう少し楽しめそうだと思わないか？」

そう言いながら、紅い目を怪しく光らせた……

ーーーSideミスティアーーー

始め見た時は、『久しぶりの獲物』としか思ってなかった。
私こと、ミスティア　ローレライは、最近は人間をまったく食していない。
まぁ、別に人間の肉が好きな訳じゃなくて、妖怪である以上は一気に妖力を上げたいがために仕方なくだ。
何せ人里にいる人間には決して手を出してはいけないと言われているから、人間を狙うなら夜、または昼に外に出てくる人間を襲うしかない。
で、今回偶然にも、夜の空を散歩していたらこの男を見つけて、襲った訳だ。

「そら、逃げないと串刺しになるぞ！」

でもこの男、思っていたより、それはもう驚くほど強かった。
私が上へ飛べば片手に持っている奇妙な武器を上から、もう片方の手に持っている同じ武器を斜め上、または私の横を狙うように攻撃してきて、私の逃げ道を下だけにする。しかし、唯一の逃げ道である下からもナイフが飛んできていたりする。
それに何だか少し違和感が……

「あぁもう！鬱陶しいわね！！」

しかし、私は違和感よりも先に、この男の攻撃に苛立ちを感じてしまった。

「これでも食らえ！」

そう言いながら、ありったけの妖力で作った妖力弾を男に向けてばら撒く。

「どう、避けられる？」

さすがにこれは避けられないだろう、そう思い、笑みを浮かべる。
しかし、男は殆ど見えなくなっていると言ってもいい目を細め、両手で束ねて持っている武器を滅茶苦茶に振り回した。
私の撃った妖力弾は、爆発音を出して爆ぜながら、次々と打ち落とされた。
そして妖力弾の爆発で、男の回りにモワモワと煙が立ち込める。

「うそ……」

煙が晴れ、男は現れた。その姿は、始めに私が与えた頬の傷以外はまったくの無傷。
だがそれよりも、今更ながらこの男に疑問を覚えた。

「何で鳥目にしたのにそんなに動けるのよ……」

どんな生き物であろうと、五感に頼らなければ生きていけない。
そして私は、その五感のうちの一つ『視力』をある程度見えづらくする事で、敵に恐怖心を与える。
星明りしかない夜で、妖怪に襲われ、しかも自分の目も殆ど見えない、そんな状態で何故あの男はあんなに動き回れるんだろう？
いつ敵の攻撃が当たるかわからない恐怖の中、何故あんなにも恐れずに戦えるのだろう？
私は薄っすら、この男に恐怖に対して恐怖が湧き起こる。たぶんコイツは他の奴らよりも頭が逝ってるんじないか？

「別に目が見えなくても差して問題あるまい。それより……」

私の思っている事を尻目にしたように、男は両手に持っているおかしな糸の端を持ったまま、それに繋がれているナイフを四方八方に投げ飛ばした。

すると投げられたナイフは、男を中心に竹に突き刺さった。中にはナイフではなく、ナイフに付いた糸が竹に巻き付いていたりしている。……竹？

「ここでならもう少し楽しめそうだと思わないか？」

そう言いながら、男は紅い目を怪しく光らせる。……そうか、今までこの男の攻撃ばかりに意識が集中していて気が付かなかったけど、いつの間にか『迷いの竹林』に来てしまっていたようだ。

辺りを見渡して私は、やっと違和感の正体に気づいた。

「…嵌められた……」

この男は私に向けて何度も武器を投げてきたが、その武器は全てが、まるで『ギリギリ手を抜いている』かのように投げられていた。

そう、私はあの男に、自身が戦いやすい場所に誘導されていた訳だ。

おそらく、あの男は私が自分の罠に嵌まるという事を読んでいたのだと思う。

「なに、まだ終わりじゃないさ。君をここに誘導させるのは小手調べ。」

男はそう言うと、地面をもの凄い速さで駆け回る。

至る所から生えている竹を掻い潜り、竹を手で掴んで回り、その勢

いでまた走る。
勿論、私だってただ見ているだけじゃなくて、妖力で作った弾を撃ったり急降下して爪で引き裂いたりしようとする。
最終的には全部避けられてるけど……

「…終わり、っと」

男が私の妖力弾を避けながらその場に立ち止まった。しめたッ！そう思い、勢いを付けて男に飛び掛ろうとすると……

『プシュ』

「……え？」

私の羽に傷が付いた。まるで切り傷のような……。
え、なんで？　だってあっちはまだ攻撃してないし武器も持ってない……

「わからないか？」

混乱している私を尻目に、男は腕を少しずつ上げ、途中で自分の人差し指を出して上げている途中に止める。
そして何かを弾くような仕草をすると、『ピーン』という音が響いた。
よく目を凝らすと、今まで男に妖力弾を撃ったり追いかけっこをしていて気付かなかったが、あの男が持っていた糸が私を中心にするかのように張り巡らされている。

「何の対策もなしに妖怪と鬼ごっこをする訳ないだろう？この世の中、戦いでは頭も必要だぞ。」

「くッ……こんなの、私の爪で「無駄だ」……。」
「全てのワイヤーとナイフ、それにワイヤーが括り付けられている竹にはありったけの霊力を込めた。
君程度じゃ切るどころか逆に切れるぞ。こんな風に」

男はそう言いながら、さっき指で弾いた……ワイヤーに、人差し指を上からワイヤーにそっと下ろしていく。
すると男の指が『スッパリ』といった感じに奇麗に切れてしまった。
コイツ……狂ってる……

「切れ味も抜群。……今日は鳥鍋するか。」

食われるッ……！　食うじゃなくて食われるッ……！！

ーーーーSide壊ーーーー

「切れ味も抜群。……今日は鳥鍋だな。」

切り落とした自分の指を近づけながらそう言う。本当に良く切れるな……

「うぅ…私なんて食べても美味しくないわよ！？」
「いや、グロイものほど食ったら美味いと聞いたことがある。」
「それってどういう意味！？」

何やらギャーギャー騒いでいるが、別に気にする事でもないだろう。
さて、そろそろ……

「決めるか……。」

指を直すついでに手に霊力を込め、近くに張ってあるワイヤーを掴む。

目が見えなくても何となく場所の特定は出来るし、妖力で敵が何処に居るのかもわかる。

と言うかあの夜雀は妖力を隠す気がまったくないな。

「こんな所で…やられてたまるもんですか！」

夜雀はそう言うと、『スゥー』と息を吸った。

「～～♪」

そして何を思ったのか歌を歌いだした。それも明るい…少々激しい感じの歌。

「…ッ！？」

頭が…痛い。何だこれは……視界が先程よりも安定しない。

頭の痛みに耐えようと、自然とワイヤーを掴んでいる手に力と、ついでに霊力や魔力、妖力まで篭る。

「～～～～♪」

歌が最初よりも数段響き、それに誘われるように頭の痛みがさらに増す。

まずい……鳥目で視界が悪くなる以前に意識が……

ーーーSideミスティアーーー

男が、ワイヤーを掴んでいるのとは反対の手で、頭を押さえてふら付いている。

「～～～♪」

もう少し…そう思いながら歌を歌うのを止めずに、そのまま続ける。

そして……

「グッ……。」

パタリ、と言う音を立てて男が地面に倒れ伏した。……あるぇ～？おかしいな、私の歌を聴いたら倒れるんじゃなくて幻覚が見えたり狂ったりするんだけど……

「まぁ、いっか♪」

いつの間にかワイヤーとか言うのに込められてた霊力もなくなってるし。何とか切れるでしょ。

そう思いながら、試しに爪でワイヤーを一本切る。『ピン』と言う音を出しながら切る事ができた。

『ピン…ピン…ピン……』

…楽しい。ワイヤーを、一本一本切りながらそう思った。

「ふぅ……終わり。さてと……」

やっと全部切り終わった頃だろうか？
地面でうつ伏せになって倒れている男に近づき、男の状態を見る。

「…う～ん、死んでないっぽい。じゃ、まぁ起きる前に……」

そう言いながら自身の爪を男の喉元に…『おぉ！何だ夜雀の餓鬼じゃねぇか！』……突き刺そうとしたら、そんな声と共に近くの竹がガサガサと揺れ、そこから何匹もの妖怪がゾロゾロと出てきた。

「…誰？」

数は……パッと見は１０以上。力は…これもパッと見だけど私より弱いのは５体以上。強いのも、たぶんそれくらい。
薄暗いから微妙にしかわからない。
と言うか……

「いや、あの…誰？」

私がそう言うと、妖怪たち一同は『ピシリ』と固まった。
真面目に、まったく、これっぽっちも覚えてない。

「まぁ…知ってるわけねぇよな。何たって俺らが一方的にお前を知ってんだから。」

固まっていたうちの、最初に話しかけてきた妖怪がそう言いながら私に近づく。

「実はよぉ…さっきまでそこで人里の餓鬼食ってたんだけどな？

竹林から爆発音やら何やらが聞こえたから来てみたんだよ。」

話しながらもゆっくりと、歩むのを止めずに近づいてくる妖怪。

「そんでな、その倒れてる男、実はちょっとした貸しがあってなぁ……。

お前は知ってるかどうかはわからねぇが、前に人里に妖怪が結構な数で攻めに行っただろ？

で、人里を襲う前に全員やられちまってな……」

知ってる。確か人里に入る前に退治されたって聞いた。

「…で、だ。そのやった奴ってのが……」

妖怪はそう言うと、私の前…いや、正確には私と男の傍まで近寄った。

今更だが、この妖怪は…何というか…虫を大きくしてニ歩行にしたような奴だ。

「そいつなんだよ。んで、俺らはその男をやっちまおうって思ったわけだ。」

「…ふ～ん……。じゃ、譲ってあげる。」

私は妖怪に対してそう言う。怒らせたりしたら絶対に勝てないだろうし。

妖怪は私の言葉を聞くと、その鉤爪のような虫の手を振り上げ、真っ直ぐと……

「ッ！？」

私目掛けて振り下ろしてきた。それに気付いた私はその場から空へ飛ぼうとする、がしかし、運悪く妖怪の攻撃が飛ぶ瞬間に私の羽にモロに直撃し、大きく横に吹き飛んで竹に当たる。

「ッ…ア……」

竹からズリズリと落ち、そのまま地面にへたり込む様に座る。……しばらく飛べそうにない。
座り込んだ状態で殺気を出しながら妖怪を睨みつける。

「おいおいそんなに睨むなよぉ、照れるじゃねーか。」

妖怪は、まるで何ともないようにそう言いながら笑う。
すると他の妖怪もそれに釣られるように笑い、何匹かは私を囲むように近寄ってきた。

「実はよぉ…俺ら、まぁ、ここに来てない奴もさ、お前の歌う歌が大っ嫌いでな?
お前が人間襲うとき歌う度にどうしようかかと思ってたんだ。そんで、どうせお前なんて居ても居なくても変わんないから始末しちまおう…ってな?そうなったんだよ。」

……理不尽すぎる。私が歌を歌おうと歌わないと、私の勝手だろうに……

「おい豪丸…、この仲間の仇はどうすんだ?」

私に近寄らずに男の方に近づいた妖怪のうち一匹が、虫もどきに話し掛ける。
……私の羽を殴った妖怪、豪丸って言うんだ……

「あん？そいつは後だ後。起きた時にじっくり甚振った方が俺らに対する恐怖も強くなる、ってもんだろ？」

そう、妖怪は人間の恐怖などと言った感情が力の糧となる奴も多い。

「さぁて、んじゃあよぉ……」

そう言いながら、私の前に居る……豪丸は先程と同じように大きく腕を振り上げる。

……あぁ、これは逃げられない。豪丸一匹なら、最後の力を振り絞って空に逃げられるけど、何せ他の妖怪までいる。

詰んだ……かな？

そう思い、諦めの意味も込めて目を瞑る。どうせならもっと美味しい物食べとくんだったなぁ……

「お？何だ諦めたのか。んじゃ、遠慮なく……」

豪丸はそう言うと、振り上げた腕を思いっきり……

「死ｎ「ギャァァア」どしたぁ！？」

振り下ろそうとしたら、突然豪丸以外の、男に近付いていた妖怪から叫び声が聞こえ、閉じていた目を開く。

そして、叫んだ妖怪がいる方を見た。

「ご、豪丸……！」

そこには、自分の回りに居るうちの一匹の妖怪の頭を鷲掴みにしながら立っている、あの男がいた……

ーーーSide三人称ーーーー

全員が全員、唖然とし、壊に驚いていた。特に男、紅鎖華　壊の近くにいた妖怪たちは、ミスティアの近くに居た妖怪たちよりも驚いていた。
何せ虫の息だったと言ってもいいほど弱っていた男が、突然起き上がって自分たちの仲間の頭を鷲掴みにしたのだから。
人間、と言うかどんな生物でも、突然の事には弱い。

「あ…がぁ……」

壊に頭を鷲掴みにされている妖怪が、壊の腕を握りながら呻き声を上げる。
鷲掴みにされている妖怪の頭からは、今にもミシミシと音が聞こえそうな勢いだ。

「テッメ！その手離しやがれ！！」

そう言いながら、壊の近くにいた妖怪が壊に飛び掛った。

――――妖怪の頭が飛んだ――――

ドサリ、と言う音を発てて地面に落ちた頭を、壊は氷の如く冷めた目で見る。
空いている手には、いつの間に創ったのか一本の刀が握られている。

「げ、源吉ぃ！！」

どうやら壊に飛び掛った妖怪は源吉と言うらしい。
さすが妖怪と言うべきか、首だけになっても苦しそうに口をパクパク開けて生きている。
壊は、生首だけになって生きている源吉を、妖怪の頭を鷲掴みにしたまま近付き、その足で思いっきり……

『メチャ』

と、気色の悪い音を出させながら、無言で頭を踏み潰した。
中途半端に踏み潰された頭は、後頭部の部分だけが潰され、妖怪の頭は最後に呻くと、目を見開いたまま動かなくなった。
再び辺りに静寂が訪れる。皆が皆この男に一つの感情を抱いていた。

――――恐怖――――

言いようのない、自分たちでもよくわからない恐怖。
それはこの場にいる全員の心を蝕むかのようにふつふつと湧き起こる。

「ちくしょうがぁぁあぁ！！」

壊の近くにいた妖怪が叫びながら壊に突っ込む。そしてそれに続くかのように他の妖怪、ミスティアの近くにいた妖怪、はてには豪丸までもが壊に攻撃をしようとした。

「……」

しかし、壊は何も言わずに、鷲掴みにしていた妖怪の頭を切り落とすと、自ら敵に突っ込んだ。
突き出された拳をかわし、持っている刀で、拳で、足で、さらには頭まで使って反撃をする。
そして……

「おらぁ！！」

一匹の妖怪の爪が、壊の腕を貫いた。『ビチャ』と壊の腕から出た血が辺りに飛び散る。
妖怪は、自分の爪が壊の腕を貫いたのを確認し、不適に笑みを浮かべる。

「……駄目だなぁ、まだ終わってないだろう？」

そう言いながら、今まで無表情だった壊の顔が『ニタリ』、と不気味な笑みに変わった。
まるでやっと楽しめそうだとでも言うように、瞳孔が開き、三日月のように真っ赤な口を開き、自身の腕を貫いた妖怪だけに笑みが見えるように笑う。

「ヒッ…！」

腕を貫いた妖怪が悲鳴を上げる前に、壊は自分の腕に刺さっている妖怪の爪を強引に抜き、刀で妖怪を切り捨てた。
が、しかし、それを他の妖怪が黙って見ているはずもなく、間に合わずに妖怪が切り捨てられてしまったが壊に爪で、角で、巨大な拳で攻撃をする。
それに当たりながらも、壊はその手を止めずに反撃に出る。先程の

笑みは、妖怪の首を切り捨てた時から既にやめている。

「くっそがぁ！テメェ一体何のつもりだ!?人間なんざ黙って俺らに殺されてりゃいいんだよ!?」

自分の同志が次々と減っていく中、豪丸が攻撃をしながらそう叫ぶ。

「人間でなければいいんだな?」

そう言うと、壊は大きく跳んでだいぶ減った妖怪の集団から離れた。
そして自分が持つ現段階で出せる三つの力全てを解放した。

「なッ……人間じゃ…ない?」

豪丸がそう言うと、それに釣られて回りの妖怪たちも驚愕の表情をする。
そう、壊は今まで霊力のみで戦ってきたのだ。確かに、妖力と魔力が加わっても力自体は底まで変わらないが、それでも若干手を抜いていたと言える。

「何だ今更気づいたのか?　そこの夜雀はもうとっくに気付いていたぞ?」

壊は力を出しながら、竹を背にしてへたり込んでいるミスティアに目を向ける。
そして、他の……まだ生きている妖怪たちもミスティアを見た。
ミスティアは、行き成り自分に振られて事に少し焦っているが、心では……

「……（全然気付いてなかったわよー!?」

こんな事を思っていた。

「って、んな事はどうでもいい！　何で妖怪のテメェが俺たちの仲間殺したんだ!?」

「……仲間？　どいつの事だ？　殺したものの数が多すぎてわからないんだが……」

今この男、とんでもない事を口走った。壊に仲間の事を尋ねた妖怪は一瞬そう思ったが、あえてスルーする事にしたようだ。

「前に、人里を襲おうとしてた奴らだ！」

「……あぁ、アレか。気分が良かったから始末した奴らだな。」

「運良く見てた別の奴に聞いたが、やったのは白髪で紅い目の野郎だって言ってたから始め見た時まさかとは思ったが……」

そう言いながら、ミスティアを除くその場にいる妖怪たち一同は壊に殺気を放ちながら睨みつける。

「何だ、怒っているのか？ん？」

「テメェ…馬鹿にしてんのか!?」

「貴様がしていると思っているのなら、馬鹿にしているのだろうな。」

「テメェ!!」

壊の言った事に対してあまりにも腹が立ったのか、豪丸が叫びながら壊に殴りかかった。

しかし、壊はその長身を活かした……いや、あんま関係ないけど兎に角、右足を上に振り上げて豪丸が近くに来た途端に思いっきり豪丸の頭目がけて振り下ろす。

すると、壊に殴り掛かろうとした豪丸は地面に頭を叩き付けられ、そのまま頭を踏み付けられた。

「…俺に怒るのは筋違いじゃないか？　大体、あんな奴らを寄越した自分が悪いだろう？」

「う…るせぇ…！！」

「そもそも、今ここで怒っているのは――――

――――貴様らだけじゃないんだぞ？――――

まるで吐き捨てるように、壊は豪丸の頭を踏みながらそう言った。そして、言った途端に壊からあふれ出る、濃厚で、それでいて押し潰されそうなほどの殺気。

「俺はな……自分が何かをしている時、それを邪魔されるのが大嫌いでなぁ……」

そう言いながら、豪丸を踏んでいる頭にさらに体重をかける壊。

「貴様ら俺がそこの夜雀と戦っていたのを知っているな？

あれは俺の獲物だと理解していたはずだな？

何故邪魔した？

何故俺の代わりに貴様らが夜雀に手を出している？

何故彼女が飛べないまでに弱っている？」

まるで刑事が犯人に問い詰めている勢いで豪丸に聞いている壊。
おそらく、普段の壊からはとても想像が付かないだろう。
冷めていて、そしてどこか狂気を含んだ目で豪丸を見下ろしながら
足の力を込める壊。
そう……

――――彼は今、少々狂っている――――

何故、と思うだろう。理由は実に簡単、『歌』だ。
夜雀が壊を狂わすために歌った歌が、今の力が戻っていない弱い状
態の壊に効いているのだ。
それでも完全に狂っていないのは、本来の壊の力が相当強いからか、
または壊に何かの耐性があるとしか言えない。

「ちゃんと答えてくれないか？
はっきり言ってくれないとわからないだろう？」

一旦踏むのを止め、壊は足を上げる。豪丸は安心したように起き上
がろうとするが…

「ガァ！？」

上げたはずの足が再び叩き付けられるように豪丸の頭を踏み付けた。
それも一回ではなく二回、三回、四回…何度も何度も、上げては勢
いをつけて踏む。

「おい、やめろ！　豪丸が死んじまう！！」

「俺はこの虫に聞いているんだ。部外者は黙っていろ。
それに、他人を殺そうとしていたのだから自分が殺されても文句は言えない。」

『ゴスッ！　ゴスッ！　ゴスッ！　グチャッ！』もはや踏まれている、から蹴られている、と言っていい豪丸の頭から、次第に水っぽい物を踏むような音が聞こえ出す。
何故誰も助けない？　そう思うだろう、助けられないのだ。
無理に助けようとすれば自分たちにまで被害が及び、下手をしたら豪丸が一瞬で頭を潰される。
そして何より目の前で同族の頭を無表情で、しかし目だけは楽しそうにして踏んでいる男が『怖かった』のだ。

「も…許し…くれ……」
「許してくれ？違うぞ、俺が聞きたいのはさっきの質問の答えだ。」

もう死に掛けている豪丸が壊に許しを請うが、それを許さないかのように只管蹴り続ける。
すると……

「頼む、俺らが悪かった！もう許してやってくれ！！」

今まで恐怖しながら見ていた妖怪たちのうち一匹が、壊に近付いて地面に座って頭を下げた。世に言う土下座。
そして、それに続くかのように他の妖怪たちも壊に近付いて只管頭を下げて謝る。
何故豪丸だけは助けようとするか、それは豪丸が彼らにとってリーダー的ポジションにあるからだ。
壊に始末されてしまった妖怪たちも大切だが、何よりここまで圧倒的な力の差（？）を見せられたらもう許してもらうしかない。

「……調子がいいな。」

壊はそう言い、豪丸の頭から足を退けるとそのまま豪丸の身体を妖怪たちに目掛けて蹴り飛ばした。

「不愉快だ。その虫を連れてとっとと帰れ。」

あくまで無表情のまま、何を考えているのかわからないようにそう言った。

妖怪たちはそのままイソイソと自分たちの仲間だった妖怪たちの屍を拾い集める。

どうやら自分たちの仲間にだけはそれなりに優しいようだ。

「さて……」

妖怪たちが消えたのを確認した壊は、そう言いながらミスティアを見る。

「……暢気なものだ。」

若干呆れたような口調でそう言う壊。

ミスティアは、竹を背にしたまま目を閉じて静かに眠っていた。……と言うか、壊の殺気に当てられて気絶している。

勿論、壊がそんな事知るはずもなく、頭で『疲れて寝てしまった』と勝手な解釈をしながらミスティアに近付き、しゃがむ。

しばらくその態勢でジッ…っと見ていたが……

「…まぁ、楽しませてもらったんだ。」

そう言いながら何を思ったのか、彼女を背中に乗せ始めた。
この時の壊は既に狂気がなくなっていた。

「……目、いつの間に治ったんだろうな……。」

再びそう呟くと壊は空に浮かんで、そのまま歩いて竹林を出た……

第１４４話：若干狂ってる（後書き）

はい、終わりました。後半みすちーが空気になってる気がしないでもないけど気にしたら負けです。
ちなみに、壊は妖怪たちと戦ってる間ずっと鳥目でした。
それと妖怪の数は全部で（みすちーを除く）１２匹。
お亡くなりになられたのは５匹です。
……ついでに、壊が本格的に怒るときは『貴様』に変わります。
そう言えば壊が本格的に切れたのって、地味に少ない気がする……

第１４５話：凶鳥と夜雀（前書き）

その後みたいな話。

第１４５話：凶鳥と夜雀

「……眠い……。」

そう呟きながらも、ベッドから起き上がり、パジャマから今回は何となく白のワイシャツに着替える。
下はいつもどおり黒だ。さすがに家の中ではコートは着ないし、手袋もつけない。靴下は気分によるが、今回は履かない事にする。
着替え終わると、そのまま自室から渡り廊下に出る。
前回説明し忘れていたが、二階には部屋が二つと物置のような部屋が一つあり、一階にもちゃんとトイレや風呂はあった。
……まぁ、風呂は兎も角トイレは、俺は用を足す必要がないので使わないが……

そんな事を考えながらも一度一階におり、洗面所まで移動して顔を洗い歯を磨く。
そして再び二階に上がって、自分の部屋じゃない空いているもう一つの部屋の前に立つ。

『コンコンコンコン』

とりあえず四回ノックして返事を待つ。ちなみに、部屋に入るときよく二回ノックをする奴らがいるが、あれは『トイレノック』だそうだ。
しばらく待っても返事がないので、勝手に部屋に入る事にした。
この空いている部屋には、ベッドとクローゼット、それに丸いテーブルと何故か化粧台が置かれている。
部屋に入って、まずはベッドに近づく。

「……何だ、まだ寝ているのか。」

ベッドに寝かせているのは、昨夜少し遊んだ夜雀……名前、長いから省略だな。

その夜雀が静かに寝息を発てている。それにしても随分と気持ち良さそうに寝ているな。

「ん……んぅ……」

「起きたか。」

夜雀が閉じていた目をゆっくりと開いていく。

そして完全に目が開くと、俺と目が合った。

「おはよう、よく眠れたか。」

「……」

俺がそう挨拶をすると、何故か見る見るうちに夜雀の顔が赤くなっていく。…はて？

「おい、どうし「キャァァァァ！！」ガハッ！」

意味不な悲鳴と共に、俺の顎にパンチが繰り出された……

『シャッ　シャッ　シャッ』

一階のリビングで包丁を磨ぐ音が響く。

「……あの～。」
「『シャッ　シャッ　シャッ』……なんだ？」
後ろから話しかける夜雀を見ずに、ただ只管包丁を磨ぐ。
「あの……せめてこっちを向いてくれない？」
あんまりにも夜雀が鬱陶しいので、仕方なく夜雀の方を振り向く。
夜雀は、身体を縄でグルグル巻きにされ、蓑虫にように宙吊りにされていた。
「この縄、解いて。」
「却下だ。」
殴られた顎を一回摩りながらそう返却し、再び包丁を磨ぐ。
「いや、本当にごめんなさい。だって起きたら男の人が自分の顔を覗き込んでたから手が出て……」
そう、確かに俺は眠っている夜雀の顔を、覗き込むようにしてみていた。だがしかし、誰が顎に拳を入れられると思った？
普通の人間ならまだいい。だが妖怪の拳が自分の顎に、しかもクリーンヒットしたんだぞ？
「おいゼク、鍋と皿をもってこい。それとタレもだ。」
俺がそう言うと、柴犬状態になったゼクが背中に皿を乗せて運んできた。

「え、ちょっと冗談だよね？　まさか食べようだなんて思ってないよね？」

「……ゼク、お前の皿がないぞ、ちゃんと持って来い。今日は鳥鍋だ。ついでに筍も持って来てくれ、あの鳥と一緒に煮る。」

「ちょっと！？　大体、朝から鳥鍋なんておかしいでしょ！？」

無視。俺を怒らせたらどうなるか、その身に思い知らせてやる。

ゼクは『ガゥ！』と元気よく挨拶すると、再びキッチンに行って自分の皿を口に咥え、俺が昨夜持ち帰った筍を袋に入れて持ってきた。

「ちょ、笑えないから！　冗談でも笑えないから！！」

「俺を怒らせた罰だ、お前には鍋の具になってもらう。」

運がよければ二日は腐らなくて済みそうだ。

夜雀を見ると、若干涙目になりながら必死に縄から抜け出そうとジタバタもがいていた。

無駄な事を、あの縄はクロックが徹底的に魔力を込めた、『鉄よりも硬い縄』だ。もがいた所で逃れられまい。

「って言うかおかしいでしょ！　何でそんな変な生き物の牙で包丁磨いでるのよ！？」

変な生き物とは失敬な。

夜雀の言うとおり、俺は砥石ではなく『ゲートの巨大な牙』で包丁を研いでいる。

いや、最初は砥石を使おうと思ったのだが、この家はにはないらしく、仕方なく寝ているゲートに協力をしてもらっている。

さて……

「まぁ、冗談はこれくらいにしよう。」

そう言いながら研いでいた包丁を投げて夜雀をぶら下げている縄を切る。
「プギャ！」と顔面から落ちた夜雀の身体に巻かれている縄をゼクに噛み切らせ、そのまま起き上がるまで待つ。

「うぅ……痛い……。」

そう言ってノソノソと起き上がる夜雀を眺めながら、投げて壁に刺さった包丁をゼクに拾わせる。
夜雀は、鼻を打ったらしく、鼻の先を赤くしながら涙目になっていた。

「…まぁ、何だ。何か作ってやるから、それで元気出せ。」

そう言いながら包丁を持って立ち上がり、ゼクが持ってきた筍を再びキッチンに持っていく。
折り畳まれている鶏エプロンを着用し、まな板を置く。
さて、筍を使った料理はあまり知らないが……なんとかなるだろう……

と、まぁ色々あったが前世での記憶と幻想郷の外にいた時に読んだレシピの本を思い出して筍ご飯と佃煮、ついでにお吸い物が完成した。
筍ばかりと言うのもアレなので、沢庵と、能力で創った冷蔵庫に入れておいた豚肉でカツを作らせてもらった。勿論キャベツは忘れない。

さすがに鳥肉は出そうと思わなかった。

「…見た目によらず、料理できるのね……」

ダイニングキッチンの四角いテーブルに料理を乗せていると、不意に夜雀の声が聞こえる。

何やら柴犬状態のゼクを抱きしめるように抱えながらこちらを見ていた。……ゼクの口から異様なほどよだれが出ているのだが……

「おい夜雀、ゼクの皿を持ってきてやってくれ。」

「え、うん…わかった。」

俺の言った事に対して夜雀はそう言うと、ゼクを床に置いて急ぎ足で犬用の皿を持ってきた。

前にゼクが、俺が一人で食事を摂っている時にねだった事があり、その時に食わせたらそれから毎日のようにねだるようになったので、召喚している日は一緒に食うと言う事にした。

普通の犬と違うから玉葱でもチョコレートでも食えるので、何か食わせるときは手間が掛からない。

まぁ、食うか食わないかはゼクの気分次第だがな。

と、そんな事を考えながらも、能力で創って置いてある冷蔵庫から生肉の塊を取り出し、俺流の魔法の炎で一瞬で焼き上げる。

その調理時間、約1．2秒。火力をミスったら黒焦げになる、一か八かの超簡単クッキングで作った焼肉をゼクの皿に置いて後は放置。

さて、俺も食うか。そう思いながら自分の席に座る。

「…どうした？　君も座れ。」

「え、あぁ、うん……」

俺がそう言うと、おずおずと言った感じに夜雀は俺の向かい側に座った。
とりあえず、『いただきます』と言ってから筍の佃煮を箸で摘んで口に運ぶ。……普通だな。
夜雀を見てみると、箸には手を付けずに膝に手を乗せている。

「食べないのか？」
「……ねぇ、何で私を助けたの？」

俺が聞いた事に対し、夜雀は少し上目遣いで見ながらそう聞いてきた。

「……俺が助けた奴は大抵の奴がそう聞くな。これも流行りか？」
「はぐらかさないでちゃんと答えて。」

はぐらかしているつもりはないんだが……

「…まぁ、アレだ。楽しめたからだ。」
「？」
「この幻想郷に来てから、どうも弱い妖怪しか相手にしていなくて退屈だったんだ。
ただ君と戦って、お前は他の妖怪より少しだけ強かったから楽しめた。勝負は決まらなかったが、その代わりに骨のある奴と戦えたからな。」
「…それだけ？」
「そうだな…後は……同じ鳥の好(よし)みだからだな。長い事生きてきたが、どうも自分と同じような鳥類とは会わなかったから何となく助けたかった。まぁ、結局は俺の気紛れさ。」

どうも昔から有名な天狗やら鳥妖怪やらには会う機会が少なく（殆

どないと言ってもいい）妖怪を始末して改めてこの夜雀を見た後、鳥類の妖怪に会えたのを珍しく感じてしまい、しかも俺の退屈しのぎにもなってくれたので放って置く事が出来ず、家に連れて来てしまった訳だ。

「…兎に角、早く食え。皿が片付かん。」

俺はそう言うと、自分の分を黙々と食べる。しばらくすると、夜雀も箸を持って恐る恐る筍をご飯を食べ始める。

「あ、美味しい……。」

「……そうか。」

やはり自分が作った料理を旨いと言われるのは中々いいものだ。

そう思いながらも、俺は箸を進めた……

現在俺は、リビングで本を読んでいる。タイトルは『これで覚えろ料理レシピ』というタイトルだ。

載っているレシピは、弁当に使えるおかずやら小腹が空いた時のおやつやら、ざっと３００近くはあるだろう。

それはいいのだが……

「…う～ん……」

「大丈夫か？」

一旦本を閉じ、もう一つのソファーで額に濡れたタオルを乗せながら伸びている夜雀にそう聞く。

そろそろ帰ると言って家を飛び出し、この魔法の森の一番奥の、あまりにも濃い瘴気に中てられて途中で倒れたそうだ。
まぁ、確かにこの魔法の森は、一番奥……つまり俺が暮らしている所はどの場所よりも瘴気が濃い。
だから、低級妖怪（下級妖怪）やら中級妖怪では瘴気に中てられて簡単に伸びてしまい、下手をすると死ぬ。
紫や幽香なら余裕で、ルーミアなら少し気分が悪くなるくらいだろうな。……そう言えばルーミアは元気にしているだろうか？
別れてから大分時間も経ったので、それなりに強くなっているとは思うが……久しぶりに会いたいものだ。

「うぅ……頭痛い……。」
「自業自得だ。むしろ低級妖怪の瘴にそれだけで済んだだけでも運がいいと思え。」

今まで上の部屋で休んでいた絶が、代えのタオルを持ってくる。

「だっていつまでもお邪魔する訳にも行かないし……。」
「意外と律儀だな。別に俺は気にしないぞ。何なら、ここに泊まっていてもいい。」

俺がそう言うと、夜雀は額に乗せたタオルを持ってキョトンとし始めた。

「……どうした。　何かおかしな事を言ったか？」
「いやいやいや、おかしい。普通自分を殺そうとした相手を家に泊めようだなんて思わないわよ。」
「そうか、それなら俺は普通じゃないんだな。だからしばらく泊まっていけ。」
「それもう無理やり泊めようとしてるわよね？」

細かい奴だな。具合が悪いんならおとなしくてろ。

「どうせ帰っても人間を襲うとかしかやる事がないんだろう？」

「まぁ、そうだけど……」

「だったら泊まっていけ。俺としても、同じ鳥類に会える機会は少ないかもしれないからな。」

やはり同じ種族（実際には違うが）に会えるというのはそれなりに嬉しいものだ。

……今気がついたが、紫は俺が鳥だと言う事を知らないな、たぶん。幻想郷の事を教えてくれた礼として、少しは俺の種族を教えるのもいいかもしれない。……その時の気分によるがな。

「で、どうする泊まって行くか？泊まるなら最低でも二日は泊まってもらうぞ。主に俺の退屈しのぎのために。」

「……ちなみに断ったら？」

「魔法の森の出口に連れて行かずに、瘴気が濃いこの辺りで捨てる。」

「泊まってく。」

即答だな。まぁいい。

「……あぁ、そうだ忘れていた。」

「？」

「名前だ。俺は君の名前を知っているが、君は俺の名前を知らないだろう？」

「あ、そう言えば……」

何だ今更思い出したのか。…俺もだがな。

「俺の名前はな――――

――紅鎖華壊だ。よろしく、ミスティア――――

第１４５話：凶鳥と夜雀（後書き）

はい、そんなわけで終わりました。何だかんだ会ってみすちーが家に泊まる事になりました。

ちなみに、壊のテンションがおかしいと思った方、仕様ですから気にしないで下さい。

自分と同じ鳥に会えたのが少し嬉しかったんですよ、主人公も。

第１４６話：不味い（前書き）

タイトル思いつかんとです。

第１４６話：不味い

家の裏手にある切り株に乗り、俺にとっては心地よい瘴気を浴びながら、目を細めジッとその場で蹲る。
そう、今の俺は完全なる『鶏モード』だ。
何故『鶏モード』になっているかと言うと、鶏モードになると体が小さくなったためなのか、通常よりほんの少しだけ力が戻るのが早くなる。
ちなみに鶏状態だと、能力が殆ど言ってもいいほど使えず、潜る事も浮く事も出来ない。精々ミシン針数本が限界だった。（↑もう試した結果）
まぁ、そんな訳で今の俺は鶏になっている。別段困った事はないが、この体になると身を守る手段がないと言う事くらいか。
……いざとなったら今家にいる夜雀を盾にするか、最終手段としてはこの鳥足と嘴で戦おう。霊力とかを込めれば抵抗くらいは出来るだろう。

「…よっ、と。」

割と真面目な事を考えるのをやめ、乗っていた切り株から飛び降りる。…いかん、反射的に羽をバタつかせてしまった。
微妙に草の覆い茂った地面を本物の鶏の如く歩き、家のドアを嘴で突付いてノックする。

「は～い、ってあれ？……鶏？」

しばらくすると、我が家に泊まっているミスティアがドアを開けたが、鶏しかいない事に頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。

そんなミスティアのすぐ横を通り抜けていつも自分が座っているソファーに飛び乗る。

「そこは壊って言う人の座る場所だから、勝手に座らない方がいいわよ？」

何だコイツ、まだ気付いてないのか。笑顔でそう言ってくるミスティアに対してそう思いながら、再び体を丸めるように蹲る。

ここで少し疑問に思うかもしれない事を言っておこう。『何故ミスティアは、この森の瘴気が濃い場所に建っている家にいるのに何ともないか？』

まぁ、言ってしまえば、紫が細工したせいで外の瘴気を完全に遮断している、以上だ。どうやらこの瘴気が濃い場所は、さすがの紫もお気に召さなかったらしい。

「？」

不意に体が抱えられて浮く感じがし、数秒浮いているとミスティアが俺の代わりにソファーに座った。

そしてそのままポスリと膝の上に乗せられる。

「ふふふ……」

首を動かして上を向くと、何が楽しいのかミスティアは笑顔で俺の頭を撫でている。

……久しぶりにこんな事されたな。成すがままにされると言うのもいいかもしれない。

ちなみにどうでもいい事だが、式たちは全員上の部屋にいるようだ。

実は結構前から、『もう石に戻したりするのもめんどくさいからこ

の家で自由にさせて置けばいい』と思うようになり、何か用事がある時以外は基本家で自由にさせることにした。

「～～♪」

それにしても上機嫌だ。鶏の頭を撫でるのがそんなに楽しいか？と言うかこいつ、こんな所に鶏が居る事に何とも思わないのだろうか？普通怪しむぞ。

「……コケッ」

意味もなく、ただ何となく鶏のようにそう鳴く。鳴いた自分でもビックリするくらい鶏っぽかった。

「あ、痛かった？　ごめんね。」

どうやらミスティアは、俺の意味もない鳴き声を勘違いしたらしく、すまなそうな顔をしながら俺の顔を見ていた。
そして今度は先程よりもやたらと優しく俺の頭を撫でた。……もう少ししたら外に出よう。いつまでも頭を撫でられていても仕方ない。
そう思いながらも、俺は閉じて成すがままに頭を撫でられた……

「……」

「おい、いい加減に機嫌を直してくれ。」

目の前には、顔を真っ赤にしながらソッポを向いてソファーに座っている夜雀ことミスティア。

あの後、いい加減頭を撫でられるのを飽きたのでミスティアの膝から飛び降り、そのまま人の姿に戻った。
するとミスティアは少しの間唖然としていたが見る見るうちに顔を赤くし、機嫌を悪くしてしまい、今に至る。
何というか……ミスティアを見ていると自分に娘が出来た気分になるな。

「……こんな事を考えるとは、俺もそろそろ爺なんだろうか……。」
「？」

首を傾げているミスティアに『何でもない』と言って地味に嫌な空気を放ち続ける。
するとミスティアは、何か考えるような素振りを見せるとそのままキッチンに行ってしまった。
そしてしばらくすると、手に皿を持って戻ってきた。

「……これ食べて元気出してよ。」

何やら恥ずかしそうに、握り飯の乗った皿を俺に渡す。数は3個で横に沢庵も添えられている。
とりあえず、差し出された皿を受け取ってテーブルに置き、握り飯を一つ取って食べる。……うん。

「どう？　どう？」

何やら期待したような目で俺を見てくるミスティア。味を再確認するためにもう一回口に運ぶ。…うん。

「…この世の物とは思えない程の不味さだ。」

まるで粘土のようなグニグニとした、そしてザラザラとした舌触り、さらに塩の付け過ぎ&具が塩でもう塩その物と言っていいほどのしょっぱさ。間違いなく今まで食った物の中では一番、そうでなくとも上位に入るくらい不味い。

「…うぅ……」

…不味い、握り飯の味ではなく目の前にいるミスティアの状態が不味い。

目の端一杯に溢れんばかりの涙を溜めて、今にも声を上げて泣き出しそうな状態だ。と言うか、今気がついたんだが階段に式一同がこちらを見ながら居座っている……おい絶、親指を立てるのをやめろ。何だその指は。俺にどうしろと言うんだ。

「うぅ…えっぐ…ひぐ……」

「……（↑どうしたらいいかわからないので、握り飯を持ったまま固まってる）」

…仕方ない……、心の中でそう呟き、持っている握り飯を殆ど噛まずに飲み込む。

「…あ……」

ミスティアが泣き止んだ気がするが、それでも食うのを止めずに皿に乗っている握り飯も何とか胃に収める。

…沢庵だけは普通の沢庵だったようだ。階段を見ると、いつの間にか式たちがいなくなっていた。

「……不味い。」

「……ッ…うぅ…「だから」…ふぇ？」

「次作って貰う時は、今よりも上達している事を期待する。」

そう言って、俺はソファーから立ち上がり、ミスティアの頭を撫でてから階段を上がって自分の部屋に戻った……

ーーーSideミスティアーーー

「…全部食べてくれた……」

彼が階段を上がって二階に言ったのを見た後、先程までお握りが乗っていたお皿を見てそう呟く。

生まれて始めて作って食べて貰ったお握りの感想が『不味い』と言うのは凄く悲しかったけど、それでも食べてくれた。

「…ちょっと、嬉しかったかな……」

テーブルに乗ったお皿を両手で抱きかかえる様に持ちながら、今度はそう呟いた。

『次作って貰う時は、今よりも上達している事を期待する。』彼は確かにそう言った。

「うん、今度作るときはもっと上手に作れるようになろう。」

彼の言った言葉が今更ながら頭の中で繰り返され、自然、まるで自分に言い聞かせるかのようにそう言う。

それに……

「頭、撫でられた……。」

そう言いながら私は自分の頭を触り、何故か顔が熱くなっていった

……

一方その頃　壊は

「おぇ……」

二回でバテていた

第１４６話：不味い（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。
寝てる鳥って、見てると何だか和みますよね？

第１４７話：凶鳥と人里の少女（前書き）

まぁ、説明するよりも見た方が早いです。

第147話：凶鳥と人里の少女

ミスティアが我が家に泊まりに来てからもう既に1週間が経った。
何度かまだ帰らないのかと聞いたら『もう少しここにいる』と言って、何やかんやで一緒に暮らしている。まぁ、今そんな事はまったく関係ない。それよりも……

「～～♪」
「……」

はて、何故俺は鶏状態になってミスティアの膝の上に乗せられているのだろうか？
確か最初は鶏状態で家の裏手にある切り株で眠っていて、それで飯だと言うから元の姿に戻って帰ってきた。
そこまではいい。……どうでもいいが、相変わらず不味かったな。
そして食い終わって皿を洗い、再び外で力を戻すために出掛けようとしたら呼び止められ、鶏になってくれと頼まれた。
で、何故か抱きかかえられ、ソファーに座ったミスティアの膝の上に乗せられた。……何故？

「……」
「？　どうかしたの？」
「…何でもない。」

……もう訳がわからん。誰か教えてくれ。
俺としては、誰かの膝に乗るというのも別に嫌と言うわけじゃないが……

「…少し出掛けてくる。」

「え？　あっ！」

不意に思い付いた事がありミスティアの膝の上から飛び降る。
そしてそのまま人の姿になり、入り口のドアを開ける。

「安心しろ、今日中には帰ってくる。だからちゃんと留守番をしておけ。」

後ろにいるミスティアにそう言い、俺は家を出た……

ーーーーSide三人称ーーーー

「コケ…コケッーコッ」
「よーしよし鶏さん、ご飯だよー」

そう言いながら一人の少女が、沢山の鶏を閉じ込めた柵の中にある餌入れに、桶に入っている細かな餌を移し入れる。
すると沢山いた鶏が一気に餌入れに入っている餌を、嘴で突付いて飲み込み始めた。
この少女がいる場所は人里の寺子屋、現代で言う学校の後ろにある……言わば鶏小屋のような場所だ。

「んふふ～♪……アレ？」

不意に、少女は自分のすぐ下の餌入れから餌を突付いている鶏から目を逸らし、顔を上げ前方を見た。

「……」

一匹だけ、こちらに来ずにただ突っ立っている鶏がいるのだ。
他の鶏よりも少し大きく、鋭い目つきをしており、そしてどの鶏よりも鶏冠と嘴に足が立派な鶏。
羽毛も真っ白で穢れがなく、ふかふかしていそうだ。そう、『壊』である。
壊は、『鶏の姿でなら人里に来てもバレる可能性は低くなるだろうし、怪しまれる事あまりもないだろう』と思いこの姿で来た。
と言うか、『何故人里に？』と思うものもいるかもしれないので言っておこう。
人里に人の姿で近づいたら普通に人里の人間と関係を持ってしまうが、鶏姿ならそんな心配もないと思ったのだ。

少女は、鶏を閉じ込めている柵を鶏が逃げないように静かに開けて中に入るとそのまま鶏姿の壊に近き、壊の前でしゃがんだ。

「どうしたの？　ご飯食べないの？」

と、少女が言うのに対して壊は無視。それもそうだ。
紫には既に『なるべく関係を持たないように』と釘を刺されているので、話すわけにもいかない。
そもそも鶏が話したりしたら絶対に怪しまれる、下手したら人里一同が妖怪だとか言って退治しに来そうだ。

「鶏さん？　鶏さんってば。」

尚も食い下がらずに話しかける少女に対し、壊はいかにも興味ないと言った感じにチラリと目を向けると再び他の場所を見渡す。
今の壊とってはこの鬱陶しい少女よりも、昔懐かしい感じがする人

里を早く回りたいと言った感情の方が何倍も強い。
しばらくそんな感じで少女を無視してどうやって人里を回ろうかと考えていたが、不意に少女が何も話さなくなったので少し気になってみてみると……

「うぐ…えっぐ…に〝わどりざぁん…ひぐぅ……」

…大粒の涙を流して泣いていた。さすがの壊も、少しだけギョッとしてしまった。
壊は心の中で『こんな所、誰かに見られたら絶対にただじゃ済まされない』と思い、何とか少女が泣き止む方法を考える。

『ペシペシ』
「グズッ……ふぇ……？」

何を思ったのか最終的に壊が取った行動は、しゃがんで泣いている少女の膝を羽で叩く、と言う事だった。
それに対し少女は泣くのを止めて壊の行動を見ると、反応されたのが嬉しくなったのかすぐに笑顔に戻った。
壊は思った。『子供と言うのは実に単純だな』と。

「えへへ～♪　ふかふか～♪」

そう笑いながら少女は、しゃがんだまま壊を抱き上げて膝に乗せる。
そしてそのまま壊の背中を撫でる。
……この少女は鶏がそんなに好きなのだろうか？そう思いながらも、壊は少女におとなしく背中を撫でられた……

ーーーーSide壊ーーーー

「ふかふか～♪」

未だに俺の背中を撫で続けている少女に対し、いい加減に放してくれと言う気持ちが出てきた。
と言うかミスティアもそうだがよく飽きないな？　鶏なんぞ撫でててそんなに楽しいのか？
どうでもいいが、改めて少女の容姿について説明しておこう。
髪の色は灰色で瞳の色は黒。服は…薄い桃色の下が膝辺りまでしかない和服だな。
草履を履いている。

「あ、そうだ！」

少女は突然そう言うと共に勢いよく立ち上がった。
その拍子に膝の上から転げ落ちそうになったが、俺は何とか両足で地面に着地した。

「鶏さん、ちょっと待っててね！」

笑顔でそう言って身を翻すと、そのまま柵を出て近くにある建物の中に入ってしまった。
しばらくすると、先程よりも輝かしい笑顔で少女が戻ってきた。

「あのね鶏さん。先生に鶏さんとお散歩に行ってもいいですか？って聞いたらね、いいよって言われたんだ！
だから一緒にお散歩行こ？」

……思わぬ収穫だな。
一人で鶏の姿のまま人里を歩いたら人里の奴らに捕まるからどうしようかと悩んでいたが、この少女が一緒なら下手な手出しはしてこないだろう。

「じゃあ行こっか。」

少女はそう言うと俺を抱きかかえて柵を開け、そのまま人通りの多い場所まで移動した……

道行く奴らが俺たちをおかしなものでも見るような目で見ている。
まぁ、確かに鶏を抱きかかえて鼻歌を歌っている少女はある意味めずらしいのかもしれない。
そんな事を思いながらも、首を動かして様々な場所を見る。…団子屋か……

「鶏さん？　どうかしたの？」

団子屋を見ていたら少女が話しかけてきた。
そして俺の見ている店を確認すると、何か納得したような顔をして団子屋まで歩く。

「おばちゃん！」

団子屋まで来ると店内に向かってそう叫んだ。すると店の中から人の良さそうな顔をした５０くらいの婆が出てきた。

「おや、氷里ちゃんじゃないかい。元気にしてたかえ？」
「うん！　おばちゃんも元気にしてた？」
「ほっほっほ私ゃまだまだ元気だよ。少なくとも後１０年はこの美肌を保っていたいしねぇ。」
おい婆。一回鏡を見て来い。お前のは美肌じゃない。

「それで、今日はお団子を買いに来たのかい？」
「そうだよ。」
「何にするんだい？」
「ん～……じゃあみたらし一つくださいな！」

少女……確か氷雨だな。氷里がそう言うと婆は『はいはい』と笑顔で返事をし、そのまま暖簾を潜って店の中に入ってしまった。
しばらくして婆は丁寧に経木に包んだ団子を持ってきた。

「はい、百円だよ。オマケで二つ付けておいたからね。」
「ちょっと待ってね……はい百円。オマケありがとうね！」

氷里は懐をゴソゴソと漁ると百円を取り出して婆に手渡し団子を受け取ると、そのまま手を振ってその場から離れる。おい危ない、落ちる。
婆は「また今度来てねぇ」と言って笑顔で手を振り返してている。やはり現代の金も使えるんだな。幻想郷に来てから一度も使っていないから正直自信がなかった。

「一回寺子屋に戻って食べようね。」

氷里はそう言うと、来た道を戻って行く。……まぁ、今日はこれだけ見れただけでも満足だからよしとしよう……

「ここで食べよっか。」

氷里はそう言うと、近くに生えていた木に背を預けるように座り、俺を自分の横に降ろした。

ここは寺子屋の……グラウンド的ポジションの場所だな。俺たちが居るのは端っこで、微妙に草が生えている場所に木が一本立っている。堀も何もないな。

グラウンドを観察していると、氷里が膝の上で経木をガサガサを広げる音が聞こえ、そして自分の分を一本取ると団子の乗った経木を俺の前に差し出す。……どうでもいいが、普通鶏が団子を食うなんて発想思い付くのだろうか？

そう思いながらも嘴で微妙にくっ付いている二本を離して、足で串の持つ所を踏み、一番上の団子を嘴で突っつく。

…美味い！久しぶりに食べたな……

「…鶏さんって、団子食べるんだ……」

氷里が団子を片手にそんな事を言ってくるが気にしない。今度は嘴を開けて団子に齧り付く。

……言っておくが、間違っていないぞ。俺は普通の鶏と違って先の尖った小さな歯が並んでいるからな。

「あれ～、氷里がいるぞ～！」

何か知らんがグラウンドっぽい場所で蹴鞠をしていた少年が、いつ

の間にかこちらに近づいて来ていた。
名前を呼ばれた氷里は一瞬肩をビクリと震わせた。心なしか小刻みに震えている気がするが……
少年が氷里の名前を呼ぶと、それに続くかのように『本当だ』とか言いながら別の男子たちも集まってきた。

「お前何で寺子屋に来てるんだよぉ～」

集まってきたうちの一人がそう言いながら氷里に近づく。氷雨は、何かしらんが思いっきり怯えている。
数は……五人だな。少年ＡＢＣＤＥとでも名づけておこう。

「そうだよ、お前みたいなの来なくてもいいんだよ！」

そう言いながら別の男子がさらにわらわらと近づく。……いじめか？

「おい見ろよ！こいつ、鶏と一緒に団子食ってるぞ！」
「マジで！？　ダッセ～」

段々うざくなってきたな。

「やっぱり俺らと違うんだ、半妖は帰れ！」

少年Ｃはそう言うと、自分たちの鞠を氷里にぶつける。それを見ていた他の奴らも石やら何やらを投げ付けてきた。
おいやめろ、団子に当たる。

「そこの鶏もそいつと同じだな！」

少年Ａはそう言い、今度は俺目がけて石を投げ付けようと構えた。

「駄目！」

すると、今までされるがままだった氷里が少年Ａの腕を掴んで石を奪い取った。

「鶏さんに乱暴しちゃ駄目！！」

「うるさい！！」

掴み掛かる氷里に対し少年Ａは思いっきり腕を振り払い、氷里を突き飛ばした。

そしてそのまま先程背を預けていた木へ再び瀬を預ける。よし、団子は無事だ。

と言うか……

『…鬱陶しいな。』

心の中で少年たちに対してそう呟く。再び食べかけの団子を齧り取るようにして食べる。

しばらく、氷里同様に石を投げられていたが、一本目の団子を食い終わったので一旦団子の乗せられた経木を、嘴で氷里がいる位置とは反対側の場所へ移動させる。さて……

『礼くらいはしないとな……』

ーーーーＳｉｄｅ三人称ーーーー

数人の少年集団が、木に背を預けている一人の少女に石やら草やらを投げつけている。
笑いながら石を投げ付けている少年に対し、少女、氷里は頭に石が当らないように両腕で庇いながら、涙目になっていた。

「それ！『ペシペシ』ん？」

たった今毟り取った草を投げていた少年Ａは、不意に自分の足を柔らかい何かで叩かれたので自分の足元を見る。
そこには一匹の鶏、もとい壊がいた。自身の羽を使って器用に広げ、それで何度も『ペシペシ』と叩いている。
少年Ａは、持っていた草を地面に捨ててしゃがみ、壊に向き直った。

「アレ、こいつさっきまでそこにいた鶏じゃ……」

少年Ａは言葉を最後まで言い切る事はなかった。
何故なら、壊がしゃがんだ少年の顔面を、その見るからに丈夫そうな足で思いっきり蹴ったからだ。

「いってーーーー！！」

自分の顔面を蹴られた少年は、しばらく蹴られた事を理解できずに唖然としていたが、理解した途端に顔を抑えてその場でゴロゴロと転がり始めた。
突然自分たちのすぐ近くから仲間の悲鳴が聞こえたので、各々氷里に物を投げるのをやめて少年Ａを見る。

「おい大丈夫か！」
「この鶏！！」

仲間を心配して駆け寄る少年もいれば、仲間の仇だと言わんばかりに壊に飛び掛る少年もいた。ちなみに飛び掛ってきたのは少年Cだ。壊は少年Cの股下を潜ったと同時に大きく跳び、後ろからそのまま少年Cの後頭部を嘴で2度3度突付く。

他の鶏よりも鋭い嘴で突付かれた少年Cは一瞬痛みで動きが止まったが、すぐに後ろにいる壊に掴み掛かる。

掴み掛かってきた少年Cを大きく横に跳んでかわすと、少年Cは勢いのせいで前のめりに倒れた。

さらに壊は、うつ伏せで倒れている少年Cの頭の上に飛び乗り、まるで足踏みをするかのように何度も蹴った。

『ドシッ　ドシッ』ではなく『ズダダダダダダダッ』と言う効果音が似合いそうな勢いである。

「いでででででッ！！　この！」

ただ只管後頭部を蹴られている少年Cはそう叫びながらも、うつ伏せ状態で手を後頭部の回して追い払おうとするが、壊はそれを跳んで避けたり、一度地面に降りてから再び乗っかって蹴るなどしている。

さすがに他の少年たちも少年Aを見ているよりも少年Cを手伝った方がいいと思ったのか、少年C同様に壊に向かって掴み掛かる。

それを見た壊は少年Cを蹴るのをやめて飛び降りると、そのまま向かってきた少年BDEたちに向かって突撃する。

そしてそのまま向かってくる少年たちの足元を、鶏にしては速い速度で走り回って撹乱させつつ少年BDEに地味な攻撃を加える。

「いって！　こいつ俺の脚を突付いた！」

「うわやめろ！　砂を蹴り上げるな！」

もはや少年たちは完全に壊の手のひら上……いや、今の状態を言う

なら羽の上で踊っているようなものだった。
そして……

「うわ！！」

とうとう少年Ｄが足を捻らせその場で尻餅をついた。

「いてて…ハッ！」

痛みで腰を擦っていたが、いつの間に目の前には目をランランとさせている鶏がいるので冷や汗を流した。
少年ＢとＥは、どうやら壊を追いかけているうちにお互い衝突してしまったようで仰向けに倒れて目を回している。

「あ、あはは～……」

目の前にいる壊に対して引き攣った笑みを浮かべる少年Ｄ。
そして壊の目が、『ピキーン』と光り出すと同時に、少年Ｄは気を失った……

ーーーーＳｉｄｅ壊ーーーー

「うぅ…鶏が、鶏がぁ～……」

何やら悪夢にうなされている少年たちを放って置いて氷里の所へ向かう。
氷里は、木に背を預けたまま俺を見ながらポカーンと口を開けて唖

然としている。
とりあえず、いつまでも唖然とされたら話が進まないと思い、膝に飛び乗って羽で顔をペシペシと二度叩いた。

「……あれ？　鶏さん？」

まるで今見たかのようにそう言う氷里に、俺は軽く首を縦に振って肯定する。
鶏っぽく演じるのが面倒くさいと思うようになってしまった。
氷里はしばらくボーっとしていたが、目の前に転がっている少年たちを見て目を見開いた。

「…ひょっとして、鶏さんが助けてくれたの？」

まぁ、確かに助けたのは俺だな。

「鶏さん凄いね！　私、半妖だって理由でいつもいじめられてばっかりで……」

不味い、何やらおかしなオーラー撒き散らしながら泣き始めた。とりあえず、もう一度頬をペシペシと叩く。
頑張れば人生いつかいい事ある。と言うか人間じゃなかったんだな。

「…うん、ありがとう……」

どうやら慰めは成功したようだ。俺は膝から飛び降りると、反対側に隠しておいた団子の串を嘴で挟んで氷里に渡す。
団子を受け取った氷里はそのまま口に運び「おいしい」とだけ言って静かになった。
しばらくそんな感じで過ごしていたが、団子を食べ終えた氷里は団

子の串を経木に包んで懐に仕舞い、俺を抱きかかえる。
そして最初に会った柵まで移動した。

「じゃあね、鶏さん。」

氷里は、俺を柵に入れるとそのまま手を振って帰ってしまった。
さて……

「……俺も帰るとしよう。」

人里に来て始めて言葉を話し、俺は辺りに誰もいない事を確認すると人の姿に戻って能力で人里を出る。
いつの間にか辺りは薄い紅色で染まっていた……

ちなみに、家に帰ったらミスティアが不機嫌オーラを出しながら怒っていた。

第１４７話：凶鳥と人里の少女（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。何となく、鶏姿の壊を中心にした物語を書きたくなったので書きました。反省も後悔もしてない。ちなみに、氷里はあとで物語りに絡んできます。…直接は絡まないかもしれませんけど……

第１４８話：さらば夜雀そして・・・（前書き）

今回で、みすちーの出番はだいぶ減ります。

第１４８話：さらば夜雀そして・・・

「私、そろそろ帰ろうと思うの。」

ミスティアを暮らし始めてから約１ヶ月。俺の向かい側のソファーに座っているミスティアがそんな事を口走った。

「…理由は？」

本を読みつつそう問う。ちなみに本の題名は『若人よ！知識を欲するのだ！！』という題名だ。

若くはないがやはり知識と言うのは欲しいものだからな。…自分で言っていて悲しくなってくるな……

「いや、ほら。私がこの家に泊まりにきてからもう１ヶ月くらい経ったでしょ？

そろそろ帰った方がいいかな～、って。」

「…まぁ、止めはしないさ。君のお陰でこの１ヶ月、それなりにいい退屈しのぎになったしな。」

そう言って立ち上がり、本を閉じてソファーに置く。念のためにゲートも連れて行こう。

「すぐそこまでなら送って行こう。」

「え？でも私、ここの瘴気だめなんだけど……。」

「…１ヶ月も経ったのに空を飛んで帰ろうと言う発想は思い浮かばなかったのか？」

「あ……」

確かにこの魔法の森の瘴気（具体的には俺が住んでいる場所）は瘴気が濃いが、それは魔法の森の中での話しだ。ある程度空を飛ぶなりなんなりしてしまえば瘴気なんて届かない。そんな事も気づかないのか……

後ろにいるミスティアに溜息を吐いて家を出る。しばらくしてミスティアも、俺の後に続くように慌てて家を出た……

空を飛んで（俺は小走り）やって来たのは迷いの竹林。

「到着～。」

迷いの竹林に降り立つと共にミスティアが気の抜けた事を言う。

そして両手を後ろに組んでクルリと俺に振り返る。

「ありがとう。また今度遊びに行くわね。」

「…あぁ、いつでも来い。今度は森の中で倒れたりするなよ。拾うのがめんどくさい。」

俺がそう言うと、ミスティアは『む～』と唇を尖らせて上目遣いで睨んできた。

「今度は空から行くもん。」

「まぁ、さっきも言ったがまた来い。その時は料理の腕が上達する事を期待してるぞ。」

「うん！じゃあね～！」

ミスティアはそう言って元気よく羽ばたいて行った。…竹林に降り立った意味はあるのか？
さて……

「筍を探すとしよう。」

そう言って、俺は迷いの竹林を進んだ……

筍求めて約３０分。前にウサギに筍を採る方法を教えてもらったので幾つかは見つけた。
だが以前来たときよりも見つけずらくなっている。その証拠に、今日の収穫はたったの二つだ。

「……ん？」

竹と竹の間の隙間から何かが見える。

「…なるほど。筍の代わりに面白いものを見つけたな……」

少し離れた位置に見えるゆらゆらと揺れる白い髪を見ながらそうつぶやく。
さて、鈍っていないかみてやるとするか……

ーーーSide三人称ーーー

迷いの竹林を一人の少女が歩いている。赤い瞳に少し白銀の入った白いロングヘアー。
白いカッターシャツに着て、下は至る所に護符が貼られた赤いもんぺのようなものを掃きサスペンダーで吊っている。
髪にも同様に頭の天辺に大きな護符のようなリボンをつけ、毛先にも小さなリボンが幾つかくっついている。
そう、彼女は『藤原妹紅』

「暇だなぁ～……」

どうやら相当暇なようで、ポケットに手を突っ込みながらブラブラと当てもなく歩いている。

「……そこの妖怪、いい加減に出てきてくれない？」

突然、妹紅が歩くのを止めてそう言った。

「キシャシャシャ……」

すると妹紅の後ろから妖怪の笑い声が響き、周りの竹の葉がガサガサと擦れて音を出す。
そして次々と妖怪が妹紅を囲むように現れた。数としては凡そ7匹。ラッキー7である

「キシャシャシャ…よくわかったなぁ……。」
「そんな妖力と殺気駄々漏れにしてたら普通は気付くってば。」

ニンマリと口が裂けたような笑みを浮かべながら感心する妖怪に対し、妹紅は呆れたようにそう言った。

「で、何か用？」
「いやいや。別に大した用じゃねんだけどよぉ…ちょいとばかり…」
口が裂けている妖怪（以降妖怪Ａ）がそう言いながら先程よりも殺気と妖力が撒き散らされる。
それに続くかのように他の妖怪たちが殺気や妖力を放ったり唸ったり、兎に角妹紅に敵意ある行動をする。
「殺されてくんねぇかなぁ！！」
妖怪Ａがそう叫ぶと同時に、他の妖怪たちが妹紅に突撃する。
妹紅は近くに来た１匹を蹴り飛ばして道を開きその場から離脱すると、ダルそうに頭を２、３度掻いてから妖怪たちをキッと睨み付けた。
「…殺せるなら殺してみなよ。」
妹紅がそう言うと同時に、熱風がその場に吹いた……
「ふぅ……」
積み上げられた黒焦げの妖怪たちの骸のすぐ傍で、腰に手を当てている妹紅が軽く息を吐く。
「さて、帰ろ――――」

『帰ろう』そう言いかけた時だった。
突然後ろの茂みが揺れるとそこから真っ黒な人影が飛び出し、妹紅目がけて蹴りを放った。

「危ないね…」

妹紅はその蹴りを素早く後ろを振り向いて片腕で防ぎながら、出てきた人影に向かってそう言う。
人影の正体は長身な男で、真っ黒な服と真っ黒なズボンを穿いており、顔を紅い色をした片目以外真っ白な布でグルグル巻きにしている。
その男が軽く足を振り上げて丁度妹紅の頭の位置に足を突き出して前蹴りをしていた。

「…意外だな。油断していると思ったから本気で蹴ればその頭、粉々に出来ると思ったんだが……」
「女の子にとんでもないこと言うね。そんなこといってると嫌われるよ。」
「知ったことか。」

男はそう言いながら妹紅の腕を思いっきり蹴って後ろに跳ぶ。
妹紅はその衝撃に若干後ろに下がってしまったが、特に問題がないかのようにすぐに持ち直した。
しばらくの間、妹紅は目の前で自然体になっている男をじっくりと言った感じに見ていたが……

「…なぁ、私とどこかで会った事ないか?」

しばらく黙々と男を見ていた妹紅は、見るのを止めて男にそう聞いた。

「……さぁな。案外、親しい仲だったかもしれないし、まったく会った事がないのかもしれない。」

男はそう言うとどこからか自身の身の丈ほどもある大鎌を取り出して右手に持ち、そのまま刃の先をツルハシの如く地面に突き刺す。

「そんな大きなもの出したら邪魔じゃない？」

「問題ない。」

男はそう言うと共に大鎌の刃の先を引きずるようにしながら妹紅に向かって駆ける。

そして妹紅の前まで来ると鎌を振り上げて、そのまま一刀両断の勢いで思いっきり振り下ろした。

妹紅はその攻撃を軽く横に跳びながらそのまま手のひらに拳一つ分の炎を作って男に飛ばした。

「チッ……」

男は舌打ちすると地面に刺さっている鎌を素早く引き抜きぬいてグルリと一回転して飛んできた炎弾を掻き消す。

さらに、回転したまま持っている大鎌をハンマー投げのように妹紅がいる方向へ投げた。

「おっと……」

妹紅は飛んできた大鎌を大きく上へ跳んで避ける。妹紅の避けた大鎌は、妹紅の後ろにある竹をスパスパと切ってそのままどこかへ飛んで行ってしまった。

「武器なくして戦えるの？」
「武器なんて、また創ればいいだけの話だ。」
男はそう言って、まるで最初から手に持っていたかのように、今度は小回りの聞きそうな鈍く光る銀のナイフを出した。
ここで妹紅はさらにこの男が誰だか知っていると言う気がしてならなかった。
だが、幾ら思い出そうとしてもその記憶が霧で隠れていて思い出せない。妹紅は宙に浮いたまま考えていた……

ーーーーSide妹紅ーーーー

宙に浮きながらナイフを持っている男を見て考える。
私はこいつを知っているんじゃないか？　頭の中で何度もそんな事が無限に繰り返し思い浮かぶ。もし知っているなら一体誰？

「余所見なんてするものじゃない。」

考えに耽っていると、突然目の前からそんな声が聞こえたので見ると、男がナイフを逆手に持って今にも横に振ろうとしている。
それを大きく後ろに飛んで避ける。しかし、男はまるで空を駆けるかのように走るとそのまま私に近づいて来た。
そして勢いを殺さずに私の胸に蹴りを放つが、それを両手でつかんで受け止める。
しかし、男はそれだけでは済まさずに、ナイフを持っている手とは逆の手で私に殴りかかってきた。

その攻撃を、今度は掴んでいる足を回すようにして男をよろめかせるとそのまま男の腹に蹴りを入れてやった。

「…ッ！」

私の攻撃に男は一瞬動きを止める。それを見逃さずに、さらにもう片方の足で思いっきり男の胸元に回し蹴りを放つ。
中々威力があったらしく、男はそのまま後ろに吹っ飛び、途中でズザザザッと何かを引きずるような音を出して踏み止まった。
そして口のある場所に手を当てると二回ほど軽く咳き込んだ。

「…なぁ、俺のナイフを返してくれないか？」

男は包帯が巻かれていない片目を楽しそうに細めるとそんな事を聞いてきた。
私はしばらくの間その言葉の意味を理解していなかったが、不意に右腕に走る痛みで理解した。
そう、私の腕には男の持っていた銀のナイフが突き刺さっていた。
…いつの間に……

「油断ばかりしているからそんな目に遭うんだ。」
「うるさい。こんなナイフ、オマケを付けて返してあげるよ！」

腕に刺さっているナイフを強引に引っこ抜き、ある程度熱してから男目掛けて思いっきり投擲する。
男は、それを素手で掴んだ。

「熱いな……手が溶けてしまいそうだ。」

そうは言っているが実際にナイフを掴んだ手の皮膚が溶けてナイフ

の刃とくっ付いている。
しかし、男はそれを気にしないとでも言うようにもう片方の手でナイフの柄を掴んで私と同じようにナイフを抜く。
男の手から血が流れ出たが、しばらくするとすぐに元の手に戻った。

「どうした？まさかこんなものじゃないだろうな？だとしたら期待はずれだ。
いや、君に戦い方を教えた師が弱くてしっかりとした戦い方を教えなかったのか？」

目を細め、実に楽しそうにそう言う男に対し怒りを覚える。
自分の事ならまだ許せる。でも、師であるアイツの事を言うのは許せない。

「壊の事を悪く言うな……」

自然と師である男…紅鎖華壊の名前を言いながら男に殺気を放つ。

「ほぅ…君の師は壊と言うのか。なるほど……」

男はさらに楽しそうに目をそう言うと――――

「…いかにも弱そうな名前だ。」

男がそれを言い切らないうちに私の体は動いていた。背中に真っ赤な炎の翼を出し、男に突っ込んで首に手を伸ばす。
そのまま飛ぶ速度を緩めずに男の首に手をかけたままただ無茶苦茶に飛び回る。
それだけでは済まさず、首をかけている手から炎弾を撃ち出しさらに速度を上げた。

男の背中が勢いよく竹にぶつかるが、その竹を薙ぎ倒しながら他の竹も薙ぎ倒し宙を飛び回る。
そして最後に男の首から手を離し、そのまま思いっきり踵落しをして地面に叩き付け、さらに炎弾を大量に撃ち続ける。

「……」

やがて撃つのを止めると、無言で男が落ちている場所へ降りる。
男の着ている服は違いがわかるくらい黒く、そして至る所がに穴が開いてボロボロになっており、顔に巻いている布も黒焦げになっていて風が吹けばすぐにでも吹き飛んでしまいそうだ。

「…誰であろうと壊を馬鹿にする奴は許さない。」

もはや骸と化しているであろう男に対してそう言い放ち、身を翻してその場から離れる。

「まぁ待て。まだ死んでないぞ。」

しかし、離れようとしたら突然後ろから声を掛けられたので素早く振り返る。

「え…何で……」

先程とは違う服装の男に戸惑う。いや普通に服装が変わっていたならいい。
ただ、男の服装は私もよく知るアイツの服装とまったく同じで、その容姿も同じだった。
少しだけ長めの白い髪に鋭い、だがしかし、どこかやる気の感じられない紅い瞳。

黒く、そして袖も裾も長い上着、確か『コート』と言っていた気がする。微妙に見える穿いている物も黒かった。
さらに黒い手袋に黒い靴。最後に片方の手首に着けている羽の模様があしらわれた銀の腕輪。
無表情で私を見つめる男は――――

「壊……？」

私の師、紅鎖華　壊だった……

ーーーーSide壊ーーーー

いや意外だ。妹紅が思っていた以上に強くなっていた。
まさか力が戻っていないとは言え、本気になってもボロ負けするとは思わなかったな。
打ち付けられた背中の痛みを堪えながら、首をパキパキと横に動かして鳴らす。いかんな、首の調子が少し悪いみたいだ。

「あ、え…なんで壊がここに……」

しばらく首をバキバキと動かして調子を整えていると、再び妹紅が口を開いた。

「何でも何も、久しぶりに君を見つけたから会いに来ただけだが？」

偶々見つけたから会いに来ただけの事だ。……喉が熱い。よく焼き切れなかったものだ。

『ドンッ』

突然、妹紅が凄い速さで俺に飛びついて来た。
俺は突然飛びついて来た妹紅に対処できずにそのまま地面に背を打ち付けように倒れた。
一瞬息が止まり掛けたな……

「妹紅…何のつもりだ？　まさか攻撃をした事に怒っているのか？」
「違う馬鹿。」

何やら罵られてしまった。反抗期か？

「もう会えないと思ってた。旅に出てから一度も会えなくて……色々聞いてみたら封印されたって……」

ふむ、こいつは俺が封印されていたのを知っていたのか。で、心配してくれていたと……
若干顔を横に向け、寂しそうな顔をしながら俺の服をしっかりと掴んで離さない妹紅の頭に軽く手を乗せてそのまま2度3度ポンポンと撫でる。

「妹紅。」
「……なに？」
「ただいま。」
「…うん、おかえり……。」

「はい。」

目の前に差し出された湯のみを持って茶を啜る。
そして一旦湯飲みを置いて妹紅の住んでいると言う家を見渡す。外から見た大きさは少し小さめで、部屋は今いる居間も含めてたぶん二つくらいだな。

「どうかした？」
「いや何でもない。」

そう言いながら再び茶を口に含む。

「ところで……旅はどんな感じだった？」
「ん？…普通、かな。その辺の村を回って妖怪退治をしたりして稼いでた。それで旅の途中で壊に会いに戻ろうと思ったけど、封印されてて会えなかった。」
「…なるほど。つまりは別段楽しい旅と言うわけでもなかったのか。」
「まぁね。」

そう言がら妹紅は自分の分の茶を啜る。
俺はその後に続くように茶を啜ると外の様子を知るために割窓を見る。

「…大分暗くなったな……」

割窓から見える外は最初に来た時よりもずっと暗くなっていて殆ど薄っすらと月の光が出ているようだ。
ならば何故この家はこんなに明るいんだろうと思っていたら、いつの間にか囲炉裏の火と壁にくっ付いているランプが明かりになって

いた。……幻想郷には電気が普及していないのだろうか？

「……そろそろ帰らせてもらおう。」

そう言い、湯のみの茶を飲み干して立ち上がる。

「あ、ちょっと待って。」

「？　どうした。」

「あのさ――――

「…まさか君があんな事を言うとは思わなかった。」

俺の横で布団を敷いて向こう側を向いて寝ている妹紅に向かってそう呟く。

あの後、帰ろうとした俺に対し妹紅は「もう暗いんだし今日は泊まって行ったらどうだ？」と言ってきた。

まぁ、最終的に首を縦に振って承知した。ちなみに、夕飯は妹紅が作ってくれた。結構旨かったぞ。

「……妹紅？」

「…すぅ……すぅ……」

何だ寝たのか。

「…おやすみ。」

そう言って最後に妹紅の頭に手を伸ばして撫でると、そのまま眠り

についた……

第１４８話：さらば夜雀そして・・・（後書き）

はい、終わりました。
今回はやっとこさ出番が出た妹紅さんです、はい。
本当はもっと早く出したかったんですけどね……

ＰＳ　この小説のキャラクターの絵師さんを募集しています。
絵が上手かろう下手だろうが気にせずに描いてください。
……まぁ、実は自分も描こうと思っているんですが、どうも絵は苦手で……特に目と口と手が。

第１４９話：帰宅前の闇（前書き）

今回は、ほのぼの～みたいな感じです。

第１４９話：帰宅前の闇

「…ん…んぅ……」

寝返りをしようとするけど、体がまったく動かない。それに何だか寝苦しい……

いくら頑張っても体が動かないので、眠いながらも目を開ける。

「なっ！？」

始めはぼんやりしていたが、自分が動けない理由とその元凶を理解して一気に目が覚めた。

目の前には壊の胸元がこれでもかと言うくらい近くにあり、しかも私を両手で抱きしめていた。

って言うか何で同じ布団で寝てるのさ？　そう思いながらも壊の胸元を手のひらで押し返すようにして抜け出そうとする。

『ギュウッ……』

が、しかし、抜け出そうとすると壊の腕の力が強くなり、抜け出すのがさらに困難になる。

「ん…壊、ちょっと苦しいよ……」

そう言いながら少し顔を上げて壊を見る。壊はとても安らかに眠っているような顔をしていた。

久しぶりに壊に会った時、最初は不安だった。もしかしたらここにいる壊は、私が見ている夢の中の壊なんじゃないか？

目が覚めたらまた壊がいない現実を突きつけられるんじゃないか？
昨日寝るまでずっとそんな事を考えていた。

「……」

不意に、壊の抱きしめる力が弱まり壊の片方の手が私の頭に乗せられた。
乗せられた手は正真正銘壊の手。懐かしい、昔に何度も見て、そして私の頭を撫でてくれた壊の手だ。
その頭に乗せられた懐かしい手を両手で包み込むように掴んで抱きしめる。
いくらこれが夢じゃなくても、どうせ壊は自分の家に帰るためにこの家からいなくなってしまう。
だから……

「…今だけは思いっきり甘えさせてね？」

壊の腕を抱きしめながらそう呟き、私は再び目を瞑った……

ーーーSide壊ーーー

…何故か知らないが自分の腕がまったく動かない。
若干の疑問を感じながら目を開け、少し下の方を見ると

「…すぅ…すぅ……」

…妹紅がいた。いや、妹紅の家だから妹紅がいるのは別におかしく

ない。
ただ、俺の目の前にいる妹紅は何故か俺の片腕を抱きしめており、そしてもう片方の腕はこれまた何故か妹紅によって下敷きになっていた。
しかも妹紅の布団が向こうにあるんだが……まさか俺が引き込んだか？

「…妹紅、起きろ。」

とりあえず、いつまでもこの状態じゃ下敷きになっている腕が痺れそうなので妹紅に起きてもらう事にする。
両腕とも動かせない状態なので声だけで起きてもらうように呼びかける。しかし、妹紅は起きる気配を見せない。

「妹紅、起きろ。」

今度は呼び掛けつつ束縛されている腕を引き抜こうとするが、妹紅の腕の力が強くなってしまった。
そうだな…例えるなら、固め技から抜け出す事が出来なくなっているみたいな感じだな。つまりまったく動かない。
骨がミシミシ言い始めたんだが……

「妹紅、頼むから起きてくれ。」

何を幸せそうな顔をして寝ているんだお前は……

両腕をバキバキと鳴らして調子を整える。…よし、特に異常なし。

「…何か……ごめん……」

しばらく腕の調子を整えていたが、不意に今まで正座をしていた妹紅が苦笑いをして済まなそうに謝って来た。

「…まぁ、別にそこまで気にしていない。と言うか俺も悪かったみたいだからな。さて……」

謝って来たそう言って自分の黒いパジャマのボタンを上から外して行く。

「ちょっと待った!!」

「何だ騒々しい。」

「いやいやいや!!　何服脱ごうとしてんの!?」

「…？　着替えるんだから脱ぐのは当たり前の事だろう？」

何故か顔を真っ赤にして叫んでいる妹紅にそう言い放つ。

腕の調子も良くなったのでそろそろ寝巻き姿からいつも着ている服に着替えたいしな。

「お前も着替えたらどうだ？」

そう言いつつ自分の寝巻きを脱いでいく。すると妹紅はバッと立ち上がって部屋から出て行ってしまった。…浴衣からもんぺに着替えに行ったのだろうか？

そんな事を思いながらも、俺はいつもの服に着替えた……

俺は今、妹紅と囲炉裏のある居間にいる。理由は…まぁ、朝食だ。
出された筍の佃煮のような物をボリボリと齧る。……昔に比べて料理を作るのが上手くなったな。
ちなみに、料理に使われている筍は昨日俺が採ってきた奴だ。
しばらくの間雑談しつつ且おかわりしつつで朝食を摂っていた。そして食べ終わった俺はさっさと家に帰るために引き戸まで行く。

「ではな、妹紅。」
「うん、またいつでも来てね。」
「わかった。どうせならお前も家に遊びに来い。いつでも歓迎するぞ。」
「いや私、壊の家知らないから。」
「魔法の森の奥。」
「大雑把だなぁ……」
「気にするな。それじゃあ、今度こそ「あ、ちょっと待って。」

今度こそ行かせてもらうと言おうとしたら妹紅に呼び止められた。
妹紅はそのままスタスタと何処かに行くと、しばらくして何かの入った小さな包みを持って戻ってきた。
そして持ってきた小さな包みを、ニコニコしながら俺に渡してきたのでそれを黙って受け取る。

「…何だこれは?」
「金平糖。よかったら食べてよ。」
「…いいのか?」
「別に。まだあるからいいよ。人里にいる奴にたくさん貰ってさ…」
「…そうか、なら有り難く貰っていこう。じゃあな。」

俺はそう言い小さな包みを懐に仕舞い、最後に妹紅の頭を撫でてから外に出た……

ーーーSide三人称ーーー

魔法の森付近で一人の青年が走っており、その顔はどこか恐怖に染まっている。
そしてしばらく走っていると、疲れてしまったのかその場で膝に手をついて肩で息をし始めた。

「はぁ…はぁ……に、逃げ切れた……」

先程までの何かに対する恐怖は薄れ、肩で息をしながらも安心したような表情を浮かべる。

「ふぅ…そろそろ帰ろ「見つけたのだー」…え?」

息も整ったのでさて帰ろうという時に、不意に近くの茂みからそんな声が聞こえた。
その声を聞いた青年は再び恐怖した顔になり、今度は肩をガタガタと震わせ、そのままゆっくりと声のする方向へと顔を向ける。

「いただきまーす」

気の抜けた声を聞くと共に、青年は悲鳴を上げた……

ーーーーS.ｉｄｅ壊ーーーー

妹紅の家から出て約１０分。
家に帰っても本を読むか外でジッとするぐらいしかやる事がないので、しばらくそのまま散歩をしていた。

「あぐぎぁあぁあぁあぁッ！！？」

しかし、いざ家に帰ろうと魔法の森に近づくと、突然男の悲鳴が聞こえた。
…どうせ妖怪の襲われたんだろうと素通りしようと思ったが、どんな妖怪が襲ったのか見たくなったのでただ何となく悲鳴のした方へ行ってみた。

「……」

悲鳴のした場所へ行ってみると、そこには少し大きめの黒い球体ふよふよと浮かんでいた。
しかも、その浮いている黒い球体から赤い液体がピチャピチャと落ち、下に真っ赤な水溜りが出来ている。…血だな。
どうやらあの黒い球体が先程悲鳴を上げた男を食っているようだ。
……あの黒い球体、前に似たようなものをどこかで見たような気が……

「ぷはー」

そんな事を考えていると黒い球体から気の抜けるような声が聞こえ、黒い球体がまるで霧のようにシューと消えた。

そして黒い球体が消えると、中から人間の両足と両腕を抱えた幼い少女と、恐らくその四肢の持ち主であろう青年が出てきた。
少女の容姿は金髪のショートボブに深紅の瞳で左側頭部には赤いリボンが結ばれている。
袖が白い服の上から袖のない黒い洋服に黒いロングスカート。背は…小さいな。１３５～１４５以上だと思う。
俺はある程度少女を観察すると、少女に近づく。少女は俺が近づくのを見ると満面の笑みを浮かべた。

「…ねぇ。」

そして少女は満面の笑みのままこう言った。

――貴方は食べてもいい人類？――

第１４９話：帰宅前の闇（後書き）

…はい、そんな訳で終わりました。
名前出さなかったけど原作キャラですね。

ＰＳ　東方凶鳥記の絵師を募集しています。描いてくれる方、描いてくれた方は活動報告のコメントから教えてください。

第１５０話：ちっさい友人（前書き）

今回は、シュール＆ほのぼの。
久しぶりに壊の式が活躍するかもしれない。

第１５０話：ちっさい友人

――――貴方は食べてもいい人類？――――

満面の笑みのまま、何か期待したように少女はそう聞いてきた。
…食べてもいい人類。意味はわかる。俺を食ってもいいかどうかという事だろう。

「駄目に決まっているだろが。」

そもそも俺は人間じゃない。何でこうも俺をはじめて見た人外たちは殆ど同じ事を言うのだろうか？…俺が力を出していないからか。

「え～……」

「喧しい。そもそも俺は人間じゃないから食ったって旨くない。」

何やら不満そうな顔をしている少女にそう言い、少女の前で適当に妖力を出す。

「そーなのかー」

すると少女は不満そうな顔から一転して再び満面の笑みになり気の抜けるような声でそう言った。
それより……

「…食わないのか？早くしないと腐るかもしれんぞ？」

少女がいつまでも抱えている四肢を指差しながらそう言うと、少女は『そういえば持ってた』みたいな顔になる。…馬鹿だな。

「どうせなら適当に調理してやろうか？そのまま食うよりは旨いと思うぞ？」
「いいのかー？」
「問題ない。」

人肉を調理する機会なんてあんまりないからな。前に食ったのは生だったが、調理すれば旨いかもしれない。
いやそもそもアレは人間なのだろうか……
（※詳しくは『第１２６話：雉組の頭』をご参照ください。）

「じゃあお願い～」

少女はそう言うと、手に持っていた四肢を全て俺に手渡してきた。
俺はそれを受け取って一旦地面に置き、魔法の森に戻ってその辺に落ちている枯れ枝を拾い集め再び少女の所まで戻る。
そして今度は枯れ枝を地面に置いてそこに火を付け、能力でそれなりの大きさのまな板と肉切り包丁を創ってまな板の上に…これは…右足だろうか？右足を乗せる。

「おい、火が消えないように見ていてく…何をやっているんだ。」

火の調子を見てもらおうと思って少女の方を見ると、何やら恐らくもう骸になっているであろう青年の体を引きずって火に投げ込もうとしていた。
とりあえず、投げ込もうとしていた男の骸を募集。……目玉が抉られているな。俺が来る前に食ったのか？

「返して～」

手をバタバタさせて俺から自分の獲物を取り返そうとしている少女の頭を片手で押さえつけ、もう片方の体を持っている手の人差し指と中指だけを懐に入れてゲートの石を取り出す。我ながら器用な持ち方だ。

そしてゲートを召喚して、持っている青年の体をゲートの口の中に放り込んで食わせる。

「あー！！」

俺がゲートの口の中に青年の体を放り込むのを見た少女は何やら叫び声を上げてゲートの口の中に入ろうとしていたが、残念な事に入る前にゲートが口を閉じてしまったので結局は取り返せなかったらしい。

さすがに人間の体は切るのに手間取りそうだから今回は遠慮しておきたい。

「ゲート、悪いが家から塩と胡椒、それから盥（たらい）から何かに水を入れて持ってきてくれ。」

俺がそう言うと、ゲートは口を開けて口の中で浮いている目玉がコクリと頷き、そのまま地面に潜り込むように一瞬で消えてしまった。

ちなみに、当然の事だが青年の体は奇麗に無くなっていた。旨かったか？

そんな事を考えていたらもう戻ってきた。口からペッといった感じに塩と胡椒の瓶、それに盥を地面に置く。

「ご苦労。もうやる事もないから帰ってもいいぞ。」

俺がそう言うと、ふよふよと浮かんでいる目玉が誇らしげに頷いてゲートはそのまま消えた。さて……

「いつまで変な空気を出しているんだ。火の調子を見ていろ。」

先程からずっと体育座りでいじけている少女にそう言ってまな板の足を勢いよく切って行く。…意外と切りやすいな。

少女は俺を恨めしそうに睨みつけると、ふらふらとした足取りで焚き火に近寄って枯れ枝をポイポイ投げ入れていく。

……適当にやってないか？そう思いながらも、俺は調理を続けた……

Ｓｉｍｐｌｅ　ｉｓ　ｂｅｓｔ　。そんな訳でＹの形をした鉄を能力で創り、焚き火を挟むように地面に突き刺し、上の部分に骨を乗せて時々グルグル回す。ちなみに使っているのは太ももの部分だ。

「まだー？」

待つのも飽きてきたのか横で俺が作ったイスに座って足をバタつかせながら少女が俺に話しかける。

「もう少しだ。」

後2～3回グルグル回して塩と胡椒を……完成。マンガ肉のように焼いた肉の骨の部分を掴んで少女に肉を手渡す。…少し熱いな……

やっと出来たのが相当嬉しかったのか、少女は俺の俺が持っている骨とは反対側の、今自分に向けられている方の骨を掴んで勢いよく齧り付いた。

「うまー」

どうやら旨いらしい。ちなみに、他に切った奴も鉄串に刺して今焼いている。何故鉄串に刺したかというと、今しがた焼いた奴はただ何となくマンガ肉っぽく焼いてみたかったからであり、一個マンガ肉にすれば充分満足だから他の奴は普通に焼こうと思ったわけだ。

ところで……

「お前の名前はなんだ？」

もっちゃもっちゃとマンガ肉もどきを食っている少女にそう問いかける。まぁ、正直この少女が誰なのかは何となく予想はついているが……

「んー？ルーミアー」

ほら見ろやっぱりルーミアだった。認めたくないがルーミアだった。何故こんなにも小さくなっているかは知らないが、俺の目の前にいる少女は間違いなくルーミアだ。容姿もそうだが、何よりも出している妖力が、とてつもなく小さくなっているが彼女のものだ。

「…はぁ……」

類は友を呼ぶとはよく言ったものだ……俺も力が戻っていなくて弱くなってしまっているが、まさかルーミアもだったとはな……

しかも、どうやら俺の事を覚えていないようだ。少しショックだな。

「…紫に問い詰めてみるか……」

横で肉のおかわりを要求してくるルーミアに、焼き上がった肉を渡しながらそう呟いた……

「ここが壊の家ー？」

「そうだ。とりあえず上がれ。」

俺はそう言って家のドアを開ける。するとルーミアは「わはー」などと言って家の中に入り、そのままソファーにボフッと座った。

あの後、まぁ色々あってルーミアを家に連れて行くことにした。本人がいた方が何かと都合がいいしな。

俺は近くにいた絶を呼び、ルーミアに茶と適当な茶請けを出すように言ってそのまま2階の自室へと移動する。

自室には壁に寄り添っているニオと黒い水溜りみたいになっているナイアがいた。

「ニオ、ナイア。」

俺が名前を呼ぶと2体はゆっくりと俺の前まで近づいた。

「悪いが紫を連れて来てもらいたい。

手段は問わない。向こうがよっぽど大変じゃない限りは力ずくで連れてきても構わない。

紫がどこにいるかは俺もわからないのでゲートと一緒に探してもらってくれ。」

ゲートは自分が行った事のある場所、または自身の目で見える場所

以外、主の俺が行った事がある場所なら行く事が出来るが、今しがた述べた条件に合わない場合は自分で探すしか方法がない。まぁ、アイツなら遅くても1時間以内には見つけられるだろう。
俺がそう言うと2体はコクリと頷いてその場から消える。恐らくゲートを探しにいったんだろう。
まぁどうせこの魔法の森から出ている事はないだろうから心配はないな。
そう思いながらコートを脱いで部屋のコート掛けに掛け、そのまま1階に行き、ルーミアを見る。

「わはー」

絶が茶請けに出したのであろう大福を両手に持ちつつ満面の笑みで嬉しそうにしている。……よく食べるな……

ーーーーSide三人称ーーーー

一軒の家…いや、もうはや屋敷と言ってもいいであろう。内装から外にある物までまさに昔の日本屋敷といった感じの家だ。
その縁側で一人の女性が茶を啜っていた。
ドアノブカバーのような帽子にドレスのような服。ここマヨヒガで暮らしている妖怪、『八雲紫』である。

「紫様〜少しはご自分の仕事をしてくださいよ〜」

そんなまったりモードの紫に話しかけるのは、彼女の式である『八雲藍』と言う大妖怪の九尾。

「めずらしく昼頃に起きた思ったら、『今日はまったりお茶モードよ』なんて言って……」

そう、本来紫と言う妖怪の起床時間は夜頃…または夕方などである。
その彼女がめずらしく昼に起きたのだ。
しかしその理由が先程藍が述べたとおりまったりお茶モード…もとい、何となくなのだ。…くだらない理由だと思う。

「まぁまぁ藍、そんなに怒ってばかりじゃ駄目よ。それに……」

紫はそう言いながら緑茶を啜り、自身の座っている縁側の先…つまり庭をチラリと見る。

「お客さんみたいよ？」

紫がそう言ったと同時に、かなり広い庭の中央に音もなく、まるで最初からいたかのように一体の大きな獣の口が現れた。
そして獣の口が開くと、中からぬらりと骨と黒い人型のシルエットの計二体の何とも言いずらい何かが出てきた。
そう、出てきたのは壊の式であるニオとナイア、そして獣の口のような式はゲートだ。

「アレは…壊の式……？」

藍がそう言っている間にも壊の式は少しずつ縁側にいる紫に近づいていく。

「はぁ～い。壊の式の貴方達が私に何か用かしら？」

紫がそう言うと、紫の前に来たナイアが黒い手を伸ばしてゲートの口に突っ込み、そしてゴソゴソと何かを漁る。
そして紙とペンを取り出してサラサラと文字を書いた。

『付いて来て欲しい』

実に簡潔にそう書いた。

「…ん～……」

再びズズズッと茶を啜りながら、紫は何か考えるような素振りを見せる。
そして横にいる藍を見ると、スキマを開いてか扇子を取り出し、そのまま口元を隠して胡散臭い笑みを浮かべた。

「そうねぇ…貴方たちのうち一匹が、家の藍と戦ってくれたら行ってあげてもいいわよ？」
「なッ！？　紫様！！」

藍の声も虚しく、紫は再び「どうするの？」と壊の式たちに聞く。
すると壊の式たち三体は顔を見合わせ（ゲートの場合は浮かんでいる目玉）コクリと互いに頷きあった。
そして各々拳を作って2～3回振って……（ゲートは一旦口を閉じた）

『ポン』

ジャンケンをした。ニオがチョキ、ゲートはチョキの絵が描かれた

立て札を地面に叩き付ける様に口から出し、ナイアはパーを出した。
つまりナイアが負けた。ナイアは渋々と言った感じに手を上げる。

「そう…貴方が藍の相手をしてくれるのね？藍、行きなさい。」
「はぁー……わかりました。やりますよ、やればいいんでしょ。」

こちらも渋々と言った感じに溜息を吐くと、そのままナイアと『少し離れた場所でやろう』と言って先程ゲート現れた庭の中央を指差す。
庭の真ん中に向かう藍の後姿は、どこかブルーな空気を出していた……

第１５０話：ちっさい友人（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。何だかんだあったけどもう１５０話まで行きましたね。
次回についてですが、藍しゃまとナイアを戦わせるか、それとも戦わせずに結果だけ書いて後は紫と壊とルーミアを中心に話を進めるか、どちらがいいでしょか？
とりあえずアンケートみたいな感じで軽く答えていただきたいです。

第１５１話：ルーミアの理由とスキマ妖怪の頼み（前書き）

どっちかと言うとメインは後者ですかねぇ……

第１５１話：ルーミアの理由とスキマ妖怪の頼み

何だかんだあって壊の式と戦う事になってしまった。
紫様の我侭（または気紛れ）に慣れてしまったとは言え、相変わらず呆れてしまう。少しは私の事も考えて欲しいものだ……
と、いけないいけない。とりあえず今は目の前にいる壊の式に意識を集中させなければ。
私が今回相手にするのは、確か…ナイアと言う名前の式だ。
黒い男性の影のような上半身で腕をダラリと下げており、下半身から下の足はなく足はなく、体の一部であろう黒い水溜りが溜まっておりその水溜りからぬるりと出てきている感じだ。
目の部分には紅い宝石のような目が二つ並んでおり、それ以外に顔には何も付いていない。

「すまない。じゃあ始めようか。」

私はそう言って妖力を出し、拳を少し引いて構える。
それに対してナイアは自身の体を左右にゆらゆらと揺らしながら魔力などを出す。
そのままお互いしばらくの間睨み合っていたが……

『ダッ』

先に動き出したのは私だ。相手に向かって駆け出すと同時に拳を思いっきり突きつける。
しかし、ナイアはおどけたように手の平を広げた状態で両手を上げると、体を大きく伸ばしてグニャリと凹ませ私の攻撃を容易くかわした。
そして拳を突き出している状態の私目掛けておどけたように上げて

いる手を叩き付けるように振り下ろしてきた。

「くっ…！」

少し掠ってしまったが、大きく後ろに跳びながら攻撃を避けつつ妖力弾を撃つ。

ナイアは自身の腕を鞭のように振り回すと私の放った妖力弾を掻き消した。

さらに、私の方へ体を伸ばして近づくと、拳を金槌のような形に変えて思いっきり振り下ろしてきた。

金槌のように振り下ろされた攻撃を横に数歩動いて避けるが、地面に叩き付けられた拳は今度は私の追うように横に薙ぎ払われる。

その攻撃を、今度は上空へ逃げる事でかわす。下を見ると、辺り一面に砂埃が舞っていた。

「……（強い…」

砂埃で姿が見えなくなった壊の式を見ながら、心の中でそう呟く。

その舞い上がった砂埃を眺めていると、ランランと二つの紅い丸がジッとこちらを見つめていた……

ーーーSide三人称ーーー

ナイアは、宙を浮いている藍をジッと見つめながらその体をゆらゆらと揺らす。

しばらくその状態を続けていたが……

『グッ』

不意に、ナイアは足の無い下半身部分を捻じ曲げながら腰?を低くした。
そしてそのままバネのように宙に跳んだ。

「なっ!?」

ナイアのあまりの速さに驚いたのか藍は短く驚いた声を上げるが、すぐに向かってくるナイアに妖力弾を弾幕の如く撃ち放った。
藍の撃ってきた弾幕を、ナイアはグネグネと奇妙に体を曲げながらかわしていく。
まるでコメディーアニメを見ているようだが、実際に避けられている方からすると若干腹が立つ。
そして藍に近づいたナイアは、片方の腕をハエ叩きのような形にすると藍の頭に思いっきり振り下ろした。
しかし、藍はその攻撃を後ろに飛んでかわした。かわされたナイアは重力に従って下に…落ちなかった。
自分の下半身をプロペラのような形にしてグルグルと回し、その場で浮遊している。

「……」

藍は何も言わずにただ目の前に強敵をずっと睨みつけている。だからこそ気が付かなかったのだろう。

『ブォン!』
「ッ!　ガッ!?」

彼女の後ろでナイアの分身が腕を絡ませて殴りかかっていた事を。

振り向いた時にはもう既にコピーの拳は藍の背中を殴りつけており、藍はそのまま地面に落下する。
それに追い討ちをかけるかのように、オリジナルがコピーの腕を掴んで放り投げて藍に直撃させた。
そして地面に叩き付けられた藍目掛けて本物が近づき、ある程度近づくとその場でプクーっと膨らむ。
まるで絵に描いたかのようなギザギザな口ができ、そこから黒い炎が吐き出される。
藍は薄れ行く視界の中、向かってくるナイアの黒い炎を見続ける。
そしてナイアの炎が当たる直前、藍の目の前におかしな空間が広がった……

ーーーSide壊ーーー

本を読みながらナイアたちが帰ってくるのを待つ。
紫は気紛れだから、もしかしたら来ないかもしれないが……まぁいざとなったら力ずくでと言って置いたので特にこれといった問題もないだろう。
もっとも、俺の式3体だけで紫に勝てるかどうかは疑問だが……

「…寝たか……」

先程までソファーにいたルーミアは、いつの間にか通常サイズに戻ったゼクの尻尾を毛布にしながら寝ていた。
尻尾を毛布にされているゼクも、ルーミアに枕のようにされながら一緒になって寝ている。

「はろ～♪」

しばらく寝ているルーミアたちを眺めていたが、突然そんな声が響くと同時に空いているソファーの上にスキマが開いて紫が出てきた。そしてそのままずるりとスキマから這い出てくるとソファーに座った。

「来たか。」
「えぇ来たわよ。私に何か用があるんですって？」
「まぁな。ところで……俺の式はどうした？」
「もうすぐ来ると思うわよ？」

紫がそう言うと、家の玄関が開けられて式たちが入ってくる。……ゲート、体積がデカイから突っ掛かって入れないみたいだな。まぁ放って置けば勝手に入るだろう。そう思いながら、式たちにしばらく休むように言って改めて紫と向き合う。

「さて紫。態々ここまで来てもらってすまんな。」
「別にいいわ。暇だったし。」
「そうか。この際君が働いていない事はスルーしよう。俺が聞きたいのは……」

俺はそう言いながらゼクで寝ているルーミアに目線を移し、再び紫に視線を戻す。

「…もうわかるな？」
「……つまり、どうして彼女があんなに幼くなっているか聞きたいのね？」
「さすが紫だな。実に察しがいい。」
「それほどでもないわよ♪」

何やら嬉しそうだが気にしない事にしよう。

「じゃあ話すわ。
簡単に言ってしまうと彼女は封印されたのよ。」
「…封印。」
「そう、封印。彼女、数百年前にこの幻想郷に流れ着いた時に色々と大暴れしてね。
それで博麗の巫女に目を付けられてしまったの。」

……確かこの幻想郷の結界の管理と妖怪退治、または異変解決をを中心に行うと聞いたな。

「…なるほど、つまりはルーミアが調子に乗りすぎた訳だな。」
「まぁ、簡単に言ってしまうとそうなるわね。」
「そうか。だが巫女一人でどうこう出来るほどルーミアは弱くないぞ。大方、君もルーミアの力を封印したのに協力したんだろう？」
「残念ながら、私は一切力を貸していないわ。」

……その話が本当だとすると博麗の巫女はとんでもない化け物だな。ルーミアは力で言うと大妖怪に匹敵する。その大妖怪を倒す…まぁここでは力を弱める封印をした事を示すが、それが出来るだけでも充分凄い。

「…数百年前、という事は、その博麗の巫女はもういないのか？つまりは死してもルーミアの封印は解けないのか」
「えぇ、何だか知らないけど頑張りすぎたみたいで、彼女を封印して1週間くらいでポックリ逝っちゃったわ。」

ポックリとな。

「残念だ。もし生きていれば手合わせ願いたかったんだが……」
「貴方、そう言うキャラじゃないでしょうが。それに、今の博麗は素質だけなら先代の巫女よりずっと上よ。」
「……素質だけ、だろう？俺が求めているのは素質じゃない力だ。」
まぁ、その今の博麗の力が伸びれば、少しは期待できるが……

「で、話が逸れちゃったけど、他に聞きたい事はないかしら？」
「…そうだな。ルーミアを元に戻す方法は？」
「その頭に付いてるリボンを外せば元の姿に戻るけど、今の貴方では絶対に解けないわよ。私くらい強くなれば別だけど。」
ふむ、俺の力が戻れば外せるようになるんだな。

「…手間を掛けたな。」
「ふふふ…構わないわ。友人の頼みだもの。その代わり、私のお願いも聞いてくれるかしら？」
紫は、いつの間にか取り出したのだろう広げた扇子で口を隠しながらそう言う。」

「何だ？　俺が出来る事なら大抵の事は聞き入れよう。」
「そう？なら……」
そう言いながらバッと扇子を閉じ、途端に紫は真面目な顔になる。
それを大して気に止めずに、テーブルの上に置かれた菓子入れの中に入っている煎餅に手を伸ばす。

「幽々子に会ってくれないかしら？」

ぴたりと、伸ばしていた手を止める。

「…冗談か？　笑えないぞ？」

「冗談じゃないし笑うところでもないわ。私は真剣に言っているのよ。」

紫の言う事を無視して煎餅を一枚摘み、口に運んで齧る。

そしてある程度咀嚼して飲み込む。

「紫、俺が彼女に会わない理由、わかっているな？」

「えぇわかっているわ。それでも会って欲しいのよ。」

…俺が幽々子に会いに行かない理由は、元々彼女を友人だと思っていないからというのが一つ。

もう一つは、いくら彼女自身が記憶を失っているとは言え少なからずは俺に会ったと言うことがその心に刻まれており、場合によっては幽々子が記憶を取り戻してしまう。

ここまで来れば別に記憶を取り戻す事くらいどうって事ないと言うだろうが、案外そうでもない。

前にも述べたと思うが、紫が幽々子に行った術は、『死者をこの世に縛り付ける』と言わば禁術と言ってもいい。

禁術が故に勿論リスクもあり、そのリスクは『その死者が自身の骸を見た場合、または記憶が戻った場合は完全に輪廻から外され消滅する』と言うものだ。

つまり、前世で関わりのあったものが会いに行った場合、下手をすると記憶が戻ってしまうのだ。

幽々子は少なくとも、紫と妖忌などと言った前世で関わりのあった者に出会っており、そこでさらに俺が会いに行った場合幽々子の記憶が完全に戻り消滅してしまう可能性がある。

つまり、幽々子が俺に会えば下手をすると非常に不味い事になってしまう訳だ。
骸に関しては、紫が幽々子の骸を媒介にして西行妖を封印し、西行妖の封印を解かなければ幽々子に掛けられている封印も解けない。
西行妖の封印を解く方法は知らないが、それに関しては大丈夫だろう。

「…記憶が戻れば幽々子はこの世から完全に消滅するぞ。」
「承知の上よ。それでも貴方には幽々子に会って欲しいの。」
「理解できないな。君は自分の親友がこの世からいなくなってもいいと言うのか？」
「壊、それはあくまで可能性の話よ。幽々子がこの世から消えるかどうかは実際に見てみないとわからないわ。」
「可能性があるからこそ実際に起こる。永く生きた君なら理解できるはずだ。」
「……お願い、幽々子に会って……」

……埒が明かないな。

「…わかった、考えておこう。だから今日のところは帰ってくれ。」
「……ぇぇ。それじゃあ今日は帰る事にするわ。」

紫はそう言うとスキマを開き、最後に悲しそうな顔をしながらスキマに入っていった。

……

「……紫、幽々子が消えて悲しむのは俺じゃなくてお前なんだ……」

スヤスヤと聞こえるルーミアとゼクの寝息を聞きながら、上を向いてそう呟いた……

第１５１話：ルーミアの理由とスキマ妖怪の頼み（後書き）

はい終わり。壊は友人と認めた相手に対してはそこそこ考えているんですよ。あくまでそこそこですけどね。

今更だけどこの作品で疑問に思うかもしれない事や設定を説明する回　その２

まんまですね。
読者が疑問に思うかも知れない事や、もっと詳しくと言うことを独断で決めて説明します。

今更だけどこの作品で疑問に思うかもしれない事や設定を説明する回　その２

白と黒「そんな訳で始まりましたですはい。」

壊「普通に話せ。」

白と黒「はいはい…んじゃさっそく一つ目行ってみよー！」

その１『時間の流れ』

白と黒「あぁこれ。幾らなんでも、一番最初の生命体の壊の年齢が６０００くらいっておかしいだろうと。
本編でも書いたけど（どの回かは忘れてしまったのでご自分でお探し下さい）壊のいる世界は、実は瑠璃が世界にお願いして時間を早く進めてるわけなので、実際の壊の年齢は……ふっ。」

壊「おい続きを言え。気になるだろうが。」

白と黒「聞きたい？」

壊「いいからさっさと聞かせろ」

白と黒「じゃあ言うけど、実際の壊の年齢は間違いなく数十億行ってます。詳しい事は言いませんが、兎に角この世界での一番の年長者は、一応壊なんで……」

壊「……」

白と黒「元気出せよ。あくまで基準なんだからさ。実際にお前が感じている時間&この世界の生き物が感じている時間は間違えてないんだからさ。つまりこの世界の生き物から見たらお前はまだ万に行ってないんだよ。」

壊「……」

白と黒「あらら…よっぽどショックが大きかったか……ちなみに、これは他のキャラにも一応言える事です。
永琳も億単位の時間を生きている事になります。…まぁ要は、ビデオの巻き戻しや早送りと同じように考えてください。
んじゃ次」

その2『壊の性格』

白と黒「これですねぇ…いつか言われるんじゃないかと思ってたけど、感想で似たような事を言われましたねぇ……
簡単に言うと、壊は話している口調は爺…大人っぽいけど、心の中じゃまだ16歳のままなんですね。
まぁ、例に例えると、『ふざけてはいかんよ僕』と大人っぽく話してるけど、心の中じゃ『ふざけんなよ餓鬼が』って中学生みたいに思ってるみたいな感じです。あくまで例えです。実際はもうちょっと大人っぽいですよ。
それと、どうして態々壊の口調を変えているかと言うと、人間も成長すると少しずつ口調が変わって行きますよね?
それと同じで、数千年も生きたんだから口調が変わってもおかしくないんじゃないかなぁと思って大人っぽい口調にしました。
わかりずらくても頑張って理解してください。」

壊「……」

白と黒「いい加減に元気出せ。それでですね、まだ続きますけど時々壊の行動が普段の性格とかけ離れている事がありますが、あれは殆どの場合が気紛れ、あるいは自身のためになることです。で、前の話の『第１５１話：ルーミアの理由とスキマ妖怪の頼み』で最後に言っていた事がありますが、あれは幽々子が消えたら紫の成長がそこで止まるんじゃないかと言う心配と、もう一つは友人としての心配です。
２回目の主人公の紹介でも述べましたが、壊は自分が認めた人物（妖怪）はそこそこ、場合によっては全力でサポートします。
ちなみに、前世で壊は家を捨てた後はちょっと堅めだったけど普通の男子と同じような口調でした。
んじゃ次」

その３『たまに壊が吹いている笛について』

白と黒「どこであんな笛の吹き方を覚えたのか、おい主人公、説明しなさい」

壊「……前世での話だが、笛は始めこそ興味はなかった。ただ、俺の誕生日の時に友人に吹いてみろと言われた時に吹けなかったのに腹が立って練習した。」

白と黒「つまりは努力の甲斐あって吹けるようになったわけだ。で、どれくらいで上達した？」

壊「指使いを覚えるのに三ヶ月使って、その後も色々あって実際に曲が吹けるようになったのは５ヶ月くらいだ。

その後に友人の前で吹いたら今度はピアノを弾いてみろと言われた。その時も出来なくて腹が立ち、ピアノの練習もしたので一応は弾けるようになった。」

白と黒「そこまで聞いてねぇよ。どんだけ負けず嫌いなんだよお前ぇはよ。」

壊「いや、勉強面だけは負けていたからな。だからそれ以外は全部勝ちたかった。」

白と黒「あっそ。んじゃ次ー」

その４『壊の式たち』

白と黒「とりあえず式たちについて説明してくんないかね？」

壊「俺が能力で創った。」

白と黒「んな事知ってるって。そうじゃなくて、式がどう言う存在なのか知りたいんだってば。」

壊「そうだな…俺の妖力や魔力を媒体にし、その時の気分で創った……言わば俺の分身みたいなものだな。」

白と黒「分身？」

壊「あぁ、例えば絶を例にして言うなら、俺が絶を創った理由は知っているな？」

白と黒「にんにくなすびと戦争する時のための兵士」

壊「そうだ。俺の頭の中で戦争で必要なのは、絶対に逆らわない、且優秀な素早い判断の指揮官と力がある兵士。
それを頭の中で想像し、そして絶を創造した。
だからこそ絶は他のどの式よりもバランスがよく、俺に対して絶対服従を誓っている。」

白と黒「…色んな所でお前の事見捨ててない？それにあの家事機能はなに？」

壊「あれは見捨てている訳じゃない。それに家事に関しては俺も知らない。」

白と黒「…じゃあ絶以外の式は？」

壊「ゲートは気紛れで且腹が減っている時に創ったから、その腹が減っているところが全面的に性格に反映されているな。
まぁ、ずっと腹が減っているわけじゃないし、俺の式だから腹が減っても死なないが……
他にもあるが、各々自分で解釈して欲しい。ちなみにゲートの体はあの大きな顎のような口そのものだ。」

白と黒「投げ出しやがったなこの野郎。」

その５『西行妖の封印と幽々子について』

白と黒「これはオリジナル設定ですけど、紫が幽々子を媒介に西行

妖を封印し、そして西行妖の封印が解けないと幽々子の封印も解けないというかなり複雑な封印をしたわけです。
この西行妖の封印を解く方法は、この西行妖の力を取り戻させて花を咲かせる、または掛けられている以上の力で無理やり封印をぶち壊せば封印は簡単に解けてしまいます。
ただ、この封印は紫が色々小細工してしまい、この封印の前では能力なんてものは紙切れ同然のようなもので、紫の能力も壊の能力も通用しません。
まぁ、『その幻想をぶち殺す！！』の人が来たら簡単に破られてしまうかもしれませんが、この小説でその人と同じ能力を持つ人は出す気はないので問題ナッシングです。」

壊「…で、簡単に纏めればよっぽど強い力の持ち主が壊す、または西行妖が満開にならない限りは幽々子と西行妖に掛けられた封印は絶対に解けないと言うわけだ。」

白と黒「そうそう。でも、あくまで強い封印を掛けられているのは幽々子の骸であって、西行妖の方が掛けられている封印は少し弱いみたいだけどね。」

壊「そうか……」

白と黒「んじゃ、今回はこの辺でお暇させてもらいます。そろそろ物語を進めたいんで、次回は2年ぐらいすっ飛ばしてみようかなと考えていたりします。まぁ、それは読者の皆さんに決めてもらいましょう。

1、すっ飛ばす。

2、私はじっくり派だからもう少しだけ続けて欲しい。

選んでください。」

壊「……行き成りだな。まぁ、とりあえずは答えてやってくれ。それでは。」

今更だけどこの作品で疑問に思うかもしれない事や設定を説明する回　その2

はい、そんな訳で終わりました。上のアンケートみたいなもの、是非ともご協力お願いします。
ちなみに、時間をすっ飛ばしても原作キャラが出るだけでまだ原作には行きません。

際１５２話：話し合いと短い再開（前書き）

今回は戦闘なしで2年経った話です。原作キャラが出るかもしれません。

際１５２話：話し合いと短い再開

幻想郷に来てもう2年が経つ。なに？時間の経過が早すぎるだと？
そんな事は知らん。
2年も経っているが俺のやっている事は相変わらず家の中で本を読むか家の周りで瘴気を浴びるか、変わった事と言えば前よりも紫が家に来る回数が若干増えたくらいだろう。
他には迷いの竹林にある妹紅の家に行ったり、幽香の家に紅茶を飲みに行ったりもしている。
迷いの竹林に行く時はたまにミスティア会うが料理の腕が驚くほど上達していたな。
ルーミアに関しては、よく俺の家に来て何か食っていったり、人里へのお使いを頼んだりしているな。
俺は人里には近づけないが、ルーミアなら問題ないと思ったので頼むようになた。
ただ、ルーミアは人を食らう種類の妖怪なのであまりいい目で見られていない。
それに何か買って来る時も、買うものを間違えていたり忘れていたりするのでそこまで使えない。
つまり頭も幼くなっている訳だ……

「はぁ……」
「どうかしたのかー？」

思わず漏れてしまった溜息に対し、俺の横でちびゼクと戯れていたルーミアがのきょとんとした顔で聞いてくる。

「…何でもない。」

そう言いながらテーブルに置かれている茶を飲む。少し、温(ぬる)くなっているな……
まぁ、そんな事はどうでもいいな。それより……

「紫、見てないで出てきたらどうだ？茶くらいは出すぞ。」
「……よくわかったわね。」

俺が自分の向かい側のソファーに向かって喋りかけると、そこにスキマが開いて中から紫が出てくる。

「わかるさ。もう4割近く戻っているからな。」

俺の力は2年経った事により4割以上、5割未満といった感じに戻っている。
だから紫が近くでスキマを通して見ているかどうかという事が何となくだがわかる。本当に何となくだ。昔のようにすぐにわかる訳じゃない。

「いつからいた？」
「……4時間くらい前？」

……首を傾げながらとんでもない事を言ったぞ。

「…それはご苦労だったな。とりあえず、茶でもどうだ？」

そう言いながら片手に急須(きゅうす)を持って紫に見せる。

「…そうね、頂こうかしら。」

紫はそう言いながらスキマを開き、それに手を突っ込んで『紫』と

書かれた湯飲みを取り出すと、それを俺に差し出した。
差し出された湯のみに茶を注ぎ、自分の分にも少し足す。そして茶を口に含んで湯飲みをテーブルに置く。

「…で、何か用でもあるのか？」
「ん、えぇ。壊、貴方今日は空いているかしら。」
「…現段階の俺は年がら年中空いているぞ。行ける場所も限られているからな。」
「そう…。それなら、私の頼みを聞いてくれない？」
「幽々子には会わんぞ。」
「今日は違うわよ。と言うかまだ会ってくれないのね……」

当たり前だ。

「最近、妖怪が活発化しているのに気が付いているかしら？」
「あぁ…アレか。」

確かに最近、おとなしかった妖怪や見慣れない妖怪が必要以上に人間を襲っているとルーミアに聞いたな。
何でも、そのせいで人里の方もかなり大変らしい。

「…それがどうかしたか？言っておくが、俺は何もしていないぞ。」
「そんなの知ってるわよ。そうじゃなくて、今日、妖怪が活発化していることについて何人かが集まって話し合うの。
それで、その話し合いに貴方も同席して欲しいのよ。」
「…なるべく関係を持たないようにと言ったのは君だぞ？」
「今回は別にそういう事は気にしなくてもいいわ。それに貴方の立ち位置は私の付き人みたいなものだから。」
「藍はどうした。」
「少し無理をさせ過ぎたみたいでねぇ…今家で寝込んでるのよ。」

苦労しているんだな、藍。

「…わかった。行くだけ行ってみよう。どうせ暇だからな。」

「そう、それなら早く行きましょう？」

「壊、どこかに行くのかー？」

俺たちの話を聞いていたルーミアが俺の横に近づき、再びきょとんとした顔でそんな事を聞いてきた。

「あぁ、少し出かけて来る。だからちゃんと留守番をしているんだぞ。腹が減ったら絶に何か作ってもらえ。いいな？」

「わかったー」

満面の笑みで答えるルーミアの頭を一回撫でて、そのまま立ち上がる。

すると紫も俺の後に続くように立ち上がり、そのまま自分の横にスキマを開いた。

「さ、改めて行きましょう？」

紫はそう言うと俺の腕を掴み、そのままスキマに入っていった……

「ここよ」

紫のスキマで移動した場所は、よくわからない和風な部屋だった。

座布団が何枚か敷いてあり、かなり大きい横長のちゃぶ台の上には

煎餅の入った菓子鉢が沢山と中身のない湯のみが幾つか置いてある。後ろを見ると、襖障子が見える。

「…誰もいないようだが？」

「それはそうよ。だってまだ集まるのに１０分はあるもの。」

１０分前行動なんて生まれて始めてやったな。５分前行動ならやった事があるんだが……

「おや、貴女が早く行動するのはめずらしいですね？」

と、くだらない事を考えていたら突然後ろの襖障子が開き、幼い少女…とまでは行かないが、まだ大人とはいえない声が聞こえたので振り向く。

そこには案の定見た目が１５未満ほどの少女がおり、容姿は藍色に近い服と黒色のスカートを穿いており、袖の部分がルーミア同様白い。

頭にはおかしな帽子を被っており、髪は緑で右側が若干長いだろうか？白と紅のリボンを両側に付けている。

棒のような物を持っているが……

「これはこれは…ご機嫌麗しゅう御座いますわ。」

紫は少女を見ると、冷や汗を流しながら扇子で口元を隠し胡散臭い笑みと口調で話し始めた。

「えぇ、ですが言っておきましょう。その胡散臭い笑みを浮かべるのをやめなさい。」

「あら非道い。私そんなつもりは御座いませんです事よ？」

「いいえ、明らかに胡散臭い笑みを浮かべています。そう、貴女は

少し自堕落すぎる。そもそも、貴女は幻想郷の管理者であるにも関わらず今回の件を先延ばししすぎです。本来ならもっと早くに対処すべき事を、『まだ大丈夫』と言って家でだらけていたとは何事ですか。妖怪の賢者ともあろう者にあるまじき行為ですよ。それにですね――――」

……何やら棒を顔の前で立てて説教を始めたぞ。紫の方もさらに冷や汗を流しながら正座して聞いている。

とりあえず、少し離れた位置で壁に寄りかかるように座って見ていることにした。

「いやぁ～すいません四季様！」

紫が説教されているのを見ていると先程同様に、しかし今度は勢いよく襖障子が開かれ別の奴が入ってきた。

容姿としては、髪の色は赤い少し癖のある髪で、それをツインテールにしている。そこまで長くないな。

半袖の白と藍色のロングスカートと着物を掛け合わせたような物を着ており、腰巻もしている。瞳の色は赤だ。

「…これはまためずらしいですね。小町、貴女がこんなに早く来るなんて……」

「へ？いや、あたしはもう始まってるって聞いたんですけど……ひょっとしてまだでしたか？」

「えぇ、少なくとも始まるまで後１０分近くはあります。」

「…あれ～？」

女はそう言いながら指を顎に当ててクエスチョンマークを頭に浮かべた。

「まぁいいでしょう。それより、せっかく来たのなら少し座って待っていたらどうですか？」
「あぁはい。じゃあそうします……」
少女はクエスチョンマークを浮かべた女に対しそう言うと、話している間に逃げようとしていた向き直る。
「待ちなさい！！」
そして捕獲される紫。……何と言うか……紫が怒られるというのは中々見れないレアなシーンだな。
「相変わらず容赦ないねぇ四季様は。」
不意に、横から声が聞こえたので見てみると先程の赤髪の女が、俺と同じように壁に背を預け、片膝を立てもう片方の足を胡坐のようにして立て膝をしていた。
「……四季様と言うのか、あの少女は。」
「ん、何だい知らないのかい？」
「あぁ、何せ今日始めて会ったからまったく知らない。」
「そうかい。それならあたいが教えてあげるよ。おっと、その前にお互い自己紹介と行こうか。
あたいは『小野塚小町（おのづかこまち）』ってんだよ。気軽に小町って呼んでおくれ。
お前さんの名前は？」
「紅鎖華壊だ。好きに呼んでくれて構わない。」
俺の名前を聞くと、小町は満足そうに「そうかい」と満面の笑みで言うと、説教をしている四季を見た。

「あの人はね、『四季映姫（しきえいき）・ヤマザナドゥ』って言いう名前で、何と、死者を裁く閻魔をやっているのさ。」
「…あんなのが閻魔か…個人的には閻魔はもっと厳つい感じのを想像していたんだが……」
「あはは！　確かにそうだろうね。でも四季様はあくまでその地区担当の閻魔であって、『閻魔王』たちの中には入っていないんだよ。」
「閻魔王……」
「ん～…簡単に言えば地獄全体を纏める偉い人達だねぇ。もともとは十人で使者を裁いていたんだけど、最近…と言ってももう１００年以上前から死者が増えちまって十人じゃ手に負えなくなったから閻魔になる人材を募集したそうだよ。で、四季様もそれに応募したんだよ。」
今で言うチェーン店のようなものか。あまり経済的にはよさそうに思えないが……
いや、それよりも……
「…まだ終わらないのか。」
未だにガミガミ言っている閻魔を見ながらそう言う。
「あんなのはまだ序の口…いや、まだ序の口ですらないかね。下手をすると半日は過ぎちまうよ。」
「……とんでもないな……」
隣で苦笑いをしている小町と一緒に閻魔を見ながら、そう呟いた……

「コホン…では、これからの事について話し合いたいと思います。」

あの後、結局集まるのに３０分近く経ってしまい、その間紫は闇魔にずっとガミガミと説教を食らっていた。

で、今回集まった代表者は……

マヨヒガ・『八雲紫』　付き人『紅鎖華壊』

人里・『上白沢慧音』　付き人なし

地獄・『四季映姫・ヤマザナドゥ』　付き人『小野塚小町』

妖怪の山・『大天狗』　付き人『鞍馬（くらま）天狗』

冥界・『？？？』　付き人『？？？』

とまぁこんな感じだ。ちなみに冥界の代表者に関してはまだ来ていない。他にも誘ったそうだが、断られたり忙しかったりしているそうだ。

と言うか人里の代表者が見覚えのある人物なんだが……

「まず今回の話し合いの話題はご理解頂けていらっしゃいますか？」

「うむ、最近の妖怪の活発化についてじゃろう？」

紫がと言うかけた事に対し、爺、もとい大天狗がそう返す。

「その通りでございます。その原因は、最近幻想郷にやってきた『吸血鬼』にあるのです。」

「…吸血鬼…ですか。確か数ヶ月ほど前に貴女が連れて来た西洋の妖怪ですね？」

「はい。最初のうちは大人しかったのですが、ここ最近は幻想郷の妖怪が人間と共存しているのが気に食わなくてその辺の妖怪を勢力にしているそうです。」

「知っておる。現に、わしらの所も何人かが持っていかれ、三日ほど前に殴り込みにきたからな。」

「私たち人里の住民もそれと同じような目に会った。最近じゃ襲撃回数が増えてきて、それに対しこちらも怪我人も増えている。」

今まで話を聞いていた慧音も話しに入り、それを聞いた他の者たちも少し深刻そうな顔をしている。

ちなみに、俺にとってはあまり関係のない事なので話し合いが始まってからずっと懐に仕舞っておいた豆本を読んでいる。

大きさは縦７ｃｍ、横４？で目が悪くなる事間違いなしだが、俺には通用しない。

「これは速急に手を打つべきではありませんか、紫。」

「私もそれに賛成「あらぁ、もう始まってたの？」……どうやら冥界の代表者が来たようだ。」

明らかに場違いな声が響くと同時に襖障子が開くので、一旦本から目を離して冥界の代表者を見る。今思うと、黙って本を読んでいればよかったのかもしれない。

入ってきた人物の容姿は、桃色のウェーブのかかった髪の上には紫の被っているようなドアノブカバーのような帽子を被っており、その帽子には幽霊がつけるような三角市が付けられていて、その三角市には渦巻きのような模様が描かれている。瞳の色は赤だ。

服装は、水色の着物に白いフリルをあしらったような物で模様は桜。全体的にほわわんとした雰囲気で、生前とは比べ物にならないほど

明るくなっているが、やはり容姿は変わっていない。そう、彼女は……

――――西行寺幽々子――――

「……」

唖然。今の俺にはその言葉が合うだろう。現段階で会いたくなかった人物に会ってしまったのだから。

思わず隣で座っている紫に目を向ける。紫は俺の視線を気にするでもなく、ただやって来た人物を見て微笑んでいた。

「やっと来ましたか……」

「ごめんなさいね、すっかり忘れていたの。」

「貴方と言う方は…まぁいいでしょう。兎に角座ってください。」

「はいは～い♪」

何が楽しいのかやってきた幽々子は閻魔にそう返事をすると、そのまま何の迷いもなく俺の隣に座った。

俺はとりあえず、横に座った幽々子に顔を見られないようになるべく紫のいる方を斜め下に見る。

服装だけならそう簡単にばれる事もないだろう。要は顔を見せなければ完全にはばれない。…はずだ。

「では改めて……これから吸血鬼に対しどう言った事をしましょう？」

紫がそう言いながら回りにいる者たちを見渡す。

「…やはり一番手っ取り早いのは吸血鬼を力でねじ伏せる事だとわ

しは思う。」
「そう…だな。私もそう思う。」
「しかしどうやって?言っておきますが、ここにいる殆どの者たちはそこまで手が回らないでしょう?」
「確かに……じゃが、何か起こったその時のために博麗の巫女がおるだろう?」
「…あの子は今腰を痛めて動けない状態です。」
「「……」」

紫の一言で場にいる全員が静寂に包まれた。ただし、俺の横にいる幽々子は煎餅を齧っている。
そしてしばらくの間静寂に包まれていたが……

「…妖怪の山の天狗たちはどうでしょうか?」
「あやつらは駄目だ。前に行かせた事があるが全員が吸血鬼の勢力の一部にされてしもうた。
仮にわしらが行ってもすぐにやられてしまうだろう。」
「そうですか……言っておきますが、私たち地獄の方も忙しくて異変解決のための人材は送れません。」
「……そうか……ところで……」

そう言いながら大天狗が俺の方へと目を向ける。

「紫殿、お主がいつも連れて来ている付き人はあの九尾のはずではなかっただろうか?」
「私の式は今少し動けない状態にあります。ですから代わりの代理人を連れて来た次第でございます。」
「ん~……」
「どうかしたの、幽々子?」

先程話しかけてきた大天狗の付き人、鞍馬天狗が聞いたことに幽々子が疑問の声を上げる。

「…何て言うのかしら…私、この人にあった事がある気がするのよね～……」

……不味い……

「…紫、報酬付きなら俺が吸血鬼を殺してきてやってもいいぞ。」

「貴方は…幻想郷が危機に陥っているのに金銭を優先するのですか？」

闇魔が何か言っているが気にしない。兎に角、何でもいいから別の話題で誤魔化すしかない。

「どうする？このまま博麗の巫女が回復するのを待つか？それもいいかもしれんが、さらに勢力が拡大するだろうな。」

俺がそう言うと、紫は少し考えるような顔をする。と言うか早くしてくれ。横にいる幽々子が俺の顔を見ようと近づいてくるんだ。

「…わかったわ。それじゃあ壊、お願いできるかしら？」

その言葉を待っていた。

俺は心の中でそう呟くと同時に素早く立ち「キャッ！」上がる。近づいていた幽々子が短く悲鳴を上げたが気にしない。

「場所はどこだ？」

「大きな湖がある場所は知っているかしら？そこに行けば大体わかると思うわ。」

「承知した。それと……」

俺はそう言いながら能力で畳に少しずつ潜る。そして完全に潜りきる前に、紫に向かってこう言った。

「これ以上は君が後悔するぞ。」

最後に、紫の寂しそうな顔が見えた気がした……

ーーーSide紫ーーー

この話し合いで壊を連れて来た理由、それは幽々子に会わせるため。壊は、私がいくら頼もうとも「考えておく」とだけ言って絶対に幽々子に会ってはくれない。

「…では皆さん、今回はこれでお終いです。道中気をつけてお帰りください。」

そう言うと、座っていた各々は立ち上がり、最後に礼をして襖障子を開けて外に出て行った。

「すまない…少しいいだろうか?」

自分も帰ろうと思った矢先に、不意に声が掛けられたので見てみると人里の代表者が立ってこちらを見ていた。

「何かしら?」

「あぁ…その…実は折り入って頼みがあるんだが……」

聞けば彼女は、2年前に人里に妖怪が襲撃をかけた時に、壊が妖怪を退治して助けてくれたと言う。
そしてその時言いそびれた礼がしたいそうだ。しかし、前に礼を言おうとした時は上手く逃げられてしまったので今度はキチンと礼がしたい、だから私に話して置いてくれと言っている。

「…まぁ、それくらいなら構わないけれど……2年前の事なんて良く覚えているわね？」
「当然だ。救ってもらったのだからそれ相応の礼はしたい。」

何とも律儀だなと思いながら頭の中で考える。あまり壊を表に出すと、幻想郷のパワーバランスが崩れかねないと思いながらも何となく承知してしまった。
人里の代表者…確か彼女は半獣だと言っていた。彼女は嬉しそうに礼を言うと、そのまま日にちと時間を言って部屋を出て行った。
…何だろうか、心が妙にモヤモヤする。今更だが、壊を会わせるのをやめようと思ってしまったが、2年も経ったし、こ事件が終われば壊を全面的に表に出してもいいと思っていた。
ここで壊が力を見せれば少なからず壊に手を出そうと言う者もあまり現れなくなると思う。
もやもやした感じをあまり気にしないでスキマを開き、私はその場を後にした……

あ、そう言えば幽々子に呼ばれてるんだったわね……

際１５２話：話し合いと短い再開（後書き）

はい終わり。今回は新しい原作キャラ二人、映姫様とこまっちゃんでした。
幽々子も出してみましたね…今回は、壊は顔が見えないようにしてたけど今度会わせる時は……
次回も原作キャラが出ます。

第１５３話：依頼実行・いざ吸血鬼退治へ（前書き）

タイトル通りです。激しい戦闘はありません。

第１５３話：依頼実行・いざ吸血鬼退治へ

薄暗い、そして広い客室のような部屋。真っ白なクロスの掛けられたテーブルに、見た目はまだ幼い少女が手を組んで顎を乗せて座っている。
少女の前には紅茶の注がれたカップが置かれており、そしてカップの横には紅い鉄のような臭いのするミルクピッチャーも置かれている。
そして少女の少し斜め後ろには、キチンとした服装のメイドが何も言わずに主の傍に立っている。
紅茶を一口飲み『ほぅ』と息を吐いた少女は再び手を組んで顎を乗せる。
そして鋭く尖った犬歯を光らせながら楽しそうに笑みを浮かべる。

「ふふふ……」

薄暗い部屋で、少女の笑い声が静かに響いた……

ーーーーSide壊ーーーー

あの話し合いの場から逃げるように家に帰ってきた俺は、すぐにでも吸血鬼退治できるように準備をしていた。
準備と言っても、別に杭やら十字架やら聖水やらを用意している訳ではなく、ルーミアと昼食を摂っているだけだ。
アレだ、腹が減っては戦は出来ぬと言うだろう。しかしルーミアがいい食べっぷりだな……

「んぐんぐ……」

…本当にいい食べっぷりだな。炊いた米がもう無くなりかけてるな……そんな事を考えながらも自分の箸を進める。

「ご馳走様ー」

俺より先に食べ終えたルーミアが手を合わせそう言い、自分の食器を重ねて流しに持って行く。

俺も少し遅れて食べ終えると、最後にご馳走様を言ってルーミアに食器の片づけを頼み、そのまま2回に上がり自室に入って式を仕舞う石を持って再び一階に下りる。

今回は……そうだな、何体か連れて行けばいいだろう。俺は今回連れて行く式を呼び寄せて説明をして持ってきた石に仕舞う。

「またどこか行くの？」

「あぁ、少しな。夜までには帰ってくると思うが、暇になったら帰ってもいいぞ。」

そう言ってルーミアの頭を撫で、そのまま家を出た……

ーーーーSide三人称ーーーー

幻想郷にある『霧の湖』。その湖の小島に、大きな洋風の館がある。全体的に紅く、回りの景色とはあまり合っていない。

その洋風の館の表門に、一人の女性が腕を組んで門の壁に寄り掛か

っている。
服装は華人服とチャイナドレスを足して割ったような物で、淡い緑色を主体としている。
髪はとても長く、赤い腰まであるストレートヘアーで側頭部を編み上げリボンをつけて垂らしている感じだ。
目の色は…青だろうか？いや、灰色も混じっているので青のかかった灰色と言うほうが正しいだろう。
頭には緑色の帽子を被っており、帽子には『龍』と一文字だけ書かれた星型の飾りが付いている。
ついでにスタイルよし。
彼女の名前は『紅美鈴（ほんめいりん）』。この紅い館の門番をしている妖怪である。

「ふわぁ～……眠い……」

そう言いながら欠伸をする美鈴。
彼女曰く、侵入者が来ない時は門番と言うのは実に退屈な仕事だそうだ。かと言って門を守っている門番は彼女一人なので誰かと暇つぶしが出来る訳でもない。

「…暇だなぁ……」
「暇なところ悪いが、少しいいだろうか？」

呟いてすぐに自身の横から声が聞こえたので振り向くと、顔を白い布でグルグル巻きにして片目だけ出した長身の男が立っていた。肩には変わった形の人形が乗せられている。勿論、この男の正体は言わずもがな壊である。
それを見た美鈴は一瞬悲鳴を上げそうになったが、相手が何もして来ないと言う事を理解するとすぐに平常心に戻った。

「この館に何か用ですか？」

仕事モードに入った美鈴は、いつもの用にまず敬語で対応する。

「あぁ、この館に吸血鬼がいると聞いてきたんだが……」

「吸血鬼……お嬢様ですか？確かにいますけど……」

「そうか。それならそのお嬢様とやらに会わせてもらいたい。」

「…それは……すみません、今はちょっと……」

美鈴はそう言いながら少し申し訳なさそうにする。今、この館の主はその辺の妖怪をとっ捕まえて自分の勢力の一部にしており、そのせいで館の中は少しピリピリしていて誰かを招き入れる訳には行かない状態なのだそうだ。

「そうか…それなら仕方がない……」

壊はそう言ってそのまま横を向き、美鈴の守っている門から離れる。

「無理やり通らせてもらう。」

ある程度離れた壊は再び美鈴に向き直ると、そう言って美鈴に霊力弾を1発だけ撃った。

美鈴はそれに気づいたと同時に『気』を込めた拳で霊力弾を殴って消し飛ばし、壊をキッと睨み付けた。

「…何のつもりですか？」

「なに、簡単な事だ。　通してもらえないなら力ずくで通ればいい。それだけの話だろう？」

壊がそう言っている時、美鈴は目の前にいる存在を完全に敵だと認

識した。
そして認識した時にはもう既に体が動いており、『気』を脚に込めて思いっきり駆け、さらに今度は肩から掌まで全てに気を込め壊の顔に殴りかかった。がしかし……

「なっ…！？」

確実に壊の顔を捉えていたはずの拳は他の誰でもない、しかし始めからいた第三者によって防がれた。
その第三者とは、壊の肩に乗っていた人形…つまりは絶。
壊の顔目掛けて飛んできた拳を、壊の顔面擦れ擦れのところで割って入り、小さな手でガッシリと挟むようにして受け止めたのだ。
そして絶に守られた壊は、身長の差で見下ろすような感じで片方だけ出ている目でつまらなそう美鈴を見ている。

「…そら。」

何とも気の抜けた声を出しながらダルそうに足を上げて、絶の手から抜け出せていない美鈴に前蹴りを入れる壊。
絶は壊が蹴りを入れた途端に美鈴の腕を放し、美鈴は、飛んできた蹴りを反射的にもう片方の腕で防いだが、突然の蹴りでしっかりとしたガードが出来ずにそのまま大きく後ろに吹き飛びながらあとずさる。

「…ふぅ……危ない危ない…。貴方が敵だと改めてわかったわ。」

額から出た冷や汗を少し拭い、侵入者などへ対する普段の口調へ戻った美鈴はそう言いながら構える。

「……」

壊は何も言わずに無言になると、そのまま門に向かって駆けた。
美鈴は、壊が門に入らないように同じく駆けて近づこうとしたが、近づく前に足元に長くそして細いロボットアームのような手が突き刺さったので後ろに飛んでかわす。

「…余計な時間を割くわけにも行かないからな。お前の相手は絶にしてもらう事にする。」

いつの間にか門を通り過ぎて中に入っている壊はそう言うと、そのまま館の中に入っていった。
そして地面に突き刺さった自身の腕を抜いて、美鈴から少し離れた位置に絶がゆっくりと降り立つ。

「…ＯＫ。侵入者を入れてしまったけど……」

美鈴はそう言いながら再び構える。

「…何としても、貴方だけはここで食い止める！」

そう言って絶に向かって駆け出した……

ーーーＳｉｄｅ壊ーーーー

「…広いな。」

館の中に入って俺の第一声はそれだった。

この館、外見よりもずっと広く入り組んでおり、そして逆に内装は外と同じように紅い。
それに先程からメイド服を来た妖精が弾幕やら武器やらで俺に攻撃をしてくるので、鬱陶しくてしょうがない。

「……いかんな、道がわからん。」
「それなら私が案内してあげましょうか？」

不意に、自分の後ろからそんな声が聞こえたので前に向かって大きく跳ぶ。
すると後ろから『ザクッ』絨毯を鋭利なものがに突き刺さるような音がした。
俺はそのまま後ろを振り向いて話しかけてきた人物を見る。
容姿は、膝の辺りまである藍と白を中心としたメイド服を着ており、髪型は銀髪のボブで両側の揉み上げ辺りの髪の先端を緑色のリボンを付け三つ編みにし、頭にはカチューシャを付けている。
瞳の色は…青っぽいな。

「……似ているな。」
「？」

俺が前世で蒼華と一緒に殺したメイドにあまりにも似ている。

「一体この館に何の用かしら、侵入者さん？」
「…いや、少しここのお嬢様とやらに用事が会ってな。案内は結構だ、どうせしてくれないだろうしな。」
「あら、勝手に決め付けるのは良くないわよ？仮にもお嬢様に会うお客様なら、メイド長の私が直々に案内するわ。
ただし、貴方の場合は地獄への案内だけど。」

メイドはそう言うと、どこから取り出したのか銀色のナイフを取り出す。
…参ったな……メイド長と言う職業も、使ってくるナイフもまったく同じだ……
不愉快、実に不愉快。ここまで気分が悪くなるのは久しぶりだ。殺しても尚俺に楯突こうとは……

「……「何をボーっとしているのかしら?」ッ!?」

再び自身の後ろから声が聞こえたので振り向くと、そこにはナイフを手で弄っているメイド長がいた。
どういう事だ?先程までは俺の少し前にいたはずだが……そんな事を考えていたらメイド長が弄っていたナイフを投げつけて来たので、それを横に跳んで避ける。
が、しかし、避けたと同時に回りを大量のナイフで取り囲まれていた。
少し動揺しながらも、こちらもナイフを創って腕の関節をはずし、飛んできているナイフを全て叩き落す。

「…意外ね、まさか全部叩き落すなんて……」
「…ずいぶんと厄介な能力だな? どんな能力だ?」
「侵入者に教える気はないわ。」

…チッ。
だが何となくだが予想は出来る。まず一つは、『物を転送させるタイプの能力』
そしてもう一つは、『時間操作系』の能力。時を止めてナイフを仕掛け、俺を誘導させてそのまま河豚にする気だったか……

「……まぁいい。」

そう呟き、懐から式の入った石を取り出す。手始めに……

「クロック。」

石を開いた掌に乗せながら式の名前を言う。すると、石が輝いて中から式が飛び出す。

「……何をしたの？」

俺を睨みつけながらメイド長がそう尋ねる。確かに式は召喚したが、俺が見えないように隠している。

相手の能力がまだわからないのに式の力を見せたりしたら、どうなるかわからない。それにこれは一種の賭けだからな……

「さぁな。さて、俺は君の顔を見ているととてつもなく不愉快な気分になる。よって先に進ませてもらうぞ。」

そう言って俺は歩いてメイド長に近づき、その横を通り過ぎる。するとメイド長は、ナイフを取り出して……

「ッ！？」

何やら驚いた顔をすると、少しずつ焦りだし始めた。その間にも俺はメイド長から離れていく。

「待ちなさい！」

「何だ？悪いが続きは……」

俺はそう言いながら少し首を回して視線をメイド長の後ろに向ける。

「同じ『時間を操る』もの同士でやってくれ。」

俺が言った事と、そして俺の視線に気が付いたメイド長はその場を離れて素早く自分がいた場所を見る。
そこには、草刈鎌を出して先程メイド長がいた場所に突き刺しているクロックがいた。

「…まさか……」

「その通り。そこにいる奴は俺の式で、創った時から君と同じような力を持っている。
クロック、そのメイド長の相手をしてやれ。ただし殺さずに、手加減してある程度痛めつけてから俺のところへ連れて来い。」

いざとなったら人質にできそうだからな。先程絶にも、あの門番に対して半殺しにして連れて来るようにに言っておいたしな。
心の中で言った事を守っているかどうか思いながらも止めていた足を前に出す。

「ま、待ちなさいッ！」

後ろでメイド長が何か叫んでいるのが聞こえるが、俺はそれを無視して先を急いだ……

「ふむ、どこだここは。」

この館を彷徨ってからもう１０分近くは経っただろうか。

さっさと退治して帰りたいと思いながらも館の通路を迷い続け、未だに吸血鬼のいる部屋にたどり着けないでいる。
と言うか真面目に早く吸血鬼を見つからなければ、絶たちの方が心配だ。クロックに関してはあのメイド長を殺しかねない。……いや、別に殺してもいいか。見ていても前世の生霊を見ているみたいで不愉快になるだけだしな。
そうだな、人質として使い終わったら殺してしまおう。
自分でも若干危ない事を考えているのではと思いながら長い通路を歩く。

「ん？」

と、何となく横を見てみると部屋があった。
いや、今までも部屋はあったんだが、ここの部屋だけ何だか言いようのない雰囲気が……

「…入ってみるか。」

そう呟き、ドアノブを捻って中に入る。そこには……

「…これは中々……」

思わずそう呟いてしまうほど目の前に広がる光景は凄かった。一言で言えば沢山の本が並べられている。
つまりは図書館だ。ただし、学校などにある図書館ではなく大図書館と言ってもいいほどの広さと本が棚に並べられており、万の数はくだらないだろう。
とりあえず、試しに近くにある本棚に近づいて適当な本を取り、これまた適当なページを開く。

『フェルマーの最終定理』

有名な問題だな。何も見ずに一からこれを解くのに2ヶ月近く掛かった。ちなみに俺の友人は1ヶ月で解いた。あの時はクラスの何人かから冷たい目で見られたな……

本を閉じタイトルを確認すると、『これで貴方も高校受験は絶対』と書かれていた。……あんな難易度の高い問題出るのか？

そう思いながら本を棚に戻す。他には…これなんか面白そうだな、

『めずらしい茸たち』

先程と同じように適当なページを開く。そこには『スエヒロタケ』が乗せられている。

確かシゾフィランとかいうのが分離されていて、何かの薬と一緒にすると医療薬になるらしいな。何でも人からも生えてくる茸だそうだが……

気分が悪くなったのでそっと元あった位置に戻し、部屋を歩いて今回のターゲットを探す。

「…あれか？」

少し歩くと、丸テーブルの椅子に腰掛けて本を読んでいる少女を見つけた。

容姿は紫の長い髪の先をリボンで纏めており、薄紫と普通の紫の縦じまが入っているパジャマに見えなくもないゆったりとした服を着ている。

その上からまた薄紫の服を着ており、頭にはドアノブカバーのような、ナイトキャップとも言えなくもない三日月の飾りが付いた帽子を被っている。

服の各所にはちまちまと赤と青のリボンが付けられている。何だろうか、少女から発せられる雰囲気がどこかもやしに似ている気が……

「すまんが少しいいだろうか？」
「？……貴方、誰？」
「あぁいや、大した者じゃない。ただ少しここの主の居場所が聞きたいだけなのだが……もしかして君がここの主か？」
「それなら咲夜に聞けばいいわ。それと私はここの主じゃない。」
「…咲夜？」
「ここのメイド長。」

……あぁ、あいつか。

「少し忙しそうだったからな。」
「そう、それなら私が教えてあげる。それよりまずは自己紹介と行きましょう。
私は『パチュリー・ノーレッジ』一応生まれながらの魔女よ。貴方は？」

…魔女か、始めてみたな。最初見た時少し魔力が高いと思っていたが魔女なら納得できる。

「…紅鎖華壊。好きに呼んでくれ。」

俺が自己紹介を終えると、パチュリーは「それじゃあ少し待ってて」と言ってどこかへ行ってしまった。
そしてしばらく待っていると、手に何か紙を持って戻ってきた。

「これ、この館の地図よ。で、この紅い○が描いてあるのが、たぶんだけど今ここの主がいる部屋。
これを見れば迷わず行けるはずよ。」
「恩に着る。」

そう言って地図を受け取り、身を翻しその場を後にした。
が、身を翻した同時に後ろから熱気が押寄せると同時に背中に何かがぶち当たった。
熱い……そう思いながら後ろを振り向く。

「あら、手加減していたけど意外と丈夫なのね？」

火の玉。まさにそう表現すべきであろうものがパチュリーの回りに浮かび上がっている。それも一つではなく２０や３０の数だ。

「…やはり素直には行かせてくれんか……」
「当然よ。貴方、侵入者なんでしょう？いくら咲夜が忙しくても、自分の主に会いに来た客人を放って置く訳ないもの。」
「……なるほど。まぁいい。何もしてこなければこのまま見逃そうと思っていたが……」

そう言いながら懐から最後の石を取り出す。
そしてそのまま式を召喚する。出てきたのは巨大な顎を体にした異界門、『ゲート』

「……何それ？」
「式…魔女なら使い魔と言った方が早いな。ゲート、動けなくなるまで痛めつけておけ。後は…わかるな？」

それだけ言って再び扉に向かう。しかし、パチュリーがそれを見逃すはずもなく火球を飛ばしてくる。
だがそれは、ゲートの大きく開けられた口の中に吸い込まれるかのように、いや、実際に吸い込んで行った。

「言っただろう、ゲートは……」

扉の前まで来た俺は扉を開け背を向けたまま話す。

「異界門、とな。」

そう言って扉を閉めた……

あの大図書館の魔女、パチュリーのくれた地図を見ながら吸血鬼がいるであろう部屋まで歩く。
道中、またもや妖精メイドに弾幕をぶっ放されたがとりあえず全員吹き飛ばしながら歩いて吸血鬼のいる部屋の前に辿り着いた。

「…ここか？」

地図を見る限りはこの部屋だと思う。……さて……

「吸血鬼とご対面と行こうか……」

そう呟き、俺は地面に潜った……

第１５３話：依頼実行・いざ吸血鬼退治へ（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。次回は戦闘シーンありです。

第１５４話：敵には絶望を（前書き）

今回は、主人公が残酷な行為を行うのでそういうのが苦手な人は戻ってください。
大丈夫な人はどうぞ。

第１５４話：敵には絶望を

薄暗い部屋。そこには吸血鬼の少女が、未だにテーブルに肘を付いて座っている。
その顔はどこか楽しそうで、そして自分の力が幻想郷を支配すると言う願いが叶うことに対して笑みを浮かべている。

さて、今更だが少女の容姿について説明しておこう。水色の掛かった青髪に、真紅の瞳。
白の強いピンクを混ぜたドアノブカバーのような帽子、つまりこの場合はナイトキャップを被っており、周りを赤いリボンで締めている。
結び目は右側辺りにあり、白の一本線が入っているようだ。
衣服は帽子と同じような色で、太い赤い線が入っていて襟にレースが付いている。
両袖は短く、そしてふっくらと膨らんでおり、袖口に赤いリボンが喋々結びで結んである。
左腕には赤線が通ったレースを巻いており、小さなボタンでレースの服の真ん中をつなぎ止めている。
腰のところには大きな赤い紐のようなもの後ろに回るように結んであり、後ろから喋々結びが見える。
スカートはかなり長く、足首近くまではあるだろうか。これの裾辺りにも赤い紐が通ってる。
背中には小さめの蝙蝠の翼が生えている。

まぁ、それは兎に角……

「ふふふ…妖怪が人間よりいかに優れているか、そして妖怪と言うものが本来どういう存在なのか……。

平和ボケした幻想郷を私が支配してその事を教えてあげるわ。どう、貴方も私たちと手を組まない？」

少女はそう言って椅子から立ち上がると、少し離れた位置にある壁をチラリ見る。

「…まさかバレるとは思っていなかったな。」

そんな声が響くと同時に壁からスーっと布で顔をグルグル巻きにしている長身の男が出てきた。

壊だ。少女は壊の事を面白いものを見つけたかのような目で見ながらその口を開く。

「侵入者がこの私に何の用かしら？」

「いやいや、大した用じゃない。ただ……」

そう言いながら壊は能力でナイフを一本創り出して構える。

「吸血鬼の首が欲しくてな。どうだ、君の首を俺にくれないか？」

「遠慮するわ。それに、これから侵入者を退治しないといけないようだし。」

お互いそう言いながら辺りに妖力やら殺気を撒き散らす。椅子がカタカタと揺れ、微妙に床にあるゴミが吹き飛ぶ。

片やナイフを持っている長身の男で、片や蝙蝠のような羽を生やしている見た目が幼い少女の吸血鬼。

これだけ見れば若干危ない構図見えなくもないが間違いなくその辺の一般人より歳を食っているので問題ない。…関係ないですねはい。

「……ッ！」

先に動いたのは壊だった。少女に向かって駆け目の前まで行くと、手に持っているナイフを突き立てるように振り下ろす。
少女は振り下ろされたナイフを、壊の腕を両手で掴む事によって受け止め、そのまま羽を大きくして回転し、壊を吹き飛ばした。
壊は吹き飛ばされながらも少女目がけて持っているナイフを投げつけるが、それは呆気なくかわされ壊は背中を壁に打ち付けた。

「グッ…吸血鬼と言うのは…随分と馬鹿力だな……」

そう言いながら口の端から少し出ている血を手袋を付けている手の甲で拭う。

「お褒めに預かり光栄だわ。」

そんな壊の皮肉とも言える言葉に対し、少女はスカートを摘んでお辞儀をする。貴婦人の礼である。
壊はそれを見ながら二回ほど咳き込むと、再び能力で今度は身の丈ほどもある大鎌を二つ創りだした。

「あら、まるで死神ね。それで私の首を刈り取るのかしら?」
「中々にいい切れ味だから痛みは感じないと思うぞ。」
「そう、それなら刈り取られる前にアンタの首を刈り取ってやるわ。」

不適に笑う少女は壊にそう言うと、小さかった翼を大きくして宙に浮かび、爪を伸ばすとそのまま勢いをつけて壊に突っ込んだ。
そして壊の首を長く伸びた爪で壊の首を突き刺そうとした。

「なめるなッ…!」

壊はそう言うと両手に大鎌を持ったままグルグルと回転し始めた。
すると少女は壊に宙に浮いたまま後ろに大きく下がって大鎌をよける。

「危ないわね。」
「まったくそうは見えないな。」

回転するのをやめて少女が言った事にそう返す壊。
一見、両者余裕そうに見えるが壊の方はかなり本気でギリギリの状態だ。

「……」

無言で右手の大鎌を振り上げると、そのまま思いっきり飛んでいる少女目掛けてブン投げた。
少女はそれをいとも容易くかわして再び壊の方を見る。すると、壊の持っていたもう一つの大鎌が自身の目の前まで迫っていた。
これをギリギリのところで避けると、今度こそ壊の方を見た。

「少し焦ったわね。」
「……一つ、忠告しておこう。」
「なn『ザシュッ』ッ！？」

少女が壊の言った事を聞き返そうとすると、突然鈍い音が響き少女の片腕が地面にドサリと落ちる。
一瞬の痛みに顔を顰めながら壊を見ると、そこには右手に血のべったりと付いた大鎌を持っている壊がいる。
瞬時に理解した彼女は、再びその場から大きく横に飛ぶ。すると少女が先程まで浮いていた場所を大鎌が回転しながら壊の手に戻って

いく。

「偶には後ろを確認するんだな。」

再び両手に構えた大鎌の刃を地面に突き刺しながらそう言う壊。
少女は床に降り立つと切り落とされた自分の腕を拾い、切り口を合わせる。すると少女の腕は痕もなく奇麗にくっ付いた。
壊はそれを見ると、少しだけ目を開いて驚いたような顔になる。

「……驚くほどの回復力だな。」
「これが吸血鬼よ。それよりも……」

少女はそう言うと一瞬で壊の首を片手で絞め、そのまま壁に叩き付けた。それも一度ではなく、何度も飛び回っては壁に、床に、テーブルにただ只管叩き付ける。その衝撃で大鎌が吹き飛んでしまったようだ。
そして壊を思いっきり放り投げると壁に叩き付け最後に腹を殴って後ろに飛んで地面に着地する。

「グッ…ゴホッ……」

壊は、体の至る所を打ち付けた事により内臓が少々逝かれてしまったようで口から血を吐き出した。

「ふふ…おいし……」

それを見ながら、自身の指に付いた壊の血を舐めながら艶やかにそう言う少女。
普通の男が見れば落ちる事間違いなしだ。…ただしロリコンに限る。
ロリコンの人手ぇ上げて！（※手を上げた人は戻れなくなります。）

「貴方、妖怪でも人間でもないみたいね？」
「ゴホッ…まぁな……。」
「今まで飲んできた血の中ではかなりお気に入りの類に入るわね。」
「それは光栄だな……。」

壊はそう言いながら自身の手首に付いている腕輪に手を伸ばす。
吸血鬼はそれを見ながら少し不思議そうな顔をしているが、壊はそれを気にせずに話を続ける。

「よく理解した…吸血鬼相手に出し惜しみをすると……」

――――腕輪を外した。――――

「ッ！？」

途端に壊から溢れ出す力。叩き付けられた時に飛び散った壁の欠片や木片が吹き飛ぶ。
そして先程までの怪我が回復し、ボロボロになっていたコートは能力で元に戻る。

「……久しぶりにいい気分だな。」

驚いている少女を尻目に、右手を開いたり閉じたりしてそう呟く壊。
そして目を細め少女を見ながら脚に力を込め、ばねの如く跳んだ。
駆けたのではない、文字通り跳んだのだ。
勢いを殺さずにそのまま少女目掛けて拳を振るう。しかし、少女はその場から宙へと逃げる事でその攻撃を避ける。
見ると少女がいたところの床には軽く凹んでおり、砂煙のような

ものが舞っていた。

「…これは……私も本気で行かないと危ないわね。」

少女がそう言うと、先程とは比べ物にならないほど、今の壊と同じくらいの妖力が発せられる。

壊はそれを感じると、目をさらに細めて楽しそうに宙に浮いている少女を見る。そして今度は能力で沢山の武器を創ると、それをもう一つの能力で浮かべて、妖力や霊力を込めて少女に飛ばす。少女は飛んできた武器を、宙を飛び回る事で避ける。

しかし、いかんせん数が多いので全て避けられるはずもなく、幾つかの武器が服や頬を掠ってしまった。

武器が飛んでこないのを確認した少女は、自身の手に妖力を集めると妖力で作った紅い槍を持ち、そのまま壊に突っ込んだ。

「……」

壊は無言のまま能力で刀を創ると、突っ込んでくる少女に向かい撃つ。…はずだった。

少女は、壊の前に来る一歩手前で槍を壊に投げ飛ばしたのだ。突然の行動に驚いた壊は一瞬隙が出来てしまった。

「グッ…！」

すると壊は、飛んできた槍を弾くのではなく、何故か手で掴んで受け止めてしまった。だがこれがいけなかった。

壊に掴まれた槍は、掴まれると同時にその場で爆ぜたのだ。そして爆風が起き、壊がいた場所でモアモアと煙が上がる。

「…え？」

煙が晴れて少女は思わずそう呟いた。いないのだ。先程そこにいたはずの壊が、どこにもいない。
ただ何となく血の匂いはするのでただでは済まないと思っているが、そこにはいない。
少女は焦っていた。いきなり自身の目の前にいた敵が消えてしまったのだから。
だからこそ気付かなかったのだろう。いつの間にか自身のすぐ後ろに壁があったと言うことを。
そして…

――――敵は後ろにいた――――

動揺のしすぎで気付かない少女の後ろを、顔のみ出した壊が銀のナイフを持って出てきていた。
先程の爆発のせいなのか片腕を失っているが、本人はそんな事を気にせずに目を光らせてゆっくりと近づく。
言わば獲物に近づくチーターのように。
そして自身の真後ろに敵がいたことを理解した少女は素早く振り向いて確認した。
そこには、ナイフを振り上げて今にも少女の頭に突き刺そうとしている壊がおり、少女が振り向いて確認する頃にはナイフは振り下ろされた。

「ガッ！！」

そして血飛沫が上がった。しかし、それは少女の頭からではなく、壊のこめかみ辺りから出ている。
見ると壊の頭には銀のナイフが突き刺さっていた。壊はそのまま宙から地面にドサリと落ちて『メキッ』と嫌な音をさせる。

「お嬢様！」

自身の事を呼ぶ声が扉から聞こえ、唖然としていた少女はハッ、と元に戻り扉を確認する。
そこにいたのは、至る所から血を流しているメイド長だった。

「…咲夜……」

少女はメイド長の名前、『十六夜（いざよい）　咲夜（さくや）』の名前を呟く。
そして少女は、そのまま地面に降り立つ。するとメイド長が不安そうに少女に近寄った。

「お嬢様、大丈夫ですか！？」
「えぇ…特に問題ないわ。それより貴女の方こそその怪我、大丈夫？」

少女の言った事に対し安心したのかメイド長、もとい咲夜は安心したような顔になり、「はい」と答えた。

「あ、よかった！お二人とも無事だったんですね！」

そう言いながら今度は門番をしている美鈴が部屋に入ってくる。こちらも至る所から血を流しており、衣服もボロボロの状態だった。

「美鈴、貴方も無事のようね」
「当然ですよ！伊達に門番のお仕事を全うする為に鍛えてません！」

何やらそう言う美鈴に、他の二人もクスクスと笑う。

「チッ…手加減しろと言ったが……まさか倒されてしまうとはな……」

不意に、今まで地面に倒れていた壊がそう言いながら立ち上がる。
それを見て素早く反応した三人は、各々武器を持ったり構えたりしている。
しかし、壊はそんな事は気せずに無くなっている腕に手を当て、霊力を込める。
すると新しい腕がメキメキと生えてきた。

「…これで貴方の負けよ。大人しくやられなさい。」
「冗談、悪いが……」

壊はそう言いながら目を細める。すると、壊の横の床から巨大な何か、口を閉じているゲートが現れる。
その体は若干傷付いている。そしてゲートは閉じていた口を開くと、ペッと何かを吐き出した。それを見た少女は目を見開き、叫んだ。

「パチェ！！」

ゲートが吐き出したのは彼女の友人でこの館の住民の一人である『パチュリー・ノーレッジ』
こちらは他の二人よりも外傷が酷く、血の量が半端なかった。
壊は能力で刀を創り、倒れているパチューの首元に突きつける。

「ッ……貴様……」

怒りを露にする少女に対し、壊はつまらないものを見るような目で少女を見る。

「お嬢様、落ち着いてください！私が何とかします。」

咲夜はそう言うと能力を発動させる…が、どういう訳か能力は発動しなかった。

「そんな…どうして……」

咲夜がそう呟くのを聞いた壊は、少女たちがいる後ろの扉を指差す。

そこには……

「なっ……！？」

そう、美鈴と咲夜が相手にした壊の式、『クロック』と『絶』が浮かんでいたのだ。

少々欠けたりしているが、２体の式は何事もないように浮遊している。

「絶、クロック、ご苦労だったな。こっちへ来い」

壊がそう言うと、２体の式はふよふよと移動し始める。勿論、三人はそれを黙ってみている事しか出来なかった。

人質がいるのだから当然だ。近づいてきた式たちに何か言った後、壊は三人を見る。

「…さて、まずはそこの三人に大人しくしてもらうとしようか……」

ーーーーSide壊ーーーー

「これでよし」

そう言いながら鎖でグルグル巻きにされている４人を見る。始めこそは抵抗したものの、案外いけるものだ。

さてさっそく吸血鬼の首を……ん？何か忘れているような……

「あぁ、思い出した。」

「？」

キョトンとしている３人を放って置いて、今回の依頼が殺すのではないと言う事を思い出す。

どういう訳かと言うと……

――――回想開始――――

特にすることもなくゆっくりと歩いて館に向かう俺は、ここに来る前の湖で水を飲んで休憩していた。

「ちょっといいかしら？」

しばらくそんな感じで休んでいた訳だが、突然声が聞こえると共に目の前にスキマが開いて紫が上半身だけを出して現れた。

「なんだ紫か……どうかしたか？」

「リアクション薄いわねぇ…まぁいいわ。

それより、今回貴方は吸血鬼を退治しに行くわけだけれども…できれば殺さないで欲しいのよ。」

「…何故だ？」

「それがね、実は貴方があの場から出て行った後に吸血鬼の勢力について色々考えたのよ。
それで、考えてみたら勢力になっているのは元々幻想郷にいるだけの妖怪じゃなくて、最初からあの吸血鬼の下にいた妖怪もいるのよ。上で纏めるリーダーがいないとその部下は何をしでかすかわからないでしょう？
だからその吸血鬼には今後とも勢力を纏めて欲しいわけ。」
「…なるほど、わかった。なら吸血鬼がこの辺りを纏めるように納得させよう。」

――――回想終了――――

…と、まぁこんな事があったわけだ。つまり、この吸血鬼を殺してはいけないと言う事だな。
俺は吸血鬼の前でしゃがみ、吸血鬼の顔を見る。

「さて、吸血鬼。俺は今、とても大事な事を思い出した。」
「…なにかしら？」
「お前にはこの幻想郷の傘下に入ってもらう。だから殺す事は出来ない。」

間違っていないだろう。それに殺されずに生かしてもらえるんだから、まだマシだと思う。

「…お断りするわ。」

しかし、吸血鬼は何故か知らないが俺の誘いをキッパリと断った。

「ほぅ…それ何故だ？」

「誇り高き吸血鬼の末裔が、平和ボケした幻想郷を管理するなんて嫌だからよ。」

……くだらない。

そう思いながらも立ち上がり、俺は能力で、刃こぼれをしている刀を創り、吸血鬼の顔に突きつける。

「お嬢様！何故ですか！？」

メイド長が何やら騒いでいるが、吸血鬼はそれを聞かずに目を瞑っている。…いい心がけだ。

俺は突きつけている刀を…

――――門番の肩に刺した――――

「ッ！？アアァァッ！！」

途端に、門番が悲鳴を上げる。目を瞑っていた吸血鬼は、自分ではなく横の門番が刺された事に対し訳がわからないと言った感じだ。

俺はそれに構わずもう片方の肩、足、腕と次々と刺していく。

「やめろ！！」

吸血鬼が睨みながらそう叫んだので、俺は突き刺すのをやめて吸血鬼を見る。

「どうした？何か問題でもあったか？」

「殺すのは私であって美鈴ではないはずよ！？」

……本気で言っているのか？

「…ふざけた事を抜かすな。」

俺はそう言いながら少女の頭を思いっきり踏みつける。すると少女は短く悲鳴をあげ、そのまま俺を睨みつけてきた。
横にいる息も絶え絶えの門番と、メイド長が殺気を込めて俺を睨みつけてくる。

「言ったはずだ、俺は君をこの幻想郷の傘下に入れる必要がある。それが今回の仕事だからだ。」

そう言いながら踏みつける力を少し強める。

「だがな、どうしてもなる気がないのなら俺もめんどくさい事はしない、全員殺す」

踏みつける力を強めながら、横にいる門番に刃こぼれした刀を突き刺す。
門番は悲鳴を上げ、グッタリとし始めた。何故俺が態々この刃こぼれした刀を選んだかと言うと簡単だ、苦しめるため。
予め言っておくが、俺に他人を甚振って喜ぶ趣味はない。これは一種の拷問、俺は仕事だけはどんな事をしてでもこなす。
だから他二人はともかくこの吸血鬼は絶対にこの辺りを纏めるリーダー的役割、この幻想郷の一角になってもらう。

「考えても見ろ、本来殺すはずのターゲットの下についている部下、殺す道理はあっても生かす道理はないだろう?
蜂蜜を採るのに蜂を生かしてとるか? 魚の卵を取るのに魚を生かす義理はあるか? 小熊を狩る時親熊に襲われたら生かす道理は?
ないだろう、2番目のはともかく最初と最後に言ったのは報復され

るかもしれないだろう？」

そう言いながら再びグッタリしている門番、今度は心臓に突きつける。

「ラストだ、プライドを取るか生き恥を晒してでも部下を守るか、どちらだ？」

さすがにこれだけやれば俺の言った条件を飲み込むと思うのだが……

「……クッ……私…は……」

……めんどくさいな。もう少し脅しを掛けてみるか。

「…どうやら部下一人じゃ足りないようだな。」

頭を踏みつけたまま門番から刀を退け、今度はメイド長に突きつける。

「…こちらも殺してしまおうか？」

そう言いながらゆっくりとメイド長の首元に刀を近づける。

本当は今にもこのメイド長だけは殺したい気分だが、それ我慢して少しずつ刀の先端をメイド長の首に突きつける。

そして突きつけたまま、今度は刃の先を食い込ませるように進める。

「ッ！？　待って！！」

俺が刀でメイド長の首から少量の血が流れるのを見た少女はそう叫んだ。

「…この幻想郷の傘下に入るわ。」
「…上出来だ。」

そう言いながらメイド長から刀を、少女の頭から足を退ける。
そして横でグッタリとしている門番に近づき傷口に手を宛がうと、
妖力を込めて傷を癒す。

「何…を「黙っていろ。」……」

門番が問いかけて来た事を遮って別の箇所も治していく。
ここで死なれたりでもしたら、またこの吸血鬼が駄々をこねかねないからな。
ある程度治癒した俺は、持っている刀に魔力を込めて鎖を断ち切る。
体が動くようになった三人は、立ち上がらずにただ黙っている。…
…一応このメイド長の傷も治してやるとしよう。
そう思い、俺はメイド長の前でしゃがんで霊力でクロックが付けた
傷と自分のつけた傷を治していく。

「さて、これで俺の仕事は終わりだ。おそらくだが、先ほど言った
事を聞いている者がいるので後はそいつに任せる。
言っておくが、また何かしようなどと考えるな。今度は見逃さない
し、俺よりも強い奴だっている。」
「…わかったわ……」
「……（こくり」
「……」

吸血鬼の少女と門番は承知したが、メイド長は何も言わずに俯いて
いる。…はて、どこか痛む傷でもあるのだろうか？
そう思い、メイド長に近づくと……

「…よかった、また殺されなくて……」

どこか安心したような、そして楽しそうにそう言うメイド長の言った事に対し動揺した。

まさか…いや、ありえない。だがもしかすると……

「…それはよかったな。俺はもう帰らせてもらう」

動揺しながらもそれを表に出さないようにそう言うと三人からある程度離れる。

そして俺は能力を使い、その場から離脱した……

ーーーーSide美鈴ーーーー

どうも皆さん、この館の門番をさせて頂いている紅美鈴です。よくわからない侵入者が帰ってから、今は皆無言になっています。はっきり言って気まずいです。それに咲夜さんの言った事も気になりますし……

「あの……咲夜さん？」

「…なに？」

「いえ、先程言った事は一体どういう……」

咲夜さんはさっき、あの男の人に『よかった、また殺されなくて』と、確かにそう言っていた。

それが気になるのか、どこか沈んでいたお嬢様も少し顔を上げて咲

夜さんを見る。

「私、何か言ったかしら……？」

「……え？　いや、だって咲夜さん、あの男の人が帰る前に『また殺されなくてよかった』的な事を言ったじゃないですか。」

「……？」

本当に何の事かわからないと言った様子の咲夜さんは、少し首を傾げた。これってどういう……

ーーーSide三人称ーーー

家に帰るまでの間、壊はずっと虫の居所が悪かった。

前世、しかも記憶の残っているかもしれない者に出会った事に対しての不快感。

考えても見て欲しい、自分が殺した者が生き返って目の前にいたら皆はどう思うだろう？

「……向こうが何もしなければ問題ないな……」

いつの間にか家の前に着いていた壊は、そう呟いて家の中に入っていった……

第１５４話：敵には絶望を（後書き）

…はい、終わり。反省はしてます、でも後悔はしてません。

……ごめんなさい、やっぱり少ししてるかもしれません。次は…どうしましょうか？

第１５５話：人里へＧＯ（前書き）

そのまんまですよはい。それと、更新遅れて申し訳ありませんでした。
人里と言ったら……

第１５５話：人里へＧＯ

「…と言う訳で、もう人里に行ってもいいわよ。」

目の前のソファーに座っている紫がそう言いながら茶を啜る。
何の話をしているかと言うと、まぁ簡単に言ってしまえば紫の言ったとおり人里へ行く許可が出たのである。
今まで何度かルーミアに買い物を任せていたが、これで俺も人里に物を買いに行けるので正直言って楽にはなると思う。
ルーミアに買いに行かせると高確率で何か一つは間違った物を買ってくるからな……前に油揚げを買って来てくれと言ったのに何故か蝗(いなご)を買ってきた。…粗末に出来ないから食ったがな。
ちなみにそのルーミアは俺の膝の上で茶請けの菓子を食っている。
…偶には漬物を出すのもいいかもしれんな。

「じゃ、私はもう帰るわ。」
「ん、そうか。態々すまんな。」
「そう思うなら少しは労わってちょうだいな。」

自分で年増発言「何か言ったかしら?」…何故わかる?
そう思っていると、紫はスキマを開いてそのまま入り、スキマを閉じて帰って行った。

「…さて。」
「?」

そう言いながら膝の上に乗っているルーミアを地面に下ろし、壁に立て掛けてあるコートを着る。
そしてそのまま2階へ上がって財布を取り内ポケットに仕舞い、再

び1階へ降りる。

「どこかいくのー？」

「あぁ、少し人里に行って来る。…そうだ、すまんが棚から金平糖の入っている袋を二つ持ってきてくれ。」

俺がそう言うと、ルーミアは頷いてパタパタと小走りでキッチンの棚に行き、そのまま金平糖の包みの入った袋を二つ持ってきた。俺はそれを受け取り、そのうち一つをルーミアに返す。それを嬉しそうに受け取るルーミア。

「前に渡そうと思ったら渡しそびれたからな。」

頭を軽くポンポンと撫で、俺はもう一つの金平糖を懐に仕舞うと、家を出た……

ーーーSide慧音ーーー

「…ふぅ……」

生徒が提出した課題の見直しを終えたので、一旦筆ペンを置いてお茶を飲んで一息つく。

「はぁ～い♪」

「ッ！？」

茶を飲んで一息ついていると、突然後ろから声を掛けられたので急

いで振り向く。
そこにはこの幻想郷の管理者であり妖怪の賢者こと八雲紫が、扇子で口元を隠しスキマから上半身だけを出している状態でこちらを見ていた。

「…行き成り話し掛けないで貰えないだろうか？心臓に悪い……」
「あら、それはごめんなさいね。まぁそんな事はどうでもいいのよ。」
「どうでもいい……」
若干呆れながらも八雲紫を見る。

「で、今日私が貴女に会いに来たのは、前に貴女が壊にお礼がしたいとか言っていたでしょう？」
「…もしかして……」
「えぇ、壊には今日から人里に来てもいいと言っておいたわ。だからその時に貴女がしたいと言っていたお礼でもしたらどう？」
確かに…それは好都合だ。

「感謝する、八雲紫。」
「別にいいわよ、ただの気紛れだったし。それじゃ、私はもう行くわね。」

八雲紫はそう言うと、スキマに引っ込んでそのまま帰って行った。
…さて……

「…迎えに行こうかな。」

そう呟いて立ち上がる。ふふふ…これでやっと2年前の礼が出来る

……

ーーーSide壊ーーー

妖精が頭に乗っかってきたり、懐に潜り込んだりしてきたが、特に危害は加えられなかったので無視をするなどをしながらも何とか人里の門が遠目に見える所まで来た。

「ねぇねぇここ何か入ってるの～？」

不意に、懐に潜り込もうとしていた妖精Aが俺の懐をパンパン叩きながらそう尋ねてきた。
それに吊られるように頭や肩に乗っている妖精などなど計6匹ほどの妖精が一斉に俺の懐を気にし始める。
俺は入っている物を見せるために懐から金平糖の入っている包みを取り出し、それを妖精たちに見せた。

「それな～に～？」
「金平糖だ。」

妖精Bの尋ねてきた事にそう返し、包みから計6粒の金平糖を出し、見ている妖精たちに配った。
妖精たちは小さな手でそれを受け取ると、しばらくの間興味深そうに金平糖を見ていたが、一匹が勇気を持って舐めた。

「！　甘～い！」

何やら全身で喜びを表してるのか、俺の周りをパタパタと忙しなく飛び回る。
それに続くように他の妖精たちも金平糖を恐る恐る舐めると、決まって俺の周りを忙しなく飛び回った。

「ばいば～い！」

やがて満足したのか、妖精たちは手を振りながらそのままどこかへ飛び去ってしまった。
…これから妖精に絡まれた時は金平糖か何かで餌付けする事にしよう。そう思いながらも前を見ると、いつの間にか人里の門がすぐ前にあった。
そして門を潜ろうと「あぁ待った待った。」と、入ろうとしたら門番に止められた。…いたんだな、門番。

「…何だろうか？」
「いやいや、あんちゃんこの辺じゃ見ない顔だからな。この人里に何か用か？」
「用…と言うほどではないが、やっと来れるようになったから一応どんな場所か見て置きたくてな。」
「？　やっと来れるようになった？」
「気にしなくてもいい。兎に角、俺は人里に危害を加える気はないので入れてほしい。」
「あいよ。言って置くけどな、本当に問題は起こさないでくれよ。最近はやっと妖怪どもも大人しくなってくれたんだからな。」
「あぁ。」

そう言い、門番の横を通り過ぎて人里の中に入る。これは……なるほど、凄いな。
まず俺が人里に入って目に付いたのは、『ふんどし一丁で両手を上

げて走り回っている９０過ぎほどの爺とそれをものすごい形相で追いかけ回している同じく９０ほどの婆』だった。凄いな、幻想郷の爺婆はこんなにも元気がいいのか。

「爺待ちやがれ！！」

「うっさいわい婆が！　誰が大人しく家で過ごすもんか！　儂は若い女子ともっと遊ぶんじゃい！！」

何ともまぁくだらないやり取りだろうか。

「あら、また中島さんが暴れまわってるわよ。」

「あらホント。　いつになっても元気ねぇ……確か前に走っていたのは５日前だったかしら？」

少し離れた位置で手提げ袋を持っている主婦のような女たちが、走り回っている爺婆を見ておかしそうに笑っている。

あんなものが日常でしょっちゅう起こるのか。よく見ると他の住民も大して気にせずに『またか』みたいな顔をしていた。

「…無視して行こう。」

走り去っていく爺婆を見送ってそう呟き、人里の道を歩く。

思った以上に人里は賑やかなようで、道行く人々の中には妖怪もいるようだ。

前に来た時はあんまりいなかった気が……『トントン』

「ん？」

不意に誰かが俺の肩を叩いたので振り返る。

「よかった、やっと見つけられた。」

そこには、満面の笑みでこちらを見上げている上白沢慧音がいた……

ーーーSide慧音ーーー

「…久しぶり、と言うべきなのだろうか？上白沢慧音」

私の前にいる男、壊は無表情のままそう言う。

「……少し前に会ったばかりだぞ？それと、慧音でいい。」

「いや、会ったには会ったがこれと言った会話もなかったからな。」

「そう言えばそうだったな。」

2年ぶりの再開…と言っても、会ったのは一度だけだがこの男は私に対して何でもないように普通に接している。

まぁ私としても普通に接してもらうのは結構ありがたい。

「ところで、俺に何か用だろうか？」

「…八雲紫から私の事は聞いていないのか？」

「いや、紫から聞いたのは、『今日から人里に行ってもいい』と言う事だけで他には特に聞いていないが……」

…期待はしていなかったが、まったく話していないとは……

「…実は前に話し合いが終わった時、八雲紫に貴方、壊に是非とも2年前の礼がしたいので何とかして欲しいと頼んだんだが……」

「…まったく、言われてないな。」
「そうか……」
「…まぁ、礼がしたいと言うなら丁度いい。」

どうやって説明するか、そしてどんな礼をするか考えていると壊がそう言うので、私は壊の顔を見上げた。

「今日初めて人里に来たから何処に何があるのかよくわからなくてな。出来れば案内をして欲しい。」
「…そんな事でいいのかい？」
「あぁ。だがもしそちらに時間がないのなら自分で「いや、是非とも案内させて欲しい」そうか、感謝する。」
「ん、わかった。とりあえず歩きながら案内しよう。」

どこか納得いかないと思いながらも、私は壊にそう言って案内をするために歩みだした……

ーーーーSide壊ーーーー

銀白の髪を揺らしながら目の前を歩いている慧音の後を付いて行く。時折後ろを振り向いては、アレは駄菓子屋だの八百屋だのを軽く説明するので、俺はそれを黙って聞き、疑問に思ったことは適当に質問する。そしてそれが終わると再び歩みだす。
しかしアレだな、まさか2年前に気紛れで助けた事を未だに覚えているとは思わなかった。
ただ単に暴れたかったと言う理由だったんだがな……まぁ、その礼で案内してくれると言うならこちらとしても嬉しい限りだ。

前に一度だけ来たがもううろ覚えになってしまったからな……

「おい、おいってば！」

「ん、どうした？」

「…やっぱり聞いてなかった……」

慧音が呼びかけてくるのでどうしたか聞いてみたら何故か呆れられてしまった。

俺が黙っていると、慧音が呆れた顔のままある方向を指差したので、俺はそれを追うように視線を動かす。

「…寺子屋か？」

慧音が指差した先にあったのは、前に俺が一度来た事がある寺子屋だった。

確かここは前に一度だけ鶏の入れられている柵に侵入した事があったな。

「そうだ、ここは私が教師としてやっている寺子屋だ。」

「……ちゃんと教えられているのか？」

「…それは一体どういう意味だろうか？」

微かに慧音に青筋が浮かんでいるが、それを無視して寺子屋の後ろの、鶏を囲っている柵がある場所へ向かう。

「あ、コラ！」

慧音は、俺の後を追いかけるように小走りで近づき、俺の横を並ぶように歩く。

まったく大した距離でもないのですぐに鶏の柵がある場所に辿り着

いた。
そこには、一人の少女が鶏を囲っている柵の餌いれの餌を交換していた。
灰色の髪を縛っていて黒い目。下が少し短い和風の服。
何が楽しいのか、餌いれの餌を交換するとそのまま何処にも行かずにしゃがんで餌を突付いている鶏を楽しそうに見ている。

「…慧音。」
「ん？」
「あそこにいる少女について教えて欲しい。」

俺は横にいる慧音にそう聞く。慧音はしばらくの間無言で俺の事を疑わしそうに見ていたが、しばらくすると話し始めた。

「あの子は『雪花（ゆきばな）　氷里（ひさと）』という名前だ。
私の寺子屋に通っている生徒の一人で、いつも鶏の世話をしている。
何でも、2年ほど前から一匹の鶏がいなくなってしまって、その鶏にもう一度会いたいそうだよ。
本人はその鶏に助けてもらったと言っているが…ちなみに彼女は半妖だ。」

……と言う事はあの時に会った小娘か。少し背が伸びて成長しているな。
俺は慧音の話が終わったのを確認し、『少し待っていろ』と言ってそのまましゃがんでいる氷里の横に立つ。

「？　あの…何か用でしょうか？」

俺が横に立ったのを見た氷里は、少し警戒しながらもそう尋ねてくる。

「…やはり、と言うかこの姿ではわからんか。俺は君に会った事があるんだがな……。」
「私は貴方なんか知り「2年前」……？」
「俺は君の膝に乗せられた挙句にそのまま抱きかかえられて人里を歩き回ったぞ。」
「…何を言って……」

……ふむ、それなら……

「これならわかるか？」

俺はそう言って、そのまま鶏の姿になる。
すると氷里は口元を両手で押さえ目を少し見開いて驚いた顔をすると、恐る恐る聞いてきた。

「…鶏さん？」
「その通り「鶏さん！」ガハッ！？」

まだ言い切っていないというのに、氷里は自分が探していた鶏だと理解するとそのまま俺を抱きかかえて…待て、首が絞まる。

「会いたかった～！元気にしていましたか？」

首が、首が絞まる！　と言うか何故敬語だ。
そんなくだらない事を考えながらも、俺の事を抱きしめてる氷里を羽でひたすら叩いて離すように頼む。
だがしかし、首が絞まっている俺の意思は伝わらなかったのか、俺は氷里によって苦しめられた……

「すみません……」

申し訳なさそうに俺に謝罪している氷里。
あの後、意識が途切れる一歩手前で慧音が割って入ってきて氷里の暴走を止めてくれた。
ちなみに、俺はもう鶏から普通の人間に戻っている。これ以上鶏状態になったらさらに苦しむと思ったからだ。

「…今日はもう帰る。」

何か知らんがものすごく疲れた。二人にそう言い、そのまま帰ろうと身を翻す。

「もう帰ってしまうのか？」
「あぁ…疲れた。今度来た時に、また頼らせて貰おう。」
「そうか…それじゃあまた今度。」
「あ、それじゃあまた今度会いましょう鶏さん。」
「…あぁ、また今度。それと、鶏さんはやめろ。」

最後にそう言い、俺はそのまま家に帰った……

第１５５話：人里へＧＯ（後書き）

そんな訳で終わりました。数話ぶりに氷里が出てきましたね。
ちなみに、氷里は今の段階ではまだ重要人物じゃありません。

第１５６話：恐れているものと亡霊の少女（前書き）

口で言うより見たほうがいいですね。

第１５６話：恐れているものと亡霊の少女

「…ふぅ……」

読み終えた本をパタリと閉じて息を吐き、そのまま淹れて置いた茶を啜る。
先程ルーミアと朝食を摂って現在9時くらいだと思われる。
そのルーミアは友達と遊びに行くと言ってそのまま帰ってしまったが、俺はそれを気にせずに本を読んでいた訳だ。
たぶんもう今日は家には来ないだろうな。今までもそうだったし。
ちなみに本のタイトルは『三十路を過ぎて結婚を諦めましたか？』と言うふざけたタイトルだったが、内容自体は独身男が色々頑張るというそこまで悪くない話だった。最終的には結婚していたしな。
妬ましい。
言い忘れていたが、今の俺の格好は黒いワイシャツに黒い長ズボンと言う家の中で過ごす時のスタイルだ。
忘れているかもしれないが言って置こう、俺は出かける時意外は大抵コートは着ない。

「壊～、お邪魔するわよ～。」
「そう言うのは玄関のドアから入ってきた時に言え。」

突然後ろから紫が話し掛けてくるのでそう返す。
もう一度言っておくと、いつものようにソファーではない、後ろからだ。

「ふふふ…そんなに冷たくしなくてもいいじゃない。」

と、紫がそう言いながら後ろから俺の首に手を回して体重を掛ける。

「…紫、少し重くなったな。」
「背が伸びたのよ。って言うか女の子にそんな事言っちゃいけません。」

ふむ、紫の背が前より少し伸びていた気がしていたが気のせいではなかったようだ。

「…それで？　俺に何か用か？用がないなら今すぐこの腕を解いてスキマで帰ってもらいたい。」
「冷たい反応ね。ゆかりん悲しいわ……」

後ろからオヨヨという声が聞こえるが気にしない。いい加減に歳を考えてほしいものだ。

「何だか今とても気にしている事を言われた気がするわ。」
「気のせいだ。と言うかいい加減に用事を言うか腕を解くかしてくれ。」

俺がそう言うと、首に回された腕が解かれて今度は自分の前にあるソファーにスキマが開き、そこから口元を隠し半身だけ出した紫が出てくる。

「…もう一度聞く、俺に何か用か？」
「せっかちねぇ……まぁいいわ。単刀直入に言うと、今日こそ幽々子に「断る」最後まで言わせなさい。」
「最後まで言おうが俺の言う事は変わらない、断らせたもらう。それに、幽々子になら前の話し合いの時に会っただろう？
それで充分だと思わないか？」
「充分なわけ無いでしょうが。だいたいね、今日は幽々子が貴方を

連れてきて欲しいって私に頼んだのよ。」
「……なんだと？」
…俺に会いたがっている？向こうからしたら殆ど初対面と言ってもいいのにか？
「…紫、幽々子の記憶が戻る「大丈夫よ」……」
「今のあの子は貴方の事をまったく覚えていないし、仮に覚えていたとしても本当に少しだけだと思うから。
せめて前世で生きた時の半分以上の記憶が戻らないと幽々子は消える事はないわよ。」
「……悪いが、やはり断わらせてもらう。」
「そう、なら仕方ないわね……」
俺がそう言うと紫は扇子で口元を隠したまま胡散臭い笑みを浮かべる。
……嫌な予感が……
「おい紫、一体何…ッ！？」
一体何を考えている、そう言おうとしたが、俺の言葉は最後まで続かなかった。
何故なら、おかしな浮遊感を感じたと同時に、俺はソファーと一緒に足元に開いた空間に落ちていたからだ。
まぁ、今回だけは抵抗せずにこのスキマを落ちていく事にしよう。
だが……
「…次に会ったらお仕置きだな。」
そう呟きながら、俺はソファーに座ったまま目だらけの空間を落ち

て行った。
せめてコートと靴が欲しかったな……

ーーーSide紫ーーー

「ふぅ……」

壊がソファーと一緒に落ちて行ったスキマを見ながら、少し溜息を吐く。
幽々子が壊に会いたいと言ったのは、壊が吸血鬼を無理やり納得させて再び話し合いをした時の事だ。
話し合いが終わって突然彼女が、『壊…って言ったかしら?彼に会わせてくれる?』と言った。
勿論、私としても別に断る理由もないし承知したが、念のため理由を聞いてみたところ彼女は『何となく』と答えた。

『ちょんちょん』

不意に、肩を誰かに突付かれた感じがするので見てみると、壊の式…絶がお茶の入った湯のみを載せている盆を持ちながらふよふよと浮かんでいる。

「あら、くれるの?」

私がそう聞くとコクリと頷いたので『ありがとう』と礼を言ってから湯のみを受け取る。

「…貴方は自分の主人が心配じゃないの？」

私の尋ねている事に対し壊の式は首を2～3度振って否定する。
そしてどこから取り出したのか小さな鉛筆とメモ帳のようなものを出すと、もの凄い速さでメモ帳に何か書いて私に見せる。

『主は心配されるほど弱くない。いざとなったら自分たちを頼ると思う』

そう書かれていた。それに思わず微笑んでしまう。

「…貴方たちの主人は、貴方たちの事を心から信頼しているのね。」

私がそう言うと、壊の式は少しの間考え込むかのように動かなくなり、しばらくすると再びメモ帳に何か文字を書いて私に見せた。

『…主の恐れているものは知っているだろうか？』

壊の式が書いたのは、先程私が言った事とは殆ど関係なかった。
それにしても壊の恐れているもの…あの壊に恐れているものなんてあるんだろうか？
私の考えを余所に、壊の式は再び小さな鉛筆で文字を書き、同じように私に見せる。

『主の恐れているものは――――』

その続きが気になり目を動かして書かれているものを見る。そこに書かれていたのは……

『――――友や家族』

「……え？」

そこに書かれているものが理解できないかのようにに思わずそう言ってしまった。

それを気にせずに、壊の式は紙を捲って次の場所に書き続ける。

『たぶん主は気付いていない、いや、気付きたくないから心の奥底に隠しているのかもしれない。

しかし、主に創られた式である自分たちは気付いてしまう。

主は回りにいる自分の友、そして家族であると認めている自分たちを心のどこかで恐れている。

そして信じきってしまう事も恐れている。

だから、主は自身の身に何か起こった時に自分たちが助けに行かなくても怒らない。心の底から信頼している訳じゃないから。

友に殺されそうになったとしても、たぶん主はそこまで落胆しない。

同じように心の底から信頼しているわけじゃないから。

故に――――』

その続きを見たくない、何故かはわからないけどそう思った。

しかし、心とは裏腹にその続きを見ようと目が勝手に動いてしまい…見てしまった。

『――――自分たちも、貴女も、主に心から信頼されている訳じゃない』

ーーーSide壊ーーーー

目だらけの空間を落ちて行き、やがて出口が見えてソファーに座ったままで出口を落ちる。
『ドン』と言う音が辺りに、そしてそんな感じの衝撃が体に響いて砂埃のようなものが宙を舞う。
首だけを動かし少し回りを見渡して何となくどこかを把握し、先程から縁側で座ってこちらを見ている桃色の髪をした女を見る。
女は少しの間俺を見て驚いていたが、すぐにほわほわとした笑顔で微笑む。

「あら、来てくれたのね。」
「…紫にスキマに落とされただけなんだがな。」
「ふふふ、それは災難だったのね?」

そう言いながら女…『西行寺幽々子』は紫と同じように扇子で口元を隠すと、楽しそうにクスクス笑う。
まったくもってその通りだ。お陰で靴もコートも置いてきてしまった。幸いながら靴下は履いているな。もちろん黒だ。

「…それで? 俺に会いたがっていたそうだな?」
「えぇそうよ。 まぁそれもいいけど、とりあえずお互い自己紹介でもしましょう?
知っているかもしれないけど私の名前は西行字幽々子よ。」
「…紅鎖華壊だ。好きに呼んでくれ。」

短く、簡潔にそう答える。

「そう、それなら壊。こっちで座ったら?」

幽々子はそう言いながら自分の横をポンポンと叩いてそう勧める。
俺は少し悩んでから幽々子の隣で座ろうと思い立ち上がる……前に能力でお馴染みのコートと靴を創ってそれを身に着けてから改めて幽々子の隣に座った。

「はい、お茶。」

俺が来る前に用意したのであろう茶の入った湯のみを手渡してきたので、それを受け取って一口飲む。
まだほんのりと温かいな。と言うか、幽々子が俺の顔を真剣に見ているのだが……

「…ねぇ、貴方私と会った事ない？
「……ない。」
「本当に？」
「……ない。だからあまり顔を近づけるな。」

そう言いながら自分の真横にある幽々子の顔を空いている手で約５０ｃｍほど押し返す。
これだけ離れさせれば顔をマジマジと見られる心配はないだろう。

「乙女の扱いがなってないわね……」
「突っ込まんぞ。」

横で頬を膨らませている幽々子にそう言いつつ湯飲みに入っている茶を飲み干す。

「おかわりは？」
「…そうだな、是非とも。」

俺がそう言うと、幽々子は急須で俺の湯のみに茶を注いでくれた。
それを受け取りまた啜る。
そう言えば……妖忌は元気にしているだろうか？姿が見えないが……

「…紫から聞いたが、この家の従者はどうした？」
「ん、妖夢のことかしら？　あの子ならいま少し部屋で休んでいるわよ。貴方が来る前に階段から落ちて頭を打って気絶しちゃったのよ……」
「…？　妖夢…と言うのか？　以前からここで君に従えているのか？」

聞きなれない名前に、なるべく俺が怪しまれない程度にそう聞く。

「そうねぇ…少し、と言っても数十年くらい前からここで働いてるわ。
本当は妖夢の前に妖忌って言うあの子の祖父がいたんだけど、どっか行っちゃったのよねぇ～。」

なるほど、妖忌がどこに行ったのか知らんが、とりあえず妖夢と言うのは妖忌の孫なんだな。
しかし階段から落ちて頭を打ちつけ気絶するとは何とも間抜けな話だろう。
まぁ俺個人としてもめんどくさい事に巻き込まれないならどうでもいいがな。

「…聞くが、仮にその妖夢が起きなかったらどうするんだ？」
「ん～、別にあの子が起きなくても幽霊たちが家事をしてくれるから問題ないのだけれどね。」

そうか、先程から後ろをふよふよ浮かんで移動している見覚えのあ

るものは幽霊だったか。
餅が食いたくなるな。まぁいい、それより辺りが暗くなってきたな。
さて……

「そろそろ帰らせてもらおう。」
「あら、もう帰るの？　どうせなら今日は泊まっていったらどうかしら？　もう暗いし。それに、明日紫が迎えに来るはずよ。」

…ふむ、久しぶりに泊まるのもいいかもしれん。先程から一緒にいるが記憶が戻る気配は一向にない。
それに明日紫が迎えに来るのなら手間が省けるな、このソファーも持っていくのがめんどくさかったし。

「…わかった、是非泊まらせて貰いたい。だが、ただ泊まるのも悪いので夕飯は俺に作らせてくれ。」
「そう？　じゃあお願い。沢山作ってね♪」
「？　あぁ。厨房の場所を教えてくれ。」

俺は少し疑問に思いながらも、厨房の場所を幽々子に教えてもらい料理を作りに行った……

「……」

現在、能力で創った寝巻きに着替えて布団に潜り込んでいる。
いやはや実に驚いた。あの料理を作りに行った時、幽々子に沢山作ってと言われたので幽霊たちにどれほど作ったらいいか聞いて（幽霊は喋れないので身振り素振りで教えてもらった）自分でも驚くほ

ど言われた以上の量を作ったのだが、幽々子はそれの3分の2ほど平らげてしまった。
あの時の事は忘れない、何せ長い大きな卓袱台に乗っている料理を乗せた皿が次々と無くなっていったからな。

「…もう、気にしなくてもいいのだろうか？」

誰に言う訳でもなくそう呟く。
今まで幽々子に会わなかったが、今日会ってわかった。彼女は完璧に俺の事を忘れ、記憶も殆ど戻らない。
これじゃあ断り続けたのが馬鹿みたいだ。紫にあれだけ会ってくれと頼まれても会わなかったのがあアホしくなってくる。
そもそも……

「…何故俺は会いたくなかったんだろうな？」

再びそう呟き、ゆっくりと目蓋を閉じた……

第１５６話：恐れているものと亡霊の少女（後書き）

はい、そんな訳で終わりました。
あえてわかりにくくしてみましたが、壊がどうして友や家族を恐れているのかは今までの話しを見れば何となくわかると思います。
あ、理由がわかってもあんまり感想とかで書かないで下さいね。
なるべく自分でりかいしてもらいたいので。

そしてお待ちかねのアンケート！
実に簡単、次回会わせたいキャラは！？そのキャラの名前を書いて答えてください。
現段階で会わせられるだろうキャラは会わせたいと思います。
ただし、昔のキャラとかの場合は生きているであろうキャラたちだけです。
氷華とかはもう会えませんからね？
諏訪子とか現代にいるキャラも無理ですし。そこんとこは何とか考えてください。
ちなみに、誰も何も言わなかった場合は作者が勝手に決めてしまいます。

第１５７話：混沌と少女（前書き）

今回は初の……

第157話：混沌と少女

「…朝……か…？」

寝ていた布団から上半身をムクリとお越し、まだ覚醒しきっていない頭に手を当てる。
ある程度目が覚めたので立ち上がり、障子を開けて外の様子を伺う。

「…まだ暗いな。」

開けると少し暗い空が広がり、ひんやりと冷たい風が体を吹き抜ける。…5時くらいだろうか？
寝巻き姿にこの寒さは中々応えるな……そう思いながらも、寝巻き姿のまま移動して縁側の縁に座る。
確かに寒いには寒いが、今は何となく外でゆっくりしたい気分だ。
確か老人はこのくらいの時間に散歩に出かけるらしいな。
前に幻想郷の外にいた時仕事で帰りが遅くなっている頃などには必ず一人は散歩をしていた。…だからと言って俺が爺と言う訳じゃないぞ？と言うか認めたくない。

「あらぁ、早いのね～。」

間の抜けた声が聞こると横に誰かが座ったので、目だけを動かしてその人物を確認する。幽々子だ。
白い浴衣のような寝巻き姿で微妙に眠そうに目を擦っている。

「…こんな朝早くにどうした？」
「ん～？さっき起きて2度寝しようと思ったんだけど、何だか寝付けないのよ。」

幽々子はそう言いながら軽い欠伸をする。

「…一つ、聞きたい事がある。」

「なに？」

「ここに桜…西行妖と言う桜があるだろう？アレが花を咲かせた事はあるか？」

「？　そうねぇ～、私は咲いたところは見たことないけど、妖忌は見た事あるって言ってたわよ。」

ふむ、今のところ西行妖が咲く可能性は薄いと言う事か？妖忌が見た事あると言うのは…まぁ当然だな。

仮に今咲きでもしたら、今の俺じゃ絶対に太刀打ち出来ないからな。

たぶん攻撃した途端に根で叩き潰されると思う。

「どうかしたの？」

「ん、いや何でもない。それより、だいぶ明るくなってきたな。」

「あら本当ね。」

先程まで結構暗かったが、今は薄っすらと日が昇ってきていた。まだ寒いがな。さて……

「…朝食を作ってくる。」

「そう、お願いね。」

短いやり取りをし、俺は厨房に向かった。何だかんだで俺が作る事になったな……

寝巻きから普段着の着物に着替え俺の作った物を次々と完食して行く亡霊こと幽々子。彼女の胃は一体どうなっているのだろうか？先程から幽霊が俺の作った物を忙しなく運んでいるのを見ていつもこんな感じなのではと思ってしまう。…たぶん間違ってないな。

「んぐんぐ…あら、食べないの？それなら私が……」

いつの間に自分の分のおかずを食べ終えたのだろう幽々子が、そう言いながら俺のおかずに箸を伸ばしながらランランと目を光らせつつ口の端から涎を垂らしている。…まぁ、別にいいか。そう思い、おかずの乗った皿を幽々子の方へ動かす。

「いいの？」

「いい、だからその口の端から出ているものを拭いてくれ。」

俺の指摘で気づいた幽々子は着物の裾で口元を拭う。何と言うか…生前と比べて本当に変わったな、間抜けになった。

ふと、口元を拭っていた幽々子が何かに気付いたかのように今度は着物の裾ではなく指を口元に当てる。

？　どうかしたのだろうか。俺の疑問を他所に、幽々はそのまま視線を俺に…いや違う。俺の横に移すと楽しそうに言った。

「紫、そろそろ出てきたらどう？」

「……やっぱりわか「ふん！」ひぎゃ！？」

突然俺の横に現れた紫の頭目掛けて能力で創ったハリセンを全力で叩き付ける。

ハリセンで殴られた紫はしばらく頭を抑えて俯いていたが、やがて頭を抑えたまま涙目になりながら睨みつけて来た。

「痛いわね！　何するのよ！？」
「喧しい年増が。　人に何をしたか考えてから言え、馬鹿者」
「そこまで言わなくてもいいじゃないの！」

ギャーギャー騒ぐ紫にさらにハリセンアタックを喰らわせ撃沈させる。便利だな、ハリセン。

「それにしても紫がこんなに朝早くに起きているなんてめずらしいわね……」
「…壊を迎えに来たのよ……それなのにこの仕打ち……」
「迎えに来たなら早く帰せ。」

畳に頭を擦り付けたままブツブツと呟く紫に対してそう言いながらハリセンで頭をグリグリとしてやる。
向かい側に座っている幽々子が若干口元を引き攣らせて引いているが、別に気にする事でもないだろうと思い無視をする。

「仮にも『妖怪の賢者』によくそこまで出来るわねぇ……」
「肩書きなんぞ知った事か。自分の後始末が出来なければ無意味だ。紫、そういう訳だから早く家に帰せ。」
「わかったわよ。だからもうグリグリするのやめてお願い、これ以上は私の威厳が……」

紫の放つ空気が危なくなってきたので、仕方なく頭からハリセンを退かしてやる事にした。
しかしさすがに紙で出来ているハリセンで頭をグリグリとするのは無理があったな、クシャクシャになっている。
帽子と髪を正した紫はコホンと咳払いをして扇子を取り出口元を隠す。

「…そう言う訳だから今日は帰るわね、幽々子。」
「えぇ、また来て頂戴ね。今度はお茶でも飲みながらゆっくりしましょう？勿論壊もね。」
「……時間があればまた来るさ。その時は君の従者にも会っておくとする。」

さて行くか、そう思い立ち上がる。そして紫も俺が立ち上がるのを確認すると俺の真後ろにスキマを開く。
俺は何を言うでもなく身を翻し、そのままスキマに入った。……ソファー忘れたな……

ーーーーSideナイアーーーー

皆さん皆さんこんにちは、はいこんにちは！
挨拶は大事ですよ～。人類が通じ合うための一つの方法なのですからねぇ。
今自分は魔法の森を文字通り徘徊しております。はい。いえ本当はニオたちとトランプでもしようかと思ったのですがね？久しぶりにトランプでもしようと誘ったら、あの野郎昼寝してやがったんですねぇ。
で、他の方たちを誘うと思ったら皆どっか行っちゃったみたいでしてねぇ。主もどこかに行ったから退屈で仕方ありませんよ。
ゲートがいれば私もどこかに行こうかと思っていた訳ですが、残念ながら彼もいなかったので諦めましたよ。

それにしても、相変わらずですがこの魔法の森の瘴気は実にいいで

すねぇ～。
そう思いながら、ヨタヨタと歩いている気色の悪い茸をおやつ代わりに拾ってそのまま取り込む。
私は体全体が口のようなもので虫でも草でも最低限食せる物なら何でも取り込めますよ。便利でしょう？
まぁそんな事はいいのですよ。主が帰ってくるまでの間、僕たち式は皆が皆、自由時間。
前までは3日に一回外に出してもらうとかだったけど、最近じゃそれも面倒だと言う事で殆ど毎日外に出してもらえている。

「だ……た…け……」

別の茸を摘み上げ取り込もうとすると、不意に誰かの声が聞こえたので耳を澄ます。ここで、『お前に耳なんてあるのか』と言う突っ込みは無粋ですよ。…私は何を言っているのでしょうか？
まぁこれもどうでもいいですね。魔法の森で誰かの声を聞くことはめずらしいですし、少し見に行って見ますか。
本来、ここ魔法の森で誰かの声が聞こえるなんて事は相当珍しい。人は入れない、その辺の妖怪でも無理をすると死にかねない。
なら上級妖怪は？入れる事には入れますが、はっきり言って妖怪や人間にとってはここはあまり居心地のいい場所ではないので好き好んで入ろうだなんて思わない。
この魔法の森で生きている生物と言えば、気色悪い虫か様々な茸。
精々それぐらいでしょう。
それに、ちょうど暇でしたからねぇ、少しは私の暇も潰してくれそうですよ。ちょっとした期待を胸（？）に抱き、私は声のする方へ向かった……

「いやぁ…来ないでぇ……」

目の前で少女が何かに怯えながら泣き崩れている。その少女の視線の先にいるのは大きな化け茸。

大きいですねぇ…2メートルくらいですかね？傘の部分にギョロギョロとした目玉が三つにギザギザとしたノコギリのような口。

しっかりと両手をお化けのようにダラリと下げて両足ズルズルと引きずって進んでいるのでより一層気持ち悪さを引き立てている。あぁ気持ち悪い。

ちなみに私は近くの木に蛇のように体を絡ませて少女と化け茸を見ています。それにしても気色の悪い茸ですねぇ……さすがにアレは食べたくないですねぇ……いや、でも主もグロイ物ほど旨いなんて言っていましたし、ここは思い切って食べるなんてのも……

「ギィィィ……」

「ヒッ！？」

そんな事を考えている間にも、化け茸は少女にどんどん近づいていく。ふむ、この場合主はどのような態度を取るのでしょうか？

やはり助ける？いえ、主の事ですからめんどくさいの一点張りで助けを求められない限りは助けないでしょうねぇ……そう言うお方ですからねぇ……どうしましょうかねぇ……

『バクンッ！』

……おや？おや？おやおやおやぁ？いつまでも悩んでいたせいで少女が食べられてしまいましたねぇ。

困りましたねぇ。助けようかどうか迷っていたのですがねぇ。食べられてしまったのなら仕方ありませんねぇ。

このまま帰って……ん？何やら先程の茸がボコボコと膨らんだり凹んだりしているのですが…あの少女が中で抵抗しているのでしょうか？

…そうですね、見ているだけというのも中々に非道い話なのでいい加減に助けてあげる事にしましょう……

体をグルグルと捻って調子を整える。横に転がった茸だった物と少女をチラリと見る。

思っていた以上に呆気ない茸でしたねぇ、少女の方も茸のよくわからない体液でベトベトになっているだけで大した怪我もないようですし。

改めてこの少女の容姿を説明しておきましょうか。金髪のちょっとウェーブの掛かった長い髪に黒い、少しふっくらとしているドレスのようなもの。それと白いエプロンがかけられているよです。少し離れた場所に黒いとんがり帽子が転がっていますね。

その黒いとんがり帽子に近づいて指で軽く摘み上げる。ふむ、まるで魔法使いの帽子ですねぇ。

「ん、んむぅ……」

と、帽子を眺めていると少女の呻くような声が聞こえたので振り向く。

どうやら目が覚めたようで、ボッーとしながら辺りを見渡しているようなので、とりあえず少女に近づいて体を縮めて少女と同じ目線になる。

「…？　……ヒャァァ！？」

しばらく見合っていましたが、突然少女は何かに気付いたようにへたり込んだまま後ろに後退さる。
確かに私の紅く丸い目を見た時は普通の反応をするかもしれませんが、わかっていても傷付きますねぇ。私のハートは梅干と同じくらいの忍耐力なのですよ？つまりはとても脆いのですよ。
ぶるぶると震える少女に近づきそのまま――――

『ポフッ』

「…え？」

何やら唖然とする少女。別にそこまで驚くことでもないでしょうに。
私が行った行動は、ただ金髪の少女の頭に帽子を乗せるというとても親切な行為なのですよ？紳士ですよ？
まったく最近の若い子はいけませんねぇ。兎に角、暇も潰せた事ですしそろそろ帰るとしましょうかね。
そう思い、そのまま帰ろうと「あ、待って！」……？少女が叫び始めたので少女の方を見る。

「えっと…あの、帽子ありがとう！できたらまた今度会おうね！」

……元気ですねぇ……まったくもって元気ですねぇ。私は最後に少女の顔を見ると、そのまま森の奥に戻った。
少し、楽しみができたかも知れませんねぇ……

第１５７話：混沌と少女（後書き）

はい終わり。今回は初の式視点でした！うん、思ってたより難しかったです、だって喋れないって言う設定にしてたから。
まぁ紙とペンがあれば会話は出来るんですけど、さすがに初対面の相手にそこまでやる必要もないかなと思いまして。
そして出てきた金髪の少女……わかりますかね？喋り方も違うしネタばれになるんで名前は言いませんけど、やっと出せたって感じですかね。
出来れば感想の時も名前を出さないでくれるとありがたいですね。
ちなみに、個人的にはこのナイアの喋り方？は結構気に入っています。

第１５８話：幻想郷の新たなルール（前書き）

はい、新たなルールです。勘のいい人は予想できるのでは？

第１５８話：幻想郷の新たなルール

「王手」

そう言って角を進める。

「えっと…ならコレを盾に「飛車に取られるぞ」それなら玉をこっちに逃が「桂馬の餌食だな」……負けました」

そう言いながら負けを認めたミスティア。

「１２戦０勝１２敗。鳥なだけあって頭を使うのが苦手なようだな？」

「うぅ……次は絶対に勝つから！」

「期待するとしよう。ただ、もうすぐ友人と遊ぶ時間ではないだろうか？」

「え？　…あ、忘れてた。」

途端にしまったと言わんばかりに口元を手で隠して焦り始めるミスティアを見ながら少し溜息を吐く。

先程の将棋とオセロに五目並べ、朝からこれだけやれば時間の感覚もわからなくなるだろう。

今朝方、と言っても１０時くらいだったが、それくらいの時間帯にミスティアが遊びに来て午後まで何か時間を潰したいと言い出したので適当な物を創って軽く相手をしてやった訳だが…弱い。

種族が鳥だから頭を使うのが苦手なのか、それとも彼女自身が頭を使うのが苦手なのかわからないが、兎に角弱いのだ。

「早く行け、でないとどうなっても知らんぞ。」
「うん、じゃまたね！」

ミスティアはそう言うと勢いよくドアを開けて外に出て、そのまま羽を羽ばたかせてどこかに行ってしまった。
それを確認すると、俺は能力で創った将棋盤を消して再びソファーに座る。

「…そう言えば……少し前からナイアが面白いものを見つけたと言っていたな……」

確かあれは…幽々子の家に行ってからだから大体5日くらい前だろうな。
何でも、この魔法の森にめずらしく人間がいたそうだ。3日前も会いに行ってみるとか言ってそのまま魔法の森を徘徊していたな。
結局見つからなかったらしいが……。
それ以外の奴らは大して変わりはないな。ニオ俺の部屋、ゲートは物置部屋で寝ていて、ゼクは最近人里でよく小さくなって一匹で散歩をしている。
クロックは壁に張り付いており、絶はふよふよと浮かんでいる。何が楽しいんだろうな。

「…暇だな」
「暇なところ悪いけど、少しいいかしら?」

呟き終えたとほぼ同時にそんな声が聞こえ、向かいのソファーにスキマが開き紫が上半身だけ出して出てくる。

「どうでもいいが毎回同じ登場じゃ飽きるな。」
「うるさいわね。どうせ私が別の登場の仕方をしたって貴方は反応

を変えないでしょうが。」

ごもっともだ。何故か拗ねたような顔をしている紫は見ながら心の中でそう思う。

「まぁそれはいい。俺に会いに来たという事は、少なからず何か用事があるのだろう？」

俺がそう言うと、紫は再びスキマを開いてゴソゴソと漁ると、中から…これは…紙？

白く何もかかれていない、トランプなどに使われそうなカードだ。

紫はその白いカードの束を取り出すとドンとテーブルに置いた。

「…何だコレは？」

「最近、と言っても本当はだいぶ前からなんだけどね。『スペルカードルール』って言うのを作ったのよ。」

「スペルカードルール…。」

俺がそれを呟くように言うと、紫はいつの間にスキマから取り出したのであろう扇子を広げて口元を隠す。

「えぇ。前に吸血鬼が暴れた事があったでしょう？あの後また代表者で集まって話し合ったの。

そうしたら博麗の巫女がこの『スペルカードルール』と言うのを提案してね。具体的には、弾幕で戦うの。」

「…弾幕で戦うのか？」

「そうよ。それでこの弾幕で戦うのを別名『弾幕ごっこ』と言って、両者お互いがお遊びの気分で戦えるのよ。

弾幕ごっこのルールは、当たり前だけどまずお互いが弾幕で戦う事。

これは絶対条件ね。

ただ、お互いが認めれば直接相手に攻撃をするのも構わないわ。
で、この弾幕ごっこでの勝利条件、敗北条件は、弾幕の美しさで精神的に、または肉体的にダメージを与えるか、スペルカードを制覇するか。」
「…そのカードにそこまで価値があるのか？それに、弾幕ごっこやらを行っても今までと大して変わりはないと思うぞ。」
仮に弾幕ごっこ、もといスペルカードルールとやらで戦ったとしても、撃つ者が撃てば相手を木っ端微塵にできる。
「話は最後まで聞きなさいな。弾幕ごっこでのメインは弾幕ともう一つ、このスペルカードがあるわ。」
そう言って紫はテーブルにある紙の束の一番上を捲って俺に見せる。
「このカードには、自分の思い描く『必殺技』が映し出されるの。でも、必殺技が描かれても所詮はただの紙。このカード事態には何の力もないわ。」
「意味がないな。」
「これはあくまで宣言するためのものよ。言ってしまえば、このカードで宣言しない限りは絶対に必殺技を使ってはいけないの。まぁどうでもいいわね。
思い描かれた必殺技には制限時間というものがあって、その制限時間内にスペルカードの『必殺技』から逃げ切るか、その必殺技を使っている相手を倒してしまうかをすればＯＫ。
スペルカードを全部攻略されたら、余力が残っていようがその相手に負けを認めなければいけないし、勝った相手はそれ以上追い討ちを掛けてはいけない。
それに考えても見なさいな、妖怪が人間を殴るのと、弾幕で攻撃するのと、どっちの方が死ぬ確率が高いと思う？」

……紫の言う事の答えを出すなら間違いなく弾幕の方が死ぬ確率が低い。妖怪の拳の場合は肉体的なダメージが半端なくデカイ。しかし、弾幕の場合は当たり所さえ悪くないか、またはよっぽど相手が弱い&こちらの込めた力が強くなければ死なないしダメージも軽く…はないがまだマシだ。

「まぁ要はつまり、これからの時代力で張り合うだけじゃなくて美しさでも競い合いましょう、って事よ。
それにこれなら遊び感覚、スポーツ感覚で闘う事が出来るじゃない？妖怪の方も異変を起こしやすくなるでしょう？」
「…つまり、『殺し合い』を『遊び』に変えてしまった訳だ。異変を起こしやすくした事に関しては……パワーバランスでも気にしているのか？」
「そうよ。だからこれから幻想郷では、このスペルカードルールを全面的に正式な決闘法にするつもり。どう？」

紫はそう言いながら首を傾げる。
…どう、と聞かれれば、人間が妖怪に対抗するなら悪くはない、と言うかいい方法だろう。
力で勝てない人間が抵抗するなら弾幕と言う発想が思いついただけでも凄いと褒めてもいい。
だが……

「…それでも出来るのは一部の人間だけだな。」

そう、それなのだ。自身の霊力を操れる人間なんてのはごく一部だ。
１０人のうち１人いるくらいだ。

「それはさすがに仕方ないわよ。

だからこそ妖怪にも、人里の中にいる人間には絶対に手を出さないようにって言ってあるしね。」

「……まぁいい。君がここに来た理由は、俺にもこのスペルカードルールに従え、と言いたかったんだろう？」

郷に入っては郷に従え、仕方がないから大人しく言うとおりにしようじゃないか。」

「ありがとう。それじゃあこのスペルカードは渡して置くわね。私はまだやる事があるから帰るわ。」

紫はそう言って先程まで持っていた一枚のスペルカードを俺に手渡す。

そして再びスキマを開くと、最後に軽く手を振ってそのまま帰っていった。

後に残された俺は、しばらくの間カードを眺めていたが、そのカードを積み重ねられているカードの束に戻す。

「…絶、クロック。他の式が揃ったらさっき紫が言った事を伝えておけ。テーブルに置いてあるスペルカードも好きに使っていい。俺は少し出掛けて来る。」

ふよふよと浮かんでいる絶と壁に張り付いているクロックにそう言って立ち上がった……

ーーーーSide三人称ーーーー

「さぁお前たち、早く席に着け。」

教卓の前に立って両手をパンパンと叩き子供たちにそう言っているのはこの寺子屋の教師、慧音。
今日も今日とて寺子屋に通う生徒に勉強を教えているようだ。寺子屋に通っている生徒は…大体２０人くらいだろうか？年は、パッと見は１０歳くらい。
余談だが、この寺子屋では曜日によって習いに来させる生徒の年齢を変えているそうだ。ご苦労な事だ。
各々名残惜しそうな顔をすると全員席に着く。その中には氷里も混じっている。
生徒たちが座っているのは座布団の上で、横が長い机を三人で使っており、

「さてお前たち、今日は――――」

慧音はそう言いながら教卓の中から紙の束…一般的に言うプリントを取り出すと、それを生徒たちに配る。
全員に配布されたのを見た慧音は満足そうに頷く。

「まぁ、見ての通りプリントをやって貰いたい。」

満面の笑みの慧音とは対照的に、生徒は何人かを除いて明らかに不満そうな顔をしているが本人はまったく気にしていない。

「ほらそんな顔をしていないで早くやる！」

仕方なくと言った感じに配られたプリントをやり始める生徒たち。
問題自体はそこまで難しくないようで全員案外スラスラと書けている。ちなみに配られたプリントは全部で３枚。

「邪魔するぞ」

不意に、本当に何の躊躇もなく突然長身の男…壊が襖障子を開けて部屋に入ってきた。
勿論、突然入ってきた壊を見ている生徒たち&慧音も唖然としている。がしかし、壊はそれを気にせずにドンドン部屋に入って行き慧音の前に立った。

「…はぁ。突然寺子屋に来るならせめて授業以外の時に来てくれないか？」

唖然とするのをやめた慧音は目の前にいる壊にそう言った。

「すまんな、少し君に聞きたい事があってな。」

壊はそう言いながら目線を慧音から自身の斜め後ろに向けた。
そこには、壊のコートにしがみ付いている少年がいた。

「…その子はどうしたんだ？」
「拾った。親と逸(はぐ)れたらしい。俺を見つけるなり勝手に付いて来て困っているんだ。何とかしてくれ。」
「ん～……私としてもどうにかしてあげたいのは山々だが、寺子屋の授業があるしな……」

慧音は悩むようにそう言っているが、子供たちの何人かはそっちの方が嬉しいと言う顔をしている。

「あの…先生。」

と、しばらく慧音が悩んでいると氷里が少し遠慮しながら手を挙げた。

「ん？　どうした氷里」
「先生が行かないなら私が一緒に行ってもいいですか？」
氷里がそう言うと、慧音は再び考え込むような仕草をする…が。
「…もういい、借りて行くぞ。」
「えッ！？　ちょ！」
いい加減にめんどくさくなったのか、壊は未だに手を挙げたまま固まっている氷里の手を掴んでそのままズルズルと引き摺って出て行ってしまった。そして再び唖然とする生徒&慧音。
「…先生、早く授業を再開しましょう。」
「……うん……じゃあプリントの続きをやってくれ……」
壊たちが去った後は、何故か微妙な空気が流れた……

第１５８話：幻想郷の新たなルール（後書き）

そんな訳で終わりました。
やっとスペルカードルールまで辿り付かせる事が出来た……
長かった、本当に長かった。ちなみに、壊たちのスペルカードは何枚か思いついていたりします。
今度はいつになったら壊が弾幕ごっこをやるか…
次回は氷里と壊と名もなき少年Ａによる話です。

第１５９話：前編　頑張って親探し（前書き）

タイトルどおりです。今回はほのぼので壊と氷里が少年の親を探します。
前編と後編に分けて投稿したいと思います。そっちの方が都合がいいから（＾＾）

第１５９話：前編　頑張って親探し

「あの…そろそろ放してくれませんか？」

俺にズルズルと引き摺られている氷里がそう言う。あぁ、そう言えば俺が引き摺ってるんだったな。

今更気付いた事に対し自分で驚きながらも、氷里の襟から手を放して開放する。

氷里は起き上がると、そのまま着物の裾を2～3度叩いてゴミを掃う。

「…ところで、この子の親探しはどうやってやるんですか？」

「根性。」

「聞き込みですね、わかりました。さぁ、貴方も行きましょ？」

そう言いながら少年に手を伸ばす氷里。少年は少し躊躇っていたが差し出された手をしっかりと握り手を繋ぐ。

……兄弟に見えなくもないな。

「とりあえず、その辺を歩いている人達にこの子の親を見ていないか聞いてみましょう。」

「そうだな、ならまずは……そこの通行人待ってくれ。」

そう言いながら近くを通ろうとしている杖を持った老人に話しかける。

老人は一瞬話しかけられた事に気付いていない様子だったが、俺たちが近づくと気付きニッコリと人の良さそうな笑みで微笑んだ。

「おぉ、お若いの、わし何か用かいのぉ？」

「実はこの子の親を探しているのですが……」

氷里はそう言いながら手を繋いでいる少年に目を向ける。…ん、近くに八百屋があるな。

「こ、この子は！」

少年を見た途端、老人は目をカッと見開き大きな声を出す。少年と氷里がそれに驚いたように少しビクリと肩を震わせる。

「わしの幼い頃にそっくりじゃなぁ」

「……は？」

ニコニコとした顔に戻ってそう言う老人に対し、氷里は間の抜けた声を出し、少年は目を丸くして唖然としている。

「あの時は若かった……」

しみじみと懐かしむよう言う老人。ん、これを買おう。

老人に話を聞こうとしている氷里が必死になって話しかけているが老人は完全に別の世界に入ってしまい、氷里の話を聞いていない。

ふむ……

「その辺にしておけ。」

俺はそう言いながら氷里たちに近づき、氷里が振り向くとたった今八百屋で買った三つの林檎のうち1つを渡す。

勿論、少年にも渡した。…ん、美味い。

「あ、ありがとうございます。」

「さて、その老人はボケ過ぎて駄目な事がわかった。だから他の奴に聞くぞ。」

林檎を齧りながらそう言い、手をヒラヒラと動かし二人を先に行かせる。そして俺もその後に付いて行くように、ニコニコと懐かしむように微笑んでいる老人の横を通り過ぎる。さて……

「…さっさと見つけて帰りたいな。」

ーーーSide三人称ーーー

壊たちがいなくなっても、老人はその場でニコニコとした顔のまま立ち止まっていた。

道行く人々の何人かはそんな老人を見て何を笑っているのかと気味悪がっているが、その逆もあり老人を見て和んでいる人間たちもいる。

しばらくすると、老人はニコニコとした顔のまま誰もいなく人通りも少ない路地裏のような場所まで移動すると、不意に笑顔をやめ目付きを鋭くした。

「……あ奴が…紅鎖華壊……」

そして静かに今しがた自分をスルーした男、壊の名前を呟きさらに目付きを細くし楽しそうに口元を歪める。

「…もう少し…見る必要があるのぉ……」

老人は最後にそう言うと、音もなくその場から消えるようにいなくなった……

「見つからないな」

ところ変わって、壊たちの話に戻そう。
現在壊たちは、団子屋の縁台に座って三色団子やらみたらし団子やら頼んで頬張っている。

「見つからないと言うか…そもそも大して探していませんからね……」

どこか呆れたような声でそう言って桜団子をもぐもぐと咀嚼する氷里。ちなみに少年がみたらしで壊が黄粉だ。

「いやだがな、聞き込んでも全員が知らない、その少年に聞こうにも口を開かない。この状態でどうやって探せと？
いくら何でも情報がなくては人探しもままならない。」

面倒くさそうにそう言いながら団子を一本完食した壊は、そのまま皿に乗せられている新しい団子に手を伸ばす。
そして串の部分を掴んで団子を食べる。

「まぁ、探すと言った以上はちゃんと探すさ。」

そう言うと、まだ突き刺さっている二個を口に挟み、一気に引き抜いて食べるとそのまま殆ど噛まずに飲み込んで串を皿に置いて立ち

上がる。……よくよく考えてみれば、殆ど咀嚼せずに団子を飲み込むと言うのは中々の難易度だと思う。

「金を払ってくる。」
「え、でも自分で…」
「いいから大人しく食っていろ。」

氷里にそう言い放つと壊はそのまま暖簾を潜って見せの中に入って行った。

「……」

後に残された氷里と少年は、特に何も言わずに黙々と団子を食べる。皿を見れば、団子はまだ二本くらいは残っている。

「あぁ！？　んだとコラ！もういっぺん言ってみろ！！」

二人が黙々と団子を食しているとどこからか男の怒鳴り声が聞こえてきたので、氷里は立ち上がり怒鳴り声のする方へと目を向ける。少し離れた位置には人だかりのようなものが出来ており、その中央から怒鳴り声は聞こえるようだ。

「……」

好奇心があったのであろう、氷里は、黙々と団子を食べている少年の手を引いてその人だかりの中に入って行く。
少年も、団子を食べながら成すがままに手を引かれて人だかりの中を掻き分けて中心に向かう。
中央に辿り付いて二人が目にしたのは、顔を真っ赤にして少し丸い酒瓶を持っている明らかに酔っているであろう男が一人と、地面に

尻餅をついている青年と、それを庇うように青年の前に立っている髪の白い少女の三人がいる。

「何度でも言ってあげるよ。全面的にアンタが悪い。」

白髪の少女は男をダルそうに睨みつけながらそう言う。
それに対し男は、尻餅をついている青年と少女を睨みながらさらに顔を赤くし、いかにも『怒ってるぞ』みたいな雰囲気を漂わせている。

「大体、こいつは何もしてないでしょ？お前が勝手に転んで、偶々近くにいたこいつに八つ当たりしようとしてるだけじゃんか」
「あぁ！？そんな訳ねぇだろうが！俺はちゃんと歩いてたんだよ！それなのに転ぶわけねぇ、だから近くにいたそいつが何かしたに決まってんだよ！！」
「そ、そんな…俺は何もしていません！」
「ほらな」

怯えながら自分じゃないと言う少年の言葉に少女はそらみろと言った感じの顔をしながらそう言い放つ。
大抵の酔っ払いとは実にめんどくさい生き物で、普段は酒を飲んでいるだけで大人しいのだが興奮すると何をしでかすかわからない。
例えば、大人しく酒を飲んでいると思ったら大声で騒いで肴を要求する、少し機嫌が悪くなったらずっとイライラしている、このような事があるだろう。あと、スキンシップが異様に激しくなる。

「くっそ、ふざけんなぁ！！」

この酔っ払っている男も然りで、男は少女が言い放ったと同時に顔を茹でたタコの如く真っ赤にさせて酒瓶を持っている手を滅茶苦茶

に振り回し始めた。
はっきり言って逆切れである。男の攻撃に巻き込まれないと、周りにいた野次馬たちは一斉にその場から後退るように離れる。

「チクショー！俺は見たんだよ！そいつが転ばせたんだよぉ！！」

もう記憶もあやふやなのだろう先程と言っている事が違っている。
まぁ、どんな人間でも追い込まれたら自分が有利になる発言をしてしまうものなので仕方がないとは思う。
男は持っている酒瓶を走りながら振り回す、振り回す、振り回す。
置いてあるものが必ずどこかに吹っ飛んだりその場に倒れたりする。
しかし……

「てい！」
「ぬわっ！？」

いつの間にか青年を連れて逃げていた少女が、男の懐に潜り込んでわき腹にパンチして軽く足払いを掛ける。
男は酒瓶を振り回していた勢いでよろけながら前々と突っ込み……

『ガシャーン！』

ふと、男が何かにドンぶつかり尻餅をつき、それと同時に辺りに酒瓶の割れる音が響く。

「いつつ…あ？」

ぶつけた鼻と打った尻を抑えながら、男は少し静か過ぎる事に気がついたので周りを見わたす。
周りにいた野次馬たち（氷里&少年も含む）と、先程の少女と青年

は何故か男の方を見て唖然としていた。いや、正確には尻餅をついている男の少し上をみて気まずそうな雰囲気を出している。
男は何事かと思いゆっくりと前を見ると、そこには黒い二本の足、そしてそれを辿るように少しずつ上を見上げる。そこには……

「……」

長身の男、壊がいた。髪の毛には酒瓶の破片が刺さっていたりしており、少し顔を俯かせて影を作っている。
壊は、片手で頭に刺さった破片を少しずつ指で摘んで取っていく。めんどくさくなったの、途中から頭に傷がつかないように気を使いながらも手で払う。そして……

「…へ？」

男の前でしゃがんで無表情の顔で男の目を見る。

「…どうやらお前は相当酔っているようだな？」

そして突然そう話すと、しゃがんだまま男の頭をグワシッと掴んで立ち上がる。

「俺が酔いを醒ましてやる。」
「ちょ！ま、待て！離してくれ！！」
「遠慮をするな、しっかりと……」

そう言いつつも路地裏のすぐ近くまで歩むと、一旦歩むのをやめて男の顔を見下ろす。

「酔いを醒まさせてやる。」

そう言って、そのまま路地裏に入っていってしまった……

ーーーSide壊ーーー

「で、君は何をやっているんだ妹紅。」

酔っ払い親父を片付け終えたので、何故か現場にいた妹紅にそう話す。

「いや、壊こそ何やってるのさ。と言うか人里に来るなんてめずらしいね。」

「まぁ…退屈だったからな。」

それにスペルカードのいい案が出るのかもしれないと思っていたしな。

だと言うのに人里に来て親探しをして、しかも酔っ払い親父に酒瓶で頭を殴られるなんて思わなかった……

思い出しながら自分の頭を撫でる。結構痛かったな、アレ。ちなみに酔っ払い親父にはしっかりと目を醒まして貰った。

途中から、何故かゼクが加わっていたが……偶々だろう。その後どこかに行ってしまったが。

「あの……」

今まで黙っていた氷里が、おずおずと言った感じに話しかけてくる。

そう言えばいたな。と言うか俺が連れて来たんだったな。

「あれ…アンタ、寺子屋の生徒じゃない？」
「なんだ、知っているのか。」
「そりゃまぁ…私はよく慧音に会いに行ってるからね。あ、慧音って言うのは寺子屋の教師ね。」
「知ってる。と言うか本人の前で拉ｔ……許可を得て連れてきた。」
「今なんか言いかけたよね？　とんでもないこと言い掛けたよね？　ねぇ何で目を逸らすのさ？」

捲くし立てるように言う妹紅から、横に目を動かして視線を逸らす。

「…さて、行くぞ氷里。」
「あ、はい。ほら、行こ。」
「オイこら無視するな。いや本当にこっち見てよ。」
「喧しいな。俺は今からそこにいる子供の親を探しに行かなくてはいかんのだぞ？」
「……？　あの子供、どこの子？」
「知らん。とにかく、さっさと探して人里を満喫するから今日はこれでお別れだ。」

何故か眉を顰め唸るように考え事をしている妹紅の頭をポンポンと撫で、そのまま氷里たちに呼びかけてその場を後にする。
本当にどこにいるんだろうな…探すのがめんどくさくなってきた。
そう思いながらも、適当にぶらつきながら聞き込み＆摘み食いを続ける。この大根の漬物…旨いな。次は別のも少し多めに買っておこう。
当然ルーミアや妖精の餌付けのための菓子類も忘れていない。お陰で懐がパンパンになってしまっているが、これでめんどくさい戦闘を避けられるなら安いものだろう。…たぶんな。

「しかし……」

片手に漬物、もう片方の腕には漬物だけが入った小さな漬物桶を抱えながら氷里と手を繋いでいる少年を見下ろす。

何度も思っていたが、本当にこの少年の親はこの人里にいるのだろうか？

いくら聞き込みをしても誰も知らないといい見つからず、且つこの少年本人も何も言わないで黙って手を繋いでいるだけだ。

それにこの少年、始めてみた時から妙に嫌な雰囲気を漂わせている……いや違う、少年自体からは何も感じないが、少年の周りの空気が嫌な感じなんだ。

二人より少し遅めに歩いて少年の背中を眺める。

「…これは……少し注意しておいた方がいいかもしれんな……」

そう呟き、俺は再び二人と同じ速度で歩いた……

第１５９話：前編　頑張って親探し（後書き）

はい終わり。まず皆さんに謝罪を……
本当に申し訳ありませんでした！！実は今リアルで本当に忙しいと言うか何と言うか…兎に角忙しいです。
小説も、一日４００文字書ければ上出来ってくらい忙しいんです。
だから更新がしばらく遅れるかもしれません。どうか、どうかご承知ください。
ではまた次回！！

第１５９話：中篇　見つからないから今日は……（前書き）

中篇。本当は後編にしようと思っていたけど、何となく。こっちの方が早く投稿できると思って……

第159話：中篇　見つからないから今日は……

「狭い場所ですけどゆっくりして行ってくださいね。」

そう言いながら俺に茶を差し出してくれたのは氷里の母親……思い出した、『氷雨（ひさめ）』だ。

どうも昔から氷関係の名前を持っている奴と縁がある気がするな。

ちなみに、名前は冷たい感じがするが性格はそれとは正反対でやけにのほほんとしており、本人曰く『雪女』だそうだ。

と言う事は、氷里の父親のほうが人間と言う事だろうか？　前に自分で半妖だと言っていたしな……

「……」

差し出された茶を啜りながら状況を纏める。そもそも何故俺はここにいるのか？

極端に言ってしまえばただの気紛れ…なのだろうか。　少年の親を探すのを少し休憩しようと思って休める場所を探していたら、氷里が自分の家で休んだらいいと言ったので付いて行った。

別に氷里の家じゃなくても俺自身の家や甘味屋で適当に休むのも良かったんだが、ただ何となく人里にいる人間がどんな家に住んでいるのか見てみたかった。

そんなくだらない理由で氷里の家に来た訳だが、その俺を連れてきた氷里は少年を連れて再び親探しに行き、俺は氷里の家で氷里の母親と二人きりの状態になっている。

「あの子がお世話になったみたいですね～」

茶を啜っていたら唐突にそう言われた。……はて、俺が何か氷里を

助けるような事をしただろうか？

「貴方は氷里の言っていた鶏さんなのでしょう？」

「…あの娘はまだ俺の事を鶏さんなどと言っているのか。俺にもちゃんとした名前があるんだがな……」

はぁ、と短く溜息を吐きながら少し呆れたようにそう言う。

確かに俺は鶏な訳だが、それでも普通この姿を見て鶏などと言うだろうか？　いいや言わない。

まぁこの際、鶏と言われようが何と言われようが気にしないことにする。めんどくさい。

そんな思考に耽っていると、横で氷雨がクスクスと笑いながら話し始めた。

「あの子、半妖ってだけで友達も出来なかったし寺子屋の生徒にもいじめられていたのです。

母親の私が雪女、父親が人間なんて絶対におかしい、って言われていたようでしてね。

それに、この人里には一部だけれども妖怪が嫌いな方たちもいるから、それに影響されて子供は自然に妖怪嫌いになってしまう。

いくら妖怪と人間が暮らせる場所と言っても、全ての人間が私たちを受け入れてくれる訳じゃないんです。」

「……」

少し悲しそうに話す氷雨を眺めながら再び茶を飲む。少し、ぬるくなったな。

「でも、あの子はいくら自分が否定されても絶対に挫けませんでした。

私たちがいくら何を言っても『心配ない』『上手くやれている』『

大丈夫』いつもそう言って私たちを安心させようとしていました。
そしていつの頃か、寺子屋の裏にある鶏たちに興味を持ったらしくて自分から進んで世話をし始めたんです。
大体その頃から少し明るくなりましたね。だから私たちも何も言わずにただ見守っていました。」
「……それで？」
「ふふふ……せっかちですね？
それからまた少し経ったある日、あの子が家に帰ってきて凄く嬉しそうな顔をしていたんです。
『今日は見たこともない鶏さんが遊んでくれたんだよ』って。私が『いつも遊んでるでしょう？』と聞いたらあの子は首を横に振って『あの鶏さんは凄かったよ、今度また一緒に遊ぶんだ』ってすごく嬉しそうな顔をしながら私に言うんです。」
…間違いなくその鶏は俺の事だな。しかも勝手にまた遊ぶなどと言われていたのか。

「その日から、あの子はいつもより鶏たちの世話をしました。たぶん、もう一度貴方と会いたかったのだと思います。
でも鶏の姿の貴方はいなかった。それでもあの子は諦め切れないようでして、毎日毎日鶏の世話をしていました。
それからどんどん明るくなり、友達どんどんもできていじめられる事もなくなりました。
たぶん自分に対して少なからず自信がついたのだと思います。もう一度会う時は笑顔で会いたい、そう思ったのでしょうね。」

そう言い終えると、氷雨はふぅと息を吐いて自分の湯飲みの中に入っている茶を飲む。
そして湯飲みを置くと、そのまま俺の目をまっすぐと見て両手を付き頭を下げた。

「貴方のお陰であの子は変われました、本当にありがとうございます。」
「……俺は…何もしていない。
氷里に会ったのもただの偶然だったし、一緒に行動したのは人里を回るために使えると思ったからだ。
いじめられていたのを助けたのは団子の借りを返しただけだ。氷里が変われたのは、あの娘自身の力だと言っていい。
よって、礼を言われる筋合いはまったく持ってない。」

俺は自分の利益になる事以外はあまりやらない主義だ。
前の吸血鬼を退治する依頼を受けた理由も、大半は退屈しのぎになりそうだったとか気紛れだとかそんなものしか持ち合わせていない。
まぁ受けた依頼は確実にこなそうとは思っているがな。
俺の言った事を聞いた氷雨は頭を上げて「そう言う事にして置きましょう」と言うと、またやんわりとした声でクスクスと笑う。

「…俺には理解できないな。」
「……何がでございましょうか？」
「初めて会った得体の知れない男に、何故そうも警戒せずに話しかける事が出来る？
自分で言うのもなんだが、俺がその気になればこの家、この人里そのものを消し去る事も出来るんだぞ？」
「それは…凄いですね。
でも、私は娘が信じている殿方なら信用してもいいと思っています。
それに……」

そう言いつつ怪しく笑みを浮かべ始める氷雨。

「娘の未来の旦ｎ「ただいま戻りましたー」…あら帰ってきたわね

？」

怪しい笑みのまま何かを言おうとした氷雨を遮るかのように氷里の声が聞こえる。
そしてそのままぺたぺたと歩く音がすると障子を開けて氷里と少年が手を繋いだまま部屋の中に入ってきた。

「？　二人とも何の話をしていたのですか？」

入ってきた氷里は俺と氷雨を見て首を傾げながらそう尋ねてきた。

「…何でもない。さて、そろそろ帰らせてもらうとしよう。」
「あら、もう帰るのですか？」
「まぁな。」

俺がそう言うと、氷雨は何か考えるような素振りを見せやがていい事でも閃いたのかパッと顔を上げ、満面の笑みでこう言ってきた。

「そうだ、どうせなら泊まって行ってくださいな♪」
「「……は？」」

突然何を言っているんだと言う意味を込めて、氷里と一緒についつい間抜けな声を出してしまう。

「さてさてお客様には御もてなしをしませんと。それでは少し、お暇させてもらいます」

だがしかし、それを尻目に氷雨はいかにもいいことを思いついたという満足そうな顔でそう言うと立ち上がり、そのまま部屋を出てどこかへ行ってしまった。

いつの間にか俺の横にいたのか、氷里の方を見ると目を瞑って軽く溜息を吐いており、何となく苦労しているんだなと言う事がわかってしまう。

「…すいません、私の親が勝手な事を……」

「いや、君が気にする事でもないだろう。それに、いつの時代もあ言うのが得をするものだぞ。」

申し訳なさそうにしている氷里にとりあえずそう言って置く。まぁ、一日や二日帰らなくても俺の式は大して心配はしないだろう。俺がそう言っているからな。

それに、万が一の事があってもその場の状態で何とかなるものだ。

未だに申し訳なさそうにしている氷里の頭を撫でながら、俺はそんな事を考えていた……はて、氷里の顔が赤いな。

さて、何だかんだあって氷里の家に泊まる事になってしまった訳だが、現在俺は夕飯をご馳走になっている。

面子は左から順に、氷里、氷雨、少年、俺と先程帰ってきた氷里の父親の『金儀（きんぎ）』だ。苗字は同じだが、こいつだけ名前に氷という文字が入っていないな。ちなみに性格は……

「いやぁ…悪いね。俺んとこの娘が世話になってるみてぇでさ。」

こんな感じである。年はパッと見は２０代前半に見えなくもないのだが、実際は３４歳だと言う。若作りと言うのだろうか？

年のわりには若い見た目に頭も回るらしく、この人里で定期的に行われる会議でも度々出席しては色々な案を出しており、極一部を除

けば人里の住民からの信頼もあって人気がある。ちなみに一部とは、妖怪が嫌い派の奴らの事だ。ただコイツ…

「いやいや、こちらこそ氷里には色々と世話になっている。」

「やっぱりそうか！？　いやぁやっぱり氷里は俺の自慢の娘だ！！」

…果てしなく親バカと言う奴なのだ。嬉しそうにそう言いながら箸を置き氷里の頭をガシガシと撫でながら抱きついて頬擦りをしている。

されている方として溜まったものじゃないだろうが、氷里の顔を見ると満更そうでもなさそうだけどな。

しかし何故だろうか、嬉しそうに娘を褒め称えている金儀、満更でもなさそうな氷里、それを見て楽しそう微笑んでいる氷雨。こいつらを見ていると……

「…？　どうかしましたか？」

金儀に色々褒められていた氷里が不意に俺に話しかけてきた。行き成り話しかけて来たので少し驚いてしまったな。

「ん、何でもない。それより、今日はもう寝たいのだがいいだろうか？」

「まぁ待ちなさいっての。氷雨、棚にアレがあっただろ。ちょいと持って来てくんない？」

軽い調子でそう言う金儀の言葉を聞くと、氷雨は思い出したかのような顔をして立ち上がりそのまま部屋を出る。

そしてしばらくすると、一抱えもある大きな酒瓶と小さな杯を三つ持ってきた。金儀はそれを受け取り氷雨に軽く礼を言うと、小さな杯を俺に差し出してきた。

俺は何も言わずにとりあえずその杯を受け取る。すると金儀も何も言わずに満足そうな笑みで今度は酒瓶から酒を俺のと、自分の、そして氷雨の杯に注ぐ。

「今家にある酒では結構なものだよ。」

そう言うとグィっと煽るように飲み干した。…なるほど、これは中々……美味いな。

何故、酒を飲ませてくれたのかわからなかったが、俺は飲ませてくれた事に感謝しつつ酒を少しずつ楽しんだ……

寝巻き姿で布団潜ったまま、特に何も考えずに一人いる部屋の天井を見上げる。

他の奴らは全員別の部屋で寝ている、と言うか俺が頼んで別々の部屋にしてもらった。最初は一緒に寝ても構わないだろうと言われたのだ、どうも今日は一人でいたい気分だったのだ。それに…

「……晴れないな。」

少年周囲に対して感じていた嫌な雰囲気が、どうも晴れずにいて気になってしょうがない。まぁ…

「明日になってから考えるとしよう…」

誰にともなく、自分に言い聞かせるようにそう呟き、俺は静かに目を瞑る。

だがしかし、俺は気づかなかった。この時、俺の少年に対して感じ

ていた嫌な雰囲気が現実に変わることを……

第１５９話：中篇　見つからないから今日は……（後書き）

そんな訳で終わり。
次回は、一応戦闘シーンありかな？

第１５９話：後編　恐怖（前書き）

タイトルと内容はそこまで関係ないです。
それと少し長くなっちゃいました……すいません

第159話：後編　恐怖

「…ん…ふぁ……」

真夜中…だと思う。兎に角そんな時間帯に何故か目が覚めてしまった。

特にする事もないので布団に潜り込んだまま目を瞑っていると、不意に横の布団から誰かがムクリと体を起こす音が聞こえる。

暗くてよく見えないが、布団の位置からして体を起こしたのは私の父でも母でもなく、おそらく今日始めて人里で出会った少年だと思う。

少年はそのまま立ち上がると、音を立てずにフラフラとした足取りで部屋を出て行ってしまった。

「……」

厠にでも行ったのだろうと思いしばらく眠れずにボーっとしていたが、いくら待っても少年が帰ってこない。

おかしい。もしかして途中で何かあったんじゃないだろうか？　いや家の中で何かあったって言うのもおかしな話だけど……

「…やっぱり少し心配ですね……」

誰にともなくそう呟き、布団を退かして起き上がる。そしてそのまま家中を探し回ってみたけど、残念ながら少年はどこにも見当たらない。…どこに行ったのでしょうか？

「…もしかして外……？」

たぶんそうかもしれない。もしかしたら家にいるのかもしれないけど、いくら探してもいないからきっと外だと思う。
微妙な矛盾を胸に抱きながら寝巻き姿からいつもの普段着に着替えて家を出て少し周りを見渡す。すると……

「あっ……」

少年がいた。少し離れた位置で、肌寒いと言うのに草鞋も履かず裸足でただこちらをジッと見つめていた。
幸いにも外は家の中と違い星のお陰で若干薄暗い程度なので充分に当たりが見えてすごく助かる。
少年は何も言わずに私を見つめてた後、クルリと身を翻して歩き始めた。そしてある程度歩くとまた立ち止まりまた私を見る。
ひょっとして…付いて来いと言うことなのだろうか？　そう思って少年に向かって歩む。
すると少年は、私が自身に近づいてくるのを確認すると再び身を翻して歩みだした。
私もそれに続くように歩いていく。しばらく歩いていると、少年がこの人里の出入り口…つまり人里の『門』の前で立ち止まった。
そして少年は門を見上げると、そのまま門に手を当てて人里の門を開け始めた。そんな…あの門は私にさえ、ましてや普通の子供じゃ開けられないはずなのに！

「ちょ…駄目っ。人里の外は危険だからっ…！」

少年を止めるべくそう言いながら少年に向かって走ったが、少年は私が辿り着く前に自分が通れるだけ門を開いて人里の外に出てしまった。
どうしよう…って言うか門番はどこに行ったの？　もしかして仕事をサボってどこかに行ったのだろうか？　確か今日は休日じゃない

はずだが……。
兎に角あの少年をどうにかして連れ帰らなければ。でも私じゃ妖怪に対処できないし……鶏さんを起こして付いて行ってもらおうか？でも寝ている人を無理に起こすのは忍びないし……

「……行こう。」

無理して起きてもらうのは迷惑だろうし、こうやって悩んでいる間にも少年に何かが起きてしまうかもしれない。
それにいざとなったら、少年の手を引いて強引に連れて帰れば済むだけの話だ。兎に角、考えるよりもまずは少年の心配をしなければ……
心でそう思いながら、僅かに開いている門を潜って外に出る。いつの間にそんなに歩いたのだろう少年はかなり遠くにいた。早く追いかけないと……

ーーーSide壊ーーー

「……」

俺が今どういう状態なのかを説明しよう。簡単だ、眠れない。
特にこれと言った理由もないが、兎に角目が冴えてまったく寝る事が出来ないのだ。おかしいな、今日は昼寝なんてしていないんだが……
しかし、眠れないからと言ってこの時間帯に外をほっつき歩いてもただの不審者にしか見えないと思うので、おとなしく布団に潜り込んでいる事にする。

仕方なく瞼を閉じながら再び眠りにつくまでボーっとしながら適当に考え事をする。

何故紫はこの幻想の世界を作ったのだろう？　そもそも人間と妖怪が共存すると言うのは無理と言うものだ。

大抵の妖怪は人間を食らい、人間はその妖怪に恐怖する。そうすれば妖怪はより力をつけ、人間はより妖怪を恐れる。それが常識だ。

だがどうだ、この幻想郷ではその関係が少し崩れており、妖怪が人間を食らったところで人間は悲しむだけで恐れる事は殆どない。

俺には人里の奴らが、いや、この幻想郷の住民が正常とはとても言いがたい。いや、別に紫の作った幻想郷を貶している訳ではなく、ただ純粋に何故この幻想郷の住民が普通とは違うか知りたいだけだ。

…ん？　そう言えば以前、紫が『この幻想郷では常識にとらわれてはいけない』などと言っていたな。

うむ、たった今疑問が解決した。幻想郷では常識が通用しないんだな。

「…ん？」

くだらない事を考えていると、不意に引き戸が開かれるような音がした。

気のせいか…？　そう思い、しばらく何も考えずにいると今度は家中をペタペタ裸足で歩き回る音がしてまた引き戸が開けられた。なんだ？　気のせいじゃないのか？　頭で誰が歩き回っていたのか考える。　足音は大して大きくなかった。という事は金義は違うな。

あいつが家族の中で一番重いだろう。

そう考えると次は氷雨と少年、それに氷里な訳だが、氷雨は候補から外れる。床の軋む音からしてまず違う…と思う。

それに足音はどちらも小さい範囲で聞こえた。つまり足の小さいは子供…あの二人な訳だ。何故こんな夜更けに……

「…気になるな」

自然に口から言葉が漏れる頃には体は起き上がっており、そのまま枕の横に置いてあった服装に着替えコートを着る。
冷えているが別段気にする事でもないな。布団の位置を戻して整えそのまま玄関まで移動して引き戸を開ける。
引き戸を開けると同時に、少し冷たい風が頬を撫でるように顔を通り過ぎる。思わず身震いをしそうな寒さだが、残念ながら俺は寒いところは多少慣れている。
家の前で立ち止まっていても仕方が無いのでおそらく家を出たであろう二人を探すために歩く。
夜…それも暗さからして夜中であろうだけあって辺りは静まり返っており、人っ子一人見当たらない。
そんな感じで二人を探していると……

「……ん？」

いた。ただし、俺の目に映っているのは氷里のみだ。いや俺の目は君しか映らないとかではなく氷里しかいない。
立ち止まっている氷里の向いている方へ目を向けると、そこには少し開いている人里の門が。…まさか…外に出たのか？
この時間帯に？　妖怪が活発化している夜に人里の外に出たと言うのか？　…それは幾らなんでもおかし過ぎる。
そんな事を考えていると氷里が何か意を決したように門へ向かって進み、そのまま人里の外へ出てしまった。

「…まぁ、俺には関係のないことだな。」

そう呟き身を翻して帰ろうとして…ふと、思い留まった。

今日、俺は人里であの二人と一緒にほぼ一日中行動をしていた。そして先程あの二人は人里の外に出てしまった。
今は夜な訳だから人里の外にいる妖怪はかなりハイテンション…まぁつまり活発化しており、あの二人じゃ戦うどころか出会った瞬間に妖怪の腹の中に入るなんて事もありえる。
もしあの二人がいなくなったら、まず最優先に怪しまれるのは今日ほぼ一緒にいた俺。

「…めんどくさくなるな。」

人里の連中がどういった奴らかは知らないが少なくとも何人かには常に怪しまれ、そして下手をすると氷里の親に恨まれるかもしれない。
さすがにそれは少し嫌だな。まだ誰も殺していないと言うのに理不尽に恨まれたら溜まったものじゃない。
頭の中で俺が不利になってしまうと言う素敵な構図を描きながら、それに対し短くため息をついて再び人里の門を見る。

「……仕方ないな。」

本当に、本当に面倒くさいが言ったとおり仕方なく人里の門へ向かい外へ出る事にした。
まったく…いるかどうか知らないが、門番にはちゃんと仕事をして欲しいものだ。
これならあの吸血鬼の館にいた門番の方がずっとしっかりしていたぞ。
心の中で愚痴りながらも、人里を出て行った二人を探すために歩き回る。さてさて、一体何処にいるのやら……

ーーーSide氷里ーーーー

早い。

何が早いかと言うと少年の歩く速度が早すぎる。先程から小走りで少年に近づこうとしていると言うのに、距離が一向に縮まらない。幾らなんでもおかしい。年は私のほうが上だし、何よりもこう見えても妖怪の血が混じっているのでその辺の子供に足で遅れるほどやわじゃない…と思う。

百歩譲って私があの少年より貧弱だとしても、一向に距離が縮まらないと言うのは妙な話だ。

一体どれくらい歩いただろう。（私は常に小走りだった）不意に少年が歩くのをやめて立ち止まった。

「ここは……」

やっと止まった少年の傍によって、少年が立ち止まった場所を見渡す。…湖？

少年と私の目の前に広がっているのは、微かな星の明かりに照らされた大きな湖だった。えっと…確かこの湖の先って…吸血鬼の館があったと思うけど……

「…ここがどうかした？」

少年の横に移動してそう尋ねる。しかし少年は何も言わずに黙ってジッと遠くを見つめている。

私は、始めは湖の方を見ているのだと思っていたがどうやらそれは違うようで、少年が見えいるのは自分のすぐ傍にある茂みだった。

そして……

『ドンッ』

「ひゃ！？」

突然少年が私の事を突き飛ばすかのように押したのだ！
当然ながら突然の事に対処できるはずもなく、私はそのまま勢いよく尻餅を付いてしまった。よりにもよって腰を……

「いきなり何すッ……！？」

文句の一つでも言おうと少年を見上げた途端、私はその場で固まった。

「チィ…上手く避けやがったかぁ？」

妖怪がいた。
蜥蜴のような頭にゴツゴツとした体には襤褸切れのようなものを身に纏っている。
背中から大釜ほどもあるコブのようなものが付いており、そのコブの至る所には人の顔のようなものが浮き出ていた。
襤褸切れから突き出ているゴツゴツとした足と手の指の先からは、どんなものでも切り裂けるのではと思えるほど鋭そうで大きな爪が伸びている。
勿論、姿が蜥蜴なだけあって尻尾もあるし、口の歯も何故か鋭く尖っている。

「ったく……人里の連中なんざ中々食えねぇからこうやって誘き寄せたのによぉ……」

蜥蜴の妖怪はそう言いながら自分の後ろに立っている少年を見下ろす。少年は相変わらず何も言わずに、しかし今度は焦点の合わない虚ろな目をしている。
あのままじゃあの少年は……

「は、早く逃げてッ…！」

必死に出した声は裏返ったおかしな声になってしまったが、この際そんな事を関係ない。
少しでも早くあの少年をあの妖怪から逃がさなくてはいけない。
しかし、少年は何も言わず、妖怪は私の言った事に対し怪訝そうな目で私を見ている。

「お前…何言ってんだ？まだ気付かねぇのか？」
「……え？」

妖怪はそう言ったと同時に、少年に向かって手を伸ばす。
すると少年は土の塊が砕けるかのように崩れ去り、代わりに妖怪の背中にあるコブに新しい顔が浮き出た。

「…まさか……」
「たぶんお前の考えてる通りだと思うぜ？　あの餓鬼は俺が過去に食った餓鬼の一人なんだよ。
ついでに言うと、俺の背中から出てるコブは今まで食った人間の顔が浮き出てんだよ。しっかし妙な話だ。」

妖怪はそう言いながら少し首を傾げる。

「おらぁあの餓鬼を作った時、人里の奴を真っ先にここに連れて来いって言ったんだけどなぁ…。

なぁんでこんなに遅れて連れてきたんだろうな？　それにさっきお前を突き飛ばしたのも少し疑問に思うが……まぁいいか。それよりも……」

本当に訳がわからないと言った様子でそんな事を話した後妖怪は、尖っている歯をギラリと光らせて私に近づいてきた。
立ち上がって逃げようとしたが、先程少年に突き飛ばされて腰を強く打ちつけた時の痛みと、それと一緒に腰が抜けてしまい歩く事が出来ない。痛い……

「いただきまぁ～す！」
「……ッ！」

妖怪はそう言ったと同時に口を開けて私の頭に食らいつこうとする。
もう駄目だ、そう思い、来るべき痛みに備えてギュッと目をつぶる。
そして……

『ブシュ』

鈍い音と共に生温かい液体が服に、足に、兎に角至る所に飛び散る。
噛まれた時って、案外痛くないんだ……

「…おい、いつまで目を瞑っている。まだ君の頭は残っているぞ。それと、邪魔だからどこかに行っていろ。」
「……え…この声……」

聞こえた声の主を見るために瞑っていた目をゆっくりと開く。そこには……

「…鶏さん…？」

そこには、妖怪に腕を噛み付かれている鶏さんがいた……

ーーーSide壊ーーー

「…鶏さん…？」

何やら不思議そうな、そして心底驚いたような表情をしながら俺に向かってそう尋ねてくる氷里。
まったくもって驚いた。二人を探して見つけたら、何故か氷里だけで少年はいないし、その氷里もおかしな妖怪に食われる一歩手前だったしな。
一瞬見捨てようと思ったが、今後のことを考えたら助けるしか道がなかった。見捨てたら見捨てたで化けて出てきそうだしな。
そうしたら迷惑だ。まぁ、それより……

「そのあだ名、いい加減にやめてくれないか？」

いや本当に。間違ってはいないが何だか嫌だ。

「無視してんじゃねぇ！！」

今まで会話に入って来なかったし気にも留めていなかったが、先程から噛まれている腕がものすごく痛いのだけは誤魔化せない。
おそらく顔には出ていないと思うが……
とりあえず、噛まれている腕とは逆の空いている方の腕で蜥蜴の顔目がけて拳を飛ばす。

しかし意外にも蜥蜴の動きは早く、その場から大きく後ろに跳ぶ事で俺の攻撃をいとも容易く避けた。

「おっとと…危ねぇな。」

「図体がデカイわりには意外と身軽じゃないか、蜥蜴。」

「ケケケ…そう言うお前の攻撃こそ凄かったぜ？　風を切る音が思いっきり聞こえたからな。

当ったら俺の牙が砕け散ってたぜぇ？」

お互い殺気を飛ばし合う。距離はそこそこ。が、俺の後ろには座り込んでいる氷里がいる分かなり不利な状況だ。

そしてここはあの吸血鬼が住んでいる館が近くにある。前のゴタゴタのせいで少なからず吸血鬼に恨まれているのでやたらと大きな力は出せない。

もしそれで吸血鬼に見つかったら絶対にこの目の前にいる蜥蜴よりも面倒くさい事になるのは必然だ。

まぁ要するに、今の俺は下手に腕輪を外して力を出せないし、後ろに氷里がいるから氷里を守りながら戦わなくてはならないと言う地味に嫌な縛りバトルをしなくてはいけない。

何故態々氷里を助ける必要があるんだと思っているだろう？　何度も言っているが俺のためだ。

「さて、まぁとりあえず……」

そう言いつつ能力でナイフを創り逆手に持つ。

「……死んでくないか？」

キラリと、持っているナイフの刃が輝いた……

ーーーSide三人称ーーーー

「……」

「ケケケ…俺を殺す？　やってみろよ。」

いかにもおかしな事を聞いたかのようにそう言いながら含み笑いを始める妖怪。

この時妖怪は少なからず目の前にいる男を侮っていただろう。だから妖怪は自分が隙だらけになるのをわかっていても含み笑いを続ける。しかし……

「ケケk「うるさい」　ゲッ！？」

笑っている妖怪を鬱陶しく感じたのか、壊は思いっきり前に跳んでナイフの柄で妖怪の額をゴスッと殴りつけ、さらに妖怪の顎を蹴り上げた。

妖怪は顎を蹴られて後ろに仰け反ったが器用に腕を伸ばして壊を捕獲しようとする。

しかし壊もそう易々と捕まるはずもなく、捕まえる前に身を屈めて伸ばされた腕を回避し、さらにオマケとばかりに妖怪のその屈強そうな脚をナイフで切りつける。

「っ…いってぇじゃねぇかぁ！！」

ぶち切れた妖怪はそう叫びながら体を回転させて尻尾で壊をぶっ飛ばそうとする。

壊はそれを軽く後ろに跳んで避ける…はずだった。

「甘いんだよぉ！！」
「グッ…！」
「鶏さん！？」

壊が後ろに跳んで着地したと同時に、妖怪は尻尾をさらに伸ばして壊の横腹を思いっきり殴りつけた。
成すすべなく攻撃を食らった壊は勢いよく横に吹き飛び近くにあった木に体を強く打ちつけ、そのままドサリと倒れる。
相当ダメージがでかかったのか、ヨロヨロと力なく立ち上がる壊。
そしてそのまま口の中に溜まった血を2，3度ペッと吐き出す。

「…随分と手荒だな？　お陰であばらの骨に少しひびが入ったぞ。」
「冗談じゃねぇ、お前はこの程度でやられるほど軟な体はしてねぇと思うぜぇ？」

壊は忌々しそうに、しかしどこかダルそうに妖怪に文句を言い、妖怪はどこか期待に満ちた声で壊にそう返す。
今の二人の心の声を表すなら、片方は面倒くさい、もう片方は面白いといったような感じだ。もちろん、どちらがどう思っているかは言うまでもないだろう。

「…ウルァァァアアッ！！」

動いたのは妖怪。はちきれんばかりの叫びを上げてまだ頭がフラフラしている壊目掛けて渾身の突進をする。
その叫びは周囲の木々を吹き飛ばし、氷里はあまりの音量に耳を塞ぐほどだ。
壊は自身に向かってくる妖怪の懐に潜り込むとそのまま少し屈んで蹴りを入れた。そしてさらに追撃するかのように妖怪の背中に回り

こみナイフで出っ張っているコブを滅多切りにする。

「グギャアア！！　こ…の！　畜生がぁぁぁ！！」

コブを滅多切りされた妖怪は痛みで我を忘れ始める。そして突然、コブについている人の顔が伸びて壊の肩に食らい付いた。それも一つではなく、二つ三つとどんどん増えていく。至る所を噛まれている壊を、自身の堅い尻尾で再び吹き飛ばす妖怪。先程とは違い身動きできない状態でとてつもない衝撃が壊を襲うと同時に、壊はそのまま後ろに大きく吹き飛ぶ、がしかし、今度は上手く受身を取れたようで普通に着地できていた。ただ……

「ケケケ……腕がなくなっちまったなぁ？」

ニヤニヤとした嫌らしい笑みを浮かべつつコートの袖に包まれている白い手を見せながら言う妖怪に対し、壊は短く舌打ちをするとなくなっている右腕を見る。

どうやら先程の気色悪い顔に噛まれた時、あちらの噛む力があまりにも強過ぎてそのまま腕だけ持っていかれてしまったらしい。

傷口から止めどなく流れ出ている血を見ながら、壊は少々苦い顔をすると、そのまま空いているほうの手で傷口に手を当てる。

「おっと、やらせやしねぇよ！」

傷口に手を当てた時には既に遅し、妖怪は壊のすぐ目の前まで迫っており、腕を振り上げその鋭い爪で壊を引き裂こうとしていた。

壊は振り下ろされた腕を上手く掴むとそのまま妖怪を思いっきり後ろに放り投げる。妖怪は空中で態勢を立て直すと上手く着地した。

「おーおー、片腕だけの癖してよくやるじゃねぇか白髪さんよぉ。」

「素敵な褒め言葉感謝しよう気色悪い脳筋トカゲ。俺個人の意見としては、今回はそのまま帰って欲しいな。」
「あぁん？　何言ってんだ、おらぁまだそこでびびってる餓鬼食ってねぇんだぞ？そう易々と帰れるわけねぇだろうが。」
蜥蜴がそう言いながら氷里のいる方を指差す。見ると氷里はへたり込んだままピクリとも動かずに下を向いて俯いて気絶している。

「…隙あり！！」
「なっ…！？」

妖怪が放った言葉に素早く対応しようと身構えた壊だが、妖怪は壊には目もくれずにへたり込んでいる氷里に一直線へ向かった。
戦っている間距離を離して少しずつ氷里から狙いを逸らさせていた壊は、まさかここまで離れていて行き成り氷里に向かうとは思わなかったのだろう一瞬だけ動きが止まってしまったが、急いで氷里の元へ向かう。
だが妖怪の方が今の壊よりもずっと足が早く、あっという間に氷里のもとに辿り着いてしまった。

「ケケケケッ！！」

妖怪は笑いながら氷里の頭上で腕を振り上げた……

ーーーSide氷里ーーー

「…ハッ！」

いけない、いつの間に寝てしまったんだろう。確か少年を追いかけて…妖怪に襲われて……

ふと、自分の前に誰かが立っているのに気が付き顔を上げる。すると、それと同時に自分の頬に何か生温かいものがピチャリと落ち見上げる前に思わず目を瞑る。…？　何これ…何だか鉄みたいな臭い……

不思議に思いながら今度こそ目を開く。…え？

「に、鶏さん！？」

目の前に立っていたのは鶏さんだった。ただ、片腕を失くして背中からは何か鋭利なものが突き出ていてとても見ていられない状態だった。

「…ゴホッ……何だ、起きたのか氷里。少し待っていろ、すぐに終わらせる。」

首だけを回して私の方を見ながらそう問いかけてくる鶏さん。その鶏さんの言った事に対し爪で鶏さんを突き刺している妖怪が薄気味悪い笑みを浮かべながら笑う。

「ケケケ…なぁにがすぐに終わらせるだよぉ？　お前もうボロボロじゃねぇか。そんなんで俺が倒せると思ってんのか？」

「…ク…ククク……」

「…何笑ってやがんだ？」

何がおかしいのか、鶏さんは妖怪の言った事に静かに笑うことで返却した。

「いやいや、やはり三流は三流だなと思ってな？」
「あ？」

鶏さんはそう言うと、怪訝そうな顔をしている妖怪を尻目にまだ残っている片手を少し持ち上げる。
そちらの方には手首に何か腕輪のようなものが付いていた。　鶏さんは再び妖怪の前で手首を自分の口元まで持って行く。

「吸血鬼にばれるといけないと思って開放しなかったが、この際そんな面倒な事はもう気にしない。」

そう言って腕輪を器用に口で外した。

「あ？　……アァァァァァ！！？」

何が起きたのかわからなかった。ただ気が付いたら鶏さんの背中から突き出ていた妖怪の爪がなくなって鶏さんが妖怪の腕を持っていた。
そしてその妖怪はなくなった方の肩を抑えながら大きな声で悲鳴を上げている。

「…これでお互い片腕が失くなったな蜥蜴？」

鶏さんはそう言いながら妖怪の腕を湖の中に放り投げる。私からじゃ鶏さんの顔が見えないから今どんな表情なのかはわからない。でも聞こえてくる声はどこか楽しそうで、そして嬉しそうな声だった。

「あ、あぁ……テメェェェェ……ッ！！」

妖怪は腕を抑えながらも星明りに照らされながら鶏さんを殺気の篭

った目でギロリと睨みつけている。
しかし鶏さんはそれを気にせずに妖怪の目の前まで歩み立ち止まった。何だろう…普段憧れている人のはずなのに、私はこの人がとても、とても――――

――怖い――――

妖怪をどんな目で見ているのかわからないけど、兎に角今の鶏さんはすごく怖い。
人里にいた時のような無表情で、でもどこか優しい雰囲気を漂わせておらず、より一層何を考えているのかわからない態度がすごく怖い……

「よくも俺の腕を「黙っていろ」グフッ！！」

妖怪が何か言い切る前に、鶏さんは足を振り上げて妖怪の頭目掛けて思いっきり振り下ろし妖怪を地面に叩きつける。
妖怪は少しの間ジタバタと暴れていたが、不意に妖怪の尻尾が先程

自分がやられたかのように鶏さんの頭に振り下ろされた。
グチャっと嫌な音が響き鶏さんの頭の一部が抉られて地面にボトボトと落ちる。それを見て、思わず胃の中から何かこみ上げそうになったが必死にそれを堪える。

「ケ…ケケケケケ！！　どうだ！　俺の頭を踏みつけたりするからそんな目にあうんだぜ！！
ヒャァハッハッハッハッ「それで？」……は？」
「……これでお終いか？」

勝ち誇ったように笑っていた妖怪が間抜けな声を出す。　それもそうだ、そもそも頭が抉られて脳髄が少しはみ出ている状態で普通は生きられるはずがない。って言うか自分の頭から足が退かされなかった時点でおかしいと思うべきだと思う。
鶏さんは、妖怪がそれ以上何もしてこないのを見るとつまらなそうに溜息を吐いた。一瞬、本当に一瞬の事だった。いつやったのかわからない。でも……

「ウガァァァァァ！！？」

妖怪の残った四肢がバラバラに切り裂かれている。
見ると鶏さんの手には、薄暗くてよくわからないがいつの間にか血がベットリと付着した刀が一本握られていた。

「よかったじゃないか、蜥蜴から蓑虫（みのむし）になれたぞ。」
「ア、グァ……も、許してｇ「さようなら」……」

鶏さんは妖怪の言葉を遮るかのように持っている刀を振るった。すると肉を切るような音が聞こえ何かが地面にゴロリと転がり鶏さんも足を地面に下ろす。

どうしよう……怖い……情けない話かもしれないけど、今の私は鶏さんに対して恐怖を抱いていた。どうしてかわからない、ただ目の前にいる鶏さんが怖くて、今すぐにでも逃げ出してしまおうと思っていた。そして……

「……さて、終わったな」

鶏さんが、ゆっくりとこちらを振り向いて近づく。一歩、また一歩と歩くのもゆっくりだ。

体がガタガタと震える。呼吸が辛い。目から何か熱いものが流れ頬を伝う。私の前まで来た鶏さんは歩むのを止めて立ち止まる。

頭の右辺りが眉毛の少し下まで抉れてそこからほんの少し脳髄が見え、なくなっている腕の付け根からは白い骨が見え隠れしている。

いつの間にか持っていた刀はどこかに行ってしまったようでなくなっていた。

そして鶏さんは私の方へゆっくりと手を伸ばす。

「イヤァッ！」

ーーーSide壊ーーー

「……」

誰もいなくなった湖の木に寄りかかるようにして座る。

氷里は、俺の伸ばした手を振り払ったそのまま人里に走って帰っていった。無事に帰っていることを願おう。

「……当然の反応だな。」

氷里は怯えていた。何に怯えていたのかなんてのはすぐに予想がつく。恐らく俺だと思う。

どんな生き物でも自分より強い者、そして自分とは違うものに対して恐怖を抱く。今回氷里が怯えたのは、俺のあの妖怪へ対する残酷さだと思われる。

たいていの奴は命乞いをされたら許すだろう、そして彼女もそんな事を思っていたのだと思う。

だが俺は残念ながら普通ではないので、命乞いをされても助けたりはせずにそのまま首を切り落として命を奪った。はっきり言って、自分でも正常な人間…いや、今は人間じゃないか。兎に角正常な人間だとは思わない。

だが、あのまま見逃してあの妖怪がすんなりあきらめてくれるとも思えなかった。ああいう奴はかなり性質が悪いからな。

「……少し…眠いな……」

傷口がズキズキと傷むが、今は兎に角眠かったので、俺は木に背を預けたまま眠る事にした。

これから人里は…どうしようか…それと吸血鬼たちにばれていないといいが……

「わ…大丈……で……！！」

薄れ行く視界の中で、誰かが呼んでいるような気がした……

第１５９話：後編　恐怖（後書き）

そんな訳で終わりました。
次回はまさかの真キャラ！…出せたらいいなぁ…実は候補が何人かいるんですけど……どの子を出そうか迷ってるんですよね（＾＾；

第１６０話：竹林の診療所（前書き）

竹林の診療所って言ったら…ねぇ？あれしかないですよ。

第１６０話：竹林の診療所

……違和感、と言えばいいのだろうか。
ズキズキと痛む頭と腕とはまた別の違和感。これは……草の匂いか？　ただの草じゃないな……薬草か？

「んしょ……よいしょ……」

しばらくボーッと薬草の匂いを感じていたが段々と意識が覚醒して少女の声と、自分の体が若干グラグラと揺れる感じがするのに気付く。
そして同時に自分が誰かに背負われていると言うことを少しずつだが理解する。
このまま目を瞑っておぶられていてもいいのだが、さすがにそれは相手に失礼だと思い閉じていた少しずつ開いていく。

「……」

一番最初に視界に映ったのは…何と言ったらいいのだろう…うさみみ？　そうだ兎の耳だ。
目の前で左右に揺れている兎の耳。それと薄紫色のおそらく長いであろう髪。世に言うロングストレート。前は見えないな。
肩越しにだが紺色の服は…何と言っただろうか、そうだ思い出したブレザーだ。
今気付いたが、うさみみの付け根に何か謎のボタンが付いている。
この耳は本物なのだろうか？

「あ、起きました？」

耳をジッと見つめていると突然うさみみ少女が首を少し後ろに回して話しかけてきた。

「あぁ…すまんな、迷惑を掛けたようだ。」

「いえいえ、怪我人なんですから無理しないで下さい。」

何とも律儀のいい少女だろう、うさみみだがな。ただ、いくら怪我人でもいつまでも迷惑を掛けるのは気が引けるしこちらとしても出来ればそう言うのは避けたいので、少女の背中から無理やり降りる。

「あっ…！」

地面に降りた衝撃で傷口が少し響くが別段騒ぐほどでもないので気にしない。はて、頭と腕に包帯が巻いてあるな。

疑問に思いながら包帯を解こうと残っている方の腕で頭に手を伸ばす。

「コラ、駄目ですよ解いちゃ！！」

がしかし、解こうとしたら兎に腕を掴まれて止められてしまった。

まず言わせて欲しい、痛い。

「いや、しかし……」

「ほら、いいから早く来てください！　ただでさえその大怪我で生きてるのが不思議なくらいなんですからね！」

不死身だからな。そう言えば、今までずっと疑問に思っていたがここは迷いの竹林じゃないか？

妹紅以外にも住んでいる変わり者はいるようだな。しかしアレだ、

竹と聞くとどうも彼女が頭に出て来るんだが……

「……それはないだろうな。」

「？」

横で俺の腕を引っ張りながら「？」を浮かべる兎はそのまま俺の腕を引っ張って移動し、俺は成すがままに兎の目的地へ向かった……

「俺は道を間違えたんじゃないか？」

「間違っていませんから安心してください。」

満面の笑みでそう言う兎を尻目に、連れてこられた目的地の屋敷を眺める。そう、屋敷だ。

全体的に木で造られており、入り口以外は屋敷全体を守るようにグルっと竹の塀で囲まれている。

そして何よりも造ったばかりなのでは？　と思うほど目立つ汚れもない。

診療所…いわゆる病院としての役割と果たしているらしいが、それと同時にこの迷いの竹林にいる全ての兎と俺の横にいる兎、それと屋敷の主と医者がこの屋敷にいるそうだ。

まぁ……兎が住んでいると言うのは屋敷に入っていないが何となくわかる。何故かって？　俺の足元に大量の兎がもこもこと戯れているからだ。

そもそも、こんな場所に来る物好きなんていうのは殆どいないと思う。と言うか辿り着くことすら出来ないだろう。

だと言うのにこんな場所にこんな屋敷を建てるとは……間違いなく変わり者か変人だな。

「ささ、まずは上がってください。それでお師匠様に診てもらいましょう。」
「…聞いておくがその師匠も兎なのか？」
「いいえ違いますよ？」
「そうか、それとこの屋敷はいつ建てられた？」
「それは…すいません、私にもわかりません。ただ、かなり昔に建てられたのだけは確かみたいです。」
「……そうか。足止めをしてすまんな。行くとしよう。」

ポケットに財布が入っているかどうか確認をしながら引き戸に向かって歩みだす。
足元にいた大量の兎は、列を崩された蟻の如くワラワラと散っていく。それを踏まないように歩くと言うのは結構難しい。
しかし俺の横にいるうさみみ少女が「ほら退いて」と一言言うだけで、地割れの如く真っ二つに分かれて左右に移動し、俺と少女を歓迎するかのような道を作る。

「さぁ、行きましょうか。」
「ん？　あぁ、わかった…。」

…どうも嫌の予感がするな…そう思いながら今度こそ引き戸の前まで移動して手を掛けて開けｒ『ヒュンッ！』『グサァ！』
鋭いものが風をきる音と共に額に何かがグッサリと刺さりそのまま後方へ仰向けのまま倒れこむ。

「わぁ！？　し、師匠、何してるんですか！？」
「あら…てっきり月から追いかけてきた使者だと思ったのだけれど違ったのね。」

騒いでいるうさみみ少女の声と、どこかで聞き覚えのある嘗ての友人の声が聞こえる。
それを聞きながら、俺の意識は少しずつ沈んでいった……

ーーーーSide三人称ーーーー

「ど、どうするんですかぁ！　患者ですよ!?」

バタバタと騒ぐうさみみの少女に対し、うさみみの少女の師匠は呆れたように溜め息を吐く。

「落ち着きなさいな。とりあえず、まずは患者の様態を見ましょう。」

少女の師匠はそう言いながら、先程自分が弓で額を突き刺した男…壊の傍まで近寄る。
それを見た医師は目を見開き驚いたような顔をし、すぐに目を細め静かな笑みを浮かべながら壊の頭に手を伸ばし2，3度撫でる。

「…あの師匠？　どうかしたんですか？」
「……いいえ、なんでもないわ。とりあえずこの患者を寝かせる部屋を用意してあげて。」
「あのそれより治療をした方が……」
「問題ないわよ。彼、常人よりずっと化け物なんだから」
「え？　師匠、ひょっとして知り合いですか？」
「いいから、早く準備してきなさい。私は彼を運んでいくから」

どこか納得いかないと言った顔をする少女。しかしそれでも渋々といった感じにそのまま屋敷の中に入っていく。
それを見た医師は再び壊に向き直り、壊の顔を愛おしいそうにジッと見つめる。

「ふふふ……見つけた。」

艶やかな声でそう言いながら、医師は壊に肩を貸すようにして立ち上がり屋敷に入っていく。
そして…

「むふふ…中々よさそうな金づるじゃん。」

竹に隠れていた別の少女がそう言いながら、怪しく目を光らせた……

ーーーSide壊ーーー

「……」

目が覚めたら知らない天井だった。と言うのは実際にあるらしく、俺も目が覚めたら知らない天井だった。
あの染み、人の顔に見えなくもないな……。まぁ、そんな事はどうでもいい。それよりもだ。

「何故君がここにいるのか知りたいな――――」

長い銀髪の髪を三つ編みのようにしており、前髪は真ん中で分けている。

着ている服は右が赤で左が青、そして穿いているスカートは上と色が逆になっただけの少々ぶっ飛んだ服装だ。
半袖で少しフリルが付いており、頑張れば中華服のように見えなくもない。
頭には青っぽいナース帽のようなものを被っており、服のあちこちには正座が描かれている。
俺の言った事がおかしかったのかクスクスと口元に手を当てて静かに笑う彼女は……

「――――なぁ、八意（やごころ）永琳（えいりん）？」
「私はここの医者よ？　患者を診ているんだからいてもおかしくないわ。それと、フルネームで呼ばなくてもいいわよ？」

予想はしていたが、まさか本当に永琳だったとは思わなかった。
ふと、自分の腕を見る。俺の食いちぎられていた腕はしっかりと新しいのが生えており、包帯も解かれていた。
ついでに頭を触ってみると、頭に巻かれていた包帯も解かれており抉られていた部分も奇麗に元に戻っている。

「ふふふ…調子はどう？」
「…悪くはないな。お前が治したのか？」
「えぇ、結構重傷だったみたいだけど、貴方一応不死身みたいだからそこまで薬は必要なかったわね。」
「そうだな。屋敷に入ってきた時も薬を使われてたみたいだがな。」

そう言いつつ自分の額に手を当てる。あの矢、毒が塗ってあったな。

「そうだ言い忘れていた。君の弟子の事だが、重傷の怪我を負った患者は運ばずにその場で治療した方がいいと言っておけ。
応急処置をしても体力がなくなってたら死ぬぞ、俺が。」

俺がそう言うと、永琳は困ったように苦笑いを浮かべる。

「ごめんなさいね。あの子、結構おっちょこちょいなのよ。それに貴方は死なないでしょう？」

「……まぁ、死にはしないが……それより聞きたい事が「師匠、持って来ました」……」

話を遮られるかのようなタイミングで襖が開けられ、『自称永琳の弟子』のうさみみ少女が手に何かを乗せた盆を持って入ってきた。

……盆を持っているのにどうやって開けたんだと思ったが、普通に片手に持ち直して開けたんだな。

「あらご苦労様。」

永琳はそう言いながら立ち上がり自称弟子に「あとはお願い」と言ってそのまま部屋を出て行く。

自称弟子はそれを承知したのかそのまま俺の傍まで近づくと盆を置き、盆の上に乗せられていたお粥を俺に手渡す。

真ん中に種を抜いた梅干が乗ってるな。木で出来たスプーンを受け取り救って口に運ぶ。…少し味が薄い気がするが一応怪我人である俺へ対する気遣いなのだろう。

「…あの。」

モソモソとお粥を食べていると少女がおずおずと言った感じに話しかけてくる。梅干が…すっぱい…

「何だ？」

「いえ…師匠とはお知り合いで？」

「…まぁ、な。もう大分会っていないが、一応は知り合いだ。」
「そうですか……失礼ですけど名前を聞いてもいいですか？」
「何だ、永琳は俺の名前を君に教えなかったのか。俺は紅鎖華壊。こちらが名乗ったんだ、そちらも名乗って欲しいな。」
「あ、すいません。私は鈴仙（れいせん）・優曇華院（うどんげいん）・イナバ（いなば）です。皆からはうどんげとかレイセンとか言われてます。」
「そうか、ならまず聞きたい。ここはどこだ？」
「あ、そう言えば連れて来ただけでこの屋敷の名前を言ってませんでしたね。ここは永遠亭（えいえんてい）です。」

永遠帝…な。

『ドォン！！』

突然外から爆発音が響きウドンがビクリと肩を震わせる。これは…妖力？
片方は…妹紅か？　もう片方はわからないが、永遠帝という名の屋敷に住んでいそうで且つ昔永琳と逃亡した彼女しか思い浮かばないな。
妹紅はまだ父の敵をとろうと考えているのだろうか？　やれやれ…どちらも不死身だから無駄だと思うがな……

「はぁ…またやってるのか……」
「ん？　この爆発音を引き起こしている二人を知っているのか？」
「えぇまぁ。しょっちゅうやってますからね、あの二人。まぁ、放って置けば勝手にやめてくれるんですけど……」

……ふむ。

「どれ、どうせ俺も暇だ。あの二人がどんな風に戦っているか見る

のも悪くないな。」
「えッ!?」

俺の言った事が信じられないとでも言いたいのか、ウドンは両手で口元を押さえながら驚いた声を出す。
それを無視して持っている椀を盆の上へ置き、そのまま立ち上がるとボロボロになっているコートを新しく創り着る。

「え、本当に行くんですか!?　駄目ですよ、あの二人の喧嘩に巻き込まれたら運び込まれた時よりもっと重症になりますよ!?」
「なに問題ないさ、君が付いて来てくれれば俺は怪我をしなくなるぞ?」
「それって、最初から私任せって事ですよね?…はぁ…わかりました、絶対に手を出さないで下さいよ!　あとで師匠の実験体にさせられるの私なんですから……」

今サラリと恐ろしい事を言った気がするが気にしない。気にしたら負けだ。
ウドンが渋々と立ち上がるのを確認してそのまま襖を開ける。さて……

「一体どんな喧嘩をしているんだろうな……」

そう呟き、俺とウドンは部屋から出た……

第１６０話：竹林の診療所（後書き）

はい、そんな訳でレイセンと永琳でした！
いつか出したいな出したいなとは思っていたのですが、どうも出すタイミングを逃してしまい仕方なく今回出しました。
んで永遠亭メンバーは全員出したいので、次も新キャラと懐かしキャラが出てきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1623u/

東方凶鳥記

2011年12月14日02時48分発行